

漆黒の鋼鉄

うづうづ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ブラックプロテウス。

外見的には普通の黒鹿毛ウマ娘だが、彼女には秘密があった。

それは、『絶対に故障をしない身体』を得て転生してきた、ということだ。

ウマ娘の例に漏れず走ることが大好きな彼女は何をしても故障をしないその身体を活かし、周囲がドン引きするようなほどのハードトレーニングを重ねて身に着けた身体能力でレースを駆け抜けていく。

どんな無茶な、無謀な走り方をしても全く怪我をしない彼女を、いつしかこう呼んだ。

『漆黒の鋼鉄』、と

投稿は不定期、いつの間にか登録抹消になっているかもしれない。
ん。

んこにや様より支援絵をいただきました。

目次

第一章 ジュニア級

第一話	転生と入学と	1
第二話	選抜レース	4
第三話	レース後のあれこれ	10
第四話	チーム加入と自主トレ	16
第五話	レッスンと特別講師	25
第六話	メイクデビュー	34
第七話	ドーピング疑惑	41
第八話	レースを終えて変わったもの	46
第九話	ヴィクトリアマイル	54
第十話	レースプランと超光速の（マツド）サイエンティスト	61
第十一話	プラン決定とグラスワンダーとの交流	70
第十二話	彼女の逆鱗	77
第十三話	サイレンススズカVSウオッカ	89
第十四話	夏合宿・その1	97
第十五話	夏合宿・その2	103
第十六話	夏合宿・その3	112
第十七話	夏合宿・その4	120
第十八話	芙蓉ステークス	126
掲示板回	Part 1	134
第十九話	栄光の日曜日、暗雲の木曜日	162
第二十話	トレーナーの提案	170
第二十一話	デイリー杯ジュニアステークス	178

第二十二話 逃げ切りシスターズ 186

第二十三話 取材 192

第二十四話 ホープフルステークス 206

掲示板回 Part 2 213

第二章 クラシック級

第二十五話 新年 237

第二十六話 年明け最初のレース 244

第二十七話 会見と、それを見ていた者たち 251

第二十八話 リボンマンボと言うウマ娘 258

第二十九話 王者と王者 268

第三十話 報知杯弥生賞 274

第三十一話 新たな星たち 281

第三十二話 決意、新たに 287

第三十三話 最も『はやい』ウマ娘 294

第三十四話 淀に咲く祝福の蒼い薔薇 301

掲示板回 Part 3 309

第三十五話 みんなで、見る夢 330

第三十六話 ちよつとしたアクシデント 341

第三十七話 運命の宝塚 352

第三十八話 淀の夢 360

第三十九話 宝塚記念を終えて 368

第四十話 黒いドラッグカー 375

第四十一話 チャレンジャー 381

第四十二話 最も強いウマ娘 389

掲示板回 Part 4 397

第四十三話	対決、謎の緑色ウマ娘!	421
第四十四話	ウマ娘燃ゆる秋、現役頂上決戦	432
第四十五話	駿大祭	439
第四十六話	ジャパンカップ	450
第四十七話	ステイヤーズステークス	461
第四十八話	年末の大一番	473
揭示板回	Part 5	483
第三章 シニア級		
第四十九話	シニア級突入	511
第五十話	イップス	525
第五十一話	押し寄せるイベントの波	533
第五十二話	金鯨賞	551
第五十三話	金鯨賞を終えて	559
第五十四話	夜の密会?	571

第一章 ジュニア級

第一話 転生と入学と

目が覚めたら真っ白な空間だった。正直どうなっているのかわからない。

夢か現かはわからないけれど、ふわふわとした感覚で、自分が今どのような状況なのかいまいち理解できない。

ふわふわと浮かんでいるうちに、唐突に声のようなものが聞こえてくる。

『何か望むものはあるか』と。

正直どうなっているのかわからない。(二度目)

少し考えこんでいると、考えたことに対して声のようなものが返答してくれるようなので、いろいろと質問してみた。

そこで分かったことを簡潔にまとめると、

曰く、自分は死んでウマ娘?というものに転生するらしい。

曰く、気紛れに何か加護を与えてみてその結果を観察したい。

他にもいろいろ言っていたが、正直ふわふわとしていてよく覚えていない。

要するに、そのウマ娘?とやらの転生させるから何か特典を選べ、ということだ。

ウマ娘、とやらがどんなものなのか思い出せないが、馬なら思い出せた。

娘ということとは、きつと牝馬に転生するということだろうか。

競走馬になるか乗馬になるかはわからないけれど、その線で望むものを考えてみよう。

誰も追いつけない、圧倒的なスピードだろうか?

それとも、どれだけ走っても疲れなほどの、無尽蔵のスタミナだろうか?

——いや、違う。きつとそうじゃない。

スピードも、スタミナも、トレーニングを積みば身に付けることが

できるだろう。

他人より優れたものを持っていても、それを十全に活用できなければ意味がないものだ。

つまり、ここで望むものは、自分ではどうにもならない、天稟のものであるべきだ。

馬に限らず、人間でもそうだ。アスリートに最も大事なもの。

それは、故障をしないことである。

どんなに将来を期待された天才であろうが、怪我をしなければ潰れてしまうのだから。

他人よりハードなトレーニングを積んでも、他人では出せないほどの出力を出しても、絶対に故障しない才能。

こればかりはトレーニングではどうにもならない。柔軟や食事などで『故障しにくい身体』を作ることではできても、『絶対に故障しない身体』を作ることではできないのだから。

そういうわけで、私は『絶対に故障しない身体』を得てウマ娘なるものに転生することになったのだった。

——と、というのがこの私、ウマ娘『ブラックプロテウス』である。

転生するまでは牝馬の別称か何かだと思っていたウマ娘だが、生まれつき別世界の名前を持ち、人間の身体に馬の耳と尻尾が生えた種族である。ただし、その走る速度は時速60kmを優に超え、パワーも人間とは隔絶したものを持つし、聴覚や嗅覚にも優れている。

そんなウマ娘に生まれ変わった私だが、物心付いたころには裏山を駆け回っていた。

何といても、走るのが楽しいのだ。前世のことは正直、自分が男性だったのか女性だったのかすら覚えていないのだが、それでも、前世ではこんな速度では走れなかったことは覚えている。

平たい地面だろうが、急斜面だろうが気にせず駆けまわって、今までにシューズをどれだけ破壊したのかわからない。

そして、私がもらった『絶対に故障しない身体』は、とてつもないものだということが分かった。

何せ、どれだけハードトレーニングをしても一切脚が消耗しないのだ。走っている途中に斜面で転んで滑落したこともあるが、多少の擦り傷と打撲を負った程度だったし、ウマ娘専用レーンを走っていた時に居眠り運転のトラックに正面衝突された時も、ほぼ無傷で済んだ。（両親には泣かれた）

ウマ娘は人間に比べれば幾分か頑丈だが、それにも限度がある。流石にぶつちぎった耐久性に精密検査を受けさせられたこともあるが、とても頑丈だということ以外はわからなかった。

私も変な特典を貰ったなどとは言いだせなかったので、真相は謎のままである。まあ、両親は無事之名バだと笑っていたが。

そんな私だが、新年度の今日から日本ウマ娘トレーニングセンター学園、通称トレセン学園の中等部に入学する。トレセン学園には2000人近くのウマ娘が通う、とても大きい学園だ。

中央にある学園ということで、入学に至っては走力のみならず、学力、人品に至るまで求められる。（人品が良ければ他がダメでも合格できるウマ娘もいるらしいが）

私はどうと、走力——入学時の試験レースでは他をぶつちぎってゴールしたので上々な方だろう。学力は中の中程度だと思うので割愛するとして、それなりに評価は悪くない……と、思いたいところだ。

人品については自分では何とも言えない。気性難ではないとは思いたい、基本的に駆け回っていないと落ち着かないし、とあるものを収集する趣味もある。

レースに出るためにはトレーナーについてもらう必要があるので、評価については気にしていけないといけないうらう。

そんな少々の不安を抱えながらも、トレセン学園の校門をくぐるのだった。

第二話 選抜レース

入学式から数日。今日は新学期が始まってから最初の選抜レースである。

年4回だけ行われるそれは、ウマ娘たちが有能なトレーナーにアピールを、そしてトレーナーたちが有能なウマ娘たちを勧誘するための場である。

試験時のレース結果とこの選抜レースの結果を含めて、トレーナーたちは勧誘合戦を繰り広げるのである。

なので、私たちはこのレースに全力を尽くす。自分たちの夢のために。

今のところ私の夢は『楽しく、そして出来るだけ沢山のレースを走りぬきたい』というもので、特に目標レースがあるというわけではないのだが。

さて、私が出走する選抜レースは芝2000m。ホープフルステークスや皐月賞などと同じ王道距離だ。

私はスタミナに物を言わせた走りを得意とするので欲を言えばもう少し長い方が得意なのだが、ジュニア級のウマ娘は2000mより長い距離を走るレースが存在しないため、選抜レースにも同じように2000mを越えるレースはないらしい。

今回使用する芝コースは一周約1700mのコースだ。カーブの形こそ違えど、内回りの中山レース場とほぼ同じ長さと同様に傾斜を再現しており、実レースに即したトレーニングが行える改修が施されているらしい。

芝2000であれば、第4コーナーの終わりからスタートして、一周して帰ってくるレースになる。

選抜レースは最大9名で行われる。今回のレースは私含め8名だ。

本来は9名フルゲートの予定だったが、内一人が熱発により回避する形になった。

私は1枠1番の最内からの出走となる。私が走る前にも何走かし

ており、多少内側は荒れているが、私は荒れたバ場も問題なく走れるので特に気にしなくていいだろう。

『次の芝2000選抜レースに出走するウマ娘は既定の位置にお集まりください』

というアナウンスが流れる。そろそろ本番のようだ。試験レースの時もそうだったが、やはり他のウマ娘と一緒に走るとなると、少し緊張する。

芝コースにウマ娘たちが集まってくる。目を引くウマ娘は……一人、居た。

私より15cmは低いであろう、小柄で、腰まで届く長い栗毛のウマ娘だ。

入学式では見た覚えがないので、おそらく先輩のウマ娘だろう。

私がじつと見つめているのに彼女は気づいたのか、振り向いた彼女と目が合う。

「こんにちはー！ 新入生の子かな？ 今日にはよろしくね〜♪」

微笑む彼女に、目が奪われる。可愛く微笑む彼女だが、自信に満ち溢れた姿だ。そして、震えあがるくらいのモノを感じる。上手く言い表せないけれど……

「ん〜？ ねえ、キミ大丈夫？ ぼーっとしてるみたいだけど」

考え事をしていると、栗毛のウマ娘がこちらを見上げてくる。

どうやら心配をかけてしまったようだ。

「あ、はい……大丈夫です。少し考え事をしていただけで。今日はよろしく願います、先輩」

心配をかけたことにお詫びをして、ぺこりと一礼する。

「よかった♪ マヤに見惚れるのはいいけれど、レースに集中できないのは危ないからねっ。あ、マヤはマヤノトップガンだよっ。先輩じゃなくて、名前で呼んでほしいな♪ ねえねえ、始まるまでおしゃべりしよっ♪」

どうやら目が奪われていたことはバレバレのようだ。可愛く微笑んでぐいぐいと距離を縮めてくる。

……お世辞にも友達が多い方ではなかったので、こうやって距離を

縮められると接し方がわからない……！

その後、何とか名前を名乗ったが、レースが始まるまではひたすら彼女の言葉に相槌を打つbotのような対応になってしまった。

それでも彼女……マヤさんは楽しそうに、ゲートに入るまでずっと話し続けてくれた。おかげで緊張がほぐれた気がする。

話をしていた感じ、彼女はとても聡いウマ娘のようなので、私が緊張していたのに気付いて話しかけてくれていたのだろう。

「あ、もうそろそろゲートインだね！ それじゃ、ワクワクする楽しいレースにしようね、テウスちゃん♪」

「はい、ありがとうございます。マヤさん、いいレースにしましょうね」

彼女は大外8枠8番のようだ。笑顔でこちらに手を振ってゲートに向かう彼女に、私も自然と笑みが出て、小さく手を振り返す。

彼女はそれに満足そうに笑うと、両手を飛行機のように広げてゲートのほうに駆けていった。

ついにゲート入りだ。奇数番から順にゲートに入るので、最内枠である私は一番最初にゲートに入ることになる。

ゲートは幅約1mと狭い。両手を広げれば簡単に両端に手が届いてしまうくらいの広さしかないそのゲートを、ウマ娘たちは苦手とすることが多い。

基本的に、ウマ娘は狭いところが嫌いなのだ。ゲートに入るということは、ウマ娘にとってそれだけで強いストレスになる。

その強いストレスで、ゲートが開いても出遅れてしまったり、ゲートから出てこなくなったり、中には出走前にゲートをくぐってしまうウマ娘も居るほどだ。

私もその例に漏れずゲートは嫌いなのだが、不思議と試験レースの時よりも落ち着いている。

マヤさんが私の緊張をほぐしてくれたから。このお礼は……彼女と言う、『ワクワクするレース』で、返すべきだろう。

『さあ、大外8枠8番、マヤノトップガンが綺麗にゲートに入りました』

た』

選抜レースは、本当のレースと同じように実況が入る。何と実際に本場のレースで実況を行う実況者が実況してくれるというのだから驚きだ。

ウマ娘のレースを見るファンたちにとっても、これからのジュニア級、そしてクラシック級を担うウマ娘たちを発掘できる場として、

選抜レースは人気があるのだという。全員がゲートに無事収まり、ゲートが開くのを、今か今かと待ちわびる。

そして——ゲートが開き切る、その瞬間。私は飛び出した。

『各ウマ娘、体勢が整いました。今一斉に——スタートしました！』
『風のように飛び出したのは最内、ブラックプロテウス！ 試験レースでも後続を突き放して1着となっている、今後が期待されているウマ娘です！』

フライングギリギリ、ゲートが開き切った音より早く、前方に飛び出す。

私の一番得意とする脚質は逃げ。自分のペースだけを貫いて、最初から最後まで先頭で走り抜けることだ。

普通の逃げウマ娘であれば、終盤へ口へ口になりながら逃げきるような走りをする。

だが、私は違う。幼少期から山道の、急勾配の——坂路の様な5%程度の傾斜じゃない。

傾斜10%、15%を超えることもある急斜面を、ずっと駆け抜けてきた。

スタミナだけであれば……私はクラシック級の、シニア級のウマ娘にすら太刀打ちできると、そう自負している。

『さあ、先頭はブラックプロテウス！ 先頭から大きく離されて、二番手はルーラルレジャー、三番手に2バ身離れてスノーフロスト、そのち続いて1バ身差、マヤノトップガン』

どうやら一気に突き放すことに成功したようだ。

確かルーラルレジャーさんは私と同じ逃げ、スノーフロストさんは先行だったはずなので、マヤさんも先行策を取っているようだ。

こうなるともう私にできることは一つしかない。最初から最後まで、私にできるトップスピードで突っ走ることだけだ。

『トップスピードのまま第一コーナーに差し掛かって行くブラックプロテウス！ 減速は……しない！ 内ラチギリギリを全速力で駆け抜けていく！ こんな走りで脚は持つのかブラックプロテウス!』

コーナーでの体重移動も、狭い山道で学んだ。

少し足を踏み外せば滑落するような細い道を、スピードを落とさずに全力で駆け抜けていたから。何度も滑落して、その度に両親に叱られてなお止めることなく身体に刻み込んだ曲がり方だ。

お世辞にも私の最高速は速いとは言えない。ジュニア級のウマ娘ならまあ、平均的な速度と言えるくらいは速度しか私はまだ出せない。

祖父が元トレーナーで、走り方の基礎は学んでいるし、速度の出し方も学んだが、未だ速度には乏しいのである。

その平均的な速度しか出せない私が、他に差をつけるためにどうすればいいのか？ そう、コーナーで差をつけるしかないのである。普通のウマ娘が速度を落とし、息を入れるそのタイミングで私は差をつけるのだ。

『第二コーナーを越え向こう正面、先頭は変わらずブラックプロテウス。単身で飛ばしに飛ばしていきます。少し掛かり気味か？ 続きまして二番手はスノーフロスト、後からマヤノトップガン、四番手、ルーラルレジャー、一バ身離れてスイートオブハートと続きます』
『おっとここで直線で飛ばして追いついてきたスノーフロスト、一番手に代わります』

直線で後続に追いつかれて、抜かれた。スタートとコーナーで作ったリードを、直線で巻き返される。今後の課題はやはりスピードだ。

だが、第三コーナーで追いつき、第四コーナーで差し返す。

『第四コーナーを越えてここからスパート！ 一気にレースが動きまです！ 先頭はブラックプロテウス。一度抜かされましたが、得意の

コーナーで加速し後続を突き放しにかかります!』

中山レース場のコースを横したこのコースの直線は、短い。だが、その短い直線でも、スピードで劣る私は抜かれてしまうかもしれない。

『スノーフロスト、追いつがる! マヤノトップガンも追走してきている! 逃げ切れるかブラックプロテウス!』

私は今まで『楽しく、そして沢山のレースを走りたい』としか思っていないかった。

けれど、今は炎が宿ったかのように、強い想いが胸に、心に灯っていく。

! ——— 勝ちたい。負けたくない。誰よりも速く、先頭を駆け抜きたい

強く、一步を踏み出す。今の自分の限界を超えた力で、芝を蹴りつける。

今まで自分が出せなかった、最高速のその先の速度を、強引に引き出す。

『最終直線で伸びてきたぞブラックプロテウス! 速い! 速いぞ! 追いつがったウマ娘たちを突き放して、独走状態だ! 残り200を過ぎてもまだ加速する! リードを開いていく!』

脚が軽い。自分の中の籠が外れたかのように、身体が飛んでいく。

『ブラックプロテウス、逃げる!! これは途轍もない末脚だ!』

——— そしてそのまま、私はゴール板を先頭で駆け抜けた。

第三話 レース後のあれそれ

選抜レースが終わってすぐ、私は学園内を駆け回っていた。あの後トレーナーたちに囲まれた私はその勢いに怯えてしまい、ついその場から逃げ出してしまったのだ。

まあ、それだけではなく、飴を啜えたトレーナーに後ろからいきなり脚を触られたのにびっくりして蹴り飛ばしてしまった、ということもあるのだが……

「あああ……やっちゃった……」

つい頭を抱える。レースを走るため、チームに所属するために選抜レースを走ったというのに、そこから逃げてどうするのだ。

駆け回った先にあった、穴の開いた大きな切り株の近くにある木を背もたれにして座り込む。

春先の陽気にてらられて、少しうとうとしながら、目を閉じて考え事をする。

勧誘から逃げ出してしまったとはいえ、選抜レースでは結果を出せた。

二着のスノーフロストさんに3バ身差ほど付けてゴールした。マヤさんはそこからハナ差だ。

何時もより最終直線での脚が軽かったのはフロックなだけかもしれないが、圧勝は圧勝である。

見ていてくれたトレーナー達には好印象を与えられたとは思っていたが、まさかあそこまで注目されるとは思わなかった。

でも、それも仕方ないのかもしれない。なぜなら、今年のジュニア級は注目されているウマ娘が少ないから。

私が軽く情報収集をした感じだと、今年のジュニア級はクラシック路線だとフジキセキ先輩、ジェニユイン先輩とタヤスツヨシ先輩くらいだった。

その中でもフジキセキ先輩が頭一つどころか二つ三つは抜け出ているといったところだろうか。

そのフジキセキ先輩はすでにチームリギルに所属している。ただ、

そこまで長距離が得意だとは思えなかった。どちらかというマイラーだろう。とするとティアアラ路線に行くかもしれない。

同じようにジェニユインさんも長距離は苦手そうであった。タヤスツヨシさんも2400くらいまでなら好走しそうだが、それ以上となると厳しそうだ。

だが、スタミナなんて少し走りこめばどうにでもなるので、今の走りは当てにならない。

クラシック路線は今のままならフジキセキ先輩が制するだろう。そう思うのだが、一番わからないのがマヤさんだ。選抜レースで一緒に走っていたが、彼女はどうにもわからない。

こちらの走りをじつと観察されていたような気がするし、全力も出されていない気がする。

変幻自在というのだろうか、そんな感じのするウマ娘だ。対策も立てられない、一番相手にしたくないタイプだと思う。

見た目はすつごく可愛くて、小さいのもあってか彼女が年上だということを忘れてしまいそうなくらいなのに。

「あ、やっぱりここにいた！ テウスちゃん、みーつけ！」

そう、こんな感じでとても人懐っこい声で、こちらの懐にするすると入り込んでくるような。明るいウマ娘だったなあ……

「……おーい？ テウスちゃん？ 寝てるの？ 風邪引いちやうよ？」

考えをやめて目を開けると、相当近い距離にマヤさんの顔があった。心配そうにこちらをのぞき込んでいる。

ひやあ、と情けない悲鳴を上げて後ずさろうとする。木を背もたれにしていたので頭を思いっきり打つだけの結果に終わった。

「テ、テウスちゃん。だいじょーぶ？ すつごい音がしたけど……保健室行く？」

痛みに頭を押さえて蹲っているとマヤさんが心配そうに頭をなでてくれる。故障しない身体とは言え、痛いものは痛いのだ。

「だ、大丈夫です……昔から身体は頑丈なので。マヤさんはどうしてここに？」

「テウスちゃんが急に走り出しちゃったのを見たから、何かあったかと思って追ってきたの。どうしちやっただの？」

「その……急に囲まれて驚いてしまった。つい逃げてしまいました。心配お掛けして申し訳ないです……その、ありがとう、ごさいます」
どうやら、心配をかけていたようだ。素直に謝る。申し訳なくなるのとともに、氣遣ってくれたことがとても嬉しく感じる。

「いーよいーよ！ 変なことされたり言われたりしちやっただのかなとか思っちゃったけど、何にもなかったなら良かった。テウスちゃん、それにしてもすごい走りだったね。マヤ、追いつけると思ったんだけど、いい感じの時にビューンって飛び出そうと思ったたらスノーちゃんに牽制されちゃって。スノーちゃんも速かったし、そのまま追い付くかなって思ってたたら、あそこからさらに伸びるなんて。まるでスズカ先輩みたいだった！」

べた褒めされる。好意100%どころか200%くらいのその態度に恥ずかしくなつて顔が赤くなるのがわかる。

変なことか……いきなり脚を触られるのは変なことなんだろうか？ トレーナーの常識はよくわからないので何とも言えない。セクハラ……ではあるのかな？

「い、いえそのそんな……そんなすごい走りじゃ……サイレンススズカ先輩の様なスピードは出せませんし……」

彼女が言ったスズカ先輩とは、サイレンススズカ先輩のことだろう。黄金世代たちが戦った年、世代最強と評されたウマ娘たちがクラシック級を戦った年。その年負けなしだったエルコンドルパサー先輩に、日本のウマ娘で唯一土をつけたウマ娘。それがサイレンススズカ先輩だ。

影すら踏ませぬその大逃げ。そして大きく逃げた後に、差す。圧倒的な逃げで、『異次元の逃亡者』だなんて呼ばれている。

トレーニングにしか興味がなかった私も、彼女が本格化してからのレースはすべて見た。金鯱賞での1ーバ身差での大勝は心が躍ったものである。

秋の天皇賞は東京レース場で見た。あの悲劇も、すべてリアルタイ

ムで。やはり故障は怖い。そう思い知った日だった。でも、転倒しなくてよかったとも思った。

時速60km以上で走るウマ娘が転倒してしまえば、命に係わる。頭からターフに沈もうものなら、猶更だ。私なら擦り傷か打撲程度で済むだろうが、普通なら頸椎が損傷したっておかしくない。

その悲劇から1年1ヶ月、リハビリを終えて復帰したオープン特別。出遅れて最後尾についてしまったけれど、最終直線で全員抜いて完勝して。レースで泣いたのはあの時が初めてだった。

「あ、そうだ。それだけじゃなかったんだ！　ね、あんなに走って脚は大丈夫なの？　カーブでも全然減速しなかったし、あんな末脚も使ってたし……」

心配かけっぱなしだったようだ。うん、非常に申し訳ない。土下座でもするべきだろうか？

あの飴のトレーナーさんも、私の脚を心配するがあまり触ってしまったのだろうか。そういうことにおこう、私の精神安定のためにも。

「はい。全然大丈夫です。鍛えてますから！　後8000mくらいなら走れますよ！」

「もう、テウスちゃん、大げさだよー。流石にそんなには走れない……よね？　え、本当に走れるの？　マヤさすがにそれはわかんないよ？」

ちよつと引いている気がする。実際走れてしまうのだが言わない方がいいのだろうか。この後も折角なので坂路を10本くらい走ってみようかと思っていたのだが……

「テ、テウスちゃん？　なんか顔に『この後坂路10本走ろうかな』って書いてあるけど、本気？」

「あ、よくわかりましたね！　走り足りないの……あ、この後一緒にどうですか？」

「うん、マヤわかんない。2000m全力で走った後だよ？　そんなに走ったらマヤ倒れちゃうよ？　マヤじゃなくてもブルボンちゃんとかでも倒れちゃうよ？」

うん、これドン引きだ。友達にウマ娘はいなかったし、お爺ちゃん
は私のするトレーニングに口を挟んだりしなかったので、よくわから
ないがこれは異常なんだろうか……？

「じゃあ5本……3本だけでも……折角だし……」

「そういうことじゃないよ？ 休んだ方がいいよテウスちゃん！ ウ
マ娘の脚ってガラスの脚って言われるくらい脆いんだよ？ 壊れ
ちやうよテウスちゃん！」

肩をつかんでがつくがつく揺さぶられる。あ、酔う、酔っちゃう！
故障しない身体でも酔いはするんですよ!?

「わ、わか、わかりました。わかりました！ 走りませんから！ あ、
揺すつちやダメ。お、乙女としての尊厳が失われちゃいますから！
お嫁に行けなくなっちゃいますからあ!!」

トレーニングにしか興味がない私だって衰えたら結婚したいとは思
うのだ。両親に初孫を抱かせてやりたいとも思っている。吐いて
しまったとしても胃液が出る程度だろうが、それでも乙女の尊厳には
係わる。

その後、何とか解放してもらって一つ二つ話してから別れる。た
だ、解放してもらう前に今日のトレーニングは全面的に禁止されてし
まった。ほっと一息ついた後、この後どうするか考える。

トレーニングはできないし、今日はトレーニング用のコースの下見
をする程度に済ませよう。……その時に各コースを軽く走ってし
まっても、トレーニングとは言えないだろう、うん。きっとそうだ。

言い訳をしつつ、下を向いて考え事をしながらコースのほうへ向か
う。どう走ろうか考えていたところ、前に居るウマ娘に気付かずぶつ
かってしまう。ぽよん、と額あたりに柔らかい感触が伝わり、顔を見
上げる。

そこには、サングラスとマスクをつけた茸毛で長身のウマ娘がい
た。多分170cmはある。

傍らには同じく茸毛で身長は私と同じくらいだが華奢な感じのす
るウマ娘と、私より10cm低い、流星が特徴的な鹿毛のウマ娘。それ
と三つ編みハーフアップ、華奢な茸毛の子と同じくらいの身長の子

毛のウマ娘……ちよつと太り気味なのかお腹が出ているのが気になる。その四人のウマ娘が私の目の前にいた。全員そろってマスクとサングラスをつけているのが少し怖い。

「あ、ぐ、ぐめんなさい。前を見ていなくて……あの、何ですか？」

無言でじり、じりと距離を詰められる。まさかカツアゲか何かだろうか。お財布は部屋に置いてきたのだが……

「スぺ、テイオー、マックイーン。やーっっておしまい！」

「はい、ゴールドシップさん」

黒鹿毛のウマ娘にいきなりズタ袋を被せられ、三人がかりで抱えあげられる。

「名乗ったら変装の意味がなうわああああ……」

すっかり身動きが取れなくなった私は、情けない悲鳴を上げて、そのまま拉致されていくのであった……

第四話 チーム加入と自主トレ

謎のウマ娘四人組に拉致された私は、どこかの個室の中でパイプ椅子に座らされていた。特に縛られているとかそういうわけではないが、圧がすごい。

というのも。私を囲んでいる面々が面々だからだ。

まずは黄金世代の日本総大将、スペシャルウィーク先輩。そして二冠ウマ娘、トウカイテイオー先輩。菊花賞及び天皇賞春二連覇のメジロマツクイーン先輩。

うん、チームスピカだこの人たち!?

トレーニングばかりしていた私もGIウマ娘くらいはわかる。ましてやあのサイレンススズカ先輩の所属チームである。他にはゴールドシップ先輩も居て、ダイワスカーレット先輩とウオツカ先輩、それと遠征中のサイレンススズカ先輩以外は揃っている。

いきなり錚々たる面々に囲まれて内心涙目である。私何かしたわけ…………?

ぶるぶる震えているとゴールドシップ先輩の後ろから男の人が現れる。飴を啜えたトレーナー、私が蹴りを入れたその人である。

よく見ると私が付けたであろう蹄鉄の跡の他にも頬に掌の跡があつたりとちよつと痛々しい感じになっている。大丈夫だろうか…………

「あ、あの…………どうして私ここに連れてこられたんですか？ 蹴ったことについての報復、とかでしょうか…………？ ごめんなさい、急に脚を触られたので咄嗟に…………」

「ん？ ああ、そうじゃないよ。蹴られるのは慣れてるから」

「慣れてる!!?」

慣れてるとはどういうことだろうか、ウマ娘に蹴られる機会などそうそうないはずだが…………

「というか貴方！ またいきなり見知らぬウマ娘の足を触ったんですの!?!」

メジロマツクイーン先輩がトレーナーさんを睨んだかと思うと、次

の瞬間には彼の背後に回り込み、左足に自分の左足をからめるようにフックさせて、右腕の下を経由して自分の左腕を首の後ろに巻きつけ、背筋を伸ばすように伸び上がるようにして締め上げる。俗にいうコブラツイストである。

「あだだだだ!! 違う違う! 消耗度合いが気になってつい触っちゃまったただけだつて!」

「何が違うんですの!! セクハラですわよ!」

「ぐわああああ!!」

相当痛そうに見えるが、多分これ技を掛けられるのに慣れている感じだ。なら限度はわかってるだろうし、このまま話しても問題ないかな?

「あの……ならどうして私をここに? 私、これからトレーニングするつもりだったんですけど……」

「ま、待て待て。レースした後にさらにトレーニングするってのか?

流石にトレーナーとしては……ま、マックイーン! そろそろ技解いてくれ!!」

メジロマックイーン先輩に技を解いてもらったトレーナーさんは、こちらに向き直る。真剣な眼差しだったので、こちらも自然と背筋が伸びる。

「いえ、トレーニングといっても下見程度で軽く走る程度に済ませるつもりで……」

何せ本格的なトレーニングは先ほどマヤさんに禁止されたばかりだ。破ったりでもしたら今度は吐くまで揺さぶられるだろう。

「軽く走るにしても今日はやめとけ。明日は休みなんだし、担当トレーナーとしてはちよつとな……」

「本当に大丈夫なんですけど……わかりました。今日のところは……つて、え? 担当トレーナーつて誰が……」

「俺がお前の担当トレーナーだ。よろしくな」

「あ、はい……よろしくお願いします……えっと、トレーナーつてこういう風に決まるんですね?」

知らなかった。まあ、ウマ娘を選ぶのはトレーナーさんの方だし、

特に名門の出身というわけでもない私に選択権があるとは思ってはいなかったが……

「いやいやいや、ほんとは違うからね？ トレーナー、強引なもの程々にしないと」

トウカイテイオーさんが呆れたように補足してくれる。

「そうですね。トレーナーとウマ娘というのは一心同体。信頼関係の上になり立つものなんですもの。遠慮はしなくてよろしいですよ」

「そうなんですネ……でも、きつとこのトレーナーさんなら大丈夫だと思うので。これからよろしくお願いします。あ、私はブラックプロテウスと言います」

立ち上がって深くお辞儀する。私が大丈夫だと思ったのは勘というわけではない。

先輩方は、このトレーナーさんを深く信頼しているようだから。唐突に脚を触ってくるような人だけれど、きつとそれにも意味があるんだろうし。

「お、おう。よろしくな。ブラックプロテウス。それじゃ、再来週のデビュー戦に向けて頑張ろうな！」

「ちよ、ちよつとトレーナーさん！ またそんな期間のない……私の時よりはマシですけど！ でもまだブラックプロテウスさんは入学したてなんですよ！」

スペシャルウィーク先輩が尻尾をぴんと立ててトレーナーさんに詰め寄る。私としては望むところなのだが……

「大丈夫だ。こいつは確かに入学したてだが、上がり3ハロンは33.5、ラスト1ハロンは10.7秒だ。しかも2000走ってほぼ息を切らしてなかった。デビュー前のタイムだとすれば、スペより速かったんだぞ？ 走り方さえ修正してやれば、十分走れるさ」

「逃げウマ娘でそれはスゲーな？ コイツにならゴルシちゃんの108ある必殺走法のうちの1つを授けられそうだぜ……！」

さつきまで一人で将棋をしていたゴールドシップ先輩が反応して面白いものを見つけたかのように笑みを浮かべられる。物凄い美人ではあるが、見惚れるというより嫌な予感の方が強く感じるのはなぜ

だろう……？

「沢山レースに出れるのは私も望むところですし、大丈夫です。毎週レースでもいいですよ？」

「お、いい気合いだな。それくらいの意気で頑張れ！　じゃあ、明日は朝からトレーニングだな！　全員朝9時にこのスピカの部室に集合。ここにいないウオッカとスカレットにも後で伝えておいてやってくれ。どうせ二人野良レースしてるだろうから」

「はい、わかりました。トレーナーさん！　それじゃ失礼しますね。あ、ブラックプロテウスさん、寮はどちらですか？　栗東寮なら一緒に帰りましょう！」

スペシャルウィーク先輩が私の手を引いて部室から連れ出してくれる。ちょうど私も栗東寮だったのでお言葉に甘えてご案内してもらうことにする。

後ろでは先輩たちがトレーナーに片付けを押しつけ……お願いしていた。手伝わなくていいんだろうか？　明日からは手伝わってあげることにしよう、うん。

ちなみに私は寮の部屋に一人だけである。というのも、同部屋になるはずだった地方からスカウトされたウマ娘が、諸事情により中央に来る前に引退したためだ。寮長のフジキセキ先輩に聞く限り故障などではないそうなのだが、何があつたのだろうか？

詳しく聞いても「ポニーちゃんが知るにはちょっと早い内容だから」と誤魔化されてしまった。ポニーちゃんってどういう意味なんだろう……？

後にご飯を食べて、寝る前のトレーニングとお風呂に入って寝るくらいだ。

自慢じゃないが私は早寝早起きである。（夜更かしできないだけともいうが）

どれだけ遅くても日付が変わる前には寝るし、5時前くらいに起きる。同室の子がいればお話とかして夜更かしすることもあったのかもしれないけれど、一人だけだし……待てよ。一人だけということは寝る前のトレーニングをもっと長くしても迷惑かけない？　逆立ち

腕立てとかメデイシンボールとか使ってもいいかな？ 私の部屋は一階だし、ちよつとドタバタしても迷惑かけないよね！ シャワーの時間だけ忘れないようにするか、朝シャワーを浴びればいいし。

食事の時間を忘れたとしても、私はそれなりに料理ができるので、台所さえ借りれるなら問題ない。最悪栄養バーとかでもいいが、トレセン学園の食事メニューは栄養価などもきちんとして管理しているので出来る限りそちらを頼りたい。

今日は着替えたあとスペ先輩（愛称呼びを許してくれた）に連れて行ってもらって食堂に行くので問題ない。同室の子がいない私に構ってくれるのは素直にうれしい。

どうやらスペ先輩の同室はサイレンススズカ先輩のようで、彼女も今一人のようだ。彼女も一人では寂しかったようである。どうやら彼女も地元にいる間はあまり友達がいなかったようで、私のことは放っておけなかったそうだ。その優しさに私の中での好感度が鰻上りである。もう一番頼れる先輩認定だ。

いつもは少し他の人とは距離を開けて歩くのだが、もうぴったり引っ付いている。スペ先輩は笑って手をつないで歩いてくれた。それがお姉ちゃんみたいで嬉しくて、らしくないくらいべったり引っ付いてしまった。

なお、食堂に入ったときに先に居た長い栗毛のウマ娘からガン見された挙句殺気のようなものを感じ取ったのですぐに離れた。

ご飯を食べた後は明日に備えてスクワットや腕立てなどを軽く500回ずつくらい行い、早めにお風呂に入って寝た。寮の門限は朝は5時30分、夜は22時である。それ以外の時間に外出する場合は寮長と担当トレーナーの許可が必要となる。朝一からすぐにトレーニングする予定なので、そのために朝食を食堂で作ってもらって持ち帰ってきた。本来二人で共用する部屋の冷蔵庫も私一人で使えるのはお得である。特製のドリンクとかも冷やしておいたし、準備万端である。

4時30分くらいに起床し、朝ご飯を食べて着替える。集合は9時だったし、3時間くらいは自由にトレニングができる！

鼻歌を歌いながら練習場まで全力ダッシュで向かう。昨日走れなかった坂路の様子見で5本4セットくらい走ろう。その後は走ったことのないウツドチツプコースを走ってみて感触を確かめて、芝コースを10周くらいいいだろうか。

私はあまり芝コースを走ったことがない。家の近所にコースがなかったので、大抵は山道を走り回っていたからだ。おじいちゃんも専門で教えていたのはダートのウマ娘だったみたいだし、芝での走り方に慣れておかないといけない。中央のメインレースは芝なので、沢山走るためには芝への習熟が必要だ。芝のほうが走りやすい気がしたので、少し走れば慣れるだろう。

これが終わっても時間が余るようなら時間まで坂路を走っていればいだろう。集合時間の30分前を目途に終えるようにすれば遅刻することもないと思う。腕時計にアラームをセットしておく。

誰もいないトレニングコースについた私は準備体操をしつかり行ったのち、意気揚々と坂路を駆け上った。

腕時計からピピピ、ピピピという音が鳴り、トレニングを中断する。

3時間ほどトレニングを行い、満足するトレニングができた。坂路を100本くらいは走れただろうか。テンションが上がりすぎてタイムも回数も計っていなかったのは反省点である。

一日中山道を走り回っていたおかげか、まだ体力に問題はない。ちやんとインターバルも入れていたので、まだまだ元気いっぱいだ。

芝の感覚も掴めてきたし、気分は上々である。鼻歌も大きくなるというものだ。

ちょっと時間があったのでシャワーを浴びてから部屋に向かおうと撤収準備をしていると、トレーナーさんが慌てた様子でこちらに駆け寄ってきた。汗だくである。何かあったのだろうか？

「あ、トレーナーさん。おはようございます。何かありましたか？あ、汗これで拭いてください。まだ使っていないタオルですからご安心を」

使っていないハンドタオルをトレーナーさんに渡す。トレーナーさんは受け取った後少し困ったような表情をこちらに向けてくる。この態度は一体……？

「お、お前……いつからトレーニングしてた？　というかどれだけ走った？　朝練してたウマ娘から通報があったぞ！　黒鹿毛のウマ娘がやばいくらい坂路を走り続けてるって！」

どうやら私の練習風景を見ていたウマ娘たちからの通報を受けて慌ててこちらに来たようだ。自主トレする旨を伝えておかなかったのがいけなかったのだろうか。

「朝5時30分から少し。トレーニング用のコースでトレーニングをするのって初めてで。ほら、新入生には今日までトレーニングコースが開放されていなかったじゃないですか。私、もう楽しみで楽しんで」

そう、新入生には今日までトレーニングコースは開放されていなかったのである。環境の変化に慣れるまではいきなりコースに出るのは危険ではないか、ということらしい。なので今まで学園外周を走るくらいしかできなかったのだ。昨日軽く走ろうとしたのはその点ではグレーゾーン……ギリギリアウトだったかもしれない。

「朝5時半ってお前、3時間くらいトレーニングしてたってのか！？　ずっと!？」

「ちゃんとインターバルは入れていたので問題ないですよ？　全然消耗してないですし」

「消耗してないってお前……少し触って確かめるぞ？」

「出来れば先に汗を流させてほしいんですけど……わかりました」

汗臭くないかというのが心配だったが、トレーナーさんが真剣な顔をしていたので、頷く。まず脚を触られ、その後は部室のソファに寝かされて背中や腰などを触られた。とてもくすぐったくて笑いを耐えるのに必死だったのは内緒である。

最初は少し難しそうな顔をしていたが、触診を続けるにつれ困惑したような顔に変わっていくのがわかる。

「あの……何かおかしなところがありましたか？」

少し不安になって訊いてみる。故障はしないはずなのだが……もしかするとこの特典はそれほど万能ではないのだろうか。

「いや……まったくおかしなところはないし、消耗も見られない。今までトレーニングしてたつてのが信じられないくらいだ。……どこにも違和感はないんだな？」

どうやらおかしなところがないことがおかしい、と思っっているようだ。いくら関節に負担が少ない坂路とはいえ、あれだけ走ったら多少は消耗していると思っっていたのだろう。

「はい。私昔から身体は頑丈ですし、回復も早いので。少しインターバルを入れればすぐ回復するんです」

特典については詳しく話せないで、ちよつと誤魔化す。回復が早いのは特典の作用だ。レースに支障がない程度の軽い筋肉痛などになることはあつても、すぐに治つてしまう。圧倒的な耐久力と回復力、それが『絶対故障しない身体』の正体なのだろう。結構深く頭のアたりを切つた時もすぐに血が止まつて、翌日には跡形もなく傷跡が消えていたし。

流星に即死級の、何か胸に突き刺さつたりすれば死ぬだろうが、それ以外では病死や老衰以外で死ぬことはないんじゃないかと思うくらいの耐久力である。なお、花粉症は故障ではない。スギは私の敵だ。私の症状はとても軽いし、すぐに回復するからいいけど。

「そうか……まあいい。今後は自主トレを行うときはいつ、どこで、なにを、どれだけやったか、俺に報告すること！ 今日はずもと、走り方の矯正をする予定でそれほど追い込むつもりはなかったが、限界を見極めるためにもちよつとスパルタで行くぞ！」

どうやら吹っ切れてくれたようで何よりである。私の耐久性に頭を悩ましても意味がないのだ。何せ、都内で一番大きい病院で、最新鋭の機器で精密検査をして偉いお医者さんが数十名頭を抱えてもわからなかったのだから。

「はい、わかりました。それでは、一度汗を流してから戻ってきませうね。10分ほどで戻りますので」

お辞儀をして部屋を去る。触診で大体10分ほど経過したが、寮まで戻って軽くシャワーを浴びて帰ってくるくらいの時間はあるはずだ。

「おう、わかった。気をつけてな。あ、寮まで戻るんだよな？ ならスベを呼んできてくれ。なんかあいつ今日は寝坊しそうな気がするから」

手をひらひらと振ってトレーナーさんが私を見送ってくれる。了承すると軽く駆け足で寮へシャワーを浴びに帰った。

……なお、寝ほけているスベ先輩を起こして身嗜みを整えさせるのが今日一番体力を使った、ということとは秘密である。

第五話 レッスンと特別講師

あの後寝ぼけているスペ先輩を背負って部室に行き、改めて挨拶とミーティングを済ませた。

トレーナーさん曰く、私に足りないものはスピードへの乗り方と駆け引きの方法、後はウイニングライブ用の歌とダンスのレッスン、だそうだ。

まずは先に歌とダンスをやる、とのことでレッスンルームに集合している。歌とダンスが得意なトウカイテイオー先輩が教えてくれるらしい。なんでも今は筋肉痛で休養中でトレーニングが出来ないそうだ。

もちろん、私はダンスレッスンなんてしたことがない。さらにはカラオケにすら行ったことがない。体幹にはそれなりに自信があるが、正直ライブなんて出来る気がしない……

「テウスちゃん安心して！ ボクがみーっちり、スパルタのマンツーマンで教えてあげるから♪」

「お、お手柔らかにお願いします。トウカイテイオー先輩……」
満面の笑みで迫ってくるトウカイテイオー先輩に若干後退る。

「テイオーでいいよー。あ、聞いたよ？ マヤから昨日レッスン止められてたくせに、こっそりトレーニングしようとしてたんだって？ これはオシオキが必要ですな〜？」

ニヤニヤと下から覗き込んでくる。うわあい、バレてる……

誤魔化すように苦笑いするしかなく、その後のレッスンはスパルタもスパルタ。スタミナに自信がある私が声が枯れ動けなくなるまでこっ तरी絞られた。

ボイス&ダンスレッスンは午前中だけだったのにも関わらず息絶え絶えである。普段使っていない筋肉を限界まで酷使させられたし、元々声量がそんなにない私にボイスレッスンはまさに地獄だった。

テイオー先輩曰く、腹筋は鍛えられていて声の出し方と息の吸い方さえトレーニングを続ければ問題なく声量を上げられる。音程につ

いては可もなく不可もない。レッスンを続ければ見られる程度にはなる。

ダンスに関してはリズム感はあるし、体幹もしっかりしているから後は恥じらいをなくす努力をしよう。とのことだった。

結構辛口な評価に思えるが、これでもデビュー時のスペ先輩たちよりはマシ、だそうだ。

いったいどれだけひどかったんだろう……？

「スペちゃんなんて最初のライブは棒立ちだったからねー。『天を仰ぐ見事な棒立ち!』なんて書かれちゃってさ」

「あのスペ先輩が……いや、なんとなく想像できますけども。私だったら恥ずかしくて引きこもっちゃうかも……」

そんなことを書かれたら私、まったく立ち直れる気がしない。

「ボクがスピカに入る前はほんと酷かったからねー。『チームスピカ、レースに勝ってもこの有り様!』って。あ、確か部室にその時の新聞残ってたはずだから、後で見せたげるね♪」

先輩方の黒歴史なんじゃなかるうか、それは。そしてもし私がデビュー戦で同じことをやらかしたら、チームスピカにまた一つ黒歴史が刻まれることになるのでは？

「あ、もしテウスちゃんがやらかしたらその時は笑ってあげるから、安心してね?」

「安心できませんよ!?! 何としてでも見れる程度にはマスターして見せます……!」

根性は人一倍ある自信がある。今後はテイオー先輩の時間が許す限りずっとレッスンを付けてもらおう。ダンスレッスンとかも、トレーニングに活かそうだし。

「そう?。じゃあ今日はこれくらいにしてまた明日ね。明日はマックイーンを観客として呼んで恥じらいをなくす訓練でもしよっか」

「いきなり人前は恥ずかしいです……けど、わ、わかりました。やってみせます!」

こつちをずっとにやにや見つめてくるのに少し反骨精神が湧き、むんつと気合を入れる。

テイオー先輩はそれを見てにしし、と笑っていた。

その後一週間。ダンストレーニングの際、メジロマックイーン先輩やゴールドシップ先輩などがダンスレッスンの見学に来てくれた。

でも、最終日にいきなりあの三冠ウマ娘、シンボリルドルフ生徒会長が来たのには流石にびつくりしてその場でひっくり返ってしまったものである。生徒会長は少し申し訳なさそうにしていたが、テイオー先輩やゴールドシップ先輩は爆笑していた。おのれ許すまじ
……

ライブ用のレッスンも一息ついて、ようやく本腰を入れて芝でのスピードを出す練習をしてくれるそうだ。何でも併走する相手が帰ってきたから、とのことだ。

併走トレーニングなのも初めて聞いたが、相手って誰だろう。トレーナーさん曰く「アイツには言葉で教わるより一緒に走ったほうが得るものもあるだろう。あ、誰なのかは当日のお楽しみってことだ」とのことだった。

ちなみにライブのレッスン中は結構ギリギリまで追い込まれたこともあって、坂路20本、芝・ダート・ウッドチップコース各5周で早朝トレーニングは終わっていた。

肉体的には問題なかったのだが、精神的に少し疲れがたまっていたのであまり追い込めなかったのである。トレーナーさんはそれでも多いと思うがと眉をひそめていたが、私にとっては少ない。

今日は一日コースを走れるということで、テンションは上がりっぱなしである。そのテンションのまま早朝トレーニングも先週末までの3倍行った。

早朝のトレーニングが終わったのち。テイオー先輩のスパルタトレーニングで頭に、耳に焼き付いたデビュー戦で歌う曲を口ずさみつつ、トレーナーさんが来るまで部室の掃除をしている。

「おー、相変わらず早いな、テウス。いつも朝の掃除と終わった後の掃除、任せちまって悪いな」

いつも通り飴を啜えたトレーナーさんが部室に入ってくる。現在

時刻は8時40分、集合時間はいつも通り9時なので、20分前集合である。

結構適当なように見えるトレーナーさんだが、ウマ娘に対することにはとても真摯なトレーナーさんだ。集合時間に遅刻したところは見たことがないし、ところどころでの気遣いもしてくれる。

少々金銭感覚に難があるようで、金欠ではあるようだが……高給取りのはずのトレーナーさんが金欠になるってどういうことなんだろう。今度、お弁当でも作ってあげようかな？ 何時も迷惑をかけてしまっているし……

「おはようございます。トレーナーさん。えっと……後ろの方は？」

そんなトレーナーさんの後ろに、栗毛のウマ娘が隠れているのに気付く。華奢なウマ娘で、トレーナーさんの後ろにすっぽり隠れてしまっていて誰なのかは判別できない。

「おう、おはよう。こいつは今日からのお前の併走相手だ。ほら、挨拶」

トレーナーさんに促されて、後ろから栗毛のウマ娘が出てくる。

腰まで届く、長くて綺麗な栗毛。右耳に可愛い緑系の丸いリボンの様な耳飾りをつけている。身長は私と同じくらいで、とてもすらりとしたスレンダーな体躯。まるで走るためだけに最適化されたような美しさを持つその私の憧れのウマ娘に、ぽーっと見惚れていた。

「はじめまして……サイレンススズカ、です。よろしくお願いしますね。ブラックプロテウスさん」

穏やかに微笑まれる。私のサイレンススズカ先輩のイメージは、走るときのあの真剣な眼差しだった。ターフを誰よりも速く駆け抜けて、影すら踏ませず逃げる。その姿が格好良くて、憧れていた。

でも、今のサイレンススズカ先輩は目がとても優しく、レースの時とのギャップに私はやられてしまっていた。

「はっ、はじめまして！ ブラックプロテウスです！ えっとその……サインください！」

テンパった私は予備のシューズ（未使用）を差し出してついサインをねだってしまう。サイレンススズカ先輩は私が一番好きなウマ娘

だ。限界オタクのようにもなってしまうのも仕方がないというものである。

「サイン、ですか？ 私のものでよければ……？」

戸惑いながらもシューズにサインを書いてくれた。これはもう一生の宝物である。早く自室に帰って飾っておかないと……!!

「ありがとうございます！ 私はこれで！」

「……っっておいおい!! 待て待てテウス！ これからトレーニングだぞ！ 行くなつて！」

トレーナーさんの一声で現実には引き戻される。わ、私は一体何を……

「あ、ごめんなさい……嬉しさのあまりつい……その、お見苦しいところをお見せしました……」

耳をへによりとさせて謝る。憧れの先輩の前でとんだ醜態をさらしてしまった……

「スペから聞いてはいたが、本当にスズカのファンなんだな……まあいい。今日からレースまでのお前の併走相手だ。同じ逃げウマ娘だし、得られるものもあると思つてな」

「そうなんですね……っつて、サイレンススズカ先輩って遠征中なんじゃ？」

そう、サイレンススズカ先輩はアメリカに遠征に行つていたはずである。確かインタビューでは自分が納得できるまでは居るつもりだ、と言つていたはずだが……

「ええ、そうだったのだけれど。日本でドリフトロフィーリーグに挑戦しようと思つて、戻つてきたの。こつちで戦う約束をしている子たちもいるし、つて」

「そうだったんですね……おかえりなさい。サイレンススズカ先輩。早速ですが、併走よろしくお願いします！」

スズカ先輩の手を引いて部屋を出る。最強の逃げウマ娘との併走……！ 楽しみで楽しみで、仕方がない。スズカさんが戸惑うのも、トレーナーさんが慌てるのも気にせず、そのまま手を引いて練習の芝コースに出ていく。

準備運動を二人で終わらせて、スタートラインに立つ。条件は芝2000右回り。私が選抜レースで走った距離と同じである。

芝2000。あの天皇賞と、同じ距離。あの時の沈黙が、私の脳裏に過った。第四コーナーを迎えることなく、彼女が競争中止となったあのレースを。

「ブラックプロテウスさん。大丈夫よ。今の私は、万全だから」

表情に出ていたのか、にこりと微笑まれる。

「でも、言葉だけじゃわからないですよね……ブラックプロテウスさん。貴女に私がちゃんと、全力で走れるということを示します。私の、走りで」

彼女の中のスイッチが切り替わる。先ほどまで穏やかに私に微笑んでいた彼女の目つきが変わる。

「……テウスで、いいですよ。サイレンススズカ先輩。胸を、お借りします」

同じように、私の中のスイッチも切り替わる。彼女の闘志に触れて私の中に炎が宿る。

今の私がどこまで彼女に競り合えるかは、わからない。それでも、今私にできる全力で、彼女と走りたい……！

トレーナーさんの号令で、スタートする。選抜レースの時よりもつと速く、一步を踏み出してスタートする。今までのスタートの中で最高のスタートだ。

——それだというのに。どうしてサイレンススズカ先輩は、私の二歩先にいるんだろう。

私が一步を踏み出す間に、彼女は二歩、三步駆ける。同じ逃げだというのがわからないくらい、どんどん突き放される。影すら踏ませてもらえない。

これが、異次元の逃亡者——！ 彼女が得意とする左回りではなく、右回りで、しかも遠征からの帰還直後、他のレースにも出ていな

いはずなのに。毎日毎日走りこんでいた私が、あつという間に離される。

これがシニア級の、世界を知るウマ娘。地力がまるで違う。スピードで、パワーで、見る見るうちに離されていく。最初のコーナーに入る前の300mちよつとの直線で、私は8バ身は引き離された。彼女は全力じゃないはずなのに……!!

得意のコーナーで、一切速度を落とさず内ラチに身体を掠らせながら走る。かなり危険な走りだ。それでも、私が差を詰めるには、これしかない……!!

サイレンススズカ先輩は楽に走っているのか、それほど内を攻めていない。速度も直線に比べれば落ちている。ダンスレッツスンで培ったステツプで、内も内、最内のさらに内側を攻める。

2バ身程度差を詰めて、向こう正面。彼女は息を入れながらちらりとこちらを見る。

走りを観察していた私と、目が合った。その目が、追いついてみると言っているようで、心の中が燃え上がる。

もつと足を速く、一步を大きく。少し前傾姿勢になって、風を裂くように走る。サイレンススズカ先輩のフォームを真似して走る。

ただ真似ただけだけだというのに、今まで出なかったスピードに乗れる。フォームを調整していくうちに、少しずつ、速く走れるフォームというのがわかってくる。

「っ……あああっ!!」

もつと速く、もつと速く。ひたすらに脚を動かして、心からの叫びを出して、彼女を追いかける。

後、4バ身。3バ身。カーブに差し掛かって、さらに2バ身まで差を詰める。

——いける!

最終直線に差しかかって、さらにスパートを掛ける。追いつける。そう思って、スパートの一步目を踏み出した。

だが。踏み出したその先に、彼女の影は無かった。2バ身にまで詰

めていたはずなのに、いつの間にか8バ身は離れていた。

「っ、嘘っ……!」

これが、逃げて差すということか。本気じゃないのはわかっていた、本気を出されたら追いつけないとも思っていた。

でも、本気を出されなくても追いつけない。影すら踏めない。私だって、今までで一番速く走れているのに——!!!

そのまま、彼女がゴールした後。私は2秒、12バ身ほどの差を付けられてゴールした。

「ふう……いい走りだったわ。お疲れ様、テウスちゃん」

まだまだ走り足りないと言わんばかりな表情をしながら、彼女がゴールで迎えてくれる。

「ありがとう、ございました……サイレンススズカ先輩」

「スズカでいいわ。途中から速くなったみたいだけど、テウスちゃんは先行か差しかしら?」

「いえ……私も逃げです。スズカ先輩の走り方を真似してみただけで……」

「そうなのね。何だかくすぐったいわ。もう一回走る?」

「はい! お願いします!」

そのまま二人でスタート位置に戻って、もう一周走ろうと構える。

「いやいやいや! 待て待てお前ら! 二人の世界に入るな! ……」

そんなに睨むなよ」

トレーナーさんが引き留めてくる。いいところだったのに……という恨みを込めて少し睨んでしまう。

「走るなって言ってるわけじゃないから、少し待て。スズカ、これは併走トレーニングなんだから、突き放さないでやってくれ。すぐ近くでお前の走りを見せてやるんだ」

「はい、わかりました。離さないようにすればいいんですね」

「テウスはさつきやったように、スズカの走りを見て盗め。お前たち二人は頭はいいけど言葉で伝えるより感覚で感じるタイプだ。併走

しているうちにわかるだろう」

「はい、トレーナーさん！ 食らいついていきます！」

「よし！ 休憩を入れたのち、もう一本行ってこい！」

「はい!!」

トレーナーさんの指示の下、残りの一週間はスズカさんとひたすら併走トレーニングをして過ごすごだった。

第六話　メイクデビュー

日付が経つのは早いもので、明日は私のメイクデビュー戦である。本来、メイクデビュー戦は6月から翌年2月までしかないのだが、今年度は試験的に全期通してメイクデビュー戦が行われる。ただし、回数は少なめであるが。

ウマ娘は暑いのが苦手である。そのため少し暑くなる6月より涼しめな4月5月の方が調子が出るといふ娘も多いので、案外競争率は高い。

「ふう……テウスちゃん。大分速くなってきたわね。良い仕上がりによ」

「ありがとうございます、スズカ先輩！」

今日のスズカ先輩との併走、7本目が終了した。

スズカ先輩にフォームを直してもらったり、実際走るところを見てフォームを盗ませてもらったりして、ターフでの走りも大分マシになった。

トレーナーさんには後で聞いたのだが、どうやら私の走りは能力に物を言わせているだけで技術も何も無い状態だったらしい。元々山道しか走ってこなかった弊害か、ターフでの走り方が滅茶苦茶だったそうだ。

脚質的に似通ったスズカ先輩に教わることで問題なく走れるだろうと目論んでいたそうで、結果その目論見は大当たりだったことになる。

調整した結果、私のフォームはスズカ先輩よりほんの少し前傾姿勢になって走るフォームで、大跳びでもピッチでもない通常走法、それで脚の回転を出来るだけ速くするような感じになった。まあ、大体スズカ先輩と一緒にいる。

それでもスズカ先輩の全力には追いつけないが、8割程度なら割といい勝負が出来るようになった。今は無理でもいつか必ず先頭の景

色を譲ってもらおうと思っている。

「よし、スズカ、テウス。いいタイムだ。これならメイクデビューも勝てるだろう。だけど、油断するなよ？ ほら、後5分休憩したらもう一本行つてこい！今日はそれで終わりだ！」

トレーナーさんがストップウォッチを見ながらいい笑顔を向けてくる。併走中ずつとタイムを計ってくれて、ところどころアドバイスや檄を入れてくれたりする。

「トレーナーさん。私はもう走れますよ。テウスちゃんも行けるわよね？」

「はい、大丈夫です。それに後一本だけじゃ足りません。後三本はお願いします」

「いや、ダメだって。明日もあるし、何よりコースの使用時間が足りないから。今日のところは勘弁してくれ」

トレーナーさんが渋るのに二人で不満を表明する。スズカ先輩も私もまだまだ全然走り足りないのに……

でも、トレーナーさんにこれ以上迷惑を掛けるわけにもいかないのでもわがままは言わないでおこう。今まで結構我が儘を聞いてもらっ
たし……走ったり、走ったり、走ったりとか……

「じゃあ、最後だしテウスちゃん。全力で行くわね？」

「はい！ 負けませんよ！」

「ふふ、まだまだ先頭は譲れないわ」

最後の一本の併走を始める。最初の頃より引き離されなくなったし、今度こそは行ける！……と、思う！

「まったく……この二人は目が離せないな……放っておくとどれだけ走ってるかわからん……」

トレーナーさんが私たちを見て呟いている。ウマ娘は耳がいいんですから、独り言だつて聞こえちゃうんですからね！

まあ、迷惑を掛けているのはわかっているのだ。この間理事長秘書の駿川さんに呼び出しを受けていたのは知っている。トレーナーさんは何でもないように振舞っていたが、どういふ話かは知っている。実は私も呼び出しを受けていたのだ。

どうやら私の早朝トレーニングを見ていたウマ娘たちから私のトレーニングがスパルタ過ぎるのではないかと相談があったらしく、私は理事長に事情を聴かれた。

無理強いされているのではないかとか、無理はしていないかとか。全で一蹴して、両親や祖父母とも電話で話してもらって理事長には納得してもらった。

トレーニングを自重しようとは思うのだが、身体がトレーニングを求めるのでどうしようもない。なのでそこはもう諦めてもらって、その分我が儘は控えようと思っっている。

なお、最後の併走は15バ身程引き離されて終わった。スズカ先輩速すぎ……

『ここ東京レース場。次は第10レース。メイクデビュー戦、芝2000です。曇り模様ですが、何とか持ちこたえバ場状態は良の発表となりました。今年度より新設された4月のメイクデビュー戦ですが、今回は9名のウマ娘が走ります』

『1枠1番リボンマンボ。リボン一門が送り出す新進気鋭のウマ娘です。今回の一番人気となりました。2枠2番は——』

パドックでのお披露目を終え、本バ場入場。1枠1番のウマ娘から順に入っていく。私は8枠9番、つまり大外である。ちなみに人気は六番人気だ。仕上がりはいいのだが、私だけ中等部のウマ娘であるのが不安要素として見られているようだ。ちなみに私のトレーニング風景は理事長判断で非公開となっている。

でも、別にいい。一番人気だとかそういうのは私には関係ない。私はただ、楽しく全力でコースを駆け抜けたいだけだ。結果は後から付いてくるものだから。

ファンファーレが鳴り、ゲート入りが始まる。私は奇数枠ではあるが、大外のため一番最後のゲート入りとなる。

『最後に8枠9番、ブラックプロテウスが入ります。チームスピカ所

属。中等部入りたてのウマ娘ですが、早くもデビューとなりました』
『選抜レースの映像を見ましたが、素質は十分に見えますね。成長しきっていないようにも見えますが、果たしてどうなるか楽しみです』
実況の女性の声と、解説の男性の声が聞こえる。でも、ゲートに入ってから聞こえなくなつた。

一度肩に力をぐつと入れて、その後力を抜く。そしてしっかりと前を見据える。

『さあ、メイクデビュー戦。今スタートしました！ 各ウマ娘、出揃つて綺麗なスタートになりました』

特に出遅れもなく、スタートを切る。今日のスタートは可もなく不可もなし、といったところだ。

『おっと大外ブラックプロテウス！ するすると上がっていきます！
これは大逃げ！ 大逃げだブラックプロテウス！ 開幕から飛ばしていきます！』

『選抜レースでも逃げ戦法を取つたウマ娘ですからね。最後まで逃げ切れるのか、楽しみです』

スタートを切つた後、一気に加速しつつ少し周りの様子を窺う。後続とは結構離れた。進路妨害を取られないくらい離れたのを確認すると、ゆつくりと内側を確保していく。

デビュー戦を斜行で失格、というのは流石に避けたいので、慎重に内に入っていく。

『ブラックプロテウス、開幕から差を広げ、悠々と内側に付けました。後続とは7、8バ身は離れて、そこから更に引き離していきます。これは大逃げを超えた爆逃げです！』

『まるでツインターボの逃げを彷彿とさせますね。逆噴射とならないと良いのですが』

内を確保し、加速体勢に入る。最初は下り坂なこともあって、カーブに差し掛かっても構わず加速を続け、直線に出て一気にトップスピードに入る。

脚がするすると進む。今までの速さは歩いていたものなのかと思

うくらい、スピードに乗れるのがわかる。

第三コーナーの手前にある1.5mの坂もスピードを保ったまま一気に駆け上っていく。下り坂も上り坂も、私は得意中の得意なのだ。

『1000mを今通過した！ 通過タイムは……57.9!? 57.9です！ これはシニア級の1400mの1000m通過平均タイムとほぼ同じだ！ 2000mだぞ大丈夫かブラックプロテウス!』
『これは……フォームといい、まるでサイレンススズカの走りを出します。同じチームですし、もしかするとサイレンススズカから何か指導を受けたりもしたのかもしれませんが。スタミナが持つなら面白くなりますよ』

第三コーナーに差し掛かり、第四コーナーへ向かう。途中から若干の上り勾配となっているが。私にとっては平坦な道も同然である。大体1ハロン11.1秒くらいをキープして走る。

スズカ先輩の金鯉賞が11.2から11.4あたりの逃げで、終盤多少失速したものの平均すれば大体11.7とかだったはずだ。それに対する対抗心というのものもある。

なお、今のスズカ先輩にこんなペースで走っていたらあつという間にもぶつちぎられることになる。最近のスズカ先輩は1ハロン10.5秒とか平気で出してくるからだ。もちろん2000mでの話である。上がり3ハロン31秒とか流石に追いつけない。

『大擲を……越え、第四コーナー！ 後ろには誰もいない！ 後ろには誰もいないぞ！』

『これは途轍もない強さです。メイクデビューとはまるで思えませんが。超大型の新星が現れましたね』

第四コーナーを越えると高低差2mの上りに入る。流石に物理法則を無視できるほどの脚力はないので、多少スピードは落ちたが、勢いで乗り切る。

最終直線に入っても周りには誰もいない。先頭の景色を独り占めにして、ゴール板を駆け抜けた。

『今一着でっ、ゴールイン！ 大差、大差、大差です！ 後続に圧倒的

な差をつけてゴール！ 勝ち時計は1:57. 1! ……1:57. 1!? 信じられません！ レコード！ レコードです！ 芝2000m、スペシャルウィークが持っていた天皇賞秋、東京レース場芝2000のコースレコードタイム、1:58. 0をコンマ9秒更新した！ もちろんジュニア級芝2000のレコードも更新！』

『二着はリボンマンボ、時計は2:04. 2、約7秒遅れてのゴールです。三着にはサンセットグルームが入りました』

そのままのスピードで200mほど走った後、ゆっくり減速する。全員ゴールした後に向こう正面あたりで引き返し、観客席に小さく手を振ると、大きな歓声が返ってきた。

メインレースの前でまばらだったはずの観客席には結構人が戻ってきていて、皆が割れんばかりの拍手をしてくれる。

全員がゴールしレースが終了すると、ウイナーズサークルへ誘導される。勝ったウマ娘はここでファンにパフォーマンスを行うのだ。スズカ先輩のように自分の世界に入ってファンサービスを行わないウマ娘も一定数存在するが……

ウイナーズサークルに立って、観客席を見上げる。観客の皆が拍手をして、凄いぞ、よくやったぞと褒めてくれる。

これは……癖になってしまっそうだ。勝利の祝福が、こんなにも嬉しいものだなんて知らなかった。

感謝の気持ちを込めて、観客席に最敬礼をする。45度を通り越して60度くらい腰を曲げてしまっているが、今更修正する気にはない。

「よくやったな、テウス。まさかこんなレコードで決着を見るとは……」

「お疲れ様。テウスちゃん。一着おめでとう。でも、最後の直線でちよつと遅くなっていたわ。最後の最後まで油断しちゃだめよ?」

ウイナーズサークルにトレーナーさんとスズカ先輩が迎えに来てくれた。トレーナーさんは素直にほめてくれて、スズカ先輩にはちよつとダメ出しされた。厳しい先輩である。

「えへへ……二人とも、ありがとうございます。その……周りに誰もいないのは初めてで、少し混乱しちゃって」

今までここまで独走したことはなかった。選抜レースは3バ身、入試時のレースも4バ身程度だった。正直途中から後ろを気にしていなかったのも、ちよつとびつくりしたのだ。

「ふふ、これは私もうかうかしてられないわね。トレーナーさん、出れるなら次のヴィクトリアマイルか、安田記念、それか宝塚記念に出たいです」

スズカ先輩がキラキラした目でトレーナーさんを見上げる。スズカ先輩の闘争本能を刺激することが出来たようだ。

「わかったわかった。出走登録はしておくから。スズカの成績ならどんなレースでも問題なく出れるだろう。それより、今はまずテウスのウイニングライブの準備をしないとね！」

「ウイニングライブ……頑張りますっ！ テイオー先輩にみっちりしごかれましたから！」

今すぐにもレースに出たいと言わんばかりのスズカ先輩を宥めて、三人で控室に帰っていく。

こうして私は初戦は和やかに、しかし衝撃的なデビューを果たすのだった。

なお、ウイニングライブは特筆すべき点もなく、無難に終えた。

第七話 ドーピング疑惑

ウイニングライブ後。私は都内で一番大きい病院に連行されていた。

メイクデビューでの圧倒的勝利、二着との着差41バ身という出鱈目な記録を打ち立てた私は、何とドーピング疑惑を掛けられているのだ。

まあ、私は全くの無名だったしこの措置も仕方がないと思う。母も祖母もウマ娘だが、母は脚部不安で未出走、祖母に至っては実家の剣術道場を継ぐためにトレセンに通ってすらいない。

そんなウマ娘がジュニア級にもかかわらずシニア級クラスの走りをしたのだ。何かやばい薬でも使っているのではないかと思われるのも仕方がない。

一応レース場の方でもレース後にドーピング検査はしたのだが、裁決委員の要請によりこうして精密検査を受けているということだ。

トレーナーさんは裁決委員に噛みついていたが、こんなことでトレーナーさんの立場を悪くするわけにも行かないので大人しく検査を受けている。一日大人しくしていればいいだけだ。少しお泊りするだけで何のことはない。トレーニングできないことだけは不満であるが。

このまま今日入院することになるので、トレーナーさんには先に帰ってもらった。退院は明日のお昼ごろになるらしい。明日は公欠にしてくれるそうだ。

「テウスちゃんも大変だねー。ご飯これだけで足りる？ あ、レース見てたよ。一着おめでとう」

「あ、大丈夫です。ありがとうございます、看護師さん」
「いいよー。何かあったら呼んでねー」

この病院は私が以前精密検査を受けた病院と同じである。なので看護師さんやお医者さん、院長さんまで知り合いだったりする。事故にあつたり滑落したりした時に毎回担ぎ込まれるので常連でもある。私、迷惑かけすぎでは？

少し自分の行いを反省しつつ、病院で晩御飯を食べる。ウマ娘用の量に調整されたものなので結構量が多い。レース後でお腹が空いていることもあつてペロりと平らげることができた。

私が入院しているのは特別室だ。検査などにかかる費用は全額URAの負担となつているので遠慮なく一番高い部屋にしてもらつた。特別室にはトイレも浴室もあつて部屋から出れなくても困ることはないのだが、トレーニングが出来ないことだけが問題である。だが事情が事情なので外出禁止だ。大人しく寝るしかない。……でも、腕立て伏せとかくらいなら出来るかな？

その場で出来るトレーニングを眠くなるまで行つて、その日は就寝した。

【トレーナーSide】

頭の固い裁決委員共には辟易とする。

確かにテウスは寒門のウマ娘だ。メジロだとか、シンボリとか、ナリタ、エアといった名門とは全く違う、実績のない家の娘だ。

それでも、あいつの実力は確かだ。それを裏打ちするのは圧倒的な練習量。一日で普通のウマ娘が10人くらいは故障してもおかしくないくらいのトレーニングをあいつは常に行っている。ストイックだとかそういうものではなく、それを好きでやっているのが末恐ろしい。

レースへの意欲が高いのも、走るのが好きだからだ。そういつたところはスズカに似ていて、後になってスズカを併走相手として紹介したのを後悔したくらい、二人は相性がいい。

元々テウスはカーブや坂道は得意だったが、ターフを速く走るといふ一点においては全く技術が備わっていなかった。どちらかというどダートや障害向きの走り方だったと思う。それでいて入試時のレースや選抜レースで一着をもぎ取っていくあたり、彼女の能力の高さが窺える。

だから俺はスズカに併走を頼んで、テウスにターフでの走り方を叩

き込んでもらった。

アメリカから帰ってきたスズカは一回りどころか二回り以上成長
していて、帰ってきたときについてトモを触ってしまったものである。
もちろん蹴られた。

そんなスズカが叩き込んだ走り方を、テウスは見事に自分のものと
した。スズカのものにそっくりなようで、所々違うそのフォームでス
ズカと併走する姿を見て、そしてメイクデビューで楽しそうに疾走し
ていく姿を見て、俺は確信した。

来季のクラシックの主役はフジキセキでも、ジェニユインでも、タ
ヤストヨシでもない。このブラックプロテウスなのだ、と。

能力だけで言えば、テウスは今の段階でもシニア級に匹敵する。駆
け引きなどの技術は不足しているが、それはレースを経験させていく
うちに身につくだろう。

一つ懸念があるとすれば……

「……さん？ トレーナーさん？ 聞こえていますか？」

自分を呼ぶ声でふと我に返る。目の前には緑色の事務服を着た理
事長補佐、駿川たづながいた。

「ああ、たづなさん。もう時間ですか」

「はい。ブラックプロテウスさんの退院の時間ですから、迎えに行き
ましょう。あ、検査結果はもちろん全てシロ。全くの異常なし、健康
体だそうですよ。レースの消耗も全くないそうです」

迎えに行けるようトレーナー室で支度をしていた俺を呼びに来て
くれたようだ。結果も全く問題ないそうだ。まあ、当然である。あれ
だけ全力で走って消耗なしというのもおかしいと思うが、無事之名
バ。これ以上の事はない。

支度を済ませて、たづなさんを車の助手席に乗せてテウスがいる病
院に走り出す。

病院で手続きが少しあるため、その補佐としてたづなさんが同行し
てくれることになっている。理事長は今回の件でかなり怒っていて、
『憤怒ッ!! URAには日本ウマ娘トレーニングセンター学園として

公式に抗議声明文を発表するっ！』と言っていた。今までに見たことのない怒りようで、極限まで絞られたウマ耳を幻視したものだ。

今回については俺も腹に据えかねているので全面的に協力した。今回ブラックプロテウスに入院隔離させてまで精密検査を受けさせたということは、勝者に対してその勝利を祝福するのではなく、不正しているのではないかと疑ってかかり、更には自ら行った検査でシロだとわかっているのにそれを認めようとしなかったということだ。

少しでも彼女に瑕疵がないか。あればそれを理由に公式記録としては認めない、失格にしてやるとでも言いたげなその態度に、俺は裁決委員を殴り飛ばそうとした。

テウスが止めなければ、間違いなくぶっ飛ばしていただろう。テウスは笑って、『少しお泊りしてくるだけですから』と言っていたが、きつと傷ついていたはずだ。

勝者に限らず、頑張ったものには祝福が必要である。俺は何人も勝ったのに、好走したのに祝福を受けられないウマ娘を見てきた。ライスシャワーやキョウエイボーガン、地方を回っていた時のスマートファルコン。スーパークリークに至っては一部の過激なファンから殺害予告まであったほどだ。

反応はそれぞれで、走る意味を見失いかけた娘もいれば、雑音とばかりに気にせず走りぬいた娘もいた。

自分から悪役ムーブをかまして担当トレーナーといちゃついていた娘も居たほどである。

だが、どんなに余裕そうにしても、年端も行かぬ少女である。中学生から、高校生くらいの年齢。俺の半分程度しか生きていない、未成年の子供たちだ。

まだ世間からの悪意からは保護されて然るべきだし、問題が起きた時には守ってやらなきやならない。それが俺たちトレーナーの、大人の、一番重要な仕事なんだと思っている。

今回の件は陰でこっそり餌付けして可愛がっていたマツクイーンも『マジギレですわ！ メジロに来ましたわ！（意識）と怒っていたし、生徒会長であるシンボリドルフも耳を絞って『皆裂髪指、怒髪

「衝天とは正にこの事だな」と言っていたほどだ。

それぞれ実家に電話をしていたし、何らかの対処をすると聞いていた。恐らく明日か明後日には裁決委員の顔触れが一新されていることだろう。残念でもないし、当然である。

「……トレーナーさん。テウスちゃんにその怒った顔、見せちゃダメですよ?」

「どうやら考えていたことが顔に出ていたようだ。たづなさんに窘められる。少し苦笑いして、顔を引き締めた。

「ウマ娘のことを真剣に、大切に思っただけなのは、同じウマ娘として……いえ、ウマ娘にとってはとても嬉しいことでしょう。でも、今回テウスちゃんが大人しく入院したのは貴方のためでもあるんですから。笑顔で出迎えてあげましょうね?」

「わかっていますよ……あん時テウスに庇われたって事くらいも。自分がちよつと情けなくなりますね……俺が守ってやんなきゃいけないかったのに」

「ふふ、ウマ娘に限らず女の子は強い生き物ですから、守られるばかりじゃないんですよ。でも、その気持ちはとても嬉しいものですよ。これからウマ娘さんたちの事、大切にしてあげてくださいね」

「勿論です……あ、着きましたね。それじゃあ、行きましょうか」

病院に到着し、テウスを迎えに行く為に車を降りる。きつと学園に帰ったらすぐにでもトレーニングをせがんでくることだろう。スズカとの併走だけじゃ飽きるかもしれないし、スペやゴルシにも頼んでみるか……

特別室に迎えに行くと、ベッドを抱えてスクワットしている所に出くわした。何やってんだ、こいつ……

テウスは苦笑いでごまかそうとされていたが、軽いお説教タイムとなったのは言うまでもないだろう。

第八話 レースを終えて変わったもの

退院してから二週間、私の学園生活は一変していた。

まず、同級生のみならず先輩方からも異様に気を遣われるようになった。

大変だったね、とか。酷いことされなかった？ とか、今は落ち着いているが公欠明けの初日はそれはもう酷いもので、ウマ娘の波に私は飲まれていた。

どうやら私が精密検査を受けた事情に理事長や生徒会長達が苛烈なまでに激怒したようで、U R Aに抗議をしたり事情を全校集会で学園の全生徒に周知したりと精力的に動いて下さったらしく、私が呑気にベッド担ぎスクワットをしていたころには盛大に燃え上がっていたそうだ。

U R Aはそれはもう慌てた。U R Aは殆どがウマ娘の名門、トレーナーの名門という者の出身から出された委員や役員によって上層部が構成されている団体だ。

ウマ娘の育成やレースに係わる立場である以上、公正公平、クリーンな業務というのが求められている。

そのU R Aが寒門のウマ娘に対して圧力をかけたということでも理事長が抗議文を提出、しかもその文をトレセン学園のホームページにも掲載したことから大炎上が起こったそうだ。

名門の人たちも、自分たちに延焼してはまずいと思ったのか、はたまた彼らも怒ってくれたのか次々に声明を出すに至り、翌日には委員や役員の顔触れが一新されていたそうだし、私宛に菓子折だのなんなの大量に届けられた。

事を大きくするつもりはなかったし、穏便に済ませたかったのだが大騒ぎになってしまって、もう本当に申し訳なくて、理事長や生徒会長には頭を下げて回った。

理事長たちは「君が気にすることはない」とか、「私たちが守るから安心してくれ」とか温かい言葉を掛けてくれたが、それがまた申し訳

なくてずっとペコペコしていた。

同級生や先輩たちにしても私はそんな感じで謝っていたのだが、それがいけなかったのか撫でまわされたりお菓子を分けてくれたりと過保護にされている。

まあ、事件の被害者だと見られて同情されているだけだろうし、しばらくすれば落ち着くだろう。

「わー、テウスちゃん髪綺麗だねー。シャンプーとかなに使ってるのー？」

「えっと、購買で売っていたんですけど……」

私も三日経ったあたりから慣れて、今はされるがままになっていく。今は同級生のミニコスモスちゃんに撫でまわされた挙句に髪を弄られている最中だ。

私はあんまりファッションに詳しくないので、普段は下ろしているかティオー先輩のように後ろで結っている程度なのだが、今は髪をハーフアップにして複雑な編み込みをされている。

「はい、出来たよー。どうかなー？」

「ありがとうございます。うわ……すごいですね……」

ミニコスモスちゃんが手鏡で見せてくれるがそれ以外の言葉が出てこない。私では見てもどうやったのか全くわからない編み込みだ。

「折角綺麗な髪なんだからもっとおしゃれしないと損だよー。今度編み込みの仕方教えてあげるねー。あ、チャイムだー。またねー」

「ええ、是非お願いします。楽しみにしていますね」

授業開始を知らせるチャイムが鳴り、お互い席に戻る。次が今日の最終の授業だ。ちなみに科目は数学。睡魔に負けてしまう脱落者が数多く発生する魔の授業だ。

私は数学は得意な方だ。授業を聞きノートをまとめつつ、別のノートに今日のトレーニングメニューを書いていく。

最近は併走してくれる娘も増えたので、誰かと一緒にやるための常識的なトレーニングメニューに収まっている。

スズカ先輩だけが相手なら加減する必要はないのだが、他の娘も一

緒に走るなら問題が出るだろうとトレーナーさんが考えてくれた。

トレーナーさんの考えてくれるトレーニングメニューはとても理に適ったもので、最大限効率化が図られている。そのお陰で私としてはもうトレーニングが楽しくて楽しくて仕方がない。

この勢いでもっと自主トレも増やしてもいいくらいなのだが、自主トレの開始時と終了時にはトレーナーさんへの報告が義務付けられているので迷惑を掛けない範囲、寮の門限の一時間前までで終わっている。

後片付けも必要だし、遅刻して寮から締め出されるわけにもいかないので若干の余裕を持っている形だ。聞く限り門限は結構緩いらしいが、私は今まで一度も遅刻したことはない。

「今日の授業はここまで。居眠りしていた娘たちは後で職員室に来るように」

終了のチャイムが鳴り授業が終わる。先生が最後に告げた宣告に悲鳴が上がった。

今日はほぼ半数が居眠りしていたようだ。項垂れる娘と帰り支度をする娘が綺麗に分かれている。

私は起きていたしノートも完璧にまとめてあるので全く問題ない。項垂れるミニコスモスちゃんを見て苦笑いして、教室を後にした。

すぐにでも着替えてトレーニングに行きたいので、静かに廊下を走る。途中で可愛がつてくれる先輩方とすれ違い、挨拶を交わしつつ部屋へ急ぐ。

こちらを見て少し驚くような娘も居たのに少し疑問に思いつつ、部屋へたどり着き着替え始める。今日も一番乗りだ。毎回一番乗りになるので最近では部室のカギを託されている。

早着替えを終えてトレーニングの準備をしていると、扉がノックされる。この優しい叩き方はマックイーン先輩だろう。衝立もあって、扉を開けても着替えが見られるようなことはないのだが、マックイーン

ン先輩は毎回ノックしてから入ってくる。

「はい、入って大丈夫ですよ、マックイーン先輩」

「失礼しますわ。テウスさん、今日もお早いですね」

「トレーニングが楽しみで楽しみで仕方なくって！ マックイーン先輩も早いですね。リハビリの調子はどうですか？」

マックイーン先輩は昨年、？靭帯炎を発症し、現在はリハビリに努めている。大分回復したようで補助がなくなるとも問題なく行動はできているが、回復具合は気になる。

「ええ、問題無いですよ。この調子なら早ければ秋、遅くても年明けまでには走れるようになるでしょう。ですが、流石に今年の秋の天皇賞には調整が間に合いそうにありませんわね……来年の春に間に合うかもどうか……」

メジロ家にとって天皇賞は悲願らしい。既に春の天皇賞を二度制しているマックイーン先輩だが、秋の天皇賞は取っていない。いや、1着を取った事は取ったのだが、斜行により18着への降着処分を受けてしまったために取れなかったのだ。

「来年の天皇賞がありますよっ。来年の秋の天皇賞なら私も出れますし、一緒に走りましょうね！」

「ええ、望むところですよ……って、貴女、菊花賞はどうするんですの？」

「？ 秋の天皇賞は菊花賞の一週間後ですよね？ なら問題ないですよー！」

「問題しかありませんわよ!!？」

おかしい、何か問題があっただろうか？ クラシックでは皐月賞とダービー、出られれば宝塚記念、菊花賞、そして秋三冠と挑戦していくつもりだったのだが……

ちなみにティアアラ路線は見送ることにした。桜花賞はマイル戦で私には距離が短いからだ。

出来るだけ長いレースを走りたいので今のところマイル戦に出るつもりはない。

宝塚記念を狙っているのは、もしかするとそこでスズカ先輩と走れ

るかもしれないからだ。スズカ先輩は今年のマイルチャンピオンシップを最後にドリームトロフィーリーグに挑戦したいと言っていたが、私の走りを見てか私とも戦いたいと言ってくれた。周りが全部シニア級になるであろうレースではあるが、スズカ先輩と真剣勝負できる機会を逃すわけにはいかない。

「テウスさん、貴女良いですか？　いくら貴女が頑丈だからとはいえ、菊花賞の後に天皇賞を走るのは流石に無茶ですわ。それに、相手はシニア級ばかりですよ？」

「大丈夫ですよ。万全な状態で走って見せます。マックイーン先輩が相手でも逃げ切って見せますよ？」

「……言ってくれますわね。手加減はしませんわよ。覚悟しておきなさい」

マックイーン先輩が少し怖い笑みを浮かべてくる。流石に凄い迫力だ。流石はGI4勝のウマ娘といったところである。

「……それにしてもテウスさん。貴女、今日はおめかしさんですのね」マックイーン先輩も着替えを終え、私の柔軟を手伝ってもらっていると、急にマックイーン先輩が変なことを言ってくる。

「え？　特に何も変わったことはないと思いますけど……」

首を傾げて何かしたか考える。お化粧とかはトレーニングしてる

と落ちるのでしていないのだが……
「いつもと髪型が違いますわ。とても愛らしくて似合っていますわよ」

「……!!　忘れていた！　そういえばミニコスモスちゃんに髪を弄られてそのままだった！」

恥ずかしさのあまりペタンと地面に折りたたむように前屈して倒れる。マックイーン先輩が「どうしたんですの!?!　何処か痛みますの!?!」と心配して体を揺すってきたが、暫くは起き上がれそうにない……

【トレーナーSide】

日が沈みかけたトレーニング用コース。俺はそこで担当ウマ娘のトレーニングを見ていた。

ブラックプロテウス、穏やかな性格でこちらの言うことは素直に聞いてくれるが、このトレーニング量だけは制御することが出来ない。何せテウスが好きでやっていることだ。最初のころに一度言い聞かせて止めさせたことがあったが、翌日見るからに調子を崩している、ライブのレッスンで何度も転んだり歌詞を間違えたりしていたとテイオーに聞いてからはテウスの好きにやらせるようにした。

一応俺の手の空いているときは見守ったり、他のトレーナーにそれとなく見てもらうようお願いしたりして放置しないようににはしていた。オーバーワークが怖かったのである。

テウスは今、スズカが今週のヴィクトリアマイルに備えた調整をしているということもあって、単独でのトレーニング中だ。坂路で巨大タイヤ引きをしている。意味が分からない。通常あれは平地のダートで使うもののはずだ。重さも5tくらいあったはずだが、なぜ引けているのだろう。

まあ、今更テウスのトレーニングに口を出しても仕方がない。坂路のウツドチップが物凄い勢いで荒れていくが、終わった後あいつが自分で整備していくし、いつの間にか理事長の許可を貰っていたようだしな……

「……ちよつと貴方。あれ大丈夫なの？」

トレーニングを見守っていると隣に並んできたグレーのパンツスーツを身に纏ったクールな女、東条ハナが話しかけてくる。

「おハナさんか。テウス……ブラックプロテウスが頑丈なのはおハナさんも聞いているだろう？ 問題ないさ」

「そうはいつてもね……真似するウマ娘が出てきたらどうするのよ」
「……あれ、真似できると思うか？」

二人でそのトレーニング風景を見て無言になる。おハナさんは無表情になっていた。凄く楽しそうな表情で坂路を巨大タイヤを引き

ながら上っていくテウスを見て何もかもを通り越して無表情になってしまうのもよくわかる。俺もそうだったしな……

坂路でのタイヤ引きを終え、満足そうにしているあいつに待機していた整備員が話しかけていた。理事長がこの後の整備を手配していたのだろう、テウスは整備員にお礼を言っているようで頭を何度も下げてからこちらへ向かってきた。

「あ、トレーナーさん！ それにチームリギルのトレーナーさんも。見ていてくれたんですか？ ありがとうございます！」

ぽわぽわとした柔らかい笑みを浮かべて俺たちにもお礼を言うってくる。テウスはこうして事あるごとに感謝の気持ちを伝えてくる娘だ。こうされると何か強く怒れなくなるんだよな……

「貴女、この男に無茶なことを強要されてはいない？ 何かあったらすぐに言いなさい」

「酷いな、おハナさん……そんなことしてないって。な、テウス？」

「はい！ トレーナーさんは他の娘たちとのトレーニングメニューを考えてくれたり、私が無茶しないように見張ってくれたり、とても頼りになるんですよ！ その日のトレーニングに応じた食事メニューとかも考えてくれて、お世話になりっぱなしなんです！」

テウスがすごく嬉しそうに、無邪気に語る姿を見て、おハナさんが肩から力を抜いて柔らかめの雰囲気を出したのがわかる。結構な勢いで褒められて俺も少し恥ずかしくなって、頬を掻く。

「それにトレーニングした後はいつも私が無茶してないか、消耗してないかを確かめるために脚とか、背中や腰とかを触診してくれるんです。声を掛けられる前に触られることもあるのは少しびっくりしちゃいますけど……」

テウスのその発言で、おハナさんが出していた柔らかい空気が一瞬で凍り付く。

「貴方……いきなりウマ娘の身体を触るなって何度も何度も、何度も言っているわよね？」

おハナさんがこちらを睨んでくる。その振り上げた手はどうする

つもりなんですかね……？

その後、すっかり日の沈んだトレーニング用コースにバチインと一発の大きな音が鳴り響いたのだった。

第九話 ヴィクトリアマイル

私たちチームスピカのメンバーは春の府中、東京レース場に集まっていた。

今日はスズカ先輩の日本でのレースの復帰初戦、GI、ヴィクトリアマイルである。

「スズカさんのレース、楽しみです！」

「うん、ボクも楽しみ。日本でのレースを見るのはひつきしぶりだからねー」

「ですがスズカ先輩はアメリカでは殆どダートを走っていたのですよね？ 日本の芝の感覚を忘れていないと良いのですが……」

「スズカなら余裕だろー。なあなあトレーナー、焼きそば売ってきていい？」

「頼むから後にくれ……」

後ろで先輩たちがフリーダムな会話を繰り広げているのを横目に、パドック入りを待つ。

「東京レース場か……来週にはアタシが、再来週にはウオツカがここで走るのよね……」

「ああ、ワクワクするぜ……スカレット、風邪引いて走れなくなったりすんなよ?」

「うるさいわね! アンタこそ気を付けなさいよね!」

私の両脇ではスカレット先輩とウオツカ先輩が楽しそうに喧嘩をしている。仲が良いのは良いことなのだが、私を挟んで喧嘩しないでほしい。

スカレット先輩とウオツカ先輩は既に桜花賞で二度目の戦いを終えており、1と1/2バ身差でスカレット先輩が勝利している。一度目の戦いで雪辱を果たした感じだ。

私はその頃は丁度ライブのレッスンをしていて、阪神レース場には行けなかったのだが、テイオー先輩と一緒にタブレットで観戦していた。

GIのレースはタブレットで見ても迫力がすごくてつい応援に熱が入ってしまい、ゴールの瞬間にはテイオー先輩に抱き着いてしまったほどだ。

テイオー先輩は笑って許してくれたが、暫く顔が見れなかったくらいには恥ずかしかった。

スカレット先輩は来週のオークス、ウオツカ先輩は再来週のダービーを目指しているため、次に二人が当たるのは秋華賞か、その前のローズステークスあたりだろう。

今度はちゃんと現地に応援に行きたいと思っている。

『さあ、春のマイル女王決定戦！ 東京レース場、第11レース。ヴィクトリアマイル。注目のパドックです。18人のウマ娘たちを紹介しましょう』

話しているうちに、ついにパドック入りが始まる。スズカ先輩は3枠6番での出走だ。

スズカ先輩以外で注目なのは、3枠5番のノースフライト先輩と、1枠2番のサクラバクシンオー先輩だろうか。

ノースフライト先輩は真ん中に穴を開けた海老色のかわいいカクテルハットを左耳に通して被っている鹿毛のウマ娘で、中団あたりから余裕をもって抜け出して行く、好位追走を得意とするウマ娘だ。勝負服は羽を連想させる衣装が特徴的なドレス風衣装。後ろから見ると結構露出度高めな気がする。

マイル戦を得意とするウマ娘で、一着となったレースはその全てがマイル戦。マイルの女王と呼ばれており、今期のマイル戦を引っ張っていくであろうと言われているウマ娘だ。

サクラバクシンオー先輩は右耳にシユシユみたいな耳飾りを付けている鹿毛のウマ娘で、主に短距離戦を得意としている。彼女も好位追走を得意とするウマ娘だ。先行から逃げ、といった感じの脚質とといったところだろうか。

スプリントの王者、驀進王とまで言われるほどのスプリンターであり、ここまで短距離においては10戦9勝、唯一の負けもGIスプリ

ンターズステークスで4着と好走している。

マイル戦において勝ちに恵まれていないが、実力は十分だろう。

『3枠6番、サイレンススズカ！ アメリカからの遠征を終え、府中に舞い戻りました。本日、圧倒的一番人気となっています』

『アメリカでは主にダートを走っていたようですが、それでも凄い人気です。遠征帰りの疲れも見えませんが、仕上がりは完璧に見えますね。今日は彼女の得意とする左回りですし、この人気も納得ですね』

スズカ先輩の番になると、一段と大きな歓声が上がる。正面をしつかり向いて胸のあたりで一回拳を握る。スズカ先輩の調子がいいときにやるポーズだ。仕上がりはばっちりらしい。

スズカ先輩と会うのは一週間ぶりだった。昨日まではレースでの調整があつて、私と二人にすると勝手に走り出して調整どころではなくなるからとトレーナーさんから接触禁止令が出ていたのだ。

結構不満だったのだが、トレーナーさんの言っていることは全面的に正しいと思つたので我慢した。その代わりに明日は一日併走してくれる予定だ。

パドックが終わり、一度スズカ先輩がこちらに戻ってくる。スズカ先輩は穏やかな笑みを浮かべていて、リラックスしているようだ。

「スズカ先輩、お疲れ様です。今日は頑張ってくださいね」

「ええ、ありがとう。テウスちゃん。駆け抜けてくるわね」

「スズカさん、頑張ってください！ あ、レース前に人参焼き食べますか？」

「スペちゃん、大丈夫よ。それはスペちゃんが食べて」

私の労いに笑顔で応えてくれた後、スペ先輩が差し出した人参焼きを丁寧に断っている。ドリンク程度ならともかく、レース前に食事するのはスペ先輩くらいなものだと思ふのだが……

そうして少し話した後、地下バ道までスズカ先輩を見送りに行く。トレーナーさんが一言二言、スズカ先輩に言葉を掛けた後、スズカ先輩は行ってきます、と一言だけ私たちに言い、笑顔でコースへと駆け出して行った。

【サクラバクシンオーSide】

今日は待ちに待ったヴィクトリアマイル!! 今日は何と! あの
スズカさんが出走するのです!

ノースフライトさんも手強いライバルですが、一番の強敵はスズカ
さんでしょう!

ノースフライトさんもそう思っているのか、スズカさんをずっと見
ています。このレースはどれだけスズカさんについていけるか。そ
れが勝負の分かれ目となるでしょう!

つまりは、バクシン! 正々堂々、私の全ての力でバクシンすれば
良いのです!

「スズカさんッ!! この『ヴィクトリアマイル』、私は正々堂々とバク
シンし、貴方に勝利することを誓いますッ!!」

というわけなので、スズカさんに関白宣言をしておくことにしま
しょう!!

「え? ……ええ、でも、私は絶対に先頭は譲らないわ。たとえ、誰が
相手であつても」

スズカさんも戦意バツチリのようです! これは学級委員長とし
て、絶対に負けられませんね! バクシンにバクシンを重ねて、バク
シンせねばなりません!

スズカさんに宣言をし終えたタイミングで、ファンファーレが鳴り
響きました。ようやく出走のようです。私たちはゲートに入ります。
流石に皆さん慣れたもので、スムーズにゲート入りしていますね。
うんうん、とても良いことです!

『女神見守る府中に天使が舞い降りる! ヴィクトリアに見染められ
たものが勝者となる!』

『三番人気のウマ娘はこの娘です、サクラバクシンオー』

今日の私は三番人気です。ですが構いません。何故なら、最後までバクシンしたものが勝者だからです！

『二番人気を紹介しましょう、ノースフライト』

ノースフライトさんは二番人気、流石はマイルの女王です！

『スタンドに押し掛けたファンの期待を一身に背負って、グランプリウマ娘、サイレンススズカ。一番人気です』

そして一番人気はスズカさん！ 異次元の逃亡者、その実力は確かです！ 故に！ 私はいつも以上にバクシンします！

ググつと身構えてスタートの準備をします。いざ、バクシン！

『各ウマ娘、ゲートに入って体勢整いました。そして今……スタートしました！』

ゲートが開き、私はスタートを切りました。今までで一番良いスタートが切れたでしょう！

ですが、スズカさんは私より前に居ます。スタートの技術、その後の加速、どれをとってもやはり一流です。私は彼女の後ろ、二番手に付けて機会をうかがいます。

私の後ろにはノースフライトさんが居て追走してきています。彼女も良いバクシンですね！

『スローペースになることが多いこの東京レース場芝1600、今日は圧倒的ハイペースで進んでいます！ 何とテンの3ハロン、33.7秒だ！ サイレンススズカ、ぐんぐんと後続を突き放していきます！』

何という速さでしょう！ スズカさんは私をぐんぐんと突き放していきます！

まるで短距離を走っているようです！ このまま突き放されてはいけない、私はそう思ってペースを上げます。何としてでも食らいついていかねば！

『負けじとサクラバクシンオー、ノースフライトもペースを上げていきます。今1000mを通過して、1000m通過タイムは56.5！ コーナーと上り坂で少しペースが落ちましたが、何というハイペースだ！ これは短距離レースか!?!』

去年走ったスプリンターズステークスと同じくらいのペースで走っている気がします。

こんなペースでは私の脚も持ちません。

ですが！ 委員長たるもの最後までバクシンせねばなりません！根性を振り絞って第4コーナーを越え、最後の直線に入ります。最後の直線の途中も緩やかに上っていますが、諦めなければきつと追いつけます！

脚に力を入れ、スパートの体勢に入ります。残っている脚を全部使うつもりで、一気に加速していきます。ノースフライトさんも負けじと加速して、私に並びかけてきます。

——ですが、スズカさんは左足をぐつと踏み込むと、そこから更に伸びていき、私たちを突き放しました。

これが噂に聞く、逃げて差す脚。異次元の逃亡者と言われる所以となった、異次元の逃げ足ですか！

必死に追いつがろうとする私もノースフライトさんも全く追いつけず、7バ身、8バ身とぐんぐん引き離されていきます。

『サイレンスズカ、これは余裕の走りだ！ 2番手との差は縮まらず、いやさらに引き離していく！ これが世界の實力！ これが異次元の逃亡者だ！』

何という速さ！ 何というバクシンでしょう！ これが、サイレンスズカ——！

『大楽勝だ、サイレンスズカ！ 後ろを突き放して、大差でゴールイン！ マイル戦で大差勝利！ 圧倒的な實力差でレースを制しました！ 勝ち時計は1:29.0、掲示板にはレコードの4文字が輝いています！ 2着はノースフライト、3着はサクラバクシンオーが入りました！』

私は脚を使い果たしてしまい、上り坂でノースフライトさんに抜かれてしまいました。ですがマイルでの自己ベストでしょう。そう思えるくらい、今までで最高のバクシン具合でした。

ですが私は3着。つまりはバクシン度合いで、私はスズカさんにもノースフライトさんにも負けてしまったのです。これは鍛えなおす

必要がありますね！

『鎧を削る熱い戦いを制し、見事女王の戴冠を受けたのはサイレンススズカ！ スタンドを揺らすほどの大歓声が鳴り響いています！』

スタンドからの大きな祝福がスズカさんに鳴り響いています。ですが彼女はゴールしたことに気付いていなかったのか、400mほどは全力で走っていました。暫くして辺りを見回すと気付いたのか、観客席に向けて小さく手を振っていました。

スズカさんのあまりの速さに、そしてそのスタミナに悔しさよりも先に恐ろしいと思います。ですがそれ以上の尊敬を、私は抱いていません。

彼女こそ世界最強のウマ娘だ。そう思える何かがスズカさんにはありました。

今回は完敗でした。ですが！ 次は必ず勝って見せます！ その為に、明日の為にこれからさらにバクシンしていきましよう！

第十話 レースプランと超光速の（マッド）サイエンティスト

スズカさんのヴィクトリアマイルが終わって数日。疲れを抜く程度に軽く併走をしたりして楽しく過ごしていたところ、トレーナーさんに呼び出された。

7月から始まるジュニア級のレースにおけるレースプランを考えるそうで、希望があれば紙に書いて提出してくれと言われたので現在、レース一覧を見ながら部室で机に向かっていているところだ。

4月に早期デビューを果たしたとはいえ、ジュニア級のウマ娘が出るOP以上のレースは7月後半からしかない。中距離に至っては10月2日の中山で行われる芙蓉ステークスが最初だ。流石にそこまでは我慢できないので、マイル戦にも出走することになるだろう。まずはメモ用紙に、マイル以上の距離の芝のレースを片っ端から書き上げていく。

7月31日中京ジュニアステークス、中京1600。

8月14日コスモス賞、札幌1800。

8月22日クローバー賞、札幌1500。

8月29日GⅢ新潟ジュニアステークス、新潟1800。

9月4日GⅢ札幌ジュニアステークス、札幌1800。

9月11日アスター賞、中山1600。

9月25日野路菊ステークス、阪神1800。

10月2日芙蓉ステークス、中山2000。

10月3日サフラン賞、中山1600。

10月9日GⅢサウジアラビアロイヤルカップ、東京1600。

10月16日紫菊賞、京都2000。

10月23日アイビスステークス、東京1800。

10月30日GⅢアルテミスステークス、東京1600。萩ステークス、京都1800。

11月6日きんもくせい特別、福島1800。

11月7日百日草特別、東京2000。

11月13日GⅡデイリー杯ジュニアステークス、京都1600。

11月14日黄菊賞、京都2000。

11月20日GⅢ東京スポーツ杯ジュニアステークス、東京1800。

0。

11月21日赤松賞、東京1600。

11月27日京都ジュニアステークス、京都2000。

11月28日白菊賞、京都1600。ベゴニア賞、東京1600。

12月4日葉牡丹賞、中山2000。

12月5日こうやまき賞、中京1600。

12月11日エリカ賞、阪神2000。

12月12日GⅠ阪神ジュベナイルフィリーズ、阪神1600。

12月18日ひいらぎ賞、中山1600。

12月19日GⅠ朝日杯フューチュリティステークス、阪神1600。

0。

12月26日千両賞、阪神1600。

12月28日ホープフルステークス、中山2000。

計31のレースが存在する。まあまあ多い…のかな？ 連戦になるところは移動が厳しいかもしれないけれど、新幹線を使えば東京―福島や中山―阪神間程度なら問題ないだろう。流石に同日中のレースに出るのは物理的に無理なので、10月30日は距離が長い萩ステークスに、11月28日は移動が楽な白菊賞にして、ジュニア級はこの29レースに出よう。

ダートも走るならもう少し選択肢は増えるが、あまり欲張りすぎてもいけないし、このくらいで我慢しよう、うん。

出るレースを決めて紙に書き連ねていく。1枚の用紙には5つしか書く欄がなくて書き切れなかったので、計6枚の用紙に書くことになった。

よし、書きあがった。後はこれをトレーナーさんに提出するだけだ。トレーナーさんは少し席を外してくると言っていたので、もうそ

ろそろ帰ってくるだろう。

「テウスー。入るぞー？ 大丈夫か？」

3分程度待っていると部室の扉の向こうから声が聞こえてくる。トレーナーさんは部室に入る際必ずノックして声掛けをする。何でも以前マックイーン先輩やスカレット先輩が着替えているところに入りかけてしまったらしく、それはもう徹底的にボコボコにされたそう。

ウマ娘の力でボコボコにされて生きているトレーナーさんは本当に人間なんだろうか……？

「はい、大丈夫ですよ。希望も書き終えました。確認お願いします」

トレーナーさん入室しても大丈夫だと言って招き入れると、書き終わった希望用紙を手渡す。

「おー、どれどれ……？ テウス、レース一覧を書いてほしいんじゃないよ、出たいレースを書いてほしかったんだが……？」

「？ だから、出たいレースを書きましたよ？」

二人して首を傾げる。おかしい、何か間違っただろうか？

「……ま、待てテウス。これ全部に出たいのか？ 一部だけじゃなくて？」

トレーナーさんが焦ったようにこちらに確認してくる。何を当たり前のことを聞いてきているのだろうか。

「ええ、そうですよ。トレーナーさんも言っていたじゃないですか。私が毎週でもレースに出たいって言ったら、その意気で頑張れって」

「確かに言ったけどな……それは言葉の綾ってもんだ。流石に物には限度があるだろう？」

「トレーナーさんに迷惑はかけません。遠征も一人で行きますし、交通手段の手配とかも自分でしますから。だから私に走らせてください。お願いします」

トレーナーさんが否定的なのを感じ取って、何とか認めてもらおうと頼み込む。おじいちゃんが中央のトレーナーライセンスを持っていて、現場を離れて久しいがまだ更新しているそうだし、最悪付き添いをお願いすればいいだろう。

「そうはいってもなあ……まあ、お前の丈夫さならいける、か？ わかった。お前がそこまで言うなら、何とか調整はしてみるが……約束はできないし、多分理事長とかから聞き取りが入るぞ？ 俺からも説明はするけど、自分でも説明しろよ？」

「はい！ ありがとうございます！ それじゃ、自主トレしてきますね！ 今日はジムでウエイトトレーニングしてきます。終了時間はいつも通りですから、よろしくお願いします！」

「ああうん……行ってこい。水分補給とかはちゃんとしろよ！」

トレーナーさんにお礼を言つて自主トレしにジムへ向かう。もうこのやり取りも慣れたもので、大体の自主トレメニューもわかりきっている。ジムには専門のコーチもいて、トレーナーさんの手を煩わせることも少ないので、最近のお気に入りだ。

レースの予定も決まりご機嫌で鼻歌を歌いつつジムへ向かっていると、スカーレット先輩に会う。荷物をたくさん持ってどこかへ向かっているようだ。

「スカーレット先輩、お手伝いしますよ。何処に運ばいいですか？」
あまり重くはなさそうだったが、結構荷物が多くて運び辛そうだったので手伝いを申し出る。

「ありがとテウス。助かるわ。タキオンさんのところに行くんだけど、お願いできる？」

「はい、お任せください。あ、でも、場所がわからないので、後をついていきますね」

タキオンさん、とは誰の事だろう？ 何処かで聞いた覚えもあるが、馴染みのない名前だ。

向かう道中で件のタキオンさんについてスカーレット先輩に聞いてみた。

入学当初から親切にしてくれている先輩だそうで、目の疲れに効くサプリメントをくれたりしたらしい。トレーニングだけでも大変なはずなのに、ウマ娘の身体についてのことを研究していたりしてとて

も尊敬できる先輩、だそうだ。

「でも他のウマ娘たちは、タキオンさんの事を危ない薬を作る危険人物だとかなんだとか言ってるの。とつても失礼よね。タキオンさんがそんなことするわけないじゃない！ 許せないわー！」

スカーレット先輩の態度からは全幅の信頼が見て取れて、タキオン先輩がとても良いウマ娘であることがわかる。スカーレット先輩がここまで信頼している人だ。きつととても真面目でまっすぐなウマ娘なんだろう。

「そのタキオン先輩つてすごいウマ娘なんですネ。私もお会いするのが楽しみです」

「きつとテウスとも気が合うと思うわ。あ、ここがタキオンさんの研究室よ。タキオンさん、学園に研究成果が認められて、専用の研究室を持つてるの！ 凄いわよね。タキオンさん、荷物もつてきましたー。入りますねー」

どうやらタキオン先輩は学園の一角に専用の研究室を構えているようだ。ちよつと厚めの金属扉が構えられていて、周りの部屋とは全く違う雰囲気醸し出している。

「お邪魔します……わ、凄い設備……」

スカーレット先輩が扉を開けて中に入っていくのに続いて、私も入っていく。中は何だかよくわからない機械とか、理科の実験で使ったことのあるフラスコや試験管とかが並べられている。

「ああ、ありがとう。スカーレット君。うん？ 君は……？」

制服の上に白衣を着た栗毛のふわふわなショートヘアのウマ娘がこちらを見つめてくる。何だか目に光がないような……？

「あ、えつと……ブラックプロテウスです。スカーレット先輩のチームの後輩です。一緒に荷物を運びに来ました」

「ああ、君がああブラックプロテウス君か。私はアグネスタキオン。宜しくお願いするよ」

何かこちらをロックオンしたような目つきで見られている気がする。それに、あのとはどういう意味だろうか。

「君のトレーニング風景は何度か見させてもらっていてね。君の肉体

の頑健性にはとても興味があるんだ。どうだい？ ウマ娘の肉体の神秘を解明するために、私のモルモットになって私に協力してはくれないかい？」

「どうやらトレーニングを見られていたらしい。何やら不穏なルビが振られているような気もするが……」

「はい、わかりました。是非ご協力させてください。ただ、お役に立てるかはわかりませんが……」

スカレット先輩が信頼している先輩だ。悪いようにはならないだろう。二つ返事で了承する。ただ、言葉の通り役に立てるかはわからない。

何せ私の身体の頑丈さは誰に与えられたかもわからないような特典によるものだし、調べてもわからなかったものだから、タキオン先輩にもわからないんじゃないかと思う。

「そうか！ ではこの薬を飲んで、そこに横になってくれるかな？」

機材を準備しよう。ああ、スカレット君もありがとう。荷物はそこに置いておいてくれ」

「はい、わかりました。あ、何かお手伝いできることはありませんか？」

「ではお言葉に甘えて、準備を手伝ってもらおうかな。これをプロテウス君の手首と足首に付けてくれ。ああ、プロテウス君。薬を飲む前に服を脱いで肌着になつてくれるかな？」

「はい、わかりまし……えええい!」

スカレット先輩に機材を手渡しつつ、流れでとんでもないことを言われる。いや、変な意味はないんだろうけど！

「正確なデータを取るためには必要なことだ。出来れば全裸になつてほしいが、流石に抵抗があるだろう？」

「ま、まあそうですね……全裸よりはマシ、ですかね……うう、恥ずかしいんですけど……」

協力するといった手前、抵抗し辛い。病院とかで着る検査着とかであればまだマシなのだが、肌着だけとなるとやはり恥ずかしい。

言われた通り肌着姿になって、身長体重からスリーサイズ、手足の長さまで測定されたのちに、薬を飲んでからベッドに寝る。測定中の

出来事は語りたくない。タキオン先輩は私の身体を触りつつ「良い筋肉だねえ」とか言っていたが、半分以上耳に入ってこなかった。

両側の手首足首に何か端子の様な物を付けられて、何かのデータを測定される。心電図か何かだろうか……？　今までされたことのないような検査である。レントゲンとかの設備は流石に無いようだし、ここでの検査は結構初めてのものが多い。

「ふむふむ……なるほど。興味深いデータだ……つまりはこういうことか……」

ぶつぶつと言いながら何かデータを紙に書き写している。スカレット先輩は気になったのか後ろから何を書いているのか覗いているが、よくわからなかったようで首を傾げている。私も気になるので、ちよつと聞いてみよう。

「何かわかりましたか？」

「うん、そうだね。君の測定したデータを見るに、数値的にはごくごく普通のウマ娘と同じだ。だが、異常に疲労からの回復力が高い。先ほど飲ませた薬はおよそ2000mを走ると同じ程度の疲労を身体に蓄積させるものだが、今疲労は感じていないだろうか？」

「そ、そんな薬だったんですか……飲んだ瞬間は少し体が重くなった気がしましたが、確かに今は何ともないですね」

「つまり、君が長くトレーニングを出来る事の要因はその回復力にあると見える。まあ、その様子を見るに君自身自覚しているようだが。後は触った感じ随分骨格がしっかりしているね。君の高い耐久性はそこから来ているのかもしれない。それ以外のことについてはまだわからない。今後も調べていく必要があるだろうね」

検査した結果を述べられる。まあ、大体予想通りの結果である。ただ、この短時間でそこまでわかるのはすごいと思う。何せ病院の先生たちはほぼお手上げ状態だったからだ。タキオン先輩はスカレット先輩が尊敬するだけあって、やはりかなりのやり手なのだろう。

「さ、検査は終わりだ。起き上がっていい。お礼に紅茶でも淹れよう」
手足から端子の様なものを外され、解放される。すぐに服を着て、スカレット先輩に労ってもらいながら、タキオン先輩が紅茶を淹れ

てくれるのを待つ。

「そういえばタキオンさん。今日持ってきた荷物って何なんですか？」

「ああ、(フィクションに影響されて)アメリカで開発されたトレーニング用のギプス。胴体から腕や脚に繋がる特殊バンドの負荷で全身を鍛えるギプスで、本来は人間用に開発されたものを、特別にウマ娘用に負荷を上げたものだ。筋力増強用に作ってみたんだが……着けてみるかい？」

「いいんですか!?! ありがとうございます!」

スカレット先輩が荷物の中身を受け取って、物陰で着替え始める。

「着けた上から服を着ても問題ないようになってるし、音も少ないはず。ただ……」

「た、タキオンさん! み、身動きが取れませえん!」

「負荷が強すぎて、ウマ娘でも動けなくなる可能性が……遅かったか! どうやら大分負荷が強いようで、スカレット先輩でも身動きが取れないほどらしい。物陰で動けなくなったらしく、情けない声で助けを求めてくる。」

タキオン先輩が救出しに行つて、へ口へ口になったスカレット先輩を連れて戻ってきた。

「発注を失敗してしまったみたいだねえ……GIウマ娘でも動けないとなると、着けられる者は相当限られるな……プロテウス君。君も着けてみてくれないかね?」

「え、っ!?! わ、私もですか……? わ、わかりました……」

こつちに飛び火してきた。パワーにはそれなりに自信があるが、スカレット先輩でも動けなくなるようなものを着けて動けるんだろうか……?

受け取って装着してみる。着け方自体は結構簡単で、一人で着ることはできそう。ウマ娘用に改良されているので、胸が圧迫されたりするようなこともない。スカレット先輩が着れた時点でそここのころは心配していなかったが。

全身に装着し終わって、少し動いてみる。凄まじい負荷で、全力で動かないとバンドの戻る力に負けて身動きが取れなくなりそうだ。

「き、きつついです……動けなくはないですけど……」

つい弱音を吐いてしまう。この負荷は流石にきつい。日常生活程度なら送れるだろうけど……

「ほう……動けるのか。これを着て動けるのはブライアン君とかオグリキャップ君くらいなものだと思っていたが……ふむ、プロテウス君。暫くそれを着けてトレーニングしてはくれないか？」

「む、無理ですよ！ 歩くのだけで精一杯です！」

「……それを着てトレーニングしたら凄く鍛えられると思わないかい？ 今まで以上のハードトレーニングが出来るようになると思うよ？」

……途轍もなく魅力的な提案だ。確かにこれを着けてトレーニングできるなら今まで以上に楽しいトレーニングが出来そうだ。見た目的には軽いトレーニングに見えるし、トレーナーさんがまた面談に呼ばれるようなこともなくなるだろう。

「まあ、まずは数日試しにと思つて。使用感を聞かせてくれるだけでいい。そのギプスは君に差し上げよう」

「うう……わ、わかりました。じゃあ、数日だけ……」

結果魅力に負けてしまい、ギプスを貰ってしまう。暫くはこのギプスと格闘することになりそうだ……

第十一話 プラン決定とグラスワンダーとの交流

〔トレーナーSide〕

昨日貰った出走レース希望の用紙を何とか朝までに纏め上げた。中五日空けなければいけないのを昨日説明するのを忘れていたのでその部分を省いたり、あとはテウスの納得するくらいのレース量になるように調整したり……まあ、それでも20戦とかになりそうなので、十分異常なんだが……

流石にジュニア級で20戦なんてしようとしたら色々面倒なことになりそうだ。何とかテウスの調子を下げないようにしつつもちよい減らせればいいんだが……

頭を悩ませつつ、部屋までたどり着く。現在の時刻は5時半だ。部屋には明かりがついている。相変わらずテウスは早いな……いつも掃除とかを任せきりで、たまには労いにスイーツでも奢ってやるべきだろうか。マックイーンならこれで喜ぶんだがテウスは喜ぶか？大抵のウマ娘は甘いものが好きなので大丈夫だと思うが……

「テウス、入るぞ？ 今大丈夫か？」

扉をノックして、伺いを立てる。以前マックイーンとスカーレットの着替え中に入っちまった時は酷い目にあったからな……よく生きてたもんだ……

「あ……はい、大丈夫です……」

返ってくる声に元気がない。中に入ってテウスの顔を見ると、少し浮かない顔をしている。テウスにしては珍しい。こいつはいつも明るくて、感情によってところどころ表情が変わる子だが、今までこんな顔は見たことがなかった。

「どうした。何かあったのか？ 何処か痛めたりとか……」

「あ、いえ……身体の調子は万全なんですけど……その、昨日はすみませんでした」

「いきなりどうした？ まあまず座れ。コーヒーでも淹れてやるから」

いきなり深く頭を下げてくるテウスを制して、椅子に座らせる。テウスはコーヒーはブラックでも甘くしても飲めるので、ひとまずブラックで出しておけばいい。甘くしたかったら自分で甘くするだろう。

「ありがとうございます……その、昨日の件、お母さんに話して……あ、私、毎日お母さんに電話して、その日あったことを話すんですけど、レースプランの件を話したらお母さんに怒られて……その、流石に非常識だって……」

どうやら昨日のことで母親に怒られたらしく、そのことで凹んでいるらしい。

「ああ……確かに常識外れではあるなあ。今日改めて話そうと思っていたんだが……」

「すみません……昨日も忠告していただいていたのに、私、ちよつと調子に乗っていたみたいです……」

これは大分絞られたようだな……今までに見たことがないくらいしおらしくなっている。厳しい母親のようだな……

「まあ、気にするな。それで、レースプランだが……どうする？ 昨日

言ったように沢山走ってもいいぞ。そのあたりは何とかしてやる。

まあ、全部が全部希望通り、というわけにはいかないだろうが……」

「その事なんですけど……やっぱり、中距離だけに絞ろうかなって。お母さんに言われたんです。『100%の力を出し切れないのは構いません。ですが事前に100%の力を出せないとわかっているレースに出るのは、土道不覚悟。レース相手に失礼ですし、何よりこの母が許しません』って……」

「それはまたグラスワンダーみたいな母親だな……確かテウスの母親は未出走だったか？」

「はい。お母さんはちよつと脚が弱くて、70%くらいの力しか出せなかったみたいなんです。それでも周りよりは速かったそうなんですけど、自分が許せなかったからレースには一切出なかったって……」

プライドが随分高い人のようだ。やっぱりグラスワンダーと会わ

せたら意気投合するんじゃないか？

「それじゃあ2000mのレースだけにするとして……芙蓉ステークス、紫菊賞、百日草特別、黄菊賞、京都ジュニアステークス、葉牡丹賞、エリカ賞、ホープフルステークス。この8つにするか？ それでもちよつと多いと思うが……」

「私だと加減がわからないので、トレーナーさんに全てお任せしようかなって……あ、でも、ホープフルステークスだけは絶対に走りたいです」

「そうか？ そうだな。テウスの調子を見つつ調整していこう。最低でも4戦くらいはしておきたいから、ホープフルステークス含めてそのくらいは走ろうか。10月まで結構期間が空くが、その分調整期間が取れるし、まあ悪いことじゃないだろう」

「はい。わかりました……その、ご迷惑をおかけしてすみません……いつもいつも迷惑かけてばかりで……」

大分調子が下がり気味だな。少しフォローしておいた方がいいか……

「大丈夫だって。テウスはもつと甘えてくれてもいいくらいだぞ？

ゴルシを見る。出会い頭にドロップキックしてくるウマ娘はあいっくくらいだぞ」

「ゴルシ先輩と比べられるのはちよつと……でも、わかりました。もうちよつと甘えてみるようにします」

「おう、そうしてくれ。お前はまだまだ子供なんだから、迷惑を掛けるくらいで丁度いいんだよ」

優しく頭を撫でてやる。チームスピカのメンバーでは結構しつかりしている方だと思っていたが、やっぱりまだまだ子供だな。まあ、去年までランドセル背負ってたんだよな、こいつは……もう少し心を許してくれるといいんだけどな。

いや、しつかりしてるか？ こないだウオツカをグルグル振り回して吐かせそうになっていたりしたあたり普段の行動も子供っぽい気がしてきたぞ？

「ありがとうございます……よしっ、気分を入れ替えてトレーニング

してきます！　でも、今日はコース5周くらいの流す程度にしますね」

「いやそれは流す程度とは言わないぞ？　まあいいか、行ってこい。でも、身体に何か不調を感じたらすぐ戻ってくるぞー！」

「はいー！」

勢いよく部室を飛び出していく。ちよつと動きがいつもより鈍い気がするが……まあ、無茶はしないだろう。

さて、俺も仕事しますかね……マックイーンのリハビリメニューと、テイオーとスズカの調整メニュー。後はスカーレットとウオツカの追い切りと、スぺのダイエツトメニューか……ゴルシ？　あいつは自分の興味があることしかやらないからな……真面目にやるときはやってくれるんだが。

そろそろサブトレーナーでも迎えるべきだろうか。一人では手が回らなくなってきた。テウスはあまり手がかからないと思っていたが、そうでもなさそうだしな……ちゃんと全部相談してくれるあたりマシンなんだが、内容が内容だけに頭や胃が痛くなる。

仕事用のパソコンに向かいつつ頭を悩ませていると、扉がノックされる。

「はいはい、入っていいぞー。ん、お前は……」

開いた扉の先には、目にハイライトのない栗毛のふわふわなショートヘアのウマ娘が居た。

「やあ、スピカのトレーナー君。少し話があつてね。こんな朝早くから失礼するよ」

そう言つて部室の中にズカズカと入ってくるウマ娘、アグネスタキオンと俺は話をする事になるのだった。

【ブラックプロテウスSide】

午後の授業も終わり、放課後。午後から天気が崩れてしまつて、今

日のトレーニングはお休みである。ジムやプールを使おうと思ったのだが、使用予約が埋まってしまっていて使えなかったので、カフェテラスを使って勉強タイムだ。

私はまあまあ勉強ができる方なのだが、一つだけ出来ない科目がある。英語である。

何がわからないのかわからないくらい英語が苦手なのだ。ごくごく簡単な単語程度ならわかるのだが、文章になるともうダメで、赤字ギリギリである。その為英語を集中して勉強しているのだが……

「……それで、ここはこうなつて、この単語はこういう意味になるんですよ〜」

今日とはある先輩に教えてもらっている。栗毛のウマ娘で、以前私に殺気を浴びせられたウマ娘、グラスワンダー先輩である。グラス先輩はアメリカ生まれの帰国子女で、当然英語もペラペラである。国語に関して正直スベ先輩よりよっぽど出来るくらいのハイスペックなウマ娘だ。

テイオー先輩やマツクイーン先輩も頭が良いのだが、英語に関してはグラス先輩が一番教え方が上手い。覚えるまでずっと問題を出してくるが、数をこなすのは得意である。

「なるほど！ つまりはこうなるんですね！」

「そうそう、当たりですよ。随分英語がわかるようになってきましたね。今日はここまでにしましょうか」

「グラス先輩のおかげです、ありがとうございます！ あ、この間食堂で借りたハンカチ、そういえばまだ返してませんでしたね。明日返しますね」

食堂でご飯を一緒にしたときにハンカチを借りたのを思い出した。出会った当初の殺気は何だったのかと思うくらい優しくしてくれた。本当にあれは何だったんだろう……

「そんなに焦らなくてもいいですよ。あ、でも、テウスちゃん栗東寮でしたよね？ 少し栗東寮に用事があったので、どうせなら今から一緒にしましょう」

「わかりました、一緒に行きましょうか。誰かと寮に帰るのは久しぶ

りです。同室の娘が居ないからちよつと寂しくって」

一人で部屋を広々使えて最初は嬉しかったのだが、今は寂しさの方が強い。寮長に話してはいるのだが、一人なのが今は丁度私だけのようで、転入生が入ってくるのを待っている状態だ。

「ふふ、私でよければいつでもご一緒しますよ。帰るときは気軽に声を掛けてくださいね」

傘を差しながら寮へ歩いていく。寮は道路を挟んで学園の真向かいにあるので、すぐ着くのだが。

寮に入って自室へ向かう。トレーナーさんは立ち入り禁止だが、ウマ娘に関しては寮が違っても特に制限はない。

私の部屋は一階なのですぐに着いた。角部屋なのも結構気に入っている。

「どうぞ、お上がりください」

自室のカギを開けてグラス先輩を部屋に招く。

「ふふ、お招きいただきありがとうございます。失礼いたします」

グラス先輩はとても礼儀正しい。本当に大和撫子！ って感じで、少し母の様な感じがして落ち着く。

「えっと。確かここに畳んで……ありました。ありがとうございます。お返しします」

きちんと洗ってアイロンまで掛けてある。返却するのには問題ないはずだ。

「どういたしまして。あら、これは……」

ハンカチを受け取ったグラス先輩が、私が趣味で壁に飾っていたとあるものに興味を示す。おじいちゃん……元トレーナーじゃない方のおじいちゃんの影響で集め始めたものだ。

「ええ、打刀です。おじいちゃんがレース勝利の記念につて、自分の集めているものの中から一振り、譲ってもらったんです」

そう、私の趣味とは刀を集めることである。おじいちゃんの蔵で見せてもらった刀がとても綺麗で、私も集めたいと親に我が儘を言ったものだ。

実家にいたときは模造刀しか集めるのを認めてくれなかつたけれど、寮住まいなら管理さえ気を付ければ問題ないだろう。ちゃんと登録証の管理もしているし、寮長にも話は通してある。

「そうなんですね……その、少し触ってみてもいいですか？」

「ええ、いいですよ。あ、刃は特に潰したりしてないので、もし抜くのなら気を付けてください」

「随分丁寧に手入れされていますね……」

「はい、おじいちゃんとおばあちゃんに刀の扱いは仕込まれたことがあるので！」

刀の手入れ方法は鍛冶師の父方のおじいちゃんに、刀の振り方は剣術道場を営んでいる母方のおばあちゃんに教えてもらったことがある。が、まだ一部分でしか褒められたことはない。ちなみに父方のおじいちゃんと母方のおばあちゃんは兄妹だ。つまりお父さんとお母さんはいとこ婚ということになる。

「ふふ、久しぶりに刀を振るいたくなってきました。薙刀以外にも剣術も一通り学んだことがあるんですよ」

グラス先輩はそういった日本の伝統文化が好きだと聞いたことがある。その好きが高じての事だろう。

「流石にここでは危ないので、外でなら問題ないと思います。ただ、畳表とかはないので試し切りはできないと思いますが……」

「そうですね。折角ですし少し素振りしてみましようか」

ちなみに私のトレーニングには素振りも含まれていたりする。真剣は結構重たいので筋トレにもなるのだ。ウマ娘には軽いがお腹周りの体幹が鍛えられたり、何よりメンタルトレーニングになる。

結局その日は門限まで一日、グラス先輩とお互いに型を見せつつ素振りをして過ごした。

しれない。メンタルトレーニング用と言って説得すれば作ってくれるかもしれない。

最悪レースで何回か勝って、その時の賞金を使って工事してもらえばいいだろう。メイクデビューの賞金もあるがほぼ丸々残っている。

ウマ娘のレース賞金は中央ではトレセン学園に60%、ウマ娘に30%、そしてトレナーさんに10%の割合で分配される。トレセン学園の割合が多いのは、それだけウマ娘の育成にお金がかかるからだ。学費だったり、食費だったり、トレーニング用の設備費だったりと上げていけばキリがない。他にもレースの放映権だったり、広告スポンサー費、グッズ販売益などのものからトレセン学園は運営されている。

ウマ娘2000人の食費だけでも相当なものだ。そこに人件費やら何やらなども加わっていくし、トレセン学園は試験に受かりさえすれば学費も入学金もかからない。地方では学費がかかったりするところもあるらしいが、中央に関しては入ってしまえば完全無料だ。まあ、入るのがかなりの難関ではあるのだが。

話を戻すと、メイクデビューに勝った私の賞金は700万円。そこから特別出走手当を含めた額が分配されて、税金が引かれて振り込まれたのが190万円くらいである。

去年までお年玉で多くて合計3万円くらい貰えれば嬉しかったくらいなのに、63倍くらいの収入である。私の通帳に6桁の金額なんて見たこともなかったのに、飛び越えて7桁が記帳されているのだ。思わず泣きそうになりながら親に電話したのも仕方がないと思う。

ただ、それが高すぎるとは思わない。何故なら私たちウマ娘は、常に命懸けで走っているからだ。私たちは命を削ってレースに出て、魂を燃やして走る。それに対する対価としては高すぎる金額でないと思っている。

そう考えるとトレナーさんにもかなりの額入っていると思うのだが、なんであの人はあんなに貧乏なのか……もしかしたら何かに使うために貯金しているのかもしれない。それでも桜花賞、ヴィクトリアマイル、オークス、日本ダービーで今年だけでも税金が引かれても

4000万円くらい入っていると思うんだけど……

トレーナーさん、事あるごとにチームの皆にご飯を奢っていたりするからなあ。テイオー先輩お気に入りのはちみー……はちみつドリンク一杯でも1000円する。はちみつレモンドリンクなら1500円、ローヤルゼリーなら10000円だ。ドリンクだけでそれくらいするのに、ウマ娘が満足する量の食事をポンポンと奢っていればそれだけお金も飛んでいくだろう。

かくいう私もメイクデビュー勝利後にはご飯に連れて行ってもらった。恥ずかしい話だが、私は結構食べる。どれくらいかというとスペ先輩と同じくらいは食べる。私はトレーニングとかで結構動くので、沢山食べないと身体が作れないのだ。

トレーナーさんのお財布を空っぽにするくらい食べてしまつて、非常に申し訳なかった。でも、美味しかったから仕方ないよね！

トレーニングを終えてシャワーを浴びて着替えをして、トレーナーさんのところへ向かう。今日は部室で何やら仕事をしているようなので部室に報告へ向かうと、先客がいた。

男性で、ご年配のベテラントレーナーさんだ。入部前に調べたことがある。確かチームアケルナーのトレーナーさんだと思う。

ここ数年は未勝利ばかりだが、かつてはGIウマ娘を輩出したこともある実績のあるトレーナーさんだったはずだ。

何を話しているのかが気になって、開けっ放しの扉の陰に隠れて聞き耳を立てる。ちよつとだけ離れているのだが、ウマ娘の聴力でなら問題なく聞き取れる。

「相変わらずウマ娘を放任して個々に任せきりで……ちゃんと指導もしないでトレーナーとして恥ずかしくないのか？」

……この人は何を言っているのだろうか？ トレーナーさんは確かに私たちの自主性に任せてくれるが、必要ならハードなメニューだつて組んでくれる。もしかしたら私たちよりレースに情熱的な人かもしれない。

上辺だけ見ればトモをいきなり触ってくるような変態なのかもし

れないが、私たちの夢を叶えるということが一番に考えてくれる、信頼できるトレーナーさんなのに。

「ははは、相変わらず手厳しいですね……でも、俺に出来るのはあいつらを信じてやることくらいですから」

トレーナーさんは苦笑いして受け流している。よく言われているのだろうか、妙に慣れた感じだ。

「ふん。そんなだからウマ娘たちに逃げられるんだ。ウマ娘の才能だけに頼って、きちんと指導しない。既に下地が出来ている名門のウマ娘だけを指導して、美味い汁を吸って……この出戻り野郎が。それにあれだけウマ娘に怪我をさせてまだのうのとトレーナーをやっていられるのが信じられん。ダイワ家やタニノ家のお嬢様を故障させる前にとつと辞めたらどうだ?」

あまりの言いように少しイラっとする。ミシリ、と扉から音がするくらいにちよつと力を込めてしまう。

「ははは……なるべく怪我をさせないよう気を遣ってはいるんですけどね」

「ふん。気を遣うくらいならさっさと辞めろ。お前のような奴はトレーナーに相応しくない」

そのセリフを聞いた時、手元からバキン、と音がした。手元を見てみると扉を砕いてしまっていた。力が籠りすぎたようだ。

その音でこちらに気付かれたのか、二人がこちらを見る。完全に気付かれてしまったのでトレーナーさんたちの前に出ていく。

「その、すみません。盗み聞きするつもりはなかったんですけど……」「テウス、いつから聞いて……いや、それはいい。今日のトレーニングは終わりか?」

「はい、この後は少し柔軟をして、部室の掃除をしてから帰ります」
ひとまずアケルナーのトレーナーさんは置いておいて、今日の報告を済ませる。

「ブラックプロテウス、だったか。メイクデビューを見た。随分無茶な走り方をする。あんな走り方じゃいつかサイレンススズカのように大怪我するぞ」

アケルナーのトレーナーさんが口を挟んでくる。内容自体はまともだと思うけど、ちよつと言いがきつい。

「ありがとうございます。ですがご心配には及びません。私に一番合った走りですし、トレーナーさんにも毎日見ていただいていますから」

「そのトレーナーが信頼できない奴だと言っているんだ。チームスピカは怪我が多すぎる。お前も潰されるぞ?」

「大丈夫ですから。自分の限界は弁えています」

大分しつこい。ちよつとイライラしてしまう。何とか笑みは崩さないようにして切り抜けようとする。

「ふん。まあこの出戻りトレーナーにはお前の様な無名の寒門の、ぽつと出ウマ娘が相応しいな。こいつに名門のウマ娘を任せると悉く壊しちまうからなあ? サイレンススズカやトウカイテイオー、メジロマツクイーンが可哀想だ。まあ、精々お前もこいつや先輩たちのようにポンコツにならないよう気を付けるんだな」

その言葉を聞いた瞬間、我慢の限界に達した。

【沖野トレーナーSide】

アケルナーのトレーナーが捨て台詞を吐いた瞬間、空気が凍り付くのを感じた。

普段穏やかで、ドーピング疑惑事件の時でも全く気にもしていなかったあのテウスが、耳を絞って床を脚でざりざりと搔いている。普段垂れ目で柔らかい雰囲気をするその目つきは、まるで拔身の刀のように鋭く、険しくなっている。

大変よろしくない状態だ。この仕草はウマ娘が共通で行うと言ってもいい、激怒の証である。

「そうですね、そうですね。チームアケルナーのトレーナーさん。そういうからには貴方のチームメンバーはエリート揃いで、さぞや研ぎ

澄まされた刀のようにキラキラとしているんでしょね」

表情は笑っている。笑っているのに、目つきが鋭いせいで全く穏やかな雰囲気ではない。

「ああ、そうだとも。俺が今後も指導を続けていけばGⅠ勝利は堅いだろうし、故障もさせない」

「……そんなエリートノウマ娘でも、この寒門のウマ娘より下ですよ？　だって、今の貴方の担当ウマ娘、一度も勝っていないでしょう？」

口調もいつも通りだ。だが、その内容は大変厳しい。本気で怒っているのか、いつもの様な穏やかさはなかった。

「なっ……ふん、一回まぐれ勝ちした程度のウマ娘が何を。あんな走り、俺が相手にしたらすぐに潰してやるさ」

「そうですね。なら試してみましよう。明日、模擬レースしましょうか。私一人と、貴方が担当するウマ娘全員で。距離もバ場もそちらの希望で構いませんよ」

「貴様……こちらを侮辱しているのか！　いい度胸だ！　そこまで言うなら明日、貴様の土俵で戦ってやろうじゃないか！　貴様がメイクデビューで走ったのと同じ芝の2000mで相手してやる！　だが、覚悟しておけ。明日、お前を負かした後ただじゃ済まさんぞ！」

「勿論、構いません。学園を退学するなり、貴方のチームに移籍するなり、言うことを聞いて差し上げます。万が一、億が一に貴方たちが勝てれば……ですけれど」

俺抜きでとんでもない話が進んで行ってしまおう。流石にこれは止めないとまずい。

「待て、待ってくれ！　テウス、落ち着け。先輩も本気にしないでやってください。無礼は謝罪しますので」

「許してほしいならそこで地に頭をこすりつけろ、無様にな。まあ、それでも許さんが」

「その必要はありません、トレーナーさん。貴方のウマ娘はこんな有象無象には負けません。私を信じてください」

二人とも大分頭に血が上っているのか退こうとしない。それでも何とか制止しようとするが、時間の打ち合わせをしてそのまま別れる

ことになってしまった。

「テウス、何であんなことを言ったんだ……お前らしくもない」

別れた後テウスを椅子に座らせて、事情を聴くことにした。

「……ごめんなさい。でも、先輩たちを、トレーナーさんをポンコツ呼ばわりされて、それがどうしても許せなくて」

しゅん、と耳を力なく垂れさせて俯いている。

「あの人は俺が入った時からああいいう人なんだよ。トレーナーたちの間では気にしても仕方ないって避けられてるような人なんだ。トレーナーとしての腕は確かなんだけどな」

頭を撫でて慰める。この娘は本当に優しい娘だ。怒った理由も自分が寒門だからと貶されたという理由ではなく、スペヤズカたちのために、そして俺のために怒ってくれている。

「今からでも遅くない。頭を下げに行こう。今ならあの人も頭が冷えているだろうし、大事にはならないさ」

「いえ、それには及びません。大丈夫です、トレーナーさん。明日トレーナーさんは、観客席でふんぞり返っていてください。必ず勝ってきますから」

テウスがいつもの穏やかな笑みを浮かべる。瞳の奥には今まで見たことのなかった勝利への闘志が見られて、つい頷いてしまった。

テウスには夢がない。明確な目標レースも無く、絶対に走りたいと言ったレースは精々GIのホープフルステークス、後はクラシック級での宝塚記念くらいだ。

宝塚記念も自分の夢というより、スズカと一緒に走りたいというもので、彼女自身の夢というわけではなかった。

だから今まで沢山走りたい、楽しく走りたいとは言っても、勝ちたいとは言わなかった。胸の奥には勝利への闘志を秘めていたかもしれないが、彼女がそれを言葉にしたのは初めてだった。

だから、初めて目にした彼女の勝利への想いを、俺は無視するようなことはできなかった。

そして翌日、ついに模擬レースの時間を迎えてしまった。一応生徒会と理事長には報告したのだが、不思議と止められることはなかった。

それどころかスタートの合図とゴール判定はあのシンボルドルフが行うと言うのだ。決して暇ではないはずなのだが、大丈夫なのだろうか。

レース人数は7人。テウスと、チームアケルナーの6人だ。チームアケルナーのウマ娘たちはジュニア級、クラシック級入り交じっているが全員テウスより年上だ。ゲートはないが、並び順はくじ引きで決めて、テウスは2番になっていた。

ちなみに今日ギプスは流石に外させてある。

「それでは各員、正々堂々としたレースを行うように。では……始め！」

皇帝によるスタートの合図が切られる。揃ってスタートを切り、並んで走っていく。少し走ると3番のウマ娘が一気に前に出ていく。

そのレースの流れを見て、少し違和感を感じる。テウスは大逃げのウマ娘だ。あの先輩は好位追走の王道の走りを好むはず。自分のウマ娘にテウスについていかせるような走りを何の思惑もなくするはずはないのだが……

何が狙いだ？ 訝しんでいると、第一コーナーで右隣のウマ娘が動いた。テウスを弾き飛ばすように、真横から体当たりをかましたのだ。

その瞬間、やられた。と思った。前は全力で前に出た3番のウマ娘がブロックしており逃げ場をふさいだうえでの体当たりだ。今まで彼女にこんな駆け引きを教えたことはない。

1番のウマ娘はかなり体格が良く、ゴールドシップ以上の背丈がある。この体格差なら弾き飛ばせる、と思ったのだろう。

体当たりの時の対処はまだテウスに教えたことはない。

実際見た感じパワーもかなりありそうなウマ娘だ。これだけの体格差があれば、問題なく弾き飛ばせてしまうだろう。

「!! 嘘おっ?」

だが、そうはならなかった。テウスはその接触到にびくともしなかった。自分に体当たりをかましてきたウマ娘を、彼女の驚愕の声とともに逆に弾き飛ばし失速させ、第一コーナーで外に大きくよれてしまった3番のウマ娘の内を悠々と抜けていく。何事もなかったかのように第二コーナーで加速して、あつという間に後続を突き放した。

そこからはもう独壇場と言わんばかりの展開だった。向こう正面でさらに加速し、第三コーナーを既に大差をつけて回ってくる。第四コーナーを過ぎて最終直線に入っても一切手加減することなく、全力でゴールを駆け抜けてきた。

判定の必要もないくらいの大勝。まさに
Eclipse 唯 抜 き first, 出 the て 並 rest 者 nowhere な し
といったレースだった。

「なっ……あんな小さいウマ娘が、どうしてあいつを弾き飛ばせるんだ! タイミングも完璧だったはずだ!」

隣でアケルナーのトレーナーが吠えている。こいつ、テウスのトレーニングを見たことがないのか?

「あいつは坂路で巨大タイヤを引けるくらいパワーがあります。体幹もテイオーのお墨付きです。体当たりの時の対処を教えたことはありませんでしたが、問題ありませんでしたね」

力比べならそうそうあいつは負けない。体当たりは技術が大きいところがあるので純粹な力比べとは言えないのだが、今回はテウスに軍配が上がったようだ。

「くっ……今のは妨害があつた! 無効だ! こんな汚いレースで勝ちを拾うなど恥ずかしくないのか!」

どの口がそれを宣うのか、ふざけたことを言い出す。以前のアケルナーのトレーナーはこんな感じではなかったはずだが、何が彼を歪めてしまったのだろうか。

俺がそれに呆れて何も物を言えなくなっていると、勝ったテウスがこちらに走ってきた。

「無効、ですか。いいですよ。万一にも妨害が無いよう、次は私は大外を走りますし、内側には入りません。少し休憩したら、もう一度始めましょう」

彼のセリフが聞こえていたのか、にこりと笑ってコースに戻っている。シンボリルドルフと少し話した後、10分ほどのインターバルを入れたのちに再スタートの位置に付く。

多少間隔が短い、条件はみな同じ。しかも今回テウスは大外、逃げウマ娘としては不利な位置を自ら選択したのだ。次は勝てたのときゃんきゃん吠える自分のトレーナーをアケルナーのウマ娘は困惑したように眺め、スタート位置に付いていく。

シンボリルドルフの合図で二回目のスタートが切られた。だが、レース内容はもはや悲惨とも言えるものだった。

2000mを走った後、10分という短いインターバルでもう一度2000m。当然普通のウマ娘のスタミナが持つわけもなく、向こう正面を迎えたあたりでアケルナーのウマ娘たちは次々と一杯になってしまう。

一方テウスは元気いっぱい、全く脚に衰えを見せず最初から最後まで影すら踏ませずゴールに帰ってきた。しかもレースでは常に全力を出す彼女にしては珍しく、明らかに手を抜いていた。

おそらく、レースがハイペースになりすぎないように調整したのだろう。自分のペースに後続が釣られすぎないように速度を落としたのだ。

ウマ娘の脚は消耗品だ。一日に2000mのレースを二本も走ってしまえば消耗は著しいだろう。それを気にしてレースがスロウペースになるようにしたということだと思う。

「何故だ！ 何故勝てん！ こんな無名のウマ娘に、俺が育てたウマ娘が！」

隣ではアケルナーのトレーナーが頭を振り乱して発狂している。

「失望ッ！ まだ気付かないのか、アケルナーのトレーナーよー！」

放っておいてテウスのところへ向かおうとしていると、後ろから聞きなれた上司の声がして振り返る。いつも通り帽子の上に猫を乗せ

た理事長がいつの間にか来ていたようだ。

「落胆ッ！ 過去の栄光に囚われ今育てているウマ娘のことを君は見れていない！ それに、まず勝てなかったことを責めるのではなく、彼女たちの頑張りを労ってやるのがトレーナーの仕事ではないのか！」

外見で侮られやすいし、年齢も見た目相応な理事長だが、それでも誰よりも教育に対しては熱心である。自腹でコース設備を揃えようとしてしまうくらいで、学園で一番ウマ娘のことを考えてくれている人だろう。

「辞令！ 君には教育センターでの再教育プログラムの受講を命ずる！ 今一度、トレーナーとしての心構えを学び直してほしい！ たづな、後は頼んだ！」

意味不明な言葉を喚いて暴れようとするアケルナーのトレーナーをいきなり背後に現れたたづなさんが制圧し、何処かへ連れていく。ウマ娘顔負けのパワーとスピードだ。

「トレーナーさん、勝つてきましたよ。あ、理事長さんも見てくださったんですね」

テウスがこちらに駆け寄ってくる。ゴール付近には力尽きたアケルナーのウマ娘たちが倒れて、死屍累々の様相を呈している。

「祝福！ 見事な勝利だった！ これからもその調子で頑張つてほしい！」

「ああ、よくやったな、テウス。消耗は大丈夫か？」

「ありがとうございます。私は大丈夫ですけど……アケルナーの先輩たちが心配です。トレーナーさん、一緒に様子を見てくれませんか？ 消耗度合いは私には判断できないので……」

ターフに倒れるアケルナーの娘たちを心配そうに見つめている。やはり優しい娘だ。

「ああ、勿論だ。行こうか、テウス。それじゃ理事長、失礼します」

「うむ！ あの娘達のことには任せる！ 勿論何かあれば全面的にフォローしよう！ あ、その後の面倒を見るとまでは言わないので安心してほしい！」

理事長が頼もしいことを言ってくれる。安心しつつ、俺はテウスと一緒に彼女たちを診て、後に響かぬよう応急処置を行っていくのだった。

第十三話 サイレンススズカVSウオツカ

模擬レース事件から一月ちよつとが経った。あの後アケルナーのトレーナーさんは教育センターに行ってしまったので、彼が担当していたウマ娘たちはチームリギルやチームカノープスなどに分散して一時的に所属することになった。

事件の当事者である私が居るチームスピカには一人も回されなかったあたり、理事長さんが大分気を遣ってくれたのだろう。

あの後私は関係者に謝罪行脚をした。迷惑を掛けたスピカの先輩たちやトレーナーさん、生徒会長や理事長たちなどだ。

反応は大きく分かれた。スピカの先輩達は怒りはしなかった。髪がぐしゃぐしゃになるまで撫でまわされたり、晩御飯が入らなくなるまでチョコワツフルを詰め込まれたりはしたが。

トレーナーさんには怒ってくれたのは嬉しかったが、揉め事を起こしたのは頂けないと諭された。特に罰などは与えられなかったが、自主的に今まで以上に掃除、洗濯などのチームの仕事を手伝うようにしている。

生徒会長や理事長には、野良レースで解決するわけもなくきちんと模擬レースの申請をした上でのレースで、レース運び自体も非常に私自身はクリーンだったからか、模擬レース自体には問題がない、とされた。

まあ、その経緯についてはかなりお叱りを受けた。扉を破損した分の修理代は全額弁償になったし、反省文も10枚書かされた。謹慎処分などにはならなかったただけ手心を加えてもらったんだと思う。

アケルナーの先輩達には何度か顔を合わせた。ご飯を食べながら腹を割って話して交流するうちに、蟠りはなくなったように感じる。あれから全くアケルナーのトレーナーさんとは連絡が取れないわけではなくて、時々メッセージで連絡を取り合っているらしい。

昨日話したときは日に日に当たり方が柔らかくなっていて、ちよつ

と怖いと笑っていた。戻ってきたときにはまた彼の担当になりたいと言っていたので、きつとチームアケルナーが無くなってしまいう心配はないだろう。

私は今期末試験に向けての勉強を終えて、スカーレット先輩とお買い物に行くところだ。今週に宝塚記念を控えたウオツカ先輩とスズカ先輩とは併走できないうえに接触禁止令が出ってしまった。

カフェテラスで勉強をしていたのだが、そこにはスペ先輩もいて、グラス先輩に勉強を教えてもらっていた。7月からは合宿もあるし、赤点を取って補習で参加できなくなったりするようなことは避けてほしいものだ。頑張ってほしい。

スカーレット先輩とお買い物に行っているのは、トレーニングに精を出しすぎたのか、服とかが結構キツくなってしまったので、スカーレット先輩が良く利用するお店に連れて行って貰っているのだ。

スカーレット先輩もまだ成長期らしく、部室でついつい成長期も困りものだと話し込んでいたら、周りの先輩からは少し呆れられた。

ライブ衣装とかを調整に出したり、新しい制服を貰ったりと色々手続きをしないといけないので、困りものなのは本当なのだが……本格化した後足のサイズはそうそう変わらないのはとても助かる。専用のシューズを作るのは結構手間なのだ。入学前にシューズを作ったが、職人さんに足の型を取ってもらって木型を彫って……と、勝負服の時に着けるようなオリジナルデザインのシューズでもない、統一デザインのシューズだといふのになんか驚いたが、ウマ娘が靴擦れを起こしたりすると走り方がおかしくなってしまうって最悪故障につながったりするので仕方ない。

怪我や故障につながることは徹底的に排除するのが学園のスタンズだ。ちよつと掠り傷を負った程度で何処からともなく駿川さんが飛んできて保健室に連行されるくらい厳しい。

「気に入ったのがあってよかったわね。また機会があったら来ましょ」

「はい、スカレット先輩。今日はありがとうございました」

二人でワイワイして合わせあったり、お互いのものを選んでりして帰路に就く。残念だがお買い物のお景は全カットだ。スカレット先輩のものならともかく、私が含まれるのは需要もないだろうし。

「スカレット先輩、そういえば何か小物を買っていたみたいですけど、何を買っていたんですか？」

「ちよつとアイツが好きそうなチャームを見つけてね……ちよつと緊張して元気がなかったし、元気づけてやろうかと思って」

「ウオツカ先輩ですか？ スズカ先輩との対決ですもんね……何処まで食らいついていけるでしょうか」

「……勝てるか、とは言わないのね？ まあ、今のスズカ先輩が負けるとは思えないけど……」

少しスカレット先輩が苦笑いする。グランプリレース、宝塚記念。阪神レース場で行われる芝の2200m、右回りのレースだ。

スズカ先輩は一度このレースで勝ったことがあるので、距離的不安はない。これが2400であればまた話は別だったのだろうが、正直厳しいと言わざるを得ない。

「上手く折り合えれば、アイツはスズカ先輩にだってついていけるわよ。アイツはシニア級の先輩たちとだって互角に渡り合える力があるわ」

スカレット先輩は自信ありげだ。

ウオツカ先輩は今年のダービーウマ娘だ。最終コーナーを八番手で回って、バ場の中央からバ群を抜き出て残り150mで先頭の娘をかわして、そこから3バ身も差をつけて勝って見せた。

あまりの見事な差し切りがちよつと隣にいたゴルシ先輩に抱き着いて締め上げて、窒息させかけてしまった。マックイーン先輩が止めてくれなければ間違いなく窒息させていただろう。

あの走りが出来れば確かに食らいついていけるかもしれない。でも、スズカ先輩は後続に差をつけて最終コーナーを回ってくると手が付けられないくらい加速してしまうので、かなり早めに仕掛けないといけないだろう。はたして折り合いが付けるかどうか……

直近に迫った宝塚記念へ、私は想いを馳せた。

【ウオツカSide】

今日はついに、待ちに待った宝塚記念。スズカ先輩との直接対決だ。他にもカワカミ先輩とも戦うことになるし、ダービーで二着だったアサクサキングスも居る。

周りはシニア級の先輩ばかりだし、強敵揃いだ。くう、燃えてくるぜ！

「ウオツカ。今日は正々堂々頑張りましょう」

本バ場入場を済ませてゲート入りのファンファーレを待っていると、スズカ先輩が話しかけてくる。スズカ先輩も調子は絶好調だ。スタートでミスるとか、そういうのを期待しねー方がいいな……

「はい、スズカ先輩！ 胸お借りします！」

ぜってー勝つ。気合を入れなおす意味で頬を叩く。

そうこうしているとファンファーレが鳴る。オレは1枠2番で、スズカ先輩は2枠3番だ。先にスズカ先輩がゲートに入る。

宝塚記念のファンファーレは、宝塚記念専用のファンファーレだ。阪神レース場で走るのは初めてじゃないはずなのに、すげー緊張する。

そつとトレーナーたちが居る方を向く。ホームストレッチ前のポケットから始まるこの宝塚記念なら、皆の顔も見える。

トレーナーは双眼鏡を片手に心配そうにこちらを見ている。スペ先輩はおつきい焼きそばを食べているし、ゴールドシップはルービツクキューブをしている。テイオーとマツクイーンはちよつとソワソワしてるみてーだな。スカレットとテウスは談笑してるようだ。

その時、スカレットと目が合った。拳をぐつとこちらに突き出してくる。拳を突き返してやった。

ゲートに入って、スカレットから貰ったバイクの形をしたチャー

ムを握りしめる。首から提げてる時計に一緒に着けているそれは、昨日スカレットから貰ったものだ。不思議と勇気が湧いてくるし、何よりかつけーからお気に入りだ。

『票に託されたファンの夢。思いを力にかえて走るグランプリ・宝塚記念！ 降っている小雨の影響で、バ場状態は稍重の発表となりました』

しとしとと降っている小雨が、ゲートの屋根に当たって小気味いい音を立てている。

『人気と実力を兼ね備えたカワカミプリンセス、今日は三番人気です』
カワカミ先輩は無敗でオークス・秋華賞を制した実力者だ。その次のエリザベス女王杯も1着になったけど、進路妨害で降着になったんだっけか。

『二番人気を紹介しましょう。今年のダービーウマ娘、ウオツカ』
今日オレは二番人気だ。人気投票は六位だったんだが、当日人気はまあまあ貰えてるみたいだな。

『今日の主役はこのウマ娘を措いて他にはいない。グランプリウマ娘、サイレンススズカ！ 一番人気です』

『先のヴィクトリアマイルでその実力を見せつけました。果たしてG1連勝となるのか、はたまた他の娘たちが異次元の逃亡者を差し切っ
て見せるのか。注目です』

スズカ先輩は今日も一番人気だ。ちらつと隣のスズカ先輩を見る。
やべー位の気迫だ。ごくり、と唾を飲み込む。

『各ウマ娘ゲートに入って体勢が整いました』
前を向いて構える。ドクンドクンと、やけに心臓の音が大きく聞こえる。

少しの静寂の後、ガタンと音を立ててゲートが開いた。

『今スタートが切られました！ 各ウマ娘綺麗なスタートを切りました。先頭に抜け出したのはやはりこの娘、サイレンススズカ。このまま期待通りの結果を出せるか？』

誰も出遅れたわけじゃない。それだと言うのにするするとスズカ先輩が前に出て、ぐんぐん加速していく。

『サイレンススズカ、快調に飛ばしています。二番手に付けて様子を窺うのはシンバルリズム。そのうち並んでラヴィアンローズ、その後ろにコンプロマイズといったところですよ』

オレは大体7番手といった位置で、オレの戦法的には悪くない位置だ。シンバルリズム先輩やラヴィアンローズ先輩は果敢にスズカ先輩に競り合いに行っているが、少しずつ離されていつている。

『先頭は相変わらずサイレンススズカ、単身で飛ばしに飛ばしていきます。後ろのウマ娘たちとは大分離れてしまいました。二番手はシンバルリズム、差がなくコンプロマイズとラヴィアンローズが並んでいます。ウオツカは少し早めに上がったか、五番手の位置まで上がってきていますね』

少し早めに前につける。あんまり引き離されるとスズカ先輩には追いつけねーし、スタミナが持つなら早めに仕掛けた方がいい。テウスに影響されて坂路の回数をちよつと増やしたし、前よりはスタミナがついてるはずだ。

『1000mを通過してトップは変わらずサイレンススズカ。1000m通過タイムは57.1! 逃げウマ娘がハイペースになりやすい前半1000mですが、それにしても速すぎるぞサイレンススズカ!』

1000mをハイペースで通過する。桜花賞の時とかとは違う距離で、あまり息を入れるタイミングがないし、脚も溜められない。食らいついていくのがやつとだ。じわり、じわりと差は開いていつてしまう。

『第三コーナーを過ぎて、残り600の標識を通過しました。先頭は相変わらずサイレンススズカ。単身独走! 一人旅だ!』

スズカ先輩は大分先について、このままじゃ追いつけねえ。仕掛けるしかない。最後まで持つてくれよ……!

『おおっとウオツカ。ここから仕掛けに行く! サイレンススズカの独走許すまじとロングスパートを仕掛けた! 後続のウマ娘たちもつられて上がっていくぞ!』

外へ出て捲って上がっていく。殆ど脚は溜めれていない。だけど

食いついていかなきゃ、絶対に勝てねえ!!

『最終コーナーを加速しながらぐんぐんと迫っていくぞウオツカ! ダービーウマ娘の意地を見せられるか。サイレンススズカの背中が見えてきた! 他にもシルバーサザンカ、タヴァアタイムサ、プロペライザーが後を追っている!』

結構無理なスパートだ、脚が少し痛む。多少の無茶は承知の上だ。『だが、彼女の影は踏めない! サイレンススズカ、直線に入って加速した! いつ脚を溜めていたんだサイレンススズカ! 後続との距離を引き離していく!』

スズカ先輩お得意の、終盤での加速。どこにそんな脚があったんだと、敵にして初めて思う。このままじゃ全然届かねえ。もっと加速しないと。

限界の脚にさらに力を籠める。ぐつと踏み込んで加速しようとする。

けど、オレの脚は付いてこなかった。がくん、と膝から崩れ落ちそうになる。

『あーっと! ウオツカここで失速! ウオツカ、ここまでか! ずるずると後退していきます!』

転倒するのだけは何とか避け、ゆっくり減速して走る。諦めたくねえ、でももう足が動かかねえ……

『サイレンススズカ独走! 何処までだって逃げてやる! 後続に大きく差をつけて、今ゴールイン! 1着はサイレンススズカ! 2着にはシルバーサザンカ、3着にはタヴァアタイムサが入りました。カワカミプリンセスは5着、ウオツカは何とか8着に粘りこみました』
最後の坂でもうヘロツヘロだったのが、何とか上り切ってゴールする。もう一步も動けなくて、その場に倒れこむ。

ターフに横たわりながら首を傾けてスズカ先輩の方を見る。涼しい顔をして観客席に小さく手を振っている。まだまだ敵わねえな……夏合宿で鍛えなおさねえと……

「ウオツカ、大丈夫? 掴ま「ぎゃあああああああ!!!」って……?」

え、ウソでしょ……？」

スズカ先輩がこちらに寄ってきて、出してくれた手を握ろうとしたときに観客席から聞こえた聞きなれた声の悲鳴に何事かと二人で悲鳴の方を向くと、スカーレットの奴がテウスに抱きしめられたままぐるんぐるん振り回されていた。あれ、辛えんだよな……テウス無駄に力強いから簡単には抜け出せねえし。スズカ先輩も呆然としている。

ヴィクトリアマイルの時にされたことを思い出して、手を合わせる。すまねえスカーレット。オレにはどうしようも出来ねえ。せめて乙女の尊厳を失わないように気を付けろよと、祈りをささげた。

第十四話 夏合宿・その1

宝塚記念が終わり、ついに待ちに待った夏休み。そう、夏合宿の季節である。合法的に1日中トレーニング出来る季節……最高かな？

チームスピカの面々は赤点を取ることもなく、全員揃って夏合宿に参加出来た。私はグラス先輩のおかげで英語でも平均点は取れたし、スベ先輩もグラス先輩の集中指導によって全教科40点台赤点は30点以下である。を取る事が出来た。グラス先輩様様である。お礼におばあちゃんが漬けてくれた漬物を贈ったらとても喜んでくれた。

ちなみにテイオー先輩は全教科ほぼ満点、マックイーン先輩も同じくらいだったらしい。ゴルシ先輩の答案用紙も見せてもらったが、点数欄に120億点と書かれていた。意味不明である。

ゴルシ先輩、同じ栗東寮のはずなのに、彼女の部屋を見たことがないんだよな……寮長に聞いてみたが寮長も把握していなかった。中等部なのか高等部なのかもわからないし、謎が多すぎる先輩である。

「お前らー、とつとと車に乗れよー」

合宿所へはトレーナーさんがワゴン車で送ってくれる。10人乗りのちよつと大きめな車だ。今日この日のために新しく買ったらしい。最初私はトレーニングがてら後ろを走ってついていこうとしたのだが、流石に止められてしまった。

「はい、今乗りまーす……？」

「……？ どうしたのテウスちゃん？」

車に乗り込もうと助手席の扉を開けると、そこにはスズカ先輩が居た。おかしいな、先ほどまで誰も乗っていなかった気がするのだが……

「あ、いえ。ごめんなさい。後ろに乗りますね」

首を傾げつつ最後列の一人掛けの席に座った。新車特有の匂いがある。なるべく薄くしようとしてくれたみたいだけれど、ウマ娘の嗅覚には無意味である。気分が悪くなるほどではないし、私はこの匂い

は嫌いではないので問題ない。

「マックイーン、おやつ食べようぜー？ マックイーンの為にいろいろ持ってきたんだZ E ☆」

「まだ走り出して数分ですわよ……もう少し後になさい」

「いいや！ 『限界』だツ！ 食うねツ！」

出発早々ゴルシ先輩がマックイーン先輩に絡んでいる。何処からともなくスナック菓子やらパンやら缶詰やらを取り出して床に並べている。床に並べる必要とはいったい……？

「もー、ゴルシ、そんなところで広げないでよねー」

「わあ、ゴールドシップさん、私も貰ってもいいですか？」

「お前ら、大人しく座ってろ！」

きやあきやあ騒ぐ先輩たちにトレーナーさんが注意をする。スピカはいつもこんな感じでとても賑やかで、全然退屈しない。スカレット先輩もウオツカ先輩も楽しそうに笑っている。ここからではスズカ先輩の顔は見えないけれど、きつと彼女も楽しそうにしているだろう。

「おすすめはこのニシンの缶詰だぜ!!」

「ゴールドシップさん、それ貸してくださいさる？ ……そおおおおい!!!」

「ああああああ!!! ゴルシちゃんのとっておきがお星さまにいい!!!」

「窓から物を投げるなあ！ 誰かに当たったらどうする!!!」

「たとえば当たったとしてもそれは所謂コラテラルダメージというものに過ぎないのですわ！ わたくし達が生存する為の致し方ない犠牲なのですわ！」

……うん、賑やかである。何だかいろいろ危険を感じるけれど。やっぱり外を走っていた方が安全だったのでは……？ 今からでも車内から脱出した方がいいのでは……？

「テウス、大丈夫。地獄に落ちるときは皆一緒よ……」

「スカレット先輩、離してください。私まだ死にたくありません」
「逃がさん……お前だけは……」

「ウオツカ先輩まで!!」

私が脱出を検討しているとスカーレット先輩とウオツカ先輩に二人がかりで捕獲される。完全に押さえこまれていて抜け出せそうにない。

「ああ……お父さん、お母さん。先立つ不孝をお許しください……」

「いや流石にそれは覚悟決めすぎだろ……」

「何だよ何だよー、ゴルシちゃんがそんなことするわけないだろく？」

ほら、これでも食べてろって」

私が覚悟を決めているとゴルシ先輩が私の口の中に何かを放り込んでくる。

「むぐつ……ああ、美味しい……」

どうやらはちみつ味のラスクラしい。凄く美味しい、手が止まらなくなりそうだ。

「だろー？ マックイーンも『手が止まりませんわ！ パクパクですわ！』って言ってる10袋くらい一気に食べてたやつだぜー！」

「ゴールドシップ!! いつ見てたんですの!!」

マックイーン先輩お墨付きのものらしい。はちみつのいい香りが出て、サクサクとした食べ応え、そして噛むたびにじゅわり、とはちみつの幸せな甘さが口いっぱい広がる。ゴルシ先輩に袋ごと貰って、一つずつ味わって食べる。確かにこれは温かい紅茶が合いそうだ。

「ふああ……優しい味です……」

本当に美味しくて顔がとろけてしまう。

「本当にテウスさんは幸せそうに物を食べますわね……」

マックイーン先輩がこちらを微笑ましそうに見てくる。手に持ったラスクを一つつまんで私の口に入れてきた。マックイーン先輩の持っているラスクはチョコ味のようだ。これも噛むとチョコが染みできてとてもおいしい。口にどんどん詰め込まれていくが、どれだけ詰め込まれても美味しいので苦にならず食べきれしてしまう。

「あ、この焼きそばパンも美味しいです！ 流石はゴールドシップさんが選んだものですね！」

「スペ先輩、オレにも下さいよ！ うん、確かに美味え！」

「へー？ じゃあアタシも一つ……って、辛ああああああ!!!」

「お？ 大当たりだなスカレット！ ゴルシちゃん印のデスソース焼きそばだぜー！」

「何てもの入れてるのよお!!!」

「スペちゃん、私とトレーナーさんののも一つ貰える？ うん、辛くないやつでお願い」

「まったく……ほら、そろそろ山道に入ってカーブが多くなるから、シートベルトちゃんと着けてろ」

「「「「「はーいー」」」」」

車はどんどん進んでいく。だんだんと海に近づいてきたのか、開いた窓からは潮の香りが漂ってくる。山や海でのトレーニング……楽しみ！

「よし、お前ら着いたぞー。降りろ降りろー」

やっと到着したようだ。がやがやしながら車を降りる。ちよつと食べすぎてしまってお腹が苦しい……まあ、トレーニングしているうちに何とかなるだろう。

「今年はこちらとあの旅館に泊まれるのよね？」

「そーだよトレーナー！ 前みたいなおんぼろ旅館は嫌だよおー！」

「おんぼろって……いいところだっただろ？ まあ、今回はリギルと一緒に旅館だ！ 今年は予算たっぷりだからな！」

トレーナーが自信満々に胸を張ると同時に先輩たちが歓声を上げる。確か前は目の前にある大きな旅館ではなく、傍らにある情緒溢れた旅館に泊まったと聞いている。私はそつちでもよかつただけだな……

「早く荷物を置いてトレーニングに行きましょう！ はやくはやく!!」

もう私の頭の中はトレーニングのことで一杯である。遠泳とか砂

浜ダツシユとか、山道でのトレーニングとか、やりたいことはたくさんある。1日24時間では足りないくらいだ。30時間くらい欲しいものである。

「テウスちゃん、落ち着いて。トレーニングは逃げないわ。それにこの後はミーティングもあるのよ。ですよね、トレーナーさん？」

「ああ、今回はリギルやカノープスとかとの合同トレーニングや模擬レースも予定してる。この2か月間で一気に追い込んで、テウスの芙蓉ステークスとか、スカーレットやウオツカの秋華賞に備えないといけないからな！」

スズカ先輩に窘められる。今回は他チームも含めたトレーニングなども予定しているので、あまり予定外の行動は慎むべきだろう。うう、でも早く走りたい……

「模擬レースってことは、グラスちゃんやエルちゃんと走れるんですね！ よーし、けっぱるべー!!」

「ネイチャとかも居るのかー。ボクも楽しみだなあ」

「わたくしはリハビリを続けたいのですよね？ 皆さんと模擬レースを出来ないのは残念ですが、今無理するわけにはいきませんものね。早く復帰できるように励みますわ」

「ゴルシちゃんは焼きそば売ってくるぜ！」

「頼むからゴルシは大人しくしてくれ……まあいいか、チエツクインしたら1時間後に講堂に集合！ リギルやカノープスを含めた全員でミーティングがあるから、遅れるなよ！ あ。ちなみに部屋は二人一組で、決め方はくじ引きだ！ 今からこのくじを引いてもらおう！」

トレーナーさんがくじを手にとって渡してくる。皆で一斉にくじを引いた。

「えつと……私は2番ですね。ペアの人は……」

「アタシね。よろしくね、テウス」

「はい、宜しくお願ひします、スカーレット先輩」

どうやらスカーレット先輩が同室のようだ。他はテイオー先輩とスベ先輩、ウオツカ先輩とスズカ先輩、そしてマツクイーン先輩とゴ

ルシ先輩がペアになったようだ。いつもの部屋割りとは違う組み合わせで新鮮だし、私はそもそも同室が居ない。スカーレット先輩に迷惑を掛けないようにしないと……

絶望した表情のマックイーン先輩を凄く嬉しそうに引きずっていく。ゴルシ先輩を見送りながら、私たちもチエックインを済ませに行くのだった。

第十五話 夏合宿・その2

チーム合同でのミーティングを終えて、今日は移動の疲れを癒すという名目でトレーニングは明日からということになった。

先輩たちはリギルやカノープスの先輩たちと談笑している。私はグラス先輩とかフジキセキ先輩くらいしか他チームに交流のある知り合いがいない。会長や副会長は交流があるといつていいのだろうか……

さて、どうしようか。先輩たちを誘って海で遊ぶのもいいけど、折角だし砂浜の走り心地を確かめておきたい気持ちもある。ウマ娘がトレーニングをしたりするということが相当綺麗に整備されているようだが、万一があつてはいけないので自分の目で下見はしておきたい。

私は特典のおかげで故障はしない。でも軽い怪我をしたりはする。線引きがどこになるのかよくわからないので何とも言えないのだが、擦り傷切り傷程度なら作ってしまうのだ。

怪我をしてしまうとトレーナーさんから自主トレ禁止令でも出されかねない。なので下見をして、怪我の可能性を排除しておきたい。まあ、そのあたりは恐らくトレーナーさんたちがやってくれているとは思うけれど……自分の目で見るとすべきだろう。見終わったら走ればいい。トレーニングで使う用の場所と遊ぶ用の場所は分かれていると言っていたので、その範囲から出なければお咎めもないだろう。何たって自由時間だし。トレーニングしてはダメだとは言われてない。

よし、そうと決まれば早速準備しなきゃ……

「……テウスちゃん？ 聞こえていますか？ ……えいつ」

「ひゃあああああああ!!!」

考えをまとめて砂浜に向かおうとしていたところに急に後ろから冷たいものを首筋に当てられた。情けない声を出して飛び上がってしまう。

「ふふふ、考え事ですか？ トレーニングに精を出すのもいいですけど、休む時はちゃんと休まないといけませんよ」

「あ、グラス先輩……えへへ、楽しみすぎてつい……」

「どうやらグラス先輩が話しかけてきていたのに気付いていなかったようだ。多分手に持っている緑茶のペットボトルをピトつとされたんだと思う。」

「もしお暇ならこちらの集まりに参加してみますか？ タイキ先輩がバーベキューをしようって皆を誘ってるんですよ」

「初日からバーベキュー……ですか？ そういうのって合宿終わりがけとかにするものじゃ……」

「タイキ先輩は常日頃からバーベキューしてるんですよ。今日も『合宿と言えばバーベキュー！ なので今からしましょー！』って張り切っていました」

「どうやら相当パワフルな先輩らしい。私はあまり交流はない先輩だが、確かスズカ先輩の話に時々出てくるくらい仲が良かった先輩のはずだ。」

「折角なのでご相伴させていただきます。私、バーベキューって初めてなんですよね」

「ふふ。タイキ先輩のバーベキューパーティーは満足できると思いますよ。楽しみにしておいてくださいね。では、行きましょうか」

「グラス先輩に先導されてバーベキューの会場へ向かう。途中でどうやら砂浜の方に設営して行くようだ。何か飲み物か食材を持って行った方がいいか不安になったが、どうやらそういった準備も万端らしい。」

「バーベキューに参加するのはチームリギル、チームスピカ、チームカノープスの主だったメンバーのようだ。スピカの先輩たちはゴルシ先輩に連れられて先に行ってしまったようだ。私はトレーニングしようと抜け出そうとしていたのでまあ仕方ないことである。」

「カノープスの先輩方とはあまり交流がない。今期ジュニア級のウマ娘も居ないし、完全にマーク外だったためあまり詳しく知らないの」

が現状だ。

自分のレースを見返していた時にツインターボの様な逃げ、と言われているのに気付き、ツインターボ先輩のレースは一度だけ映像で見たことがある。ツインカマー……じゃなかった、オールカマーでヘロヘロになりながらも決して諦めずに最後まで逃げ切ったその姿には心が躍った。テイオー先輩が師匠と言っていたのも頷けるものである。

私は同じように逃げてもそうそうスタミナを切らさない自信はある。トレーナーさんは駆け引きをされたときにバテたりするかもしれないと言っていたので、今後の課題は駆け引き対策である。

ただ、私の師匠はスズカ先輩だ。スズカ先輩は自分の世界に入ってから最初から最後まで走り抜ける、自分が先頭であれば良いというだけの駆け引きも何もない走りである。グラス先輩がそのあたりは得意だとスペ先輩に聞いたことがあるので、今後グラス先輩に併走をお願いしてみるのもありだろうか……トレーナーさんに相談してみよう。

グラス先輩はもうすでにドリームトロフィーリーグに移籍済みだから、勝手に併走するのは難しい。スペ先輩も移籍済みであり、次のサマードリームトロフィー予選レースは8月で、決勝は9月である。

ウマ娘は暑さに弱い生き物である。特に高温多湿な日本の夏というのは辛いものがあって、そういった理由から7・8・9月にGIは無い。

なのでその期間を埋めるという形でSDTが開催されるのだ。ウマ娘にとっては辛いのだが、ファンに対する一種のサービスという形だろう。トウインクルシリーズのウマ娘たちをアマチュアとするなら、ドリーム・シリーズのウマ娘はいわばプロ達なので仕方がない。

ちなみにドリーム・シリーズ・スプリントとドリーム・シリーズ・ダートは予選・決勝含めて7月中に行われる。優勝候補はスプリントはニシノフラワー先輩、ダートではスマートファルコン先輩が挙げられている。ニシノフラワー先輩は現在のトウインクルシリーズでスプリンター最強の名が高いサクラバクシンオー先輩に勝ったこともある桜花賞ウマ娘で、スマートファルコン先輩は砂のハヤブサと呼ばれ

るほどのダート巧者だ。スマートファルコン先輩は私と同じ逃げウマ娘なので時折レース映像を見て勉強している。勝負服がアイドルっぽい衣装でひらひらとしてとても可愛かった。ただ、私には似合わなさそうなので自分の勝負服はもっと落ち着いたものにしようと思う。

グラス先輩と雑談をしているうちに砂浜に着く。ゆっくりしすぎたのかどうやら私たちが最後だったようで、皆わいわい騒いで既に肉やら野菜やらを焼き始めているようだ。

チームごとに大まかに分かれて焼いているようだが、カノープスの方にテイオー先輩が居たりと結構自由なようだ。

ゴルシ先輩がなぜかマグロを担いでいるのが気になるが、まさかそれを焼くつもりだろうか？ 2. 5mくらいありそうなのだが……ゴルシ先輩が自ら捌くんだろうか。まさかそのまま焼くわけではないだろうし……

その他にもマックイーン先輩が鉄板の前に居て焼きそばを焼こうとしていたり、鼻の上に白いシャドーロールを付けた先輩……ナリタブライアン先輩が野菜を排除しようとしてエアグルーヴ副会長に怒られていたりしている。

「グラスー！ やつと来ましたネー！ 待ちくたびれましたー！」

マスクをつけた少し明るめの黒鹿毛のウマ娘、エルコンドルパサー先輩が話しかけてきた。肩にコンドルが留まって……いやあれは鷹だろうか。肩に留まった鷹が生肉を美味しそうに食べている。

「エル、お待たせしました。後輩を誘ってきていたんです。折角ですからみんな楽しんでみたいと思いまして〜」

「良いことデスネー！ 確かチームスピカの新人さんデシタネー？」

私はエルコンドルパサー、よろしく願いますー！」

「はい、宜しく願います。私はブラックプロテウスです」

元気いっぱい自己紹介するエルコンドルパサー先輩に名乗り返してお辞儀する。

「エル、あれはやめたんですか？ 『アメリカ生まれの帰国子女デエ

ス!』みたいな」

「グラスウ……その事はもう言わないでクダサーイ……」

どうやらとても仲良しなようだ。グラス先輩が声真似するのをとでも恥ずかしそうにしている。

「ほ? へうふひゃん、へふひゃん、ふはふひゃん、はひおははひひへふんへふは?」

スぺ先輩が口いっぱいにお肉を詰め込んでこちらに話しかけてきた。

「スぺ先輩、ご飯を食べたまま喋るのはお行儀が悪いですよ。ちゃんと飲み込んでからにしてください」

「んう……ごめんなさい。美味しかったのでつい。エルちゃんとグラスちゃんと何をお話してたんですか?」

「自己紹介をしていただけですよ。それよりもスぺ先輩……そんなに食べちゃって大丈夫なんですか?」

既にお腹がぽっこり出ているスぺ先輩は8月にドリム・シリーズを控える身である。流石にあまりの体重増は避けるべきだと思おうのだが……

「大丈夫です! トレーニングで絞りますから!」

「スぺちゃん? もし太り気味で情けないレースをしたときは……わかってますね?」

グラス先輩が凄むとスぺ先輩は小さく悲鳴を上げていた。薙刀を持っていてのようなイメージが明確に見えるほどのオーラが私にも見える。正直ちよつと怖い。

スぺ先輩がグラス先輩に凄まれている隙にその場を離れる。決して怖かったから逃げ出したわけでは……いや、怖かったから逃げ出した。私は逃げウマ娘だから逃げるのは恥ずかしくないのだ。

リギルの方の集まりに参加するのは怖かったし、スピカの方ではゴルシ先輩がでっかい包丁を持ってマグロを捌いているので近づくのが怖く、カノープスの先輩たちが集まっている方へ向かう。カノープスの先輩たちは皆優しそうだし……多分……

「お？ 噂のスピカの新人、ブラックプロテウスさんじゃないですかー」

ちよつと躊躇っていた私を癖っ毛ツインテールのウマ娘が迎え入れてくれた。

「あ、お邪魔します……ご迷惑でなければこちらで一緒に食べたいのですが」

「そんなに硬くならなくてもいいってー。テイオーの後輩ならアタシにとつても大事な後輩だしね。アタシはナイスネイチャ。まー、気楽によろしくね」

「はい、よろしくお願いします。ところで、噂のって？」

何か噂になっているらしい。特に何か目立つようなことをしているつもりはないのだけれど……メイクデビューの時のことだろうか？

「色々ありますよー？ 笑顔で坂路を何十本も駆けのぼっているとか、巨大タイヤを坂路で引き回しているとか、他にも……」

「あつ、わかりました、わかりましたからその辺で許してください」
自主トレが話題になっっているらしい。確かによくトレーニングを見られるなーとは思っていたが先輩方の耳に入るくらいまで噂されているとは思いつかなかった。

「あ、テウスもこっち来たんだ？ まースピカやリギルよりは平和だもんねー、はい、お肉焼けてるよ」

テイオー先輩が渡してきたお皿を受け取る。しっかりとこんがり焼けている。丸眼鏡を付けたウマ娘が焼き加減を管理しているようだ。「ありがとうございます。スピカの方に戻ろうとも思っただんですが、ゴルシ先輩が怖かったので……」

「まーゴルシはマックイーンに任せておけばいいでしょー。こっちは平和にいいこうよ、平和にさー」

「そうですね。あ、このお野菜美味しい……」

丸眼鏡のウマ娘、イクノデイクタス先輩が焼けたお野菜を載せてくれる。いい焼き加減でとても美味しい。

「あー！ テイオー美味しそうな食べてる！ イクノー！ ターボ

にもちようだい！」

青髪ツインターールのギザギザ歯のウマ娘、ツインターボ先輩がイクノデイクタス先輩に絡んでいる。その横では栗毛のウマ娘、マチカネタンホイザ先輩にツインターボ先輩の振り回した腕が直撃して鼻血を出していた。大丈夫だろうか……

「あー！ お前はブラックプロテウスだな！ いぎ尋常に勝負だ！」

「えっ!? ちょ、ちよつと待ってくださいツイインターボ先輩。いきなり言われても……」

何故かいきなり指を突き付けられて勝負を申し込まれる。今は普段履き用の靴で全力では走れないんだけど……

「同じ大逃げのウマ娘として負けられない！ 今から勝負だー！ ここからあそこの岩まで往復！ よーい……ドン！」

こちらの話を聞かずにいきなり走り出して行ってしまう。仕方なくテイオー先輩にお皿を預けて追いかけていく。

ツインターボ先輩のトップスピードは目を見張るものがある。恐らく加速も最高速度も、スズカ先輩並み、もしくはそれ以上に速い。ターボエンジン全開、とはよく言ったものだ。

砂浜で、彼女も普通の靴を履いているのに凄まじいスピードである。私も全力で走っているのに追いつくどころか引き離されていく。ええいもう、裸足の方が走りやすい！ 靴をその辺に脱ぎ捨てて私も砂を大きく巻き上げて追走する。

「ターボは負けないぞおー!!」

ツインターボ先輩が岩をタッチして引き返してくる。私も少し遅れて後を追いかけて……あれ、何だか少しずつターボ先輩が遅くなってきたような……?」

「ターボは……負けないぞお……」

ターボ先輩が急にへ口へ口になってそのままドサリ、と砂浜に倒れてしまった。これが……逆噴射……!!

「ええつと……大丈夫ですか、ツインターボ先輩？」

流石に放っておくわけにもいかなないので揺すって様子を窺ってみるが完全にバテてしまっているようで動けそうにないみたいだ。仕

方ないので背負ってテイオー先輩たちの方へ戻る。

「お前……いいやつだな……何かあったら、ターボに頼るんだぞお……」

背中ではターボ先輩が頼もしいことを言ってくれる。ただ、今の状況でなければもつと頼もしかったのだが……

テイオー先輩たちのところにターボ先輩を送り届けて（ちゃんと靴も回収した）私も食事を再開しようとした。

「へいらっしやい！ 金船寿司美味しいよー！」

……再開しようとしていたら、なぜか砂浜にお寿司屋さんがオープンしていた。机と椅子が並んでいて、そこに板前さんの恰好をしたゴルシ先輩がいる。無駄に似合っている……

ちなみにすでに席にはマッククイン先輩が座っていて、山のように盛り付けられたマグロ丼を美味しそうに掻き込んでいる。

「……（ちよいちよい）」

ゴルシ先輩がこちらを見てニヤリと笑みを浮かべて手招きしてくる。ああ、これは逃げられないな……

「らっしやい！ ご注文は何にしやすか？」

「あ、えっと……何があるのかわからないんですけど……？」

諦めて席に着く。注文を聞かれるが何処にもお品書きはない。多分さつき捌いていたマグロはあるんだろうけど……

「じゃーゴルシちゃんのオススメで握ってやるぜ！ ……へいお待ち！」

「あ、ありがとうございます……これは一体……？」

寿司下駄の上に数貫お寿司を盛り付けて出してくれた。白身の魚や黒い魚卵が載った軍艦などが置かれている。

「岩魚に鮎、山女魚、後はキャビアだぜ！」

おかしい、マグロはどこに行ったんだ。まさかマッククイン先輩が全部食べたんだろうか。それにキャビアはともかく、他のものは川魚のはずなんだけど……？

「い、頂きます……あ、美味しい……」

臭みもなく、しつかりとした淡白な肉質が引き出されていてとても美味しい。キャビアはちよつと塩辛かったが、お米の甘さとかにマッチしている。

「だろー？ ほら、これも食べてみな！ 黄金ラーメンだ！」

どんつとラーメンが机の上に置かれる。お寿司屋さんではなかったんだろうか？

その後もたこ焼きやピザ、デザートにアイスクリームを出してもらったりして、お腹いっぱいになるまで食事を振舞われた。全てとても美味しかったが、ちよつと今日体重計に乗るのが怖くなってしまったのは内緒である。

第十六話 夏合宿・その3

【トレーナーSide】

到着初日の休養を明けて今日から本格的なトレーニングに入る。ちなみに昨日はトレーナー同士で集まって軽く飲み会をしていた。ウマ娘たちもウマ娘同士で集まって催し事をしていたようである。

昨日俺はノンアルコールで済ませてある。他のトレーナーも飲みすぎた奴はいなかった。まあ、あまり酒臭いとトレーニングに障るからな……ウマ娘は鼻がいいから、匂いには気を付けないといけない。歯磨きと着替えを済ませて急いでトレーニング用の砂浜へ向かう。ちなみに、現在時刻は4時である。

もう一度言おう。現在時刻は4時である。勿論午後4時ではなく、午前4時だ。

まだ太陽も昇ってないようなこんな時間に何故急いでいるかという、ホテルのスタッフからとある連絡を受けたからだ。

『黒鹿毛のウマ娘が着替えと思わしき荷物を持って砂浜へ向かった』と。

いつかやるとは思っていたが、まさかトレーニング初日からやらかしてくるとは思わなかった。釘を刺すのを忘れていた俺も悪いが……

なるべく急いで砂浜へ向かう。トライアスロン用にと持ってきておいたスクーターがさっそく活躍する時が来たな……

暫くスクーターを流して砂浜に辿り着く。さっと見渡すと見慣れた綺麗な長い髪を後ろで一纏めにしてしているウマ娘が準備体操をしていた。既にトレーニング用の水着に着替えている。

「やっと着いた……やっぱり居るし……おーい！ テウス！」

少し大きめの声で呼びかけると耳をピンとさせてこちらに振り向

く。そしてパツと明るい表情になってこちらに駆け寄ってきた。

「トレーナーさん！ おはようございます。様子を見に来てくれたんですか？ ありがとうございます」

本人はいつも通り呑気にしている。何だか焦っていたのがバ鹿らしくなってきたな…怒る気にもなれず、肩から力を抜く。

「ああ、おはよう……こんな早くからトレーニングして……ちゃんと寝たのか？」

「はい、寝ましたよ？ えっと、8時くらいに寝て3時くらいに起きたので……7時間くらいは寝ました！」

「随分早く寝て早く起きたな……」

「トレーニングするのが楽しみで楽しみで、つい早く起きてしまっ……」

遠足の前眠れない子供かよ。いやこいつ子供だったわ、去年まで小学生だったわこいつ……

「ちよつと昨日食べ過ぎてしまいましたし、早めに起きて絞っておこうかなあつて……あ、あんまりお腹見ないでくださいね！」

言われてお腹を見ると心なしか少しぼっこりしている気はする。スペが太り気味になった時よりはマシだとは思うが……見つめているとさつと手でお腹を隠した。見上げると少し頬が膨れている。見すぎてしまったようだ。

「悪い悪い。これ以上見ないから許してくれ。ちゃんと朝食前には戻ってくるんだぞ？」

「はい！ 行ってきます、トレーナーさん！」

楽しそうに砂浜を駆けていくテウスを見送る。放っておいてもちゃんと決まった時間には戻ってくる子なのであまり心配はしてない。さて、戻ってもう一度仮眠してくるか……

【ブラックプロテウスSide】

朝練を終えて大浴場で軽く汗と砂を流してから一度部屋に戻る。やっぱり沢山身体を動かしてからお風呂に入るととてもさっぱりして気持ちがいい。

「あー！ テウス、どこ行ってたのよ。探したんだからね？」

部屋に戻るやいなや、スカーレット先輩に詰め寄られてしまった。

「あ、ごめんなさい……書き置きか何かしてから行くべきでしたね」

今まで同室の人が居なかったからそのあたりの気遣いが出来ていなかった。心配をかけてしまったのはとても申し訳ない。

「ま、無事だったならいいわ。トレーニングしてたの？ 楽しかった？」

「はい！ とつても楽しかったです！ 時間が許す限りずーっと走っていたくらいでした！」

「そう、それは良かったわ。自主練すぎて疲れ果てちゃわないように気を付けなさいよ？ さ、朝ごはん食べに行きましようか。朝食はビュツフェ形式らしいわよ？ 楽しみよね」

スカーレット先輩の後ろについていく。相当楽しみらしくスカーレット先輩は鼻歌を歌っていた。

「私も楽しみです！ 美味しいお野菜が沢山あるといいんですけど」

「食べ過ぎでそれ以上お腹が出て……あれ、引っ込んでるわね？

昨日寝る前はあんなにぽっこり出てたのに」

スカーレット先輩が優しくお腹をさすってくる。私妊婦じゃないんですけど？

「沢山トレーニングしたので引っ込みました！ 少し動けばあれくらい引っ込みます！」

「あんまり増減が激しくても身体には負担よ？ 気を付けなさいね」

さすった後ポンポンとお腹を叩いてくる。とてもくすぐったいのでやめてほしい。

お腹弄りをされながらもレストランへ辿り着く。仕返しにこっちも触り返したりしていたので少し時間がかかってしまった。

「ちよつと遅れちゃったわね……って、何よこの惨状!？」

沢山用意されていたであろう皿や大鍋は殆ど空になっており店員さんが慌ただしく補充に動いている。

しかし、補充するたびにお腹をパンパンに膨らませたスペ先輩が纏めてかつさらっていく。

「ス、スペちゃん？ そのあたりにしておいた方が……」

「美味しくて止まりませえん!!!」

スズカ先輩が止めているが一切止まらずひたすらに食べ続けている……周りの先輩たちも呆然とそれを見ているだけで彼女を止められる者は誰も居なかった。

「え、ええつと……どうしましょう、スカーレット先輩。これじゃご飯食べられないですよ？」

「スペ先輩が食べる前に自分たちの分を確保するしかないわね……提供される前に少しずつ分けてもらいませよ。スペ先輩は食べ過ぎて動けなくなったら止まるでしょ」

スカーレット先輩と一緒にキッチンへ向かう。悲鳴を上げる料理人さんに頭を下げつつ自分たちの分の朝食を分けてもらい、席に着いた。

「スペ先輩、朝からあんなに食べて大丈夫なんですかね……」

「大方食べ放題って聞いて暴走しちゃったんでしょね……正気に戻った後に後悔すると思うわ。あ、一応トレーナーに伝えておきませよ」

スカーレット先輩がスマホを取り出してトレーナーさんにメッセージをちよちよいつと送った。トレーナーさん、頭を抱えていないといいんだけど……

辺りを見回すと同じように笑っている先輩も居れば青筋を浮かべている先輩もいる。

グラス先輩は鬼を宿したような、そんなオーラを纏っていた。近寄らないでおこう。

ターボ先輩は『スペシャルウィークもターボが倒す！』と張り切つてスペ先輩と食べ物の奪い合いに行っている。誰か止める人はいないのか……

「おい、ブラックプロテウス、スカーレット。早くあれを止めてくれ」
青筋を浮かべていた先輩、エアグルーヴ副会長がこちらに話しかけてくる。何という無茶ぶりをしてくるのか、この先輩は……

「止められると思いますか、エアグルーヴ副会長」

「そうですよ、エアグルーヴ先輩！ 止められたらこんな惨状にはなっていないですよね!？」

スカーレット先輩と揃って無理だと首を振る。正直止めに入ったら食べられてしまいそうな、そんな危険を感じてしまう。

「まあ、私も止めようとして全く相手にされなかったから……スズカの声ですら届かないのならもうどうしようもない。力尽くで引きはがそうにも私と会長、ブライアンのウマ娘三人掛でもびくともしなかつたから……ブラックプロテウス。お前のパワーなら何とかならないか?」

「いやいやいや！ 先輩方三人と私一人のパワーが釣り合うわけがないじゃないですか！ それにシンボリルドルフ会長とナリタブブライアン副会長は何処に行つたんですか?」

辺りを見回しても二人の先輩はいない。何処へ行ってしまったんだろう……まさかスぺ先輩が食べて……

「会長はホテルの人たちに謝罪に、ブライアンはおハナさんと沖野トレーナーを呼びに行っている。もうしばらくすれば戻ってくるだろう」

さ、流石にそんなことはないか……ちよつと恥ずかしい。

「……ひとまず引きはがしを試してみますけれど……手伝ってくださいいよっ。」

このまま放っておいたら昼食や夕食の分まで食べられかねない。トレーナーさんたちが来るまでに止めておかないと……

「スぺ先輩！ そのあたりにしてください！」

エアグルーヴ副会長とスカーレット先輩、そしてスズカ先輩と私の四人でスぺ先輩を力尽くで止めようとする。ちなみにターボ先輩はお腹をパンパンにしてそのあたりに転がっている。大食い対決でスぺ先輩に挑むのはやはり無謀なようだ。

「モット……モットタベル……」

四人で止めようとしても全く止まらない。完全にリミッターが外れてしまっている……

いったい何が彼女を突き動かしているのか、というか何故正気を失っているんだろうか……

「お？ スペの奴食べてんなー。あの薬すげー効力だなー」

入口から手を頭の後ろで組んでかなりリラックスしたような状態でゴルシ先輩が入ってくる。

「……ゴールドシップ？ 今聞き捨てならない言葉が聞こえたような気がするのだが……」

エアグルーヴ副会長がギギギとゆっくりゴルシ先輩の方を振り向き、にっこりと笑顔を浮かべる。今から起こるであろうことを予想し、私はスカーレット先輩と一緒に距離を取った。

「ああ、昨日マックイーンと一緒に体重計で悲鳴上げてたからなー。アグネスタキオンから貰った『食べれば食べるほどカロリーを消費するようになる薬』を朝一で飲ませてやったんだぜ！ マックちゃんには逃げられたけどなー！」

食べれば食べるほど……？ それは一種の永久機関なのでは？

「そうか……この騒ぎはお前のせいか……」

「あつやべつ」

「ゴオオオオールドシップウウウウウウ！！！！」

逃げ出すゴルシ先輩をエアグルーヴ先輩が般若の様な顔を浮かべて追いかけていく。つまり薬が切れるまではスペ先輩は止められない……？

その後は止めるのはあきらめて、料理人さんたちにひたすら頭を下げに行った。

朝食を終えてから一時間後、スピカ全員で砂浜に集合した。ちなみにスペ先輩はトレーナーさんが来たあたりで正気に戻って平謝りしていた。パンパンに膨れていたお腹はすぐに元通りになっていたの

で薬のあまりの効力に恐れ戦いたものである。

「朝からいろいろ事件はあつたが……まあいい、気合を入れなおしてトレーニングだ！ 今日午前は砂浜で、午後からはコースでの予定だ。今日は初日だし、流すくらい軽いものにしておけ。メニユーはさつき渡した通りだ。じゃあ、始め！」

トレーナーさんの合図で皆散らばっていく。私のメニユーは砂浜でのタイヤ引き、筋トレ、遠泳、ランニング……それが終わったら全員一緒に早押しクイズ大会だそう。

前四つはともかく、一番最後は何なんだろう。レクリエーションか何かだろうか……

多分クイズ大会ならゴルシ先輩が圧勝すると思うんだけどな。多分スピカの中で一番頭がいいのはゴルシ先輩だ。普段ふざけているけど、時折アグネスタキオン先輩の研究結果に口を出していたりとかするし。

タイヤを三つ繋げて、一番前のタイヤを身体に繋ぐ。全てのロープがしっかりと固定されていることを確認して、最初の一步を……

「……って、テウス！ 軽いものにしろって言っただろ！ 一つにしとけ一つに！」

踏み出そうとして、出鼻を挫かれた。しゅしゅ繋いだロープを解いて一つだけにする。

「全く……ゴルシィ！ お前は何やってんだ！ 城を作るな城を！ 頼むからトレーニングしてくれ！」

私を止めた後トレーナーさんはゴールドシップ先輩の方へ向かった。そちらの方を見ると立派な砂の名古屋城が建っていた。えつと……金つながりだろうか？

別の方を見るとスカレット先輩とウオッカ先輩は競い合うように遠泳していた。スズカ先輩とスベ先輩は筋トレ、テイオー先輩とマックイーン先輩はランニングをしている。ここは私もゴルシ先輩と同じトレーニングをするべきだろうか……

「ちえー、つれねーなトレーナーはよー……お、マックちゃん！ 一緒にアトランティス探しに行こうぜ！」

「いきなりなんですのゴールドシップ!?　ちよ、こつちに来ないでくださいまし!　きやああああ!」

「ちよつとゴルシー!?　マックイーンはボクとトレーニングしてるんだからねー!?　あ、ちよつと、勝手に連れてかないでよー!」

悩んでいるとゴルシ先輩はマックイーン先輩に絡んでいつて連れ去ろうとし、テイオー先輩に追いかけていた。

よし、一人でトレーニングしよう。タイヤ引きは二人でやってもあまり意味がないし……気を取り直してタイヤ引きを再開した。いつもの坂路より引きやすいけれど、砂に足を取られてしまいそうになつてパワーは結構使う。

ずるずると引きずっているうちにゴルシ先輩が作っていた砂の城を崩してしまい、報復だとか言つて首だけ出して砂に埋められたりもしたが、まあ有意義なトレーニングだったと思う。

第十七話 夏合宿・その4

夏合宿もそろそろ終わりになる。コースで先輩たちと併走したり、遠泳して溺れかけたターボ先輩を救出したり、ゴルシ先輩と無人島でキャンプをしたり、週一でバーベキューしたり……なんだかトレーニングより遊んでる方が多かった気がする……

ちなみにSDTは知り合いの先輩は皆予選を通過している。スペ先輩は多少太め残りだったが何とか予選通過を挽ぎ取ってきた。もし落ちていたらグラス先輩に切腹させられたりしそうだったし、ほとと胸を撫で下ろしたのであった。

今はトレーニングの合間に屋根のあるところとあるレースを見ている。フジキセキ先輩が出走するメイクデビュー、新潟レース場芝1200mである。

本当は現地で見たかったのだがトレーナーさんの都合が付かず、流石にリギルの人に送ってもらおうけにもいかないので、トレーナーさんに借りたタブレットで一緒に視聴している。

フジキセキ先輩は2枠2番の二番人気だ。多少調子を崩してしまっているようで他の娘に一番人気は譲った形になる。

『さあ、新潟レース場第5レース、メイクデビュー。スタートしました。ちよーつとフジキセキが立ち遅れました。最後尾になっています』

スタートで少しフジキセキ先輩が出遅れた。多少ゲートを苦手としているようだ。

『まず中からクライキネステが上がってきました、体半分ほどのリード。追走するのはモアザンエニシング、並んでフォシユーズ。2バ身3バ身離れてアンペールユニット、1バ身差エレガンジエネラル、そしてフジキセキ、後ろから三番手。リボンカロルは2バ身半ほど離れた。最後尾は4バ身ほど離れてコンテストライバル』

暫く走っているうちにすると後方三番手に付けている。出遅

それでも冷静に走れているようで周りもきちんとして見えているようだ。この冷静さ、賢さは脅威だろう。

『各ウマ娘第三コーナーに入っていました。クライキネステ先頭。リードは1バ身くらいか。二番手にはフォシユーズびつたりとマークしている。2バ身遅れてモアザンエニシング。その内からフジキセキ。三番手まで上がってきている！ 内から更に前を窺っているぞ！』

凄く加速と賢いレース運びだ。結構出遅れたのにそれを感じさせない走りを見せてくる。やはり次期三冠ウマ娘とまで言われているだけはある。私も盗めるところは盗んでいかないと……

『400を切りました！ フジキセキ抜け出すか、おおっと！ ここで7番アンペールユニット転倒！ 転倒です！』

先頭集団が最後の直線に入ろうとしたときに、カーブで滑ってしまったかのようにアンペールユニット先輩が転倒した。

『アンペールユニット大丈夫か！ おっと、立ち上がった!? 立ち上がったぞアンペールユニット！ 最後方になってしまったが懸命に走っている！』

転倒したのにもかかわらず、アンペールユニット先輩は諦めることなく立ち上がって走り始めた。フォームも滅茶苦茶だし、右足の踏み込みがおかしい。明らかに折れてしまっている。今すぐにでもレースをやめるべきだ。それでも、彼女は立ち止まらずに走っている。それだけレースにかける想いが強いということなのだろうか。

『ここでフジキセキ先頭に出た！ 残り200を通過してフジキセキ先頭！ 先頭2番フジキセキ、100を越えて独走態勢！ フジキセキ先頭でゴールイン！ 2着は1番フォシユーズ。その後5番クライキネステ。あんなに出遅れたフジキセキですが、直線では離す一方でした。アンペールユニットも何とか最後にゴールインしましたっ、おっと倒れた！ その場に倒れてしまった！』

フジキセキ先輩は直線で一気に伸びて他の娘たちをかわしきり先頭でゴールインした。転倒してしまったアンペールユニット先輩も何とかゴールしたがそこで糸が切れたのか、ばたりと倒れてしまう。

折れた足で無理に走ったのだ。粉碎骨折、脱臼を起こしてしまっても不思議じゃない。フジキセキ先輩も勝ったというのに少し浮かぬ顔をしている。

「……トレーナーさん。どうして、アンペールユニット先輩は……あんなになつてまで。私にはよくわかりません。怪我をして、その状態になって走ろうとするのが。確かに勝負を諦められないのはわかります。でも、そこで無理したら2度と走れなくなるかもしれないのに。どうしてそこまで、走れるんでしょうか」

「ウマ娘が走りたいと思う理由は人間の俺には理解しきれない。それでもいいなら俺の考えを伝えるが……今回は最後のレースになるかもしれない。次なんてないかもしれない。そう思ったから、最後まで走ったんだろうな。後悔しないために」

そして、トレーナーさんは言葉を続ける。

「いつだってお前たちウマ娘は故障と隣り合わせだ。勿論俺たちトレーナーも細心の注意を払っているが、確実に明日走れる保証なんてしてやれない。昨日何もなくても、今朝起きたら走れなくなってることだってあるかもしれない。だから、明日後悔しないために、今日に全身全霊を込めてしまうことは仕方のないことなんだと思う」

「……わかったような、わからないような……でも、確かにそうかもしれない。私が彼女の立場でも……きつと、同じことをしたと思います……ちよつと、外の空気を吸ってきますね」

「ああ、そうだな……今日のトレーニングはここまでにしよう。俺もお前も冷静になれないだろうからな。お疲れ。日が暮れる前までにはホテルに戻って来いよ」

少し頭を冷やしたくて、その場を後にする。トレーナーさんは私を静かに見送ってくれた。

海岸まで出て行って潮風を浴びる。8月で暑いが、雲が少し出ていて太陽を隠してくれているので辛いほどではない。

何をすることもなく、ぼーつと海を眺める。少し走ろうか……そう思

うが、足は走り出そうとしなくて、ただじつと立ち止まっている。

「はーい、後輩ちゃん！　こんなところで立ち止まってどうかしたの？」

「ひゃあっ!?　ま、マルゼンスキー先輩？　あ、こんにちは」

ぼーっとしていると後ろからいきなり抱き着かれた。多分声的にマルゼンスキー先輩だろう。今まで一言二言程度なら話したことがあるが、面と向かって二人きりで話すのはこれが初めてである。

「ええ、テウスちゃん。こんにチワワ。何かおセンチみたいだったから、ちよつとお節介をしに来たの。迷惑だったかしら？　そうじゃないなら、お姉さんが聞いてあげるわよ？」

「いえ……はい、聞いていただけますか。マルゼンスキー先輩」

近くに座って、悩んでいたことを打ち明ける。先ほどレース映像を見ていたこと、そこでアンペールユニット先輩が転倒していたところも見てしまったこと、それでも諦めずに走りぬいた彼女を見て心がモヤモヤする、ということ。思いつく限り脈絡なく語ったと思う。

「そうなの……私もね、走れなかったレースがあるの。その頃はダービーにおカタイ規制があったの。それで走れなくて……『ダービーに出させてほしい。枠順は大外でいい。他の娘の邪魔は一切しない。賞金もいらさない。私の能力を確かめるだけでいい』って、そう何度もお願いしたんだけど……変わらなくて。今まで出たレースに後悔なんて一つもないけど、ダービーに出れていたらどうなっていたんだろうって、今でも思うのよね」

マルゼンスキー先輩はURA時代8戦8勝、ドリーム・シリーズでもかなりの勝上率を誇る。スーパーカーと呼ばれ、逃げウマ娘においては間違いなく最強の一角に入るだろう。

後、逃げウマ娘で伝説が残っているのはトキノミノルさんくらいだろうか。10戦10勝、皐月賞とダービーを制した幻のウマ娘。『他の娘とはスピードの絶対能力が違うが故に、ただ単に逃げのように見えているだけ』とまで言われるほどのウマ娘だったが、破傷風を患いその後遺症により引退したと言われている。破傷風は致死率50%ほどあるというので、もしかするとそのまま死んでしまったのかもし

れないが、その後の消息は一切不明である。

「だから、その娘の気持ちもよくわかるわ。走ったことに、後悔なんてないと思う。しばらくすれば、きっとテウスちゃんにもわかるわ」
そういって、マルゼンスキー先輩は頭を撫でてくれた。

「そうですね、そう思うことにします。今はまだわかりませんが、きっとその言葉がわかる 때가、来ると思いますから」

走れなかったこと、走り切れなかったことに対する思いは、私には想像もつかない。けれど、きっといつの日かわかるときが来るだろう。そう思っ、このもやもやは胸にしまっておくことにした。

「そのくらいの意気込みでもいいのかもしれないわね。そうだ！
気晴らしにそのあたりをドライブでもする？　きっと気持ちいいわよ？」

「確かマルゼンスキー先輩のお車ってあの真っ赤なスポーツカーですよ？　一度乗ってみたいと思っっていたんです！　是非お願いしますー！」

凄くかっこいい車で登校してきているのを何度か見たことがあるし、海岸沿いの道路に今停まっている。一度は乗ってみたいと思っ、いたものだ。折角のお誘いだし乗せてもらうことにする。

「ええ、任せて。楽しいドライブをご提供するわ」

そういって笑顔で車まで案内してくれる。2名乗りの真っ赤なスポーツカー、高さは1mくらいで、デザインも良くてかなりスタイリッシュな印象を受ける。こんな車に乗るのは初めてなのですごいドキドキする。

助手席の扉を開けてもらう。何と扉が上に開いた。一瞬壊れてしまったのかと思っておろおろしてしまつたのを少し笑われてしまった。

「ふふ、珍しいでしょ？　シザードアって言うのよ。日本の車だとまず搭載されていないものね」

「うう、はい……びっくりしました。今までお父さんの車かトレーナーさんの車か、後はバスくらいにしか乗つたことがなかつたので……」

「これからも機会があつたら乗せてあげるわ。あ、シートベルト

ちやんと締めた？ それじゃ、制限速度内でかつ飛ばすわよ！」

助手席に座ってベルトを締めると、マルゼンスキー先輩がアクセルを踏み込んで、車を一気に加速させる。普通車などとは比べ物にならない加速性能で一気に制限速度ギリギリまで加速して、そのまま山道の方に進んでいく。

凄く爽快感だ。何というかこう、風になっているかのようなそんな感覚になる。

「気持ちいいでしょ？ 山道を攻めるともつと気持ちいいわよ」

「はい、すっごく楽しいです！」

「じゃあ、もつと激しく攻めちゃうわ！ しっかりつかまっててね！」

その日は日が暮れるまで一日中隣に乗せて走り続けてくれた。悩みなんてすっかりすべて吹き飛んでいて、凄く楽しい時間を過ごせた。今度もまた乗せてもらおうと思い、約束を取り付けようとする都合宿からの帰りに乗せてもらえることになった。疲れているのではないかと不安になったがそれくらいどうってことないらしいので、お言葉に甘えることにしたのだった。

第十八話 芙蓉ステークス

楽しかった夏合宿も終わり、時は過ぎて10月。ついに私が出走するレース、芙蓉ステークスの日がやってきた。ちなみに今回のSDTは一着はマルゼン先輩、二着はシンボリルドルフ生徒会長、三着はグラスワンダー先輩だった。大体前評判通りといったところで、ドリーム・シリーズは現状リギル一強の状態だ。

今日の中山の天気は晴れ、バ場状態も良となっている。ただ、第9レースの為内側は少し荒れているかもしれないとトレーナーさんが言っていた。まあ、特に問題はないだろう。

蹄鉄などの点検をしつつ、パドック入りを控室で待つ。

今日のレースは10人が出走する。フルゲート18人を割れてしまっているが、この時期のOPクラスのレースなら特に珍しいことでもないらしい。

客入りもちよつと少なめだそうだ。というのも今日は同じ日に中京の方でGⅢ、シリウスステークスが実施されている。重賞レースとOPレースでは注目度が違うということだろう。

ただ、中京の方もそんなに人が入っているわけではないという。それは、シリウスステークスがダートで実施されるからだ。

今のURAの主流は芝の中距離だ。その前後距離であるマイルや長距離も根強い人気がある。一時期短距離はあまり人気がなかったが、それもニシノフラワー先輩やサクラバクシンオー先輩、キングヘイロー先輩などの活躍によって大分改善されてきている。

だが、ダートの人気に関しては低迷している。大体のレース場でダートコースは芝コースの内側に設置されているため、観客から見辛かったり、URAがダートを興行的に盛り上げていくという意識に乏しかったりすることが主な原因だ。

スマートファルコン先輩が頑張って盛り上げようとしているが未だ道は険しい。ファンの人によってはダート専門のウマ娘を毛嫌にする人もいるくらいなんだそうさ。

私はダートも好きなので、機会があればダートのレースに出場して

みたいとは思っている。ただ、スピカの先輩方はターフ専門と言ってもよく、殆どダートのノウハウがない。マックイーン先輩がデビュー戦で走ったくらいだろうか。そのマックイーン先輩も今併走をお願いしたり出来るような状態ではないので、調整は非常に難しいだろう。

アメリカでダートを走っていたスズカ先輩も、向こうのダートは砂ではなく土だ。なので走り方が結構異なるし、参考にはならないことの方が多い。

私のお友達も芝専門の娘ばかりだし……もし走るようなことになったら、タイキシヤトル先輩かエルコンドルパサー先輩、それか一度も話したことはないがスマートファルコン先輩辺りにお願いして併走してもらおうことにしよう。

「テウス、そろそろ時間だぞ。準備できたか？」

考え事をしているとコンコン、と扉がノックされて、扉の向こうから呼びかけられる。トレーナーさんの声だ。

鏡の前で姿を確かめ、ゼッケンや体操服の乱れを確認する。大丈夫そうだ。

「はい、大丈夫です。行きます！」

「……よし、今日も調子は良さそうだな！パドック行ってこい！」外に出るとトレーナーさんはこちらを見て満足そうに頷き、軽く頭を撫でて送り出してくれる。何だか事あるごとに頭を撫でられる気がする……テイオー先輩やスカーレット先輩はこんな頻繁に撫でられたことはないと言っていたので明らかに子供扱いされてる気がするんですけど……まあいいか。嫌じゃないし。

行つてきます、と返して、パドックへ駆け足で向かう。私は今日は6枠6番だから、パドックも6番目だ。

今回のレースには知り合いが一人居る。1枠1番、リボンマンボ先輩だ。メイクデビューで戦った相手に、未勝利戦を問題なく圧勝で勝ち進んできた娘だ。

ただ、今回のレースはOP戦。つまり、どの娘も最低一勝はしてい

るウマ娘たちだ。どの娘たちも強敵で、油断しちやダメだろう。頬を軽くたたいて気合を入れなおして、パドックへ臨んだ。

パドック、本バ場入場を済ませてファンファーレを待つ。今回は6枠6番なので、ゲートは後入りだ。狭いゲートは今でもちよつと苦手なので、少しでも短い偶数番なのは少し気が楽になる。

「こんにちは、ブラックプロテウス。今日は貴方に勝ってみせるから、覚悟していてね」

深呼吸していると、リボンマンボ先輩が声を掛けてくる。というか、宣戦布告してくる。

「こんにちは、リボンマンボ先輩。私も負けるつもりはありません。良いレースにしましょう」

痺れるくらいの闘志に笑顔で返す。そうしているとファンファーレが鳴り、お互いの位置に戻る。

『中山レース場、第9レース、芙蓉ステークス。芝2000mの右回りで行われます』

『三番人気、8枠9番、ミントドロップ。前走は1600m。後方からの追い込みを得意とするウマ娘です』

『二番人気を紹介しましょう。リボンマンボ。好位追走、王道の走りを好むウマ娘です』

『今日の一番人気、ブラックプロテウス。デビュー戦ではシニア級の2000mレコードをも塗り替えた、今話題のウマ娘です。今日もその鮮烈な逃げ足を見せることが出来るのか！』

遠くに聞こえる実況の声を聴きながら、奇数番から順番にゲートに入る。大きい歓声が聞こえてきて、心臓がドキドキし始める。胸に手を当てて、ゆっくり深呼吸をして、心を落ち着かせる。

『各ウマ娘ゲート入り完了しました……今スタートしました！』

ガタン、と音を立ててゲートが開く。今日のスタートも可もなく不可もなく、普通のスタートだ。

『おおっと!? リボンマンボ飛び出した! リボンマンボ、一気に

飛び出してブラックプロテウスからハナを奪う！ これは予想外の展開だ！』

だが、私より早く飛び出したリボンマンボ先輩が内側を、そして先頭を譲らず、先頭でレースを引っ張る形になった。

『先頭からリボンマンボ。二番手はブラックプロテウス、ぴったり後ろをマークしています。三番手にオネストワーズ、大体1バ身ほどの差か。大きく離れてサコツシユ、差がなくリボンファイナーレ。2バ身半ほど離れてアグリゲーション、並んでノワールグリモア、少し離れてリボンガボット。掛かり気味に上がっていきますヤツピーラツキー。そしてシンガリ、ミントドロップ』

リボンマンボ先輩を風よけにするかのようぴったり後ろにつけて様子を窺う。全力で逃げているようで、思ったよりハイペースだ。最初の2ハロンは先行争いが激しくなるがその後は落ち着くと聞いたが、第1コーナーを過ぎてもペースを落とさず走っている。

『向こう正面に入りました先頭は変わらずリボンマンボ。スタミナは持つのか？ ブラックプロテウス、不気味に息を潜めています。オネストワーズは息を入れているのか少し差が開いた。そこより後ろは団子状態になっています』

少し左右に動いてみるとこちらの頭を抑えるようにリボンマンボ先輩も動いてくる。そのあたりの駆け引きはお手の物ということだろうか。

だけれど、やはり少し疲れてきたのか脚が鈍い。一度大きく振ってしまえば逆を切り込んでいけるだろう。

『ブラックプロテウス、ここで仕掛けっ!? ブラックプロテウス、仰け反ったぞ!? アクシデント発生かっ?』

ぐつと踏み込んで左に大きく振り、そして右に踏み込んだ、その時。頭に強い衝撃が走り、視界左半分が真っ赤に染まった。

【トレーナーSide】

『ブラックプロテウス、ここで仕掛けっ!? ブラックプロテウス、仰け反ったぞ!? アクシデント発生かっ?』

テウスが仰け反ったのを見て、柵から身を乗り出す。向こう正面に居ることもあつて姿がよく見えないが、上体を起こして仰け反っているのが見える。

「くそっ、何があつた! ゴルシ、見えなかつたか!」

俺から双眼鏡を奪つてレースを見ていたゴールドシツプについて詰め寄ってしまう。当の本人は少し難しい顔をしていた。

「んー、多分だが、前の奴の蹄鉄が飛んだなありや。それが運悪く頭に当たつたんだろ」

「落鉄ってことか……くそ、不運にもほどがある……」

ウマ娘たちは時速60キロ以上で走る。その為、レース前にちゃんど打つたとしても落鉄することは珍しいことじゃない。外れかけることも含めれば、1レースで1人2人は落鉄を起こしてしまうことだつてあるだろう。

ただ、それが後ろのウマ娘に直撃するなんて滅多にあることじゃない。不運、としか言いようがない。

ゴルシ以外のメンバーは顔を真っ青にしている、とても話せるような状態じゃなさそうだ。

『ブラックプロテウスにアクシ……いや、持ち直した! 持ち直しましたブラックプロテウス! 少し差が開きましたが仕掛けなおした。第3コーナーに切り込んでいく!』

実況につられてコースを見ると、仰け反っていた体勢を立て直して、スパートを掛け始めている。まるで当たつた影響なんてないかのように、いつも通りコーナーに突っ込んで行くのが見える。

蹄鉄は大体120gくらい、野球ボールよりちよつと軽いくらいだ。それが頭に直撃してダメージがない訳がない。下手すると脳震盪を起こしている可能性もある。無事であればいいんだが……

『リボンマンボ逃げられるか? おっと、リボンマンボ、第3コーナーを越えたところで少し外によれました。そこを内側からブラックプロテウスが切り込んでくる! 更にロングスパートで上がつて

きていたミントドロップが大外から上がってくるぞ！ ノワールグ
リモア、ヤツピーラツキー、サコツシユが上がってくる！ 他の娘た
ちも団子になって上がってくるぞ！』

落鉄の影響が少しよれたりボンマンボをかわして、いつも通りの
コーナリングで最内を回って先頭に立つ。いつもよりスピードは遅
いがそれでも十分な速度が出て……

『さあ最終直線に入ってブラックプロテウスせんど……ブラックプ
ロテウス、出血している！ 頭部から出血しているぞ!? 最終コー
ナーを曲がってくるまで見えませんでした、顔の左半分が真っ赤に
染まっている！』

最終コーナーを回ってくると、歓声とともに悲鳴が聞こえてくる。
頭か額が大きく割れてしまっているのか、左半分が血で染まってい
る。

「ありややべえな……」

「ああ、出血がひどいな……」

ゴルシの呟きに少なく言葉を返す。頭の皮膚は血流がいいから、傷
の大きさより大きく出血することがある。

「それもそうだし、こっから直線だ。今までは遠心力で外に血が飛
んでたかもしれないねえが、こっからは遠心力がかからねえ。下手すると
視界が全部潰れるぞ」

ゴルシに言われてハツとする。最終直線は293mしかないが、2
93mもあるとも言える。視界が全部潰れてしまうと真っ直ぐ進む
のは難しいだろう。このレースに出ているウマ娘たちは斜行したそ
の隙を見逃してくれるような娘たちじゃない。

『ブラックプロテウス、負傷しつつも先頭は譲らない！ 出血はま
だ止まっていないようですが、その足もまだ止まらないぞ！ 凄い根
性だ！ 荒れた内側を気にせず進んでいく！』

顔全体に血が広がって、殆ど前は見えていないだろう。それでもひ
たすら真っ直ぐに進んでいく。体操服にまで垂れて白い体操服が赤
く染まっているが、そんなことは全く気にならないと言わんばかりに
末脚を伸ばしていく。

『リボンマンボ、ミントドロップ、ヤッピーラッキーも上がっていくが届かない！ ブラックプロテウス、今先頭でゴールイン！ アクシデントにも負けずに勝利をもぎ取った！ そのフィジカルもさることながら、メンタル面でも強さを見せつけた！ 2着は1バ身差でヤッピーラッキー、3着はクビ差でリボンマンボが入りました。4着はハナ差でミントドロップ。5着はサコツシュ』

何とか先頭をキープしてゴールした。肩から力を抜く。ここまで心臓に悪いレースは久しぶりだ……

『レースを制しましたブラックプロテウツ、おおおつと!!? ブラックプロテウス、勢いそのままに外ラチまで突っ込んだ!! 出血で前が見えていなかったのか!? 外ラチに激突してラチの向こう側に行ってしまったぞ!』

レースが終わった後、テウスが外ラチに激突して会場が騒然となる。やはり前が見えてなかったようだ。慌てて救急隊がコースに入っていく、テウスが突っ込んでいったところへ向かっていく。

『ブラックプロテウス、大丈夫でしょうか……おつと、姿を現しましたブラックプロテウス。問題なく立ち上がれるようです。救急隊に手を引かれて救急車に乗り込んでいます』

何事もなかったかのように姿を現したがまだ前は見えていないようだ。救急隊員に手を引かれて救急車に乗り込んでいる。つと、ぼーっとしてはいられない。こっちも動かないといけない。最低限必要な荷物だけ持って他はゴルシに預け、救急車の方に走る。

息を切らしながら救急車に辿り着く。こちらが駆け寄っているのが見えていたのかその場で待っていてくれていたようだ。

「テウス！ 大丈夫か!? 怪我の具合は!?!」

救急隊員に事情を聴くのもそこそこに扉を開けて乗り込む。中では頭部の怪我を応急処置していた。

「トレーナーさん？ 大丈夫です。軽く切っただけですから。あ、勝ちましたよトレーナーさん！ 見ていてくれましたか?」

いつも通りの呑気な声が返ってくる。

「大丈夫ならよかった……レースは見てた。よく頑張ったな、テウス」

「はいっ！ この後のウイニングライブも頑張りますね！」

「いやいや、お前がこれから行くのはステージじゃなくて病院だ。流石に頭を怪我してるのにライブは出させられないし、出させないぞ！」

流石のこの状態でライブをするのは無理だろうし、URAもさせようとはしてこないだろう。なんせ頭部の怪我の上外ラチに派手に激突して転倒している。このまま検査入院コースだろう。

「ええええ!! そんな！ ファンの人にお礼が出来ないのは申し訳ないです。ライブを楽しみにしてくれてる人も居るのに……もう血は止まってますし、この程度なら問題ありませんから、出させてください！」

「絶対にダメだ。問題ないわけないだろうが……救急隊員さん、このまま病院までお願いします。付き添いは俺がします」

「了解しました。受け入れ先病院へ搬送します。ほら、大人しくして……」

ライブに出たいとごねるテウスを何とか宥めて、何とか病院へと搬送してもらったのだった。

掲示板回 Part 1

今年のウマ娘達を見守るスレ Part 18

298 : 名無しのウマ娘ファン ID : B k p X 9 U v J s
もうすぐメイクデビューのパドック始まるな

299 : 名無しのウマ娘ファン ID : f z N f k T 6 R K
4月にメイクデビューってどうなん？

300 : 名無しのウマ娘ファン ID : P w T E Z Q s 8 R
早熟な子たちにはいいんじゃない？ 暑いと調子出せないって子も居るだろうし

301 : 名無しのウマ娘ファン ID : F Z 5 8 t 7 0 + y
4月から初々しい子たちが見れて俺としては大満足

302 : 名無しのウマ娘ファン ID : U z F O e C d N R
メイクデビューの子たちはガツチガチになってたりする子も居てほんと見ていて微笑ましくなるよな……ここから未来のG I ウマ娘が生まれるかもしれないと考えると心に來るものが

303 : 名無しのウマ娘ファン ID : z + 3 T L v C M I
あのシンボルドルフですらメイクデビューの時は初々しさが抜けてなかったからな……

304 : 名無しのウマ娘ファン ID : F R U A 7 x 6 C r
初々しいように見えて中央でデビューしてる時点でバリツバリのエリート定期

305 : 名無しのウマ娘ファン ID : x I N 7 A J 8 5 w

しかもそこから勝利できるのはほんの一握りだからな……3人に1人は未勝利のまま引退しちゃうし

306：名無しのウマ娘ファン ID：53JE d D H s Y
本当にレースの世界は非情だぜ……

307：名無しのウマ娘ファン ID：L a y l a D V 4 k
ところで今日デビューする娘の評判はどうなん？

308：名無しのウマ娘ファン ID：H a 2 x 8 B t 4 S
>>>307

あんまり印象の強い子はいないな

309：名無しのウマ娘ファン ID：N 5 E y i Q J J B
今年のジュニア級はフジキセキ一強だろう……今日の一番人気のリボンマンボもリボン一門のネームバリューありきで人気が高い感あるし

310：名無しのウマ娘ファン ID：4 d L G H Z z z L
ジエニユインちゃんの方が強いし！

311：名無しのウマ娘ファン ID：F b g 5 Y o T J u
いやいや、タヤスツヨシだろ？ フジキセキマイラーっぽいし、ジュニア級で勝ってもクラシック戦線は厳しいんじゃないかね？ 距離適性的にはタヤスツヨシの方が中長距離向きだろ

312：名無しのウマ娘ファン ID：n Y b 4 w u Y d L
まあとりあえず今日のレース見ようぜ？ もしかするとまだ見ぬ原石が眠ってるかもしれないし

313：名無しのウマ娘ファン ID：K P f u 4 + f o D

お、パドック始まったな

314 : 名無しのウマ娘ファン ID : l t s w 1 W 9 X S
リボンマンボちゃんは調子良さそうですね!

315 : 名無しのウマ娘ファン ID : d C o w R m B U 5
今日は彼女で決まりか?

316 : 名無しのウマ娘ファン ID : q R c d E t s f f
2枠2番はティツピングタツプか

317 : 名無しのウマ娘ファン ID : C S W O 1 C 6 q U
体つきのマイラーっぽい気がするな……ちよつと彼女には長い
かもしれない

318 : 名無しのウマ娘ファン ID : A d t 0 E x Q J 5
>>>317

見ただけで距離適性見抜くとかお前トレーナーの才能あるんじゃない?
ね?

319 : 名無しのウマ娘ファン ID : C S W O 1 C 6 q U
>>>318

まあ実際今勉強中だからな。中央試験難しすぎワロエナイ……

320 : 名無しのウマ娘ファン ID : b D N c 3 T 1 5 P
ワイ行政書士やけど中央トレーナー試験の問題集は一割もわから
んかったわ……

321 : 名無しのウマ娘ファン ID : P 2 a C J p W g P
トレーナー養成学校の入試合格率が大体5%くらいって聞くから
な

3 2 2 : 名無しのウマ娘ファン ID : 7 b d U d 9 o / r

入試でそれかよ……卒業して中央の試験に受かってってなると並大抵の国家資格よりよほど難しいんじゃないかね？

3 2 3 : 名無しのウマ娘ファン ID : A 7 0 p 9 6 4 d T

何人ものウマ娘のウマ生を背負う以上簡単にするわけにはいかな
いというのもあるだろうけどそれにしたって難易度高すぎるわ

3 2 4 : 名無しのウマ娘ファン ID : M q R p H B f Y Q

3 枠3番はアビルダか

3 2 5 : 名無しのウマ娘ファン ID : G M E X t 3 5 N z

ちよつと元気がなさそうですねえ……調整ミスかな？

3 2 6 : 名無しのウマ娘ファン ID : Y / T 8 h W D 0 l

まあ緊張してるんだろ……

3 2 7 : 名無しのウマ娘ファン ID : + p 6 7 o W M D c

4 枠4番のアクアオアシスは逆に入れ込みすぎてるな

3 2 8 : 名無しのウマ娘ファン ID : L 7 X W c N H h K

初レースだからしゃーない

3 2 9 : 名無しのウマ娘ファン ID : e J l K j X S + t

張り切りすぎて鼻息荒くなつてそうでかわいい

3 3 0 : 名無しのウマ娘ファン ID : w T T a j U W E I

次のフラワーネットは……疲れ気味か？

3 3 1 : 名無しのウマ娘ファン ID : 5 e u 6 Z f Q z 7

完全に調整ミスってますねクオレは……

332：名無しのウマ娘ファン ID：91TwsF4SG

6番サンセットグループは調子良さそうっすねえ

333：名無しのウマ娘ファン ID：IPtqdejMs

これは入賞あるで

334：名無しのウマ娘ファン ID：iqh5BosnX

今日はリボンマンボとこの子の一騎打ちだろ

335：名無しのウマ娘ファン ID：xrOrWc/sE

>>334 まだパドック終わってないから最後までわからん
ろ

336：名無しのウマ娘ファン ID：SlnR7NWUx

7番アイゼンテンツアーは……うん……普通？

337：名無しのウマ娘ファン ID：QXqDF+7qU

今までの娘に比べたら普通だな……特に入れ込みすぎてもないけど調子がいいって程でもない

338：名無しのウマ娘ファン ID：ejieE8jQ

恵体っばいから今後の成長が楽しみではある

339：名無しのウマ娘ファン ID：0m8ipA+iG

8番はフリルドマンダリンか。なんかふらふらしてないか？

340：名無しのウマ娘ファン ID：257+FFALr

遠目で見ても目の下のクマが目立つし完全に寝不足ですねこれは

341 : 名無しのウマ娘ファン ID : 34OcNQU / 7
緊張して眠れなかったんだろうな……俺も面接の前朝まで眠れなくて夕方まで寝てしまったことがある

342 : 名無しのウマ娘ファン ID : oLNz / iyCt
>>341 完全に面接遅刻してて芝

343 : 名無しのウマ娘ファン ID : bHrIGCI mE
大外枠はブラックプロテウスか、この子だけ中等部らしいな。しかも入学したて

344 : 名無しのウマ娘ファン ID : /lV2wYZto
この身体で中等部ってマジ？ ムツチムチちゃん……ダイワスカレットを思い出すわ。調子は……良さそうだな。なんかのほほんとしてる

345 : 名無しのウマ娘ファン ID : P g F p W 9 j a Z
なんか凄い穏やかに見える娘だな……ぽやぽやしてるっていうか、悪く言えば抜けてそうな娘

346 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9 / 0 + k 4 c T o
入学したてでいきなりメイクデビューとか無茶するなと思ったらチームスピカ所属で納得した。スペシャルウィークの時もやらかしてたよな。転入1週間でいきなりメイクデビューだっけ

347 : 名無しのウマ娘ファン ID : R T O R 5 G m R R
今回は2週間くらい期間取ってるみたいだけど違う、そうじゃない

348 : 名無しのウマ娘ファン ID : 3 T 3 k 6 5 7 u 9
今回もウイニングライブ棒立ちはやめてくれよ……いやネタにはなるけど

349 : 名無しのウマ娘ファン ID : s o z + 9 B i p q
これできてスピカは実績残してるからもうわからん

350 : 名無しのウマ娘ファン ID : M P m Z I p h l d
テイオーにマックイーン、スペにスズカに今年のウオスカと役者揃ってるからな……

351 : 名無しのウマ娘ファン ID : z w V Q R A o q r
>>350
ゴルシ忘れてんぞ

352 : 名無しのウマ娘ファン ID : D c F x Z o 5 v j
ゴルシはよくわからんからな……どんな実績だったつけ？

353 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9 r D M G / u J A
そういえばよくわからんなゴルシ

354 : 名無しのウマ娘ファン ID : M c Y q 7 3 J r 8
まあゴルシだからしやーない

499 : 名無しのウマ娘ファン ID : p c x G u 4 f e z
お、ファンファーレが鳴ったな。そろそろか

500 : 名無しのウマ娘ファン ID : S Z 7 W 3 e V T W
親の声より聴いたファンファーレ

501 : 名無しのウマ娘ファン ID : Y g 5 t R m u w K
>>500

もつと親の声聴いて

502 : 名無しのウマ娘ファン ID : KC2pH9uy4

>>500

親孝行してやれよニート

503 : 名無しのウマ娘ファン ID : SZ7W3eVTW

>>501

>>502

に、ニートちゃうし……レース場職員だから毎週聴いてるだけだし

……

504 : 名無しのウマ娘ファン ID : mm47Sirac

>>503

スレ見てないで仕事しろや

505 : 名無しのウマ娘ファン ID : dsabus/7q

辛辣で芝生えるわ

506 : 名無しのウマ娘ファン ID : j3q56atOc

ゲートイン完了したな

507 : 名無しのウマ娘ファン ID : HL/KcSaIH

ここの静寂がたまんねえんだ……

508 : 名無しのウマ娘ファン ID : Fh1vH/JFB

スタートしたな

509 : 名無しのウマ娘ファン ID : iFcOyFaEA

ブラックプロテウス飛び出したな

510 : 名無しのウマ娘ファン ID : F e a a m 8 6 h v
ハナから大分飛ばしてますねえ！

511 : 名無しのウマ娘ファン ID : k + J U O p j Z k
掛かってないかこれ……大分速いぞ？

512 : 名無しのウマ娘ファン ID : G + O T + t B t 7
もう後続と大分離れたぞ？

513 : 名無しのウマ娘ファン ID : Y H J N T g n 6 +
実況でも言ってるがまるでツインターボみたいなウマ娘だな

514 : 名無しのウマ娘ファン ID : J h U P l R h 5 l
逆噴射しないといいねえ……

515 : 名無しのウマ娘ファン ID : T M A M l k a j m
フォームはサイレンススズカっぽいな

516 : 名無しのウマ娘ファン ID : L I k g b V C j Q
もう1000m通過したな。速くない？

517 : 名無しのウマ娘ファン ID : G g x 7 a E y N 5
通過タイム57.9らしいぞ

518 : 名無しのウマ娘ファン ID : p h 4 b n i f Z T
>>>517

速すぎイ!!

519 : 名無しのウマ娘ファン ID : A S x 9 z P d R E
シニア級のマイル戦かよ！

520 : 名無しのウマ娘ファン ID : aVsfUAhW0
サイレンススズカの秋天並のペースだよなこれ？

521 : 名無しのウマ娘ファン ID : +AaaGVZUE
大外枠の不利を考えれば下手するとスズカより速いんじゃない？

522 : 名無しのウマ娘ファン ID : 2VGP1kJ5j
流石に逆噴射するだろ。するよな……？

523 : 名無しのウマ娘ファン ID : gKaCJOPsA
これで後半タレなかったらバケモンだよ。こっから心臓破りの坂
だし流石にもたんだろ

524 : 名無しのウマ娘ファン ID : FA21AzekD
東京芝2000は逃げウマ娘の勝率ワースト3だからな……

525 : 名無しのウマ娘ファン ID : tjMRbOngr
確か第三コーナー辺りから坂だよな？ 速度落ちてるように見え
ないんだが？

526 : 名無しのウマ娘ファン ID : YnN1EnSXy
後続がカメラかなり引かないと見えないんだが……？

527 : 名無しのウマ娘ファン ID : EOQ14vQfW
うっそだろお前……

528 : 名無しのウマ娘ファン ID : RBimdq76I
第四コーナー越えて完全に独走、これは決まりましたねえ

529 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9mZ1VuOxe
流石に最後の坂ではスピード落ちてるっばいけど

530 : 名無しのウマ娘ファン ID : qN7F4Th4S
高低差2mの坂を笑顔で登っててビビった

531 : 名無しのウマ娘ファン ID : OT64GutB0
いい……笑顔です……

532 : 名無しのウマ娘ファン ID : SNAACPz4w
文句なしの一着ゴールイン!

533 : 名無しのウマ娘ファン ID : EbhukxvW
後続がまだゴールしないんだが?

534 : 名無しのウマ娘ファン ID : 2PIfJO+Av
着差やばすぎい!

535 : 名無しのウマ娘ファン ID : d2rNcDVz
勝ち時計1:57.1って

536 : 名無しのウマ娘ファン ID : vSUES/xEK
は? 東京レース場の記録っていくつだった?

537 : 名無しのウマ娘ファン ID : i5mFxO8sy
>>>536

8.0がコースレコード
実況も言ってるがスペシャルウィークが天皇賞秋で出した1:5

538 : 名無しのウマ娘ファン ID : A+aZxOLNd
ジュニア級のメイクデビュー……だよな……?

539 : 名無しのウマ娘ファン ID : YiVlUqhQK

これはとんでもない新人が現れましたねえ……

540：名無しのウマ娘ファン ID：pNdck3F40
2着はリボンマンボ、2：04・2らしい

541：名無しのウマ娘ファン ID：iT0ORqrto
>>540

メイクデビューでこのタイム出して2着とか……しかも1着と7秒差って

542：名無しのウマ娘ファン ID：TKGA4T7r7
何バ身差だよこれ……41バ身？

543：名無しのウマ娘ファン ID：lSd+Sx1uf
これは間違いなく黒いサイレンススズカだわ。サイレンススズカが髪染めて走ったと言っても俺は驚かない

544：名無しのウマ娘ファン ID：fjFyG1M4h
セクレタリアトでも31バ身だぞ？ いくら実力差が出やすいメイクデビューとはいえこれはやばい

545：名無しのウマ娘ファン ID：m+lu8wrEO
障害レースでシンボリクリエンスが50バ身差つけてゴールしたことがあるけどそれ並ってことだよな？ ヤバすぎ

546：名無しのウマ娘ファン ID：k8XNoWL16
ドーピングでもしてんじゃねえのこれ？ いくらなんでも速すぎ
だろ

547：名無しのウマ娘ファン ID：eu8qzFM2O
ドーピングするにしてももつとやりようがあるだろ……

548 : 名無しのウマ娘ファン ID : x v W 6 N u U 4 Q
これはクラシック戦線この子で決まりじゃね？

549 : 名無しのウマ娘ファン ID : C v 6 e / 2 3 c t
流星に速すぎて芝も生えない

550 : 名無しのウマ娘ファン ID : k E f R b i d A u
>>543

黒いサイレンススズカと呼ぶにしては一部の特徴が違いすぎます
ねえ……

551 : 名無しのウマ娘ファン ID : S X z 7 f d b p p
>>550

胸囲の格差社会

552 : 名無しのウマ娘ファン ID : J d n t C E C n M

>>550
>>551

お前らスズカさんに謝れ w w w w

今年のウマ娘たちを見守るスレ Part 45
100 : 名無しのウマ娘ファン ID : Y 4 K r l 4 M n v
もうすぐ始まるな、芙蓉ステークス

101 : 名無しのウマ娘ファン ID : H Y t N u c X Q C
今日はあのブラックプロテウスが出走するな。パドック見逃して

涙目

102 : 名無しのウマ娘ファン ID : nkQ9AE5k6
メイクデビューの衝撃はすさまじかったな……

103 : 名無しのウマ娘ファン ID : idtt6P0+Z
一応ドーピングはなかったんだっけ？

104 : 名無しのウマ娘ファン ID : jS2vhrRYG
>>103

トレセン学園がHPで声明出してるし検査結果も一部の項目(体重など)以外は公開されてるから見ておけ

105 : 名無しのウマ娘ファン ID : lzsX2JMC2
流星に女の子の体重は公開できないよなあ……公開するとしても
サバ読むだろうし

106 : 名無しのウマ娘ファン ID : CLspbWFOo
身長だけは公開されてたな。160cmだっけ？ もつと小さい
イメージだったわ

107 : 名無しのウマ娘ファン ID : U7g7vImo7
それほどでかいイメージじゃなかったからな……一部はでかいが

108 : 名無しのウマ娘ファン ID : RJawtUET6
>>107

一部の紳士もとい有志が言うにはいまだ成長中らしいぞ？ ちょくちよくダイワスカーレットとランジエリーショップに行っている姿が目撃されている

109 : 名無しのウマ娘ファン ID : zvT5TyhbO
ブラックプロテウスはともかくダイワスカーレットもまだ成長しているのか……

110 : 名無しのウマ娘ファン ID : Cat9UESKG
少しはその成長をスズカさんやマックイーンさんに分けてやって
もいいと思う

111 : 名無しのウマ娘ファン ID : 7NXosOr a I
>>110

その二人のスタイルは洗練された機能美だからいいんじゃないか

112 : 名無しのウマ娘ファン ID : Cv4ZX8e3i
なだらかな機能美……いいよね……

113 : 名無しのウマ娘ファン ID : faEjCCCe0
お前らレースを見ろwww ファンファーレ鳴ったぞ！

114 : 名無しのウマ娘ファン ID : EdF4dHUXM
今日は10人だっけ？ 少なくね？

115 : 名無しのウマ娘ファン ID : o6DGsyLmz
>>114

OPクラスのレースならこんなもんよ。まあブラックプロテウス
との対決を避けた子もいるだろうけど

116 : 名無しのウマ娘ファン ID : HdZZ4O32+
>>115

なんせ2000mレコードホルダーだからな……今年の天皇賞秋
にスズカが出るらしいし塗り替えられるかもしれんが

117 : 名無しのウマ娘ファン ID : Fx87n24QK
サイレンススズカとブラックプロテウスは師弟関係なんだっけ？

118 : 名無しのウマ娘ファン ID : j j z h g 7 G / P

同じ逃げウマ娘同士気が合うっぽいな。夏合宿の時の併走風景を見学したことがあるけど併走とは思えないくらい速さで走ってたわ

119 : 名無しのウマ娘ファン ID : p j L I Z e Y A e

流石にスズカの方が速いんだよな？

120 : 名無しのウマ娘ファン ID : j j z h g 7 G / P

>>>119

せやで、10回くらい併走して一度も先頭譲ってなかった

121 : 名無しのウマ娘ファン ID : d s m c O R l P 8

併走回数が異常だと思うんですがそれは……

122 : 名無しのウマ娘ファン ID : O 8 5 q o f G l 8

お前らスタートしたぞ！

123 : 名無しのウマ娘ファン ID : d j H f U d R 3 X

今日もブラックプロテウスが飛び出て……いや違うな？

124 : 名無しのウマ娘ファン ID : D 9 d j 7 d O z H

リボンマンボ!? リボンマンボなんで!?

125 : 名無しのウマ娘ファン ID : A b u R O k k X h

リボンマンボって先行のウマ娘だよな？ 何で逃げてんの (困惑)

126 : 名無しのウマ娘ファン ID : d I m U i h Z a Q

多分ブラックプロテウスを好きに逃げさせない為だろうけど

127 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6 D c K k 5 O I i

スタート直後の急坂を全力逃げはスタミナ持たなさそう……

128 : 名無しのウマ娘ファン ID : X u a / P 7 B h c
ブラックプロテウスはリボンマンボの後ろにつけたな

129 : 名無しのウマ娘ファン ID : y e 2 A b g L g M
併走ですつとスズカの後ろ追ってるんだっけ？ 前にウマ娘が居ても問題はなさそうだな

130 : 名無しのウマ娘ファン ID : L R 4 E a 5 T W u
他の娘たちも掛かつてはいなさそうだが結構ハイペースじゃね

131 : 名無しのウマ娘ファン ID : J 3 N + 2 K / j C
中山は逃げウマは不利だと言われているがはたして残るのか

132 : 名無しのウマ娘ファン ID : E w r h j 0 y 9 s
ブラックプロテウスが揺さぶってるな。リボンマンボを左右に振ってる

133 : 名無しのウマ娘ファン ID : Y E G E N + U / g
明らかに脚色鈍ってるな。コーナー辺りで抜かされるんじゃないか？

134 : 名無しのウマ娘ファン ID : s 9 j T K K f 6 3
あ

135 : 名無しのウマ娘ファン ID : Z b g D j X j k h
ああああああ!!!?

136 : 名無しのウマ娘ファン ID : j m K K R x l l l
ブラックプロテウス仰け反ってるやん!!?

137 : 名無しのウマ娘ファン ID : jWtSTu1A5
何があつたん？

138 : 名無しのウマ娘ファン ID : 90ORQgw0r
ネットの中継見てたがよくわからん

139 : 名無しのウマ娘ファン ID : hICL9+W8h
テレビ中継見てたがなんか血飛沫舞ってたで

140 : 名無しのウマ娘ファン ID : mcBhtdGbt
マジかよ怪我か？ 何処やらかしたんや

141 : 名無しのウマ娘ファン ID : D0LZDs aYC
他のウマ娘たちも見ると動揺してる

142 : 名無しのウマ娘ファン ID : umW3p6LC5
何があつたんだよお!?

143 : 名無しのウマ娘ファン ID : gqULd2H9d
実況も把握して切れてないっぽくて情報が出てこん

144 : 名無しのウマ娘ファン ID : YqZrt4Z73
いや体勢立て直したぞ！

145 : 名無しのウマ娘ファン ID : wI7W7cwua
仕掛けに行ってる!? 怪我したんじゃないんか？

146 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9Bx33ZjiB
スパート掛けてコーナーに入ったな。影響なさそう

147 : 名無しのウマ娘ファン ID : EXNeG9ym5

頼むから無茶しないでくれよ……怪我が悪化して引退とか勘弁してほしい

148 : 名無しのウマ娘ファン ID : ruv20ImS7
リボンマンボ外によれたな

149 : 名無しのウマ娘ファン ID : oRzHT/6KO
内側からブラックプロテウスが抜け出した！

150 : 名無しのウマ娘ファン ID : atO+Ot8Jl
外からミントドロップも来とるな

151 : 名無しのウマ娘ファン ID : OyFDfvuzE
他の娘たちも来てて混戦状態になったな

152 : 名無しのウマ娘ファン ID : woloWKQON
最後の直線

153 : 名無しのウマ娘ファン ID : VdWibneWt
ああああああああああああああああ

154 : 名無しのウマ娘ファン ID : bYYBcFSED
はあああああああああ
!!!!!?

155 : 名無しのウマ娘ファン ID : KeO+jvqVd
うわああああああああああああ

156 : 名無しのウマ娘ファン ID : KHezIHfkY
やばすぎい!?

157 : 名無しのウマ娘ファン ID : TOMGvacEt

顔面血塗れやん!?

158 : 名無しのウマ娘ファン ID : p r 7 l d Z P k 3
可愛い顔が真っ赤になつとる!?

159 : 名無しのウマ娘ファン ID : l B G + Z w E j C
これももう左目ほとんど見えてないだろ!!!

160 : 名無しのウマ娘ファン ID : V h c + R O M p y
もういい止まれブラックプロテウス!!!

161 : 名無しのウマ娘ファン ID : L g L s H W P + 9
それ以上走るな!!!

162 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9 Y 7 D y 8 c r V
体操服まで赤くなつてる……

163 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9 h 2 M v Z S Q r
頭の怪我つぽいな……何が頭に当たったか?

164 : 名無しのウマ娘ファン ID : P 9 J 5 Z y o s r
走ってるウマ娘の頭部に飛来物……? 流石にやばすぎて

165 : 名無しのウマ娘ファン ID : Q b 2 s z q u s V
下手すると即死レベルの怪我やぞ!!!

166 : 名無しのウマ娘ファン ID : e j N c 8 V 8 2 K
多分リボンマンボの蹄鉄でも当たったか

167 : 名無しのウマ娘ファン ID : F s L y v J 6 q u
金属の塊が頭にとか笑えなさすぎる

168 : 名無しのウマ娘ファン ID : Ad9JAPXtx
俺らだったら間違いない当たった時に意識失ってる

169 : 名無しのウマ娘ファン ID : 8Y68Osz6D
何でこの怪我で走れるんだよお!?

170 : 名無しのウマ娘ファン ID : bmnCAw1zm
俺バ鹿だからよくわからん。そんなにやばいの？

171 : 名無しのウマ娘ファン ID : saMr7hpxm
>>>170

蹄鉄が当たったとするなら大体120g(単一電池が130gくらい)の金属塊が頭にヒットしたことになる

172 : 名無しのウマ娘ファン ID : I2RN1uSgb
>>>170

急に片目が見えなくなって目からの情報が三半規管の感じている情報とずれたりすると眩暈や吐き気などの症状がでたり移動時の均衡が保てなくなったりする

173 : 名無しのウマ娘ファン ID : bmnCAw1zm
>>>171

>>>172
サンクス。とりあえずまともに走れるような状態じゃないってことはわかった

174 : 名無しのウマ娘ファン ID : SI29KNmJ6
うわ、もう顔全体に血が広がってるやん……

175 : 名無しのウマ娘ファン ID : GWUAY2g2W

痛々しすぎてレース見れへん……

176：名無しのウマ娘ファン ID：DU10xWnsF
お茶の間で流すようなレースじゃねえよこれ……

177：名無しのウマ娘ファン ID：pagPpuyZz
ブラックプロテウス勝った！ 2着はヤツピーラツキー、3着がり
ボンマンボ

178：名無しのウマ娘ファン ID：Zt+nzQQQ
マジかよこの怪我で勝つのか（困惑）

179：名無しのウマ娘ファン ID：2o4pGqLml
ヤバすぎんだろこのウマ娘……なんなん？

180：名無しのウマ娘ファン ID：DpvblJ2bI
サイボーグかターミネーターなんじゃねえの？

181：名無しのウマ娘ファン ID：4SiWic9kN
何より精神力がやばい

182：名無しのウマ娘ファン ID：56VJt1A0B
今年のジュニア級ウマ娘はガンギマリ勢多すぎじゃね？ アン
ペールユニットとかさ

183：名無しのウマ娘ファン ID：GD1QLiMP2
アンペールユニットちゃんは骨折だっけか……無理に走ったせいで
ダメージでかいらしいな

184：名無しのウマ娘ファン ID：11Obqfsom
クラシック級になっても戻ってこれるかわからんとかいってたな

185 : 名無しのウマ娘ファン ID : G f C c t U P t j
あつ

186 : 名無しのウマ娘ファン ID : S M l l Y l 4 h J
うええええええええええええ!?

187 : 名無しのウマ娘ファン ID : O n A g p H r v E
突っ込んだああああああああああああ

188 : 名無しのウマ娘ファン ID : 0 2 6 9 X p C U b
外ラチ激突!?

189 : 名無しのウマ娘ファン ID : F M T 6 6 y B R t
やっぱブラックプロテウス前見えてなかったんや!

190 : 名無しのウマ娘ファン ID : D D g d 7 p s y Y
見えない状態で坂道をスパート掛けてくってマジ?

191 : 名無しのウマ娘ファン ID : W Z D j F E k f S
俺だったら10mも真っ直ぐ走れる気がしないわ……凄まじい平
衡感覚やな

192 : 名無しのウマ娘ファン ID : G f m k s b l w Y
いやそんなことより大丈夫なんか? 結構派手に行ってたで

193 : 名無しのウマ娘ファン ID : e s 0 5 k 2 F q V
立ち上がってきたな

194 : 名無しのウマ娘ファン ID : q P K / V n e V t
見た感じ脚に異常とかはなさそうだな

195 : 名無しのウマ娘ファン ID : gRlYB7Jzp
救急隊にお手引かれてるのちよつとかわいい

196 : 名無しのウマ娘ファン ID : UxalKbrah
>>195

顔面血塗れでなければ俺も萌えられたんだがな……

197 : 名無しのウマ娘ファン ID : so6imLhGX
スピカのトレーナーも走っていくな

198 : 名無しのウマ娘ファン ID : lUF4yz7XA
流星にこれは顔面真つ青やろうな……

199 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9LWPi6Dl7
ワイスピカの子たちの隣にいるんやがゴルシ以外絶句してるよ

200 : 名無しのウマ娘ファン ID : MOBWw/CSL
そりゃこんな状態じゃ言葉出てきませんわ

312 : 名無しのウマ娘ファン ID : mcCfUhfKN
ウイニングライブは何というかこう……微妙な雰囲気でしたね
……

313 : 名無しのウマ娘ファン ID : rGKPmb5dy
2着以下の娘が頑張ってたけどあれの後じゃなあ……

314 : 名無しのウマ娘ファン ID : W2yLz1PnI
ブラックプロテウスは大丈夫なんだろうか……

315 : 名無しのウマ娘ファン ID : bybXf/QY7

2度頭に衝撃が加わってる可能性があるしセカンドインパクト症候群とかにならないといいんだが

316 : 名無しのウマ娘ファン ID : FlRzfDdXf

セカンドインパクト症候群とは 脳震盪を起こした後に回復する前にもう一回脳震盪を起こすと起こりえる症状、致死率50%くらい

317 : 名無しのウマ娘ファン ID : lCcrORrSf

>>316

思ったよりヤバすぎて……

318 : 名無しのウマ娘ファン ID : dyCzFRIBN

無事でいてくれるといいんだが……

319 : 名無しのウマ娘ファン ID : D1M+abPh4

トレセン学園から速報出てるで

ブラックプロテウスに関してのお知らせ

320 : 名無しのウマ娘ファン ID : t/UGa4upN

サンキュー！

321 : 名無しのウマ娘ファン ID : fJ6flNwPF

は？ 何この内容

322 : 名無しのウマ娘ファン ID : yKiODCrOP

ちよつと私には理解できませんね

323 : 名無しのウマ娘ファン ID : 5gxz56kJV

何が載ってるん？ アクセスエラーで見れないんだが

324：名無しのウマ娘ファン ID：iZxu9yOho
トレセン学園のページ落ちてるな

325：名無しのウマ娘ファン ID：DlM+abPh4
じゃあ下に貼ってやるわ

326：名無しのウマ娘ファン ID：b3EFF+cCE
よろしく頼むわ

327：名無しのウマ娘ファン ID：3DLQdy3gA
頼む！

328：名無しのウマ娘ファン ID：DlM+abPh4
ブラックプロテウスに関してのお知らせ

本日10月2日、芙蓉ステークスに出走、1位に入着後搬送された
ブラックプロテウスについて、ファンの皆様及び関係者各位には多大
なる心配をお掛けしているものと思います。

レース中、前を走っていたウマ娘の蹄鉄が外れて後方に飛び、それ
が額の左側に直撃し出血が発生しました。幸いにも額が浅く割れた
程度で済み、病院に着いた時点で既に出血は止まり、傷口もほぼ塞
がっていました。

病院搬送後、すぐに頭部CT及び頭部MRIなどの精密検査を行
いましたが、骨折、脳内出血等の異常は見られず至って健康体であり
ます。

他に目立った症状などはありませんが、大事を取って1週間ほど入
院することになります。ですが続く紫菊賞への出走予定は変更せず
そのまま出走する予定です。

今後ともブラックプロテウスの応援をよろしく願います。

日本ウマ娘トレーニングセンター学園理事長 秋川やよい

329 : 名無しのウマ娘ファン ID : z4 I H Z x Q P Z
よかったあああああ

330 : 名無しのウマ娘ファン ID : X S / G v 2 t / b
良かったけど内容

331 : 名無しのウマ娘ファン ID : t S 4 J Z L A E O
蹄鉄が額に直撃して額から出血した程度で済むってマジ？

332 : 名無しのウマ娘ファン ID : s w K o G O 7 m V
骨にヒビすら入ってないのかよ……頑丈すぎひん？

333 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6 y / + Y T k b V
安心したけどなんつー耐久力と回復力だよ……もう傷塞がっ
るって本当にウマ娘？

334 : 名無しのウマ娘ファン ID : o 6 G T g G G Z z
ウマ娘の形をしたサイボーグだよやっぱり!!!

335 : 名無しのウマ娘ファン ID : f v c K z i x L P
やっぱりターミネーターだった！

336 : 名無しのウマ娘ファン ID : n B N j U F R R J
至って健康体ってことは外ラチ大激突の影響もないってことよな
？ やっぱりおかし

337 : 名無しのウマ娘ファン ID : l w U l x A w S l
生き物の枠をぶつちぎってますねえこれは

338 : 名無しのウマ娘ファン ID : v 2 i l U S q N U
ブラックプロテウスはロボットで額から流れた赤い液体はオイル

か
何
か
な
ん
や
…
…
…

第十九話 栄光の日曜日、暗雲の木曜日

『ブラックプロテウス先頭！ 後ろは大きく離れた！ これは文句なし！ 紫菊賞も逃げ切り、8バ身差で完勝！ もはや2000mでは敵なし！』

『先々週のアクシデントの影響を感じさせない見事な走りでした。淀の坂を越えてもスタミナにまだまだ余裕がありそうですし、もっと長い距離でも走れるかもしれませんね』

レースが終わった。今日のレースは紫菊賞、京都レース場2000mだった。高低差4・3mの坂があつたけれど普段のトレーニングのおかげか問題なく逃げ切ることが出来た。

ウイニングサークルでいつものように一礼したのちにファンの人たちに手を振る。大きい歓声が上がってテンションが上がってしまう。応援されて、こうやって勝利を祝ってくれるのはいつ感じても良いものだ。

「テウス、お疲れ様。今日もいいレースだったな！」

「はい、ありがとうございます。トレーナーさん」

タオルを渡すついでに頭をぐしやぐしや撫でてくる。もう頭を撫でられるのにも慣れたものだ。

「ウイニングライブの準備してきますね。先々週の方までファンの人たちにお礼してきます！」

「おう、行ってこい。終わったらすぐにホテルに行くから、すぐに動けるようにしといてくれ」

「はい、わかりました」

明日は秋華賞。最後のティアラを懸けたウオツカ先輩とスカレット先輩の対決だ。どちらが勝ってもお祝いする、という話になっている。

ちなみに再来週は天皇賞・秋。スズカ先輩と、テイオー先輩が出走する。テイオー先輩は京都大賞典で一着を取って復帰している。退

院が間に合わずに現地で見れず、二人部屋の病室で同じ病室にいて仲良くなつたウマ娘のお姉さんと一緒に病室のテレビで観戦した。ゴールした時またテンションが上がってしまったって抱き着いてしまったのはとつても恥ずかしかつた。

ライブが終わり控室に戻り、ステージ衣装から制服に着替える。ちなみにライブ衣装は新品だった。メイクデビューの時に着たものは胸周りのサイズが合わなくなつてしまったので新調した。

ステージ衣装、太ももはともかくおへそが出てちよつと恥ずかしいんだよね……胸元も空いているし……でも、作り込みはすごいし、ひらひらして結構かわいいのは気に入っている。ファンの人たちにも結構好評らしいので、なるべく恥ずかしがらずに、ファンの人たちによく見えるように頑張つて踊つた。

歌もダンスもテイオー先輩のおかげで大分マシにはなつてきたと思う。最初はもう人に見られるのが恥ずかしくてずつと真つ赤になつてステージに立っていただけ、最近は恥ずかしさより応援してくれたことへの感謝の方が大きくて特に気にならなくなつてきた。

なので芙蓉ステークスの時ウイニングライブ出来なかつたことは痛恨の極みである。血は止まつていたし、傷もほとんど塞がつていたから大丈夫だと大分ごねてみたのだが、駆け付けた駿川さんの圧に負けてしまった。

背筋が震え上がつて足が動かなくなるような強烈なプレッシャーを浴びせられて涙目になつてしまったのは内緒である。

レース中にこういうプレッシャーを浴びせられたらどうすればいいんだらう？ 今度マルゼン先輩とかに聞いてみようかな……

マルゼン先輩には時々ドライブに連れて行つて貰つたり、アドバイスを貰つたりと最近色々目を掛けてもらつている。レーシングサーキットに連れて行つて貰つてコースをかつ飛ばして貰つたときはテンションが上がりすぎてキャーキャー騒いってしまったものである。うるさくなかつたかな……？

コーナリングテクニクがすごくて殆ど速度を落とさずにドリフ

トしながら曲がっていくのは凄いテクニクに感心してしまったものである。

レースでドリフト出来ないかと考えたが、ウマ娘がターフでドリフトすると相当脚に負担がかかるだろうし、メリットはないだろう。多分私ならターフ上でもドリフト出来ると思うけど、正直それでもやるメリットは少ないと思う。

ドリフトというのは身体の向きを早く脱出方向に向けて加速を早くすることによりコーナーを早く脱出するためのテクニクで、どうしても摩擦によるパワーロスが発生する。

ドリフトしている間、つまり脚が地面についている間はウマ娘はどろろと加速することが出来ないで、接地している時間はなるべく少ない方が効率的だ。『短い接地時間で、大きな力を』が速く走るためのポイントだ。滑るより飛んでしまった方がいい。

それに、私のコーナリングは遠心力をパワーで無理矢理押さえつけて横に吹っ飛ばす力を身体全体で受け止めながら、行きたい方向にその力の反動で加速しながら曲がるという変則的なものだ。パワーロスが発生するドリフトは私には向かない。

ただ、万一足が纏れたりして次の脚を踏み出せないような時には役に立つかもしれない。少しだけ練習しておこう。転んでしまうくらいなら滑ってしまった方がいい。

それに、ドリフトってちょっと格好いいと思うし。メリット云々より格好良さを重視したっていいと思う。

「いやいやいや、何でドリフトしようとするんだ。ウマ娘がターフでドリフトするメリットなんてないだろう……」

そのようなことをトレーナーさんに、ホテルへ向かう車内で言ってみたら呆れられた。まず生身でドリフトしようとする発想が信じられないらしい。

「まあ、そんなんですけど。格好いいじゃないですか」

「格好良さはともかく、それで変に外に膨らんだりしたら走行妨害取られかねんぞ？ 身体に掛かる負担以上のメリットはないだろう。」

あるなら他のウマ娘だつてやっているさ。まあ、お前なら無理なく出来るだろうが……普通のウマ娘がやつたら一発で故障するわ」

……何だか言外に異常者認定された気がする。

「そんな私がおかしいみたいと言わないでくださいよ。拗ねますよ？」

「まず普通のウマ娘がお前と同じ曲がり方したら吹っ飛ばしか関節がぶっ壊れるっての……」

「確かにミニコスモスちゃんに試して貰ったときはカーブで外に吹っ飛ばしちゃいましたけど……」

「前科持ちかよ。もうやるなよ」

怒られてしまった。でも、言い訳させてほしい。

「でもゴルシ先輩は普通にできましたよ？ これすげー良いな、他の奴らにも教えてやれよつて言つてましたから」

「アイツを一般ウマ娘に含めるな……アイツは目に箸が当たっても全くの無傷なくらい頑丈だったんだぞ」

「む、私だつて、山道を走つてるときに枝が目当たったことがありませんけど無傷でしたよ！」

「そこは張り合うところじゃないだろう……わかったわかった、わかったから少し落ち着け。運転中だから」

トレーナーさんに呆れられるが、頑丈さでは誰にも負けない自信があるのでそこだけは譲れない。少し掛かり気味にまくしたてようとしてトレーナーさんに宥められる。

結局ホテルに着くまで掛かりっぱなしになってしまい、自分がどれだけ頑丈なのかを語り続けてしまった。

秋華賞はスカーレット先輩の勝利で終わり、見事トリプルティアラに輝いた。そして今日はその翌々週。

『ウマ娘たちが追い求める一帖の盾。鍛えた足を武器に往く栄光への道！ 天皇賞・秋！』

東京レース場、第11レース。芝2000m、左回り。ファン

フアーレが鳴り、ウマ娘たちがゲートに入る。

『三番人気を紹介しましょう。昨年の有《font:ul40》馬《font》記念覇者、トウカイテイオー。暫く療養していましたが、京都大賞典では見事な走りを見せてくれました』

三番人気はテイオー先輩。本来なら一番人気でもおかしくないはずだが、このレースは実力者揃いだ。

『二番人気はこのウマ娘。ビワハヤヒデ。今年の天皇賞・春を制しているウマ娘です。見事春秋連覇となるのか！』

昨年、BNWの一角として話題を作ったウマ娘、ビワハヤヒデ先輩が二番人気だ。有《font:ul40》馬《font》/《font》記念ではテイオー先輩に、宝塚記念ではスズカ先輩に遅れを取ったが、仕上がりの実力も十二分だろう。

『そして、1枠、1番、一番人気！ サイレンススズカ！ 奇しくもあの日あの時と同じ枠番と人気になりました。フアンの期待をその身に背負って、今、サイレンススズカが天皇賞・秋の舞台に帰ってきました！』

そして、一番人気。あの沈黙の日曜日を思い返させる、1枠1番に、スズカ先輩は居た。穏やかな笑みを浮かべて、ゲートに入り、構える。『各ウマ娘、一斉にスタートしました！』

『ハナを奪うはやはりこのウマ娘、サイレンススズカ！ 今年に入って、ヴィクトリアマイル、宝塚記念とGⅡ二連勝中です！』

ゲートが開き、ウマ娘たちがスタートを切る。ゲートが開く音すら置き去りにする勢いで、スズカ先輩が好スタートを切り、ハナを奪う。『速い速い。サイレンススズカ、圧倒的な速さ！ あの時と同じように、いや、あの時よりも速い！ 1ハロン目から全力全開、後続を置き去りにしている！』

2ハロン目から加速したあの時とは違い、今回はもう最初から飛ばしている。

『逃げウマ娘のブリッジコンプすら置き去りにして、大逃げしますサイレンススズカ。カメラを引いても後続が見えない！』

あの時の映像を繰り返すように、ぐんぐんと後続を引き離して、

悠々と逃げていく。観客席に居るファンの人たちが息を呑むのが聞こえる。GIレースだと言うのに、いやに静かだ。

『1000mを通過して、通過タイムは……ごっ、56.9!?! 短距離並みのタイムだサイレンススズカ! 以前より0.5秒も速いぞ。サイレンススズカ! 後続はもう10バ身以上離れた!』

ファンの人たちからどよめきと、不安そうな声上がる。あの時より速い速度で走り抜けていくスズカ先輩に、あの時の姿を重ねてしまっているのだろう。

『第3コーナーを回って、第4コーナー……第4コーナーを、サイレンススズカ、先頭で回ってくる! 後ろは誰も居ない!』

だけど、その心配は杞憂だ。今のスズカ先輩には、あの時の様な事など起きない。第4コーナーを越えて、最終直線に入り、一度息を入れていたスズカ先輩は再度加速する。

東京レース場は割れんばかりの歓声に包まれて、その大きさに地が揺れる。

『サイレンススズカ、先頭! 残り400を迎えて、完全に独走! トウカイテイオーも、ビワハヤヒデも、ナイスネイチャも、マチカネタンホイザも、ウイニングチケットも届かない! 影すら踏ませることなく、異次元の逃亡者が! 今一着でゴールイン! 何と何と、GIで大差勝利が記録された! 後続に大差をつけてサイレンススズカ一着! 二着は2秒ほど遅れてトウカイテイオー、三着はナイスネイチャ!』

そのまま足が衰えることはなく、全く危なげなく、最初から最後までスズカ先輩が先頭のままゴールした。

『勝ち時計、1:55.2! ブラックプロテウスのレコードどころか、世界レコードをも塗り替えた! 栄光の日曜日の主役となったのはサイレンススズカ! あの時迎えることのできなかつた第4コーナーを越えて、見事、世界レコードで盾の栄誉を勝ち取りました!』

レース場から、そしてレース場の外から、凄まじい歓声が鳴り響く。小さくこちらに手を振るスズカ先輩に、万雷の喝采が贈られる。

その光景に、瞳から涙が零れてしまう。胸が熱くなって、溢れる涙

を抑えることが出来ない。

一ファンとして、チームメイトとして。そして、いつか乗り越えるべき大きな壁として。私はスズカ先輩のことが好きだ。その彼女が今こうして、祝福されているのを感じて、もう言葉にならない想いで一杯になる。

「あーもう、テウス！ ほら、顔酷いことになってるわよ！」

近くに居たスカーレット先輩が私の惨状を見てハンカチを渡してくれる。

「あーりーがどうございませうとうとう……」

泣きすぎてもう声がおかしくなってしまうているけど、そんなことを取り繕う余裕がない。流石に鼻をかんだりはしないけど。

周りの先輩たちも口々にスズカ先輩を褒め称えている。きつとスズカ先輩が聞いたら尻尾まで真っ赤になりそうだ。

「ふう、少し安心したな……ほらお前ら、スズカのところ行くぞ？
ちやんと直接褒めてやらないとな」

トレーナーさんに先導されてウイナーズサークルでファンサービスを行っているスズカ先輩の元へ皆で向かう。ついてそうそう皆で口々におめでとう、とまずは祝福を送った。

「ふふ、ありがとう、皆」

「もおー……スズカつてば速すぎるよおー……」

テイオー先輩がへろへろになりながらウイナーズサークルの方に来た。あのハイペースに食らいつこうとして大分消耗してしまっているようだ。

「テイオー先輩、大丈夫ですか？ 支えましょうか？」

「んー、気持ちだけ受け取っとくよ、ありがとテウス。でも、世界レコードでぶつちぎられちゃったら悔しさより驚きの方が大きいなあ……」

「？ 世界レコード……？ 誰が？」

スズカ先輩がきよんとしている。

「誰がつて、スズカに決まってるじゃん！ まさか気付いてなかったの!？」

「とつても気持ちよく走れたなどは思ってたけど、まさかレコードだったなんて……」

「ワケワカンナイヨ〜!」

スズカ先輩が天然でボケているのに突っ込んでいるテイオー先輩を見てつい笑ってしまう。先輩たちらしいなあ、とちよつとほっこりしてしまった。

「もー、しっかりしてよね! ほら、控室行くよ!」

「あ、うん。行くわ。それじゃ皆、また後で」

ウイニングライブの準備に向かうスズカ先輩とテイオー先輩を見送り、私たちもライブ会場へ向かう。ちなみにチームメンバー特権で一番いい位置を確保している。

天皇賞のウイニングライブ曲は、『NEXT FRONTIER』だ。頂点を目指し、そしてそこに駆け上がったモノだけが立てる、覇者のための舞台を飾る、熱に溢れた曲だ。

いつか私も、ああやって、あの舞台に立てる日が来るのだろうか。いや、あの舞台に、立ちたい。その為にも、次の日曜のレースは今まで以上に負けられない。

センターでポーズを決めるスズカ先輩を見ながら、決意を新たにする。

——その当週、木曜日。最終出バ投票の際、私が次出走する予定であった百日草特別の登録は、私含めてわずか3人。その為、百日草特別は競走取りやめになってしまったのだった。

第二十話 トレーナーの提案

出バ投票の翌日。百日草特別が取りやめになってしまい、今日は最終調整の予定だったのだが思いがけず暇になってしまった。次のレースは来週の黄菊賞を予定している。

ちなみに、レースが中止になった場合においてはその同日に行われるレースで一番登録者が多い一般競走のレースを分割して行うことになるらしい。今年は第8レースに予定されていたクラシック級2勝クラス、芝2000mのレースが分割されるそうだ。

ひとまずやるのがなくなってしまったので今日は部室の掃除をしたらトレーニングでもしよう。坂路……いや、今日はダートにしようか。ウッドチップも捨てがたいし、全天候バ場のニューポリトラックもいいな……いいや、いつも通り全部走ろう。その後は……

「お、テウス。来たか。百日草特別は悪かったな。走らせてやれなくて……」

考え事をしながら部室に入ると、既にトレーナーさんが居た。

「いえ、トレーナーさんのせいではありませんから。たまにはあることなんですよね？ 運が悪かっただけですよ」

謝られるがトレーナーさんが気にすることではないと思う。どのレースに申し込みが入るかなんてわかることではないし……

「いや……実は、この結果は少し予想してたんだ。思ったより早かったけどな……もう少し早めに言っておくべきだったし、根回しとかも特になかった俺のせいだ」

頬を掻きながら、トレーナーさんがもう一度謝ってくる。予想していたとはどういうことだろう？

「お前はマルゼンスキーと仲良かったよな？ アイツのトゥインクルシリーズ時代の話は知ってるか？」

「戦績くらいは……8戦8勝で、合計バ身差61バ身で、他の娘たちを全く寄せ付けなかったんでしたっけ。凄いですよね、マルゼンスキー先輩」

なにせ『スーパーカー』などと呼ばれ、先のサマードリームトロ

ファイアではあの『皇帝』シンボリルドルフ会長から逃げ勝って優勝を
腕ぎ取っている。スズカ先輩と走ったらどっちが速いんだろう……

「……お前、今までの3戦でどれだけバ身差つけた？」

トレーナーさんに言われて少し計算してみる。メイクデビューは
……いや改めてみるとおかしいけど、41バ身。次の芙蓉ステークス
は1バ身、紫菊賞は8バ身だから……

「50バ身、くらい……ですかね？」

「何でそこで自信がないんだ……そう、50バ身だ。しかもメイクデ
ビューではレコードまで出してる。文句なしにジュニア級の中距離
はお前が最強だ」

「い、いきなりなんですか……煽っても何も出ませんよ……」

いきなりのべた褒めに思いつきり照れてしまう。何を企んでいる
んだろう……

「マルゼンスキーとは違って重賞でのレコードや大差勝ちではないと
はいえ、お前の実力は……言葉を選ばずに言うなら怪物だと思われる
。実力差が開きすぎてると思われる、競走を回避されているんだ」
「それは……どうなんでしょう。先輩と同じだと誇っていいのか、悪
いのか……」

マルゼン先輩と同じように思われているというなら光栄の極みで
あるのだが……

「この調子じゃ次も成立するかわからん。マルゼンスキーみたいにタ
ムムオーバーを付けない程度に手加減すると約束すれば走れるだろ
うが……」

「模擬レースならともかく本レースで手を抜くなんてできません。そ
んなことするくらいなら出走しない方がマシです。ファンの方にも
失礼ですし、何より対戦相手の娘たちにも顔向けできません」

調整の意味合いもある模擬レースなどは例外として、本番のレース
では皆が皆全力で走るのに、私だけ手を抜いて走る事なんてできるは
ずもない。

「そこは折り合いの問題だと思うが……まあ、お前ならそう言うと思
っていたさ。そこで、お前に選択肢を持ってきた。一つは、このま

ま黄菊賞を予定しておく。これは今回と同じように出走取りやめになる可能性も高いだろう。もう一つは、GⅡのデイリー杯ジュニアステークスに出るかだ。デイリー杯ジュニアステークスはGⅡで国際指定交流競走だ。地方や外国からの登録もできる競走で、その登録があつた場合最低人数を割つても登録取りやめにならない。開催される可能性が非常に高いレースだ」

トレーナーさんから提案を受ける。それは一度は私が諦めた、マイル戦に出るといふものだった。

「デイリー杯って確か1600ですよ？ 私にはちよつと短いと思うんですけど……」

「最近のスズカやウオツカ、スカーレットとの併走を見て思ったが、今のお前ならマイル戦でも十分走れる。併走相手がマイルのスペシャリストが多いつてのものもあるし、マイルの早い展開にも十分付いていけるだろう。お前はいつも通り逃げてれば勝てる可能性が高いな。プランを決めた時より、それだけお前は成長しているってことだ」

「評価してくれるのは嬉しいんですけど……」

「以前お前が母親に怒られたのも、片っ端からレースに出るような真似を窘められたつてこともあるだろう。今のお前なら、間違いなくマイル戦でも十分、100%の実力を出せる。挑戦してみないか？」

「……わかりました。レースプランはトレーナーさんにお任せするつていう約束でしたし、従います。ただ、少しマイル戦のペースに慣れたつので併走を増やしてくれると嬉しいです」

マイル戦にはマイル戦の展開というものがある。流石にぶつつけ本番というのは勘弁してほしい。

「任せておけ……つて言いたいところだが、ウオツカとスカーレットはその翌日のエリザベス女王杯があるから、マイルチャンピオンシップを予定してるスズカとの併走になるだろうな……いつも通りで代わり映えしないか？」

エリザベス女王杯は2200mだ。同じ中距離であれば調整できたかもしれないが……

「そんなことないですよ。スズカさんなら十分すぎる相手です」

スズカさんは今年無敗だ。マイルチャンピオンシップではサクラバクシンオー先輩やノースフライト先輩との今年二度目の対戦となる。マイルの併走相手としては最高クラスだろう。

「まあ、今回は仕方ないから接触禁止令は出さないが……くれぐれも、くれぐれも！ 門限が過ぎてまで走り続けるようなことをするなよ！ 絶対にだぞ！」

トレーナーさんが釘をさしてくる。事あるごとに言ってくるのだが、心外である。

「私今まで一度も門限破ったことないですよ！ ちゃんと終了時間も守ってますよねっ！」

「……夏合宿の時はスカーレットより早く起きてスカーレットより遅く寝てたそうだな。それに誰よりも長い時間トレーニングしていたよな？ 俺何回もオーバーワークじゃないかと注意したぞ？」

「うぐっ……で、でもほら、実際にオーバーワークではなかったですし……ちゃんと触診とかで確かめてもらいましたよね？」

いつもより長い時間、強度の強いトレーニングをしていたことは認める。でもちゃんと毎日触診してもらってオーバーワークではないことは確かめてもらっていた。だからセーフのはずだ。

「そこがおかしいんだよ……スズカはお前とは違って普通のウマ娘だから、ちゃんとこつちが言い渡したメニューは守れよ？ 皆が皆お前みたいに頑丈じゃないんだからな」

言いたい放題である。まあ、確かに私は他の娘とは違ってチートを貰ってはいるが、それを言葉に出されると流石に……

「わかりました、わかりました！ 言われなくてもわかっていますもん！ トレーナーさんのいじわる！ トレーニング行ってきます！」

さっさと着替えて部室を飛び出す。流石にちよつと子供っぽかったかなと後から反省したけど、私だって拗ねたりするんだ。だから掃除を忘れていたりしたのは仕方のないことだと思う。

坂路の前で準備運動をしているうちに少し怒りも収まってきた。

ちなみに今日スズカさんはプールトレーニングの予定で、私はプールの予約を入れていなかったのので一緒には居ない。元々今日は調整で軽めに追い切るだけの予定だったから仕方のないことだ。

「はあ……後でトレーナーさんに謝らないと……」

流石にいじわると言ってしまったのは悪かったなあ、と少し反省する。

「はあい、テウスちゃん。おひとり？ 百日草特別は残念だったわね」準備体操をしていると体操服を着たマルゼン先輩が話しかけてきた。どうやら先輩も坂路トレーニングをしていたようだ。

「こんにちは、マルゼン先輩。気にしてないので大丈夫ですよ？」

今日は同じことを、百日草特別に登録していたリボンマンボ先輩やミントドロップ先輩、後は対戦したことのある他の先輩たちにも言われた。

リボンマンボ先輩からは『気にしちゃダメよ。それに、私は貴女から絶対に逃げない。何度だってあなたに食らいついて、たとえ100回負けたって101回目には勝ってみせるわ。芙蓉ステークスの借りはそれで返すから』との言葉を頂いた。ちなみにこのセリフが出る前に額の怪我を気にしてか思いつきり顔を近づけられたりしていたので、色々と落ち着かなかった。

「そう？ 強いよね、テウスちゃんは。あたしは、5人で走った後は、ちよっと楽しくなかったかな。あんなに辛そうにして、レースを回避した子の顔を見ちゃって。あたしまで楽しくなくなっちゃって、走らない方がいいのかなって思っちゃったこともあるわ」

マルゼン先輩のスプリングステークスでの話だろう。前走のGI朝日杯FSで大差勝利を収めたマルゼン先輩も、同じように出走を回避されたらしいと聞く。レース自体は何か成立したらしいが……「でも、あたしに追いつきたい、追い越したいと思ってくれる子も居て。その為に夜遅くまでトレーニングしてくれる子が居て、みんなが追いたくて仕方がなくなるような圧倒的な走りを見せたくなったのよね」

「私も同じです。いろんな先輩や、お友達に勇気づけてもらって、目標

だと言ってもらって。情けない走りはできないなって思っています。今まで以上にトレーニングしないとって、気合が入り直っちゃいますよね」

誰かに目標とされるといふのはちよつとむずむずする。でもそれ以上に頑張りたいという気持ちが強くなって、今すぐにも走りだしたくなってしまうほどだ。

「ふふ、気合十分ね！ 良かったわ。落ち込んでるんじゃないかと心配だったの。大きなお世話だったみたいで安心したわ」

やはりマルゼン先輩はとても優しい。いろんな後輩に声を掛けて、悩みを聞いたり、走りのアドバイスをしたりと細やかな気配りがとてもうまい。

「心配してくれてありがとうございます、マルゼン先輩。次はデイリー杯ジュニアステークスに出ますから、応援よろしくお願いします」

「あら、そうなの？ マイル戦に出るのね。そうだ、ならあたしでも力になれるかもしれないわ。今から併走、しましょ？ 芝の1600でいいわよね」

マルゼン先輩がぽんと手を打って魅力的な提案をしてくれる。色々問題があると思うんだけど……

「マルゼン先輩、チームリギルですよ？ いいんですか、敵に塩を送るようなことをして。フジキセキ先輩のライバルだと思っただけで、私」

自惚れているわけではないが、目下フジキセキ先輩の三冠の障害になると思われている私を助けるような真似をして、マルゼン先輩の立場が悪くなってしまうたりしないだろうか……

「ふふ、大丈夫よ。フジもきつとそんなこと気にしないと思うし。なんならフジだって一緒に併走しようって言うてくると思うわ。後輩を助けるのは先輩として当然なもの。それに、そんなことしたってうちのフジは負けないわ」

そう言っただけでマルゼン先輩は自信たっぷりに胸を張る。信頼関係が見て取れて少し安心する。

「なら、お言葉に甘えてお願いします。しっかりとついていきますから。全力でお願いします」

「ええ、勿論！ フルスロットルでぶっちぎってあげる。あたしの背中、見せてあげるわ」

マルゼン先輩が好戦的な笑みを浮かべてくる。ぞくり、と背筋に冷たいものが走る。これがレジェンド級のウマ娘の迫力……

「ふうっ、良い走りだったわ！ チョベリグね！」

文字通りフルスロットルで飛ばすマルゼン先輩の背を捉えることはできず、1秒差、6バ身差くらいは付けられてしまった。流石に実力差が著しい……

「あ、ありがとうございます……もう一回お願いします！」

諦めきれなくてもう一度併走を申し込む。

「んー、これ以上は流石にダメね。膝が万全ならお相手したいんだけど……」

と、少し膝を気にするようにさすっている。

「ごっ、ごめんなさい！ 無理さしてしまいましたか？ 何処か痛めて……」

「ああうん。違うの、テウスちゃんのせいじゃないのよ。以前膝を骨折しちゃって。あんまり全力が出せないのよね……膝の調子がいいたきはいつでもお相手するから、それで許して？」

「勿論です。でも無理しないでくださいね、怪我は怖いですから……」
マルゼン先輩が以前骨折していたのは初耳だった。もっと先輩たちの情報も調べておくべきだろうか……

「ええ、モチのロンよ！ 心配してくれてありがと。あ、この後お暇？

お礼にドライブデートでもどうかしら？ 帰りにイタ飯でも食べに行きましょ？」

「あ、はい。是非ご一緒させてください！」

マルゼン先輩とのドライブはとても楽しい。それに帰りに連れて行ってくれるイタリア料理のお店も美味しくて、至れり尽くせりであ

る。

「じゃあ校門で待ってるわね！ 着替えたらおいで。あ、ゆつくりでいいからね？ じゃあ、チャオ〜」

手を振って離れていくマルゼン先輩を見送る。私も荷物をまとめて、部室へ戻る。併走一本しかしていないしいつもよりちよつとトレーニング強度は弱めだけけど、その併走の経験が凄まじいものだったので問題ないだろう。

トレーナーさんに報告した後問題なく外出許可を取って、その後のマルゼン先輩とのデートを楽しむのだった。

第二十一話 デイリー杯ジュニアステークス

次のデイリー杯ジュニアステークスへの登録も済んだ。今回はGⅡなこともあってフルゲート近い登録があつて、問題なく開催されそうだとのことである。

成立してもしなくてもやることは変わらないので、私はいつも通りトレーニングをしていた。次走がマイル戦であるということもあつて、スズカさんの他に時々マルゼン先輩やグラス先輩と一緒に併走したり出来たのは楽しかった。皆すつごく速くて、スズカさんやマルゼン先輩を抜くことはできなかったし、グラス先輩にはプレッシャーを掛けられて足が鈍つたところを一気に差し切られたりした。

ただ、仕上がりとしては万全である。公式戦では初のマイル戦だが、心配はあまりなくなつた。後は当日までモチベーションをキープできればいい勝負が出来るだろう。

「ふう……えつと、次は……」

トレーナーさんに言い渡されたトレーニングメニューを終え一休みする。この後はいつも通り追加の自主練をする予定だ。今日はプールの予約が取れたのでプールトレーニングを軽めにして、後は二期の中間テストに向けた復習を済ませる予定である。英語の文法も大分わかつてきたので、今回はいい点が取れると思う。

後片付けを終えてプール用の荷物を部室に取りに行こうとしてみると、ピロンとスマホが鳴る。通知を見るとトレーナーさんからメッセージが入っていた。知らせたいことがあるから部室まで来てほしいとのことだ。ちょうど向かうところだったのでその旨を返し、駆け足で部室へ向かう。

部室に辿り着き、部室のドアを勢いよく開ける。ズバァン、と結構な音がしたが、トレセン学園の設備は基本ウマ娘の力を基準に作られているので問題はない。

「トレーナーさん！ お呼びですか？」

「お、おう……扉はもう少し丁寧に開けような。勝負服が出来たから一度試着してもらおうかと思つてな。そろそろトレーニングが終わったところかと思つてメッセージを送ったんだが、大丈夫だったか？」

「はい！ 大丈夫です！ 早速着てみますね！」

勝負服。私たちウマ娘の晴れ着とも言える衣装で、GIなどの大舞台で着るものだ。トレセン学園に所属するウマ娘であれば、たとえ未出走でも一着は作成することが出来る。卒業式には全員勝負服を着て出席するのが慣行となつていたりするようだ。

早速衝立の向こうで着替える。同じ部屋にトレーナーさんが居るが、直接見えていないし別に構わないだろう。

「どうですか、似合っていますか？」

着替え終わつてトレーナーさんの前に出る。私の勝負服は黒を基調にした着物と、袴も黒色の組み合わせだ。普通の袴よりは少し走りやすく加工がされている。露出少な目でお願ひしたので袖もしっかりとっており、胸元もきつちりとしているようなものだ。所々にあしらわれたアヤメの花の模様が上品さを引き立てている。アヤメはおばあちゃんが好きだったので、私も好きになつた花だ。

靴は下駄のように見えるが足首辺りの帯でしっかりと固定されてい
て走るのに全く支障はなさそうだ。

ちなみに着付けは母に仕込まれたので一人で出来る。一般教養だとして教え込まれたのだが、使う機会は今日までなかった。

「おう、似合つてる似合つてる。まさにマ子にも衣装だな。大人っぽく見えていいと思うぞ」

「褒めてくれるのは嬉しいですけど、大人っぽく見えるつて……普段子供っぽいつてことですか？」

まあ、心当たりはあるけど。最近はトレーナーさんにも遠慮がなくなつてきたのでわがまま度合いが増している自覚はある。

「いや、そういうことじゃなくてな……何というかこう、風格つていうものが……」

少しトレーナーさんが焦つた様子で弁明してくる。それがおかし

くっついてつい少し笑ってしまい、それを見たトレーナーさんが困ったように頭をかく。

「とりあえず、走ってきていいですか？　もう走りたくて仕方なく、うずうずしちやいます」

勝負服に袖を通した時から、身体の奥から不思議な力が沸き出てくるような感じがして仕方がない。今すぐにもコースを駆け抜けてしまいたい。

「そうだな……一応芝コースを一周走ってもらえるか？　大丈夫だと思うが、不具合があるといけないからな。準備をするから少し待ってくれ」

「はい、わかりました！」

トレーナーさんがダブルレットなどの荷物を準備している間、そわそわしてしまう。スズカさんみたいにその場で回りだすようなことはないけれど、スズカさんが考え事をするときに左回りをする気持ちが少しわかった気がする。

そうしていると、部室の扉がコンコン、と控えめに叩かれる。

「ん？　来客か？　入っていいぞー」

トレーナーさんが準備を進めつつ扉の向こうの人物へ声を掛ける。ガチャリ、と音を立てて入ってきた人物は少し見慣れた人物だった。

「失礼するよ。テイオーは……居ないようだね。少し待たせてもらってもいいかな？」

入ってきたのは流星が特徴的な鹿毛のウマ娘、トレセン学園生徒会長、シンボリルドルフだった。

「あ、シンボリルドルフ生徒会長。お疲れさまです」

ぺこりと少し頭を下げて挨拶をする。初対面の時はダンスレッスン中にいきなりということもあってひっくり返ってしまったが、そこからちよつと話す機会もあり少しは楽に話せるようになったと思う。「ブラックプロテウス君か。お疲れ様。ん？　勝負服を着ているのかい？　うん、似合っているよ。まさに沈魚落雁、羞花閉月と言ったところかな」

「あ、ありがとうございます……面と向かって褒められると少し照れ

「ちやいますね」

沈魚落雁や羞花閉月の意味自体はよくわからないが多分誉め言葉だろう。今度辞書を引いて調べておかないと……

「それにしても……アヤメか。うん、良いね」

シンボリドルドル生徒会長が満足そうに頷いている。彼女もこの花が好きなんだろうか？

「勝負服だけに、ハナショウブ花菖蒲と言うことだね。なかなか良いセンスだ」

「……？ ……!!!？」

だ、ダジャレ!?… ダジャレなの!? 私は一体何を聞かされているんだ!?

「ち、違います！ そんなつもりじゃ……!!」

とりあえず否定しておかないとまずい気がする。おばあちゃんのお気に入りだったから要望しただけでそんな意図はなかった。とうか花菖蒲って厳密にはアヤメとは違ったような……？

「ふつつ、冗談だよ。でも、良いセンスなのは本音だよ。落ち着いた感じでも君に似合っている。君がその勝負服を着て走るときを楽しみにしているよ」

につこりと微笑まれる。凄い魅力があつてつい赤面してしまう。顔が良すぎる……

「あ、カイチョー！ 待たせちゃった？ さ、行こー行こー！」

私が照れているとテイオー先輩が部室に突撃してきて、シンボリドル生徒会長の手をぐいぐいと引いて外へ行こうとする。

「こちら、テイオー。そんなに急がなくても私は逃げないぞ？ では、沖野トレーナー、ブラックプロテウス君。失礼したね」

テイオー先輩を慈しむように見つ、こちらに軽く頭を下げてくる。

二人を見送った後、気を取り直して芝コースを試走した。1600mと少し短かったがいつも以上に気合が乗って走れて、いきなり自己ベストを記録して二人で驚いてしまった。

その後はもつと走りたくてトレーナーさんに思いつきりわがまま

を言っってしまった、結局プールの予約もテスト勉強も忘れて門限ギリギリまで走り続けてしまった。遅刻ギリギリで滑り込んでフジキセキ寮長に苦笑いされてしまい、その恥ずかしさで夜寝付くまでに少し時間がかかってしまったのだった。

【トレーナーSide】

滞りなくデイリー杯ジュニアステークスの日を迎え、今はパドックが終わり、本バ場入場中だ。今日のテウスは1枠1番。逃げのアイツには絶好のポジションニングだ。

パドックでは体操服を着たテウスが恐らくテイオーに教わったであろうポーズを決めていた。今日も一番人気なだけあってポーズを決めると大きな歓声が聞こえていて、ちよつとテウスが嬉しそうにしていたのが印象的だった。

ただ、先日勝負服を見せたのがいけなかったのか、今日勝負服で出ようとしていたことには困ったが何とか言い聞かせることが出来た。それでも今日はいつもとよりテンションが高いので、何かやらかさないか心配だ……

周りを見回すと他のトレーナーと目が合ってちよつと気まずくなる。他距離の戦場にいきなり乗り込んできたような形なのでまあ、歓迎はされていないだろう。表だって批判はされていないが良い感情は抱かれていないはずである。

これは次のレースは間隔を空けた方がいいな……別に俺が批判される分には構わないが、その責めがテウスに及ぶようなことは避けなれないといけない。次はGⅢの東京スポーツ杯ジュニアステークスカ京都ジュニアステークスにする予定だったが、これはホープフルステークスまで我慢させた方が良さそうだ。今日の結果次第では朝日杯FSでも良いと思うが、フジキセキが出てくると思われる以上中途半端な調整では勝てないだろう。

ホープフルステークスには恐らくタヤスツヨシが出てくるだろう。デビュー戦は短距離で3着だったが、距離が延びるにつれ順位も上がっている。恐らく得意距離は2000m前後だと思われるので、確実にかち合うだろう。

まあ、それでも2000mなら心配していない。メイクデビューと同程度の走りが出来れば問題なく勝てるだろう。なんせあの時のタイムは皐月賞のレコードすら超えている。

そうこうしていると京都レース場にファンファーレが響き渡る。今日のバ場状態は多少雲は出ているが良の発表だ。京都レース場は今日が初めてじゃないし、問題はないと思うが……：：：双眼鏡で覗く限り、テウスのテンションが大分高い。ゲート入りしても変わらずうずうずとしてしている。スタート前から掛かってるんじゃないだろうな……

『各ウマ娘、体勢整いました……今スタートしました！』

全員がゲートに入り、一瞬静まった後、ゲートが音を立てて開く。スタートは……：：：良いスタートだ。今までで一番良いスタートかもしれない。

『ブラックプロテウス、抜群のスタートを切りました！ 最初からエンジン全開で後続のウマ娘たちを引き離していきます！』

内枠有利なバ場状況と言うこともあるが、それにしたって今日は速い。これは……：：：掛かってるな……

『ブラックプロテウス、勢いは止まりません。淀の坂に突入しても全力全開、フルスロットルで飛ばしています。二番手はトモエナゲ、同じ逃げウマ娘ですが既に5バ身ほどの差が開いてしまっています』

『これは……：：：掛かってしまっているかもしれないですね。スタミナには定評のあるウマ娘ですが、このペースではたして持つのでしょうか……』

そのまま掛かりっぱなしになりながら坂に入る。ちっとも冷静さを取り戻す様子はなく、ラストスパートかと言わんばかりの走り坂を駆け上っている。これは後で反省会だな……

『第3コーナー半ばを越えて、ここから下り坂。1000m通過タイムは……57秒ジャスト！ かなりのハイペースだ！ 更に下り坂を勢いよく下つていくぞ、まさに直滑降だ！』

下り坂と言うのはスピードに乗りやすく、さらに自然と前のめりになってしまうことが多いため恐怖を抱くウマ娘も多い。淀の坂は特に顕著で、まるで第3コーナーに小さな丘があるような構造になっているこのコースの下り坂はかなり勇気が要る。

テウスはその点怖いもの知らずとも言えるくらいの直滑降を決める。たとえ転んでも何ともないだろうと思っただけかもしれないが、見ているこちらとしてはハラハラして仕方がない。

『坂を下り終わって第4コーナー、乗りに乗ったスピードに負けず綺麗なコーナリングを決めます、流石はコーナリングに定評のあるウマ娘！』

第4コーナーを先頭で回ってくる。いつも通り速度をほとんど落とさないコーナリングでホームストレッチに入ると大歓声がテウスを迎える。

すると少し落ち着きかけていたテウスがまた掛かってしまい、さらにそこからスパートを掛ける。テウスの足音だけいやに大きく聞こえるのは気のせいじゃないだろう。どれだけ強く踏み込んでいるのか、特に意識はしていないだろうが後ろに芝が千切れ飛んでいる。今日は良バ場の硬いターフのはずなんだが……力任せに走っているようで、速度自体はそれほど速くなつたわけではないのが残念だ。あのパワーでスピードに乗ればもつと速い走りが出るだろう。

『後続は大きく離れた！ これは圧倒的です、このウマ娘で決まりだ！ ブラックプロテウス、圧勝ゴールイン！ 勝ち時計は1:31.5！ 無傷の四連勝と、ジュニア級芝1600mレコードタイムを記録しました。2000mに続き、1600mでもレコードホルダーだ！』

そのままの勢いでテウスがゴールする。最初から最後まで掛かりっぱなしでよくスタミナを切らさないものだ……

『2着はトモエナゲ、3着はミニダンデライオンが入りました。おつと……ブラックプロテウス、ゴールしてなお爆走しています。ゴール板を過ぎて第1コーナーを綺麗に曲がっていきます』

『これはゴールしたことに気付いていないようですね。大分掛かっていましたから、周りが全く見えてないようです。係員が慌てて制止しようとしています。止まりませんね、そのまま第2コーナーを過ぎて向こう正面まで行ってしまっています。いやー、物凄いスタミナですね、感心しますよ。果たしてどこまで走れるんでしょうねえ』

ゴール後も止まらず走り続けるような珍事に頭を抱える。当の本人はどうして自分を止めようとするのか全く分かっていないらしく気にせず爆走しているのだから手に負えない。走ってるウマ娘を無理矢理止めることは自殺行為なので、テウスが落ち着くまでは手が出せないだろう。

幸いなのは解説や観客には受けが良いことだろうか。観客が面白がって歓声を上げるものだから、それでさらに掛かって止まらなくなってしまうので悪循環なのだが。

結局テウスが止まったのは更にもう一周し、3周目の第3コーナー、丘の頂上辺りだった。立ち止まって辺りを見回すと状況を把握したらしく、係員に深く、何度も頭を下げながらウイナーズサークルへ誘導されている。

さて……俺も謝りに行くか……無意識に飴を噛み砕きながら、この後は始末書を書く必要があるだろうなどと、いつの間にか雲一つなくなつた晴天の空を見上げるのだった。

第二十二話 逃げ切りシスターズ

マイル戦でも十分戦えた私は満足なライブもできてテンションMAXだった。

だが、翌日に学園に連れ戻され、理事長と駿川さんにトレーナーさんと一緒に説教されてしまった。

レースが終わった後3分ちよつとくらい走り続けてしまったのがいけなかったらしく、大分お叱りをいただいたしまった。逸走したわけではないので特に何か処分があるというわけではないらしいが、トレーナーさんと一緒に反省文を書く羽目になり、結果私はエリザベス女王杯を現地で観戦することはできなさそうだ。

トレーナーさんは抜け出す許可が下りたが私には下りず、駿川さんの監視のもと自室でひたすら反省文を書いている。

「か、書けましたあ……」

ぐったりとしながら駿川さんに反省文を提出する。

「はい、確認します……ここ、誤字がありますね。後もう少しです、頑張りましたよ」

漢字の点が一つ少なかったことを指摘されて書き直しを指示される。凄く優しい笑みを浮かべているのが逆に怖い。

「ひいん……」

お母さんも字の間違いには厳しかったけれど、駿川さんも同じくらい厳しい。一つの誤字脱字も許してくれない。涙目になりながら必死に机に噛り付くしかないのであった……

あの後リテイク5回でなんとか解放された。時間はお昼前である。今から電車で飛び乗れば間に合う……？ 東京から京都までは大体二時間……ギリギリか……やめておこう。

こういう時に急ぐと良いことがないし、大人しくしておこう。もし

道中で車にはねられたりでもしたら今度こそトレーナーさんの胃に穴が開いてしまう……

ひとまずカフェテリアでご飯を食べながらレース観戦でもしよう。今からトレーニングするにも少し時間がないし……テスト勉強でもしようかな。

勉強用具を詰め込んだ鞆を持ってカフェテリアへ向かう。学園の食堂であるカフェテリアだが、無料のビュッフェ形式で基本いくら盛ってもいい形になっている。

勿論、自己管理が苦手なウマ娘向けにおすすめのメニューが張り出されていたり、職員さんに声を掛ければおすすめの量を盛ってくれたりする。ちなみに二十四時間三百六十五日開いているらしい。まあ、深夜にこっそり抜け出してトレーニングをするようなウマ娘も居るし、仕方ないんだろう。

テレビも数台設置されており、レースがないウマ娘はここで観戦することも可能だ。今日はGⅠが行われることもあつて混みあう可能性があるので、少し急いでカフェテリアに向かう。

何とか席を確保して、昼食を取りに行く。基本的にメニューは人参料理がメインとなっているが、和食に中華はもちろん、ドイツ料理やアイルランド料理など様々な種類がある。

私は好き嫌いもアレルギーもなく、相当なゲテモノでない限りは何でも食べられるのでバランスが良くなるように盛っていく。今日は洋食の気分なのでハンバーグを多めにとつて、後はバランスが良くなるように、山盛りに盛った後に席に戻る。

「いただきます」

手を合わせてから食事を始める。まずはハンバーグから手を付ける。一口大に切つてから食べると中から肉汁がじゅわりと溢れ出てきて、お口いっぱい幸せが広がる。

ウマ娘が食べる量に合わせて大量に作っているにもかかわらず、味が大雑把になることはないのが凄い。料理人さんの心意気が感じられる。

その後も食事を続ける。どれもこれも美味しくて顔が緩み切ってしまうのがわかる。でも仕方ないんだ、美味しいから無防備になってしまうのも仕方ないんだ……!」

「席空いてないね……あー……ここー! 一緒にしてもいいかな?」

声が聞こえて顔を上げると、そこには二人のウマ娘が居た。

一人は栗毛ツインテールのウマ娘、自称『ウマドル』のスマートファルコン先輩。もう一人も栗毛で、頭に何か機械っぽいアクセサリを付けている、ミホノブルボン先輩だった。

「えっ、あっ、スマートファルコン先輩にミホノブルボン先輩……ど、どうぞ!」

レース映像でしか見たことがなかった逃げウマ娘の先輩2人がいきなり目の前に現れて少し動揺してしまう。

「失礼します」

「隣にお邪魔しまーす! えっと、ブラックプロテウスちゃんだよね? 前からずーっとお話したいと思ってたんだ♪ 食べながらいいから聞いてくれないかな?」

ミホノブルボン先輩はすぐに椅子に座り、スマートファルコン先輩はわざわざ椅子を隣まで持ってきてずいっと顔を寄せてくる。こちららは名乗っていないのにどうやら名前を知られているようだ。

ネイチャ先輩曰く私は良くも悪くも目立っているらしいので仕方ない……のかな?

「えっと……お話って……?」

「うん。プロテウスちゃん、逃げ切りシスターズのメンバーになって欲しいの!」

「……??? 何故私に……?」

逃げ切りシスターズは確かこの先輩二人に加えてスズカ先輩、アイネスフウジン先輩、マルゼン先輩の逃げウマ娘五人で組まれた、生徒会公認の広報ユニットだったはずだ。

確かに私も逃げウマ娘ではあるけれど……

「フクキタルちゃんが占いで『今日カフェテリアで出会った逃げウマ娘が逃げ切りシスターズの新たなメンバーになるでしょう……』って

言ってたから！」

随分大雑把な占いである。スズカ先輩が居たら確実にツツコミを入れてくれていただろう。

「カフェテリアに居る逃げウマ娘は私だけじゃないと思いますが……それに、私はアイドル「ウマドルだよ？」ウマドル向きじゃないと思うんですけど……フリフリしたものは着慣れませんし……」

さっと見るだけでも今カフェテリアにはニシノフラワー先輩にご飯を食べさせてもらっているセイウンスカイ先輩とか、メジロアルダン先輩とメジロライアン先輩と一緒に優雅に食事しているメジロパーマー先輩などが居るし……

「そんなことないよ！ この間のウイニングライブのダンスも上手だったし！ 衣装もきつと似合うから！ とりあえずお試してもいいから、ね？ ね?? ねっ!!??」

「わ、わかりました……わかりましたから少し離れてください……」
ぐいぐいと迫ってくる圧に負けてつい了承してしまう。まあ、スズカ先輩も所属しているわけだし悪いようにはならないだろう。

「やったー！ じゃあさっそくダンスレッスン……の前にご飯食べないかね。って、あれ？ ブルボンちゃんは？」

「ミホノブルボン先輩なら先ほどご飯を取りに行きましたけれど……」

話している途中に一人でトレーを持って行ったのを目撃している。

「え、いつの間に!? って、ファル子も取りに行かなきゃー！」

「あ、私もお代わりが欲しいので一緒に行きます」

山盛り取っていったつもりだったけど全部食べてしまった。少し食べ足りないのでお代わりしてやることにしよう。

「じゃ、ご飯も食べ終わったし！ 早速レッスンだね！」

三人で楽しくご飯を食べ終わった後、途中で出会ったマルゼン先輩を連れて四人でレッスンスルームへと向かった。ファル子先輩が張り切って仕切っている。

「食事後によりステータス、『満腹』が発生しています。激しい運動は控えるべきかと」

ブルボン先輩が少し膨らんだお腹をさすっている。あの後更にもう一回お代わりした私につられて結構食べてたから……

「あんなに食べちゃうからだよ！ まあでも、ファル子もちよーつきついからまずは軽めにしとこっか？」

「私は大丈夫よ？ テウスちゃんも行けるわよね？」

「はい、マルゼン先輩！」

ちよつとだけお腹が苦しいけれど、マルゼン先輩に行けるかと聞かれたら行くしかない。先輩に格好悪いところは見せたくないし、見せられないのだ。

「じゃあファル子がリズム取るから、マルゼン先輩とテウスちゃんはステップしてみてね！ いっくよー、ワンツー、ワンツー！」

ファル子先輩の手拍子に合わせてステップを、俗にいうアイドルステップをする。これはテイオー先輩からも教わったし、ステージでも時々やるので慣れたものだ。

マルゼン先輩も問題なくステップを踏めている……少し膝を気にしているようではあるが。

「うんうん、良い感じ良い感じ！ それじゃお腹も楽になってきたし、皆で一度通して踊ってみよっか！ あ、テウスちゃんは振りわからないだろうから見学しててもいいし、見て覚えてもいいよ！」

ファル子先輩とブルボン先輩が加わって、恐らく逃げ切りシスターズの曲で踊ると思われるダンスの練習を始める。ライブの映像を見たことがある程度だったので大人しく見学する。

なかなかハードなダンスだと思う。普通のウイニングライブのダンスより動きが大きくて、身体全体をよく使う。逃げ切りシスターズのライブはレース後に行うわけではないので、レース後の消耗を気にしなくても大丈夫、ということなのだろうか。

そんな動きをしても、ファル子先輩は笑顔で踊っている。ブルボン先輩は……無表情だ。余裕の表れなのか、はたまたいつも通りのポーカーフェイスなだけなのか。私にはよくわからない。

マルゼン先輩は……ちよつとへ口へ口になっている。大丈夫なんだろうか……

「マルゼン先輩、頑張ってください！」

私の声援でどれだけ元気になるかはわからないけれど、応援してみよう。ライブの時、ファンの人からの声援はとても心強かったから、多少は効果があると良いのだけれど。

「だ、大丈夫よ。これくらい！ 後輩ちゃんに情けないところは見せられないもの！」

マルゼン先輩がきりつとした表情になって踊りにキレが復活する。そして二回目のサビの部分に入る。

一番盛り上がるころだということもあって、私のテンションも上がってしまう。キャーキャーと声をあげて応援してしまう。アイドルに熱狂するファンの気持ちが少しはわかってしまうな……

「はうっ!!？」

一番振りが大きくなったところで、マルゼン先輩の腰辺りからグキィつととても嫌な音がした。しん、と静まり返って皆でマルゼン先輩の方を見る。

マルゼン先輩は腰を押さえてその場に蹲っていた。

「ま、マルゼンせんぱあい!!？」

慌てて駆け寄る。まさか骨折……？ いや、これは……

「……マルゼン先輩にバッドステータス、『急性腰痛症』の発生を確認。早急に保健室への搬送が必要です」

「言ってる場合じゃないよブルボンちゃん!? た、担架担架!! 担架どっお!!？」

部屋中ひっくり返す勢いで探し出した担架にマルゼン先輩を乗せ、なるべく揺らさないようにしながら保健室に搬送していくのだった。

第二十三話 取材

「チームスピカに取材……ですか？」

12月に入つてすぐ、いつも通り坂路でタイヤを引いていると、トレーナーさんから声を掛けられた。

「ああ、今年に入つてスカレットはトリプルティアラにエリザベス女王杯、ウオツカはダービー、スズカはヴィクトリアマイル、宝塚記念、天皇賞、マイルCSで勝つてるだろ？ 注目度が高いつてこともあつて、チームスピカに各社から一日密着取材のオフアアが来てるんだが……受けるか？」

先日のスカレット先輩が勝つたエリザベス女王杯は、ウオツカ先輩が右関節痛によりエリザベス女王杯は回避しているので決戦とはならなかった。順当にスカレット先輩が制し、トリプルティアラに加えてもう一つのティアラを手にした。

ウオツカ先輩はジャパンカップに挑んだのだが4着に終わつてしまっている。

二人とも次は有《font:ul40》馬《font》記念を予定しており、今年最後の決戦がそこで行われる。シニア級の先輩たちにどれだけ食らいついていけるのが期待されている。

スズカ先輩はスズカ先輩で、危なげなくマイルCSを制した。最初から最後まで影を踏ませることもなく逃げ切っている。今年に入つてこれで4戦4勝、最優秀シニア級ウマ娘及び年度代表ウマ娘の第一候補に躍り出ている。有《font:ul40》馬《font》記念は距離不安から回避する予定だとのことだが、出走を望むファンは多いだろう。

そんなこんなで活躍している先輩たちが多いので、取材の依頼が入るのは当然だろう。

「はい、是非受けさせてください。いつも通りでいいんですよ？」

密着取材を受けるのは初めてである。レース後にインタビューを受けたりしたことはあるけれど、トレーニングをしっかりと取材され

たりするのは初めてだ。それでも聞かれること、見られること自体はそう変わらないだろう。

「理事長からもありのままの姿をと言うことで言われてるからな……それでいいが、あんまり張り切りすぎるなよ?」

「だ、大丈夫ですよ……も、もうあんなに掛かったりしませんから……」

トレーナーさんに釘を刺されてつい目をそらしてしまう。正直、あのレースのことはほとんど覚えていない。ゲートが開いて走り出したところまでは覚えているのだが、そこから先は頭が真っ白になってしまっていて、少し疲れて息を入れようと思って周りを見たら誰も居ないのに混乱して、掲示板を見てレースが終わったことがわかり血の気が引いた。

トレーナーさん曰くすごいパワーで走っていたからあの時の走りをもノにしようと言われたのだが、レース映像を見て再現しようとしてもどうにもうまくいかなかった。

脚が空回りしてしまうような感じになってしまつて逆に減速してしまつたり、加速できてもスピードを抑えきれずにコーナーで思いつきり外によれてしまつたり散々だった。

コーナーリングは得意なつもりだったのだがまだまだ未熟だということがわかり、収穫はあつた。一応最終直線でなら使えなくはないし……

いまだに先輩方には勝てないし、私にも何か一つか二つ武器が欲しいと思つてはいるのだが……

「よし、これで全員OKだな……取材は明日だから、準備しておいてくれ」

「はい、わかりまし……え、明日!? そんなに急なんですか!」

明日は土曜なので授業は休みだ。だから一日トレーニングの予定ではあつたのだが、流石にいきなりだと……

「すまん! 年末で忙しくて連絡し忘れてた!」

トレーナーさんが素直に頭を下げる。基本的に仕事は出来る人なのだが所々配慮に欠けるところがあるのは流石にどうにかした方が

いいんじゃないだろうか。

「別に私は構いませんけれど……お仕事、溜まっているなら手伝いますよ?」

年末年始は書類が沢山出ると聞いた。多少なら手伝えると思うのだが……

「ありがとな。でもいいよ、気持ちだけ受け取っておく。猫の手も借りたところではあるが、見せられない書類とかもあるしな」

ほんぽんと私の頭を撫でてからトレーナー室の方へ去っていく。

それにしても、密着取材か……どんな取材になるんだろう? ちよつとワクワクしちゃうかも……

「おはようございます……す?」

翌日、いつも通りの時間に早朝トレーニングを始めようとすると、部屋にはすでにトレーナーさんがいて、他にも数名のスーツを着た人物が居た。

「おう、来たか。こちら記者さんたちだ。ほら、挨拶挨拶」

「あ、はい! おはようございます、ブラックプロテウスです! 本日はよろしくお願いします!」

目の前にいる三人の記者さんに挨拶をして、深く頭を下げる。初対面の人たちばかりで少し緊張してしまいそうだ。

「よろしくお願いします。週刊ガゾンの善沢です」

「おはようございます、月刊ラーゼンの最上です」

「おはようございますっ! 月刊トゥインクルの乙名史です! 本日はよろしくお願いしますね、ブラックプロテウスさん!!」

最初に名乗ったガゾンの記者さんは、眼鏡を掛けて帽子を被った壮年の男性、ラーゼンの記者さんは黒い髪を短く切りそろえた、穏やかそうな女性。彼女も帽子を被っている。

そしてトゥインクルの記者さんは長い黒髪で、蹄鉄型のペンダントが特徴的だ。そしてちよつとテンションが高い。

「えつと、普通にトレーニングしてくればいいんですよね? 着替え

「てもいいですか？」

「はい、どうぞ！ 私たちは外で待っていますので!!」

乙名史記者が答えて他二人の記者と、トレーナーさんを連れて出て行ってしまおう。全員苦笑いしているくらいだから、きつと彼らには慣れたことなんだろう。

朝からあんなテンションで、スタミナ持つのかな……？ 少し心配に思いつつも着替え始める。

いつも通り、体操服の下にギプスを付けて……

「あつ……」

付けようとしたら、パキンととても軽い音を立てて部品が破損してしまつた。

実は慣れてきたころから何個も破損させてしまっていて、タキオン先輩から今あるのはこれで最後だと言われていた分だ。今日はもう素のまま練習するしかない。

後でタキオン先輩に謝らないと……変な薬一本飲むだけで許してくれるけど、申し訳なさで一杯である。

ひとまずパパッと着替えて部室を出る。最近は寒くなってきた辛いので、上下ともにジャージを着ている。途中で暑くなって脱ぐことがあるので、下には夏用の体操服も着ているけど。

「お待たせしました。えつと……トレーニング始めてもいいんですよね？」

「ああ、いいぞ。確か坂路だったよな」

「ちよ、ちよつと待ってください。一人だけなんですか？ 他の娘たちも？」

ガゾンの記者さん、善沢さんが困惑したように辺りを見回している。

「今日の集合は9時なんですよ……今からこいつがやるのは自主トレですね。毎日この時間から始めています」

「まだ5時半ですけど……ストイックなんですねえ」

「そんなストイックなウマ娘のために自らもそれに最後まで付き合う覚悟をしているんですね……!!」

「乙名史さん？　まだ始まったばかりですから落ち着きましよう？」
記者さんがトレーナーさんたちと話しながらこちらを見ている。
なんだかちよつと調子が狂うなあ……

準備運動を済ませ、いつも通り坂路トレーニングを始める。今日はギプスもないし、回数をこなそう。坂路ダッシュ20本くらいからでいいかな……記者さんもいるし、なるべくいろんなトレーニングを見せた方がいいんだよね？

軽く3本程度流して走ってから、残りを全力ダッシュする。やつぱりちよつと負荷が足りない。大体一回50秒前半台で駆け抜けて、少しだけインターバルを入れつつ往復する。坂路は全体で1200mくらい、タイムが測れるのはその内の4ハロン、800mくらいだ。大体一回走って戻ってくるまで2分と言ったところだろうか。インターバルを入れて大体一回当たり3分と言ったところである。

最初の数本はトレーナーさんたちと談笑しながら見ていたが、10本を超えたあたりでざわざわとし始めて、15本を超えたあたりで静かになってしまっていた。

「ふう……あれ、どうかしましたか？　あ、流石にずっと同じトレーニングを見てると退屈しちゃいますよね、ごめんなさい」

走り終わってから気が付いたが、流石に一時間近く坂路を見ているのは飽きてしまうだろう。ちよつと配慮が足りなかったかな……

「いや……そういうことじゃないと思うがな……まあいい。ほら、水分補給はちゃんとしろよ？」

トレーナーさんが苦笑いしながらドリンクのボトルを渡してくれる。

「ありがとうございます。えつと……次はウッドチップの予定だったんですけど……少なくした方がいいですか？」

トレセン学園のウッドチップトレーニングコースは一周約2000m。大体一時間くらい走る予定だったので出来て20周くらいだろうか。

ただ、記者さんたちが呆然としているのがちよつと困る。乙名史記

者だけは目をキラツキラさせているけれど……

「いや……もう遅いだろ。好きに走ってくれ。チーム全体トレーニングになったら正気に戻るだろうし……」

「わかりました！ ウッドチップが終わったら芝とダート、それぞれ一時間くらい走りますね！」

集合は9時だったはずなので、ウッドチップ、芝、ダートの三つのコースを一時間弱ずつくらい走ればちょうどいい時間になるはずだ。

トレーナーさんにボトルを預けて、ちよつと暑くなってきたのでジャージを脱ぎ、畳んでからウッドチップコースへ向かう。坂路コースのすぐ隣なのですぐに辿り着ける。

脱いだ時にちよつと乙名史記者の目が怖かった。パドックで他のトレーナーさんが私を見るときの目に似ている。仕上がりを確認されているのだろうか……

記者さんたちの反応を置き去りにして、12月の冷たい風を浴びながらコースを駆ける。夏の日差しを浴びながら走るのもいいけど、冬の冷たい風を浴びながら走るのもいいものだ。身が引き締まる思いになる。

やっぱり走るのはとつても気持ちよくて好きだ。ウッドチップも、芝も、ダートも、ポリトラックも、全て走り心地が違って、全然飽きない。

何千メートル、何万メートルでも走れてしまいそうだ。流石にずっと全力疾走はできないけれど、駆け足よりちよつと速いくらいなら4時間くらいはぶっ続けで走っていられると思う。勿論途中で水分補給とかは必要になるだろうけれど……

何周か走った後、ちらりと横目でトレーナーさんたちの方を窺う。流石にプロということなのか、記者さんたちは正気を取り戻してトレーナーさんを質問攻めに行っているようだ。

何を話しているんだろう……集中すれば聞こえるだろうけど、流石に走っている途中に他事に集中するのは危ないのでやめておく。

トレーナーさんが強要しているとか思われないと良いんだけど……ちよつと他人に誤解されるところがある人だから心配である。

大人だし大丈夫だと思うけど。

「ふう、終わりました！ そろそろ時間ですよね？」

8:30にセットしていた腕時計のアラームが鳴ったので、ダートコースを走るのをやめトレーナーさんのところへ合流した。

「おう、そうだな。あと30分くらいはあるが……」

「流石に一回汗を流してきたので。先輩方の前に汗びっしり出るわけにはいきませんから」

「アイツらは気にしないと思うがなあ……わかった。じゃあまた9時にな」

気にされる気にされないの問題ではなく、私が気にするのだ。

「あ、あの……ブラックプロテウスさん？ 何か身体に問題とかは……」

「全然大丈夫ですよ？ ご心配していただいてありがとうございます」

荷物をまとめていると最上記者が話しかけてきた。ちよつと心配をかけてしまっただろうか、申し訳ない。なるべく心配をかけないよう笑顔で接することしよう。

「で、でも……100kmくらいは走ってますよ、ね……？」

「詳しくは測ってないですけど、多分？ でも、全力で走っていたわけじゃありませんし。所々で水分補給もしていましたから」

子供の時に走りすぎて脱水症状を起こしてから水分補給はしつかりするようになっている。私としてはちよつとふらふらするな程度の事だったのだが、おじいちゃんに怒られてからは気を付けている。流石に生物の粋をぶつちぎっているというわけではないらしい。

「毎日のようにこんなトレーニングを？ オーバーワークなのでは？」

「うーん……でも、私がやりたくてやってることですから、そう思ったことはないですね。好きなだけ走ってるってだけで……」

他の娘より走ってるだろうとは思っているけれど、ただ単に走っ

たりするのが好きなだけだ。それが高じて筋トレとかのトレーニングも好きになったと言うだけで、そこが原点である。

「そ、そうなんですわね……あ、呼び止めちゃってすみません！」

「いえ、大丈夫ですよ。他に質問がなければ行きますけど……大丈夫なので行きますわね」

一礼してからシャワー室へ向かう。今日のチームトレーニングの予定は午前中はプールトレーニングだから、水着も取ってこないと……そう思うと、記者さんたちの前で水着姿を見せるのか……学校指定の水着だからまだいいけど、少し恥ずかしいな……

ちよつと憂鬱になりながらも一度寮に戻るのだった。

「トレーナーさん！ 取材はいいですけどなんで今日プールトレーニングにしましたんですの!?!」

「いや、悪かったって言って……ぐわあああ!!?」

集合時間になって部屋に集まると、トレーナーさんがマックイーン先輩にロメロスペシャルをキメられていた。一か月に一回は見る光景なので、慣れたものである。

「ちよつと恥ずかしいけど、ボクは大丈夫だよ？ このテイオー様は体型管理もカンペキだからね！」

「私は昨日食べ過ぎちゃったのでちよつと恥ずかしいです……」

「スペちゃん、だからあれほど食べ過ぎない方がいいって言ったのに……」

先輩たちはそれぞれ違う反応を示している。ちなみにスカールレツト先輩とウオツカ先輩はプール一番乗りをかけて競り合いながら先に行ってしまった。

ゴルシ先輩はスキューバダイビングの装備を取りに行ってくると言っただけに行ってしまった。ゴルシ先輩のプールトレーニングとはいったい……

「マックイーン先輩、そのあたりで……外で記者さんたちをお待たせしていますし……」

「そうですね……今日はこのくらいにしてあげますわ！ でも、次からもっとスケジュールを考えてくださいまし！」

マックイーン先輩がトレーナーさんをその場に解放する。トレーナーさんはすぐに起き上がったのでダメージは少なそうだ。

「よ、よし。じゃあ今日は午前中はプールトレーニング、午後はジムで筋トレだ！ 変に気取る必要はないから、いつも通りで頼むぞ！」

トレーナーさんの合図でみんなが部室から出てプールに向かう。向かっている最中色々聞かれたけど、特に当たり障りのない返答をしていた。

大体聞かれたのはレース予定についてだが、予定については発表しているホープフルステークスが予定だったし、テイオー先輩は有《font:ul40》馬《font》記念、マックイーン先輩はまだリハビリ中、スペ先輩はWDTが目標だ。

スズカ先輩についてはドリームシリーズに行くのか、それとももう一年トウインクルシリーズで走るのかまだ決めかねている。学園の理事会からはドリームシリーズ移籍を勧められているそうだが、そのあたりはウマ娘の意思に任されている。

そのような話をして、ゆっくりとプールへ向かうのだった。

「アタシが一番なんだからあああああ！」

「オレだって負けねええええ!!!」

着替え終わって、スカレット先輩とウオツカ先輩が競って泳いでいるのを見ながら準備体操をする。

ちなみに記者さんたちは水飛沫がかからないような場所からの取材だ。カメラなどに水がかかったら大変だし、手帳が濡れてしまうと取材にならないだろう。

乙名史記者だけは自分も水着に着替えて取材するつもりだったようだが、流石にトレーナーさんに止められていた。

「よししテウス！ 今日飛び込み台からダイビングだ！」

麦わら帽子を被ってシュノーケルと浮き輪を装備し、シマシマの

ウエットスーツを着たゴルシ先輩にいきなり抱えあげられる。

「ええっ!?! ちよ、ちよつと待つてください。降ろしてえ!」

浮き輪を放り投げたと思うと私を抱きかかえて10mの飛び込み台まで連れていかれる。高所恐怖症ではないがちよつとヒュツと落ちてしまう。心の準備が……

「ウマ娘は度胸だZE☆ いくぞおおお!」

「二人で飛び込むのは危険でっ、うわああああ!!」

そのまま抱きかかえられたまま飛び込まれる。ゴルシ先輩はお腹から、私は背中から大きな水飛沫を上げて水面に落下した。

「げほっ、げほっ、散々な目に遭いました……」

痛む身体を動かして何とか泳いでプールサイドに辿り着き、息を整える。ゴルシ先輩は水面にぶかぶか浮かんでいた。まあたぶん大丈夫だろう、ゴルシ先輩だし。

「て、テウスちゃん……大丈夫?」

「大丈夫です。ゴルシ先輩も私が頑丈だからって無茶しますよね……」

「ウソでしょ……何であれで無事なの……?」

スズカさんが困惑しているが無事なんだから良いと思う。ゴルシ先輩だっていつの間にか復活して今度はマックイーン先輩に絡んでいるし。

「全員集合! ……とりあえず真面目にトレーニングしような? 全員でまずはウォーキングからな?」

トレーナーさんが呆れたように全員を集めて、トレーニングを指示する。サボっているように言われるのは心外だが……まあいいか。

お昼ご飯を食べ終わって、ジムトレーニングに移行する。プールトレーニングではゴルシ先輩があの後なぜか真面目にトレーニングをしていたのが不気味だった。いつもならプールの上にボートを浮かべて一人でリバーシしたりしているのに……取材の目があるからだろうか?

ひとまずはベンチプレスでトレーニングを始めよう。スズカさんはランニングマシンだったり、スクワット先輩はウオッカ先輩とバイクでトレーニングしていたりとそれぞれ好みのトレーニングからしている。一応トレーナーさんに目安のトレーニング量は指示されているけれど、順番は好きにしろと言われてしまったのでばらばらだ。

私はベンチプレスからだ。最終的には500kgでトレーニングする予定だ。500kgなのは、それがトレセン学園にある最大の重量というだけであつて、それ以上上げられるウマ娘も居るだろう。オグリ先輩とか多分出来そうだ。

都度インターバルを空けて、100回を3セット行う予定だ。200kgで軽くアップした後には少しづつ重量を上げていく。やりすぎてもいけないし、上半身だけ鍛えても仕方ない。この後はレッグプレスとかレッグエクステンションなどの下半身のトレーニングを行う予定だから、セット数は少なめだ。

レッグエクステンションは膝を痛めやすいので行わないウマ娘も居るが、私は遠慮なく行う。

人間は筋肉をつけすぎても走るのに支障が出るというが、ウマ娘ではそういうことはない。腹筋がうっすら割れる程度になったりはするが、ボディビルダーみたいにバッキバキになったりしないのだ。ウマ娘の身体には様々な神秘があるが、どれだけトレーニングしても外見がほとんど変わらないのはちょっと嬉しい。

「素晴らしいですっ!!!」

考え事をしつつベンチプレスを上げているとジム中に大声が響き渡った。驚いて潰れそうになってしまったのはちよつとヒヤツとした。

声が出た方を見ると、マックイーン先輩と二人三脚でリハビリトレーニングをしていたトレーナーさんに乙名史記者が感極まっていた。手帳とペンを握りしめて興奮している。他二人の記者さんはついに耐えられなかったかと言わんばかりに頭に手を当てて天井を

見上げていた。

「ウマ娘の為であれば自らも過酷なりハビリにも身を投じ、苦しみも喜びも分かち合う覚悟……素晴らしいですっ!!!」

「いや、ちよつと見本を見せていただけで全く同じことをするってわけじゃ……聞いてないなこれ」

トレーナーさんが困ったように頭をガシガシ掻いている。その後もまくしたてる乙名史記者を落ち着かせるためか、記者さん二人が両脇を抱えて出て行ってしまった。取材は……いいんだろうか……？

少し心配に思いつつもトレーニングを再開する。他の記者さん二人はすぐに戻ってきたが、乙名史記者が戻ってきたのはトレーニングの終わりで皆でストレッチをしている所だった。

何とか落ち着いてはいたもののテンションは高く、戻るなり早々にトレーナーさんを質問攻めにしていたのは少し面白かった。

「本日はありがとうございました！ 記事を楽しみにしていただきー！」

17時ごろ、今日予定しているすべてのトレーニングが終わり、乙名史記者がこちらに笑顔で挨拶してくる。他二人の記者さんは乙名史記者を止めるのに大分体力を使っていたので疲労困憊の様子だ。逆に彼女は何でこんなに元気なんだろう……

「お疲れさまでした。えつと……この後自主練する娘も居ますが、見ていかれますか？」

「勿論ですともっ!!!」

乙名史記者は即答で返事をしている。他の記者さんたちは疲れた様子ではあったが、そこはプロ根性とでもいうのか彼らも最後まで取材を続けるようだ。

「ちなみに、そのトレーニングする娘は？ トウカイテイオーとか、ダイワスカーレットとかウオツカとかでしょうか？」

「あの娘たちはちよつとオーバークワーク気味なので、この後は休ませます。自主練するのはブラックプロテウスですよ」

今日のトレーニングはかなりハードだったので、ゴルシ先輩以外は終わった後結構疲れていた。ギリギリまで追い込まれた、と言う感じだ。トレーナーさんは必要とあらばハードトレーニングを課すことも辞さないもので、そのあたりは結構スパルタである。

「え、ブラックプロテウスさんって朝も結構なトレーニングしてましたよね……？ どれだけのトレーニングをしてるんですか……？」

「流石にオーバーワークでしょう……休ませた方がいいのでは？」

「素晴らしい、素晴らしいです！ ジュニア級のレコードホルダーでありながら現状に満足せずスパルタに自分を追い込むウマ娘、そしてそのウマ娘のトレーニングにいつまでも付き合い、レースの後の疲労回復は名湯巡り、水が飲みたいと言えば、山まで汲みに行くようなその姿勢！ 素晴らしいですつ!!!」

記者さん二人は私のオーバーワークを心配してくれる。乙名史記者は平常運転と言ったところだ。この人はもうこういう人なんだな、と今日一日で分かってしまった。

「私は全然大丈夫です。ただ、坂道を2時間くらい走るだけなので少し退屈させてしまうかもしれませんが……」

いつも通りタイヤを付けての坂路トレーニング予定なので、朝とあまり代わり映えせずに記者さんたちを退屈させてしまうかもしれない。基本ただ走っているだけだからなあ……

「いえそういうことでは……ああもう、最上さん！ ちよつと乙名史さん大人しくさせて！」

「は、はい！ ほら、乙名史さん、どうどう……」

善沢記者が困惑しながら答えてくれるが、暴走する乙名史記者が騒ぎまくっているのとおりあえず最上記者に止めてもらうように依頼している。もう放っておいてもいいと思うんだけど……

記者さんたちにオーバーワークではないことを説明して、わかってもらえたかはわからないけれどトレーニングを始める。終わった後問題ないことを確かめてもらえば大丈夫だろう。

すっかり定位置になってしまったスタート地点にある巨大タイヤをコース内に引き込み、ベルトで装着してから走り始める。ちよつと

カーブを曲がるのが大変なのだが、そこはもう慣れたものである。
その光景に呆然とする記者さんたちに最後まで気付くことなく、
楽しくタイヤ引きを続けるのだった。

第二十四話 ホープフルステークス

取材が終わってから時間が経ち、年末。有《font:ul40》馬《font:ul40》馬《font:ul40》記念を終えて、ついにジュニア王者を決めるレース、GIホープフルステークスの日がやってきた。

取材の内容が記事になるまでには少し時間がかかるらしく、年明け発売になるらしい。でも一つはもう発売されているとトレーナーさんは言っていた。その雑誌は貰ったけど中身はまだ見ていないので、年越しにでもゆっくり見ようと思っている。

有《font:ul40》馬《font:ul40》記念は結局、スズカ先輩は距離不安から、テイオー先輩は脚部不安から回避したため、チームスピカから出走したのはスカーレット先輩とウオツカ先輩になった。

スカーレット先輩は2着、ウオツカ先輩は1着に終わってしまったが、決して悪くないレース展開だったと思う。きっと先輩たちにも得るものは多かっただろう。

宝塚記念のウオツカ先輩にも言えることだが、クラシック級とシニア級のウマ娘には壁があると思うことだろう。時にはその壁を越えるウマ娘も居るが、やはりその壁は高い。

今日のレース、ホープフルステークスは芙蓉ステークスと同じ中山レース場、芝2000m右・内回り。ここ十日間ほど降り続けている長雨の影響で、バ場状態は重を通り越して不良である。

それでもGIであるということもあって、この雨の中客入りは満員どころか、レース場の外にすら観客さんたちが詰めかけているというし、相当な盛り上がりなのだと思う。年末だとは言え今日は平日なのに、ありがたい限りである。

距離的には2000mとなるが、中山レース場の直線入り口からの

スタートとなり、直線のスタート直後とゴール前の二度上る設計となつている。距離適性に加えスタミナも試されるレースになつており、翌年の皐月賞と同じコースで、皐月賞に直結されやすいレースになる。

今日の私は5枠6番。13人が出走登録しているレースなので、ちょうど真ん中付近になる。これも芙蓉ステークスの時と同じ番号で大体同じ位置なので、あの時と同じ走り方でいいだろう。最初から先頭に立って逃げ切れれば最善だが、無理に前に出る必要はない。後方に位置したとしてもコーナーで仕掛ければ十分勝負出来ると思う。

不安なのは今日が不良バ場というところだろうか。一応不良バ場でも走れるようにトレーニングはしているが、今日どれくらい芝が滑るのかが心配だ。

もう一つのジュニア王者を争うレースの、朝日杯フューチュリティステークスはフジキセキ先輩が勝者となつた。序盤少し引つかかる素振りを見せていたが、最終直線で楽に先頭に立つと、そのままクビ差を守り切つた。偵察としてレース場で見ていたのだが、凄まじい瞬間発力だつた。脚を使い切つた感じもなく、まだ余裕といった感じだつたのが末恐ろしい。

中山レース場の控室で、勝負服に着替えて鏡の前に立つ。黒い着物に、黒い袴。トレーナーさんに貰つた白い耳カバーを付ける。パドックに出ていくときは上から青色のストールを羽織つていつている。

耳カバーについては観客の声援で掛かってしまう私にトレーナーさんが対策としてくれたものだ。正直防音と言う点ではあまり効果がないのだが、折角用意してもらつたので着けている。真つ白な耳カバーなので、汚れとか目立ちそうで正直使い辛かつたのだが、貰つた以上は使わないとトレーナーさんががっかりしてしまうだろう。

薄く桜の模様が入っていたりしてちよつと可愛い。トレーナーさんにこんなセンスがあつたとは驚きである。

『さあ、今日の一番人気、5枠6番ブラックプロテウスが出てきました！』

時間になったので、地下バ道を進んでバ場に出ていく。雨足は弱いながらも降り続けている。ダートコースの方を見てみるとまるで田んぼのようになってしまっていて、凄く走りづらそうだ。

芝の方はどうかというと、軽く走ってみた感じぬかるんで滑りやすい気がする。スピードが出にくく、スタミナとパワーが結構持っていないかれそうだ。

感覚を掴もうと周りを見ながら軽く走っていると、トレーナーさんと目が合った。今日トレーナーさんからは好きに走れと言われていた。まあ正直作戦を言われても実行できる自信がないので、好きに走れと言ってくれるのはありがたい。

合羽を着た先輩たちがこっちに手を向けて何かしら唱えているのが少し不気味だけど、まあきつと応援してくれているのだろう。

『誰をも魅了し、心を奪う希望の星が誕生する！ ホープフルステークス！』

暫く走って感覚を掴んでいると、ファンファーレが鳴り始める。私にとっては初めて、ターフの上で受けるGIのファンファーレ。逸りそうになる心を深呼吸して落ち着けて、ゲートに入る。

いつも発走前に話しかけてくるリボンマンボ先輩も今日は集中していて、ただ前だけを見つめている。私と同じ黒鹿毛のウマ娘、タヤスツヨシ先輩も、ミントドロップ先輩も目の前のレースだけを見ている。

『3番人気はこの娘です、リボンマンボ！』

『この評価は少し不満か？ 2番人気はこの娘です、タヤスツヨシ』

『スタンドに押し掛けたファンの期待を一身に背負って、本日の1番人気ブラックプロテウス！』

目を閉じて、胸に手を当てて、ぐっと肩に力を入れて、ゆっくり力を抜きつつ深呼吸する。私がいちも行っているゲート時のルーティンだ。皆はどういう風にゲートの緊張をほぐしているんだろう……

『各ウマ娘ゲートに入って、体勢整いました』

スタートに備えて構える。しんと静まり返ったゲート内に、私たちの息遣いだけが聞こえてくる。

『さあ、ゲートが開いた！ 各ウマ娘綺麗なスタートを切りました。期待通りの結果を出せるか、1番人気ブラックプロテウス！ 今日も快調に飛ばしています！』

ゲートが開いて、スタートを切る。今日のスタートは100点満点中80点と言ったくらいだろうか？ 毎回このスタートが切れれば合格点かな……

スタート直後の急坂を上って1コーナーから2コーナーへ向かう。今日はそれほど後続とは距離を離せなかった。

『2番手の位置で様子を窺うのはリボンマンボ、その内並んでフリルドレモン。そしてその後方にはレプリケーション。この辺りまでで先頭集団を形成しています』

コーナーをいつも通りスピードを落とさずに曲がろうとするけれど、やはり滑る。でもパワーを込めて走れば大分マシだ。いつもよりスタミナも使うけれど、2000mであれば全く問題ない。いつも通り、最初から最後まで逃げ切って見せる。

『先頭は相変わらずブラックプロテウス！ いつも通り逃げていきます。続いてリボンマンボ、うしろフリルドレモン、レプリケーション4番手。3バ身ほど離れてビーティングパルス。外からフリルドライム。注目のタヤスツヨシとミントドロップは共に最後方となっています』

『1000mを通過。通過タイムは60秒ジャスト。平均タイムですが、今日は不良バ場！ そう考えると大分ハイペースです。ですが他のウマ娘も負けていません。今日こそは逃げ切らせまいと必死に追います！』

ちらりと後ろを見るとぴったりとリボンマンボ先輩がついてくる。他の先輩たちも追ってきていて、思ったより差がない。

『先頭は変わらずブラックプロテウス。だがここでリボンマンボ、外から並びかけてくるぞ！ 他のウマ娘も距離を詰めていく。ついに捕まるかブラックプロテウス！ だがここからは彼女の得意なコー

ナーだ！』

バックストレッチで並びかけられ、コーナーに入る。思ったより、先輩たちが速い。気迫が横から、背中から伝わってくる。

このままだと、追い抜かれる……負ける？ 息が詰まって、背中に嫌な汗がジワリと伝う。今まで、先頭で逃げていてここまで詰められたことは、一度抜かされたこともあった選抜レース以来だろうか。

ギリ、と歯を食いしばる。前を向いて、脚に力を籠める。無理だなんで、口が裂けたって、絶対に言わない。言ってやるものか。

——負けない。負けられない。負けたくない！ 誰よりも、速く。誰よりも先頭で！

強く一步を踏み出す。途端に世界が静かになって、周りの景色が色を失う。感じていた先輩たちの気迫も、今は感じない。すつと頭が冷えているのに、胸や脚は燃えるように熱くなっていく。

今まで走り辛かった、この不良バ場の芝が、凄く走りやすく感じる。芝を蹴ると、まるで良バ場になったかのようにスピードに乗れる。

コーナーでもそれは同じで、滑ってしまいそうだった感覚がなくなり、今までと同じくらい、いや、それ以上に曲がりやすい。

これなら、空回りしてしまっただけの使い切れなかったあのパワーも制御しきれ！

『一時は並ばれたブラックプロテウス、得意のコーナーで後続を引き離していく！ 速い速い、不良バ場とは思えないスピードでコーナーを曲がり切り、最後の直線へ！ 中山の直線は短いぞ。後ろの娘たちは間に合うか！』

胸は燃えるように熱いけれど、息はしやすい。脚が軽くて、いくらだって脚が回る。もっと、もっと行ける！ どこまでだって！ 今なら空にだって駆け上って行ける！

『ブラックプロテウス先頭！ 200を通過、大きく水飛沫を上げながら最後の坂を駆け上っていく！ ブラックプロテウス、脚色は衰えないどころかここから更に伸びる！ 後続を引き離して、これは決まった！ 大楽勝だ！ 今1着でゴールイン！ やはりこのウマ娘

はモノが違う！ ブラックプロテウス、一等星の輝きを見せクラシックへと繋がる道へ第一歩を踏みだした！ 2着はタヤスツヨシ、3着はリボンマンボ！』

ゴール板を先頭で駆け抜けると、感覚と景色が元に戻る。大きな歓声と、少しの雨音が私の世界に戻ってくる。

「わぶっ!？」

感覚が急に元に戻ってきてきて脚が滑ってしまう。べちゃつと音を立ててターフに顔から突っ込み、そのまま少し滑っていく。

『おっとブラックプロテウス、転倒してしまっただぞ大丈夫か？ 周りのウマ娘も心配そうに見つめています。起き上がらないぞ、大丈夫なのか!？』

ああああ、は、恥ずかしい！ 折角勝つたのに何で最後にこんな、こんな！ なんて締まらない……!! なんてダメなウマ娘なんだ私は……!!

「ちよ、ちよつと。ブラックプロテウス？ 大丈夫なの？」

心配してリボンマンボ先輩が駆け寄って、抱き起こしてくれる。大丈夫、大丈夫なんだけれど……

「だ、大丈夫です……恥ずかしくて起きれなかっただけで……このまま中山のターフに埋めてください……」

「何言ってるのよ……これから貴女が行くのはターフの下じやなくて、ウイナーズサークルでしょ。ほら、泥拭ってあげるから、勝者の義務を果たしてきなさい」

リボンマンボ先輩が自分の勝負服の綺麗なところで顔に付いた泥を拭ってくれる。背中をポン、と叩かれてサークルの方に送り出される。

「あ、ありがとうございます！ 行ってきますね、先輩！」

先輩に頭を下げながらウイナーズサークルへ向かう。辿り着いて観客席を見渡すと、今までで一番大きな拍手と歓声が私を迎えてくれた。

会場が震えるくらい大きい声で、一人一人が何を言っているのかは聞き取れなかった。

何か決めポーズを取ろうと出走前には思っていたのだが、感極まってしまつて頭が真っ白になる。胸に手を当てて深呼吸して、いつも通り深く礼をする。応援してくれた事に対するお礼、勝利を祝つてくれたことに対するお礼、色々な想いを伝えるのはきつとこれが一番だろうと思う。ただ、ずっとこのポーズだと代わり映えしないし、今度テイオー先輩辺りにおすすめのポーズを聞いてみよう。

観客席に軽く手を振つてから、ウイナーズサークルを後にする。この後はウイニングライブだ。

……ライブまでに泥汚れ、落ちるかなあ……？

掲示板回 Part 2

【総合】今年のウマ娘達を見守るスレ Part177

545：名無しのウマ娘ファン ID：／sLd2PLuw
ついに秋天の日がやってきたな

547：名無しのウマ娘ファン ID：X0CIVtaUD
スズが出ると聞いて正直夜も眠れてない

549：名無しのウマ娘ファン ID：pFrfIzVQT
まあ不安よな……あの日と同じ枠番に人気となるとどうしてもあの光景が蘇るっていうか

550：名無しのウマ娘ファン ID：WLLElaANm
他のレースも大丈夫だったし行けるって

551：名無しのウマ娘ファン ID：2ZlwgsBEE
無事に戻ってきてさえくれれば……

553：名無しのウマ娘ファン ID：S2aGaoXsH
トウカイテイオーも出るけどさすがにちよつと厳しそう？

556：名無しのウマ娘ファン ID：CSJu46vWj
テイオーはうーん。調子は悪くなさそうだけど

558：名無しのウマ娘ファン ID：0EKvSMHlm
テイオーも結構身体ボロボロだからな……京都大賞典はお見事だったけど

559：名無しのウマ娘ファン ID：jGise9B73

ビワハヤヒデはここ勝てば春秋連覇か

562 : 名無しのウマ娘ファン ID : knF5pjJT
X
行ってほしいけどちよつと痩せ気味なのが気になる

563 : 名無しのウマ娘ファン ID : TH4k416oK
なんかこう、いつもと違うパドックだったよな、いつもは大きく見えるのに、何だか小さく見えるっていうか

566 : 名無しのウマ娘ファン ID : uitu759Oq
ウイニングチケットも調子よくなさそうだよなあ……タイシンは
屈腱炎で引退しちゃったし、BNWもここまでだろうか

567 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6I3ek7ZAS
今日のマチタンは行けそうですね、えいえんむん！

569 : 名無しのウマ娘ファン ID : 3Adfto7oL
むんってなんなんだろうなあ……

571 : 名無しのウマ娘ファン ID : FI/KN4/LI
>>569 むんはむんだよ！

572 : 名無しのウマ娘ファン ID : Yx6uMVwwa
ネイチャはまあネイチャって感じ

573 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6nokqlU09
今日も掲示板は行けそうですね

576 : 名無しのウマ娘ファン ID : B6hOYKsRD
どうしてGI勝ちきれないんだろうな……どのレースも行けててもおかしくなかったのに

579 : 名無しのウマ娘ファン ID : VQIlGe68W
3着を愛し、3着に愛されたウマ娘だからさ……

580 : 名無しのウマ娘ファン ID : sDNTB/CIF
今年の有《font:ul40》馬《font》も3着だったら
大記録だな

581 : 名無しのウマ娘ファン ID : Qh0H10J9/
>>580 4年連続同一レース3着は名誉なのか不名誉なのか

583 : 名無しのウマ娘ファン ID : zrd7SbhGw
>>581 GIでなら普通に名誉だろ

586 : 名無しのウマ娘ファン ID : 2gIKUex6S
ダイワスカーレットとかも出てほしかったな……トリプルティア
ラは見事だった

589 : 名無しのウマ娘ファン ID : L4nZI2phm
>>586 流石に中一週は無謀だろ。エリ女もあるし秋天に出
てくるわけではない

591 : 名無しのウマ娘ファン ID : 0uVXwg7Xt
>>589 ブラックプロテウスっていうウマ娘が居ましてね
……

592 : 名無しのウマ娘ファン ID : rfdrrL5rYC
あれは異常だから……

595 : 名無しのウマ娘ファン ID : mFCnUvrhS
退院した翌週に8バ身ぶつちぎりとか

596 : 名無しのウマ娘ファン ID : B f B u P f 3 + 0
異常な生命力……黒鹿毛の外見も相まってゴ○ブリにしか

597 : 名無しのウマ娘ファン ID : n c E z V s E a 7
>>596 女の子をゴキ○リ呼ばわりは流石にやめたれよ、可哀
想だろ

600 : 名無しのウマ娘ファン ID : c p Z + f d F o 2
あんなに可愛いGが居るわけないだろ！いい加減にしろ！

603 : 名無しのウマ娘ファン ID : p 3 b 5 n s o M L
ひとまずあのUMA娘のことは置いておいてもろて

605 : 名無しのウマ娘ファン ID : L d L M / u d l X
ほらほらファンファーレ鳴ったから

608 : 名無しのウマ娘ファン ID : u l U R E Y E i Z
ドキドキしてきた……

610 : 名無しのウマ娘ファン ID : v E O o K Y 7 d S
スタートした！

613 : 名無しのウマ娘ファン ID : y 9 s 7 G q l j 8
スズカはっや!!?

614 : 名無しのウマ娘ファン ID : v l A v 2 A P r v
初っ端から飛ばしてんなあ……

617 : 名無しのウマ娘ファン ID : r U v D Y / l v N
あの時より速いな……

6 2 0 : 名無しのウマ娘ファン ID : b Q Z L j + I 2 p
レース中継静かすぎワロタ

6 2 1 : 名無しのウマ娘ファン ID : J C 5 J Z j x c z
あの日のリプレイみたいな感じだからな……

6 2 4 : 名無しのウマ娘ファン ID : g d 2 8 m s y T j
どうか無事に……

6 2 7 : 名無しのウマ娘ファン ID : g 3 s T a 5 b J N
1 0 0 0 m 通過 5 6 . 9 ってマジ?

6 3 0 : 名無しのウマ娘ファン ID : k b o 9 W m u O 7
短距離かな?

6 3 2 : 名無しのウマ娘ファン ID : U b Y Q 8 x R P P
観客どよめいてるな

6 3 5 : 名無しのウマ娘ファン ID : x V l p k 4 g e E
コーナー曲がった!

6 3 6 : 名無しのウマ娘ファン ID : W L y G H 7 w Y M
大櫓を越えたああああああああ

6 3 7 : 名無しのウマ娘ファン ID : Y G g K o e 6 J l
スズカいけえええええええええええええええ!

6 4 0 : 名無しのウマ娘ファン ID : a v r k k a F U 7
スズカああああああああああ

6 4 3 : 名無しのウマ娘ファン ID : s 3 z z 8 e x t Y
いける

6 4 6 : 名無しのウマ娘ファン ID : y G A V + 5 J n i
後ろはもう誰も居なあああああい！

6 4 7 : 名無しのウマ娘ファン ID : n B N 2 H c 5 K G
やったああああああああ

6 5 0 : 名無しのウマ娘ファン ID : 5 x 8 I Z T B k q
大差！ 大差勝ちだ！

6 5 3 : 名無しのウマ娘ファン ID : H b f 8 n d o 3 o
やべえ！

6 5 6 : 名無しのウマ娘ファン ID : J 2 h W v S o z p
スズカー1着！

6 5 9 : 名無しのウマ娘ファン ID : P / M + 0 6 e O y
レコードだあああああ!!!

6 6 0 : 名無しのウマ娘ファン ID : 4 q J v t j I n +
ブラックプロテウスのレコードを3秒近く更新してるんですがそ
れは……

6 6 1 : 名無しのウマ娘ファン ID : g h r P p J Z Q P
これ2着のテイオーもレコードクラスのタイムだよな？ やべえ

……

6 6 2 : 名無しのウマ娘ファン ID : z Q Y O U L X j v
まさにこれは異次元の走りですわ

665 : 名無しのウマ娘ファン ID : RNXDlAZne
マジキチレコードだよこれ!

668 : 名無しのウマ娘ファン ID : jy5o6zIFW
これが世界レベルの走りか……やべえな……

670 : 名無しのウマ娘ファン ID : GShiqej8a
GIで掲示板に大差が書かれるなんて初めて見たわ……

673 : 名無しのウマ娘ファン ID : AZIvNV4YW
まさに栄光の日曜日だわ

676 : 名無しのウマ娘ファン ID : sFYZXcwnR
なみだでできた

677 : 名無しのウマ娘ファン ID : C5USJseqN
やっぱりサイレンススズカは最高だな……お前が最強の逃げウマ娘だ……

678 : 名無しのウマ娘ファン ID : q3/NN+kqh
ところで3着のナイスネイチャについて一言

680 : 名無しのウマ娘ファン ID : H72lSUcd
>>678 お馴染み3着

681 : 名無しのウマ娘ファン ID : VZEj1OKv7
ネイチャさんはネイチャさんなんやなって……

ブラックプロテウス専用スレ Part 3

282 : 名無しのウマ娘ファン ID : c s z M R V A D e

結局百日草特別は中止かー。残念

283 : 名無しのウマ娘ファン ID : L L a z 2 J 5 i n

まさかジュニア級で出走回避を見るとは……ジュニア級では数少ない中距離レースだぞ？ ステイヤー達が回避するとは思わなかったな

284 : 名無しのウマ娘ファン ID : U q s 5 0 a 9 c M

あのタイムのレコードホルダーを相手にできるかって言われると厳しいよ。それなら1600とか1800走った方がマシ

285 : 名無しのウマ娘ファン ID : S 1 Z 5 3 j F e 7

あれだけ力の差があると流石にな……負けるってわかってるのに走るような娘はいないだろう

286 : 名無しのウマ娘ファン ID : Y R h r z E e 0 9

マルゼンスキーも回避されなかったからなあ……

287 : 名無しのウマ娘ファン ID : + V v 9 F 4 + e a

逃げウマ娘だから出遅れ期待するくらいしかないけど、ブラックプロテウスは追走でも問題ないからな

288 : 名無しのウマ娘ファン ID : z G t p I I E u 8

サイボーグだからなあ

289 : 名無しのウマ娘ファン ID : B y z o Y b m 9 J

運動性抜群のスーパーロボットだから

290 : 名無しのウマ娘ファン ID : Y o D k 0 Z 9 f a

そろそろ二つ名か何か付けたいよな。サイボーグだとミホノブルボンと被るし

291 : 名無しのウマ娘ファン ID : tOueBwNjM
前スレでもちよくちよくその話題あったけど結局お流れになったからなあ

292 : 名無しのウマ娘ファン ID : FxFWy6gRJ
漆黒のステイヤーとかどう？

293 : 名無しのウマ娘ファン ID : VvFrZ+feR
>>292 ライスシャワーと被るんじゃないかな

294 : 名無しのウマ娘ファン ID : DNPiNCxY4
アイアンウマ娘とか……

295 : 名無しのウマ娘ファン ID : nZYxYaCrM
イクノデイクタスとかが居るからなあ……でも金属要素は入れた
いよな

296 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6MMX3ZimO
飛んできた蹄鉄にも負けないウマ娘だからな……漆黒の鋼鉄とか
どうよ？

297 : 名無しのウマ娘ファン ID : uU/3ob7kc
>>296 いい感じにダサくて嫌いじゃないよ

何かの番組で見たけどあれ普通の生き物なら即死級のエネルギーらしいな……何で生きてるのあの娘

298 : 名無しのウマ娘ファン ID : w1GbBJRPz
>>296 センスないけどまあいいんじゃない？

>>297 縫合すらしなかったと聞いたが果たして

299 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6MMX3Zim0
フルボッコすぎて泣けるわ……

いくら鋼の様なウマ娘とは言え流石に縫合無しはないんじゃないか……？

300 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC

>>296 漆黒の鋼鉄、私は好きだよ。

あ、本人に聞いたけど本当に縫ってないらしいよ。見せてもらったけど傷跡も残ってなかったよ

301 : 名無しのウマ娘ファン ID : oHnN+GPZF
知っているのか>>300!!

302 : 名無しのウマ娘ファン ID : WmcSV1DU7
>>300 kws k

303 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC
入院してた時同室で実際にお話しただけだよ。すっごい穏やかで優しい良い娘だったよ

304 : 名無しのウマ娘ファン ID : BstqtR0DP
うらやまけしからん

305 : 名無しのウマ娘ファン ID : eLfsqa5L/
怪我したウマ娘は精神的に不安定なことがあるから個室か同じウマ娘がいる部屋にしが入らないって聞いたことあるけど同室だったってことは300もウマ娘なの？

306 : 名無しのウマ娘ファン ID : B1I5p7pVx

ウマ娘を止められるのは同じウマ娘か一部の逸般人だけだからな

307 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC

一応ウマ娘だよ。今は投資家やってるけど学生時代は中央居たよ。
未勝利一回勝っただけだよ

308 : 名無しのウマ娘ファン ID : tpilbpehC

300 普通に凄いやん……一回勝てるだけでも上澄みだよ

309 : 名無しのウマ娘ファン ID : cMKTrzIc

300はどうして入院してたん？ 差し支えなかったら教えて

310 : 名無しのウマ娘ファン ID : 4rmQqQIe/

テウスと同室で面白いことあった？

311 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC

>>>309 飲んだ帰りに転んで肩の骨折っただけだよ。利き

腕の方。もう私も退院したし平気だよ

312 : 名無しのウマ娘ファン ID : pPtZEWkTf

Oh……

313 : 名無しのウマ娘ファン ID : ulsHzLUZC

まあうん……どんまい……

314 : 名無しのウマ娘ファン ID : sV28bMC28

命に別状がなくてよかったと言うべきかなんというか

315 : 名無しのウマ娘ファン ID : g5kPGA1FG

なぜか漂うこの残念美人感よ

316：名無しのウマ娘ファン ID：kPXvOM/pC

まあ私のことは置いておいてだよ。私が暇でクロンダイクしているところに頭に包帯を巻いたテレビ中継で見た覚えのある黒鹿毛ウマ娘が来たわけよ。お医者さんとトレーナーっぽい人と一緒に自分の脚で歩いてきたよ

317：名無しのウマ娘ファン ID：S1y6XDTsB

まずその時点でおかしい

318：名無しのウマ娘ファン ID：M4q8wRut5

頭部に金属の飛来物受けた上転倒したウマ娘が自分の脚で……ストレッチャーとか使うやろ普通

319：名無しのウマ娘ファン ID：bBs4b1KXl

ウマ娘じゃなくても頭部の怪我したら寝かされて絶対安静だよ

320：名無しのウマ娘ファン ID：kPXvOM/pC

まあ私も頭の怪我したことあるからわかるけど絶対安静には同意だよ。でもテウスちゃんは普通に自分の脚で来たし、普通に自己紹介とかしてくれたし、私が腕動かさなくて困ってたら手伝ってくれたりしてたよ

321：名無しのウマ娘ファン ID：49YexzFiN

300がうらやましすぎる……前世で一体どんな徳を積んだらそんな出来事が

322：名無しのウマ娘ファン ID：/F7OhL8Gk

くそつ、くそつ、俺も今から骨折すればワンチャン！

323：名無しのウマ娘ファン ID：a6DWMx64q

俺も美少女ウマ娘にお世話されてーなー！

324 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM / pC

>>322は今から骨折しても遅いから落ち着いてよ。後起こったことはギプスにサインしてもらったことと、一緒に病室のテレビでテイオーの京都大賞典観戦したくらいだよ

325 : 名無しのウマ娘ファン ID : ya u O W F N 9 K

俺、生まれ変わったらウマ娘に飼われてるペットになるんだ……

326 : 名無しのウマ娘ファン ID : M X B D a Q m r H

>>324 普通にどれか一つだけでもうらやましくて目から血が出そうだわ

327 : 名無しのウマ娘ファン ID : v E V M W j G A r

ちくしょう……どうして世の中はこんなに不公平で理不尽なんだ……

328 : 名無しのウマ娘ファン ID : o z u / b h I j G

まで、レース観戦つてことはブラックプロテウスの抱き着き癖が出たのでは？

329 : 名無しのウマ娘ファン ID : N v U B F 8 F H z

>>328 ダスカやウオツカが振り回されてたあれか

330 : 名無しのウマ娘ファン ID : V t a m N O 7 1 o

最近是我慢してるみたいだけどあれ見れないの寂しいよな。可愛かったのに

331 : 名無しのウマ娘ファン ID : H t V n c E E 8 k

周りに被害が及ぶから仕方ない……

747 : 名無しのウマ娘ファン ID : s j T k S j z 7 7
まさかテウスが黄菊賞じゃなくデイリー杯ジュニアステークスに
出てくるとは……

748 : 名無しのウマ娘ファン ID : W x x B d q z K 0
出れるレースがこれくらいしかなかったのかもしれないけれど、距
離的に大丈夫なんかね

749 : 名無しのウマ娘ファン ID : X g i / 6 U 8 Y q
まあ今までと同じ走りが出来れば十分勝負できるんじゃないかね？ マ
イル戦だとしてもおかしくないスピードで逃げてるわけだし

750 : 名無しのウマ娘ファン ID : 5 2 g j / i n C k
他のウマ娘からしたら迷惑なのかもしれないけれど俺としては
レースが見れるなら何でもいい

751 : 名無しのウマ娘ファン ID : n e O 4 S c + z f
他のウマ娘スレとか総合スレとかは大騒ぎでしたね……

752 : 名無しのウマ娘ファン ID : H K 9 8 X / D 7 Y
中距離の女王がマイル戦に殴り込みしてくるんだからな……テイ
アラ路線行くんだろうか？

753 : 名無しのウマ娘ファン ID : + 4 C W 5 p p c F
流星にクラシック行くだろ……明らかに長距離向きのスタミナだ
し

754 : 名無しのウマ娘ファン ID : t b Q q + 5 W P 4

下手すると両方走るかもな……

755：名無しのウマ娘ファン ID：0op0jD0vy
三冠ウマ娘の誕生見たいからクラシック行ってほしいな……

756：名無しのウマ娘ファン ID：HLDSkRT90
>>754 草生やそうと思ったけどテウスなら行けそうで真顔
になったわ

757：名無しのウマ娘ファン ID：3pgSOVIbL
どれだけ走っても消耗の色が見えないウマ娘なんて異常すぎるん
だよなあ……やっぱ機械仕掛けだよテウスの脚は

758：名無しのウマ娘ファン ID：yiBk9hP+f
他のウマ娘が硝子の脚で戦ってる最中に特殊金属の脚で殴りこん
でくるようなもんだからな……

759：名無しのウマ娘ファン ID：LwON4aLnw
明らかにチートなんだよなあ……

760：名無しのウマ娘ファン ID：OEiRl+RvE
>>758 硝子は速度のプラス補正が付く素材だからセーフ
セーフ

761：名無しのウマ娘ファン ID：WMCWn8589
残念ながらこの世界はイルヴァじゃなく現実世界なんだよなあ
……

762：名無しのウマ娘ファン ID：kPXvOM/pC
パドック始まって最初にテウスちゃん出てきたけど、今日のテウス
ちゃんテンション高くない？

763 : 名無しのウマ娘ファン ID : hJWKfu0Zt
今日のテウスはうつきうきしてて可愛いなあ

764 : 名無しのウマ娘ファン ID : wO5auevjv
>>762 今日は何飲んでるの？

765 : 名無しのウマ娘ファン ID : d1ZhETdWt
なんかふんすふんすしてて微笑ましい……

766 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC
>>764 今日は赤い兎のウマの焼酎のロックだよ。おつまみ
はニンジンステイックだよ

767 : 名無しのウマ娘ファン ID : PGpigRde7
真昼間から飲んでるダメウマ娘が居ますね……

768 : 名無しのウマ娘ファン ID : yFKz+k+/T
まあ休日くらいいいじゃないか (星のビールと枝豆装備)

769 : 名無しのウマ娘ファン ID : 67ZHziSAi
そうそう、お休みの日くらいはね？ (液体窒素の温度のチューハイ
と唐揚げ完備)

770 : 名無しのウマ娘ファン ID : LShwmk5DZ
このスレは早くも酒飲みたちに占領されてしまいましたね

771 : 名無しのウマ娘ファン ID : EZV2kneTV
酒の知識がどんどん増えていくわ……

772 : 名無しのウマ娘ファン ID : +QUpyy8Y4

何でこのスレにはこんなに酒飲みが集まってくるんだ(ウマ界への誘い美味しいです)

773 : 名無しのウマ娘ファン ID : E4KGx9rRZ
まあテウスのレース見てて気持ちいいし、飲みたくなるのはわからなくはない

774 : 名無しのウマ娘ファン ID : lhQUxZMUZ
ファンファーレ鳴ったから酒談義はやめてもろて……

775 : 名無しのウマ娘ファン ID : 7I96WZGzo
ずっとうずうずしてて可愛い

776 : 名無しのウマ娘ファン ID : ErFfU3YlC
掛かってない? 大丈夫?

777 : 名無しのウマ娘ファン ID : bLJjIW9qI
スタート前から掛かっちゃウマ娘も居るからね……よくあるよ
くある

778 : 名無しのウマ娘ファン ID : JsKKRD50H
スタートしたねえ

779 : 名無しのウマ娘ファン ID : kiUGnKuO
はっや!

780 : 名無しのウマ娘ファン ID : h50Waz+yW
内枠有利とはいえ速すぎない? 大丈夫?

781 : 名無しのウマ娘ファン ID : 97oC30D46
これは掛かってますね(確信)

782 : 名無しのウマ娘ファン ID : 4 d p F D x h 7 j
まあテウスなら掛かってても大丈夫やろ

783 : 名無しのウマ娘ファン ID : S z P g o 7 0 8 5
あのテウスがタれるところを想像できない

784 : 名無しのウマ娘ファン ID : o h m T I l l 2 i
やっぱりテウスは見てて飽きないなあ

785 : 名無しのウマ娘ファン ID : l C k u G O I / a
1000m通過タイム57秒ジャストってマ? スズカ並みのタ
イムじゃん。速すぎ

786 : 名無しのウマ娘ファン ID : J c r l P m l I W
淀の坂越えてこれは芝。今ならスズカにも勝てるんじゃない?

787 : 名無しのウマ娘ファン ID : E G 6 a Z R O E 9
わかってたけど上りも下りも上手いなあ……コーナーも上手いし、
直線での勢いが寂しいくらいで後は隙がないよな

788 : 名無しのウマ娘ファン ID : s T 6 z x + C A K
これで後は賢さが備われば……

789 : 名無しのウマ娘ファン ID : C x m 4 5 G k o k
この掛かりようだと言え課題は解決しそうになさそう

790 : 名無しのウマ娘ファン ID : W + B G X T P n f
ちよつと落ち着いた……いや、ホームストレッチでさらに掛かった
な

791：名無しのウマ娘ファン ID：I q E 7 x b N P M
まるで重機のような音がするんですがそれは

792：名無しのウマ娘ファン ID：6 R p 6 7 W w k /
ウマ娘の走る音とは思えない……象でも走ってるんですかね

793：名無しのウマ娘ファン ID：U Q s U L f Y d z
良バ場なのに芝と土が千切れ飛んで二度見したわ。パワーヤバ
すぎ

794：名無しのウマ娘ファン ID：o C x j f R M V x
大楽勝ですねえ！

795：名無しのウマ娘ファン ID：9 3 o H t M H Z e
勝った勝った！ 今日親子丼だ！

796：名無しのウマ娘ファン ID：O r R l y V T s D
勝ち時計は1：31.5。二つ目のレコードおめでとう！

797：名無しのウマ娘ファン ID：t 3 c 5 x Y + z /
これで名実ともにジュニア級最強ですなあ！ めでてえ！

798：名無しのウマ娘ファン ID：3 m s L U U O a v
今日ばかりは飲むしかないな！ 祝い酒だ祝い酒！

799：名無しのウマ娘ファン ID：k P X v O M / p C
よーし、お姉さん貴腐ワイン空けちゃうわよ！ もう焼酎は飲み
切っちゃったよ！

800：名無しのウマ娘ファン ID：k W / k t u X E W
あれ、テウスまだ止まらないな？

801：名無しのウマ娘ファン ID：8aQYKry5Q
綺麗なコーナリングですねえ

802：名無しのウマ娘ファン ID：8feUG9Hm
静止振り切って……というか気付かずに走り続けてるなあ

803：名無しのウマ娘ファン ID：2gHhI7zgv
レース場も俺たちも盛り上がってるからいいんじゃない？

804：名無しのウマ娘ファン ID：NfcnQWtes
二回目の淀の坂越えても止まらなあい！

805：名無しのウマ娘ファン ID：alewa5/Iq
これはいつまで走るんだろうな……

806：名無しのウマ娘ファン ID：qDeylTg5J
すっごい楽しそうに走ってる顔がアップで写されて和んだわ。
やっつてること自体は暴走だけど

807：名無しのウマ娘ファン ID：xn8MjOSm7
二回目ゴール板くぐって……まだ走るのか（困惑）

808：名無しのウマ娘ファン ID：e5eNrily2
流石に場内困惑気味

809：名無しのウマ娘ファン ID：ihgmikrl/
だんだん遅くはなってきたから……

810：名無しのウマ娘ファン ID：D77dcbzs0
淀の坂の頂上で止まったな

811：名無しのウマ娘ファン ID：SyBzGYmA9
きよろきよろしててかわいい

812：名無しのウマ娘ファン ID：EZORQhtF4
一人だけ1600の後に3200くらい走ってて芝

813：名無しのウマ娘ファン ID：2kLSFCVvB
適性距離4800mってマ？

814：名無しのウマ娘ファン ID：p017HebXT
日本どころか世界中探しても4800なんてないぞ……中山グラ
ンドジャンプでも4250m

815：名無しのウマ娘ファン ID：tdWIGtjCT
モンゴルダービー(1000km)でも行ってもろて……

816：名無しのウマ娘ファン ID：hldy3+tvf
一人で走り切れそうなのが何とも言えねえ

817：名無しのウマ娘ファン ID：f+C2aKlO8
テウスがすごいペコペコしてる……

818：名無しのウマ娘ファン ID：mmQ+UGn/E
耳も尻尾も元気ないし落ち込んでるっぽいな

819：名無しのウマ娘ファン ID：ZlzfVO/a7
まああれだけ暴走したらなあ……

820：名無しのウマ娘ファン ID：OkbqcRmff
一応ウィナーズサークルでちゃんとパフォーマンスしてるから

セーフセーフ……多分……

821 : 名無しのウマ娘ファン ID : L1OhDtv64
逸走したわけではないからセーフだって

822 : 名無しのウマ娘ファン ID : 2/yQpXRFk
まあ多少のお叱り程度でしょ

823 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC
ワイン取りに行ったらダンスの角に小指ぶつけたよ……痛いよ

……

824 : 名無しのウマ娘ファン ID : V2Srzr5kUj
今年の珍プレー大賞は貰いましたね……

825 : 名無しのウマ娘ファン ID : teL+eMLX/
>>823 もう酒飲むの止めたら？

第二章 クラシック級 第二十五話 新年

「ごー、よーん、さーん、にー、いーち……」

『あけましておめでとうございます!!!』

スピカの部室で皆で集まって年越しパーティをしている。ゴルシ先輩が持ってきた大きな炬燵にみんなが入って、トレーナーさんが作った温かい蕎麦を食べながらの年越しだ。

ちなみに当のゴルシ先輩は先ほどからウオツカ先輩を巻き込んで外で餅つきをしている。後で食べるんだろうか？

お蕎麦に関しては粉からトレーナーさんが自分で打ったらしい。スペ先輩が十数杯はお代わりしていた。私より明らかに料理上手だ。流石にここまで行くと悔しさも特に湧いてこない。

「ほら、お前ら、蕎麦食べ終わったら器よこせー。食後にお汁粉も用意してるから、あんまり食いすぎるんじゃないぞ?」

「おしるこ!!!」

トレーナーさんの言葉にマックイーン先輩が立ち上がる。ウマ娘は基本的に甘いものが好きなので、とても魅惑的なお誘いだし、仕方ないだろう。

「お汁粉はいいけどマックイーン? 食べ過ぎて初詣行けなくなったりしないですよ?」

「だつ、大丈夫ですよ! 五杯……いえ、三杯だけにしておきますもの!」

「それでも食べすぎだと思っけどなあ……」

テイオー先輩にからかわれつつマックイーン先輩は自分の器を急いで空けてトレーナーさんに渡していた。そこまで楽しみなのか……

「ほひふほ!? ははひほふんほほひへほひへふははひー!」

「スペちゃん……何を言っているかわからないわ……」

スぺ先輩はお口いっぱいにお蕎麦を詰め込んで何かを言っている。既にお腹はパンパンだ。また太り気味になってグラス先輩に怒られないと良いんだけど……

グラス先輩を怒らせると気の弱い娘なら泣いてしまうくらいの迫力がある。

余程のことでは怒らないけれど、レースに関わることだとかかなりストイックな先輩なので、今のスぺ先輩の状態を見たら怒りそうだ……最近、グラス先輩もちよつと太り気味だから、許されるかもしれないけれど……

「テウス……大丈夫？ まだ起きてられる？」

「だ、だいじょうぶです……」

かくいう私はと言うと、先ほどからずっと睡魔と戦っている。何とかお蕎麦は食べきったけれど、良い感じにお腹も膨れてしまって眠気が抑えきれない。日付が変わるまで起きていられない私にとって、年越しまで起きられただけでも凄いことではあるのだが……この後初詣にみんなで行く約束だし、起きていないと……

何とか意識を保とうとするものの、瞼がどんどん閉じていって、ふわふわと意識が遠のいていく。

「もう……あんなに凄い走りをして、まだまだ子供ね。アタシがおぶって連れて行ってあげるから、暫く寝てなさい」

そつとスカーレット先輩のお膝の上に寝かされて、優しく撫でられる。柔らかくて暖かくていいにおいがして……おちつく……

「ふあい……おかあさん……」

「誰がお母さんよ！ まったく……」

スカーレット先輩のちよつと怒った声を聴きながら、そのまま微睡んでいくのだった。

「んう………????」

周りの喧騒に呼び戻されるように目を覚ます。眠くてあまり頭が働かない。どうやら緋色の髪の誰かに背負われているようだ。周り

を見渡すとどこかの神社の境内の参道のようで、いくつかの出店が出ている。まだ日の出前なので真つ暗だが、人はかなり多い。

最近崩れがちだった天気も落ち着いていて、多少地面がぬかるんでいるところはあるが歩きやすい状態になっているみたいだ。

「あら、テウス。起きたの？　ちようど着いたところだったから丁度良かったわ」

「すかーれつとせんぱい……？　おはようございます……」

スカーレット先輩が降ろしてくれたのでひとまず自分の足で立つて歩くことにした。どうやら誰かが靴も履かせてくれていたらしい。

まだ眠い……目をぐしぐしと擦ったあと、目覚ましに頬をパンパンと叩く。

「お、起きたか。とりあえず参拝行こうか？　ほら、スぺにマックイーン！　出店は参拝終わってからな!!」

「わ、わかっていますわー！」

「はあーい……」

出店に気を取られてふらふらとそちらへ向かっていたスぺ先輩とマックイーン先輩がトレーナーさんに注意されて戻ってくる。

「ウオツカは何お願いするんだ？　ゴルシちゃんは初セリのマグロを競り落とせますようになってお願いする予定だZE☆」

「競り落としてどうするんすか……オレは次の京都記念で勝てるように願ってみようかなって……最近負け気味だし……」

少しテンションが低いウオツカ先輩にゴルシ先輩が絡みに行っている。ここのところ勝ちから遠ざかってしまっていて、普段明るいウオツカ先輩も最近はお凹みがちだ。

「何よ、アンタらしくないわね……気合入れなおした方がいいんじゃない？」

「んだよ……オレだってナーバスになることだってあるんだよ……」

「ウオツカ、不安なら併走する？　きっと走っているうちに自信もつくわ」

「スズカ先輩……はい、後でお願いします。すみません、迷惑かけちゃまって」

少し落ち込んでいるウオツカ先輩にスカレット先輩が発破をかけ、スズカ先輩がフオローを入れている。併走はうらやましいな……交ぜてもらえないかな……？

参拝を終え、各々自由行動に入る。私はとりあえずおみくじを引いてみた。

結果は……吉。基本的に無難なことが書かれていた。争い事に『落ち着きましょう』と書かれている辺り何だか当たっている気がする……

このおみくじは持って帰ってレース前に戒めとして見ることにしよう。最近掛かり気味だし……多分ゲートに入ったら忘れちゃうと思うけど、少しは何とかなってくれるといいな……

「あ、あのっ！ ブラックプロテウスさんですよね!!」

「え？ あ、はい……そうですけど……えっと……？」

引いたおみくじを眺めていると見知らぬ人たち数名に囲まれていた。何だろうか……今日は特に何も目立つようなことはしていないはずだけど……？

「ホープフルステークス見てました！ 格好良かったです！ これからも頑張ってください！」

「握手お願いします！」

「あ、はい。えっと、ありがとうございます……」

ぐいぐいくるファンの人たちに押されつつも握手をしたり、一緒に写真を撮ったりする。

まあ、これもファンサービスの一環……だろうか？ トレーナーさんは様子を見ているだけで止めたりしないし、特に問題はないのだろう。

無名だった私がこう囲まれているとなんだか落ち着かないものがある。これにも今後慣れていかないといけないんだらうな……

その後も時折ファンの人に話しかけられたりしつつ、出店を楽しんだり、スピカの皆で初日の出を見たりしたのだった。

初詣が終わって、翌日。早速自主トレを始めるためにいつもの時間に部室に顔を出した。

部室には明かりがついていて、既にトレーナーさんが居るみたいだ。ひとまず部室に入る。トレーナーさんは書類を書いていたみたいで、机一杯に書類が広がっている。

「おはようございます、トレーナーさん」

「おう、おはようさん。ほら、これ。ひとまず夏合宿までのレースプランだが、これでいいか？」

トレーナーさんから一枚の紙を渡される。レースプランはトレーナーさんに任せると言う約束だったので、考えてきてくれたらしい。綺麗に纏められたそれに目を通してみる。

まずは1月第三週の京成杯、中山レース場芝2000m。その次が2月第四週、すみれステークス。阪神レース場2200m。その後は弥生賞、皐月賞、東京優駿ダービーと続き、最後は宝塚記念となっている。

「テウスは長い方が好きだろうし、ひとまずはこんな感じが無難だと思うが、どうする？ 走り足りないなら青葉賞とか京都新聞杯あたりも考えているが……」

どうやら私が一月に一回くらいは走らないと満足しないだろうという考えの下に作ってくれたらしい。大体あっているのでこれで大丈夫だと頷いておく。

「そうか、よかった。宝塚の後の予定は、宝塚の結果次第で決めようか。宝塚も含めて全部制したりすると多分だがURRから海外挑戦への打診が来たりするだろうしな……」

「海外挑戦、ですか……」

「あんまり乗り気じゃないみたいだな？ やっぱ見知らぬ地は怖いか？」

「それもありますけど、菊花賞に集中したいんですよ。折角の3000mですし。長距離レースは一個も逃したくないので」

ただでさえ菊花賞はクラシック級でしか挑めないのに、海外挑戦して挑めませんでした。とかになったら悲しすぎる。

一応海外レースに出た後でも出走後中五日さえ空ければ国内レースには出れる。感染症とかが広がっていたりなどすると多少期間が設けられたりもするが、それも精々10日前後だ。以前は三週間ほど期間を空けないといけなかったらしいが、他のスポーツ選手がそんなことないのを踏まえて、平等にするという観点から期間が短縮された経緯がある、らしい。

私にとってはシニア級では海外の4000mとかのレースに出たいと思っているし、嬉しい改正である。

まあ、たとえ改正したとしてもそんな間隔で走ろうとするウマ娘なんていないだろう、と言うのがすんなり改正された理由らしいので、あんまり無茶な走りをするとか規制されてしまうかもしれないが……クラシック級では我慢するから、シニア級では大目に見てほしい。

「まあ、もしかしたらそうなるかもしれないってだけだ。無理に海外に行かせるなんてことはないだろう。凱旋門、となると話がかわってくるかもしれないが……結局どのレースを走るかはウマ娘の判断だからな。走りたいなら全力でサポートするぞ?」

トレーナーさんの言っている凱旋門とは、凱旋門賞の事だろう。

日本ウマ娘界の夢、凱旋門賞。『その舞台を目指す事こそが大和魂だ』と言われる、日本のウマ娘が未だ越えられていない、高く高く聳え立つ壁である。

あの『怪鳥』エルコンドルパサー先輩でさえも2着。その他にも今まで名だたるウマ娘たちが挑んだが、その悉くを跳ね返してきた、毎年10月の第一日曜日に行われる世界最高峰のレースだ。その気になれば10月の第四週日曜日に行われる菊花賞には十分間に合う。多少ハードスケジュールになるがこの程度なら問題はないだろう。

「私がどこまで通用するか走ってみたい気持ちは少しはありますけど……捕らぬ狸の皮算用ってやつですよ。まずは目の前のレースに集中したいです。宝塚記念が終わって、もしURAから話が来たら、その時に考えませんか? それに、私英語苦手なので、海外怖いですし」「一番最後のが本音だろう……もし行くとなったら通訳が付くから安心しろ」

頭をぐしゃぐしゃと撫でながら笑われる。英語もフランス語も、外国語は相当苦手なので尻込みしてしまうのも仕方ないと思う。知らない言語で話しかけられたらカタコトの英語で喋るロボットみたいな感じになる自信があるし。

「それに、凱旋門賞よりカドラン賞の方が気になるんですよね。どうせ出るならそっちが良いです」

カドラン賞は10月第一週土曜日に行われる、4000mのレースだ。世界の長距離最強決定戦とも言えるレースであり、私にとっては凱旋門賞より魅力を感じるレースである。

「カドラン賞はシニア級からしか挑めないから、来年な。まずは今年のクラシック戦線を勝ち抜こう。お前なら行けるさ」

「はい！　ひとまず、地面がまだ柔らかいうちに走ってきますね。ホープフルステークスでは情けない所見せちゃいましたから！」

あれはもう一生の恥である。出来れば思い出したくもないのだが、重バ場に対する課題が見えてきたので、ここ数日はずっとなるべく荒れた、重いバ場を走るようにしている。

最近なるべく走りやすいバ場を好んで走っていたので、荒れた場での走りが疎かになっていた。

山道を走っていた時は荒れた道なんて慣れたものだったので、あそこまで走れなくなっているのは驚きだった。今後はたとえ水を張った田んぼのようなバ場だろうと全速力で走れるくらいになるまで重バ場のトレーニングも積んでいこうと思っている。

流石に本物の田んぼで走るわけにはいかないけれど……いや、もしかしたら理事長にお願ひすれば手配してくれるかも？

今度お願いしてみようかな。使っていない田んぼの一つくらい手配してくれそうな予感はあるし、下手すると寝て起きたらトレセン学園内に田んぼが出来ている可能性もあるし。

今後のトレーニングメニューを考えつつトレーニング用のジャージに着替えて、整備はされているがまだ稍重気味な芝コースへ飛び出していくのだった。

第二十六話 年明け最初のレース

理事長におねだりした翌日、起きたら出来ていた田んぼでトレーニングする日々を過ごしていたらいつの間にかレースの日になっていた。

毎日毎日、体操服を泥だらけにしてトレーニングをして、少しは重バ場にも慣れてきたように思える。その結果は今日、はつきりするだろう。

『中山レース場、本日のメインレース。GⅢ京成杯！ 10人のウマ娘が出走します！』

『年末は天候が崩れがちでしたが、年が明けてからは回復しましたね。ですが今日のバ場発表は稍重となっています。果たしてこれがどう影響するでしょうか』

今日は最高気温がだいたい8度くらいなので肌寒く感じる。少し風が強いのも更に寒く感じる原因だ。ゲートの前で白い息を吐く。

『3番人気はこの娘、ミントドロップ。2番人気はリボンマンボ、打倒ブラックプロテウスに意気を揚げています』

『まるでここまで気迫が伝わってくるようですね。今日こそは一矢報いるかもしれませんよ』

ゲートに先輩たちが入っていく。今日もフルゲートを割れてしまったが、それでもレースが成立する人数が集まった。

ちなみに今日の私は6枠6番。つくづく6番に縁があると思う。ここまで行くともうずっと6番でもいい気がしてきた。

私もゲートに進みつつ、バ場の状態を確かめる。——うん、これなら、行けそうだ。トレセン学園の田んぼの沼のような状態に比べればこんなものなんてことはない。むしろ走りやすいくらいだ。

『今日の1番人気は勿論この娘！ ここまで無敗、ジュニア王者ブラックプロテウス！』

『ホープフルステークスでは少し重いバ場に苦戦していたようですが、果たしてこの稍重のバ場ではどうか？ 注目です』

ざわついていた会場が静かになり、一瞬の静寂が訪れる。強い風の音だけがゲートの中に響いている。

いつも通りゲートが開くそのタイミングで、ゲートが開く音を置き去りにする勢いで飛び出そうとした。

「ぐえっ!?!」

『今スタートしまし……おっと、6番のゲートが開いていません。これはカンパイ、カンパイです。このレースはスタートやり直しとなります』

まあ、私のゲートだけ開かず、飛び出せなかったわけだが。スタート自体は切っていたので、開くはずなのに開かなかったゲートにちよつと強めに胸のあたりをぶつけてしまった。

レース前に何も食べていなくてよかった……食べていたら公共の場で尊厳を失ってしまうところだったかもしれない。思わずその場にしゃがみこんでしまったが、思ったよりは痛くないし。

「ぶ、ブラックプロテウスさん？ 大丈夫ですか？ レース、続けられますか？」

ゲートの近くに居た係員さんが大慌てで近寄ってくる。しゃがみこんでいたので心配をかけてしまったみたいだ。

「大丈夫です。ちよつとビックリしてしまっただけです。問題ありません」

すぐに立ち上がって無事だと言うことを示す。もしかしたらちよつと痣になってしまってるかもしれないけど、走りに響くような痛みはない。

女性の係員さんに服の上からだが、少し身体をチェックしてもらって問題無いことを確かめてもらおう。それをしている間にスタートを切っていた先輩たちが戻ってきているようだ。

『ゲートにぶつかっていたブラックプロテウスは問題ないようです。ゲートの点検が終わり次第レースが再開されます。それまでしばらくお待ちください』

場内に実況さんのアナウンスが流れる。場内は少しざわざわとしていたが、そのアナウンスで少し落ち着いたようだ。

点検自体はすぐ終わるようで、再発走までにそう時間はかからないだろうと係員さんは言っていた。

ただ、集中していた先輩方が少し戸惑っているように見える。レースの発走やり直しなんてそうあることではないので、仕方ないところもあるのかもしれない。

『ゲートの点検が終わりました。再度ゲート入りが始まります』
私の番号のゲートも問題なく動くことが確認されたようで、2度目のゲート入りが始まる。

先ほどはすんなり入っていた先輩たちが少し浮ついたように集中を切らしてしまっている。普段ちよつと格好いい感じのリボンマンボ先輩も明らかに動揺を隠しきれていない。全員かなり綺麗なスタートを切った、1回目のゲートで集中力を大分使ってしまったようだ。

『一部のウマ娘がゲートを嫌がっている素振りを見せますが、今ゲートイン完了、出走の準備が整いました』

『今スタートを切りました！ おっと、殆どのウマ娘が出遅れた！
だが6番ブラックプロテウスはゲートへの衝突の影響を見せないスタート！ 綺麗に先頭に立ちました！』

……だから、こうなってしまったのは仕方ない。その後も私は先頭を脅かされるようなこともなく、レコードタイムとはいかなかったが最後まで先頭を守り切って、2位に5バ身の差をつけてゴールした。

レースを終えて、ウイナーズサークルでのパフォーマンスを終えて地下バ道に戻っていく。何だか今日は不完全燃焼に終わってしまった。勝ったのはいいけれど、すっごく胸がモヤモヤする。

「テウス、お疲れ様。アクシデントはあったが、良いレースだったぞ。怪我はしていないか？」

トレーナーさんがタオルを片手に出迎えてくれる。

「はい……無傷ではあるんですけど。なんだかちよつとモヤモヤします。私だけ走ってる距離が短いみたいなんですし……」

スタートが切ってからレースが止まるまで、先輩たちは200mくらいは走ってしまっていた。2000mのレースなのに、先輩たちだけ2200m走っているようなものだ。スタートをやり直したとはいえ、何だか不公平な気がする。ルール上は問題ないんだろうけれど……

「まあ、こういうこともある。人間の陸上競技でも、フライングや機械の不具合でスタートやり直しとかになったりするだろ？ それと一緒にだ。ウマ娘のレースのゲートは電磁式だから滅多に起こることじゃないけどな」

「でも……」

「スタートのやり直しで他の娘は集中力を切らしてしまった。だがお前は集中力を切らさなかった。言っちゃ悪いが、その時点で勝負が決まっていた。クラシック級になったばかりの娘たちには厳しい話かもしれないが……それがレースだ」

「……はい」

もやもやするけど、トレーナーさんの言うとおりでと思う。結局のところ、それが真剣勝負なんだ。

たとえば、アクシデントで全力を出せなかったとしても。何があっても全力を出し切ることが出来ないと、レースで勝ち続けることは出来ない。

あの『皇帝』、無敗の三冠ウマ娘シンボリルドルフできえも、中一週の強行軍で挑んだジャパンカップのレース前に体調不良を起こしてしまい、3着に沈んでいる。

レース前に、そしてレース中にどんなことが起こっても決して揺るがず自分の走りを出来たものだけが、きつと栄光を手に行けるんだと思う。

何処まで私がそれを貫いていけるのか。きつとそれが大切なんだ。その為にはさらなるトレーニングが必要だと思う。イメージトレーニングとか、増やそうかな……

今後どのようなトレーニングを行うか頭の中で考えつつ、ウイニングライブに備えるために控室に戻るのだった。

レースが終わった翌日、いつものようにスズカさんと併走していた。併走では2000mでは全く歯が立たないが、3000mくらいであればスズカさんに稀に勝てることもできるようになっていた。

きっと全力ではないと思うけど、スズカさんから先頭の景色を奪えたのは少し誇らしい。

「そういえばスズカさん、次走はどうするんですか？ 4月の大阪杯くらいですか？」

スズカさんは今年もトウインクルシリーズを走ることにしたようだが、次走に関してはまだ聞いたことがなかった。多分スズカさんの適性距離である、1600〜2200程度のレースだと思うけれど。

「その予定だけれど、天皇賞・春も走ってみたいのよね……私には長すぎるってわかっているんだけど、先頭の景色を3200m独り占めも、きつと良い景色が見られるんだろうなって……」

「それはまた……確かに気持ちよさそうですね、大変なんじゃ……」
距離適性の壁は大きい。テイオー先輩が天皇賞・春に挑んだが、途中でタレてしまいマックイーン先輩に負けてしまったように、その壁をぶち破るのはかなりの努力が必要だ。

「トレーナーさんは『道中3秒差をつける逃げを展開できれば勝てるはず』って言うってたから、勝ち筋がないってわけじゃないと思うの。もし走るって言ったなら、練習手伝ってくれる？」

「勿論です！ 限界まで付き合いますよ！ まずは坂路10本くらいからですね！」

「流石にちよつとオーバーワークだと思うわ……トレーナーさんのメニューに従いましょ？ ああ、まってテウスちゃん、引つ張らないでえ……」

「……テウス、スズカ。じゃれあつてるところ悪いが、今いいか？」

私がスズカさんを坂路に引つ張つていこうとしていると、横からトレーナーさんに声を掛けられた。

「あ、はい。大丈夫です！」

「年度代表ウマ娘の発表があつた。スズカは年度代表ウマ娘、スカレットは最優秀クラシック級クイーンウマ娘、テウスは最優秀ジュニア級ウマ娘だ！ それで、明日記者会見があるから、原稿のすり合わせを行いたいんだが……」

「今年は発表、遅かつたんですね？ 今までは年始すぐに発表になつてたと思ひましたけれど……」

「まあ、去年はURAの内部が色々あつてごたごたしてたからな……」
トレーナーさんとスズカさんが何か話しているが頭に入つてこない。私が最優秀ジュニア級ウマ娘……？

「え、ええと……何かの間違いじゃないですか？」

「無敗のジュニア王者が何を言っているんだ……むしろ当然の結果だと思ふが？」

「いや、それならフジキセキ先輩だつて同じですよ？」

そう、フジキセキ先輩だつて無敗のジュニア王者だ。ネームバリュー的にも彼女の方が票を集めそうだと思うのだが……

「テウスちゃん、フジ先輩は3戦3勝1レコード、貴女は5戦5勝2レコード。さらに1600のタイムは貴女の方が速い。さてどっちが票を集めるでしょう？」

「……私、ですか……？ 誇らしいような、恥ずかしいような、申し訳ないような……」

スズカ先輩に言われてようやく理解してきたが、何だが申し訳ない気がする。

「頑張つた結果なんだから、胸を張れつて。俺は誇らしいぞ！ 俺の愛バが表彰されることほどに嬉しいことはない！」

トレーナーさんが頭をいつも以上にぐしゃぐしゃと撫でまわしてくる。

「ああああ、ぐわんぐわんします……手加減してくださいいいい……」
いつも以上の力強さに物理的に振り回され目が回りそうになる。何とかトレーナーさんの魔の手から逃れて息を整える。

「記者会見も楽しみにしてるからな！ 原稿は考えて来いよ！ ……ん？ スズカ、どうした？ 何かあつたか？」

「……なんでもありません」

耳を倒してトレーナーさんの側にいたスズカさんがすすつと離れていく。いったいどうしたんだろうか……？

ひとまず、原稿を考えないといけない。スズカさんとスカレット先輩と相談しながら決める方がいいだろう。LANEでスカレット先輩に連絡を取って、打ち合わせの予定を取り付けよう。

正直記者会見はあまり好きじゃない。ホープフルステークスの時で思ったが、フラッシュを焚かれるのはあまり好きじゃないし、想定外の質問をされるとテンパってしまうし……

でもスズカさんとスカレット先輩と一緒に多分大丈夫だ。フォロワーしてくれるだろうし、精神的にもとても楽になる。

それにクラシック路線のレースの前にも記者会見はあるだろうし、慣れないといけないんだらうなあ……その時はトレーナーさんが居てくれるだろうけど、スズカさんたちはいないのか……

少し憂鬱だけど、仕方ない。やればできる！ ……たぶん！

第二十七話 会見と、それを見ていた者たち

『さあ、次壇上に上がっていただくのは昨年中5戦5勝、レコード2回！ 圧倒的な能力でホープフルステークスを制し、見事最優秀ジュニア級ウマ娘に選ばれたブラックプロテウスさんです！』

ついに名前を呼ばれて、慌ててカンペをポケットにしまって舞台裏から出ていく。トレーナーさんも先輩たちも今は控室に居て、壇上では1人で会見することになる。本当は誰か一人付き添ってほしかったのだが……

服装とか髪型とか、乱れてないかな、大丈夫かな……何度も何度も周りの娘たちにチェックしてもらったりしたんだけど、不安で不安で仕方ない。

舞台の中央に立つとパシャパシャとフラッシュが焚かれて、会場全体の視線が集まってくる。

皆が皆私だけを見ていて、頭が真っ白になる。

『先日の京成杯でもアクシデントに負けず、5バ身で逃げ切りの圧勝劇を見せてくれました。ここまで無敗の6連勝！ 見事としか言えない走りでした。どんなアクシデントにも負けない、まさに鋼鉄のようなフィジカルとメンタルで、レースを大いに盛り上げてくれました！』

司会の人何かを言っているようだが耳に入っていない。激しく焚かれるフラッシュと、記者さんたちの視線が集まるのを感じてもう何も考えられない。

『では、ブラックプロテウスさんに今後の目標を聞いてみましょう！』

あれ、何で私はここに立っているんだっけ……そうだ、会見。何か、何か言わないと……もくひよう……目標は……

「宝塚記念で、サイレンススズカさんと戦うこと……ですかね。約束したんです。そこで真剣勝負をするって。だから、宝塚記念に出たいですね」

私がホープフルステークス以外で目標にしていたレースが、宝塚記

念だ。正直今でもそれ以外に明確な目標はない。長距離レースの菊花賞は走りたいとは思うけれど……直近の物なら宝塚記念だし……

『た、宝塚記念……ですか？ クラシック三冠などは……』

「挑戦はしていくつもりですが、目標として掲げているのは宝塚記念ですね。私にとって一番尊敬するウマ娘であり、そして一番の強敵はスズカさんですから」

『な、なるほど……大きな目標ですね！ 昨年のダービーウマ娘、ウオッカさんが挑んで惜しくも敗れた宝塚記念。クラシック級のウマ娘たちの前に立ちはだかるシニア級の先輩ウマ娘たちの高い壁を乗り越えられるのか。期待が高まります！』

少し記者さんたちが静まり返ったような気がしたが、問題なかった？ らしい。

『ブラックプロテウスさんには功績を称え、新たな勝負服が授与されます！』

「あ、ありがとうございます！」

係員さんに目録のようなものを手渡され、ぎゅつと胸に抱きかかえる。素直にとっても嬉しい。今回の勝負服は表彰者全員統一されたものになるらしい。どんなデザインになるかはまだ教えられていないが希望の色を聞かれたので、ひとまず青系の色が良いと答えておいた。袖を通す時が楽しみだ。春のファン感謝祭とかでスズカさん、スカレット先輩と一緒に着たりしたいな……

『シンボリルドルフ以来の無敗の三冠ウマ娘の誕生にもますます期待が高まります！ 皆さま、盛大な拍手を！』

大きな拍手と沢山のフラッシュを浴びながら、頭を下げて壇上を後にする。変なこと言っただけでなかったか今になって心配になってきた……多分、大丈夫だよな？

最近再研修を終えてようやく戻ってこられたアケルナーの部室で、

URA賞の発表を見る。

あの若造、沖野が担当するチームスピカのメンバーが三人も表彰されていることに、時代の流れを感じた。

以前は俺の担当ウマ娘もあの場に立ったことがあるし、数年前までは東条のところの嬢ちゃんが担当するチームリギルがほぼ独占していた舞台だ。

最優秀ジュニア級ウマ娘の発表になって、あの黒鹿毛のウマ娘が一人壇上に上がっていく。

少し苦々しい思いを感じながらも、こいつのレースは全て余さず見たのでこの結果に何も異論はない。

芙蓉ステークスやデイリー杯、ホープフルステークスなどでこいつの実力に関してはもはや疑うところはないからだ。

トレーニング内容はもう非常識だとしか言えない内容だが、それで能力がついていっているなら文句は言えない。

まあ、何も知らないウマ娘がこいつのトレーニングを真似するとう危険性があるが、それは俺たちトレーナーが止めればいいだけの問題だ。

「トレーナーちゃん。何見てるの〜？ マヤにも見せて見せて〜♪ あ、テウスちゃんだ！ そういえば今日表彰の日だっけ？」

手と足が同時に出ているブラックプロテウスが登壇するのを見てみると、何者かにいきなり後ろから飛びつかれた。

「マヤノトップガンか……いきなり後ろから抱き着くなと言っているだろう。後、五十路を疾うに過ぎた爺にちゃん付けもやめろ」

この栗毛のチビツ子ウマ娘はマヤノトップガン。今表彰を受けているブラックプロテウスと選抜レースで戦ったことがある、メイクデビューを済ませたばかりのウマ娘だ。

メイクデビュー戦はダートの1200mで、5着。他のトレーナーの名義を借りて出走していたが、一週間ほど前にいきなりチームアケルナーに転がり込んできたお転婆娘だ。

「トレーナーちゃんはトレーナーちゃんだもん。あはは、テウスちゃん緊張してるー。選抜レースの時と一緒だ。結構緊張しいなん

だよなー。最近のレースでは堂々としてるのになー」

マヤノトップガンがテレビ中継で映るブラックプロテウスを見て笑っている。

こいつはかなりの癖ウマ娘だが観客席からでもレース展開を見極める鋭い洞察力と、走り方を視るだけでわかってしまい、それを習得し実践することが出来るほどの高い理解力を持つ天才肌のウマ娘だ。

多少飽きっぽいのと、恐らく晩成型のウマ娘であることからメイクデビューでは掲示板までだったが、GIを取れるくらいのポテンシャルは十分にある。

「良いなー。マヤもいつかあの舞台に立ちたいなー。ね、トレーナーちゃんは立てると思う?」

「難しいだろうな。ブラックプロテウスの実力は本物だ。お前と奴の距離適性が被ってるのが致命的だな。お前もステイヤー向きの脚をしてると思うが、アイツのステイヤーとしての素質は驚異的だ。今の段階でも、世界で通用するだろうな」

掛かりながら淀の坂を3回登っても大した疲れを見せないスタミナと、デイリー杯で見せた力強さ。ホープフルステークスでは多少苦戦していたようだが、それも京成杯までに修正してきたように見える。

「へー、トレーナーちゃんがそこまで評価するなんて珍しいね?」

「やっぱりあの模擬レースは凄かったもんねえ」

「現実を見させられたからな。アイツらにも悪いことをした」

自棄になつていたころを思い出して少し歯噛みする。数年前に妻に先立たれ独りになって、更に勝ちから遠ざかっていたこともあつて冷静さを失っていた。

ダート向けのスプリンターに芝の中距離の王道距離を走らせていたり、大逃げが得意な子に好位追走を強制させたりと滅茶苦茶な指導をしていた。

徹底的に打ちのめされて再教育に放り込まれ現実に引き戻されたが、あのまま指導を続けていたら取り返しのつかないことになつただらう。

心機一転、新人の様な心持ちで丁寧にあいつらに謝罪をしたところ、気持ち悪いから元に戻ってくれと泣きそうになりながら懇願されたので口調こそ元に戻したが、常に周りのことを見ることは忘れないようにしないといけない。

「やっぱりトレーナーちゃんは面白いね。マヤ、トレーナーちゃんが戻ってきたらアケルナーに入ろうと思ってたんだ。すつごく楽しくなりそうだったから」

くすくすと笑いながらもテレビから目を離さない。

中継ではブラックプロテウスの今後の目標を聞いていて、質問された本人は宝塚記念への挑戦、と言っていた。

自分の一番のライバルは、サイレンススズカだからと。クラシック級のウマ娘には興味がないと言わんばかりのその言葉に司会が少し困惑しているのが見て取れる。

「あー……まあ、テウスちゃんだし悪気はないだろうけど……」

「挑発と取られてもおかしくないだろうな」

ただでさえ奴は一度百日草特別で対決を避けられている。奴に特に気にした様子は見られなかったが、周りのウマ娘は確実に意識しているだろう。

その注目のウマ娘が、ライバルは昨年無敗でG I 4勝のシニア級のウマ娘だと言ったのだ。クラシック級のウマ娘なんて眼中にないと言っていると取られても仕方がない。

クラシック級のウマ娘は気が気じゃないだろう。実際、傍らに居るマヤノトップガンも好戦的な笑顔を浮かべている。

「トレーナーちゃんトレーナーちゃん、マヤがテウスちゃんと戦えるとしたらいつかな？」

「お前は今未勝利ウマ娘だから、まずは未勝利戦を勝ってからだが、菊花賞あたりだろう。その前のステツプレースでぶつかる可能性もあるが、勝負になるとしたらそのあたりからだ。ただ、奴にとって3000mと言う距離は得意中の得意であろうと言うところがある。そこまでにどれだけ力を付けられるかだな」

奴は明らかにステイヤーだ。それも長ければ長いほど有利になる

タイプの、逃げウマ娘としてはかなり珍しいタイプのウマ娘だ。

基本的に逃げウマ娘と言うのは逃げてなるべくリードを取るため過度なハイペースになることも珍しくなく、最後の直線まではとてもスタミナが持たずにずるずると落ちていくのが通常だ。

最初から最後まで一度も先頭を譲らないという最もシンプルな戦法であるが故にファンからの人気は高く、ロマンがある走りではあるが、その実非常に難しい走り方だ。落ちていくまでに築いたリードでヘロヘロになりながらも逃げると言うのが基本形であるから、長距離ほど逃げで勝つ事は難しくなるわけである。

逃げながら脚を溜めて、逃げながら差しに行くサイレンススズカや、最初から最後まで同じペースで逃げ続けるミホノブルボン。序盤を超ハイペースで飛ばし、中盤はスローに落として息を入れ、終盤で再加速するというトリッキーな逃げ方をするセイウンスカイという例外もたまにはいるが、ブラックプロテウスはそんなこと一切考えずに逃げ続けるタイプだ。

終盤競り合うとその勝負根性からかささらに速度と加速力が上がるようだが、普通の逃げウマ娘である。ただ、最初から最後まで掛かっている4000m以上走れる程のバ鹿げたスタミナがあると言う点を除けばだが。

逃げウマ娘の弱点である、同じタイプのウマ娘との先行争いによる展開窺いも奴には存在しない。たとえば大逃げで奴のハナを抑えようと、得意のコーナリングで前に出られるし、誰かの後ろに控えることを苦としないからだ。

トラブルが起きても動じない凶太い精神力もある。多少素直すぎる性格ではあるようなので、駆け引きには弱いかもしれないが、最初から最後まで先頭で突っ走ってしまえばそんなもの相手にする必要がなくなる。

そんな相手に3000mで戦って勝てるかと言うと、非常に厳しいとしか言えないだろう。出来れば出てこないでほしいと言うのが本音だが、奴は間違いなく出てくる。

「そっか。でも、マヤは出るよ。だって、テウスちゃんと走ったレース

が今までで一番楽しかったもん。あの時よりもっと強くなったテウスちゃんとか戦えば、もっと楽しいから。きつと色々なことがわかると思うし！ だから、トレーニングよろしくね？ トレーニングはつまらないけど、もっとワクワクするためには必要なこと、だもんね？」

「基礎無くして応用無し。マヤノトップガン。お前の能力を活かすためには基礎トレーニングこそが大事だ。安心しろ、飽きさせるような余裕を残すつもりはない。それくらいしないと奴には勝てん」

あのバ鹿みたいなトレーニング量を積んでいるウマ娘に打ち勝つためにはこちらも限界まで追い込まないと厳しいだろう。無理をさせるつもりはないが余裕を残すつもりもない。

「えー、スパルタきらいい。時々はデートに連れて行ってね？ 息抜きは大切だし♪」

「こんな爺とデートしても楽しくなからう……休みはくれてやるから、友達と一緒に出掛けてきなさい」

「やーだー。トレーナーちゃんが良いー。ほらほら、いこいこっ♪ トレーナーちゃんにも息抜きが必要だよ♪」

「ま、待てマヤノトップガン。こら、抱きかかえるな！」

ひよいと横抱きに抱きかかえられて部屋から連れ出される。ウマ娘の力に敵うはずもなく抵抗の余地なく運ばれていく。

まさか自分がこの歳になつて担当ウマ娘にこのような拉致をされるとは思っていなかった。最近マヤノトップガンに影響されてか他のチームメンバーたちも遠慮がなくなってきたり、何処かで釘をさしておくべきだろうか……

癪ではあるが今度沖野の小僧にこういうタイプのウマ娘の付き合い方を聞いてみるか……ゴルドシップなどで慣れているだろうし。

「トレーナーちゃんトレーナーちゃん、カラオケ行こ♪ 今日是一日歌い倒しちやおうね♪」

「俺は演歌くらいしか歌えんぞ……俺は気にせず一人で歌いなさい」

「大丈夫大丈夫♪」

何が大丈夫なのかはわからないが、楽しそうなので良しとすることにしよう。

第二十八話 リボンマンボと言うウマ娘

阪神レース場、パドックで、自分が出るまでの時間を待つまでの間、裏で身嗜みを整える。

この体操服も多少よれてきた。また新しいものを貰わないといけない。トレーニングを増やしてから月に2回ほどのペースで新調している。

でも、この程度じゃまだ足りない。あの娘は私が限界までやって、翌日動けなくなるくらいの量と質のトレーニングの数倍を楽しそうな顔をしてこなしているんだ。

あの娘のライバルで居ると宣言した以上は、せめてあの娘と同じライオンに立たないと。

私が今こうして、ゼッケンを背負って走れているのはあの娘のおかげだ。

私の蹄鉄が落ちて飛んで行って、彼女に当たってしまったあの芙蓉ステークスで、もしあの娘以外に当たっていたら。

もしあの娘が衝撃で転んでしまっていたら。

もしあの娘がその影響でレースを逃していたら。

もしそれで、誰かが取り返しのつかないことになってしまったいたら。私はきつと立ち直れないほどのダメージを受けてしまったことだろう。

あの日あの時のあの走りを見て、私はあの娘に心を奪われた。

私が落としてしまった蹄鉄を頭に受けて酷く出血して、顔中真っ赤に染まってしまっていたのに、それでも前を向いて後ろを突き放して駆け抜けていくその姿に、私は魅了されたのだ。恋焦がれたと言ってもいいと思う。

いつかあの背中に追い付いて、追い越したい。そう思ってトレーニングを増やしてもらって、それこそ毎日泥のように眠るくらいにまで追い込んでもらって、次のレースに挑んだけれど、掲示板に載るのが精いっぱいだった。

惨敗して、あまりにも悔しくて、トレーナーに縋り付いて泣いてし

まった。

そのレースではメイクデビューの41バ身よりは大分縮まって、あの娘と2着との差は8バ身程度に収まったけれど、それでも私たちウマ娘のレースにとって8バ身差はとても大きい差だ。3バ身差ですら圧勝と言われるのに、その3倍近くの差を付けられては、相手にすらされていないレベルだと思う。ましてや、掲示板がぎりぎりだった私なんて猶更だ。

諦めてしまおうと、思った。何十回走ったって、どれだけ辛いトレーニングを積んだって、圧倒的な才能の前には敵わないんだって、打ちひしがれそうになった。

悩んで悩んで、百日草特別でも相手にならなかつたら、もう引退してしまおうかと思った。レースが中止にでもなればいいのにと、不謹慎ながら思ってしまったていたりもした。

そして出バ投票の日になって、他の娘たちが出走を回避してレースが不成立になったのを聞いて、ああ、私だけがこう思っていたんじゃないんだと、つい笑ってしまった。

ふと、あの娘は、ブラックプロテウスはどう思っているんだろうと思つて、トレーナーとの打ち合わせをサボってトレーニングコースを見に行った。

あの娘は芝コースを楽しそうに駆け回っていて、その姿からは特に気にしているような様子は見えなかった。

——どうして貴女はあそこまで露骨に避けられて今まで通りで居られるの？

つい呼び止めて直接あの娘に聞いてしまったのは仕方のないことだと思う。あの娘は首を傾げて、

——ただ皆と予定が合わなかつただけですよね？ 運が悪かつただけですよ。

と、返してきたのでつい笑ってしまった。

よくわかってないような顔をしているあの娘を見て、一人で納得したような気持ちになってしまつて、何だか悩んでいたのがバ鹿らしくなつてしまった。

その後つい気になったので額の怪我の状態を確認して、動揺しているブラックプロテウスの反応を楽しみながら宣戦布告した。

きっとあの娘は自分が恐れられているとか、避けられているとか、そんなことは思ってもいなかったのだろう。ただ、先ほどまでのトレーニングと同じように、レースでも楽しく走ればいいのか、きつとそんなことを思っているに違いない。

今は無理でも、いつかきつとあの娘のライバルとして横に並んで、そして追い抜いてやる。そう思っ、彼女が出るレースは全て出走した。そのどれも影を踏ませてすら貫えなかったけれど、手ごたえはあった。もう半年もあれば、きつと追いつけると。

そう思っていたところに、あのURA賞の記者会見である。

明らかに緊張していたし、きつと最初に言おうとしていた予定の内容とは違うことだったのだろう。そう頭ではわかっていたのに、気が付いたらトレーナー室の机を叩き割っていた。

あの娘に対する怒りも確かにあったけれど、それ以上に相手にもされていけない自分に腹が立った。

何が半年もあれば追い付ける、だ。そんなことを思っているから、今私は相手にされていけないんだ。

許せない。自分たちの事なんて眼中に無いような発言をするのが。

許せない。その発言を特に訂正せずに今の今まで来ていることが。

許せない。そんな発言を許してしまう、この私の体たらくが。

だからこそ、このレースには命を懸けて挑む。他の娘たちもそう思っているのか、このレースにはフルゲート18人どころか、20人を超える登録があった。

賞金順で何とか滑り込めたが、この時期のOPグレードレースにこれほどまでの登録が入るのは異例だろう。

私は今日4枠7番。ブラックプロテウスは3枠6番である。

今日はピッタリあの娘をマークするつもりだったので、丁度いい位置だ。ちよつと近すぎるような気もするけど、どうにかする。今日この日のために逃げウマ娘に対する様々な対策を学んできた。他の娘

たちも同じようで、ブラックプロテウスを見つめる眼がギラギラとしている。

当の本人は天候を気にしているようでそわそわとして空を見上げている。小雨がパラパラと降って来てはいるが、バ場状態はそれほど悪くならないだろう。どちらかと言うと走った後に身体が冷えてしまいそうだ。

パワーとスタミナのあるウマ娘としては珍しくブラックプロテウスは重バ場を苦手になっているところがある。どちらかというところ、展開が遅くなるレースを苦手になっていると言った方がいいかもしれない。最初にリードを付けて後続をちぎっていく走りを得意としているということだろう。

今日良バ場になりそうなのが悔やまれる。もつと窓際に逆さてるてるを吊るしておくべきだった。

ブラックプロテウスのパドック順になって彼女が出ていくと、会場を揺らすほどの大歓声が聞こえて思わず耳をふさぐ。出走人数も異例なら、観客動員数も異例だ。

まるでG1レースかのような客入りで、どれだけブラックプロテウスと言うウマ娘の人気が出ているのかが分かるというものだ。

彼女の走り方はとても分かりやすいし、勝ち方も豪快だ。パドックやウイナーズサークル、ライブでも愛嬌があつて、ファンサービス精神も旺盛なので人気が出ない方がおかしい。

トウカイテイオーが、そしてミホノブルボンが達成できなかったクラシック三冠に輝くのではと今から期待されていてかなり盛り上がっている。

デビュー当初は少しは語られていた私の名前も、最近は殆ど見なくなった。ブラックプロテウスが居ないレースで1着になった時に少し見るくらいで、注目度は低い。

今日その評判を覆して見せる。気合を入れなおして、ブラックプロテウスと入れ替わりでパドックへ向かった。

『阪神レース場、第10レース。芝2200m、すみれステークス。18人のウマ娘たちが出走します。断続的に小雨が降っていますが、バ場状態は良での発表となりました』

パドックも終わり、滞りなくレースの時間になった。あれから雨が強くなるようなこともなくて、バ場状態は結局良になった。やはり祈禱力が足りなかったか……

『3番人気を紹介しましょう、サンセットグルーム』

『2番人気はこの娘です、リボンマンボ』

ファンファアレが鳴り、ゲートに入っていく。周りはまだ見知った顔ばかりだ。見知った顔しか残っていない、とも言えるのかもしれないけど。

『威風堂々スタートを待つのはこのウマ娘、ここまで無敗、ジュニア王者ブラックプロテウス！ 圧倒的1番人気です！』

後入りで隣にゲートに入ってきたブラックプロテウスは、いつも通り肩にぐつと力を入れて、ゆっくり力を抜いていく。

何時もゲート前に見せるルーティーンで、緊張をほぐす効果があるらしいとトレーナーは言っていた。

全員がゲートに入り、一瞬静かになる。周りからびりびりとした圧がブラックプロテウスに向けられている。隣の私にまで影響があるのでやめてほしい。

横目でちらりとブラックプロテウスを見る。彼女も圧に気付いたのか少し目を見開いた、その後。

——口角を吊り上げ歯を見せて笑った。普段の穏やかなあの娘からはかけ離れたような、その闘争心をむき出しにした表情に目を奪われそうになって、慌てて正面を向き目を逸らす。

『各ウマ娘ゲートイン完了。——今スタートしました！』

ゲートが音を立てて開く。スタートは私の方が、ほんの少しだけ早かった。

だけど、1ハロンもしないうちに追い越され、ハナを奪われる。

この展開は想定済みだ。元々最初っから先頭で逃げるつもりはない。後ろにびったりついて彼女を風除けにして、最終直線で一気に仕

掛ける予定だ。

『先頭はやはりこの娘、ブラックプロテウスが行きました。2、3バ身ほど離れてリボンマンボ、その後ろすぐにジュエルアズライトとオネストワーズ、デュオスヴェルが3人並んでいる。少し離れてサコツシュとリボンガボット、そして3番人気サンセットグループが居ます。ハイペースで坂を上る!』

今回はブラックプロテウスに圧を掛けたいのか前目につけている娘が多い。半数以上が前目につけているような感じだ。

ただ、通常と違うというのはこの阪神レース場で最内を走っているということだ。この阪神レース場は最内が荒れやすく、基本的には避けるのが定石だ。ずっと外々を走るといわけではないが、それでもずっと最内を走るといするのは狂気の沙汰だ。

「くうっ……」

あの娘の真後ろについている関係上、私も荒バ場を進まざるを得ない。今から作戦を変えて外目につけるような器用さは私にはないし、妥協した作戦で彼女に勝てるとも思えない。

一步、また一步と踏み込むたびに荒れたバ場が脚に負担をかけてくる。ただでさえあの娘のハイペースについていくので脚を使っているのに、さらにこの負荷は厳しい。

『向こう正面に入って今1000mを通過。通過タイム——何と57.1! 今年のサイレンススズカの宝塚記念と全くの同タイムです! 凄まじい、凄まじいハイペースだ! これが本当にクラシック級のウマ娘なのか!? だが、後続のウマ娘たちも負けていない! 必死に食らいついていきます!』

ずきりと足が痛む。スピードを落とせと身体が警鐘を鳴らす。これ以上このペースで走れば取り返しがつかないことになるぞと理性が制してくる。

それでも、スロットルは緩めない。ここで緩めるくらいなら最初からもっと後ろにつけている。頑丈なあの娘だって全く消耗しないはずはない。食らいついていければ勝機は見えるはずだ。

『第3コーナーを回って、ここから長い長い下り坂! ここからレ-

ス展開が激しくなります！ ブラックプロテウス、変わらず先頭！
2番手のリボンマンボ、3番手デュオスヴェルも共に上がっていきま
す！』

下り坂になってレースがさらに速くなっていくと、後ろとの差が詰
まり集団になっていく。だけど、前を走るあの娘の背中との距離は縮
まらない。

コーナーでは少し外に膨らんでしまったが、その分走りやすくなっ
た。前との距離が離れたせいで風の影響が強くなってきたが、先ほど
までの荒バ場を考えればプラスだろう。

離されまいと、痛む足に鞭打って加速する。身体中に負荷が掛かっ
ているのか、身体から軋むような音が聞こえるけれど、後600くら
いだけ耐えてくれればそれでいい。

足にさらに力を込めて、前との差を詰める。2バ身、そして1バ身
と差を詰めると、ブラックプロテウスが初めてちらりところらを見
て、目が合った。

「……………?!?」

目の前の彼女がスタートの時に見せたような獰猛な顔を見せた後、
正面を向く。途端、世界が塗り替えられた。

私たちが彼女に向けた圧の、その数倍が彼女から解き放たれ、彼女
の周りから色と音が失われる。

深く、深く踏み込んでいく。地に蹄跡を残し、土を芝を舞い上げる。
それなのに、足音一つ聞こえない。それはまるで全てのエネルギーが
推進力に使われているかのように。または音を、色をも置き去りにし
ているかのように。

『領域』。時代を作るウマ娘が必ず入るといふ、限界の先の先の世
界。自らも知らない剛脚を解放し制御するそれは、間違いなく最強、
一流の代名詞だと言っている。

超一流のウマ娘は常に決まったタイミングで入ることが出来る
というが、入ろうとしたって入れるものじゃない。ましてや、クラシッ
ク級の2月でここまでの輝きを見せるというのは、規格外にも程があ
る。

『最終直線に入ってブラックプロテウス、詰めてきていた後続を一気に引き離した！ 4バ身、いや既に5バ身は引き離している！ 逃げウマ娘とは思えない鋭い差し脚だ！』

1バ身差にまで迫っていたその背中が、あつという間に離れていく。負けじと加速しようとした。だけど、もう脚が残っていないかった。ずるずると、ペースが落ちて後退していく。

後ろを見る。他の娘たちもこの超ハイペースに、完全にバテてしまっている。絶望したような表情をする娘、無理と漏らして足を緩める娘。

私は、負けじと食らいつつこうとした。鉛のように重い脚を必死に動かす。まるで水の中にいるかのように、息が苦しい。

『後続は遙か、遙か後方！ これは完全に決まったか！ もう脚が残っているウマ娘はいないのか！』

追込のはずのミントドロップでさえ、既に脚を使い果たし私の後ろで苦しそうに走っている。しかも、ここからゴールまでの間には1・8mもの坂がある。私には、私たちにはもう、それを越えられるだけの脚はなかった。

『ブラックプロテウス、坂をまるで飛翔するように上っていく！ このウマ娘に疲労と言う言葉は存在しないのか！ そして、大差で今ゴールイン！ 200m延びてもまさに圧倒的！ 7戦7勝！ 2着にはヘロヘロになりながらもリボンマンボ、3着以下は団子状態、写真判定です！』

ブラックプロテウスがゴールしてから、およそ2秒。12バ身程の差をつけられ、ふらふらとゴール板を抜ける。ゴールした後50mほど先で膝から崩れ落ちて、ターフに転がる。

もう一步も動けない。脚はがつくがくだし、肺は破れそうなくらいに痛い。このままここで寝てしまいたいほどには全てを出し切った。

『勝ち時計は——なんと2:09.6！ 超ハイペースとなったこの阪神レース場、芝2200！ 世界レコードでの決着となりました！

まさに圧巻！ 目標は宝塚だと豪語する、その発言を自惚れだとは思わせない、傲慢だとは言わせない実力を見せましたブラックプロテ

ウス！」

レース場全体が、振動するほどの大歓声に包まれ、ブラックプロテウスの勝利を祝福する。顔を観客席の方に向けると、彼女は嬉しそうに観客席の前を走って手を振っている。

正直、あれだけ走ってなお、ファンサービスまで出来る余裕があるなんて信じられない。何人ものウマ娘が、彼女との対決を避けて、クラシック戦線を諦めていった理由がわかってしまう。

とても強い光だ。近付けば、この身を灼かれてしまいうんじやないかと思う程に。

その光が生み出す深い影に、このまま呑まれたままで居られるものか。悲鳴を上げる身体を何とか起き上がらせて、ターフを後にした。

「マンボ、大丈夫？ ライブ、出れる？ なんなら休んでもいいんだよ？」

控室に戻ってすぐ倒れた私を、トレーナーが必死に手当てしてくれている。コズミを起こした足を優しく冷やしてマッサージして、後に響かないようにしてくれている。

外見はとてもクールビューティーって言葉が似合うトレーナーなんだけど、内面は気弱で、年上なだけで守ってあげたくなくなるようなヒトだ。

「あんまり激しい動きしなければ、大丈夫だよ。ありがと、トレーナー。それと……ごめん。無理言っただけ出してもらったのに、また、勝てなかった」

トレーナーは、私がブラックプロテウスと戦うことには否定的だった。あの娘に付き合っていたら、いつか壊れてしまうかもしれないからと。あの娘には悪いけれど、戦うのは避けるべきだと。

何度も何度も話し合った。結果としてトレーナーが折れてくれたけれど、言っていること自体は正しいと思う。

私の将来のことを考えるなら、今からでもティアアラ路線に移ったほうがいい。GIウマ娘と言う称号を手に入れる為なら、きつとそれが

一番確率は高いだろう。

でも、そんな打算的な気持ちを抑えるくらいに、ブラックプロテウスへの思いが強かった。

いつかあの娘に勝ちたいという気持ちが、何もかもを上回ってしまっていた。

「いいんだよ、無事にこうして戻ってきてくれたから。わたしのマンボ。あなたが決めた道を、わたしは全力で応援するから。その為のフォローなら、何だって惜しまないよ」

そういつて、私の脚から熱が引くまで、その手を紫色にしてずっとずっとアイシングをしてくれる。

私のサポートのためにマツサージの資格まで取ってくれたほど、トレーナーは私に尽くしてくれている。それに応えてあげられていない自分が悔しい。

「必ずっ、必ず、勝つから。あの娘に勝って、栄光をトレーナーの元に持って帰るから！ だからっ……」

気が付いたら、熱いものがこみ上げていて、目から零れ落ちていた。負けた悔しさと、トレーナーへの思いと、その他にも色々な思いが胸につまって、嗚咽が漏れてしまう。

トレーナーがそっと抱きしめて、そんな私を宥めてくれる。私が泣き止むまですつとずっと、何も言わずに頭を撫でてくれていた。

第二十九話 王者と王者

すみれステークスを終えその翌週に弥生賞を控えて、今日も今日とて自主トレーニングをしている。

「坂路トレーニングを終了。クールダウンに移行します」

坂路でいつものように走っているとブルボン先輩と一緒にになり、折角なので併走してトレーニングをしていた。

ブルボン先輩は右足から腰にかけて疼痛を起こしてしまい、そのままトウインクルシリーズは引退してしまった。ただ、無敗のダービーウマ娘と言うこともあってドリームトロフィーリーグには移籍出来たので、今は次のSDTに向けての調整を行っているそうだ。

「ブルボン先輩、大丈夫ですか？ 足の方は……あ、ドリンクどうぞ！」

「はい。問題ありません。コンディションは良好、走行に支障はありません。ありがとうございます、テウスさん」

私やゴルシ先輩みたいに頑丈なウマ娘も居るが、そのほとんどが自分の身体の耐久力と相談しながら走っている。

ブルボン先輩はトレーニング中の発覚だが、レース中に限界を迎えてしまうウマ娘も存在する。

秋天でのスズカ先輩とかが分かりやすい例だろう。テイオー先輩だって何度も骨折しているし、マックイーン先輩も屈腱炎から回復してリハビリに励んでいるところだ。メイクデビューでのアンペールユニット先輩、そして屈腱炎を発症したと思われるBNW、ビワハヤヒデ先輩、ナリタタイシン先輩、ウイニングチケット先輩もリハビリに苦しんでいる。

恵体で知られていたビワハヤヒデ先輩でも故障に悩まされ、『ハヤヒデは鋼鉄では出来ていない。やはりウマ娘はウマ娘なんだ』と言われるくらい、ウマ娘はその速度に比べて脆い生き物である。

それと比べられてか『ブラックプロテウスは鋼鉄で出来てるんじゃない？』とかウマッターで言われているようだが……可愛くないのでや

めてほしい。あれを見てからそれ以上見るとやる気が下がりそうだったのでもう自分で自分のことを調べることはやめた。

「あー！ 居た居た！ おーい、ブルボンさーん！ あ、テウスちゃんも居る！ こんにちはっ☆」

小休憩を挟んでいるとジャージを着たファル子先輩がこちらに駆け寄ってきた。走り方、可愛いなあ……私も少しは気にするべきなんだろうか……

「こんにちは、ファル子先輩。ブルボン先輩にご用事ですか？」

「こんにちはファルコンさん。私に何か？」

ブルボン先輩と同じタイミングで首を傾げる。

「あ、うん。春の感謝祭でやる予定の逃げシスのステージの打ち合わせをしようと思ったんだけど……そうだ、テウスちゃんも来る？ テウスちゃんも逃げシスのメンバーだもんね！」

「え？ あれっってお試しだったんじゃ……？」

「いいからいいから！ スズカちゃんもアイネスさんもマルゼン先輩も来るし！」

「なら行きます」

スズカさんが来るなら選択肢などない。同じステージで踊れるというだけで何を投げ捨ててでも行きたい。

「やった☆ じゃあお片付け手伝うね！ あ、テウスちゃん。こないだのすみれステークス見たよ！ 1着おめでとー！」

「あ、ありがとうございます。見てくれたんですね……」

「そりゃあ大切なメンバーの晴れ舞台ですから☆ あ、テウスちゃん、確かダートも走れるよね？ ダートに出てみるつもり、ない？」

いきなりされた提案に少し考える。日本のダートは確か長くて2100mまでだったはずだ。スズカ先輩たちのおかげでマイル以下でも大分走れるようになってきたので、その気になれば1600mまでなら何とかなるだろう。

「だけど、ダートをレースで走るのは初めてだ。トレーニングでは走っているものの、ダートで通用する走りが出るかはわからない。興味はあるんですけど……スピカにダートが得意な人が居ません

し、調整が出来ないですよ。ジャパンドートダービーとかは出てみたいなあとは思ってますけど」

「それならそれなら！ ファル子が併走手伝うよ！ 他にもウララちゃんとかウインディちゃんとか、デジタルさんとかにも声かけるから！ ねっ？ お願い！」

必死に縫られて少し引いてしまう。でも、なんとなく気持ちはわかるような気がする。

「ダートの注目度が低いから……ですか？ ジュニア王者の私がダートを走れば、注目度が上がるから……って事ですよ？」

「うん。ダートの注目度が低いせいで、ダートの娘たちみーんなが頑張ってるって、とっても熱いライブをしているのに、それを知らない人が多いの。トップじゃないから、誰にも気付かれない。それは凄くもったいないことですよ？ 私もダートをトップに引き上げようって頑張ってるけど、私だけで輝けるわけじゃないから。皆できらきらして、ダートをもっと盛り上げたいんだ！」

そうやって語るファル子先輩の瞳は凄く輝いていて、本当にダートが好きなんだと分かってしまう。そんな真摯に思っている相手に、適当な誤魔化しで応えるのは失礼だろう。

ファル子先輩はJBCクラシックや東京大賞典を制していて、ドリーム・シリーズ・ダートでも先頭を突っ走るダートの王者だ。そのダート王者からのお誘いを無下にすることなんて、出来るはずもない。

「わかりました。宝塚記念の後のジャパンドートダービーに出れるかトレーナーさんに相談してみます。出れるようなら併走お願いしますね。ファル子先輩の期待に応えられるように、頑張りますから」

「……うん！ 一緒に頑張ろうね！ おー☆」

「お、おーっ！」

二人で拳を上げて気合を入れる。ちなみにブルボン先輩は会話中空を見上げてぼーっとしていた。時々何考えてるかわからないんだよね、ブルボン先輩……

時は流れて弥生賞当日。昨日は雪交じりの雨が降るくらい天気が悪かったのだが、今日は何とか持ち直した。それでもバ場状態は重になりそうだ。ここまでのトレーニングで何処まで重バ場での勘を取り戻せたか、それが問われることになりそうだ。

ちなみにジャパンダーブダービーへの出走に関してトレーナーさんに相談したところ「まあ、テウスなら行けるだろうしいいんじゃないか？」というお返事をいただいた。

信頼されているのか、放任されているのか怪しいところであるが、まあ許可を貰えたので気にしないことにする。

パドックの裏で待機して、自分の順番を待つ。

今日の出走人数は12人。内訳としては、

- 1 枠1番、タイムティツキング。12番人気。
- 2 枠2番、サンセットグルーム。4番人気。
- 3 枠3番、カジユアルスナップ。10番人気。
- 4 枠4番、デュオエキュ。5番人気。
- 5 枠5番、フジキセキ。2番人気。
- 5 枠6番、ブラックプロテウス。1番人気。
- 6 枠7番、ミントドロップ、7番人気。
- 6 枠8番、タイドアンドフロウ。6番人気。
- 7 枠9番、リボンマンボ。3番人気。
- 7 枠10番、ユイイツムニ。11番人気。
- 8 枠11番、サコツシユ。9番人気。
- 8 枠12番、アクアラグリーン。8番人気。

まあまた6番である。前回は違ったのだが、明らかに6番になることが多い。有利不利と言う点では逃げの私には微妙に不利であるが、気になるほどではないと思う。

一番警戒するべきは何と言ってもフジキセキ先輩だろう。ここまですで3戦3勝。彼女もまた私と同じ無敗のジュニア王者だ。王者対決だとか竜虎激突だとかそんな見出しの雑誌や新聞が並んでいたし、取材申し込みも結構あった。

忙しかったのですべてに答えることはできなくて、前スピカを取材してもらった記者さんたちだけ受けたけれど、原稿を用意しておいたのでまあ無難な返答しかしていないと思う。

面白味がないかもしれないけれど、変なことを言っただけで騒がれるよりはマシだ。URA賞の時は頭が真っ白になってしまって、後から録画を見て呆然としてしまった。言い訳するのもなんか格好悪いなと思ったので特に訂正しなかったのだが、思いつきり敵意を向けられるようになった今となっては訂正した方がよかったですとは思っています。

でも、こちらに対してひしひしと向けられるプレッシャーは、身が引き締まってこちらでも燃え上がってしまう。やっぱり私は競い合って、競り合いつつ走るのが好きなんだとつい楽しくなってしまったりいだ。

「やあ、ポニーちゃん。次はキミの番だよ」

フジキセキ先輩がパドックを終えて戻ってきて、こちらに声を掛けてくれる。所作の一つ一つが格好良くて、パドックでは黄色い声援が上がっていた。フジキセキ先輩、モテるだろうなあ……

「あ、ありがとうございます。行ってきますね、フジキセキ先輩」

「うん、あ、そうだ。一つだけ、いいかな？」

入れ替わりでパドックへ向かおうとするとフジキセキ先輩に呼び止められる。何か変なところがあつたらどうかと首を傾げて振り返ると、

「スズカだけがライバルだなんて、この私が言わせないよ。覚悟しておくと良い。ブラックプロテウス」

そう言っただけ、いつもの優しい笑みから更に笑みを深めて、好戦的な表情を見せる。

「そんなつもりはなかったんですけど……いいです。楽しみましょうね、フジキセキ先輩」

私も楽しくなってしまう、ついそんなことを言ってしまう。もっと謙虚にだとかそんな風に答えることもできただろうけど、今の私にはこれ以外の返答はなかった。

やっぱりレースは、走ることはワクワクして楽しい。何があったとしても嫌いになることなんて出来ないだろう。

今日も、楽しく駆け抜けよう。結果が二の次だなんて言わないけれど、最初から最後まで、楽しまないと損なのだから。

気合を少し入れなおして、ファンの人たちに姿を見せるべくパドックへ向かうのだった。

第三十話 報知杯弥生賞

『弥生三月、クラシックの香り仄かに弥生賞！ GⅡだとは思えないほどの人数が詰め掛けた超満員の中山レース場で、いよいよ二人のジュニア王者、フジキセキとブラックプロテウスが激突します！』
返しウマを終えてゲート入りを待つ。肌にピリピリとしたものを感じるのは、三月の寒さだけが原因じゃないだろう。

『先ほどまで不良バ場でしたが、最新情報では重バ場となっています。12人のウマ娘たちが鎬を削る皐月賞トライアル弥生賞、まもなく出走です！』

ファンファーレが鳴るまでの間に、芝の柔らかさを確かめておく。不良寄りの重バ場なようで、とても柔らかいターフになっている。

トレセンの田んぼを走り回って重バ場には慣れたつもりだけれど、どれくらい相手になるか、ちょっと不安なところである。

『3番人気はこの娘です、リボンマンボ。諦めずに王者へ食らいついていくその姿に惹かれるファンも多いです。果たして下克上なるか！』

ファンファーレが鳴り、奇数番の娘たちからゲートに入る。その途中リボンマンボ先輩が立ち止まりじっとこちらを見ていた。真剣なその眼差しに負けないようにじっと見つめ返すと、つい吹き出してしまった。

「何で笑うのよ……まったく、緊張感ないわねえ」

「あはは、ごめんなさい。なんだかおかしくなっちゃって」

そのまま二人で笑ってしまい、それを見た係員さんが困ったように笑っている。

「あの、そろそろゲートに入ってくれませんか……？」

「ああ、ごめんなさい。今入るわ。じゃあ、お互いに良いレースをしましょ」

ひらひらと手を振ってゲートに入るリボンマンボ先輩に手を振り返してゲート入りを見送る。最近遠巻きに見られることも多くなつた中で、リボンマンボ先輩だけは以前と変わらず接してくれる。結構

助かっているんだよね……

『2番人気はこの娘です。ここまで無敗、ジュニア王者フジキセキですが決して実力は劣っていません!』

フジキセキ先輩はこちらを見ることはなく綺麗にゲートに入っている。威圧感すら感じられるような佇まいで私が入る予定のゲートの隣に収まり、深呼吸している。

『今日の1番人気、ブラックプロテウス。ここまで無敗、7戦7勝。果たして8勝目は成るのか! それとも他の娘たちが彼女の独走を阻止するのか!』

偶数番のゲート順になり、順番に入っていく。両脇はフジキセキ先輩とミントドロップ先輩だ。ミントドロップ先輩とは今まで何度か走ったことがあるが、フジキセキ先輩は初めてだ。確か先行が得意なウマ娘で、逃げも差しも出来なくはない程度には出来たはずだ。

とはいえ、チームリギルの東条トレーナーは堅実で、かつウマ娘の負担の少ない走り方を指導している筈、今回も先行で来るだろうとトレーナーさんは言っていた。

『各ウマ娘、ゲート入り完了。体勢が整いました』

ゲートに入っただけのように肩に力を入れて、ゆっくり抜く。やることはいつもと同じだ。最初から最後まで、全力で逃げ切るだけ。

『今スタートしました! 各ウマ娘綺麗なスタートを切りました。今日もハナを切るのはこのウマ娘、ブラックプロテウスだ! 既に2バ身ほど離れてカジュアルスナップ、その横並んでユイツムニ。少し離れてフジキセキとリボンマンボが行く。1バ身離れてサンセットグループとサコッシュ。そこから3バ身ほど離れてタイムティッキング、そのすぐ後ろにタイドアンドフロウ。最後尾にデュオエキュとミントドロップと言う形になりました』

何とか出遅れずにスタートを切って、いつも通り先頭を駆ける。後ろからピリピリとした圧を感じながら坂を上っていく。中山の芝2000は2度ゴール前の急坂を越える構成になっていて、タフさが求められるコースだ。

『ブラックプロテウス、坂を跳ぶように駆け上っていく! 他のウマ

娘たちも負けじと彼女の後を追っていくぞ。重バ場のこの中山で、ハイペースなレースが展開されていく!』

踏み込みは重い、練習の時ほどじゃない。この重バ場で大逃げすれば誰も追いつけないはずだ。ぐんぐんと加速して第1コーナーを回り、第2コーナーも駆け抜ける。

『第2コーナーを回って向こう正面。1000m通過タイム、59秒8! 重バ場だぞ! 相当なハイペースだブラックプロテウス!』

後ろの娘たちは食らいつくだけで精一杯か? 二番手はするすると上がってきてフジキセキ。その後ろすぐにリボンマンボが何とかついていっています。他は大きく離れた!』

直線に入っても足は緩めず、全力で突っ走る。駆け引きなんて私にはわからないし、トレーナーさんも何も考えずに好きに走れと言っていたので問題ないだろう。

ちらりと後ろを見ると、結構近くにフジキセキ先輩が迫ってきている。マイルを得意とする彼女の瞬発力には目を見張るものがある。スズカ先輩と同じか、それくらいのもは持っているだろう。

『フジキセキ並んだ! 並びかけてきましたフジキセキ! ついにブラックプロテウスを捉えるか!』

第3コーナーに差し掛かったあたりでフジキセキ先輩が並びかけてくる。歯を食いしばって足に力を込めて、負けじと加速する。

周りの音が聞こえなくなつて、周りが白黒に見えていく。どれだけでも加速できるような万能感に包まれて行くのを感じながら、先頭を守り切るべく加速する。

『だがブラックプロテウス譲らない! コーナーで加速して先頭を守る! さあ最終コーナーを回って最終直線! 293mのこの短い直線、ラスト200mから高低差約2mの坂が待ち受ける! この中山は坂の強いウマ娘が勝つ! 果たしてブラックプロテウスか! フジキセキか!』

最後の直線になって、今まで以上の全力で芝を蹴り、先頭でゴールを駆け抜けるべく加速する。重バ場に速度は少し吸われるけれど、それでも決して遅くはない速度のはずだ。

『フジキセキ此処で再加速！ 外からブラックプロテウスをかわしにかかる！ 並んで坂を登る！ 内ブラックプロテウス！ 外フジキセキ！ 最後はやはりこの二人の決戦だ！ もうこの二人以外どうでもいい！』

外からぐん、とフジキセキ先輩が伸びてくる。色のなくなった私だけの世界に、くつきりとその青鹿毛が映る。

負けられない、負けたくないという気迫がひしひしと伝わってくる。

だけど、私だって譲れない。誰にだって負けたくない、負けたくない。いや——

——勝つんだ！ 私は、この強いウマ娘に勝ちたい！ 私こそが最強で、最高のウマ娘だと、私を応援してくれる人たちに証明するんだ！

『残り100m！ 此処から更に二人とも加速する！ このウマ娘達にはいくつロケットが搭載されているんだ!? 二人とも一步も譲らない！』

『負ける、ものかああああ!!』

不思議と、そんな叫びが漏れていた。フジキセキ先輩も負けじと何か声を上げているようだけれど、私には聞こえない。だけど、きつと同じような叫びをあげているのだろう。

既に限界の速度だ。踏み込むたびに足がミシリと軋む。だけど、それを無視してもう一步、もう二歩と踏み込む。

私の脚は、この程度じゃ砕けない。私の心は、この程度じゃ折れない。抜かされたって、何度だって食らいついていくだけだ。

『今、二人の王者が並んでゴールイン！ どちらが有利か、全くここからではわかりません！ 3着は3バ身ほど離れてリボンマンボ、4着に入ったのはミントドロップ、5着はタイムティッキングとなったいます。写真判定の結果が出るまで、しばらくお待ちください』

ゴール板を駆け抜けてもしばらく止まらず、そのまま走り続ける。フジキセキ先輩は全てを出し切ったのかフラフラとしていたが、それ

でも膝は折らず掲示板を眺めている。

掲示板には、写真の文字が点灯している。落ち着かなくて、掲示板をチラチラ見ながら走り続けていたが、第2コーナーを回ったあたりで係員さんが出てきて止められてしまい、仕方なく引き返す。

『ブラックプロテウスもフジキセキも、よく頑張りました。どちらが勝者でもおかしくない、そんな戦いでした！ 果たして勝利の女神のキスを得るのはどちらか！』

そわそわとしながら、じつと掲示板を見つめる。他の娘たちも掲示板を見ていて、ターフには不気味なほどの静寂が訪れている。

5分、10分だろうか。長い長い時間、判定の結果を待つ。会場は静寂に包まれていて、私とフジキセキ先輩、どちらが勝ったのかを見守っている。

勝ち負けが付くとしたら、踏み込みのタイミングだとか、身体の位置だとか、そんな些細な差で決まるだろう。私も、勝てたという確信は持てない。フジキセキ先輩も同じようで、肩で息をしながらただただじつと掲示板を見つめている。

『出ました！ 皐月賞トライアル、報知杯弥生賞。無敗のジュニア王者同士の大激突、その結果は——』

写真の文字が消え、1着の枠に5番、2着の枠に6番が表示される。負けてしまったか、と思って天を仰ぐと、会場から大きな歓声が聞こえてくる。

『——同着！ 同着です！ 無敗のジュニア王者同士の決戦はクラシック第1戦、皐月賞に持ち越された！』

その声に掲示板を見直すと、着差表示のところには『同着』の2文字が点灯していた。

同着。スペ先輩とエルコンドルパサー先輩の日本ダービーの時のように、1cmの差もなく写真判定でも判断できない時にされるものだ。

呆然と、その結果を眺める。負けたと、そう思っていただけに、頭

では理解しているのに、心が追い付いてこない。

「——ふう。勝ったと思っただけだな。やっぱりキミは強いね、ブラックプロテウス」

「あ、はい……ありがとうございます。えっと、フジキセキ先輩も……おめでとうございます?」

こういう時なんて言えばいいのかわからない。ひとまず手を差し出されたので握り返し握手をする。

『王者同士握手を交わしています! 二人の無敗王者に万雷の拍手を! そして皐月賞での決着を期待しましょう!』

二人で少し笑いあった後、並んでターフを後にする。決着は1か月後、皐月賞で。そんな思いを込めて、二人でウイナーズサークルに立ちパフォーマンスを行った後、控室に戻る。

軽く二人センターでの立ち位置を確認しつつ、ライブ衣装に着替える。このへそ出しの衣装にも慣れたものだ……

「んっ、あれ……ちよっときつい……?」

胸周りが少しきつくって衣装の担当さんを捕まえて手直ししてもらおう。そろそろまた替え時だろうか。後で申請しておこう。

軽く手直ししてもらってから衣装を確かめ、ライブに向かう。ライブではフジキセキ先輩のファンサービスに付いていけず、ダンス中に抱き寄せられたりして翻弄されてしまった。

ファンの人たちは喜んでいたけど、身体中燃え上がるくらいに熱くて、ライブが終わると早々に逃げ出してしまったのだった。

激戦を終えた三週間後、3月の24日。今日はトレーナーさんと、先行ウマ娘相手のレース展開についての勉強をしていると、トレーナーさんのスマホが鳴った。

「悪い、テウス。仕事の電話だからちよっと出るわ」

「大丈夫ですよ。気にせず出てください」

ホワイトボードに書かれていることをまとめつつ、会話を盗み聞きする。『屈腱炎』だとか『復帰には一年以上かかる』だとか、何だか物

騒な会話が聞こえてきて、ちよつと気が気じゃない。

「……テウス。落ち着いて聞いてくれ」

「え、どうしたんですか急に……」

トレーナーさんが真剣な顔になってこちらを向いてくる。かなり真剣なその眼差しに背筋がピンと伸びる。

「フジキセキなんだが……左足屈腱炎、だそうだ。復帰には一年以上、クラシックは絶望的だそうだ」

その言葉を聞いて、手に持っていたシャープペンシルを取り落してしまうのだった。

第三十一話 新たな星たち

落としてしまったシャープペンシルを拾うこともなく、トレーナーさんに詰め寄る。

「フジキセキ先輩が屈腱炎って……本当なんですか！ 何かの間違いじゃないんですか？」

「病院で精密検査した結果だ。まず間違いない。トレーニング中の発覚だったから他に怪我は無かったのが不幸中の幸いだが……」

至近距離で問いただすとちよつと困ったように答えてくれる。

屈腱炎は骨折のようにいきなり走れなくなるような怪我ではない。転倒の可能性は少ないものの、それに反して完治は非常に難しく、患部の強度が元に戻ることは稀であることから、ウマ娘にとつては致命的であり、？靭帯炎と並んでウマ娘のガンだとか、不治の病だとか呼ばれるものである。

原因はいまだ不明。継続的、反復的な運動負荷によつて起こるらしいと推察されているが、世界中のお医者さんたちが長年研究をしても詳しくわかっていない。

「そんな、レースの時はそんな感じはなかったのに。もう、治らないん、ですか……？」

「いや、フジキセキのは発見も早くて軽症だったそうだから治りはするだろう。治りはするが、クラシック中の復帰は難しいだろうな。早くて一年はかかると思うぞ」

一年。屈腱炎からの復帰としては平均的な期間とは聞く。だけど、この大事な時期に一年の戦線離脱は大きすぎる。

ただでさえウマ娘の競技人生は短い。本格化を迎えてから三年程度でウマ娘は緩やかにだが衰えていつてしまう。ネイチャ先輩のように長い間能力を維持して走れるウマ娘も存在するが、大体は四年程走ったら第一線を退くウマ娘が多い。

そんなウマ娘にとつてクラシック時期と言うのは最も輝ける時期だと言つてもいいだろう。その期間を丸々怪我で潰してしまうというのは……どれだけ辛いのか、私には想像もつかないほどだ。

「と、とりあえずお見舞い行つてきます！ 多分いつもの病院ですよ
ね!？」

「落ち着け。軽症で入院はしないそうだから戻つてくるまで待つて
ろ。落ち着いたらおハナさんに俺から詳しく話聞いておくから。ほ
ら、今日は終わりだ。もう集中できないだろうしな……飯食べるなり
風呂入るなりして頭落ち着かせて来い」

掛かり気味に飛び出そうとした私を引き留めて落ち着かせてから、
トレーナーさんはミーティング終了を告げた。この状態では集中で
きないだろうしまあ仕方がない。

「……とりあえずお風呂入つて来ます。あ、フジキセキ先輩に好みの
お菓子聞いておいてくださいね!」

「おう、行つてこい。菓子の好みは……まあ、一応聞いといてやるか
ら」

落としたシャープペンシルを拾つてから部室を後にする。トレセ
ン学園は今日丁度春休みに入って、実家に帰省したような娘も居て少
し人は少ない。

スピカの先輩たちもそれぞれお買い物に行つたり、ご飯を食べに
行つたり、鯛を釣りに行つたりしている。

お風呂に入ろうかと思つたけど、今日はコースも空いているし、折
角だから連絡があるまで何処かで走つていようかな……？

今日走る予定はなかったのでジャージを持ってきていない。一度
寮に戻つて取つてこよう。

学園から外に出て寮へ戻ろうとしていると、校門の前に見知らぬウ
マ娘が二人立っているのに気付いた。

私よりちよつと背が高いくらいの、流星が特徴的な鹿毛のウマ娘
と、ちよつと背が低いくらいの栗毛のウマ娘。仲が良さそうに話しつ
つ誰かを待っているようだ。

「テイオーさんとマックイーンさん、出てくるかな？ ちよつと遅く
なつちやつたけど……」

「きつと大丈夫だよキタちゃん。普通に授業してたらそろそろ終わる頃だと思うし……」

テイオー先輩とマックイーン先輩の知り合いだろうか。学園で見た覚えはないんだけど……制服を着ているわけでもないし部外者ではあると思うんだけど、困ってるみたいだし声を掛けてみようかな。「あの、すみません。トウカイテイオー先輩とメジロマックイーン先輩なら二人でお買い物に行きましたよ。今日は終業式で早終わりだったので」

「ええっ!? そんなあ……入れ違いになっちゃったなんて……」

「そ、そうですね。私たちも早く終わってるんですから、マックイーンさんたちも早く終わってますよね……」

既に学園には居ないと言うことを伝えると二人ともしょんぼりしてしまった。何だか申し訳ないことをしてしまったような気がしちやうな……

「ええつと……戻ってくるまで中で待っていますか？ 食堂辺りならきつと大丈夫だと思いますし。外は寒いですし」

三月ももう末だとは言え、まだまだ肌寒い時期だ。この時期に長時間外で待たせてしまうのはちよつと可哀想だろう。

駿川さんかルドルフ会長に相談すれば悪いようにはされないだろうし、今後トレセン学園に入るかもしれない娘たちを案内してあげるのもいいだろう。

「え、いいんですか？ じゃあお願いします！」

「いいのかなあ……？」

「多分大丈夫だと思いますけど……ちよつと聞いてみますね」

断りを入れてから駿川さんに電話をして見る。事情を説明すると特別に許可を頂けた。食堂にいれば後で許可証を持ってきてくれるらしい。

よし、とりあえず後はテイオー先輩たちに連絡しておけば大丈夫だろう。簡単にLAINメッセージを送っておく。暫くしたら戻ってきてくれるだろう。

「大丈夫だそうですね。私はブラックプロテウスです。えつと、貴方

たちは……」

食堂に向かいつつもそういうえば名前を聞いていなかった事を思い出す。テイオー先輩とマックイーン先輩の知り合いらしいし、メジロ家の誰かだろうか？

「キタサンブラックです！ 四月からトレセン学園に入りますっ！」

「同じく、サトノダイヤモンドです。四月からよろしくおねがいします、ブラックプロテウスさん」

キタサンブラックさんは元気いっぱい、サトノダイヤモンドさんは丁寧に挨拶してくる。

そんな風に暫く会話をしつつ、食堂へ向かった。何か忘れてるような気もしたけれど……気のせいかな？

食堂に着き、辺りを見回す。いつもと比べて大分人が少ないが、いつも通りオグリキャップ先輩は山盛りのご飯を食べている。

私もちよつとお腹空いてきちやったかも……いや、流石に後輩の前でがつつくわけにはいかない。彼女たちはまだ学園生ではないからご飯は食べれないし、我慢しよう。

「やっぱりトレセン学園の食堂は広いですね！ ダイヤちゃんのおうちの食堂より広いかも！」

「流石に学校の食堂には及ばないよ……」

楽しそうにはしゃいでいるキタサンブラックさんにサトノダイヤモンドさんと一緒に苦笑いする。やっぱりサトノダイヤモンドさんは結構なお家の出身のようだ。サトノ家くらいなら流石に私だって聞いたことあるし、分かっていたけど。

でも別にお嬢様だからと言ってどうということもない。トレセン学園に通ってる娘たちは接しやすい娘が多くて、トレーニングと走ることばかりで友達を作った私でも問題なく過ごせるくらいには、優しい娘が多い。

サトノダイヤモンドさんも穏やかで優しい娘だという感じがする。こんな娘たちが後輩になったら多分私思いつきり可愛がるだろう。

お買い物に連れて行ってお人形さんみたいなお洋服着せたいな……

「あの、先輩？　ちよつと目が怖いんですけど……」

「あ、ごめんなさい。お人形さんみたいな服着せたいなあと思ってました」

「先輩？」

「ですよね！　ダイヤちゃんにはそういう服絶対似合いますよね！」

「キタちゃん……？　キタちゃんは私がそういう服着てるところも見たことあるよね？」

キタサンブラックさんと一緒にサトノダイヤモンドさんに着せたい服を話し合う。

1時間ほど話し合つて、結果として私はゴスロリ、キタちゃんは萌え袖で落ち着いた。ダイヤちゃんは30分くらいしたときから真っ赤になってテーブルに突つ伏している。

『もう許してえ……』とか言っていた気もするけど、つい話に熱中してしまっていた。

「貴方たち、何をなさっているんですの……サトノダイヤモンドさんが困っているじゃありませんか」

聞き覚えのある声が後ろからして振り返る。紙袋を片手に持っているマックイーン先輩とはちみー固め濃いめ多めを吸っているティオー先輩が居た。

紙袋に有名な和菓子屋さんの名前が書かれていることは……見なかったことにしておこう。

「キタちゃん久しぶりー！　しばらく見ないうちにおつきくなったねえ！　身長抜かれちゃったよー！」

「ティオーさん！　えへへ、勉強大変でレース観戦行けなくて……」

「ううう、マックイーンさあん……」

「よしよし、こわーい先輩にいじめられて怖かったですわね……」

キタちゃんがティオー先輩に、ダイヤちゃんがマックイーン先輩に甘えに行く。

いいなあ……私もスズカさんに甘えに行こうかな……確か学園外

周を左回りで走っていたはずだし、後を追いかけてみようか……

四人で何か話し合っているし、割り込むのも悪いのでこっそり抜け出して寮へ戻る。

二人は多分入学したらスピカに入るだろうし、もっと交流を深めておいた方が良いとは思うけれど、流石にあの仲良しさに割り込む自信はなかった。

そのまま寮に戻り、ジャージに着替える。今どあたりを走っているかはわからないけれど、寮の前で待っていればそのうち通りがかかるだろう。

こうしてスズカさんを待ち伏せし、こちらに戻ってきたタイミングで私も走りだして後をつけていった。

(甘えに行くってどうすればいいんだろう……)

(ウソでしょ……さっきからずっと無言でついてきてる……)

——こんな感じで、お互いにちよつとすれ違ってしまい、1時間ほど無言で走り続けるという光景が繰り返られることになったのだった。

第三十二話 決意、新たに

スズカさんに無言でついてくついてくした事件から少し時は流れて、今日は大阪杯。皐月賞を翌々週に控えているが、大切な先輩たちのレースの為チーム全員で観戦に来ている。

今日はスズカさんと、テイオー先輩が秋の天皇賞以来の対決をする。脚部不安で暫く休養していたテイオー先輩だが、調整を間に合わせて大阪杯に出てきた。

更にスカーレット先輩も大阪杯に出走しており、今回はこの三強の激突だ。

スカーレット先輩はこれまで一切連対を逃していない。今回もそうなるのか、はたまたその歴史に一つの傷跡が残るのか。

秋天ではスズカさんがぶつちぎりで勝ったが、今日のテイオー先輩もスカーレット先輩も絶好調だ。私はスズカさんが勝つと信じているが、レースはゲートが開いて、ゴール板を駆け抜けるまでどうなるかは分からない。

「テイオーさんのレースを現地で見るのは久しぶりです！ えへへ、楽しみだなー！」

本バ場に出走ウマ娘たちが入ってきたのを見て、新学期からチームに入る二人の後輩のうちの一人、キタサンブラックちゃんが楽しそうに跳ねている。

「キタちゃん、落ち着いて。レースが始まる前に疲れちゃうよ？ はい、お茶」

「ありがとダイヤちゃん！ やっぱりダイヤちゃんのお茶は美味しいね！」

もう一人の後輩、サトノダイヤモンドちゃんがキタちゃんに水筒からお茶を注いで渡している。

先日会ったこの二人は、まだ入学式を迎えても居ないのに入部届を持ってきて仮入部となっている。人数も増えてきて、トレーナーさんもそろそろサブトレーナーを迎えようかと話していた。

一人でこの人数を見ていくのは大変だろうし、早めに人を入れても

らえると良いと思うんだけど……まずゴルシ先輩に気に入られるというハードルを越えないといけないので、大分難しそうだ。

「テイオーなら大丈夫ですわ。先日私と走った時も絶好調でしたもの。あ、ダイヤさん。お茶もう一杯頂けます?」

ダイヤちゃんからもらったお茶を飲みながらマックイーン先輩が自信満々に胸を張る。数日前に2400mの併走をしたらしくて、仕上がりは万全なのを確認したそうだ。どうせなら私も誘ってほしかったな……

「前戦つたときから半年くれーか? 今回はどうなるんだろうなー。さて、焼きそば売ってくるぜ! ゲートインまでにはもどってくっから!」

「あ! ゴルシさん! 焼きそばもう一つ……いえ、五つ下さい!」

ゴルシ先輩はいつも通り焼きそばを売りに行っているし、スペ先輩はいつも通り焼きそばを山盛り食べている。私もちよっとお腹空いてきたし、後で分けてもらおう。

「つたく、スカーレットの奴、大丈夫かよ……見るからに気負ってるじゃねえか。おーい! スカーレット! 肩から力抜けえー!!」
「うっさいわねー! わかってるわよー!!」

ウオツカ先輩はスカーレット先輩を激励している。ライバルの激励にスカーレット先輩も大声で応えて、レース場のファンたちを大いに喜ばせている。

こういうファンサービスの形もあるんだな……私もスズカさんに声援を送ってみようか。

でも恥ずかしいし、とまごまごしているうちに、ファンファーレが鳴る。私にとっては阪神レース場の通常のG1ファンファーレを現地で聞くのが初めてだ。

私がターフに立ってあのファンファーレを聞けるのは来年以降になる。桜花賞に殴り込めば早めに聞けなくはないけれど、皐月賞に集中しないといけない。

フジキセキ先輩がいない皐月賞ではあるけれど、ジェニユイン先輩やタヤスツヨシ先輩は出てくる。マヤさんはデビューが遅かったの

で皐月賞には出てこないようだが……

『早春の阪神に最強を自負するウマ娘が集う！ 春の中・長距離三冠、第一弾、大阪杯！』

ファンファアレーが鳴り止み、出走するウマ娘たちがゲートに入っていく。自分が出走するわけでもないのに、気分が高揚してしまう。私も早く走りたい。あの強い先輩たちと肩を並べて、競い合いたいと、私の中の何かが囁いているようだ。

「テイオーさん！ がんばれー！ テイオーさんが一番速いですよー！」

キタちゃんがテイオー先輩に声援を送っている。大阪杯は正面スタンド前からの発走なので、声が届いたのかテイオー先輩は軽く手を振っている。でも……

「テイオーさんよりスズカさんの方が速いですよ？」

秋天でだってスズカさんの方が速かった。最速のウマ娘はサイレンススズカ、彼女唯一人だ。

「いーえ！ テイオーさんの方が強いです！ 無敵の帝王ですから！」

「スズカさんの方が速いです。最速の逃亡者ですから」「ぐぬぬぬ……」

二人で額を突き合わせて唸る。絶対に譲れない戦いが此処にはある……！

「何やってんだお前ら……もうスタートしてるぞ？」

「えっ？ あ、ああっ!!？」

「テイオーさんのスタート見逃しちゃった!!？」

トレーナーさんの呆れたような声に私もキタちゃんも正気に戻り、柵に噛り付くようにしてレースを見る。

スタート後二十秒くらいを見逃してしまった。大阪杯は二分以内で終わるレースだ。そう思うと結構な時間見逃してしまっている。

『第2コーナーを回って先頭はやはりこの娘、サイレンススズカ！』

既に後続に3バ身、4バ身以上差をつけている！ 二番手にダイワスカレット。トウカイテイオーは中団で様子を窺っている！』

この阪神レース場2000mでのレース展開は、向こう正面からは逃げ馬の動向次第と言われている。

そして今日、ハナを走る逃げウマ娘は異次元の逃亡者・サイレンススズカだ。

『圧倒的ハイペースで進んでいる、サイレンススズカ！ 1000mを通過して通過タイム、57秒フラット！』

当然、このようなハイペースでレースは展開されていく。

向こう正面の直線も終わりを迎えて、スズカ先輩がいつも通りの大逃げ。スカレット先輩も何とか食らいついている。テイオー先輩は少しずつじりじりと距離を詰めようと体勢を整えている。

だが、その背は捕まえられない。最終コーナーを越えてからが、サイレンススズカの本領。

『さあ、いよいよ直線だ！ これから坂！ 仁川の舞台はこれから坂がある！ だが、スズカだスズカだ！ サイレンススズカだ！ 無敵の帝王も緋色の女王もまだ後ろー！』

大体2バ身ほどにまで迫られたその距離を、逃げて差す走り半分、そして1バ身と引き離していく。

「スズカさーん!!! 頑張ってくださいーい!!!」

「まけるなー！ ティオーさあん!!!」

「スカレットオー！ 負けんなよ!!!」

ウオツカ先輩とキタちゃん、三人で並んで声援を送る。既にホームストレートに入っているのもあって、周りも凄い歓声だけれど、それに負けないくらい大きな声で応援する。

その声が聞こえてか、三人ともグンと速度が上がり、仁川の坂を駆け上っていく。

『残り200！ サイレンススズカ先頭！ 差は——縮まらない！』

3バ身の差を保って今ゴール！ サイレンススズカ！ 最初から最後まで先頭を一度も明け渡すことなく、春の中距離最強ウマ娘の称号を見事手にしました！ 2着はダイワスカレット、3着はトウカイテイオー！ チームスピカ、3着までを独占だ！』

「やったああああ!!!」

「ぐえっ!?!」

両隣にいたウオツカ先輩とキタちゃん、の腰に手を回して持ち上げ、そのままブンブン回る。やっぱリスズカさんが最速だ!

「やっぱリスズカさんが一番速いんですよ! やったー!!」

「ああああああ、降ろしてくださいプロテウスせんぱあああ……」

「うぷっ、ちよ、やめっ……」

今から宝塚記念が楽しみだ。この最速のウマ娘に、私は勝ちたい。その為にはもつとトレーニングしないと。人の何倍、何十倍でも努力しないと!

「テウス……そろそろ降ろしてやれ。二人の顔色やばいぞ?」

「え? あっ、ぐめんなさい!」

トレーナーさんの声に正気に戻り、両脇に捕まえていた二人を解放する。最近是我慢できていたのでちよつと油断してしまった。

その後、ウイニングライブが終わるまで私の側には誰も近寄ってくれないのであった。寂しい……

大阪杯が終わった翌日。まだ春休み中で寮にはたぐさんの娘が居る。そんな中私は、寮長室の前に和菓子を持って佇んでいた。

何て声を掛ければいいんだろう。私は生まれてこの方、走れなくなるような怪我を負ったことがない。

それは私の事情にも深く関わることで、親にすら話していない、墓まで持っていくと決めている秘め事が原因だ。

そんな私が、彼女にどんな声を掛けてあげられるのだろう。すぐに走れるようになるのか、早く良くなってくださいとか。どれも無責任に思えて仕方がない。

そんなことを思っていると、目の前の扉がゆっくり開いた。

「やあ、ポニーちゃん。そんなところで長々と何をしているんだい?

何か私に用事かな?」

左足にギプスを付け、簡易的な松葉杖を突いたフジキセキ先輩が、私を出迎えてくれた。

「あ、えっと、これお見舞いで……って、あわわ、ごめんなさい。安静にしないでいいけないのに動かさせちゃって！」

「ふふ、問題ないよ。と言つても立ち話をする心配させてしまうだろうし。中へどうぞ」

「あ、お邪魔します……」

フジキセキ先輩は寮長だからか一人部屋だ。その分ちよつと他のウマ娘達よりお部屋は狭いのだが、それほど気にならないだろう。

綺麗に整理整頓されていて、これぞ出来る女って感じがする。私ももうちよつとお部屋片づけよう、刀の手入れ道具とかで散らかってるし……

「それで、何か用かな？ 寮長業務に関わることだったら、代理を暫くクリークに頼んであるから、彼女の方に言つて貰えると助かるな」

「あ、いえ……その、お見舞いに來ただけで。それ以上の用事があつた、と言うわけでは……」

つい、言葉に詰まつてしまう。それほどひどくはないとは聞いていたのだが、ギプスのせいか思ったより重傷に見える。

「気になるかい？ まあ、それはそうだろうね。もし自分のせいだと気に病んでいたら、先に言つておくけれどそれはお門違いと言うものだよ」

そう言つて彼女は苦笑いする。大体見抜かれてしまつてるような、そんな気がする。

「レースの後は特に問題なかつたんだよ。トレーニング中に発症したから、極論で言えば私の管理不足さ」

「それは……」

どうしても言葉が出てこない。此処で自分のせいだと主張するのは、彼女に対する侮辱だと。そう思つてしまったから。

「それに。君との決着がまだついていないからね。クラシックでは走れないが、その後必ず私はターフに戻ってくるよ。そこで君と決着をつける」

そうやって、フジキセキ先輩はこちらに向き直る。

「それまでクラシックの冠は、君に預けておく。後で取りに行くからね」

「……いいんですか？ 返す気なんて、毛頭ないですよ」

こちらにウインクして見せてきた彼女にそう返す。この強いウマ娘に、弱気なところは見せられない。だって、この強いウマ娘は私のライバルなのだから。

「それくらいの意気じゃないとね。さて、君の悩みは解決したかな？」
「はい。ありがとうございます。そして、現地じゃなくても構いませんから見てください。貴女のライバルに、どれだけの力があるのかを。貴女と競い合ったウマ娘が、どれだけ強いウマ娘なのかを。皐月賞で、ダービーで、そして、菊花賞で。それを証明して見せますから」

じっと、彼女の瞳を見つめる。その瞳には確かな熱があって、彼女はまだ諦めていないのだとわかる。

もう二度と元の走りを出来るかわからない。それが屈腱炎という不治の病だ。

医療が進歩して、幹細胞移植などの技術で今まで以上の回復が見込まれているといっても、限りがある。100%元に戻るかと聞かれれば、首を縦には振れないだろう。

それでも、目の前の強いウマ娘は諦めていないんだ。だったら、私は彼女が目指す道標として光り輝こう。

彼女が道に迷わないように。彼女がもし挫けたときに、闇の中から照らし出すために。

彼女に背を向ける。きつと、これ以上の言葉は要らない。後は、走りで見せればいいのだから。

「かならず、見に行くよ。ブラックプロテウス。私の夢を——君に、託す」

掛けられたその声を背負い、私はそのまま、彼女の部屋を後にした。

第三十三話 最も『はやい』ウマ娘

今日は俺の担当ウマ娘、ブラックプロテウスの晴れ舞台。クラシック初戦、皐月賞。18人フルゲートが揃った今日のレースは、天候晴れの稍重で行われる。

フジキセキが屈腱炎で離脱した今、主役はブラックプロテウスただ一人と言う前評判だ。ジェニユインやタヤスツヨシなどの有力バタチも存在するが、鼻目抜きにしてもテウスが頭一つ抜けているだろう。

だが、今日のテウスの枠順は8枠18番。つまり大外だ。逃げとしては相当不利な位置であり、さらには全員からマークされているであろうことも考えれば相当な逆風だ。

『最後にパドックに出てきたのはブラックプロテウス。今日の1番人氣です!』

テウスがパドックに出て来て、青色のストールを投げ捨てると今日一番の歓声が響き渡る。

真つ黒の着物に、真つ黒な袴。俺がプレゼントした耳カバーは白いが、それ以外はテウスの髪色も相まって黒一色である。

何で黒にしたのかと聞いたら『汚れが目立たなそうだったので』という返事が返ってきてガクつと来てしまった。まあ、このくらいの年齢の娘だったらおかしくない判断基準ではあると思うが……

好きな色を聞いてみたら青だって言っていたし、判断基準がよくわからない娘だ。ストールは好きな色で選んでるのにな……

『今日も仕上がりは万全のようですね。この娘の逃げ足が今日も発揮されるのか、楽しみです』

パドックで手を振り、掛けられた声に応える姿を見る。今日はレース前も珍しく集中している様子だったから控室ではそつとしておいたが、今見る感じだといつも通りに感じる。

先日フジキセキと話したらしく、その日からあんまり乗り気じゃな

かったレースの勉強にも真剣に取り組むようになった。依然として走り出すと頭から吹き飛ぶのかあまり効果はないが、その姿勢は褒められるべきものだ。

今日その努力の結果が出るだろう。冷静なレース運びさえできれば、テウスに負ける要素はない。

パドックを終えて本バ場入場、今日の中山レース場は超満員。オグリキャップの時の17万人には及ばないが、それでも16万人は下らない、ホープフルの時と同じくらいの人たちがこの中山に詰め掛けている。

『さあ！ 最後に入場してきました本日の主役、1番人気ブラックプロテウス！ 観客席に手を振りながら元気よく出てきました！』

テウスがターフに出てくると一際大きな歓声がレース場に響きわたる。いつものテウスならそれで掛かってしまいそうなものだが、今日はとても落ち着いた様子でターフを駆けていく。

「テウスちゃん、落ち着いてますね。これなら問題なさそうです」

いつも通り俺の隣に陣取っているスズカがテウスの様子を見て満足そうに頷いている。スズカはどこかテウスのことを弟子か何かのように思っている所があつて、レースの度にアドバイスをしたりダメ出しをしたりと、俺以上にトレーナーっぽいことをしている。

逃げのスペシャリストではあるし、任せてしまってもいいんだけど……俺の存在理由が危ぶまれるしな……

『最もはやいウマ娘が勝つという皐月賞！ 成長を見せつけるのは誰だ！』

中山レース場にファンファーレが鳴り響き、ゲート前に集まっていたウマ娘達が次々とゲートに入っていく。

『3番人気はこの娘です、ジェニユイン。前走の皐月賞トライアル、若葉ステークスでは降着による影響で1着となったウマ娘ですが、実力は十分です』

『注目の2番人気はリボンマンボ。打倒ブラックプロテウスに燃えるリボン一門のウマ娘。果たして今日こそ追い抜くことはできるのか？』

今日はいつもの面子とそうでない面子が別れている。弥生賞で戦った面子の半数以上が皐月賞を回避した。重バ場にしてはハイペースとなったレースで消耗が激しかったのもあるだろうが、テウスとの対決を避けたというのも大きいだろう。

『本日の主役はこのウマ娘を置いて他にいない！　ここまで無敗、ジュニア王者ブラックプロテウス！　前走弥生賞では素晴らしい激闘を見せてくれました！』

一番最後に大外枠のテウスが入り、全てのウマ娘達のゲート入りが完了する。

『クラシック初戦、皐月賞！　今——スタートしました！』

一瞬の静寂の後、ゲートが開きウマ娘達が一斉にスタートを切る。それと同時にレース場には歓声と拍手が鳴り渡り、ウマ娘達を応援する声が響く。

『おおっと、先頭に出たのは2枠3番カジュアルスナップ！　ブラックプロテウス、芙蓉ステークス以来、開幕のハナを明け渡して2位追走！　後ろにびったりついてスタート直後の中山の急坂を登っていく！』

最初からフルスロットル、ペースを無視した破滅的な逃げを打ってきた相手に対して、風除けにするかのように後ろについて追走している。無理には追い抜かない、と言うことだろうか。

もしペースが持つのであれば逃げ切られてしまうかもしれないが、流石にここまでの大逃げを打ってきて最後まで逃げ切れるのは今隣サイレンススズカにいるウマ娘とかのほんの一握りだけだろう。

『ハナを奪っていったのはカジュアルスナップ！　その後すぐ後ろ、ブラックプロテウス。少し離れてそれを追走するのはジェニユインとリボンマンボ。後ろ並んでアストレアノーチェが続きます』

坂を登り切って2位でコーナーに入っていく。坂で減速した後のコーナーだというのに前の2人は結構な速さで曲がっていく。

というより、テウスに追いつかれまいとカジュアルスナップがペー
スを落とさない。多少ブレながらもコーナーを加速しながら曲がつ
ていく。

稍重なバ場のせいも少し土が飛んできているのだが、テウスはそんな
こと気にならないと言わんばかりにぴったり後ろについて回って
いく。

と言うか実際顔に少し土が掛かったりしているようだが……まあ、
そんなことで怯むようなウマ娘じゃない。

『向こう正面に入って先頭はカジュアルスナップ。息を入れることな
くハナを進みます。少し掛かり気味か。ブラックプロテウスすぐ後
ろ、少し土を被っています。3バ身、4バ
身離れてリボンマンボ。その横並んでジェニユイン』

向こう正面に入っていく、先行集団が息を入れ始めるようなタイミ
ングだ。それでもカジュアルスナップは息を入れることなく進んで
いく。

いや……これは、テウスの奴、息を入れさせない気だな。逃げウマ
娘と言うのはツインターボなどの一部の例外を除いて基本何処かで
息を入れる。

それをさせないということは自分も息を入れないということだが、
圧倒的なスタミナ差で押し切るパワープレイが出来るテウスだから
こそこの戦法だ。

これが彼女なりに考えた逃げウマ娘対策であり、サイレンススズカ
対策、と言うことだろう。

スズカもそれに気付いているのか、じつとテウスの走りを眺めてい
る。スズカは後ろから何をされても気にせず自分のペースで突っ走
るウマ娘だが、先頭を脅かされれば流石にペースを乱されかねない。

『さあ第3コーナー……おっと、カジュアルスナップ、流石にオーバー
スピードだったか!? コーナーで大きく膨らんでしまった! その
内側をブラックプロテウス切り込んでハナを奪った! 他の娘たち
も次々と抜かしていくぞ!』

息を入れることを許されず、トップスピードのまま第3コーナーに

突っ込まされたカジユアルスナツプは大きく膨らんでしまい、待つてましたと言わんばかりにテウスが開いた内側を駆け抜けていく。

「スズカ。スズカならあれ、どう対応する?」

ふと気になって横にいるスズカに、そんなことを聞いていた。スズカは少し考えたような素振りを見せている。

「そうですね……私なら直線で一度、一気に引き離してコーナーで息を入れます。テウスちゃんも速いですけど、直線なら私の方が速いので。コーナーで多分追い付かれちゃいますけど、最後の直線に入るまで先頭を守れば勝てると思います」

「確かに、スズカなら可能かもな……テウスが今のままのスピードなら、だけどな。これはうかうかしてはいられないな?」

「ええ、そうですね。ふふ、走りたくなってきた」

少しスズカがワクワクとした様子を見せる。強敵とのレースを楽しみにしているのか、それともただ走りただけなのか。後者のような気がするな……

『ブラックプロテウス先頭! 後続を3バ身、4バ身と引き離していく! これは文句なし! 圧巻のレース運びでブラックプロテウス、今ゴールイン! 他のウマ娘達をねじ伏せレースを制した!』

「よしっ!」

テウスが無事先頭でゴールしたのを確認して小さくガッツポーズをする。

チームメンバーたちとハイタッチをしたり抱きしめあったり、金色の槍を振り回したりと喜びを分かち合っているようだ。とりあえずゴルシはその槍を置いておきなさい。何処から持ってきたんだ。

『9戦9勝、無敗で皐月賞制覇! ブラックプロテウス、まず一冠!』
レース場は大歓声に包まれ、テウスがそれに応えるように走りながら手を振る。いつものように息を切らした様子はなく、まだまだ走り足りないと言わんばかりだ。

『おっとブラックプロテウス、観客席の近くまで来て立ち止まりました。何かあったのか?』

暫く走っていたと思うと急に観客席の近く、真ん中付近で立ち止ま

る。少しためらうような、恥ずかしがるような仕草をしながら、何かをしようとしているようだ。

何をするのかと思いきつと見ていると、ゆっくり右の拳を掲げ、人差し指を一本、天に突きたてた。

『おおっと、これは!? ブラックプロテウス、指を一本天に掲げました！ シンボリドルフが、そしてトウカイテイオーが行ったパフォーマンスと同じ！ 最もはやいウマ娘、ブラックプロテウス！ 次の舞台は府中！ 会場中に響き渡るテウスコールに見送られながら、ターフを後にします！』

そのパフォーマンスに会場は大いに沸き、拍手とコールに見送られながら地下バ道の方に引き返していく。

「ふっふーん、ボクが教えたパフォーマンス、皆大喜びみたいだね！」
「テイオー、やっぱり貴女でしたの……これでもし三冠逃したりでもしたら大恥ですわよ?」

「ダイジョーブダイジョーブ！ テウスならラクショーだって！」

背後ではテイオーとマックイーンが楽しそうに話している。やはりテイオーの差し金だったようだ。まあ、テウスが自らあんなパフォーマンスするわけないしな……

実際、2400や3000であれば現状スズカと走っても勝率は6割を上回っているほどだ。距離が長くなればなるほどスタミナに長けるテウスにとっては有利に働く。

ただ、次の日本ダービーは最も『運のある』ウマ娘が勝つと言われるほどのレースだ。テウスは若干運が悪いところがあるし、少し不安なところがある。

どんなことがあっても無傷で帰ってくるあたり悪運が強い、と言えはそうなのかもしれないが……悪運も運と信じよう。

少し不安要素を感じながらも、次のダービーに向けて思いを寄せた。

『輝くウマ娘達のステージ、ウイニングライブ！ センターはここま

で無敗で勝ち上がっているブラックプロテウスです！ トウカイテイオーが、ミホノブルボンが為しえなかつた三冠に挑む彼女に期待が高まります！』

日が沈み、夜が深まった中、中山レース場の野外ステージに、テウスが好きだと言っていた色、青のサイリウムが揺れる。

テウスのイメージカラーは黒なのだが、サイリウムは青が良いとインタビューで言った結果、テウスのファンたちは青のサイリウムを振ってくれるようになった。

黒いサイリウムがないことはないのだが、流石に一般的ではないし、無難な色に纏まったということもある。

ステージライトが点き、三人のウマ娘が並んで歩いてくる。

そして、クラシック三冠でのライブ曲『winning the soul』が流れ始める。それをセンターで担当ウマ娘が踊っているのを見るのは、チームスピカとしてはスペ、マックイーン、テイオー、ウオツカに続いている5人目だ。でも、何度聞いても誇らしいと思うとともに涙腺に来るものがある。

テウスはマイクパフォーマンスは控えめだが、その分手を振ったりなどのファンサービスが多い。リハーサル中にすっぽ抜けてマイクスタンドを客席の方に投げつけた時はどうなることかと思っただが、本番では大きなミスはしないので安心して見ていられる。

全てのウマ娘にとっての憧れだと、そう言えるウマ娘に。曲の締めを終わって拳を天に掲げたテウスに拍手を送りつつ、きつとそうなるウマ娘だと想いを馳せた。

第三十四話 淀に咲く祝福の蒼い薔薇

皐月賞が終わってしばらく経ち、久しぶりに学園外周を走ろうと準備をする。

久しぶりと言うのも、皐月賞が終わってから、テイオー先輩直伝のパフォーマンスのせいか休日のみならず平日まで記者さんが詰め掛けてまともに外で練習出来なかったからだ。

理事長やルドルフ会長達に何とか抑えてもらってはいたのだが、外に出ようものならすぐに捕まって最低でも十数分は拘束されてしまうので正直ストレスでどうにかなつてしまいそうだった。

見かねたマルゼン先輩が他の人たちも誘って一緒に併走してくれていなかったらそのうち爆発して記者さんを投げ飛ばしていただろう。

そろそろマルゼン先輩のお誕生日だし、その時にお礼でもしようと思つて、マルゼン先輩のタツちゃんに置いておけるようなグッズをこっそり見繕っている。

「あら、テウスさん。これからサトノさんと外周を走りに行くのですが、ご一緒にいかがですか？」

「いいんですか？ ならご一緒にさせていただきますね」

部室前で走る前の柔軟をしていると、ジャージを着たマックイーン先輩からのお誘いが掛かった。断る理由がないのでお言葉に甘えることにする。

マックイーン先輩の？ 靱帯炎はほぼ完治しており、次走を天皇賞（秋）トライアル、京都大賞典に向けてのトレーニングを開始している。

現状、正直臆目に見たとしても全盛期には程遠い。それでもきつとマックイーン先輩なら十分仕上げてくるだろう。その時期に私が走るとしたら神戸新聞杯になるだろうが、出来れば京都大賞典も走り

たいところである。

ステイヤーの私には2400mからの方が走りやすいし、長い方が好きだ。出来ることなら2400m以上のレースには片っ端から出走してみたいと思っている。

トレーナーさんにも『まあお前ならそう言うだろうな』と呆れることもなく言われたので、そろそろ諦めてくれたようだ。

だが、青葉賞に関しては今回は仕方なく見送ることにした。不調とかジंकウス云々のお話ではなく、完全にプライベートな家庭的事情の為なので、理由は割愛するが。

ダイヤちゃんと合流して、学園の周りを走り始める。久々の外周と言うこともあってちよつとテンションが上がってしまうが、マックイーン先輩に無理をさせるわけにもいかないのです、大人しく二人の後ろからついていく。

「そうだ、サトノさん、テウスさん。明日何か御用事ございます？ なければ明日メジロの皆で天皇賞（春）を見に行くのですが、ご一緒しませんか？」

少し息を入れる為に休憩していると、マックイーン先輩からそんな提案をされる。

天皇賞（春）はシニア三冠戦線の二戦目。秋も含めた二つの天皇賞は日本国内にあるレースにおいて最も長い歴史と伝統を持ち、制度改革や競走条件の変更を経ても最重要とされているレースと言っている。

名家はその盾の榮譽を勝ち取るために懸けているところが多く、メジロ家などはその最たるものである。

「えっと、私は大丈夫です。ダイヤちゃんは？」

「私ももちろん一緒にします！」

私もダイヤちゃんも大丈夫なようで、そのまま集合時間などの打ち合わせをしたのだが……自家用ジェットがどうか新幹線一車両貸し切りとか不穏な話題がされていたのは聞かなかったことにしたい。

というか貸し切りとか数か月前から申し込まないといけないはず

だが……メジロ家とサトノ家に常識は通用しないということなのだろうか？

でも専用の交通手段を使うのには賛成だ。フジキセキ先輩のライバルと言うこともあってか無名だった私もかなり注目されるようになってしまったし、マツクイーン先輩、ダイヤちゃんなんて送迎なしで迂闊に外を歩くような立場じゃない。

そんなメンバーで公共交通機関を使うなら変装しないとまともに歩けないだろう。

ひとまず交通手段に関してはお任せすることにした。代案に関しても私にはトレーナーさんに車を出してもらおうくらいしか案を出せないし、流石にそれはトレーナーさんに迷惑だろうし。

貸し切りにされた新幹線のグリーン車の中で落ち着かない時間を過ごした後に、慣れ親しんだ京都レース場に着いた。

グリーン車に乗ったのも初めてだし、一車両貸し切りなんて小学校の時の修学旅行以来だ。

そわそわしていた私をアルダン先輩やライアン先輩が気にかけてくれていたので多少は気持ちが楽だったが、帰りもこれに乗るのかと思うと少し気が遠くなる。

ダイヤちゃんは慣れてるようになっていた辺り、やっぱりお嬢さまなんだなあと勝手に育ちの違いを見せつけられた気持ちになってしまった。

「そわそわしてたみたいだけど大丈夫？ 気分でも悪かった？」

「あ、いいえ、落ち着かなかっただけなので……ご心配ありがとうございます。ドーベル先輩」

心配してくれたドーベル先輩にお礼を言いつつ、関係者席の方へ向かう。トレセン学園生は一般客とは別の入口から入れるし、専用の席を使うこともできるのでとても便利だ。ちよつとずるい気もするけど、混乱を避けるためには仕方ない。

『唯一無二、一帖の盾をかけた熱き戦い！ 最長距離GI天皇賞（春）』

！ バ場状態は重での発表となりました』

曇り空の京都レース場にファンファーレが鳴り響き、ウマ娘達がゲートに入っていく。

『18人のゲートインが終わりました。今スタートです！』

『18人のウマ娘がゲートから一斉にスタートしました。先頭争いは16番トランペットリズム、11番サドンアタック、13番シャバランケが行きました。重バ場と言うこともあってかスローペースで進んでいきます。先行集団のあたり、ライスシャワーが居ます。不気味な黒い影！』

ウマ娘達がゲートから飛び出し、最初のコーナーを回っていく。先頭の娘が3バ身ほどリードしているがそれ以外の娘は団子状態でホームストレッチに入ってくる。

会場は大きな歓声に包まれて、観客たちは口々に自らが応援するウマ娘の名前を叫んでいる。

『ライスギーン！ 頑張ってくださいましー!!』

隣にいたマックイーン先輩がいきなり声を張り上げ、ついビクツとしてしまう。

集団の外側に位置する漆黒の影、ライスシャワー。今までのGI勝ち星は菊花賞、そしてこの天皇賞（春）と、3000m以上で輝く純然たるステイヤーだ。マックイーン先輩を倒した2年前の天皇賞（春）からスランプに陥ったのか、勝利から遠ざかってしまっている。

勝ったGIレースが誰かの記録が懸かったレースだったことから、もういろいろ批判がある娘ではあるけれど、私から言わせれば何を勝手に言っているのか、と言った感じである。

私たちウマ娘はその命と魂を燃やして走っている。どういふときに結果が出るか出ないかは三女神様のみぞ知るといった感じだ。時に運だつて関わってくるのだから。

それをどうのこうの言ってくるのは正直あまり面白くない。ましてやそれを悪役のようにまで言ってくるのは流石に違うと思う。

『トランペットリズムがまだ先頭。しかし殆ど差がなく後続も迫ってきます。まもなく半分の1600m。1600mを……1分41

秒から42秒台と言ったところ。このバ場コンディションではまずまずのペースと言ったところだ。』

ちよつと遅いかな？　と思つていたのだが、今日の重バ場だと普通らしい。今まで長距離レースを走ったことない弊害がこういうことに出て来てしまう。菊花賞は京都で3000mだし、このレース展開を参考にしたいところだ。

『第2コーナーを回つて場内大歓声！　行つた行つたライスシャワーだ！　漆黒の影が外から行く！　ライスシャワーが行く！　メジロマックイーンもミホノブルボンも客席から応援しています！』

向こう正面のあたりで小さな黒い影が外から上がっていく。つて、ミホノブルボン……？

実況さんがブルボン先輩のことを言及したのを聞いて、関係者用の客席を見渡すと少し離れたところに居てレースを見守るブルボン先輩の姿を見つけた。

祈るようにしてレースを見つめており、どうやらこちらには気づいていないようだ。

『ライスシャワー、京都の坂の上りで先頭に立つ勢い！　そのうち並んでトランペットリズム、すぐ後ろに11番サドンアタックと言つた形で進んでいきます』

淀の坂はゆつくり上つてゆつくり下るといのがセオリーだが、時折そのセオリーを崩していくウマ娘も居る。

今日のライスシャワー先輩も同じようなものだろう。

『第3コーナーで完全にライスシャワーが先頭に立つた！　ぐーつと13番シャバランケもあがつてくる。そしてアルベドベラドンナ、ルミナスエスクードも上がっていく。だが、ライスシャワー、ライスシャワーだ！　先頭で第4コーナーを回っていく！　やはりこのウマ娘は強いのか！』

『ライスシャワー先頭！　ライスシャワー先頭！　他の娘たちも詰めてくるがライスシャワー完全に先頭だ！　だが15番デユンナも2番手に上がってくる！』

最終直線に入つて、その小さな身体の何処にそんな力があるのかと

思う程の力強い走り、ライスシャワー先輩が内を駆け抜けていく。『ライスシャワーとデユンナ並んだ、並んだが、これはライスシャワーだ！ やったやったライスシャワー！ 淀に咲いたのは祝福の蒼い薔薇！ メジロマックイーンもミホノブルボンも喜んでいふことでしょう！』

二人並んでゴール板を駆け抜ける。私の目にはどちらが先かはわからなかったし、走った後ライスシャワー先輩はへろへろになっていたし、デユンナ先輩はガッツポーズをしていた。

それに掲示板だって写真の文字が輝いている。それでも実況の人からはライスシャワー先輩が優勢に見えたのだろう。

「テウスさん！ 行きますわよ！」

「え、どこへ……ま、待ってください!?!」

マックイーン先輩にもそれは同じだったようで、いきなりウイナーズサークルの方に駆けだして行ってしまう。ブルボン先輩もいつの間にか先を走っていて、ひとまず周りの先輩たちに挨拶してから後を追いかける。

ウイナーズサークルに辿り着いたとき、掲示板にはまだ写真の文字が輝いていた。ライスシャワー先輩とデユンナ先輩がそれを食い入るように見つめている。

『写真判定の結果が出ました！ 1着、3番ライスシャワー！ 2着15番デユンナ！』

『実に、実に2年、728日振りの勝利で奇跡の復活！ 青い薔薇が今ここに夢叶う！ 勝ち時計3:19.9!』

一瞬消灯した後、掲示板に数字が点灯する。それを見たデユンナ先輩は肩を落とし、ライスシャワー先輩は呆然とした様子で掲示板を見つめている。

「ライスさん!! やりましたわね！ おめでどう、本当におめでどうございますわ！」

「わわっ、マ、マックイーンさん!?!」

呆然としていたライスシャワー先輩を感極まったマックイーン先輩が飛びつくような勢いで抱きしめる。

「ライスさん。おめでとうございます。見事な走りでした」

「ブルボンさん……二人とも、ありがとうございます、ございますっ」

ブルボン先輩が穏やかな表情でライスシャワー先輩に拍手を送り、マックイーン先輩が離れた後に抱きしめる。

ライスシャワー先輩は嬉しそうに笑って、そして泣いていた。

『ウイナーズサークルで、メジロマックイーンとミホノブルボンの祝福の抱擁を受けています、ライスシャワー！ とても美しい光景です！』

会場は大歓声と、大きな拍手に包まれている。私も、そして一緒に戦った娘たちも、ライスシャワー先輩に拍手を送っている。

菊花賞で、そして2年前の天皇賞（春）では得られなかった祝福が、ターフから、そして客席から彼女に降り注ぐ。

彼女はそれを驚いたように、そして、とても幸せそうに受け止めて、身を震わせ。そして、客席に向けて小さくガッツポーズを取って見せた。

彼女は、私にとっては最大級のライバルになるだろう。きっと宝塚記念にだって出てくるし、今後私が長距離路線を走ったら、必ず何処かでこの最強のステイヤーとぶつかることになる。

それでも今日は、彼女の走りに見惚れた一人のファンとして。心からの祝福を贈る事にしよう。

「テウスさん、何処に行くつもりですか？ 駅はそちらではありませんせんわよ？」

「今日はここから走って帰ります！ 今日のレース見て、もう居ても立っても居られないので！」

「ここから学園まで走ったら何時間かかると思ってるんですの!!? おバカなこと言っていないでいきますわよ!!」

今日のレースでテンションが最高まで上がってしまったので、気合

を入れて走って帰ろうとしたところを、マックイーン先輩に首根つこをひっ捕まえられる。

ゴルシ先輩すら完全に捕獲するマックイーン先輩の手から逃れられるはずもなく。そのまま駅に着くまで引きずられていくのだった。

掲示板回 Part 3

【クラシック】三冠ウマ娘の誕生を期待するスレ Part 4

120 : 名無しのウマ娘ファン ID : T7vTCFish7

ようやく弥生賞か……

121 : 名無しのウマ娘ファン ID : 1X8N056/K

まさかあのフジキセキが一番人気じゃないなんて……

124 : 名無しのウマ娘ファン ID : SpHzYM/Mq

デビュー当時は6番人気だったくらいの無名の娘だったのにな、ブラックプロテウス

126 : 名無しのウマ娘ファン ID : t1IdTB+0z

>>124 まあそのデビュー戦で当時の2000mレコード叩き出したわけわからんウマ娘だが

128 : 名無しのウマ娘ファン ID : ur9aHwDQf

大丈夫だ、ほぼ一年経った今でもよくわからん

129 : 名無しのウマ娘ファン ID : sTESH/pT7

前走のすみれステークスでもレコードだしてるし1600でもレコード叩いてるしステイヤーなのかマイラーなのか……

130 : 名無しのウマ娘ファン ID : iiPlZGt3Y

デイリー杯の大暴走見る限りステイヤーっぽいけどな

131 : 名無しのウマ娘ファン ID : NquZz6P8w

まあ今後の動向次第でわかるだろう……

133 : 名無しのウマ娘ファン ID : dJJaQ96TK

そろそろ始まるなあ

134 : 名無しのウマ娘ファン ID : C b x t I o G 7 D
ブラックプロテウスとフジキセキ、どっちが勝つと思う？

135 : 名無しのウマ娘ファン ID : q F r N k s / 0 Y
まあ順当に行けばブラックプロテウスじゃないか？

138 : 名無しのウマ娘ファン ID : W l E y 3 l + v e
今日重バ場だし今までみたいに大逃げはできないんじゃないか？

139 : 名無しのウマ娘ファン ID : Z H R G C l S J j
ホーパフルの時の不良バ場走り辛そうにしてたもんな

140 : 名無しのウマ娘ファン ID : H r y w l / + 1 +
パワー有りそうな娘なのに重バ場苦手って珍しい

143 : 名無しのウマ娘ファン ID : t Y v j S L i L v
今中継見てるけど人多すぎワロタ

144 : 名無しのウマ娘ファン ID : d I s R K f 5 z K
今日GIだったって思うくらい人入ってる

145 : 名無しのウマ娘ファン ID : v A 2 l G r j 9 4
言うてフジキセキとブラックプロテウスの無敗ジュニア王者二人
の激突だしなあ

147 : 名無しのウマ娘ファン ID : E M G d p 2 r o d
ファンファアレだ

149 : 名無しのウマ娘ファン ID : n i I u I X S Z l

親の声より聴いたファンファーレ

152 : 名無しのウマ娘ファン ID : i u J y e P N F s
親のファンファーレより聴いたファンファーレ

155 : 名無しのウマ娘ファン ID : j W L l K l b y R
>>152 親のファンファーレってなんだよ

156 : 名無しのウマ娘ファン ID : / b Q p p H 7 R u
リボンマンボとブラックプロテウスが何か話してるっぽい？

157 : 名無しのウマ娘ファン ID : Y Z 6 Z n h B g 9
ギスギス……はしてないみたいですね、二人とも笑ってるし

158 : 名無しのウマ娘ファン ID : H v P 3 K v C a 8
係員困っててワロタ

161 : 名無しのウマ娘ファン ID : B r l l 0 M V o z
ブラックプロテウスここまで7戦7勝ってエグいな……

164 : 名無しのウマ娘ファン ID : r k T s 3 l E J i
スタートした

167 : 名無しのウマ娘ファン ID : N q U T i e d 6 3
よくみんな号砲とかないのにきれいにスタート切れるよな、俺だつたら絶対出遅れるわ

170 : 名無しのウマ娘ファン ID : d 9 V m G t 9 D y
スタンディングから繰り出されるえげつないスタート……やっぱり人間はウマ娘には勝てないんやね

172 : 名無しのウマ娘ファン ID : H b z u X X F a 8
人間が勝てるのは燃費くらいじゃないかなあ……

174 : 名無しのウマ娘ファン ID : E u O 5 0 F V R v
今日も先頭はブラックプロテウスか

175 : 名無しのウマ娘ファン ID : + / e / f k G P R
重バ場なのに速くね？

176 : 名無しのウマ娘ファン ID : T E 5 q 6 O g q l
大分ハイペースね

179 : 名無しのウマ娘ファン ID : l q B r / z n z l
中山の急坂がまるで平坦な道のように見える……

181 : 名無しのウマ娘ファン ID : K y I D z G m / O
ワイ陸上部んだけど以前中山でやってたイベントで走った時相
当きつかったゾ

184 : 名無しのウマ娘ファン ID : B g k M / f o i z
最大勾配2.24%の坂が90mくらい続くからそら辛いよ

186 : 名無しのウマ娘ファン ID : U k K I K Q P 7 G
それを5秒くらいで駆け上っていくのやっぱウマ娘ってすごいよ
な

187 : 名無しのウマ娘ファン ID : 5 F z f p f A N E
アイツらは蹴りで海を割るからなあ

190 : 名無しのウマ娘ファン ID : j O f j n Z q M y
>>187 流石に誇張だろ

193 : 名無しのウマ娘ファン ID : GP l o R N R Q z
1000m通過タイム59.8ってマジ?

195 : 名無しのウマ娘ファン ID : E x o b T I 6 E z
今日重バ場だったよな……

196 : 名無しのウマ娘ファン ID : K l q D b Y y X y
良バ場並みのペースなんだがもつのか?

197 : 名無しのウマ娘ファン ID : 7 A C G n 2 Y X P
今日良バ場だっけ?

198 : 名無しのウマ娘ファン ID : y w L H K Q 0 p h
まあブラックプロテウスなら持つだろうが他の娘はきつそう

199 : 名無しのウマ娘ファン ID : Q O 9 J Y r G P u
フジキセキもついていってるな

202 : 名無しのウマ娘ファン ID : m J n b p O 5 G o
リボンマンボちゃんもいますよ!

205 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6 L Y q j O 8 m c
今日こそ勝ってほしいよなリボンマンボ

207 : 名無しのウマ娘ファン ID : O c x l P v w y M
フジキセキ並んだ!

208 : 名無しのウマ娘ファン ID : g 0 j r b 9 U D p
第3コーナーでフジキセキきたああああああ

211 : 名無しのウマ娘ファン ID : A b l d W 2 n 7 P
ブラックプロテウス抜き返したぞ

214 : 名無しのウマ娘ファン ID : M j M z x + R v J
コーナーで加速するのほんとかわけわからん

217 : 名無しのウマ娘ファン ID : S t j F V m C z j
また加速してフジキセキが抜き返したんだが

219 : 名無しのウマ娘ファン ID : E X U 7 u h p V M
いや抜いてないぞ、並んでるぞ

220 : 名無しのウマ娘ファン ID : E n E t 8 e l E G
どっちも譲らない！

223 : 名無しのウマ娘ファン ID : w P c N 5 9 r 9 0
坂を登ってる最中にさらに加速していくのは草

225 : 名無しのウマ娘ファン ID : L D I J b h K X f
これどっちだ？

227 : 名無しのウマ娘ファン ID : X l F H E M 6 M D
残り100でも並んでてわからん

229 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6 p r B 9 V / Q 5
ゴール!!

232 : 名無しのウマ娘ファン ID : v 7 A D Q B N 8 R
どっちだよおい

234 : 名無しのウマ娘ファン ID : U H 8 u m v U 5 g

写真？

237 : 名無しのウマ娘ファン ID : x a l K O L N i z
写真判定だな

240 : 名無しのウマ娘ファン ID : s l 6 s F g 9 V a
俺の目からはブラックプロテウス有利に見えたが

243 : 名無しのウマ娘ファン ID : y H M V u B L W H
いやフジキセキじゃね？

246 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6 G g i h R c z +
余力が残ってそうなのはブラックプロテウスだな

247 : 名無しのウマ娘ファン ID : p z 3 l q b D g 0
相変わらず暴走してますねえ

248 : 名無しのウマ娘ファン ID : 5 A Q O A l P p u
係員に止められて戻ってきててワロタ

249 : 名無しのウマ娘ファン ID : d u j Z D 2 7 f e
いつもの光景

. . .

298 : 名無しのウマ娘ファン ID : G D E L L 5 A S 4
ちよつと長くね？

300 : 名無しのウマ娘ファン ID : c K k y I o l n B

もう10分は経ってるぞ

302 : 名無しのウマ娘ファン ID : +u m R u 5 n X A
ウマ娘達もそわそわしてますね

305 : 名無しのウマ娘ファン ID : 3 r z L m J X z z
お、表示替わりそう

306 : 名無しのウマ娘ファン ID : 4 t Z N O 4 5 w o
きたああああああああああ

309 : 名無しのウマ娘ファン ID : a K D L l j a M L
同着!!!

311 : 名無しのウマ娘ファン ID : T d h M + c E i e
同着か!!!

314 : 名無しのウマ娘ファン ID : A + y O f l M I X
エルスぺのダービー以来の同着!

315 : 名無しのウマ娘ファン ID : 7 j O W K e v h A
今テレビ中継で判定の映像流れてるけど全く判断つかないな

316 : 名無しのウマ娘ファン ID : l 0 U e l U C O u
後100mあったらわからなかったな……

317 : 名無しのウマ娘ファン ID : + i + H 5 y E L H
ブラックプロテウスびっくりしてるな

320 : 名無しのウマ娘ファン ID : u m W H M A 9 s 2
同着だとは思わなかったんじゃね?

3 2 3 : 名無しのウマ娘ファン ID : N s c 8 w + 7 E 5
お、握手してる

3 2 4 : 名無しのウマ娘ファン ID : b b I z l o M P n
美しい光景だねえ

3 2 5 : 名無しのウマ娘ファン ID : t p V K I / R v A
決着は皐月賞かー

3 2 6 : 名無しのウマ娘ファン ID : R 7 F o k K h Y 6
皐月賞今から楽しみだな

3 2 9 : 名無しのウマ娘ファン ID : H K 7 D o d u X k
次こそは決着付けてほしいね

. . .

4 2 7 : 名無しのウマ娘ファン ID : n e Y o d + d e X
ウイニングライブ始めましたね

4 3 0 : 名無しのウマ娘ファン ID : 4 p E s V 6 Q p T
ダブルセンターのウイニングライブとか貴重だな、現地で見れてる
やつら羨ましすぎる

4 3 1 : 名無しのウマ娘ファン ID : Y Z S c B 7 c E Q
何故だろう、フジキセキも決して小さくないのにブラックプロテウスと並ぶと……

4 3 4 : 名無しのウマ娘ファン ID : + O B L u Z i H T

また大きくなったよねこの娘、どこがとは言わないけど

4 3 7 : 名無しのウマ娘ファン ID : 3 H + / T t l j x
ダスカといひ最近の中等部はけしからんですね

4 3 9 : 名無しのウマ娘ファン ID : z l 9 z W m R P 0
お前から何処見てるんだよ

4 4 2 : 名無しのウマ娘ファン ID : + C v y c J z k w
>>> 4 3 9 どこって……ねえ?

4 4 4 : 名無しのウマ娘ファン ID : 4 4 e Z F p / x k
>>> 4 3 9 言わせんな恥ずかしい

4 4 5 : 名無しのウマ娘ファン ID : 7 2 s 9 p w o o f
こんな振り付けあったっけ?

4 4 8 : 名無しのウマ娘ファン ID : x x 0 F 8 T s 5 j
ダブルセンターだしちよつとダンス違うな

4 4 9 : 名無しのウマ娘ファン ID : j h o 9 O 3 B a Q
ちよつとぎこちないあたり慣れてないんだなって

4 5 1 : 名無しのウマ娘ファン ID : y D M b / q G r Z
あ、フジキセキがブラックプロテウス抱き寄せた

4 5 3 : 名無しのウマ娘ファン ID : q b x c 2 r p b e
観客席から黄色い歓声上がっててワロタ

4 5 6 : 名無しのウマ娘ファン ID : H O l B a G F J A
プロテウス顔真つ赤じゃん、かわいい

459 : 名無しのウマ娘ファン ID : Mg43TqTqm
フジキセキのアドリブなのかな？

461 : 名無しのウマ娘ファン ID : fS5HN0wil
テウスもファンサービスする方だけどフジキセキには勝てんわな

464 : 名無しのウマ娘ファン ID : moUX7vq0/
エンターテイナーだからな……

【漆黒の】ブラックプロテウス専用スレ Part10 【鋼鉄】

600 : 名無しのウマ娘ファン ID : upBNjJyiG
今日は皐月賞か……

602 : 名無しのウマ娘ファン ID : VtNj5+mkj
ようやくクラシック第一戦目か。凄い長く感じた

604 : 名無しのウマ娘ファン ID : bVzDmkKQ6
まあテウス沢山走ってるからな……それ以外にも雑誌とかでも情
報が濃かったし

607 : 名無しのウマ娘ファン ID : Wm+0MTzqG
毎朝100km走ってるってマジ？ ってなったよな

608 : 名無しのウマ娘ファン ID : LM05V9zRr
調子がいいときはあれよりもっと走るとかどれだけ走ってるんだ
よと……

609 : 名無しのウマ娘ファン ID : u4Y8ZhrEz

暴走しがちな月刊トウインクルだけならまだしも堅実な週刊ガゾンと月刊ラーゼンまで同じ記事出してるから多分本当なんだよな

610 : 名無しのウマ娘ファン ID : AWusc0ZnT
スク水の写真は凄かったですね (こなみ)

612 : 名無しのウマ娘ファン ID : hcjwoxhR+
あの写真を見て追加で2冊買いに行つた

613 : 名無しのウマ娘ファン ID : rORXSYj44
俺は5冊買ったぞ

614 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC
いったい何に惹かれたんだよ

615 : 名無しのウマ娘ファン ID : tXpj+qF3P
>>614 あなたには無いもの、かな……

616 : 名無しのウマ娘ファン ID : +TNrCAa/W
>>615 辛辣で草

617 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC
>>615 うるせーよ！ 少しはあるって言つてんだよ!!

619 : 名無しのウマ娘ファン ID : U219btvI+
>>617 必死で草

622 : 名無しのウマ娘ファン ID : WK6ORSydo
ところで今日は何飲んでる？ 俺は日本酒

623 : 名無しのウマ娘ファン ID : x7CFL/P/P

白ワイン

626 : 名無しのウマ娘ファン ID : mbUHhng1m
ビール

627 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC
>>622 お医者さんから禁酒令出されたので麦茶

629 : 名無しのウマ娘ファン ID : Eioli vxdy
>>627 草

630 : 名無しのウマ娘ファン ID : dgrX/LYDh
>>627 絶壁ネキついにドクターストップ掛かってて草

633 : 名無しのウマ娘ファン ID : Xz4yPTN8v
毒に強いウマ娘がドクターストップ食らうとか相当よ？

634 : 名無しのウマ娘ファン ID : ceYMjNV2
>>627 大丈夫？ その麦茶しゅわしゅわして酒精入ってない？

637 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC
こないだの焼酎一升一気飲みがあかんかったんよ

638 : 名無しのウマ娘ファン ID : OZ4plmy8f
草

641 : 名無しのウマ娘ファン ID : lOYMovdJ/
自業自得で草

642 : 名無しのウマ娘ファン ID : SlHArLVU

まあ毎月酔っぱらってどこかしら怪我してるしいい薬だろ

644 : 名無しのウマ娘ファン ID : 4+GJLUdB

>>642 お医者さんもそれでストップかけたんじゃないですかね

645 : 名無しのウマ娘ファン ID : OZM5vj6M

ははっ、まさかー

647 : 名無しのウマ娘ファン ID : awg3m4TyW

そんな筈ないじゃないですかー

649 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC

黙秘権を行使するよ。とりあえずそろそろ出走だからレースに集中せよ

651 : 名無しのウマ娘ファン ID : Wjz7ee8Ee

(あつ、これ凶星だな)

652 : 名無しのウマ娘ファン ID : 4zn3cXg83

(そつとしておこう)

655 : 名無しのウマ娘ファン ID : fBk5W/QNG

今日は稍重か、大丈夫そうだな

656 : 名無しのウマ娘ファン ID : vDE4CkNGD

でも大外枠なんだよな……

657 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6p22HC/hT

逃げには不利だが果たして

659 : 名無しのウマ娘ファン ID : E / C 3 5 T s g H
フジキセキ居ないしまあ順当に行けば問題ないんじゃないやね？

662 : 名無しのウマ娘ファン ID : 4 u 4 l s f J D +
フジキセキは残念だったな……

664 : 名無しのウマ娘ファン ID : f P w 5 5 / S M +
故障発覚後はこっちのスレにもアンチ湧いてきて大変だったな

665 : 名無しのウマ娘ファン ID : C O J s b J C M X
テウスのせいじゃないのになあ……

668 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9 G m H / n 9 c P
言いたくなる気持ちはわからなくはない……いややっぱわからん
わ

670 : 名無しのウマ娘ファン ID : k P X v O M / p C
結局は誰のせいってわけでもないから仕方ないよ、故障つてのはね

673 : 名無しのウマ娘ファン ID : w X T V 2 F I O 2
あ、スタートした

674 : 名無しのウマ娘ファン ID : L m 2 Z S s u l +
お？

676 : 名無しのウマ娘ファン ID : v g X i 0 D t 5 N
今日テウス先頭じゃないやん

679 : 名無しのウマ娘ファン ID : v d v w G T O Z m
カジュアルスナツプがハナ取ったか

680 : 名無しのウマ娘ファン ID : 1P2ttbLC4
テウスびったり後ろついていつてるな

681 : 名無しのウマ娘ファン ID : FyGO/iJME
いつもより遅いって言うよりカジュアルスナップが破滅逃げ打つ
てるなこれ

684 : 名無しのウマ娘ファン ID : wgdEbrzgo
ハナ取らせたら勝てないって思ったんじゃね？ ほら、キョウエイ
ボーガンみたいに

687 : 名無しのウマ娘ファン ID : CCKLRF3WA
あの菊花賞俺好きだったんだよな……キョウエイボーガン沈ん
じやったけど、本気で賭けに行っただって

688 : 名無しのウマ娘ファン ID : OvJHJyoU5
去年引退しちゃったよなキョウエイボーガン。怪我で長期療養し
てたからな……

691 : 名無しのウマ娘ファン ID : YLxRaj3en
3月に卒業した後トレーナーと結婚したらしいね。ウマッターで
眩いてた

694 : 名無しのウマ娘ファン ID : U+DIXwMf+
幸せそうで何より

696 : 名無しのウマ娘ファン ID : Sqk1TCEZi
ブラックプロテウス顔に土掛かってない？

697 : 名無しのウマ娘ファン ID : H Y X M i l o C H
掛かってるけど気にしてないみたいね

699 : 名無しのウマ娘ファン ID : 2 / L3KEWc4
普通のウマ娘なら怯むと思うんですが……

702 : 名無しのウマ娘ファン ID : NvwkW2jG0
>>699 何をいまさら

705 : 名無しのウマ娘ファン ID : H6yY / vyIR
>>699 テウスがこの程度で怯むわけないじゃないですかや
だー

706 : 名無しのウマ娘ファン ID : 7x2zPDxU8
というか向こう正面だけど息入れないの？ 本当に破滅逃げ？

708 : 名無しのウマ娘ファン ID : mp5Tn / NSB
息を入れないというより入れれないんじゃない？ あんなにぴつ
たりつかれたらキツイよ

711 : 名無しのウマ娘ファン ID : 7dd4pNTtP
思ったよりえぐい作戦だな

714 : 名無しのウマ娘ファン ID : h0A8TBHlm
サイレンススズカ対策だったりして？

716 : 名無しのウマ娘ファン ID : z23Y60PPd
>>714 まあ有り得なくはないよな

718 : 名無しのウマ娘ファン ID : IZH2VnEOG
対策しなくても2200mレコードホルダーだし問題ないと思う
けどな

719 : 名無しのウマ娘ファン ID : H Z O R j G 8 q D
去年の宝塚のスズカより速かったからな

722 : 名無しのウマ娘ファン ID : x a U 3 U C p s D
打てる手は打たないって感じだろ

725 : 名無しのウマ娘ファン ID : L l i e K M L 7 R
武器は多いに越したことはない

727 : 名無しのウマ娘ファン ID : z L P G m B 0 1 1
あ、コーナー膨らんだなカジュアルスナップ

729 : 名無しのウマ娘ファン ID : V J k u u 9 R M y
減速する余裕なかったからなあ

731 : 名無しのウマ娘ファン ID : z x 1 L 4 8 F O t
というか流石にスタミナ切れっぽい？

733 : 名無しのウマ娘ファン ID : c u b 9 e Q J u z
悠々とハナ奪ったなあ

736 : 名無しのウマ娘ファン ID : Y p w p R y q B 6
これは決まったな

738 : 名無しのウマ娘ファン ID : C 2 n x P O N X n
もう誰もついていけないな

741 : 名無しのウマ娘ファン ID : 3 v 7 o z 8 A U I
やっぱ強いなテウス

743 : 名無しのウマ娘ファン ID : O 6 i B V H 5 / B

テウス一着！ テウス一着！

745：名無しのウマ娘ファン ID：n4YglfdJ+
まず一冠！

746：名無しのウマ娘ファン ID：xTPbQ+/mC
相変わらず余裕ありそうだな

747：名無しのウマ娘ファン ID：TqMDu7jTl
息も切らしてないのが化け物

750：名無しのウマ娘ファン ID：kPXvOM/pC
よっしゃー！ もう飲むしかないよ！

751：名無しのウマ娘ファン ID：DsgCEz3ZJ
手振ってるの可愛い

753：名無しのウマ娘ファン ID：SCP9iYFXH
>>750 禁酒令破られてて草

756：名無しのウマ娘ファン ID：bmn8Azrn8
>>750 後でお医者さんに怒られる

758：名無しのウマ娘ファン ID：2Jcbbc+35y
ん、テウス立ち止まった？

761：名無しのウマ娘ファン ID：K+E6RRzEf
いつも走ってるのに珍しいな

764：名無しのウマ娘ファン ID：uZWnme/Q8
何かやるのか？

765 : 名無しのウマ娘ファン ID : d p G j Y u z G /
お?

768 : 名無しのウマ娘ファン ID : z E a f h X x I 6
このパフォーマンスは例の

771 : 名無しのウマ娘ファン ID : / j E y l P y k S
皇帝と帝王がやったやつじゃん

774 : 名無しのウマ娘ファン ID : 4 Y d q 9 e 5 U 4
多分テイオーの入れ知恵なんだろうなあ

777 : 名無しのウマ娘ファン ID : 2 I J 3 c y Y D 5
ちよつと恥じらってるのがかわいい

778 : 名無しのウマ娘ファン ID : u N S i 8 U C e P
格好いいというより可愛いって感じになっちゃうな、顔つきが穏や
かな子だから

779 : 名無しのウマ娘ファン ID : o v P Y B i b W o
まあテウスなら三冠問題ないだろ、むしろ距離長い方が強いぞこの
子

782 : 名無しのウマ娘ファン ID : 7 + K t q k p z Y
ステイヤーだろうからなあ

783 : 名無しのウマ娘ファン ID : 8 O J E T i a 5 A
テウスGI二つ目なのに指一本なの？

785 : 名無しのウマ娘ファン ID : S 9 L 2 m g t W z

>>783 こまけえこたあいんだよ！

787：名無しのウマ娘ファン ID：rCZCAN+7n
>>783 まあ多少はね？

788：名無しのウマ娘ファン ID：lIHOSktmu
これから三冠取るってわけだし1本でいいんだよ

790：名無しのウマ娘ファン ID：kPXvOM/pC
冷蔵庫の扉に指ぶつけて突き指した……

793：名無しのウマ娘ファン ID：scgbu6/tP
>>790 草

795：名無しのウマ娘ファン ID：Bskvo30Yd
>>790 絶壁ネキはもつと落ち着きを持って、どうぞ

797：名無しのウマ娘ファン ID：Fzqkje5ko
何で毎回どこかしら怪我するんですかねこの残念ウマ娘

800：名無しのウマ娘ファン ID：RN6vf8IXH
これは賢さG

第三十五話 みんなで、見る夢

天皇賞・春が終わってから日本ダービーまでは4週間。その間にダービーに対しての対策と、念のための切り札の調整をすることにした。

東京芝2400は殆どスローペースで進むレースだ。レース自体が長いため序盤から飛ばすウマ娘は少ない。

距離が長い分内枠の方が若干有利だが、内外に関わらず私は大逃げするつもりだ。他の娘がスローペースで来るといふなら私は悠々と逃げさせてもらう。

「うんうん、ばっちりなの！ 本番もこの調子なら問題ないの！」

「ありがとうございます、アイネスフウジン先輩」

今日は丁度バイトがお休みだったアイネスフウジン先輩と併走している。アイネスフウジン先輩はダービーを逃げ切ったウマ娘だ。対策に関しては彼女やブルボン先輩に聞くのが一番だと思って、ここしばらくは彼女たちと併走している。

それまでは主にキタちゃんと一緒に併走していたのだが、キタちゃんが私のトレーニングに食らいついてきてくれるのが嬉しくて多少オーバーワーク気味になるまで追い込んでしまったので、トレーナーさんに禁止令を発せられてしまった。

坂路10本くらいなら大丈夫かと思っただけど、ちよつとキツかったらしい。今度キタちゃんにはお詫びにはちみーでも奢ってあげよう。

「それにしてもテウスちゃんはスタミナあるの。これなら2400くらいなら問題ないだろうけど、ダービーはスタミナだけじゃ勝てないの。一番大事なのは想いなの」

「想い、ですか……？」

アイネスフウジン先輩の言葉に首を傾げる。ウマ娘はその背中に想いを乗せて走るとは聞いたことがあるが、いままでよくわからな

かった。

フジキセキ先輩の想いを背負って走っている気持ちはあるのだが……

「そうなの。日本一のウマ娘になりたいとか、実家の人たちの期待に応えたいとか、そういう想い。生涯たった一度きりのクラシック、その皐月賞を見送ってでもダービーに出る、そういう娘だっているくらいなの。だから、あたしは日本ダービーは運があるウマ娘より、想いが強いウマ娘が勝つって思うの。テウスちゃんには、そういう想いはある？」

スベ先輩もウオツカ先輩も、そしてテイオー先輩も、強い想いを持ってダービーに挑んでいたと聞く。アイネスフウジン先輩がそう言うのも納得だ。

「んー……確かに私は他の娘よりそういう想いは弱いかもしれない。目標だってクラシックじゃなくて宝塚記念を挙げてますし、周りの人からクラシックは眼中に無いんじゃないかって言われてるのも知ってます」

一度自分のことを調べてみてから後悔して調べるのはやめた。それでもウマッターを見ていたら不意に見てしまうことはあるもので、そういう忌憚ない意見を目にすることは何度もあった。

「それでも、目の前のレースから目を逸らしたことはありません。一度だって負けてもいいかだなんて思ったこともありません。私は私を信じて応援してくれるヒトたちの為、そして何より自分自身の夢の為に走っていますから」

「それならよかったの。いきなり変なこと言っちゃってごめんなさいなの」

私の言葉に安心したのか、穏やかに微笑んで頷いている。どうやら先輩の満足いく答えが出来たようだ。

「ところで、テウスちゃんの夢って何なの？　そういえば聞いたことなかったのー！」

「えっっ!?　いえあの、恥ずかしいのであんまり言いたくないんですけど……」

「他の娘には内緒にするから教えてほしいの！　それが今日の併走の報酬ってことなの！」

それを言われると断れない。最初に報酬を決めておくべきだった……

「まあその……学園に入った時は確かに、ただ走りたいうってだけだったんですけど。チームに入って、いろんな娘と戦って、そしてスズカさんたちの走りを見て、気付いたんです」

チームに入ってすぐレースして、ちよつとトラブルはあったけど、沢山戦って、先輩たちが走っているのをたくさん現地で見て応援して。

一緒に喜んだり、悔しがったり。時には競い合って行くうちに気付いたんだ。

「皆に夢を見せてくれたサイレンススズカのように。皆に奇跡を見せてくれたトウカイテイオーのように。私は全てのウマ娘にとっての憧れになりたい。誰かの記憶にいつまでも残るような、そんなウマ娘になりたいんです」

非常に傲慢で、ワガママな夢だと思う。ルドルフ会長みたいに綺麗な走りをしているわけでもない私が憧れになるのは、相当の強さが居るだろう。

見るものすべての目を灼くような、それこそ私たちの頭上で紅く燃える太陽のような、誰しもが認める一番輝くウマ娘に私はなりたいたい。だからこそ、次のレースも、そしてその先のレースだって、一度だって負けたくないし、負けられないんだ。

「だから、その為にももう一本、お願いしますね」

「うん、わかったの！　今日はテウスちゃんが満足するまで走ってあげるの。後輩の為に一肌脱いであげるの！」

そう言っって先輩は胸を張る。折角なのでその言葉に甘えることにしよう。

その後芝コースを10周したあたりでアイネスフウジン先輩がギブアップするまで、思う存分併走に付き合ってもらったのだった。

『次は第9レース、本日のメインレースです。全てのウマ娘が挑む頂点、日本ダービー！ 生憎の曇り空ですが、バ場状態は良バ場での発表となりました。この大舞台で歴史に蹄跡を刻むのは誰だ！』

そして、ダービー当日。18万人以上が詰めかけた東京レース場に歓声が響いている。

観客席からの熱気もそうだが、今立っているターフの上も、燃えるようなモノを感じる。

それぞれの想いがぶつかり合って、渦巻いているようだ。全てのウマ娘が憧れる最高の榮譽の一つ、東京優駿。時代が移り変わるにつれ様々なレースが増えていったものの、変わることなく常に中核をなすレースの一つだ。

そんな象徴であり最大級の目標であるこの舞台で、私を含めて18人のウマ娘達が、ファンファーレを贈られながらゲートに入る。

『3番人気はこの娘です。リボンマンボ。前走はNHKマイルカップで、最終直線から見事な末脚で差し切り勝利を収めています。本日もあの時と同じ末脚が炸裂するのわ！ 前走からの半マイルの延長がどう響くのか注目です』

1枠1番という良番を引いたりリボンマンボ先輩が、1枠2番の私が入る予定の隣のゲートに入っていく。

私とほぼ同じローテーションでレースに出ているのにも関わらず、リボンマンボ先輩はNHKマイルカップに挑み見事勝利を収めている。現地で見ることにはかなわなかったが、中継で見たその走りはまさに空高く飛んでいく鳥のように感じた程だ。

『2番人気はこの娘です、タヤスツヨシ。公開練習での上がり3ハ口は何と34秒台。この大舞台でいざ、巻き返しなるわ！』

タヤスツヨシ先輩は皐月賞からそのままダービーとなるが、仕上がりは絶好調だと言っている。私の目から見てもその気迫が見て取れるくらい気合が乗っている。

タヤスツヨシ先輩はあのミホノブルボン先輩と同じトレーナーさ

んが担当しているらしく、今日も観客席から見守っている。初めて彼と会ったときは怖くて後退ってしまったけれど、話してみると結構優しい人だった。人は見かけによらないということだろう。

『そして一番人気は勿論この娘！　ここまで9戦9勝無敗、ブラックプロテウス！　ここで勝利すればミホノブルボン以来、無敗の二冠ウマ娘が誕生します！　誰も彼もが寄せるその期待に応えられるか！』
私がゲートに入ると観客席からは大きな歓声が聞こえる。この東京2400mはホームストレッチからスタートして一周して戻ってくるコース設計だ。ゲートに入るところもスタートするところも観客席からは非常に見やすいし、こちらからも観客席を十分に見渡せる。

トレーナーさんたちが居る方をちらりと見ると、チーム勢ぞろいで見守ってくれている。ゴルシ先輩は相変わらず何かを売っているようだ。確か今日はホヤ弁当だとか言っていたような気がする。レースが終わって残っていたら一つ貰いに行こう。

『各ウマ娘ゲートイン完了、出走の準備が整いました』

大外のウカルデイ先輩がゲートに入り、鳴り響いていた歓声が次第に収まっていく。いつも通り肩に力を入れてから、ゆっくり力を抜いていつでも走り出せるように構える。

『今スタートが切られました！　ブラックプロテウス、これは素晴らしいスタート！　内枠ということもあって先陣を切り軽快に飛ばしていきますすー！』

今日のスタートは90点といったところだろう。いつもよりちよつといい感じにスタートが切れた。今日は良バ場だし、とても走りやすい。この2400はタフなコース設計だが、そういったコースは得意中の得意だし、このまま飛ばしてしまおう。

『先頭はブラックプロテウス、いつも通り軽快に飛ばしていきます。続いて大外18番、ウカルデイ。少しペースが早め、掛かり気味にぐんぐん上がっていきます。その後ろからリボンマンボ、ジェニユインと続いている。注目の2番人気、タヤスツヨシは中団から様子を窺っています』

運よく内枠だったということもあって先頭で直線を駆け抜けて、そろそろ第1コーナーだ。いつも通り速度を落とさないように、内側を綺麗に回ればいい。この東京レース場はコーナーもゆったりとしているので、いつもよりスピードを保つのは難しくない。

そしてコーナーに入ろうとした、その時だった。ふと気付くと、斜め後ろから猛烈に追い上げてきていたウカルデイ先輩の気配をほぼ隣から感じて振り向くと、途端に横から大きな衝撃が走った。

掛かり気味に突進してきた彼女が割り込んでくるように思いつきり斜行して身体を捻じ込むようにして接触してきたのだ。

いつもならそれくらいなら踏ん張れるのだが、踏切りのタイミングが悪かったらしく丁度足が浮いていたタイミングでの接触であった為、勢いのまま内ラチにたたきつけられる。

『あつと、第1コーナーで逃げていたブラックプロテウスとウカルデイが交錯！ 斜行してきたウカルデイが割り込むようにしてコーナーに突入しぶつかってしまった！ これはいけません！ これは危険な走りだ、後ほど審議が入るでしょう！』

何とか転倒こそ避けたものの流石に失速してしまう。

驚いたような表情でウカルデイ先輩が振り向いて、焦ったかのようにさらにペースを上げて飛ばしていく。大分掛かってしまっているようだ。きつと傍から見たら私もあんな感じに見えるんだろうな。

衝突の影響で逆に冷静になれたのか、そんなことを思いつつ中団のあたりで何とか留まる。

流石に最後方まで下がってしまうと差し切れなくなってしまうだろうし、ここらあたりで一度様子を窺うべきだ。

『先頭はウカルデイ。まだ冷静になれないのか、向こう正面に入ってもぐんぐんと飛ばしていきます。2番手の位置にはリボンマンボとジェニユインがほぼ横並び。続いてサンセットグループ、タイムテイツキングと続き、中団のあたりにブラックプロテウスとタヤストヨシが居ます。ブラックプロテウス、厳しい状況だがここから巻き返せるか！』

向こう正面に入ったあたりで7, 8番手あたりで追走する。内側が

がちり固められているが、むしろ好都合だ。ここで一つ切り札を切ることにしよう。

本来なら宝塚記念まで取っておくつもりだった武器だが、温存していても仕方がない。斜行や妨害にならないようジワリ、ジワリと気を付けつつ外に出て進路を確保する。

勝負は第4コーナー、残り600の標識あたりから仕掛けよう。ここからはほぼ直線だから、切り札の使いどころとしては問題ない。『第3コーナーを回ってついに力尽きたかウカルデイ！ ずるずると後退していきます！ それを見るようにしてリボンマンボが先頭に躍り出た！ 負けじとジェニユインも追走！ そして外からじりじりとブラックプロテウスとそれを追うようにタヤスツヨシも延びてくる！ 最後はやはりこの四人だ！』

第4コーナーに入ってもうすぐ直線。今まで以上に姿勢を低くして、そして脚に渾身の力を籠める。

前にデイリー杯ジュニアステークスに出走したとき、終始掛かってしまつて大暴走してしまつたことがある。

だがその時の走りはトレーナーさんが今までで一番良かったと評してくれるほど、いいパワーだったという。あのパワーでスピードに乗ればもつと良くなると言われて、あれから今日まで何度も練習を繰り返してきた。

結果としていくつかの欠点があるものの、何とかスピードに乗ることにはできるようになってきて、切り札の一つとして使えるようになった。

欠点の一つは、まずまともに曲がれないということだ。

スピードに乗るということはそれだけ曲がる難易度は高くなる。ましてや重心を思いっきり低くしてパワーのすべてを前進することに費やしてしまつている状態なので、加速し切つてスピードを保つたままではいつも通りの小回りどころか大きく回ることも難しい。

それでも、最終直線であれば問題ない。この東京レース場の直線は600m弱もある。加速するのに十分な長さがある。

後二つ欠点があるのだが……まあ、その時になってから考えよう。

発生しない可能性も十分にあるし。

『最終コーナーを曲がって先頭はリボンマンボ！　だが、だがここで外からブラックプロテウス、ブラックプロテウスだ！　アクシデントがあつてなお、巻き返しを図ってくる！』

ただ真つ直ぐ、速く進むことだけに全能力を費やし、リボンマンボ先輩を追走する。

思えばこうやって彼女の背中を追うのは、あの芙蓉ステイクス以来だ。

あの時の彼女は落鉄してしまっていて、十分な力は出し切れていなかっただろう。だから、今日の彼女は万全だ。

NHKマイルを制したその末脚で、私より前を駆けている。だけれど……

「その場所は、私のものだ。そこを……退けッ!!」

脚に力を籠め、さらに加速する。次第に周りの音が聞こえなくなつて、世界から色が失われていく。

最後の上り坂を、その白い翼で羽搏くように駆けていく彼女の背を捉えて、そして一気に抜き去る。

『ブラックプロテウス、並ばない、並ばない！　一瞬の出来事だ。最終直線、あつという間に抜き去つた！　これが本当に逃げウマ娘の末脚なのか!?!』

坂を登り切つて、残り300で先頭に立った。油断することなく、加速を続けようとする、ずるりと左足が少し滑る感覚がした。多分、靴底が破れてしまっている。

これが、二つ目の欠点。今まで以上に力を入れる以上、靴に、特に蹄鉄を留めているあたりには多大な負担がかかる。その結果、大体300mくらいまでしか靴が持たない。

先日開けたばかりの新しいめのシューズだったのだが、やはり持たなかつたようだ。練習中に何度もやらかしてしまつていたのでこれの発生は予想出来ていたのだが、レース用のシューズの材質は厳格に決められている為どうしようもできなかった。

だが、それでも構わず前へ進む。前へ加速していくだけなら特に問

題はないように練習しておいたからだ。今日が重バ場だったりしたらまた話は別だったのだが、良バ場なら何とかなる。

だがこれで三つ目の欠点が出てきてしまうことは確定した。そこはもうゴールしてから考えよう。

『ブラックプロテウス、差した差した差し切った！ 一時はどうなるかと思いましたがやはりこのウマ娘は実力が違う！ 逆境を物ともせずまさに鋼鉄のような安定感で、今ゴールイン！ ブラックプロテウス、ダービーを制し二冠達成！ そして秋の京都へ伝説は引き継がれていく！』

何とかゴール板を駆け抜けて、先頭を守り切った。

そしてゴールしてからすぐに第一コーナーである。そう、この加速し切って、靴も破れて踏ん張りがきかない状態でコーナーに突入するようになるか。深く考えなくてもわかるだろう。

『審議となったこのレースですが、最早文句なしに着順が確定しました。ブラックプロテウス、これで10戦10勝！ あの幻のウマ娘トキノミノルに並ぶ大記録が此処に打ち立てられました！ 勝ち時計2.24.7、上がり3ハロンは何と31.8！ 正しく驚異的な記録——!?!』

そう、止まり切れないし、曲がれないのだ。これが三つ目の欠点。

そのまま外ラチに突っ込み、大きな音を立てて外ラチを粉碎して転倒し、暫く転がってようやく止まる。レース場外まで突っ込まなくてよかった。第一コーナーからはちよつと下りだし、下手するとそのまま飛び出してしまった可能性もあった。

このまま寝転がっていても心配をかけてしまうし、コースに戻って無事を知らせよう。

『ブラックプロテウス転倒！ 止まり切れず外ラチに突っ込んだ！』

あつと、ですが何事もなかったかのように起き上がってそのままウイニングランを始めました。周りの娘たちが心配そうに見つめています』

周りの困惑する視線を感じつつ軽くウイニングランしてウイナーズサークルへ向かう。途中リボンマンボ先輩からは呆れたような視

線を向けられていたが、今更なので気にしないことにした。

ウイナーズサークルに立って観客席を見上げる。多少心配そうにしている人もいたが、大勢の人が歓声を上げて、拍手をして私の勝利を称えてくれる。

何度経験しても、この瞬間はとても嬉しい。これを感じるために走ってきたんだと思える程に嬉しくて、毎回涙が出そうになる。

この歓声に応えるために、指を二本、Vサインの形に立てて天に掲げる。これで、二冠だ。最後は菊花賞3000m。私にとっては得意中の得意の距離。油断はしないが、絶対に譲る気はない。

私の名前を呼ぶ大きなコールに見送られながら、ウイニングライブに備えるべく、コースを後にした。

地下バ道を通って控室に戻ろうとすると、その途中に珍しい顔があった。

「ダービー制覇おめでとうございます。ブラックプロテウスさん。見事なレースでした」

「駿川さん。ありがとうございます。えつと……お、お叱りでしょうか……?」

トレセン学園の緑の事務服を着た理事長秘書、駿川たづなその人である。さつき外ラチを思いつきり粉碎してしまったしその件だろうか。弁償で許してもらえないものだろうか……

「いいえ、単純に今日はお祝いに来ました。お説教は明日学園でトレーナーさんとすることになると思いますが。あ、ライブ後にもう一度お時間下さいね」

「あ、ありがとうございます……その、お手柔らかにお願いします……」

今日は見逃されたがお説教は避けられないようである。まあ、私を心配してのことだろうし、甘んじて受け入れることにしよう……

「とても見事な走りでした。見ているこっちまで走り出さなくなってしまうくらい。本当におめでとうございます。次走も期待していますね」

「あ、ありがとうございます。駿川さん。でも、いいんですか？ 貴女の立場上誰か一人を応援するのはまずいと思うんですけど……」

彼女は理事長秘書という立場である。そんな彼女が一人のウマ娘に肩入れするように見られる行為は避けるべきだと思うのだが……

「ふふっ、だから今日私がこうしてここに来たことは秘密にしてくださいね？」

唇に人差し指を当てて微笑む。美人がやると映えるもので、同じ女なのにちよつとドキツとしてしまった。

「ふふ、わかりました。今日は本当にありがとうございます。駿川さん」

「たづなでいいですよ？ 勿論無理にとは言いませんけれど、私はそちらの方が嬉しいので」

そういえばマルゼン先輩も駿川さんのことは名前で呼んでいた気がする。今度からそうさせてもらうことにしよう。

その言葉に頷き、ライブの準備をするためそこで分かれる。

「もし、貴女がもう少し早く産まれて来てくれたら、私も——」
そんな彼女の呟きを聞き後ろを振り返ると、彼女はいつも通りの穏やかな微笑みを浮かべていた。

なお、ライブ終了後に今日一番良い笑顔を浮かべたたづなさんに捕獲され、検査のためにいつもの病院に放り込まれたの言うまでもないことである。

第三十六話 ちよつとしたアクション

無事にダービーが終わったが、もう1ヶ月もすればすぐに宝塚記念。しかもその後すぐにジャパンダーブダービーが来る。一息つく暇もなく、今日も今日とてトレーニングだ。

「ふう、良く走ったな。ベルノ、どうだった？」

「うん、いい感じだよオグリちゃん、テウスちゃん。クビ差でオグリちゃんの勝ちだけど……クラシック級でオグリちゃんとまともにやりあえるのって凄いなと思うよ？」

今日はオグリ先輩たちとダーブ2000mで本気の模擬レースをして、どの程度走れるか試してもらった。

結果として最後の直線で捲られてしまったけれど、収穫はあった。お爺ちゃんに教えてもらっていた走り方、それが十分レースでも通用するということが分かっただけでも大収穫だ。

ダーブでの走り方を教えるのは得意でトレセン学園では主にダーブの走りを教えていたと聞いてはいたけれど、やっぱりお爺ちゃんですごくかっただんだなあ……

「ぜえ、はあっ……も、もうむりい……」

私とオグリキャップ先輩がゴールしてから20秒くらい後にふらふらとおでこが特徴的なウマ娘がゴール地点に倒れ込んだ。

彼女はウカルデイ先輩。ダービーで私と接触してしまったウマ娘だ。

あの後ウカルデイ先輩は失格処分を受けた上に2ヶ月の出走停止処分を受けてしまい、暇していたところを併走に付き合ってもらっていた。

「大丈夫ですか、ウカルデイ先輩？」

「わたしダーブは走れないんだってばあ！ しかも相手がオグリキャップ先輩とか相手になるわけないじゃない！ しかもなんであなたは相手になるのよ！ おかしいでしょ!？」

「でも、お詫びにどんなことでもしてくるって言われましたから

「……人数が多い方が楽しいですよね?」

「限度つてもんがあるでしょうが!! せめて芝にしてよ!」

「そうだな。折角だしターフも走ろうか。2200mだな。ベルノ、準備を頼む」

「あ、うん。分かったよオグリちゃん。でも、少し休んでからね?」

「もうやだあこのウマ娘達なんなの……?」

ウカルデイ先輩がマイペースに話すオグリキャップ先輩とベルノライト先輩を見て項垂れている。

「凄いですよねえオグリ先輩。やっぱりドリームシリーズのウマ娘は一味違いますよね」

「そういう意味じゃないわよ!! いやまあ凄いののは認めるけど!」

他に何かあっただろうか? 首を捻つてもよくわからなかったので気にしないことにする。

「よし、そろそろオグリちゃんとテウスちゃんは芝コースに行きましようか。ウカルデイちゃんは今回は休憩しててください。慣れないダートで消耗が激しいみたいですよし」

「うん、無理をしてはいけないな。何事も腹八分目が良いと聞くし」

「オグリ先輩の腹八分目がどれくらいか量かわからないですけど、今は休んでいてくださいね、ウカルデイ先輩」

ダートに寝転んで起き上がれないウカルデイ先輩の隣にタオルとドリンクを置いてから先輩たちを追いかける。

「あ、折角ですしベルノライト先輩も一緒に走りませんか? 皆で走ったほうが楽しいですよ?」

ジャージを着てストップウォッチを持っているベルノライト先輩に提案してみる。彼女の走っているところは見たことがない。

基礎トレーニングはしているみたいだし、走れないってことではな
いと思うんだけど……体付き的には短距離向きなような雰囲気があるし、スタミナはないのかもしれない。

「う、うーん……私だと二人の本気のペースにはちよつとついていけないかな……ゆつくりでもいい?」

「ああ、勿論だ。私も久しぶりにベルノと走りたいしな。ふふ、楽しみ

だ」

「オグリちゃん？ 手加減、手加減してね？ ね？」

何処までもマイペースなオグリ先輩に振り回されているベルノライト先輩を見てつい和んでしまう。

専属のサポーター的な立ち位置なのもあつてか、彼女たちの相性は抜群だ。きっとオグリ先輩の原動力はこういったところにもあるのだろう。

今日は沢山それを学ばせてもらうことにしよう。三人で横並びになつて、ターフを駆け始めた。

「お、此処にいたか。おーい、テウスー！」

芝コースでの併走を終えて少し休憩してくると、トレーナーさんが小走りでこちらに向かつてきた。また何かやらかしてしまつたではないかと少し不安になつてしまう。

「と、トレーナーさん。な、何か御用ですか？」

「何で怯えてるんだ……別に悪い知らせじゃないぞ？ 次の宝塚記念の前にセレモニーがあるんだが、それにスズカとライスシャワーと一緒に出てくれないかつて話だ」

宝塚記念。春のグランプリで、人気投票によつて出走ウマ娘が決まる、一種のお祭りのようなレースだ。

現状人気投票一位はライスシャワー先輩。先の春天での二年ぶりの勝利という話題もあつてか、彼女を応援する声が高い。

二位は私とスズカ先輩がほぼ横並びで競つていて、四位以下は混戦模様といったところだ。

「それは……光栄なことですね。是非参加させてください。ふふ、楽しみです」

ファンの皆さんがそこまで私に期待してくれているという事は素直に嬉しい。シニア級の先輩たちにも負けないだけの期待を掛けてくれている。その期待に少しでも応えたいと思うのは当然のことだろう。

「そうか、よかった。次の日曜日リハーサルがあるから、勝負服の用意をしておいてくれ。それでその……これはいったい？」

トレーナーさんがターフに横向きで倒れているベルノライト先輩を見て聞いてくる。

「かつて、ベルノライト先輩だったモノ……ですかね……」

あの後併走が白熱してしまつてついオグリ先輩と全力で走つてしまい、ベルノライト先輩もそれにつられて必死に後を追いかけて来てくれたが力尽きて倒れてしばらく動かなくなつてしまつている。

オグリ先輩が言うには「しばらく休めば大丈夫だろう」とのことだったので、とりあえず寝かせて様子を見ていた。

当のオグリ先輩は飲み物を買つてくると言つて暫く戻ってきていない、何処かで道草でも食つているんだらうか……

「またお前は他の娘を巻き込んで……後で謝つておけよ？ ほれ、これセレモニーの資料。ちゃんと読んでおけよ」

呆れたように頭を抱えながらもこちらに資料を渡してから去つていく。

「はい、ありがとうございます。ベルノライト先輩だったモノを介抱し終えたら戻りますね」

トレーナーさんを見送つてベルノライト先輩だったモノの介抱に戻る。完全にスタミナが尽きてしまつているのか横向きに寝たままぐったりとして起き上がろうとしない。大丈夫だらうか……

「あなた用事があるんでしょう？ わたしが見てあげられるから、戻りなさいな。わたしも今日これ以上は走れそうにないし、丁度いいわ」「ウカルデイ先輩。そうですね……では、お願いします。早めに打ち合わせした方が良さそうですから。お任せします。ありがとうございます」

ベルノライト先輩は心配だが、ウカルデイ先輩がついているなら大丈夫だろう。しばらくすればオグリ先輩も戻ってくるだらうし、ここは任せていいだらう。

お礼を言つてからその場を後にして、詳しい話をするためにトレーナーさんの所へ向かうのだった。

宝塚記念まで、残り2週間。今日は休日であるが、阪神レース場は翌週からの使用となるため、問題なくリハーサルが出来るということ。関係者が集められ、勝負服着用でのリハーサルを行っている。

今は一段落付いて、私を含めた主要メンバー三人で休憩を取っているところだ。

「ふふ、今日はいい天気ね。走ったら気持ちよさそう……」

緑と白を基調としたいつもの勝負服を着たスズカさんが晴れ渡った空を眺めて気持ちよさそうにしている。

「はわわ……ス、スズカさん。今日はリハーサルだから走っちゃダメだよ……」

漆黒のドレスを着たライスシャワー先輩が困ったようにスズカさんを引き止めようとしている。その腰の短剣は何に使うんだろう。流石に刃は潰してあると思うけど。レース中、邪魔になったりしないのかな？

「ライスシャワー先輩、大丈夫ですよ。流石のスズカさんも今は走らないと思いますから」

「走りたいたいのはやまやまだけど、今はリハーサルに集中しないと、ね？」

心配するライスシャワー先輩に安心するように伝える。どうにも私たちは何もかもほったらかして走り出すような風に見られているところがあつて、事あるごとに心配されているのもう慣れたものではあるけれど、少しモヤモヤするものはある。

「そろそろ休憩も終わりですね。次はパドックで演説のリハーサルで終わりですから、その後コース使つて三人で少し走りませんか？」

「ふふ、それはいいわね。とつても気持ちよさそう」

「い、いいのかなあ……」

三人で談笑をしつつパドックへ向かう。正直今でも演説は苦手なのだが、今回はちゃんと台本もあるしリハーサルも行うのでいつもよ

りは気が楽だ。記者会見みたいに質疑応答があるわけでもないし、特に変なことは起こらないだろう。

「なので、みなさんっ、声援をよろしくお願いします！」

「——はい、OKです！　これで今日のリハーサルはすべて終了となりまーす!!」

ライスシャワー先輩が締めとお辞儀をしたところで、今日のリハーサルが終わる。いつもとは違うパドックの使い方に少し緊張したけれど、何とか無事に終えることが出来た。

「ふう、疲れたわね。走る前に一休みしていきましようか」

「そうですね……私も緊張しちゃいました。ちよっとお腹すいちゃったかも……」

「ライスもちよっとお腹すいちゃったかな……軽くお食事してから、コース使わせてもらえないか頼んでみよっか」

皆緊張していたのか、少し疲れ気味だ。軽く軽食を取ってから走るかどうかは決めよう。三人でパドックの裏の方に歩いていく。

——するとどこからか、『メキッ』とか、『バキッ』とかみたいな音が聞こえてきた気がした。

「あれ、何か今へんな音しませんでした？」

「そうね、したかも……蹄鉄でも割れちゃったかしら？」

「ライスも聞こえたけど……そういう音じゃなかったような……？」

何処から聞こえたかがわからず三人で首を傾げる。何かもつとこ、構造物が壊れるような音だったと思うのだが……

私はよく柵とかラチとか壊すし、そんなようなものの破壊音に近かった気がする。でもあれらもそんな簡単に壊れるようなものはなかったと思うのだが……

——バキバキバキッ……ゴツ！

「っ、危ないっ！」

ゆっくり歩きながら周りの様子を窺っていると、丁度門のところに差し掛かったあたりで門が崩れ、倒れてきた。

咄嗟に私の前に居た二人をなるべく遠くに突き飛ばして、崩落範囲

から逃れさせる。

「っ、テウスちゃん!？」

ガラガラと崩れ落ちてくる門と、それを繋いでいた部分の下敷きになる直前、私が見たのは突き飛ばされた衝撃で少し離れたところに座る二人、こちらに手を伸ばすスズカ先輩と、呆然とこちらを見ているライスシャワー先輩だった。

暫くして衝撃が収まる。結構な量が崩落してしまったみたいで、身体が殆ど埋まってしまっている。

流石に身体中ちよつと痛むが、この頑丈な体のおかげで大怪我はしていないようだ。チート様様である。

「ど、どうしよう。ライスのせいで、ライスのせいでテウスちゃんが……!」

「お、落ち着きましたよう、ライスシャワーさん。まずは人を呼んで……」

瓦礫の向こう側から先輩たちの焦ったような声が聞こえてくる。痛みが引くまでちよつと休んでいたけど、早めに無事を知らせて安心させてあげないと……

「けほつ、あー、大丈夫です、大丈夫ですから心配しないでください」
身体を押し潰さんとする瓦礫を押し退けてなんとか這い上がる。
途中、瓦礫に勝負服をひっかけてしまい所々破けてしまったが、致し方ない犠牲だろう。

「ほ、本当に、本当に大丈夫なの？ 何処も痛くない？」

「まあちよつとは痛いですけど、何処も大きな怪我はしてませんし問題ないですよ？」

「ウソでしょ……あれでほぼ無傷なの……?」

ライスシャワー先輩は私の無事を確かめるように身体をペタペタと触ってくるし、スズカ先輩は信じられないような顔をしている。

まあ、自分自身正直信じられないとは思うけれど、無事なんだからそれを喜んでほしい。

「ラ、ライスシャワーさん！ サイレンススズカさん！ ブラックプロテウスさん！ 大丈夫でしたか!!?」

スタツフさんが血相を変えてこちらに駆け寄ってくる。一般的に見れば大事故だ。この反応も仕方ないだろう。

「す、すぐに救急車が来ますから！ 三人とも安静にしててくださいね！ トレーナーさんもすぐ駆け付けるそうなので！」

そう言うってから何度か平謝りした後、バタバタと慌ただしくスタツフさんが駆けていく。流石に辺り一帯騒然としていて、ここは大人しくしておいた方がよさそうだ。

「ごめんねテウスちゃん、ライスのせいで……」

「ライスシャワー先輩のせいじゃないですよ！ あんなにいきなり崩れてくるなんて誰にもわかりませんって！」

「そうよ、あんまり自分を卑下しちゃ……っ」

落ち込むライスシャワー先輩をスズカさんと二人で慰めていると、スズカさんが顔を顰める。少し左足を気にしているようだ。

「スズカさん、何処か怪我を……？ ごめんなさい、私が強く突き飛ばしすぎちゃったから……ライスシャワー先輩も痛いところはないですか？」

「ちよつと捻っただけだから、大丈夫よ。この後病院にもいくだろうし、このくらいなら問題ないわ。それに、テウスちゃんが突き飛ばしてくれなかったらこの程度じゃ済んでいないもの」

「ラ、ライスは大丈夫だよ……ごめんなさい、ライスがもつとっしっかりしてないといけなかったのに」

結構強く突き飛ばしてしまったのが逆にいけなかったのか、スズカさんを捻挫させてしまったようだ。ライスシャワー先輩は無事なようだ、落ち込みが酷い様子だ。落ち着いてからちゃんと話し合おうと……

そうこうしているうちにトレーナーさんと救急車が到着し、三人とも病院で検査を受けることになった。

「ブラックプロテウスさんは全くの無傷。本当に瓦礫の下敷きになったの、これで？ 無傷だけど頭打ってるみたいだし、経過観察で3日間は入院してもらおうかな。ライスシャワーさんは特に所見は認められないけど、一応経過観察ね。痛みが出てくるようなら一度かかりつけのお医者さんに相談してね。サイレンススズカさんは捻挫だね。靭帯部分断裂とまではいかないけれど、全治2週間ってところかな。その間は強い運動はしないように」

救急車で運び込まれた病院で先生に診断を受ける。まあ、私は頭もちょっとぶつけたし、検査入院くらいは覚悟していたが……

「2週間……間に合わないわね。でも、仕方ないわ。無理して怪我を酷くするわけにはいかないもの。ごめんね、テウスちゃん」

2週間安静ということは、2週後の宝塚記念にはぎりぎり間に合わない。

開催時には完治しているじゃないかと思われるかもしれないが、それまで走れなかった以上、十分な調整が取れないままレースに挑むことになる。

それは万全の状態に仕上げられないということだし、身体が走ることに慣れていない状態ではレースに出走するのは怪我の危険が伴うことになる。

トレーナーさんもそんな状態じゃ出走は許可しないだろうし、今回は見送るしかないだろう。

「ごちそうございめんなさい……もうちょっと考えて行動するべきでした」

「ううん、あの時はきつとあれが最善だったわ。気にしないで、軽い捻挫で済んでよかったですくらいなもの。もし巻き込まれていたら……ね？」

スズカさんを怪我させてしまった。もっとやりようはあったはずなのに、それが悔しくて仕方ない。

スズカさんは大丈夫だと私を撫でてくれているが、ちょっと暫く立ち直れそうにない。

ライスシャワー先輩も俯いて落ち込んでいるようで、今はちよつと建設的なお話は出来なさそうだ。

お医者さんに三人でお礼を言つて、診察室を後にする。待合室ではスタッフさんとトレーナーさんが何かお話をしていたようで、こちらに気付いた二人がこちらに近寄つてきた。

「ライスシャワー、スズカ、テウス。大丈夫だったか？ 診断結果は？」

「あ、はい。私が軽い捻挫で2週間安静、ライスシャワーさんは異常なしだけど経過観察、テウスちゃんはいつもの検査入院です」

「そうか、大怪我じゃなくて何よりだが……でも、丁度良かったかもしれないな……」

「え、それって……？」

報告を聞いたトレーナーさんが少し不穏なことを口にする。思わず聞き返すと少し言い辛そうにしていた。

「いえ、沖野さん。ここからは運営スタッフとして、私から。ライスシャワーさん、サイレンススズカさん、ブラックプロテウスさん。この度はご迷惑をおかけしまして、誠に申し訳ありませんでした」

話を引き継いだスタッフさんがこちらに深く頭を下げる。放つておいたらその場で土下座でもしそうな雰囲気で、つい三人で同時に止めようとしてしまったくらいの勢いだった。

「——そして、貴女方にはまだ謝らないといけません。今回のセレモニー、そして、宝塚記念……阪神での開催は見送るだろうとの通達がありました」

スタッフさんはそう言つてもう一度深く、深く頭を下げた。

その内容に、息を呑む。

曰く、今回のパドックでのアクシデントは、原因が全くの不明。しかもサイレンススズカという怪我人——思いつき突き飛ばした私为主要因だと思うのだが——を出してしまったし、私に至っては下敷きになったうえ検査入院とはいえ入院することになってしまった。

大きな怪我ではないとはいえ大惨事になりかねなかった事は間違いない、それならばレース場を再点検する必要があるだろうと。

そうなる点検や修繕などを含めて、最短でも3週間は必要になると判断されたとのことだ。

宝塚記念は、今日から2週間後だ。つまり――

「それじゃあ、宝塚記念に、間に合わない……」

ライスシャワー先輩が、ぼそりと呟く。きつと思っていることは、みんな一緒だろう。

「このようなことが無いよう我々も日々、努めてはきていたのですが、何分前例もないことで……皆さんにも、宝塚記念を楽しみにしていただいていたファンの方々にも、申し訳が立ちません……」

スタッフさんが悔しそうに、瞳に涙を湛えて歯を食いしばっている。

きつと彼らも、年に一度の大舞台の為に、並々ならぬ努力をしてきたのだろう。それがこんな形で潰されてしまったては、やりきれないというものの理解できる。

「今まではなかったのに……ライスが、ライスが来て、突然……? やっぱり、ライスのせい……」

その小さな、小さな声が、やけに大きく聞こえた。

「誰のせいでも無いですよ、ライスシャワー先輩。誰が悪かったわけでもないんです。だから、自分のせいだなんて、そんな風に抱え込まないでください」

今にも折れてしまいそうだった雰囲気彼女の彼女を気が付いたら抱きしめていた。

「……うん、ありがとう、テウスちゃん。それに、大丈夫だよ。ライスにも、出来ること……一つ、思いついたから」

そう言っ私を見上げるその瞳は涙に濡れていたけれど。一つの決意を感じられた、意志の籠った瞳だった。

第三十七話 運命の宝塚

無事退院して学園に戻ってきた日、放課後に辿り着いたトレセン学園は何だか騒がしかった。

多分阪神レース場が使えなくなった事に関するものだろうが、何かあったのだろうか？

戻ってきたらたづなさんに連絡してくれと言われていたが、この状態で連絡しても大丈夫なんだろうか……？

メッセージを送ってみると、すぐに理事長室に来てくれと返事が返ってきた。恐らく宝塚記念に關してのことだろうか、それとも検査結果のことに關してだろうか。

検査結果に關しては問題ないと先に伝えておいたはずなのだが……自分の目で確かめないとわからないということだろうか？

ここでのんびりしていても始まらないので、走って理事長室へ向かう。階段を何段か飛ばして駆け登り理事長室へと駆け込む。

何故だか扉が全開になっていたのでそのまま駆け込むと、そこには困ったように笑うたづなさんと、頭の上に猫を乗せた理事長と、理事長に深く頭を下げているライスシャワー先輩がいた。

「……え、何ですかこの状況」

そんな眩きを漏らしてしまっただけで、私は悪くないと思う。というか何でこの状況で私はここに呼ばれたんだろう……

「歓迎！ 無事に戻ってきてくれて何より！ 君に話したいことがあって、急だが呼ばせてもらった！ まずは座ってくれ！ 勿論ライスシャワー君もだ！」

「え、あ、はい……失礼します」

「は、はい！ わかりまひゃっ、うう、噛んじゃった……」

扇子をバツと広げた理事長に促されソファーに腰掛ける。理事長の目の前にいたライスシャワー先輩は隣に腰掛けてちよつとそわそわしている。ちよつとかわいいかも……？

「……あ、あの。テウスちゃん……何でライスを撫でてるの……？」
「え？ あ、えつと……つい？」

無意識のうちにライスシャワー先輩を撫でてしまっていた。撫で心地が良くてついそのまましばらく撫で続けてしまう。

ライスシャワー先輩は戸惑いながらも振り払うようなことはしてこなかった。折角なのでこのまま満足するまで撫でさせてもらおうことにしよう。

「うむー。仲が良いようで何よりだ！ 先にライスシャワー君には話したが、君たちをここに呼んだのは他でもない！ 宝塚記念に関しての決定事項を知らせる為だ！」

「宝塚記念……ですか？ 阪神レース場が使えない以上、開催中止だと思っていましたか？」

流星にあの状況で開催するのは厳しいだろう。かわりにラジオNIKKEI賞でも出ようかと考えていたのだけれど……

「確かに阪神レース場は使えないが、安心してほしい！ 今回！ 宝塚記念は代わりに京都レース場で開催されることと相成った！」

つまりは、代替開催ということか。確かに宝塚記念は過去にも京都レース場で開催されたことがあるはずだ。代替開催の為の下地は整っているとと言えるのかもしれない。

ただ、それはあらかじめ使えないということが分かったうえで代替をされているものだ。今回のような突発的アクシデント、しかもほんの数日しか経っていないのに、ここまで迅速な対応ができるものなのだろうか……

「ブラックプロテウス君の疑問もわかる！ 今回の代替開催が決定したのは我々学園とURAの思惑、そしてここにいるライスシャワー君の尽力があつてのものだ！」

理事長曰く、URAが動き出すより前にライスシャワー先輩があらゆる伝手を使って宝塚記念が京都レース場で開催できるように根回しをしていたらしい。

運営をする為のスタッフはもちろん、URAの役員、雑誌や新聞の記者、更にはテレビ局の関係者にすら連絡をして居たという。

凄い行動力だ。私だったらすぐに諦めてトレーニングに意識を切り替えていただろう。というか、もう半ば切り替えて他の地方のレースのどれかにでも出ようかと考えていたくらいだ。

彼女のその執念とも言えるほどの強い想いが、可能性を手繰り寄せたのだろう。素直に尊敬するし、見習わないといけないと思う。

「そうなんです。ありがとうございます。ライスシャワー先輩。お陰で問題なく走れそうです」

「ラ、ライスは大したことはしてないから……でも、いいの？　今回はスズカさんは出れないみたいだし……宝塚記念じゃテウスちゃんの目的は達成できないよ？」

「同意！　今回私がブラックプロテウス君を呼んだ理由もそれだ！

宝塚記念を回避する可能性もあると思った故に呼ばせてもらった！」

ライスシャワー先輩が言った言葉に、理事長が同意する。公言していた目標が目標だけに、出走するのかどうかの意思を聞きたかったのだろう。

「出ますよ。確かにスズカさんは出ませんが、今日の前に現役最強のウマ娘が居て、その娘と全力で対決できるなんてそんな機会逃したくありませんから」

今年の天皇賞・春を制したライスシャワー先輩は、間違いなく現役最強だ。あの重バ場の京都で、最後の最後まで粘り、勝ちを挽ぎ取ったその実力は確かなものだろう。

そんなウマ娘と対決できるのなら、回避する理由なんてないと思うのだけれど。

「君は現在二冠、しかも無敗の二冠ウマ娘だ！　クラシック二冠を獲ったウマ娘がクラシック級で宝塚記念に挑む、というのは前代未聞。更に、トウカイテイオー君が、ミホノブルボン君が達成出来なかった無敗の三冠ウマ娘の誕生を望む声は内外共に大きい！　故に！　宝塚記念は回避し、菊花賞へ備えるべきだという意見も根強くあることにも留意してほしい！」

扇子を広げこちらを真剣な目で見つめてくる。

今までクラシック級のウマ娘が宝塚記念に挑み、勝った記録はな

い。それどころか3着にすら入ったことはなく、去年のダービーウマ娘、ウオツカ先輩ですら8着に沈んでいる。

それだけグランプリレースというのは層が厚く、実力者揃いということだ。ネイチャ先輩のように何年も連続で連下に入れるような実力者だっているわけだし。

ただ、今回ネイチャ先輩は宝塚には出ない。先の京都記念の後に骨折をしてしまい、現在療養中だからだ。

テイオー先輩がリハビリを手伝っていたので、多分秋ごろには復活してくると思うけれど、今年の有《font:ul40》馬《font:ul40》記念は難しそうだ。

今年こそはまた3着に入ってくれるかと楽しみにしていたのに……いや、流石にそれは失礼か。

「私が欲しいのは無敗の称号ではありませんから。私は、全てのウマ娘の憧れになりたい。だから目の前の、現役最強のウマ娘から、逃げることは出来ません」

レースでは逃げますけれど。と冗談っぽく一言加えると、理事長は満足そうに笑い、

「で、あるならば、私からは何も言うことはない！ 一教育者として、君の挑戦を応援するものである！ 君のその選択を批判するものがあれば、私が対処しよう！」

と、心強いことを言ってくれた。外見は私とそう変わらない年齢のように見えるのに、流石は理事長、心強いものである。

「テウスちゃん……ライス、負けないから。全力で、走るね」

こちらの様子を窺っていたライスシャワー先輩が、話が一段落したのを見てかこちらに声を掛けて来てくれた。

うなじのあたりにチリチリとした感覚を覚える。これが黒い刺客、ライスシャワーが放つ重圧なのかと思うと、ちよつと楽しくなってしまう。

「はい。私も負けません。いいレースにしましょうね、先輩」

手を出してライスシャワー先輩と握手をする。わ、手ちっちゃい……やわらかい……すべすべ……

「えっと、あんまり触られてるとライス困っちゃうんだけど……あ、ところで、テウスちゃん。宝塚記念に出るなら、勝負服大丈夫だった？ 確かあの時、ひっかけて破けてたよね？」

「……あ、っ!!」

ライスシャワー先輩の手の感触を堪能していると、そんな一言に現実に取り戻されたのだった。

「勝負服か……確か仕立て直しから戻ってくるまで一ヶ月ちよつとだから……最優秀ジュニアウマ娘の時に貰った勝負服にするしかないんじゃないか？」

大急ぎでスピカの部屋に戻りトレーナーさんのところに相談に行くこと、そんなお返事を貰った。

「あ、あれですか……私には似合わないと思うんですけど……」

最優秀ジュニアウマ娘の時に貰った勝負服は女優さんがパーティかなにかに着ていくようなセクシーなドレスで、ちよつと露出が多かった。

スズカさんやスカーレットさんと色違いでお揃いなんだけど、私にはちよつと似合わないんじゃないかと思うデザインだ。露出が多い服は滅多に着ないので、少し不安だし。

「プロがデザインしてるんだし問題ないだろ？ お前はスタイルもいいんだし、全然似合うと思うけどな？」

「……セクハラですか？」

「ちがっ!! 違うから関節技はやめてくれ!!」

ちよつとからかつてみるとビクツとして後退る。私はトレーナーさんに関節技掛けたことないんだけどな……

「私はしませんよ、私は。他の先輩たちの前で言ったらどうなるかわかりませんけど」

「怖い事言うなよ……」

「私もしませんよ？ テウスちゃん、勝負服だけであれくらいなら全

然ましな方よ？ エアグルーヴなんてウエディングドレス着て走ってたんだから」

トレーナーさんの背後からひよつこりとスズカさんが現れて爆弾発言をしていく。

水着を着て走っていた娘が居るらしいと聞いたことはあるけれど、まさかウエディングドレスだなんて……そのうち着ぐるみを着て走る娘すら現れそうだ。

「それに、私とお揃いの勝負服を着ているところ、見てみたいわ。ダメかしら？」

「今すぐ着替えてきますね！」

スズカさんのお望みとあらば仕方ない。

そしてその日はそのまま、スズカさんと一緒に勝負服の着合わせを考えて過ごしたのだった。

『京都レース場、本日のメインレース。宝塚記念！ いよいよ本バ場入場です！』

入場のアナウンスが流れて、地下バ道からターフへ出ていく。

今日の私は1枠で1番。その為一番最初に出ていくことになる。

『このウマ娘にとっては絶好の最内枠となりました。本日の1番人気、1枠1番ブラックプロテウス！ 芝2200mレコードホルダーです！ 稍重の今日、果たしてレコード更新はあるのか！ 期待が高まります！』

バ場に出て行って軽く手を振りながらターフを走ってみる。

今日は曇りで稍重。今日のシューズはドレスに合わせた低めのヒールで、どんなものかと思っていたけれど、それでも結構走りやすそうだ。

新しい勝負服は胸元こそ開いてはいないが、ホルターネックの青いドレスで肩も出てるし背中なんてかなり大胆に開いている。

シューズも服も、本来なら走れるようなものではないと思うんだけど、勝負服となると何故だか問題なく走れるのは凄いと思う。三女神

様に感謝しないと。

『およそ1年1か月ぶりの出走です、5枠9番ナリタタイシン！ 骨折や屈腱炎を乗り越えての久々の出走となりました。休養明け、ぶっつけ本番ですが実力を発揮し切れるか！』

暫く慣らしに軽く走っていると、BNWと評されたうちの一人、ナリタタイシン先輩の名前が呼ばれた。

あまり交流がない先輩ではあるが、確か皐月賞ウマ娘だったはずだ。

多少身体が弱いところがあるのか、度重なる故障に悩まされていると聞いたことがある。それでもこのグランプリレースに出走してくるあたり、根強い人気があるのだろう。

今日のパドックと返しウマを見た限りでは、本調子とは程遠そうだ。走りにより脅威を感じないので、マークしておく必要はないだろう。

『人気投票第1位！ 当日人気こそ3位に下がりましたが実力は本物です。今年の天皇賞・春で奇跡の復活を遂げた、淀の女神に愛された孤高のステイヤー。8枠17番ライスシャワー！』

暫くナリタタイシン先輩の様子を窺っていると、ライスシャワー先輩の名前が呼ばれた。

ここ淀、京都レース場で行われたGIレースでは負けなし。菊花賞と天皇賞・春を二度、計GI3勝のウマ娘。

間違いない、このレースで気を付けないといけないウマ娘の一人だろう——彼女が、本調子であったなら。

今日の彼女は、パドックからなんとなく違和感を感じる。何処が悪いのかははっきりは言えないが、何かが起こりそうな、そんな不安が拭えない。

きつと観客の人もそう感じたのか。最終的な人気は3番人気に下がってしまったている。

心配になって一度声を掛けようとしたのだが、その気迫に近寄ることが出来なかった。

このレースに全てを懸けているような……そんな雰囲気を感じて、

声を掛けるのをためらってしまったのだ。

『全18人のウマ娘が此処、淀の舞台に出揃いました。クラシックの新星がその輝きで魅了するのか、シニアの猛者たちがその貫録を見せてつけるのか。宝塚記念。いよいよファンファーレです！』

今からでも声を掛けるべきだろうか……そんなことを考えながら、返しウマが終わってゲート前に集まっていると、ファンファーレが鳴った。私は1枠1番、最内枠だから一番最初にゲートに入らねばならない。

声を掛けられなかったのは少し心配だが……こういった経験は、ライスシャワー先輩の方が豊富だろうし、彼女自身が向き合う問題なのかもしれない。

私に出来ることは、戦う皆に失礼にならないように、全身全霊で戦うことだけだ。

『票に託されたファンの夢。思いを力にかえて走るグランプリ、宝塚記念！ ゲートイン完了。各ウマ娘出走の準備が整い、今——スタートしました！』

——そうして。私たちの運命の宝塚のゲートが今、開いたのだった。

第三十八話 淀の夢

『各ウマ娘綺麗なスタートを切りました。先頭に行くはやはりこの娘、ブラックプロテウスだ！ 逃げる逃げる、早くも先頭！ 2番手以降は若干固まり気味か！』

いつも通り最初から全力で飛ばし、先頭を確保する。

『大きく離れて二番手以降は団子状態、タヴァティムサ、リボンカプリチオ、ポルカステップの三人がやや前に出たか。ライスシャワーは中段後方、無理には行きません。第1コーナーから第2コーナー辺りを回って、ナリタタイシンは後方から二番手あたりを追走しています』

スタートダッシュに成功し、第1コーナーまでに後続を引き離すことに成功した。

恐らくライスシャワー先輩が仕掛けてくるとしたら坂の手前あたりだろう。そこまでするべくリードを付けて、差し切られないようにしたい。

いつも通りコーナーは最内を速度を落とさずに曲がる。

今日のシューズは今までとは違ってヒールタイプのものだが、今回のシューズは重量を度外視して耐久性にのみ特化させたものだ。

通常のシューズよりかなり重さがあるが、これでも規定限界ギリギリの重量なのでルール上は問題ない。

本当はデザイン上ハイヒールにする予定だったそうなのだが、耐久性重視でお願いしたところローヒールになったのだけはデザイナーさんには申し訳なく思っているのだけだ。

『向こう正面に入って先頭は変わらず、ブラックプロテウス。後続とは既に4バ身以上の差が開いています。二番手以下は混戦状態ですが、若干リボンカプリチオが前に出ているか。ライスシャワーも外から上がってきます。ナリタタイシンは後方からまだ仕掛けない！』

今日はとても調子がいい。いつも以上に脚は回るし、とても走りやすい。

早くも周りから音と色が消えて行って、自分だけの世界に入ってい

くような感覚になる。

トレーナーさんは『領域』がどうの言っていたけれど、仕組みはよくわからなかった。正直、気持ちよく走れるならそれほど深く気にするようないじゃないと思うけれど、何やら大事なものらしい。

じりじりと後ろから迫ってくるのを感じながら、坂に向けて加速する。淀の坂はゆっくり登ってゆっくり降りるのがセオリーらしいけれど、そんなこと気に出来るほど私は器用じゃない。

最初から最後まで全力で。最終的に先頭でゴールできればそれで勝ちなんだから、深い事なんて考えず、自分の思うままに走ればいいんだ。

『外からライスシャワー！ 坂を手前にライスシャワー早くも仕掛けた！ 外から集団をごぼう抜きにして前方に迫る！ 他の娘たちも負けじと加速して中団は纏まったまま！』

ちらりと後ろを振り向くと、色を失った私の世界に、小さな蒼い炎が移り込んだ。やはりライスシャワー先輩が来ているようだ。

前を向いて、目の前のレースにさらに集中する。自慢の聴力でいつもなら聞こえる実況さんの声すら途切れ途切れになって、ただ自分の呼吸と、足音だけが響く。

後ろは見えない。私に出来るのはいつだって、ただ全力で走り続けることだけなんだ。

もしそれで追い付かれるのであれば、それは私が遅くて、相手の方が速いだけ。それだけの単純なことだ。

だからもう後ろは気にしない。どんなことがあつたって、前に進み続けられるならそれでいい。

第3コーナーを前に坂に入る。ここから第3コーナー半ばまで登り、そこから一気に降るのがこの淀のコースだ。仕掛けてくるとしたら、きつとここしかない。

だから私も、脚を鈍らせることなく坂を駆け上っていく。坂の練習量であるならば、私は誰にだって負けない。一日中坂路を走っていることだってある私にとっては、坂道なんて得意中の得意だ。

『大歓声が、ライスシャワーどうしたライスシャワーどうした!! 転倒、転倒している! 大波乱! 大波乱! 第3コーナーの下りである、あの天皇賞では先行でわたったライスシャワーが転倒しています!!』

坂を登り終えて駆け下りていると、不意に、軽く、高く。パキッだとか、パンツだとか。そんな、まるで竹が割れた時のような。そんな音が私の世界に響き渡ってきた。

何か踏んでしまっただろうか。少しだけ足元を見るが、特に何もなさそうだ。辺りがざわつき実況さんが何か言っているようだが、良く聞こえない。

特にレースが続行できないような状態になったわけでもなさそうだし、気にせず前に進む。結構なハイペースになっていると思うが、まだまだスタミナは持ちそうだ。

坂を降り終えて、第4コーナーに入る。ここからはほぼ平坦。そして直線は400m超ある。

重心を思いつきり低くしてコーナーを曲がり切り、一気に加速する体勢を取る。靴も丈夫なものを手配したし、多分全力で加速したって耐えきれれると思う。

後ろから他のウマ娘が迫ってきているような感覚を感じているし、出し惜しみなんてしない。

骨がミシツと軋むような感覚を覚えるが、気にせず脚に力を籠めてただひたすらに前に進むことだけに力を使う。

『最終直線に入ってもブラックプロテウス先頭! 外からタヴァアティムサ、ポルカステップも追いつがるが、ちよつとこれは差が縮まりそうありません! 私の夢、ブラックプロテウスが内から更に伸びていく! これは決まったか!』

前には誰もいない。このまま何処まででも駆け抜けていけそうな、そんな感覚を感じながら、先頭を駆け続ける。

『外からタヴァアティムサ差を詰める、差を詰める! 差を詰めるが――1着はプロテウス! ブラックプロテウス1着! 最内を駆け続けたブラックプロテウスが先頭を守りきり1着! あつと審議審議、

このレースは審議の青ランプが点いていますが、1着は変わりないでしょう！ ブラックプロテウス、クラシック級のウマ娘として初めて、宝塚記念を制しました！』

音と色が戻ってくるのを感じながら、ゴール板を駆け抜ける。結構後ろは迫ってきていたみたいだが、それでも3バ身くらいはリードしていたようだ。少しずつ減速しながら周りを見てみる。

——だがそこには、ライスシャワー先輩の姿はなかった。最後方あたりにナリタタイシン先輩の姿は見えただけ、どうしてもあの黒い小さな姿を見つけないことが出来ない。

周りも歓声はいつもより小さく、どちらかというとどよめきの方が大きい気がする。

不思議に思いつつも、第1、第2コーナーを回り、ウイニングランを始めようとすると——

第3コーナーの半ば、降り坂が始まる辺りに、小さな黒い姿を見つけた。

——内ラチに掴まって、必死に立ち上がって、前に進もうとするその姿を。

なんで彼女は、まだあんな所にいるんだろう。

何で彼女の脚は、あんなにプラプラと、まるで折れたかのようになっているんだろう。

——それなのにどうして、彼女は、まだ前に進もうとするんだろう。

頭で答えが出るよりも早く、脚は前に進んでいた。

彼女の周りには係員さんたちが居て、彼女を止めようとしている。それでも彼女の脚は止まっていない。ただひたすらに、一歩ずつ前へ進んでいつている。

あのまま彼女を歩かせると、取り返しがつかないことになる。そんな予感がして、再加速して彼女のところへ向かう。

だいたい800mくらいを一気に駆け抜けて、彼女の元へ辿り着いた。今にも倒れてしまいそうで、だがそれでも係員さんの制止を振りほどいてまで、前へ、前へ進もうとしている。

係員さんたちもこの状態の彼女を無理矢理止めることには躊躇っているのか、何とか説得を試みようとしているが、多分彼女が止まることはないだろう。

「ライスシャワー先輩！」

必死に彼女の名前を呼び、彼女を引き留めようとする。一瞬こちらを見てくれたと思ったが、すぐ前に向き直って前へ歩こうとする。

彼女を、これ以上歩かせてはいけない。ウマ娘としての本能か何かが、これ以上歩かせてはいけないと警鐘を鳴らす。

彼女を後ろから抱きしめて、そのままゆっくり後ろに倒れ込む。なるべく彼女の折れている左脚に衝撃が掛からないように、細心の注意を払う。

この小さな、ボロボロの身体の何処にそんな力があるのかと思うくらいので抵抗されたが、力勝負ならそうそう私は負けない。何とか彼女を抑え込んで、ターフに寝かせる。このまま救急隊員さんがストレッチャーを持ってくるまで抑え込めば流石に大人しくなってくれるだろう。

「離して、離して、テウスちゃん……ライスは、ライスはゴールしなきゃいけないの……」

「その脚では無理です、ライスシャワー先輩。これ以上その脚に負担を掛けたら二度と走れなくなりますよ！」

現状でも彼女の脚は酷い状態だ。あの時のスズカさんと同等、またはそれ以上の状態だろうと思う。

こんな状態でこれ以上走れるわけがない。走れたとしても、ただでは済まない事態になる。

それこそ——命を脅かす状態になったっておかしくない。

「ライスは、ライスを信じてくれた、ファンの人たちの為にも、そして、トレーナーさんの為にも、ライスは、ゴールしたいの……だから、離してっ！ 二度と走れなくなっただって、ライスは、ライスは——!!」

だけど、同じウマ娘としてライスシャワー先輩の言うことも、分かってしまう。

誰かの夢を、誰かの希望を、誰かの期待を背負って走っているのに、応えたいという気持ちは、痛いほどわかる。

私と同じ立場だったとしても、迷わず走ることを選択するだろう。たとえその後がどうなってしまったって、構わない。そう考える気持ちも、よくわかる。

——
だけど

「……ごめんなさい。ライスシャワー先輩、恨んでくれていいですか。貴女をこのまま、走らせることは、出来ません」

腕に力を籠めて、彼女をしっかりと抱きしめる。

今ここで彼女を走らせても、きつとフアンの人たちは喜ばない。

それよりこの怪我を最小限で留めて、後に復帰してくれた方が、きつとフアンにとっては嬉しいと思う。

ライスシャワー先輩当人にとっては、傍迷惑なことだろう。余計なお世話だと怒られたって仕方がないことを私は知っている。

それでも——二度と走れなくなってしまうよりは、ずっといい。

「……なら、お願い、テウスちゃん。ライスを……ゴールまで、連れて行って」

その言葉を聞いて、彼女を瞳を見る。しつかりとした意思を感じる瞳だ。何を言って聞かせたって、彼女が折れることはないだろう。

そう感じて彼女を抱きかかえる。なるべく脚に負担がかからないように、ゆっくりゆっくりゴールまで歩いていく。

「ブ、ブラックプロテウスさん！ やめてください！ 今ライスシャワーさんを動かしていい状態じゃないのはわかるでしょう！」

係員さんが私を引き留める。彼の言っていることは、確かに全面的に正しい。あのまま彼女をあそこから動かさない方がいいのだということも、頭ではわかっている。

「ごめんなさい。責めは後で私が全て負います。だから今は、引き留めないでください」

——
だけど、これは理屈じゃないんだ。ライスシャワー先輩だって、こ

んな形でゴールしたって意味がないことくらいはわかっているだろう。

それでも。今この宝塚記念のこの舞台上で、彼女がゴール板をくぐることに、何か意味があると思うから。

周りの制止をすべて振り切って、ゴールへ一歩ずつ進んでいく。ライスシャワー先輩に負担を掛けないように進んでいるから、普通の徒歩より遅い。ここからゴールまで残り600もないのに、15分くらいだろうか、今回のレース時間の6倍以上の時間をかけて、ようやくゴール前に辿り着く。

周りは異様なほどに静かで、ファンの人たちが息を呑む音だけが聞こえてくる。

ゴール前残り数歩までたどり着くと不意にライスシャワー先輩が服を引っ張る。

言葉を交わすことなく、彼女をゆっくりその場に降ろす。

歩かせてはいけない、頭ではそうわかっている。でも、最後の数歩くらいは、自分の脚でゴールしたいんだろう。彼女の脚に負担がかからないように支えて、二人で一緒にゴール板をくぐる。

「ありがとう……テウスちゃん」

そういつて微笑んで、糸が切れたかのように意識を失い倒れ込んだライスシャワー先輩を咄嗟に受け止める。

相当痛むだろうに、よく頑張ったと思う。

意識を失ったライスシャワー先輩を抱きかかえて救急車の方へ歩いていく。

多分、今日の宝塚記念の真の勝者は彼女だ。

だって、きつと今日のことは、私より彼女の方が皆の心に残っただろう。

どんなになっても諦めずに、最後までゴールへ向かうその姿勢は、誰の臉にも焼き付いたことだろう。

「隊員さん。見守ってくれてありがとうございました。ライスシャ

ワー先輩を、よろしくお願いします」

「あ、は、はい！」

用意されていたストレッチャーにライスシャワー先輩を寝かせて、頭を深く下げる。彼らには迷惑を掛けてしまった。彼らに何かお咎めがなければいいのだが……

「えっと……ブラックプロテウスさん。後で検量室に来ていただきたいも……?」

「ええ、わかっています。後でと言わず、今すぐ伺います。どんな処分でもお受けします」

遠慮がちに係員さんが声を掛けてくる。覚悟の上で起こした行動なので、致し方のないことだ。

レースには関わらないことなのでレース結果が変わることはないだろうが、数週間ほどの出走停止処分や罰金くらいは受けてしまってもまあ仕方のないことだろう。

当然それも覚悟の上だったのだが、トレーナーさんに迷惑が掛かってしまうことだけは何とか避けるようにしないといけないな。

そう思いつつ、係員さんの後をついていくのだった。

第三十九話 宝塚記念を終えて

検量室に呼ばれた後、お説教を受けた後解放された。

係員さんの制止を振り切つて、一応まだ競走中のライスシャワー先輩に手を出してしまったわけではあるが、着順には関わらない行動だったためにトレーナーさんには過怠金1万円、私には中央の開催6日間、つまり3週間ほどの出走停止処分です済んだ。

暫く中央GIがないこの時期に3週間の出走停止は普通のグランプリウマ娘なら実質お咎めなしに近い処分だ。この時期、それなりに結果を残しているウマ娘は療養したり夏合宿に励んだりするので、7月前半に走れなかったところで通常問題なんて存在しない。

ジャパンダートダービーに出走できなくなつてしまったのだけは心苦しい。ファル子先輩との約束を果たせないのは心苦しいが……かわりにシリウスステークス辺りにでも出走してみようかな？ JBCシリーズでもいいんだけど、JBCは天皇賞・秋から一週間空いてないから、天皇賞に出たら出走できないのが難しいところだ。

私が制止を振り切つてしまった係員さんはちよつと、いやかなり重い処分を受けてしまったようで……後でお詫びに菓子折でも持つていくべきだろうか。グラスさんがオススメの和菓子があると言つていたので後で紹介してもらおう。

「トレーナーさん、ご迷惑おかけして申し訳ありませんでした。過怠金に関しては私がお支払いしますから……」

「いや、別に俺はいいんだけどよ……あんまり自分の立場を悪くするようなことするんじゃないぞ？ 放つておけなかつたのはわかるし、悪い事ではないと思うけどな。後、過怠金の事は気にするなつて」

ぽんぽんと頭を撫でられながら一緒に控室に向かう。今日はウイニングライブもないので、着替えたならそのまま学園へ帰ることになる。

普段なら一人競走中止になつたくらいであれば実施することもあ

るのだが、今回の宝塚記念、1着の私が自身の持っていた2200mのレコードを0.1秒更新するほどの高速バ場になっており、その影響が分からないが、3バ身、およそ0.5秒差で2着のタヴァティムサ先輩や4着のオクシデントフォー先輩、15着のアーケードチャンプ先輩、17着のナリタタイシン先輩と、現時点で屈腱炎が発覚しているウマ娘が4名もいる上、脚に違和感を覚えている娘がその他にも数名いるらしい。

明らかに大惨事だったライスシャワー先輩の状態を見てしまったファンたちも多く、まともにライブなんて出来る状況ではないので、今回はライブは中止となってしまっている。

正直この状態で『Special Record!』なんてバチバチに明るい曲踊れる気しないし……とつてもいい曲なんだけど。

代わりに後日、記者さんたちを集めて公開インタビューを受けることになってしまったが……落ち着いてから受ける分には構わないだろう。

「トレーナーさん、ライスシャワー先輩のご容態は……やっぱり私も今から病院に……」

「いや落ち着け、さつき運ばれたばっかだろう。結果が出るまでにはもう少しかかるからな？」

そう言われても落ち着かない。最後歩かせてしまったのはやはり良くなかったのでは無いか、あの時は何かに呑まれたようになってしまったって彼女を降ろしてしまった。

たった数歩だったが、それによつて怪我が酷くなったりしていないと良いのだが……

「まあ、着替えた後お前も病院に連れていくし、気になるならそこで聞いてみたらどうだ？」

「そうですね。そうします……つて、え？」

「いや、お前走つてるときに脚気にしてただろ？ 多分大丈夫だとは思いますが、脚に違和感がある娘もたくさん出てるし念のために検査しような。大分スピードも出してたし何かしら起こってるかもしれない。多分大丈夫だと思うが」

どうやら見られていたらしい。ちょっとミシつとிட்டたのは確かだが、もう何ともないのだけれど……というか、何故大丈夫だと二回も言われたのだろうか？

まあ、無理矢理搬送されないだけマシというべきか。最近はずいぶんしてから連れていかれるようになってたし……

そろそろ予防接種とかも受けなおしておこうかと思っているし、ついでに相談してみよう。いつもの病院じゃないからいきなりだと厳しいかもしれないけれど、相談するだけなら構わないだろう。無理ならそこからのいつもの病院に連絡してもらえばいいわけだし。

折角だし他の先輩たちも一緒に受けられないか確認しようかな。確かテイオー先輩がまだ予防接種受けていなかったはずだし、そろそろ受けないといけない時期だ。合宿前に受けてしまえるならそれが一番だろう。

うんうん、それが良さそうだ。纏めて済ませてしまった方がトレーナーさんも楽だろう。ライスシャワー先輩の様子も聞けるし、一石で何鳥にもなるというものだ。

いい考えが浮かんだことにちよつと落ち込んでいた気分を切り替えて、素早く着替え始めた。

「この後はライスのお見舞いとテウスの検査だけだと言ってたよね！！？」
「何でボクがお注射されないといけないのさー！！！」

MRI検査を終えて戻ってくると、病院内にそんな声が響き渡った。

どうやら診察室内でテイオー先輩が最後の抵抗をしているようだ。なんだかんだ言ってるやらなければならぬことは最後にはちやんとやるのでそのうち静かになるだろう。

ひとまずは放っておいて、ライス先輩の様子を見に行きたいのだが……トレーナーさんはテイオー先輩の付き添いに行っているみたいだし、どうしたものか。

私が聞きに行つてライス先輩の病室を教えてもらったりは出来る

んだらうか……

「あら、おかえりなさいませテウスさん。何も無いようで何よりですわ。さ、ライスさんのところへ行きますわよ」

「あ、マックイーンさん。まだ結果が出たわけじゃないんですけど……」

「テウスさんに少しでも異常があればすぐにでもICUに運び込まれますわよ。さ、行きましょう。他の皆さんは既に病室にいらっしやいますわ」

信頼されているのか貶されているのかよくわからないが、変に心配をかけるよりはマシだろう。ひとまず後についていくことにする。

病院の独特の匂いは私は慣れたものだ。大人しくしていなければならぬ気がしてあまり好きではないけれど、苦手という程ではない。

そんなことを考えつつ後についていくと、一つの個室の前で止まった。どうやらここがライス先輩の病室のようだ。

個室か……私は1人だと寂しいのでいつも誰かいる部屋を希望するんだけど、有名になってきたら個室の方が周りには迷惑が掛からないんだらうか。今度院長さんに相談してみよう。

「ライスさん、入りますわよ?」

病室の扉をノックして、返事を待たずに入っていく。

「あ、マックイーンさんに……テウスちゃん、お見舞いありがとうございます」

ライス先輩はベッドの上で上体を起こしていた。左足にはギプスを嵌めていて、少し痛々しい。

ベッドの周りはチームの皆が取り囲んでいて、あのゴルシ先輩ですら大人しくしている。

「ライス先輩……お怪我の具合は……」

「うん、骨折……と、転んだ時の打撲だった」

レース中に転んで打撲で済んだのなら奇跡的だ。命に係わってもおかしくないようなことなので、転倒による影響が打撲だけだったのは奇跡的だ。最悪瀕死でまともに動けなくなっていることまで想定

していたので、そこまで症状が重くないのに少し安堵する。

「そうですか……ごめんなさい、ライス先輩。あの時無理に歩かせてしまつて」

ベッドの近くまで言つて頭を下げる。ライス先輩に頼まれたことではあるが、無理でも抑え込んでいた方がよかつたのではないかと今でも思つてしまふし……

「あつ、ううん、謝らないでテウスちゃん。ライスが頼んだことだし……それに、テウスちゃん、そのことで処分受けちゃつたつて聞いて……謝らないといけないのはライスの方だよ」

ちよつと慌てたように反応され、その後謝られてしまつた。何処から聞いたんだらう……ライス先輩はとても人脈が広いみたいだし、ちよつと特定できないけど、怪我人に余計な心配をかけるなんてちよつと申し訳なくなつてしまふ。

「あの時は、何故だかどうしてもゴール板をくぐらないといけないつて、そう思つて……ごめんなさい」

「だ、大丈夫です大丈夫です！ 怒られるのは慣れてますから！ 頭上げてください！」

ベッドの上で頭を下げたライス先輩に驚いてしまいちよつと焦つてしまふ。逆に気を遣わせてしまつたようだ。

とりあえずこの話は終わりにした方が良さそうだ。このまま話を続けるとお互いに謝り続けてしまうことになるだろう。

「と、ところでライス先輩。しばらくこのままこの病院に入院されるんですか？」

「あ、えつと。ここより学園近くの方が設備が充実してるみたいだから、近日中に転院するつもりだよ？ 学園に近い方がいろいろ楽だろうし。お医者さんに相談してみないとどうなるかはわからないけど……」

たしかにここよりいつもの病院の方が設備が良いし、お見舞いとかも行きやすいから私としては安心だ。

転院自体は多分問題ないだろう。各レース場近くには急性期の治

療を行う病院は多いが、リハビリテーション系の病院は学園近くの方が多いし、専門的なのだ。

骨折ではなるべく早めにリハビリをするのがいいと聞いたことがあるし、お医者さんからも早めの転院を勧められると思う。

「転院なさるときは言つてくださいね、ヘリコプターを手配しますから！」

「マ、マックイーンさん？　そこまでしてもらわなくても……」

「そうですよマックイーンさん。ヘリコプターは慣れないと大変ですし、とつてもうるさいですから」

マックイーンさんがとんでもないことを言い出したことをライス先輩とダイヤちゃんが止めている。ちよつとダイヤちゃんが言うてゐることはズレていると思うのだが……

「やはり自家用ジェットをチャーターしましょう。それがダメなら新幹線でも貸し切つて」

「ダイヤさん!?　要らないからね!？」

振り切り方がおかしい。何らかの交通手段の手配は必要だろうが、貸切るまでの必要はないと思うのだが……

いやでも、ライス先輩の人気のには貸切ったほうがいいんだろうか。変に騒ぎになるよりはその方が……

「と、とにかく！　交通手段はライスが自分で手配するから、お気持ちだけ受け取つておくれねっ?」

ライス先輩のそんな言葉に簡単に引き下がったあたり、それほど本気というわけではなかったみたいだが……どちらにしろ学園側が何かしらの足は手配してくれるだろう。

そういえば、ライス先輩のトレーナーさんはどうしたのだろう。あの時ライス先輩はトレーナーさんの為にゴールしたいと言っていた。

そのトレーナーさんの姿が此処には見当たらないのだが……なんとなく、聞いてはいけないような気がする。聞くとしてももう少し落ち着いてからにした方がいいだろう。

最悪な想像としては、もうライス先輩に会うことが出来ない人物である、ということが考えられてしまうが……それならライス先輩があ

そこまで必死になっていたことにも納得がいくし。

それなら猶更彼女に聞くわけにはいかないだろう。学園に帰ってからブルボンさんか、同室のロブroy先輩あたりに聞くことにしよう。

その日は面会時間ギリギリまでみんなで残って、沢山話し合った。

「うつ、うつ、うつ……散々な目に遭ったよお……」

「まあ、今まで予防接種から逃げてた分のツケつてことだな……今度はちみーおごつてやるから泣きやめって」

なお、面会時間が終わりに近づいて病院を後にし、トレーナーさんの車に戻っていくと、予防接種を一通り受けて泣きじゃくっているテイオーさんと、それを苦笑いしながら宥めるトレーナーさんの姿がそこにあったのだった。

第四十話 黒いドラッグカー

京都から帰ってきた翌日の放課後、様々な理由によつて行うことが出来なかつた勝利者インタビューとウイニングライブの代わりに、記者さんたちを集めた会見を行うことになった。

今回は私単独での会見となつていて、一応補助にトレーナーさんが居てくれるものの、私一人に対して数多くの記者さんが質問を投げ掛けてくることになる。

今回の質問に関しては混乱を避ける名目で事前に質問内容について各社提出してもらつてたづなさんによるチェックが行われているが、もしかすると予定と異なる質問が来るかもしれない。

トレーナーさんは『そういった質問には俺が答えるからテウスは答えなくていい』と言つていたが、なるべくなら自分の言葉で答えたいと思つている。

「テウス、準備できたか？」

「はい、大丈夫です。大丈夫ですけど……この勝負服じゃないとダメですか？」

「もう一個のはまだ直つてないから、それしかないだろ？ 似合つてるから安心しろつて」

今日の会見は勝負服で行うのだが、当然いつもの勝負服はまだ直し中なので、宝塚記念で着たドレスタイプの勝負服で会見を行うことになつている。

ちよつと露出が多いし、正直衣装に負ける気がして恥ずかしいから別の衣装がいいんだけど……どうやら逃げられないようだ。

まあ、ウマ娘は度胸だ。気合を入れて向かうしかない。

インタビュー会場として用意された講堂に向かう。トレセン学園には大きな講堂が3つあり、記者会見はもちろんのこと様々なレクリエーションで使用されている。

今回使用する講堂はその中で一番小さいものだが、それでも報道陣

が余裕で収まるほどの広さだ。

新聞や雑誌の記者さんだけでなく、テレビ局の報道陣とかも来ると聞いているが、それでも余裕で入る辺り大きさは推して知るべし、と言ったところだろう。

やはりこの学園はいろいろスケールがおかしいと思う。設備が充実しているという点では困らないので構わないのだが……

着替えていた控室は講堂の近くだったので、そんなことを考えているうちに辿り着いてしまった。

「出来る限りフオローしてやるから、そんなに気負うなつて。ほら行ってこい！」

入口の前で立ち止まっていると、トレーナーさんに背中を押されてしまった。

「わ、わかりました。行ってきます！」

ここで尻込みしていても始まらない。もう一度気合を入れなおして、講堂の中に入る。私には切り札があるし、きつと何とかなる！

たづなさんから貰った原稿カンペを手に、講堂に乗り込んだ。

「——と言うことで、出走停止明けの次走はアイビスサマーダッシュを予定しています。短距離は私にとって挑戦的な距離ですが、直線であれば十分勝負になると思っています」

『アイビスサマーダッシュ、ですか……それはまたなんとも……いえ、ありがとうございます。質問は以上です』

予定されていた通りの質問を数個、滞りなくこなし一息つく。次走の予定はトレーナーさんと話し合った結果だ。

私の成績なら通常であれば菊花賞トライアルの『セントライト記念』か、『神戸新聞杯』か。その辺りが一般的な物だろう。

それを敢えての短距離挑戦は、私の爆発的な末脚と、それを持続させられるだけの耐久性があれば問題ないだろうとの見立てで決めたものになる。

これがコーナーありの1,200とかであれば恐らく見送っただら

うが、直線コースでなら十分渡り合える自信もある。

我が儘を言えばもう三倍くらい長さが欲しいものだが、日本最速のレースとも言われるアイビスサマーダッシュには挑戦してみたいと思っていたし、出走することにした。

ただ、チームスピカには短距離を走れるようなウマ娘が居ないのでちよつと練習に困ってしまうのが問題だが……バクシンオー先輩あたりにも今度併走をお願いしよう。

短距離のエキスパートである彼女なら安心だし、お返しに長距離の練習に付き合えば彼女にとって十分な返礼になるだろう。

サクラバクシンオー先輩は既にドリームシリーズに移籍しているが、そこにも長距離部門は当然あるので、練習が上手くいけばそこにバクシンオー先輩が出てくるところが見れるかもしれない。

彼女の適性は短距離、良くて1400mまで。1400メートルを上回る競走は9戦して1勝もしていない。URA史上最強で、かつ顕著なスプリンターだ。

そんな彼女だつて、トレーニング次第では長距離だつて走れるようになるかもしれない。私だつて最初は長い距離は走れなかったし、何より、本来スプリンターであった筈のブルボン先輩がトレーニングによってダービーを制することが出来るほどの距離適性の改造に成功しているし、不可能ではないだろう。

「続きまして、週刊ガゾンの善沢さん。どうぞ」

『週刊ガゾン、善沢です。ブラックプロテウスさんにお尋ねします。今後トウインクルシリーズを走っているうえで、一番のライバルと意識しているのはどの方ですか？』

事前に聞かされていた質問内容だが、一番悩んだ項目だ。リボンマンボ先輩、ジエニユイン先輩、タヤスツヨシ先輩、ミントドロップ先輩……その他にもクラシック戦線を戦った娘たちはライバルだと言える。

だが、一番のライバルだと言うなら――

「一番強く意識しているのはマヤノトップガン先輩です。菊花賞では恐らくですが、彼女との決戦になると思っています」

ジェニユイン先輩トリボンマンボ先輩に、3,000mは少し長いだろう。タヤスツヨシ先輩やミントドロップ先輩は、練習を偵察した感じだと多少調子を落としているようだ。

マヤノさんは現状まだ条件戦のウマ娘だが、何とかこう、底知れない恐怖を感じる。

トレーナーさんと一緒にレース映像を見たところ、ここから更に本格化していきそうな雰囲気だと言っていたし、方針として今一番警戒している相手はと聞かれれば彼女一択となる。

「ですが、彼女一人だけを警戒しているというわけではありません。レースに絶対がない以上、どんなレースでも全員が警戒すべきライバルだと思っています」

当たり障りのない返答だが、紛れもない本心だ。私にはあまり運がないし、油断していると変なことで足を掬われかねない。

だから次のレースはGⅢで、重賞とはいえ格下のレースと見られても仕方のないレースだとはいえ、いつも通り全力で走り抜いて、距離だって私は戦えるということを、証明して見せるつもりだ。

その後は用意したカンペの甲斐もあってインタビュをこなして、何とかその日乗り切るのだった。

『新潟レース場第1レースは本日のメインレース、サマースプリントシリーズの一つ、日本の中央競馬で唯一の直線レース、アイビスサマーダッシュ！ 天候は晴れ、バ場状態は良での開催となりました。18人のウマ娘達が鎬を削ります！ まもなく発走です！』
絶好のレース日和となった新潟レース場、既にファンファーレも鳴り終わり、ゲートの中で集中力を高める。

この新潟レース場の“千直”の愛称が付けられた新潟の1000mでは、通常外枠が有利だと言われている。

そんなレースでの今日の私の枠番は3枠6番。若干内枠寄りだが、まあ問題ない位置だと言っていると思う。

本来であればこの短距離レース、ビコーペガサス先輩やヒシアマゾ

ン先輩などの名立たる短距離ウマ娘達が出て来てもおかしくないのだが、ビコーペガサス先輩は年明けに骨折してしまつた影響からか阪急杯で12着に沈んでしまつたし、ヒシアマゾン先輩はアメリカ遠征を予定していたが脚部不安のため急遽帰国、前走は大阪杯となつたが、折り合いを欠いてしまい5着に終わってしまったなど、調整に苦しんでいる様子で出走してきていない。

おまけに私が目標としていた路線とは全く違う距離ということもあつて、正直出走するライバルたちの事はよくわかつていない状況だ。

多少研究が足りていないと思うのだが、トレーナーさんが言うには『難しいことを考えるよりただ前だけを見て全力で走つて来い』と言われてしまつたので、それを信じて突き進むことにする。

『各ウマ娘、ゲートイン完了——今、スタートしました!』

大外枠の娘がゲートに入つて数拍置いてから、ゲートが開いた。最近スズカさんにゲートの練習を付き合ってもらつていた成果もあつて、いつも以上にするとゲートから出ることが出来た。

何度も言つているようだが、このアイビスサマーダッシュは1000mの直線のレースだ。海外にはイギリスのクラシックの1冠目が1マイルの直線だったりと結構直線レースはあるそうなのだが、日本の中央のレースにはこれただ一つしかない。

なので正直定石とかはわからなかつたのだが、いつも定石なんて考えていないことを思い出して、とりあえずいつも通り一番前に出て逃げる事にした。

『さあ前に出たのはやはりこの娘、ブラックプロテウス! 宝塚すら挽ぎ取つたその規格外の脚で勢いよく駆け出していきます。ですがこの新潟に集つた歴戦のプリンターたちも負けじと食らいついでいる!』

いつも以上に全力で走っているのに、思ったより後続との距離が開かない。かなりのハイペースで飛ばしているのに何人かは私の横に並びかけるくらいの勢いで迫ってくる。これが短距離戦の世界——!

口角が吊り上がるのを感じる。負けてしまうかもしれないのに、こ
うやって競うのがどうしようもなく楽しい。

やっぱり私は走ることが、他の娘たちとレースをすることが好き
だ。

そう、どうしようもなく好きで――

――どうしようもなく、楽しい！

『ブラックプロテウス、ここからさらに脚を伸ばす!? テンの3ハロ
ンは――なんと31秒9! 32秒台を切ってきた!』

脚にさらに力が籠るのを感じる。どうしようもなく昂つて、いつも
以上に『掛かって』しまっている状態になっているのがわかる。

『ブラックプロテウス、後続を3バ身ほど引き離した! 無敗の二冠
ウマ娘、堂々のゴールイン!』

長い直線を駆け抜けて、何とか減速しつつ、外ラチギリギリまで
突っ込む。この勢いなら何とか――

『ああとブラックプロテウス。減速していましたが今回も止まり切
れずにラチに激突! 黒いドラッグカーは急には止まらない! い
や、ですが今回はラチを壊していません、何とか減速が間に合ったよ
うです』

いや、何ともならず、外ラチにぶつかって止まった。何だかいつ
もよりクツション性が高いような気がして、多分そのおかげで壊さず
に済んだみたいだ。

やっぱり最後まで締まらないのを再確認し、燃え上がるようなくら
い熱くなる顔を何とか鎮めつつも、ウイナーズサークルへ向かうの
だった。

第四十一話 チャレンジジャー

『ブラックプロテウス、札幌記念に続き丹頂ステークスを制覇！札幌競レース場の洋芝を2600m走ってなお、スタミナには余裕が見取れます。正しく無尽蔵のスタミナだ！』

「ちっ、はぁ……」

まだ暑さ真つ盛りな九月頭。エアコンの効いたトレーナー室で、テレビの中継が終わったのを確認してから、リモコンを操作し電源を切る。データを取るためだけのつもりだったが、仕上りの良さに思わず舌打ちと、ため息が出た。

レースを重ねるたびに、経験不足から来ていた駆け引きへの弱さが無くなっていく。

ハイペースでレースを重ねても、消耗するどころか調子を上げていくようなウマ娘なんて反則もいいところだ。

テレビのリモコンを乱暴にソファアに放り投げて、次走の予定を考える。

俺の担当、マヤノトップガン。7月にレースに勝って、ようやく条件戦から抜け出すことが出来たウマ娘だ。

そこだけを聞けば、宝塚をも勝って見せたGI4勝の黒鹿毛ブラックプロテウスの化物に比べると見劣りするように聞こえるが、そうでもない。

ただ、本格化する時期が今だったというだけだ。早熟バだと思われるアレとは違うということ。

ただ、アレが未だに成長を続けていることには正直驚いている。早熟バであればそろそろ頭打ちになってもいいものだが……

「トレーナーちゃん？ トレーナーちゃん？ 聞こえてるー？」

気の抜けた声に意識を現実に取り戻されると、小さい栗毛のウマ娘が俺の顔をのぞき込んでいた。

「少し考え事をした。トレーニングは終わったのか？」

「うん♪ 次のトレーニングは？ どんなトレーニングでも、ぴゅーんって終わらせちゃうよー！」

そういう彼女の顔は少し疲れを見せながらも好調と言ったところだろうか。天才肌な彼女だが、才能に驕るようなところはあまり見せない。問題は多少朝に弱いことくらいだが、子供だと思えば特に不思議でもない。

「そうだな……前走からもう二月経ったし、次に向けて追い込みを掛けるか。7月まで多くレースで使ってきたが、問題はないな？」

「うん！ 体も軽くてよく動くし！ 今なら一杯キラキラ出来る気がするよ！」

7月に勝つまで少し不調気味だったが、そこから何とか好調と言えるところまでは持ち直した。このペースで調整をしていけば、本番の菊花賞には万全の状態で挑めるだろう。

少し使いすぎたところもあるが、当人の分析でも、こちらのチエツクでも異常はなさそうだし、とりあえずは問題ない。

この後のレース人生に響く可能性も捨てきれないが、トレーニングも出走レースも、当人の希望を最大限反映した結果だ。通常のウマ娘が走り抜く、一般的な本格化期間の3年間程度であれば問題なく走り抜ける程度のものに調整は出来ていると思う。

それでも絶対は無いが、悔いだけは残さないようにとは思っている。

「次は神戸新聞杯だ。恐らく……いや、確実にブラックプロテウスも出てくるだろう。今年は阪神レース場の改装工事の影響で、京都レース場で行われる。お前は京都レース場の芝を走ったことはないが……いけるか？」

数週間だけの改装予定の阪神レース場だったが、この際全体の改修を行うというところで今年度のレースは全て振替開催となっている。一概に何とも言えないが、元より菊花賞が京都開催であることを考えればプラスに働くことの方が多いと思っっている。

「大事なレースなんだよね？ うん、すつごくワクワクするよ！ マヤ、沢山がんばっちゃおう！」

思わぬ反応に少し拍子抜けする。最近、レースやトレーニングに対する反応が以前とは違う。以前は何というか、少しやる気が感じら

れないというか、つまらなさそうにしていることも多かったのだが。「あ、トレーナーちゃん。マヤがやる気なの不思議なんですよ？ マヤね、だいたいのは1回やれば、ゼーンぶわかっちゃったんだ。どんな風に走ればいいのかとか、仕掛け時とかも、ゼーンぶ。今のトレーナーちゃんの考えとかも、ね？」

天才肌などところのある彼女の事だ。そう言ったことでやる気をなくしていたのだろう。今更になってそれを知り、納得と共に自分がまだ彼女のことをわかっていなかったことを少し反省する。

「でもね、テウスちゃんの走りだけはまーったくわかんないの。レースのペース配分とかもメチャクチャ。トレーニングもよくわからないようなものばかりしてるし、マヤがやったら墜落しちやいそうだなって思うのに、楽しそうにしてるし」

まあ、アレは誰にもわからんだろう。この間ビターグラッセと共にハードトレーニングについて熱く語り合ってその後大浴場のサウナで耐久合戦をして二人してぶっ倒れて檜本の嬢ちゃんと沖野の坊主を困らせていたと聞く辺りまだ可愛げは残っているとは思うが。

「二度だけ、テウスちゃんと走ったレースも。あの展開なら絶対勝てる！ って思ってたのに。だからね、マヤ。テウスちゃんと走るの、すつごく、すつごくワクワクするんだ！」

どんな理由であれやる気になっていたのであれば、それを止めることもないだろう。そんな状態のウマ娘に、俺が贈ってやれる言葉なんて一つだけだ。

「そうか。じゃあ、目一杯楽しんで来い。挑戦者らしく、な」

「うん！ マヤ、がんばっちゃうぞー！」

小さくガッツポーズをする担当ウマ娘の姿を見守りつつ、最大限彼女の力が発揮できるよう、神戸新聞杯までのトレーニングメニューを組みなおすことにしたのだった。

『京都レース場、第1レースは本日のメインレース。GⅡ神戸新聞杯！ 16人のウマ娘達で争われます。朝から小雨がぱらつくこ

京都。現在の天候は曇り、芝のバ場状態は何とか良での発表です』

本バ場に入場したウマ娘達を見守りながら、出走を待つ。ここまで来てしまえば、トレーナーに出来ることは無事に手元に帰ってきてくれることを祈ることだけだ。

『三番人気はリボンマンボ。中距離での勝ち星は未だありませんが、下克上は為し得るのか。二番人気はタヤスツヨシ。ダービーでは最後リボンマンボを差し切り2着。そこから休養明けのレースとなりますが、仕上がりは十分か』

ファンファーレが鳴り、一人また一人とゲートに入っていく。

『そして大外。本日の一番人気、ここまで無敗！二冠ウマ娘、そして春のグランプリウマ娘、ブラックプロテウス！その勢いそのままに連勝記録を更新するのか！』

黒鹿毛のウマ娘が優優と大外のゲートに入っていく。それと同時に大歓声が沸き上がり、アレがルーティンを終えて前を向くと水を打ったように静まり返る。

『菊花賞トライアル、神戸新聞杯。今スタートしました！』

スタンド側から見て右側に飛び出したターフに用意されたゲートが開き、レースが始まる。

目を見張るのは、やはり――

『さあ大外ブラックプロテウス、矢のように飛び出した！先頭でホームストレッチを駆けていきます！』

観客席を揺らすほどの大歓声を背に受けて、その長い髪を靡かせ駆け抜けていく。まるでラストスパートかのような速度で駆け抜けていくような彼女は、1枠2番の同じ逃げウマ娘、明らかに掛かっているようなペースなヤツのそれより速く駆け抜けていき、そのままハナを奪ってしまう。

殺人的ハイペース。ツインターボやダイタクヘリオス、メジロパーマーが見せるような、大逃げを超えた爆逃げ。アレの走りにはその言葉があっているだろう。

その三者と違うところがあるとすれば、アレはそれでもバテないというところだろうか。

だが、常に全力で逃げているというわけではない。息を入れるところでは入れて、最後に使える脚を残す。そう、道中に関してはあるのサイレンススズカと同じようなタイプの脚質だと言っていいだろう。

アレにとつての“逃げ”というものがサイレンススズカの印象が強いのだろう。だから道中、アレは競り合っていない場合無意識にだがペースを落として息を入れる。サイレンススズカと同じように。

『ブラックプロテウス、相当なハイペースだ！ 1000mを58.6で通過する殺人的ハイペース！ 後続は果たして何処まで食らいついていけるのか！』

この2400mでこんなハイペースで駆け抜けるウマ娘はそう居ない。釣られて他のウマ娘達もペースが早くなっていて、後続も大体2バ身ほど後ろにくっついて来てはいるが、見るからにバテ始めている。

こちらの教え子かというと、バ体が小さいのもあってあまり良くは見えないが、好位には付けているようだ。自分のペースをどこまで保てるかが勝負のカギだと思うが……

『第三コーナーに入って外からマヤノトップガン！ さらにその更に外からタヤスツヨシも仕掛けてきた！ 黒鹿毛の王者に襲い掛かる！』

仕掛け所だと見たのか、好位に付けていたウマ娘達が一齐に仕掛け始める。

そして、マヤノトップガンがアレの横に並ぶか。そう思ったとき、アレがちらりとマヤノトップガンの方を見て――

――そこから、マヤノトップガンを一気に突き放した。目を見開いて後を追うマヤノトップガンをまるで意にも介さぬかのように、強く踏み込み芝を巻き上げて加速していく。

後方から進出を狙うウマ娘が次々とスパートを掛けていく。だが、差は縮まるどころか更に開いていく。

『ブラックプロテウス、逃げを打ちながらさらにスパート！ ハイペースで逃げながらさらにスパートだ！ 後続を引き離して最後の直線！ だがこれはもういつもの必勝パターンだ！』

テンも終いもハイスピードで走る、負ける要素がないと言ったのは何処のお嬢さまの言葉だったか。

だが、その言葉には同意せざるを得ない。マヤノトップガンが今まで見たことの無いような表情で食らいつこうとしているが、差は縮まらない。

『ブラックプロテウス先頭！ このクラシックの強敵が揃うGⅡ、神戸新聞杯でもお構いなし！ 後続を5バ身以上引き離して先頭で今——ゴールイン！ 見事逃げ切りしましたブラックプロテウス！ 連勝記録を重ね、本番の菊花賞に向けて抜群の仕上がりを見せました！』

レースの展開は間違いなく、マヤノトップガンが優勢だった。通常であれば、最後の直線で差し切れていただろう。途中巻き返されたとしてもクビ差程度での勝負になったはずだった。

それがフタを開けてみれば2着にはなったものの5バ身以上引き離された完敗。正直訳が分からない。

時代には必ず一人は規格外のウマ娘が居る。トキノミノル、マルゼンスキー、オグリキャップ辺りはそのウマ娘だろうと言っている。

ただ、どうにもアレは毛色が違う。どうにも得体のしれない力があるような気がしてならない。

怪物なんて言葉は生温い。まるで魔王のような、そんな圧倒的な何かを感じる。

「はあ……焼きが回ったな。そろそろ引退時かね」

頭に過った考えを振り払うと、担当ウマ娘を迎えに行くのだった。

「ただいま、トレーナーちゃん！ ん〜！ 惜しい〜っ！ でも次は1番になるよっ！」

迎えに行くときすぐにこちらを見つけて駆け寄ってきて、悔しそうにしつつも楽しそうにしている。

「おう、お帰り。ケガはないな？ 走ってみて、どうだった？」

あれだけの差を付けられれば何かしら思うところがあっても仕方

ないとは思う。実際アレと戦って打ちのめされたウマ娘を何人か見たこともある。

「凄かった！ 絶対追い付ける！ って思ってたのに、凄い勢いでびゅーんと離されちゃって！ びっくりしちやった！」

「走るのが嫌になつたりはしてないな？」

「もつちろん！ やっぱりすっごいワクワクするよ！ 次も楽しいレースになるんだよね？」

そう聞かれて、一瞬考えを伝えるべきか悩んだが、隠し事をしたつてすぐバレてしまうだろう。思ったことをそのまま話した方が後腐れがなくていい。

「次走が菊花賞という意味ならその通りだが、3000mだと恐らく、アレの独壇場だ。今以上の最高の仕上がりにして、さつき以上の最高のレース展開をしたとしても、かなり厳しいと言わざるを得ない。2400、あるいは2500までであればまだどうにかなるだろうが、3000以上だとどうにも、な」

それがこのレースを見て思った感想だ。やはりアレの本領は長距離だろう。恐らくではあるが、3000m以上のレースでアレに土を付けられる存在は今のところ居ない。

マヤノトップガンであればいずれ追い付くことは出来るとは思いますが、それは今ではないだろう。

「うん、マヤもね、そう思うよ。でも、でもね？ マヤ、菊花賞に出た。もつとワクワクするレースが出来ると思うから。走ってる時、すっごく楽しかったんだ！」

「負けても楽しいか、マヤノトップガン。だが、何か見つかったことがあるならそれでいい。お前の言うキラキラしたウマ娘になるための大切な一歩だろう。先は長い。最終的に悔いが残らないように走るんだ。いいな？」

「アイ・コピ―！ マヤはチャレンジャーだもんね☆ がんばっちゃうぞー！」

「気合を入れるのはいいが、ウイニングライブを忘れるなよ。ほら準備してこい」

気合を入れる担当ウマ娘を促して控室に向かわせる。レースが無事に終わった後トレーナーに出来るのは後に響かないよう疲労を回復させることと、ライブを盛り上げることだ。

鞆に入れたウマブレードを取り出し新品の乾電池を入れ、動作の確認をしつつ会場の関係者席へ向かうのだった。

第四十二話 最も強いウマ娘

トライアルが終わり、ついにクラシック最終戦、菊花賞の日を迎えた。

その前にあったスプリンターズステークスやマイルチャンピオンシップ南部杯に出ようかと思っただが、距離があまりにも違うということでトレーナーさんに止められて仕方なく見送ることにした。

菊花賞は私が待ちに待った長距離、3,000mの長丁場のレースだ。長距離のレースなら丹頂ステークスで経験済みだが、その丹頂ステークスでも2,600m。そこから更に400mの延長となる。

京都レース場の高低差4.3mの坂を二度越え先頭で駆け抜けることが出来る、スピードとスタミナを兼ね備えた『最も強いウマ娘』が勝つと言われている。それがクラシック最終戦、菊花賞だ。

修繕から戻ってきて初めて、クラシックを共に戦い抜いた私の相棒しょうぶに袖を通し鏡の前に立つ。

黒衣着物に、黒い袴。私の黒い長髪も相まって、こうして見てみると全身真っ黒だ。薄い桜模様の入った耳カバーの純白が目立つ。

きつとこの姿は緑のターフの上でも目立つだろう。何処に居たって私の姿を、見せつけることが出来る。

「テウス、準備できたか？ 入るぞ？」

扉が控えめにノックされて、その向こうからトレーナーさんの声が聞こえる。その声に応え返事をする、いつも通り無精髭を蓄えて、口にはいつものキャンディを啜えたトレーナーさんが入ってくる。

いつもよりちよつとしつかりとした格好をしているのは、先ほどまでインタビュに答えていたからだろう。それでも無精髭は何とかした方がいいと思うのだが、トレードマークであるのでそのままでもいいと思っっている自分も居る。

「……緊張してたら解してやろうと思ってたんだが、必要ないみたいだな？」

「これでも緊張はしていますよ？　でも、それより楽しみで楽しみで。ずっと待ち望んでいた菊花賞ですから」

日本に数少ない、2,700mを超えるGIレース。私がずっと待ち望んでいた長距離のレースだ。

どれだけ長くて、そして走ったらどれだけ気持ちがいいんだろう。考えるだけでワクワクが止まらない。

「言いたいことはいっぱい有ったんだが……無粋だな。よし！　目一杯楽しんで来い、ブラックプロテウス！」

「はい、トレーナーさん。貴方の愛バの実力。一番近くで見てくださいね」

いつも私を力強く、一番そばで見守ってくれるトレーナーさんに、自信をもってそう答える。

さあ、私のクラシック戦線、その集大成だ。培った全てをぶつけてこよう――

『誰もが未知の距離、本日のメインレース、菊花賞！　泣いても笑っても、これがクラシックでの最終戦です。天候は晴れ、少し出た雲が掛かって、少し涼し気。バ場は良バ場。まさに絶好の決戦日和と言えるでしょう！』

涼しくなって肌寒さを感じることも多くなった10月後半。堅いターフを踏みしめ、その感触を確かめる。

何度も走ってきた京都レース場だが、今日に限ってはまるで走ったことのないレース場を感じる。それだけ周りの熱気が凄くて、涼しい10月なのにここだけが8月の真夏になってしまったかのような、そんな感覚を覚える。

『何といっても今回は三冠、それも無敗の三冠ウマ娘の誕生が期待されます！　トウカイテイオーが、ミホノブルボンが届かなかったその頂。シンボリルドルフ以来史上二人目の無敗三冠。果たして偉業は達成されるのか。それとも並み居るライバルたちがその意地を見せ

るのか!』

ターフを見回す。今日は、見知った顔が二人ほど居ない。リボンマンボ先輩とジエニユイン先輩だ。

二人とも距離不安ということで、天皇賞秋、そしてマイルCSへの挑戦ということで、今回の菊花賞は見送った。

リボンマンボ先輩は最後まで悩んだようだが、彼女のトレーナーと話し合ったうえで決めたことだそうだ。

貴女から逃げないと言っておきながら、見送る形になってしまったて申し訳ないと頭を下げられたが、誰にだって適性距離があるんだから、仕方のないことだと思う。

むしろ、菊花賞が終わった後、天皇賞秋、そしてマイルCSと、私が出る可能性もある。

そこで戦う彼女たちは、この菊花賞で戦うより強いだろう。それならば、それでいい。やはり万全の状態の彼女たちと戦いたいというものだ。

見知った顔が二人抜けた周りを見回す。皆が皆強敵揃いで、万全に仕上げてきている。今日の彼女たちは当然、今までで最高の仕上がりだと思っただろう。

そんな中、少し緊張した様子を見せる、フライトジャケットを着た小さい栗毛のウマ娘を見つけ、声を掛けに行く。

「こんにちは、マヤノさん。今日はよろしくお願いしますね」

「あ、テウスちゃん。うん、よろしくね♪」

彼女は私に声を掛けられるといつも通り、明るく元気な姿を見せた。緊張していると思っただが、気のせいだっただろうか？

「……えへへ、あの時とは逆になっちゃったね。選拔レースの時はそんなに緊張してたのに、今では逆の立場になっちゃった」

「そう、ですね。あの時みたいに、始まるまでお喋りしますか?」

「そうだね、それもいいんだけど……うん、やっぱり、エンリョしくね?」

少し考えた様子を見せた後、にこやかに断られた。

「だってこれから——マヤが、無敗の二冠ウマ娘を撃墜するんだから。」

その撃墜する相手に掛ける言葉は、S p l a s h ! だけだよ？ 撃墜された後だと、聞こえないかもだけどね？」

そう言つて、彼女が微笑む。いつもの天真爛漫な仕草なただけで、その奥に強い闘争心を感じて、つい口角が吊り上がってしまうのを感じる。

「どれだけ追撃してきても、振り切つてあげますよ。確か、『我二追イツク敵機無シ』でしたっけ？」

あんまり戦闘機には詳しくないが、そんな電文があつたと聞いたことがある。いつの時代かも私にはわからないけれど……

『さあ、熱気高まる秋の京都。18人のウマ娘が雌雄を決す菊花賞。ついにファンファーレです！』

言い終わると丁度、ファンファーレが鳴り響く。今日の私は1枠2番。マヤノトップガン先輩は5枠10番、かなり離れた位置のゲートに入る。

いつも通り、ゲートに入る前に一呼吸置き、意識を切り替える。

『2番人気はマヤノトップガン。果たして下克上はなりうるのか！』

奇数番のウマ娘が入り終わり、偶数番である私もゲートに入る。いつもは狭くて少し嫌なゲートも、その狭さが今は集中を高めるのにちょうどいい。

『そして1番人気、ここまで15戦15勝無敗！ 二冠ウマ娘ブラックプロテウス！ 鍛え抜かれた鋼鉄のウマ娘がここ京都に決して消えない伝説を刻むのか！』

いつも走つてる途中に感じるような、音がなくなつていく感覚。その感覚に包まれて、自分の呼吸と鼓動だけが感じられる。

『泣いても笑つてもこれが最後。クラシック最終戦菊花賞。今——スタートしました！』

ゲートがゆつくりと開く。ゲートはこんなにゆつくり開くものだったのかと思いつつ、そこから抜け出すように外へ飛び出す。

『出遅れはありません！ そしてブラックプロテウス、まさしくロケットスタート！ 誰よりも早くゲートを飛び出し、早くも先頭を奪いました！』

第3コーナーの手前、上り坂の途中からスタートして、2000mくらい走ったところでコーナー。この菊花賞はコーナーを6回回る。内をロスなく立ち回れるかが重要だ。内枠だったお陰で悠々と先頭を確保できたようで、いつも通りのペースで駆け抜ける。

周りは付いてきているのだろうか。まあ、別にそんなこと気にしなかつた方がいいか。いつも通り、私は私の好きなように走るだけだ。

『ブ、ブラックプロテウス、殺人的ハイペース！ 上り坂を突っ切り単身独走！ 下り坂に差し掛かっても足を緩めず突っ込んでいきます！ これは暴走か、はたまた作戦通りか!?!』

下って、コーナーに入る。速度があればあるほど、曲がることは難しい。身体にかかる負担を無視して、いつも通り無理矢理に曲がる。

一人分の隙間も空けずにコーナーを曲がり切り、最初の正面スタンド前。ここ京都レース場は淀の坂と呼ばれる向こう正面から第3コーナーへかけての急坂以外はほぼ平坦。走りやすい直線を、下りですいた速度を維持しながら駆け抜ける。

『やはり先頭はこのウマ娘、ブラックプロテウス！ 他の逃げウマ娘に早くも5バ身以上の差をつけて一回目の正面スタンド前を駆けていきます！ タヤスツヨシは後方から、マヤノトップガンは虎視眈々と5番手辺りの好位に着けています』

400mくらいの直線を駆け抜けてコーナーに入る。後ろがどれだけついてきているかはわからない。

『1000m通過タイムは……59.5！ 後ろを1秒以上突き放す凄まじいハイペース！ 果たして最後まで持つのか!?! だが最後まで持つならばこれは圧勝でしょう!』

第1コーナーを駆けて、そのまま第2コーナーを回り、向こう正面に戻ってくる。平坦な道を駆け抜けていく、目の前には坂が見えてきた。背中にチリチリとした圧を感じる。まるでロックオンされたかのような冷たさが背筋を這い、戦闘機が迫ってくるような音が聞こえてくる気すらしてくる。

『マヤノトップガンここで仕掛けてきた！ ブラックプロテウスが坂に入ったそのタイミングで早めの仕掛け！ 坂を上り差を詰め——』

——それならば、どこまでも振り切ってしまえばいいだけだ。

『差が、詰まらない！ 差が詰まらない！ ブラックプロテウス、ここから更に伸びる！ 上り坂でスパートして、下り坂をまるで落ちていくかのように駆けていく！』

色を無くした世界が、高速で流れていく。追撃してくる戦闘機を振り切り、その音が聞こえなくなるまで突き放す。

『彩雲棚引く空の下！ 瑞相現れたここ京都！ ブラックプロテウス、最後の直線一人旅！』

最後の直線、長かった菊花賞も、これで終わりなのか。そういえば、少し寂しい気もする。

せめて、今までで一番速く。最後を駆け抜けよう。

太陽が掛かっていた空から陽の光が漏れ出て、ゴールまでの道を照らしていく。

その光の道を、ただひたすらに全力で駆け抜けていく。

『後ろにはもう誰もついてきていない！ 誰も届かず、影すら踏ませない！ ひたすらに錬り上げ、鍛え抜かれた漆黒の鋼鉄が、その切れ味を以て今、この国のウマ娘史にその名を刻む！ ブラックプロテウス——無敗クラシック三冠達成!!』

ゴール板を駆け抜けた後、その余韻に浸るように暫く駆け続ける。名残惜しくて、ゆっくりゆっくりとだけペースを落とす。向こう正面に入ったあたりで係員さんと目が合い、先に行つていいと合図を出される。

『掲示板に刻まれるレコードの4文字！ 表示された勝ち時計は何と、2:59.8！ 物凄いレコード！ そして掲示板に刻まれる大差の文字！ 2着マヤノトップガンのタイムは手元では3:01.9です！ これも決して遅いタイムではなく、以前までならレコードです！ ですが、それを上回る衝撃的レコードタイム！』

勝者だけに許される特権、ウイニングランとして、軽く駆け足で淀の坂をもう一度上つて下り、もう一度第4コーナーを回りスタンド前へ戻つてくると、スタンドからは拍手と歓声が私を祝福してくれた。

『京都レース場に巻き起こるテウスコール！ 菊花賞での大差勝ちは

伝説のウマ娘、クリフジ以来二人目の快挙！ クラシック無敗三冠は、シンボリルドルフ以来二人目の快挙！ そして3, 000m3分切りは、世界初の大快挙！』

そしてウイナーズサークルに向かう。全体を見渡せる位置に陣取り、周りを見渡す。

一番見やすい位置に、トレーナーさんや、スピカの皆を見つける。あのゴルシ先輩ですら、今は真面目に祝ってくれている。

それなら、それに応えよう。今望まれている、一番のパフォーマン
スで！

『そして今、天に三本指が立てられた！ 全ての常識を、全ての限界をぶち壊して、今ここに、最強のウマ娘が誕生した！』

大歓声に包まれながら、ウイナーズサークルを後にする。いつまでも余韻に浸っていたかったが、そうもいつていられない。

これから後に控えるは、私を応援してくれた全ての人たちに、感謝を伝えるための舞台なのだから。

『輝くウマ娘達のステージ、ウイニングライブ！ 今年最後の『winning the soul』も、このウマ娘がセンターを飾ります！』

ライブ衣装に着替え、ステージの真ん中に立つ。まだレースの熱が冷めやらない中――

『そのウマ娘の名は――ブラックプロテウス！ 無敗の三冠ウマ娘、ブラックプロテウスです！』

スポットライトに照らされたステージに堂々と立つ。私が好きだと言ってから照らされるようになった、青一色に染まった観客席を見つめ、歌い出す。

私は全てのウマ娘にとっての憧れに、なれただろうか――

その答えは、このライブが終わった後に、わかるのだろうか。

込み上げてくる熱いものを、胸で留める。せめて、これが終わるまでは泣かないようにしよう。全ての人たちに、感謝を伝えるために、

パフォーマンスに専念していった。

掲示板回 Part 4

【クラシック】三冠ウマ娘の誕生を期待するスレ Part 12

123 : 名無しのウマ娘ファン ID : QSjREln5t

さて菊花賞なわけだが……

125 : 名無しのウマ娘ファン ID : K9nDvV9+y

どうせブラックプロテウスが勝つだろ？ 解散解散

126 : 名無しのウマ娘ファン ID : rwlW2oMQi

レースに絶対は無いのでワンチャンありますよ

129 : 名無しのウマ娘ファン ID : AOTR7SZDN

1600のレースで一人だけバテずに4800走ってたウマ娘やぞ。無理無理

131 : 名無しのウマ娘ファン ID : joUfKLqTe

マックイーンの時も強すぎてつまらないとか言われてたけどこいつもなあ

133 : 名無しのウマ娘ファン ID : dp6EWO/SP

もうすぐ菊花賞なのにまだスレが12までしか行ってないあたり察しろ

135 : 名無しのウマ娘ファン ID : HreLrEO4e

秋華賞と同じ2000mならまだワンチャンあったんだろうがなあ……

136 : 名無しのウマ娘ファン ID : praXGrKxq

一番脅かされたレースが弥生賞だもんな

138 : 名無しのウマ娘ファン ID : D M s 6 V M D H p
こうしてみるとフジキセキやっぱ凄かったんだな

139 : 名無しのウマ娘ファン ID : n C A g 3 X w r o
ブラックプロテウスはなんというかこう、マルゼンスキーが万全
だったらこんな勝ち方するんだらうなっと思って思う

141 : 名無しのウマ娘ファン ID : U 5 k v j 8 K L /
朝日杯で13バ身とかやっぱバケモンだよなああの娘も

142 : 名無しのウマ娘ファン ID : E x 8 Q J S W Y b
記録に残っているのは能力の何分の一なんだろうなあ……

144 : 名無しのウマ娘ファン ID : f 8 G z R i J O J
マルゼンは確か練習中にラチに激突した影響で屈腱炎患ったん
だっけ？

145 : 名無しのウマ娘ファン ID : 5 w 4 s 8 S Y u L
やっぱりラチに激突って危ないんだね

147 : 名無しのウマ娘ファン ID : p j k c C A y t o
うん、普通はかなり危ないんだよ、普通は

148 : 名無しのウマ娘ファン ID : H f c a / R Q e b
ラチを粉碎した後何事もなかったかのように踊ってた無敗二冠バ
が居ますね？

149 : 名無しのウマ娘ファン ID : L i 8 x Y D g I x
アレは例外中の例外

151 : 名無しのウマ娘ファン ID : 2 9 7 B Y w L H 7

検査に行った病院で『全くの健康体。別に問題ないけど今日泊まってく？ 今日の夕食は煮込みハンバーグだよ』って診断……診断？さ
れたお話好き

154 : 名無しのウマ娘ファン ID : EA57kaW8U
病院はホテルじゃないんだぞ

155 : 名無しのウマ娘ファン ID : yyW / NYMY2
検査に行きすぎて病院スタッフと仲良くなりすぎてるの笑う

158 : 名無しのウマ娘ファン ID : nibJWx3ae
それでいいのか医者……

161 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9G / Db1Ohb
ブラックプロテウス本人の証言だから多少のニュアンスの違いは
あるんだろうけどそれでもおかしいよその医者

162 : 名無しのウマ娘ファン ID : fmXOIQS8k
ラチだけでなく医者の頭も壊しちゃったんだね……

165 : 名無しのウマ娘ファン ID : P J n l 7 c D M s
ラチは治っても頭は治らないんですよ！

166 : 名無しのウマ娘ファン ID : 8 E t b a h c D Y
可哀想に……

169 : 名無しのウマ娘ファン ID : g5RxeJCRU
破壊するのはラチと柵だけで充分なんだよ

172 : 名無しのウマ娘ファン ID : BF4pe+ddt
ラチも柵も壊すものじゃないんですよ

173：名無しのウマ娘ファン ID：AQSFAG+e
常識が壊れてる……

174：名無しのウマ娘ファン ID：zcfamthL9
芝も生えないよ

177：名無しのウマ娘ファン ID：bjFfcCN+E
菊花賞までには治しておくんやで

181：名無しのウマ娘ファン ID：jQmm/fBML
>>177 菊花賞でまた壊されるから無意味やろ

183：名無しのウマ娘ファン ID：4iWT9dYp8
今までの勝ち方はスピードの絶対値が全然違う感じだったけど3
000の菊花賞でそれだけで通用するんか？

186：名無しのウマ娘ファン ID：oI/stVfQ5
>>183 それだけならよかったんだ

188：名無しのウマ娘ファン ID：LvVc8447b
アレは明らかにステイヤータイプだろうし……長ければ長いほど
活躍するタイプだと思うぞ

190：名無しのウマ娘ファン ID：+kyOog2sQ
菊花賞大差出しても驚かない

193：名無しのウマ娘ファン ID：IlnDIP4BN
三冠取ったナリブですら7バ身差で衝撃って言われてるのに大差
出したらどうなるんだ？

194 : 名無しのウマ娘ファン ID : J b H O k D N p Z
確かあのクリフジが菊花賞大差出してたはずだが

197 : 名無しのウマ娘ファン ID : I h W x 8 7 8 1 N
クリフジって相当昔のウマ娘だよな？

199 : 名無しのウマ娘ファン ID : / Y G o / O + L u
オークスが10月、菊花賞が11月にやってた時代の娘だな。前の
二つと東京優駿を取って変則三冠

201 : 名無しのウマ娘ファン ID : q k / M Y O V e 8
11戦11勝で中央の最多連勝記録もつてた娘だな。そう、過去形
なんだその記録

202 : 名無しのウマ娘ファン ID : W Q n s u c l i p z
そうか、15戦15勝のブラックプロテウスって今中央の連勝記録
更新中なのか……

203 : 名無しのウマ娘ファン ID : P d H k p o 2 1 I
菊花賞勝って引退した場合は生涯無敗最多勝記録も更新すること
になるな

204 : 名無しのウマ娘ファン ID : n V Z b v Y E p k
引退は当分しないだろうからそれはないだろ、今後シニア級の娘た
ちとぶつかれば何処かで負けはするだろうし

207 : 名無しのウマ娘ファン ID : t 5 X C B i 5 U g
後5年くらいは現役で走りそうだな

208 : 名無しのウマ娘ファン ID : o R F 3 K i L J n
勝ち数えげつないことになりそう……

211 : 名無しのウマ娘ファン ID : DyDCsoS23
というか菊花賞勝ったらSMILE区分で全距離重賞制覇か……
すごくね？

212 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9++oK2fWi
タケシバオーくらいすごい

213 : 名無しのウマ娘ファン ID : LuY+z3aj7
JDD出るつもりだったらしいし一体なんだったらできないんだ

214 : 名無しのウマ娘ファン ID : 7sVnJhFJM
後方に控えること……？

215 : 名無しのウマ娘ファン ID : pW0XV0s9n
ダービーだと綺麗な差し切り勝ち見せたわけですが

217 : 名無しのウマ娘ファン ID : d+6kLv6Vt
逃げウマなのに差し脚使えるとか反則では？

220 : 名無しのウマ娘ファン ID : OQ3h4H0B5
見ててマルゼンスキーかよって思ったわ

221 : 名無しのウマ娘ファン ID : zpL9uy05d
ラジオNIKKEI賞の追い付かれてから再加速して7バ身は強い勝ち方だったな

223 : 名無しのウマ娘ファン ID : WgMgprCZz
実際マルゼンスキーと戦ったらどっちが強いと思う？

224 : 名無しのウマ娘ファン ID : aPPfls9Ch

>>>223 距離による

225 : 名無しのウマ娘ファン ID : i q d p v C Y U Q
>>>224 これ

227 : 名無しのウマ娘ファン ID : n w G 2 a L j j n
マイルまでならマルゼンスキー、中距離以上ならブラックプロテウス
スつてところじゃないか

228 : 名無しのウマ娘ファン ID : o 7 7 K z N F Y Q
スズカとマルゼンとプロテウスがマイルCSに出たらどうなるの
?

230 : 名無しのウマ娘ファン ID : V H c H G e Y / 6
>>>228 それなんてドリームレース?

232 : 名無しのウマ娘ファン ID : 5 O / M 3 u f V M
>>>228 4着以下に20バ身くらい引き離しても驚かないぞ

235 : 名無しのウマ娘ファン ID : O 2 j Y e H v r 8
どうなるんだろうなあ……とりあえずは菊花賞楽しみにしておく
か

【目指せ】ブラックプロテウス専用スレ 【三冠】 Part 80
280 : 名無しのウマ娘ファン ID : k 6 9 u i F N 2 2
ついに今日は菊花賞だぜええええ

281 : 名無しのウマ娘ファン ID : W X I z n h p 9 Z

いやー半年なんてあつという間だな

282 : 名無しのウマ娘ファン ID : Hxyqs07fG
デビュー戦6番人気だったあの娘がこうして今日1番人気で……

284 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC
これは今日は飲むしかないよ!

285 : 名無しのウマ娘ファン ID : DMAsvfcGi
>>284 絶壁ネキちーつす

286 : 名無しのウマ娘ファン ID : WFlQmmBjM
>>284 今日は何飲んでるの?

287 : 名無しのウマ娘ファン ID : fy4hVHJ7q
>>284 そろそろコテハン付けろとあれほど

289 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC
>>286 崎山の25年だよ

>>287 自分から不名誉なコテハンなんかつけるわけないよ。
でもテウスが今日大差で勝ったら付けてやるよ

290 : 名無しのウマ娘ファン ID : C7Sf2okHm
ネキ随分いいもの飲んでるじゃん……そして流石にGIで大差は
きついんじゃないか

292 : 名無しのウマ娘ファン ID : VdSkVCOJ2
>>289 崎山の25年って200万くらいするやつじゃありませんでしたっけ? 飲むものじゃないんじゃないか……コレクシヨン用
とかだろあれ?

293 : 名無しのウマ娘ファン ID : mxgkPaakU

GI大差ってあのマルゼンスキーくらいだろ？ 彼女は彼女でマイルで大差とかいうわけわからん記録だが。あ、スズカも秋天で出してたな

295 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6dBurf/Ut

絶壁ネキ付けるつもりなくてワロタ

296 : 名無しのウマ娘ファン ID : SPubm5NTI

ナリブですら7バ身だぞ？ 流石に無理だろ

298 : 名無しのウマ娘ファン ID : BfxaYscxj

他に有力ウマ娘が居ないならまだしもマヤノトツプガン、タヤストヨシとかも居るしなあ

299 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC

>>292 酒は飲まなきやただの発酵した水なんだよ？

301 : 名無しのウマ娘ファン ID : oiIXCIZZq

>>299 コレクターとかに喧嘩を売っていらつしやる？

302 : 名無しのウマ娘ファン ID : 4Yaog8p/

流石にここまでの極論は初めて聞いたんだよなあ……

303 : 名無しのウマ娘ファン ID : JUM+dfPKh

酒クズ過ぎて草

305 : 名無しのウマ娘ファン ID : afTH2qytW

そんなんだから彼氏にも逃げられるんやで

307 : 名無しのウマ娘ファン ID : kPXvOM/pC

逃げられたんじゃないよ！ 5股掛けてやがったから股間蹴り潰して病院送りにしてやっただけだよ！

309：名無しのウマ娘ファン ID：K8aAM+Kfu
>>307 我々の世界でも拷問です

310：名無しのウマ娘ファン ID：xXb6JRvNI
ウマ娘の蹴りで潰されるとか再起不能で済むんか？

311：名無しのウマ娘ファン ID：gDutNpozp
良く生きてたなそいつ

313：名無しのウマ娘ファン ID：7wjDGqg8C
流石に手加減はしたんだろ？

314：名無しのウマ娘ファン ID：kPXvOM/pC
その時脚を怪我さえていなければ本気で蹴れたんだよ……惜しいことをしたよ

316：名無しのウマ娘ファン ID：oMy+RjbWF
殺す気で芝

318：名無しのウマ娘ファン ID：JeJc8ooy3
どうせ脚怪我したのも酒が原因だろ？ スレ民はみんな知ってるんだぞ

321：名無しのウマ娘ファン ID：r7svIiloc
はいはい、本バ場入場始まったから集中して

322：名無しのウマ娘ファン ID：m3AVlrHSb
今日は1枠2番だっけ？ 絶好の位置だな

324 : 名無しのウマ娘ファン ID : VMdmV4ciW
仕上がりはどんなもんかね？

326 : 名無しのウマ娘ファン ID : 8ilcUYz5v
1番の子は…15番人気か、パツとしない感じだなあ。仕上がりは良さそうなんだけど

328 : 名無しのウマ娘ファン ID : P8YGTqI3U
2200の条件戦に勝ってはいるけどあんまり長い距離は得意じゃないっぽいんだよね、この娘

330 : 名無しのウマ娘ファン ID : EqI rHRfFO
3000mは厳しそう？

332 : 名無しのウマ娘ファン ID : GKeh+ / fpA
さて次はテウスだが

333 : 名無しのウマ娘ファン ID : MYvUMWMy
うおっ

334 : 名無しのウマ娘ファン ID : Oh i + vi Y 5 T
何か見るたびに仕上がりが良くなっていくテウスは…

335 : 名無しのウマ娘ファン ID : RSDitxCdW
今年だけでもう10戦使ってるのに疲労すら見せないとかヤバすぎ

336 : 名無しのウマ娘ファン ID : 8vEIOMXgh
もう今日はテウスで決まりだろこれは

337：名無しのウマ娘ファン ID：uD0qr0/5e

周りも万全に仕上げて来てるけど……：対抗できそうなのはマヤノ
トツプガンくらいか

339：名無しのウマ娘ファン ID：xv7itBmOm
実況も圧倒的一番人気って言ってるな

340：名無しのウマ娘ファン ID：dc2AYgy3T
無敗の二冠だもんなあ

342：名無しのウマ娘ファン ID：gUKE/Uen4
デイリー杯で暴走してた娘がここまで……感慨深いものがあるな

343：名無しのウマ娘ファン ID：kPXvOM/pC
浸るのは菊花賞を終えてからにするんだよ

344：名無しのウマ娘ファン ID：e/HPI7sDy
そろそろスタートだぞ皆！ 酒は持ったか！

346：名無しのウマ娘ファン ID：CdRIwH86o
今日はコーラ割にしたぜ！

347：名無しのウマ娘ファン ID：hS94NIeyR
俺はロック！

348：名無しのウマ娘ファン ID：kPXvOM/pC
私もオン・ザ・ロックだよ

349：名無しのウマ娘ファン ID：tdawricJg
崎山25年をオンザロックでとか良い飲み方していらっしやる

351 : 名無しのウマ娘ファン ID : eBRxvEPY9
やっぱネキ稼いでるんやな……

352 : 名無しのウマ娘ファン ID : yiWD2XPtJ
多分俺らよりネキの方が稼いでるしなんならまだ中等部のテウス
ちゃんの方が稼いでるんやで

353 : 名無しのウマ娘ファン ID : tFiBEql5f
えぐい話はやめてもろて……

355 : 名無しのウマ娘ファン ID : T9QgnZQcd
ほらほらレース始まったから

357 : 名無しのウマ娘ファン ID : D3GgxF7ac
テウス抜群のスタート!

359 : 名無しのウマ娘ファン ID : uzC8Ax2vQ
今までで一番会心のスタートだな

360 : 名無しのウマ娘ファン ID : FnTVkj6 /
淀の坂をあんな速度で駆け上がってスタミナ持つのか……?

361 : 名無しのウマ娘ファン ID : +GnWtcMSq
テウスじゃなかったら破滅逃げだつて言うところなんだがな

362 : 名無しのウマ娘ファン ID : 5PueoU8tS
このブラックプロテウスにスタミナ切れによる敗北は決してない
! と思っただこうツ!

364 : 名無しのウマ娘ファン ID : 0HoUUnnSa
大逃げしても安心して見ていられるのはサイレンススズカとブ

ラックプロテウスくらいだよな

366 : 名無しのウマ娘ファン ID : W32yzmwgw
もう5バ身くらい差がついてるんだが……

367 : 名無しのウマ娘ファン ID : aWbKmtGnL
やっぱり見てて気持ちよくなる逃げだな

369 : 名無しのウマ娘ファン ID : fY87AAvK5
いやー強い逃げだ

370 : 名無しのウマ娘ファン ID : BufXPapOm
1000m通過タイム59.5は草

371 : 名無しのウマ娘ファン ID : E02PZ/jIF
速すぎイ!

373 : 名無しのウマ娘ファン ID : Z69hBLph t
セイウンスカイより速いんだが?

375 : 名無しのウマ娘ファン ID : NfZotLlYk
セイウンスカイはここから一度スローペースに落として見せたが

377 : 名無しのウマ娘ファン ID : DWIblJ+j2
テウスにそんな器用なことできるわけないじゃないですかやだー

378 : 名無しのウマ娘ファン ID : HnpBXaWTh
ですよーw

379 : 名無しのウマ娘ファン ID : vuluPEzli
まあそれでもタレないのがこのウマ娘よ

380 : 名無しのウマ娘ファン ID : ClcEOykcg
一人だけ4800m走ったウマ娘だからな……

381 : 名無しのウマ娘ファン ID : z f / H O E x q X
流石に二度目の坂でみんな仕掛けてきたな

382 : 名無しのウマ娘ファン ID : w z n C c l W g J
まあそのくらいで行かないと追い付けないよな……

384 : 名無しのウマ娘ファン ID : v i A r 3 7 F X g
流石に厳しいか？

385 : 名無しのウマ娘ファン ID : h v c Z J p 4 f T
え？

386 : 名無しのウマ娘ファン ID : Z m w O S X f 6 o
まだここから加速できるのか……

388 : 名無しのウマ娘ファン ID : o B I 2 N 8 V j P
うっそだろお前www

390 : 名無しのウマ娘ファン ID : / B K j m B d p n
もう一人旅ですねぇ！

391 : 名無しのウマ娘ファン ID : O X 7 l w t S 6 s
これは大差あるのでは？

392 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9 X H w K W 6 U H
丁度いい感じに日が差して

393 : 名無しのウマ娘ファン ID : lUbXkSUWm
逃げウマ娘なのに直線一気で駆けていくのずるいよなー

395 : 名無しのウマ娘ファン ID : 5yD9m17sL
これはもう決まった！

396 : 名無しのウマ娘ファン ID : mGjuD+15Z
よっしやああああああ!!!

398 : 名無しのウマ娘ファン ID : ryGyLuQ6F
勝ったああああああ!!!

399 : 名無しのウマ娘ファン ID : M+OPb21wN
来た来た来たあ！

400 : 名無しのウマ娘ファン ID : SWEI7TNzG
無敗三冠だああああああ!!

402 : 名無しのウマ娘ファン ID : 4nQtQdL1U
無傷の16連勝で三冠だ！

404 : 名無しのウマ娘ファン ID : qS35uzL/i
いやー酒がうまい！

406 : 絶壁の酒クス ID : kPXVOM/pC
祝い酒じゃー!!

407 : 名無しのウマ娘ファン ID : oXXxi9lgSe
アンタは祝いじゃなくても飲むだろ、後なんだそのコテハンは

408 : 名無しのウマ娘ファン ID : awVUrsDa e

コテハンそれでいいのか本当にwww

409 : 絶壁の酒クス ID : kPXvOM/pC

おめーらが付けろって言ったんだろぅがよー。まあ他に良いの思
いついたら適当にまた変えると思うからしばらくはこれで行くよ

411 : 名無しのウマ娘ファン ID : eJeh4KAGH

まあわかりやすくていいかwww

413 : 名無しのウマ娘ファン ID : C6bM6ERCL

3000走った後に余裕な顔してウイニングランするウマ娘を初
めてみたぞおれは

415 : 名無しのウマ娘ファン ID : tCfy9qzU1

もう3000くらい走れそうな余裕を感じる

417 : 名無しのウマ娘ファン ID : R6PvOPsuO

適性距離何なんだろこの娘……

419 : 名無しのウマ娘ファン ID : lbJ9fu8pa

適性距離は今のところ1000—3000かな!

420 : 名無しのウマ娘ファン ID : oRd5Xkx+O

>>>419 草

421 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9hkIhbct1

>>>419 オールラウンダーってレベルじゃねえぞ

422 : 名無しのウマ娘ファン ID : R169nTO95

勝ち時計2 : 59.8!?

4 2 3 : 名無しのウマ娘ファン ID : 4 E z b 5 U k g d
えつつつつぐ

4 2 4 : 名無しのウマ娘ファン ID : j 5 i A x e l 5 T
世界レコードじゃん……

4 2 6 : 名無しのウマ娘ファン ID : V Q v l s h c 6 k
半世紀位は超えられそうにないタイムだな……

4 2 8 : 名無しのウマ娘ファン ID : u l g H 8 9 3 D u
ついに三本目の指がたった！

4 2 9 : 名無しのウマ娘ファン ID : y q 6 w u 3 3 s u
いよっしやあああ!!!

4 3 0 : 名無しのウマ娘ファン ID : U 8 o Q q 5 d V W
2着のマヤノトップガンのタイムもこれレコードだよな？

4 3 1 : 名無しのウマ娘ファン ID : Q G s 3 k 3 3 C Y
何でマヤノちゃんがこのタイムで負けるんですか？

4 3 3 : 名無しのウマ娘ファン ID : p b v D l 8 k T g
相手が悪すぎたな……

4 3 5 : 名無しのウマ娘ファン ID : P c S 8 y 5 Q o G
一年違えば菊花賞取れただろうにのう……

4 3 6 : 名無しのウマ娘ファン ID : W P F y 6 E Q M A

この勝ち方だと来年の阪神大賞典でまた更新しそうな気がするな、
余裕ありそうだし

438 : 名無しのウマ娘ファン ID : u q m r h Y + w h
これ以上マジキチレコード出さなくていいから

439 : 名無しのウマ娘ファン ID : X M 2 i W F n m K
後1秒くらいは縮めてきても俺は驚かない

440 : 名無しのウマ娘ファン ID : 0 N + V I j 7 W A
まあテウスだしやるか……って感じになるな

442 : 名無しのウマ娘ファン ID : R Q g e 6 3 9 s B
常識が破壊されてやがる……遅すぎたんだ……

444 : 絶壁の酒クス ID : k P X v O M / p C
いやーめでたいね！ みんなで飲みに行くか！ お姉さんが奢つてやるぞ！

446 : 名無しのウマ娘ファン ID : 5 P k 0 w Z J R H
マ？ どこで飲む？

448 : 名無しのウマ娘ファン ID : G T h d s r E w u
今から集まるんなら東京レース場前駅前の飲み屋とかでどう？
わかりやすさろう

449 : 名無しのウマ娘ファン ID : s p 4 M A g x s c
俺今京都だから……急いで帰れば行けるか？

451 : 名無しのウマ娘ファン ID : U v E I J X v K J
でも明日月曜だから厳しいだろ？ 仕事とかさ

453 : 名無しのウマ娘ファン ID : J G d u P I u t f
自宅警備員だから別に……

455 : 名無しのウマ娘ファン ID : NaRzjRxEs
俺は有給取ってあるから問題ない

457 : 名無しのウマ娘ファン ID : dDC4t/beR
俺も有給取った。どうせ今日飲むのはわかってたし二日酔いとか
になりそうだったからな

458 : 絶壁の酒クス ID : kPXvOM/pC

じゃあ集まれる奴だけで20時に駅前集合！ わかりやすいよう
にテウスちゃんがつけてるストールと同じやつ羽織っておくから目
印にしてくれ

460 : 名無しのウマ娘ファン ID : UFeEPJ95L
りょうかーい

461 : 名無しのウマ娘ファン ID : nJqqzzKkE
人の金で飲む酒は美味い

463 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9cSlJ5+t3
折角だし俺もいくかー

720 : 名無しのウマ娘ファン ID : bgI2SzMNU
お疲れー
.
.
.

721 : 名無しのウマ娘ファン ID : JS c Q / 0 c G I
おっつおっつ☆

7 2 2 : 名無しのウマ娘ファン ID : 0 X 4 h d C 4 f 6
いやー楽しい飲み会でしたね

7 2 4 : 名無しのウマ娘ファン ID : d T o 7 k 0 e V H
結構暇なスレ民が居たんだな……

7 2 5 : 名無しのウマ娘ファン ID : U 7 W y o b O M W
急だったのに20人くらい集まってたみたいだな

7 2 6 : 名無しのウマ娘ファン ID : l k O W j Z g H e
ウマ娘も数人いたな、ネキ含めて

7 2 8 : 名無しのウマ娘ファン ID : F W k U A 2 3 H b
本当にネキが170cmくらいの長身スレンダーっすり目美人だっ
たなんて……

7 2 9 : 名無しのウマ娘ファン ID : p t s O I Y Q A q
いやほんとネキ美人だったわ

7 3 1 : 名無しのウマ娘ファン ID : o 3 R l S r Z u N
酒癖さえ悪くなければモテるんだろうなって……

7 3 2 : 名無しのウマ娘ファン ID : o f M Z F Z c 0 z
正直酒癖悪いってわかってても良いと思える

7 3 3 : 名無しのウマ娘ファン ID : c X 3 I 4 S 6 h A
その当のネキはまだ戻ってきてないん？

7 3 5 : 名無しのウマ娘ファン ID : t R Y P G 7 X y 6
ネキは……その……

736 : 名無しのウマ娘ファン ID : wZCPsdfj4
スレ民のウマ娘を連れて2次会に行きましてね……

737 : 名無しのウマ娘ファン ID : ecz2uUk4h
>>736 草

739 : 名無しのウマ娘ファン ID : pdDieqhA
連れ回されてる子たち災難だなあwww

740 : 名無しのウマ娘ファン ID : 5bT7Lv6cr
飲んだ後カラオケに行くそうですよ

742 : 名無しのウマ娘ファン ID : F09iL7pUV
やっぱウマ娘は酒強いん？

744 : 名無しのウマ娘ファン ID : heUgUJjrk
みんな結構飲んでて足元フラフラはしてたけど意識ははっきりしてたからまあまあ強いっぽい

746 : 名無しのウマ娘ファン ID : ldwR46/X0
やっぱ上位互換なんだな……

747 : 名無しのウマ娘ファン ID : +jNQSfZGj
ウマ娘ってカラオケ好きな娘多いよな？ なんで？

748 : 名無しのウマ娘ファン ID : lDiHG1AM8
昔からストレス発散法とかやる気上昇のためにとかで行くのが各地の学園でのブームだったらしくて、その影響の名残だと聞く

750 : 名無しのウマ娘ファン ID : hjozO2ALl
まあ学生のころから行ってたならそうなるか

751 : 名無しのウマ娘ファン ID : p t v E x n 8 u X

大変だ！ 私ネキに連れ回されたうちの一人なんだがネキが二次会の居酒屋ですっころんで怪我した！

753 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6 C J D t y a Z l

>>751 案の定このざまだよ

755 : 名無しのウマ娘ファン ID : K K J T K X 0 x c

>>751 やっぱりネキ酒飲むの止めなよ

756 : 名無しのウマ娘ファン ID : X p m J O 8 E U o

>>751 結局いつも通りで安心感さえ覚える

757 : 名無しのウマ娘ファン ID : o M K o c L h K B

もう誰も怪我の心配しなくて草

759 : 絶壁の酒クズ ID : k P X v O M / p C

おまえらあとでおぼえとけよ

760 : 名無しのウマ娘ファン ID : L H s 4 X O f H 6

スレ覗ける余裕があるな、ヨシ！

761 : 名無しのウマ娘ファン ID : v Y E F 9 / f c /

全然余裕じゃん

763 : 名無しのウマ娘ファン ID : l H y Z E D u 7 L

はいはい、病院に行ってお医者さんに叱られてきてくださいねー

764 : 絶壁の酒クズ ID : k P X v O M / p C

解せぬ……

第四十三話 対決、謎の緑色ウマ娘!?

菊花賞を終えて数日、私はいつも通りトレーニングを――
「ブラックプロテウスさん、本日はありがとうございます。またよろしくお願いします」

「はい、ありがとうございます……ふう……」

することが出来ていなかった。インタビューに来た乙名史記者を見送り、一息つく。外を見るとすっかり日は沈んでしまっている。

無敗でのクラシック三冠達成。どうやら私が思っていた以上に注目度が高かったようで、連日のようにインタビューやらTV出演やらの依頼が舞い込んできており、授業後2、3時間はその対応に追われている。

次走を次の日曜の秋の天皇賞に定めているので、トレーニングに集中すべきなのだろうが、ファンへの対応は疎かにしたくないため、多少無茶なスケジュールであるが詰め詰め込みでの対応になってしまっている。

依頼に関してはURAからの斡旋が最優先で、後は回せるものは後日に回して等、断れないものをトレーナーさんが選別して対応する形になっている。

その為、トレーナーさんは多分ここ数日ともに眠れていないだろう。トレーナー室に栄養ドリンクの瓶が散乱しており、目の下にはうつすらと隈が出来ていた程だ。

朝方全部片づけておいたが、多分また散らかっているだろう。インタビューが終わった報告をするついでに片付けていこうと、トレーナー室へと足を運ぶ。

トレーナーさんは嬉しい悲鳴だから気にするなと言っていたが、私としては申し訳ないと思う。

この熱が冷めるまでレースを休み、ファンサービスに徹することも考えたが、スズカ先輩やマツクイーン先輩と戦える最後の機会になる

かもしれないので、どうしても今回だけは譲れなかった。

マックイーンさんもスズカさんも、長い間シニア級にいる。マックイーンさんはこれが復帰初戦だし、スズカさんは前走、毎日王冠の走りを見た限り、全盛期からはやはり衰えが見える気がする。

現にスズカさんとの併走では、2000mであればほぼ互角になるまで能力差が縮まっているほどで、2400m以上であればほぼ勝てる状況だ。

そしてテイオーさんは既に引退を表明し、ドリームシリーズへの参加が認められ、ルドルフ会長に勝つのだと意気込んでいる。

ドリームシリーズへの参加条件は秘匿されており不明となっているが、テイオーさん、マックイーンさん、そしてスズカさんにも参加の誘いが来ているという。

基本的には一定以上の実績を残したシニア級のウマ娘に対して誘いが来る、ということだろう。現に私にはその話は来ていない。まあ、多分希望すれば通ると思うが……まだそちらに挑戦するつもりはない。

まだまだ私はクラシック級で現役バリバリだし、フジキセキ先輩との決着もまだついていない状態で移籍するのは流石に無い。

そのフジキセキ先輩の競走能力がどの程度戻るかが問題だが……順調に回復したならば来年の安田記念辺りには出てくるだろう。

「トレーナーさん、インタビュー終わりました……大丈夫ですか？」

朝片づけたばかりのトレーナー室の床に栄養ドリンクの瓶が十本以上転がっているのを見て、思わず声を掛ける。

「まあ、一段落は付いたから大丈夫だ。お前こそ大丈夫か？　あまり走っていないだろう？　頼まれていたコースの夜間使用許可、取れたが走ってくるか？」

「そうですね。門限まで走ってこようと思います」

インタビューの応対などもあつてここ数日は日が沈んだ後に走っている。若干寒いのだが、走っているうちに気にならなくなるので特に問題はないが、あまり音が響くようなトレーニングは流石に自重している。

「あ、そうだ。UR Aからクラシック三冠のボーナスの明細が来てたぞ。ボーナス1億だ」

「話していた通り、全額私に振り込まれたってやつですよ？ 私だけのカジヤないんですから、半分こでよかったんですけど」

「いや、頑張ったのはお前なんだし流石にな……」

「正直この歳で大金持っても何とも……」

「というか、レースの賞金だけでもとても大変なことになっている。本賞金の金額で現状1億以上、その他にも特別出走手当やらグッズ類売上のインセンティブやらなにやらで賞金3割の手取りとそこから掛かる税金を差し引いても、考えるのを放棄するほどの額が振り込まれている。」

GI勝つごとに一本ずつ、趣味の日本刀を買ってはいるが高いものでも700万くらい……今考えると700万円って高いよね、うん。お財布の紐、ちゃんと締めないといけないな……こういうの、上を見るとキリがないし。」

「金はいくらあっても困るもんじゃねえし、貰っとけて。何かあった時に困るといけないしな。どうしても気にするってんなら、今度コーヒーでも奢ってくれ」

「分かりました。マックイーンさんに教えてもらったメジロ家御用達のお高い喫茶店に連れて行ってあげますね」

「いや、ドレスコードが必要そうな店はちよつと……」

冗談を交えつつ、片付けを済ませてからコースへ向かう。今日は見知った顔だけの取材ということもあって、体操服で取材に応じたからだ。

なるべくトレーニングの時間を確保するためのものと乙名史記者達も理解してくれた。でも、やっぱり少し失礼だっただろうか。大勢の人が来るときは流石にちゃんと制服か勝負服で応対しようと思う。

「……あれ？」

芝のコースへ向かうと、コースで誰かが準備運動をしているのを見

つけた。

まだ18時を少し回ったところだし、門限も過ぎていないので別におかしくはないのだが、私が不思議に思ったのは、今まで見たことが無いウマ娘がそこにいたからだ。

腰の下まで届くくらい長い髪を軽く後ろで一つに纏めている、鹿毛のウマ娘だ。私より少し背が高いくらい、体付き的に恐らく高等部の先輩だろうか？

今まで一度も練習で見たことがないウマ娘だ。緑色のトレセン学園指定体操服を着ているから学園生だろう。そして見たことがない筈なのだが。何処かで出会ったような気もする……

「あ、あの、こんばんは。えつと……はじめまして？」

出会ったことがあるような気もするが、思い出せない。ひとまずじつと見つめ続けるのも失礼だと思つて話しかけに行く。

「えつ？ あ、テウスちゃ……いえ、こ、こんばんは！」

話しかけると少し面食らったようにしながらも返事が返ってきた。私の名前は知られているらしいが、やはり思い出せない。

「あの、すみません先輩。何処かでお会いしたことはありませんっけ……？」

「へっ……あ、ああいえ！ 初めて！ 初めてですよっ!?!」

わたわたと慌ててはいるが、どうやら初対面らしい。まあ、いい意味でも悪い意味でも名が知れているだろうし、一方的に向こうが私の名前を知っていてもおかしくはないか。

「そう、ですよね？ 何処かでお会ったような気がしていたんですけど……はじめまして、ブラックプロテウスです。先輩のお名前をお伺いしても？」

「えっ!? えつと……ト、トキノって言いますう！ じゃ、じゃあわたしはこれで！」

慌てたようにその場を去ろうとする。トキノ先輩……うん、やつぱり初対面だろう。

「あつ、待ってください。折角なので併走しませんか？ 走るつもりだったんですよね？」

「いいんですか？ お邪魔にならないと良いんですけど……」

先輩を呼び止めて一緒に走ろうと誘う。折角準備運動までしていったんだから、走らないで損というものだろう。それに……

「トウインクルシリーズでは見たことありませんし、現役ではないんですけど……先輩、とつても強いですよね？ 邪魔になることなんてありえないと思うんですけど」

一目見た時から、このウマ娘は強いと思えた。ドリームシリーズに出ているところも見たことがないが、このウマ娘ならどちらのシリーズでも十分やっていけるような、そんな気配がする。

「……買い被り過ぎですよ？ あなたの言う通り、既に現役ではありませんし。でも、そうですね……折角なので、走りましょうか。芝、2400でいいですよね？」

「ええ、お願いします。手早く準備運動済ませちゃいますね」

先輩と一緒に準備運動を済ませて、スタート位置に着く。トレセン学園での芝2400は一般的な併走メニューであり、また、模擬レース等でもよく用いられる。

ステイヤーである私には得意とされる距離ではあるが、ちよつと短いとも言える絶妙な距離だと思う。

「では、いきますよう？」

号砲やゲートなどはないので、トキノ先輩が持っていたコインを弾き、地面に落ちるとともに揃って駆け出す。

私はいつも通り逃げようと、最初から飛ばしていく。トキノ先輩も逃げなのか、私と競うように走っている。

スタートもかなり良い。やはりこの先輩、ただ者ではない。

クラシック三冠を取っただけあって、私は私自身の実力をそれなりに評価している。過大評価ではないと思うのだが、その私に競り合える時点で現役を退いているとは到底思えない。

今回使用する芝コースは東京レース場のレイアウトを再現したものだ。つまり、芝2400の併走というのは、東京芝左回り2400。ダービーを再現したものだと言える。

トレセン学園にはいくつもコースがあるため、模擬レースで使った

中山再現のコース以外にもこういったコースがあり、様々な練習が可能になっている。

第1、第2コーナーにかけて長い下り。第3コーナー手前で大きく上り、その後緩やかに下った後ホームストレッチで上り……と、大体のところで上るか下るかしており、平坦な道の方が少ないというタフでハードなレイアウトなのが東京レース場の特徴だ。

ウマ娘の能力が出やすいコースデザインで、最も運があるウマ娘が勝つと言われるダービーが行われる東京レース場だが、いわゆる「紛れ」は起こりにくいと言えるだろう。

そんなレースを、一応私は制している。だから、このコースも苦手というわけではないのだが……

距離が離れない。全力で飛ばし、ゆったりとしたコーナーでもスピードを落とさず駆け抜けていったのだが、ほぼ真横で抜きつ抜かれつを繰り返している。

横目で見ると向こうも少し驚いた表情をしているので、多分同じことを思っているだろう。脚質的に、私と彼女のものは似通っている。現在は私が外側なので若干不利ではあるが、それを差し引いてもとても現役を退いたウマ娘と思えない走りだ。

向こう正面に入ったところで早々に勝負を仕掛け、半バ身程前に出る。正直、カーブより前に出れないと相当厳しいと思う。

「……っ!!」

トキノ先輩が脚に力を籠めたのを感じる。半バ身付けた差が縮まっていく。

このウマ娘は、強い。ならば、本気を出すしかない。ただの併走、いや今となつては野良レースだが、それで全力を出したと知ればトレーナーさんに怒られてしまうだろう。

それでも、今この隣のウマ娘に勝ちたい。間違いなく私が出会った中で五指に入るであろう強敵に勝ちたい。

世界から音が、色が引いていく、いつもの感覚。まさかただの野良レースでこの状態になるとは思いもよらなかつたが、出てくれたのなら丁度いい。

今になっても意識しては出せないが、出てしまうと何でもできそうな全能感があつて、走るのがもつと気持ちよくなる。

向こう正面の坂の手前で既にスパートを切る。隣のウマ娘から驚いたような雰囲気を感じるが、それを置き去りにして前が出る。

ハナを奪い去り、内側も奪い去つて第3コーナーへ入る。スピードを保ったままコーナーを駆け抜けて、そのまま先頭を――

「まだ、まだっ！」

タダで駆けさせては、貰えなかった。直線に入る手前、トキノ先輩も勝負をかけてきた。爆発的なその加速力で、私から先頭を奪い去りにかかる。

これで現役を退いている？ 何の冗談だろうか。スピードもパワーもスタミナも、第一線で通用すると思う。

1バ身、そして半バ身と差が縮まっていくのを感じて、姿勢を低く、低くする。練習用シューズでどこまで耐えられるかわからないが、出し惜しみなんてなしだ。

歯を食いしばって身体にかかる反動を無視して全ての力を加速だけに費やす。縮まっていった距離が、縮まらなくなり、やがて少しずつ離れていく。

そのまま行けば勝てる。そう思った瞬間、世界が凍り付いた。

つい後ろを振り向く。今まで併走していたウマ娘が、まるで人が変わったかのように威圧感を放ち、私だけの世界すら侵食していく。

これが、このウマ娘の本気――！

開き始めていた距離が、また縮まっていく。既に靴は壊れ、踏ん張りが利きづらくなってきた脚を奮い立たせ、追い付かれまいと更に地面を蹴り――

そうして、ゴール数歩手前で並ばれ、抜かされそうになり、隣のウマ娘が右脚を踏み出したとき、ガクンと崩れ落ち、失速した。

「っ！ 先輩っ!? って、あっ」

失速した先輩に気を取られ、ブレーキが間に合わず外ラチに激突し、粉碎してしまう。最近はあまり起こさなかったのだが、ついにはやってしまった。

「だ、大丈夫です。古傷が痛んだだけで……ってテウスちゃんこそ怪我はありませんか!？」

少しばかりよろよろとしていた先輩がこちらの惨状に気付き駆け寄ってくる。多少右脚を気にしているようだが、骨が折れたとかそういうわけではなさそうだ。

「わ、私も大丈夫です。慣れてますから。ごめんなさい、熱くなり過ぎました」

「いえ……わたしも夢中になってしまいましたから。ふふ、現役時代を思い出してしまいました」

これほど強いウマ娘ならGIの1つや2つ獲っていてもおかしくないと思っていたが、ケガが原因で引退したんだろう。まだ痛むのか右脚を庇うようにひよこひよこ歩いてる。

「すみません……お怪我は大丈夫ですか？」

「もう完治はしてるんですよ？ 長いレースには耐えきれないだけで……ふふ、そんなに気にしないでください。言っていなかったわたしも悪いんですから」

少し落ち込んでいた私の頭を撫でて気にしないようにと慰められる。

これほど強い先輩でも、怪我に悩まされて引退してしまう。どんなに強いウマ娘で怪我をすれば、本気で走れなくなってしまう。

私が怪我に悩まされることがないのは、殆ど反則技によるものだが……恵まれていることを忘れてはいけないな。

「それにしても……派手に壊しちゃいましたねえ」

「あつ……え、えーつと……たづなさんに報告しないと……」

見るも無残な姿になったラチを見て苦笑いする先輩。私はまたたづなさんに怒られるのかと頭を抱えてしまった。

たづなさん、怒るととつても怖いからなあ……

「今回はわたしも悪かったですから……何とかしておきますよ」

「え、でも、たづなさん怒りませんか?」

「? だからわたしが悪いので……あつ、いえいえ、大丈夫ですよ。こう見えてもわたしは先輩ですから、それなりに伝手がありますので。」

わたしに全部任せてください。テウスちゃんは、整理運動して早めにあがってくださいね。来週の天皇賞に響いたら大変ですから」

「そうですか……？　なら、お言葉に甘えます。あ、でももし怒られるようなことがあったら私の名前出して貰って構いませんので！」

ペこりと頭を下げて、整理運動を済ませる。

整理運動が終わった後ちらりとコースを覗くと、壊れたラチの前でスマホを弄っているトキノ先輩がいた。見ているのに気付いたのかこちらに笑顔で手を振ってくれたので、手を振り返し、一礼してからコースを去る。

まだ門限には少し早いですが、トレーナーさんに練習用のシューズと、コースのラチを壊してしまったことを報告しないとイケないからだ。

それにしても――

「私、先輩に次走の予定なんて言っちゃったけ……？」

まあ、きつとどこかで聞いたんだろう。秋の天皇賞に出ることは公言していたし、ニュースか何かになっていたのかもしれない。

自分で自分の疑問を解決して、トレーナーさんの下へ報告しに向かうのだった。

『未だ菊花賞の興奮冷めやらぬ、秋の府中。京都での伝説が今、ここ東京にも輝くのか！　秋シニア三冠初戦、天皇賞（秋）！　今年の天皇賞は、正しくドリームレースの様相を呈しています！』

インタビュールと練習漬けの日々を送り、日曜日。私は東京レース場にいた。

菊花賞から連闘にはなるが、調子は万全だ。

『ケガから復帰したメジロマックイーンと、同じく復帰初戦のナリタブライアンが居ます！　毎日王冠を制覇した前年の覇者、サイレンススズカが居ます！　そして何より、無敗のクラシック三冠ウマ娘、ブラックプロテウスが居ます！　22万人を収容できるこの東京レース場ですが。朝一から入場制限が掛かり、レース場周辺も数えれば合計30万は下らないファンたちが、ここ府中に詰め掛けました！』

今日も今日とてレース場は超満員。菊花賞の時も大勢人が来たらしいが、今日の客入りもとんでもない。

迷子にでもなるうものなら見つけ出すのは至難の業だろうな……と思いつつ、ターフから観客席を眺める。

横断幕やらなにやら、様々なものが観客席を彩っている。流石に野球とかの応援のような鳴り物は無いようだが……まあ、ウマ娘の聴力だと鳴り物を鳴らされると集中力が切れる可能性があるし、当然か。

それにしても、実況の人が言う通り今年の秋の天皇賞は大物揃いだ。マックイーンさん、スズカさん、ナリタブライアン先輩、ジェニユイン先輩、マチカネタンホイザ先輩、そして、リボンマンボ先輩。

G1戦線で活躍したクラシックシニア入り乱れた優勝たちが、18人出揃っている。

「それにしても……テウスさん。本当に出てきましたのね。呆れるというか、流石というか」

「ふふっ、そうね。沢山走れるのは羨ましいわ」

マックイーンさんとスズカさんが穏やかな雰囲気話しかけてくる。確かに少し無茶なスケジュールではあるが、無理はしていないのだが。

「先輩たちと戦える最後のチャンスかもしれないからね。どれだけ強くなったのか、本番のレースで証明します」

「ふん……仲が良いのは何よりだが、こちらも忘れてもらっては困るぞ。手加減はせん」

先輩たちと談笑していると、ナリタブライアン先輩が話しかけてきた。

ナリタブライアン先輩は今年の阪神大賞典の後、関節炎を患って長期休養していたウマ娘だ。

私と同じく三冠を制したウマ娘であり、おそらく今年か来年あたりドリームシリーズに移籍するであろうと言われている、先行や差しを得意とするウマ娘だ。

「はい、手加減なんて不要です。全力を尽くしましょうね、先輩」

「やっぱり、無理を言って復帰してよかったな。こうして、楽しい勝負

ができる」

獯猛な笑みを浮かべて、ナリタブライアン先輩が離れていく。周りの先輩たちも、闘志を燃やしている。

少し肌寒くなってきたというのに、ここだけまるで真夏になったかのように暑く感じる。

「凄い気迫ですね。皆さん」

「ええ、そうね。私も楽しくなってきたわ」

「テウスさんも笑っていますわよ？ まったく……でも、熱くなるのもわかりますわ」

勝つのは、私だ。そう言っているかのように、全員自信に満ち溢れた笑みを浮かべている。

『栄光の日曜日の主役となるのは、果たして誰なのか！ 天皇賞（秋）、まもなくファンファーレです！』

——そして、秋シニア三冠の初戦がまもなく、始まろうとしていた。

第四十四話 ウマ娘燃ゆる秋、現役頂上決戦

『曇り空のもと、東京レース場、芝2000mの舞台でウマ娘たちが追い求めるのは一帖の盾！ 鍛えた足を武器に往く栄光への道！ 天皇賞（秋）！』

東京レース場にファンファーレが響き渡る。何度聞いても、ファンファーレは特別だ。それがGIであるならば猶更、気合が入る。

『人気と実力を兼ね備えた、三冠ウマ娘5枠9番ナリタブライアン。今日は3番人気です。関節炎からの復帰明けですがこの人気は流石と言ったところですよ』

ゲートに入っていくナリタブライアンさんを少し見て、感じた。今日の彼女は怖くない。菊花賞や有《font:ul40》馬《font:念などで見せた気迫のようなものを感じない。調子で言うなら絶不調と言った感じだろうか。

やはり復帰戦というのは難しいんだろう。復帰初戦で勝ってみせたテイオーさんは特別だったというだけだ。

『2番人気はこの娘、帰国から無敗、前年の覇者7枠14番サイレンススズカ！ 2番人気ですが実力はピカイチでしょう！』

私が憧れた先輩。誰よりも速くて、誰よりも自由な、影すら踏ませぬ逃亡者。それがサイレンススズカ。

このウマ娘と走りたいと思っていた。

ずっと、このウマ娘と競い合いたいと思っていた。

ずっとずっと、このウマ娘より速く駆け抜けたいと思っていた。

『本日の1番人気。3枠6番、ブラックプロテウス！ 16戦16勝、無敗の三冠ウマ娘ブラックプロテウスです！ 先週の興奮未だ冷めやらぬ中、クラシック級の絶対王者が盾の榮譽をも掴み取るのか！』

ゲートに収まりながら、考える。

どうすればこのウマ娘に勝てる？

私を知る中で最も速いウマ娘を抜かして先頭で、ゴール板を駆け抜けることが出来る方法は？

考えて考えて、一つの結論に至った。

『18人のウマ娘が目指す盾は唯一つ。名優が、怪物が、逃亡者が、そして鋼鉄が。ここ府中で雌雄を決します！ 至高の2分間、現役頂上決戦が今——スタートしました！』

およそ500mの長い最終直線で仕掛ける？ 違う。それではサイレンススズカには届かない。

残り800辺りからロングスパートを仕掛ける？ それも違う。それでは、サイレンススズカを抜かせない。

なら、どうするか？ そんなこと、決まっている。私に出来ることは、いつだつてただ一つだけだったのだから——！

『各ウマ娘一斉にスタートを切る中、ぽーんと飛び出したのはやはりこの二人！ ブラックプロテウスとサイレンススズカが、仮柵が内側に移動したグリーンベルトに向かって並んで上がって行く！ どちらも譲らない、最初から熾烈な先頭争いだ！』

頭なんて使わない、使えない。私に出来るのは、最初から最後まで、全身全霊で駆け抜ける事だけなのだから！

「っ、テウスちゃん……！」

全力で、スズカさんから先頭の景色を奪いに行く。

スズカさんは、速い。

通常逃げウマ娘というのは前半スローペースに落とし、上がりの勝負に持ち込んで勝つものだと言われる。セイウンスカイ先輩とかが分かりやすい例だろうか？

だがスズカさんは最初から飛ばしてそのまま早いタイムで直線も乗り切ってしまう。

そのペースは決して無理をしているわけではなく、自分のペースを保っている。それがたとえ他のウマ娘とは全く違うスピードだったとしても。

サイレンススズカはそんな究極のマイペースを貫くウマ娘だ。もしそのマイペースを崩すことが出来れば、勝ち目はあるだろう。

通常であれば、そんな風に逃げを潰しに行ったら確実に潰される。かのシンボリルドルフでも確実に他のウマ娘の餌食となるだろう。

だが、この私ならば問題ない。最初から最後まで、スズカさんと競り合ってもバテない自信がある。それでも脚を潰さないという自信がある。

！ さあ、短いようで長いこの2分間、消耗戦に付き合ってもらおうか！

『レース場の期待に応えるように、ブラックプロテウスとサイレンススズカが横並びで先頭争いを続ける！ 三番手争いはジェニユインとメジロマックイーン、二人もいいスタートを切っていましたが既に5バ身、6バ身と離れている。続いてシンプトンダッシュ、ナリタブライアン、ホクトベガ上がって行きました』

後先なんて考えずに脚に力を籠めて、隣のウマ娘より速く、先頭を奪いに行くために加速する。私が内側な分、多少有利ではあるがその程度のアドバンテージは相手がスズカさんだということを考えると気にならない程度だろう。

『二人の逃亡者が並んで今1000mを通過。通過タイム——56.7！ 去年より速いぞ！ 既にもう10バ身以上離れて3番手争いはジェニユイン、シンプトンダッシュ、メジロマックイーン。外からナリタブライアンも上がってきたが、果たしてこの差は届くのか！ さあ先頭が大櫓を越えて、最後のコーナーが見えてきた！』

最内側、内ラチギリギリを速度を落とさずに駆け抜ける。今まで走ってきた中で、一番コーナーリングは上手く決まったと思う。

それなのに、スズカさんが私の前に出た。得意のコーナーリングでもスズカさんの方が前に行くの——!?

私が驚いていると、景色が、変わった。

辺り一面が草原の、静かな世界。そんな中スズカさんの走る道は何処までも続いていて、どれだけでも、走っていけそうな、そんな世界に。

更にじわり、じわりと距離を離される。次第に彼女の背中が見えて、そして遠ざかっていく。

まだ、届かないのか。あの背中に。まだ、彼女の前に立つことは出来ないのか。少しずつ離されていく距離に、そんなことを思い浮かべ

る。

『最後のコーナーで先頭の景色は譲らないとばかりにサイレンススズカが少し前に出た！ 府中の長い直線、ここから後続も一気に上がってくる！ メジロマックイーン、ナリタブライアンは伸びが厳しいか？ サクラチトセオーとジェニユインも上がってくるが、これは届かないでしょう！ やはり最後までこの二人、サイレンススズカとブラックプロテウス、最速の逃亡者の称号は果たしてどちらの手に！』

——いいや、まだだ。まだレースは終わっていない。最後の最後まで、諦めてたまるものか！

どれだけでも、どこまででも食らいついてやるとも！ 最初から、今日の私はそのつもりだったのだから！

前を見て、歯を食いしばる。もつと速く、もつと力強く。もつと、もつと前へ！

姿勢を極限まで低くして、加速することだけに全ての力を費やす。離されかけた距離が、少しずつ元に戻っていく。

競り合って、競り合って、競り合って——そうして、静かだった世界から、足音すら消えた。

「今、私は貴女を超える！ 往くぞ、サイレンススズカアアア!!!」

鬨の声を上げ、緑を斬り裂いて、彼女だけだった世界を塗り替える。彼女のものだった位置を、脅かし、奪い去る。

『最後の直線、ブラックプロテウスが伸びる！ 再度サイレンススズカに並び、いや並ばない！ その背を抜かして前に出たブラックプロテウス！ 逃げウマ娘とは思えないほどの、爆発的な末脚！ ダービーで見たあの末脚がもう一度府中に帰ってきた！』

「——ブラックプロテウスッ!!」

彼女が出したものとは思えないほどの、怒鳴り声にも思えるような声が、私の耳に届く。

あの冷静なスズカさんが、感情を露わにし、髪を振り乱し、歯を食いしばって、その景色を奪い返そうと必死に、全ての力を振り絞っている。

だが、それでも——

『異次元の逃亡者が今追跡者となった！ 彼女も伸びる、伸びるが、届かない！ 半バ身、そして1バ身と離れていく！ 踏んでいたその影が、サイレンススズカから離れていく！』

少しずつ、少しずつ私とスズカさんとの間に、距離が、開いてくる。彼女の世界はいつの間にか消えていて、色を失った私だけのものに、世界が染まっていた。

『そして今ゴールッ！ 頂上決戦、制したのは無敗の三冠ウマ娘！ ブラックプロテウスだっ！！ 2着は1バ身差でサイレンススズカ、これが帰国後初黒星！』

ゴール板を駆け抜けて、暫く走りながら減速する。そして速度が落ち切らないうちに、外ラチに軽く当たり、そのままずるとラチを背もたれにして座り込む。みつともないけど、しばらく休ませてほしかった。

流石に、肺も脚も痛い。最初から最後までフルスロットルは流石に無茶だった。しばらく休めば回復するだろうけど、ちよつとだけ休ませてほしい。

『3着は大差でサクラチトセオー。4着ジェニユイン、5着はシンプトンダツシユ。ナリタブライアンとメジロマツクイーンは後ろの方になりました。そして今勝ち時計が出ました。勝ち時計、1：51.8！ 去年の世界レコードをさらに3.4秒も更新！ 上がり3ハロンは驚異の31.6！ 到底逃げウマ娘のものとは思えない凄まじい末脚での決着となりました！』

「て、テウスちゃん……大丈夫？」

スズカさんがふらふらになりながらもこちらに近寄って、私を助け起こそうとしてくれる。

「あ、ありがとうございます……あっ!?」

「きやあっ!?」

スズカさんの手を借りて立ち上がろうとするとフラフラだったスズカさんは支えきれなかったのか、そのままこちらに倒れ込んでしまった。咄嗟にスズカさんを抱きとめる。

「まったく……お二方とも、大丈夫ですか？ まあ、あれだけの走りを

したら仕方ありませんわね。ナリタブライアンさん、手伝ってくださいまし」

「まあ……仕方ないか。勝者がこの様では客が心配するしな」

抱き合うような形になった私たちを、マックイーンさんとブライアンさんが助け起こしてくれた。それぞれマックイーンさんがスズカさん、ブライアンさんが私を支える形になって、そのまま支えられてウイナーズサークルへ向かう。

『勝者が今支えられながら観客に手を振っています！ それほどまでの凄まじい消耗戦でした！ 勝ったのは、無敗の三冠ウマ娘、ブラックプロテウス！ これにて17戦17勝無敗！ そして次勝てば、かの伝説に手が届きます！ はたしてエクリプスの伝説は、現実のものになるのか！ 今から次走が期待されます！』

私が手を振ると、フアンの人たちが大いに沸き立つ。支えられながらという少し情けない恰好ではあるが、今日ばかりは許してほしい。

そのままブライアンさんに連れられて、控室へと戻るのだった。

「テウスにスズカ、大丈夫か？ ウイニングライブ、出来そうか？」

控室でトレーナーさんにアイシングをしてもらっていた私とスズカさんに、トレーナーさんが聞いてくる。先ほどまでまともに立てなかったくらい消耗していたし、不安になるのはしょうがないと思うけど。

「私は、なんとか……一曲くらいなら踊れると思います」

スズカさんが少し考えこみながら答える。確か天皇賞秋のウイニングライブは『NEXT FRONTIER』だったと思う。バックダンサーの動きが激しいなあと練習中には感じていた。後、演出の炎が熱そうだなとは思ったけど、本番までどれくらい熱いのかはわからない。

「テウスは？ どうだ？」

「私ですか？ 私ならもう大丈夫です。今すぐもう一回走れって言われても走れますよ」

「ウソでしょ……」

こちらに話が振られたので、その場でぴよんぴよんと跳びながら答える。まだ少し疲れているけど、多分何とかかなると思うし。

「多少ぎこちなくなっても構わないから、無理だけはしないでくれ。いくらテウスでも、流石に回復し切ってはいないだろう？ 跳び方、少し変だからな？」

「あー……ま、まあ、大丈夫ですよ。ライブまでには完全に回復すると思えますから」

ちよつと無理していたのはバレバレだったらしい。まあ、それでもライブまでには回復するだろう。

「無理をしないけませんわよ？ さ、トレーナーさん、後は私がやっておきますから、出ていってくださいまし。ライブ衣装に着替えねばなりませんので」

そう言っただけでトレーナーさんが控室から追い出して、私とスズカさんの着替えを手伝ってくれた。

なるべくこちらを休ませながら着替えさせてくれるその気遣いはとても嬉しかった。

「……テウスさん？ サイズ合っていないようですわよ？」

「え、弥生賞の後に替えてもらったばかりなんですけど……」

「ウソでしょ……」

嬉しかったけど、胸周りが結構キツキツだったのを見て、それに二人ともジト目を向けないでほしい。これに関しては私悪くないし！

第四十五話 駿大祭

菊花賞から天皇賞（秋）への強行軍も無事に終わり、次走をジャパンカップに見定めて、翌日、つまり週初めから気持ちを入れなおして朝のトレーニングに励んでいた。

今年のジャパンカップには海外から超大物が来るといふ噂もある。調整はいつも以上に入念に行う必要があるだろう。

日本のウマ娘にとってはホームグラウンドの府中とはいえ、油断してはいけない。

いつも通り朝一は私で、それから少し遅れる形でキタちゃんやダイヤちゃん、その30分後くらいにトレーナーさんと先輩方が全員集まり、皆で軽く芝のコースを走っている。ただ、スズカさんだけはトレーナーさんの隣でこちらを見学するだけだ。

スズカさんが走っていない理由は単純明快。前日のレースでの消耗からか、コズミ——つまり、筋肉痛を起こしてしまったからだ。

トレーナーさんのマッサージ等によって大分改善はしているようだが、数日は休むべきと判断されたらしく、大人しく従っていた。横目で見ると少しそわそわして、今にも走りたそうにしているが、トレーナーさんのそばを離れるつもりはないのかびったりくっ付いている。

まあ、スズカさんがトレーナーさんの隣から離れないのはいつものことだし、大人しく見ていてくれるなら問題ないだろう。

「よし、そこまで！ 今日朝練は終了だ。各自クールダウンしてから解散な」

芝コースを軽く流して何周か走れば、朝のトレーニングは終了である。

既に暦は11月に入っている。朝は冷え込み始める時期であり、身体に負担がかかりやすいからとトレーニングは今まで以上に注意し

て行う必要がある。

ウマ娘は寒さに強い娘が多いが、だからといって甘く見ると痛い目を見ることになるだろう。

逆に時間をかけてじっくりとトレーニングに励む、という方針のトレーナーもいるようだ。

この時期のトレーニング設備は、空いていることが多い。トレセン学園では、9月に大きな『節目』があるからだ。

クラシック級9月頭までに勝ち上がれなかったウマ娘は、特別な事情があつて格上挑戦でも問題ないと判断された者以外は、それ以降出走できるレースが存在しなくなる。つまり、現役引退するか、地方に移籍するか、それとも障害に転向するか。大きな決断を迫られることになる。

そして、その中にはトレセン学園を去つてしまう娘達も存在する。私と同時期に入学した娘はまだメイクデビューしていない娘も多いのであまり存在しないが、私と同時にデビューした先輩方は6割程度しか学園に残っていない。

勝上率が大体3割なのを考えれば、結構残っているように思えるが、ケガで無念の引退をした娘や、ベルノライト先輩が所属しているサポート科へ転入した娘なども居るので、事情はウマ娘によりそれぞれであるのだが。

「そうだ、お前ら。駿大祭でやる屋台の道具、届いてたから動くか確かめとけよ。当日になつて動きませんでは笑い話にもならないからな。後ズカとテウス、お前らには本番の衣装も届いてるから、細かいサイズ合わせて貰つておけよ」

クールダウンを終えてみんなで着替えに戻ろうかと思つていたところ、トレーナーさんが思い出したかのように私たちを呼び止めた。

駿大祭。秋のファン感謝祭、別名聖蹄祭とはまた別のお祭りであり、聖蹄祭がファン参加型のイベントがあつたりする交流会的なものであるのに対して、駿大祭は歴史も古く、伝統行事の祭礼的な物で、曳

神輿や奉納舞、流鏝《font:ul40》馬《font》などの神事を多く執り行う、現代においても重要な行事だ。

チームスピカではゴルシさん主導で焼きそばの屋台を出すことになった。資格とか大丈夫なのかと思っただが、ゴルシさんが食品衛生責任者手帳を印籠のように見せつけてきたので問題はないみたい。

他にはふぐ調理師と船舶料理士の免許も持っていると言っていたが、どこからどこまでが本当なのかわからない。未だに彼女の寮の部屋を知っているウマ娘が一人もないし。

たづなさん辺りなら流石に知っているんだろうけど、もしたづなさんでも知らなかったらと思うと怖いので聞けずにいる。

今回特別なのは、スズカさんは奉納舞に、そして私は流鏝《font:ul40》馬《font》に抜擢されたことだ。

抜擢された時点でトレーナーさんと話し合い、日程の関係上調整が難しいと判断して、エリザベス女王杯とマイルチャンピオンシップは見送ることにした。

JBCシリーズは、天皇賞（秋）に出走した関係で規定上出走することが出来ず、こちらは出走を検討することすらできなかった。

あまり連闘が続くとトレーナーさんへの批判が大きくなってしまいうし、丁度いい機会であったともいえる。トレーナーさんは気にしなくてもいいと言っていたが、菊花賞から秋天への連闘だけでも相当な批判があったと聞く。私が勝ったから良いもの、もし負けていたりしたら相当炎上したことだろう。

他にも奉納舞はフジキセキ先輩とリボンマンボ先輩、流鏝《font:ul40》馬《font》にはミスターシービー先輩が任命されている。

トレーニングの合間合間にだが準備は進めており、後は本番を残すのみ、くらいには調整が終わっている。

この任命の顔触れを見るに、奉納舞で選ばれたお三方も、そして流鏝《font:ul40》馬《font》の私たちもかなり話題性のあるウマ娘たちだ。

スズカ先輩は言うまでもなく、私のライバルとしてかなりの注目を

されているリボンマンボ先輩。そして『キミが勝てば勝つほどに勝手に私の株が上がって行くね』と苦笑していたフジキセキ先輩が選ばれているあたり、今年のトレンドウマ娘をしっかりと抑えていると言っている。

それをリボンマンボ先輩に話してみたところ、『今回の人選的には間違いなくアンタを中心に選ばれてるわよ』と少し不機嫌そうに言われてしまったが。

それだけ『無敗の三冠ウマ娘』の称号が持つネームバリューは大きいということだろう。

国民的なスポーツとされているウマ娘のレースだが、何事にも波というものがある。オグリキャップ先輩が巻き起こした大ブーム以降少し下火になっているらしい今の現状から、新しい風を吹かせたいというところだろうか。そういった点では、確かに今の私は話題性バツチリだと思う。

シービー先輩も単独でブームを起こしたほど人気のあるウマ娘だし、何よりあのウマ娘は、強い。

レース的な意味合いは勿論、その在り方が強い。伝説だった『クラシック三冠』を、現実のもののだと知らしめた、その在り方が叙情詩であると言った人が居るほどである。

そういった点では、私が目指しているものに限りなく近いウマ娘の一人だ。

「はい、分かりました。テウスちゃん、折角だから今合わせに行きましょう？」

「はい！どんな衣装なのか楽しみですね」

折角なので早めに合わせておこうと、スズカさんと一緒にトレーナー室へ向かう。

流鏝《font:ul40》馬《font》は、ルドルフ会長とブライアンさんが行った時と同様に、今年も伝統通りの形でやることが決まっているので、衣装も伝統通りのものだ。小物の色などに多少の違いはあれど、ほぼ同じと言っていいだろう。

正直に言えばあの格好は少し……いや、かなり恥ずかしいのだけ

ど、伝統なら仕方ないと諦めた。勝負服としても使えるとはいえあの衣装でレースに出るようなことはないだろうし、祭りが終わったら着る機会もないものだ。

奉納舞の衣装はそれぞれのイメージカラーがしっかりと出ており、とても綺麗なものになっていることが多い。

デザイン画なら見せてもらったことがあるので、そこからどうなったのか楽しみだ。当日私が奉納舞を見ることは難しいと思うので、今のうちにじっくり見ておこう。

奉納舞自体はライスさんにビデオカメラを渡して撮影をお願いしておいたので後から見ることが出来るだろう。

本当は当日予定がないと言っていたブルボンさんをお願いするつもりだったのだが、渡したビデオカメラが謎の動作不良を起こしてしまうため、その時近くでリハビリに励んでいたライスさんをお願いすることになった。

お礼としてはスズカさんとテイオーさんとマックイーンさんのリハビリ資料をトレーナーさんから貰っていたのでそれを渡した。

何処かのタイミングで渡そうと思っていたものだったので、丁度いい口実だったと言える。

トレーナーさんは最初渡すことを少し渋ってはいたのだが、トレーナーさんのサポートの下リハビリに励むということを約束してもらうことで何とか見てもらえることになった。

こういったリハビリに関する知識というのはかなり価値が高いものだとわかつてはいるけれど、提供してくれたトレーナーさんには感謝しかない。

渋っていた理由も現状ライスさんに担当トレーナーの指導がつけていないということが問題だったらしい。指導者がいない状態でリハビリの情報だけ渡すというのも無責任ではないか、とのことだったので、ライスさんとトレーナーさんを会わせて話し合ってもらった結果だ。

対応としては臨時でチームスピカに所属する形になるらしい、現状は手続き中だが、近日中にも決裁が下りるだろう。

ライスさんは自分の担当トレーナーに関しては語らないけれど、なんとなく仲は悪そうではない雰囲気なので、あまり深掘りするべきことではないのだろう。

冷たいようだが、結局は同人同士の問題だ。そのうち収まるべき所に収まることになるだろう。外野からとやかく言うことではない。

「これが衣装ね……」

「とつても綺麗な柄ですね、今から奉納舞が楽しみです」

「そうね、とつても素敵な衣装ね。でも走り辛そうね」

トレーナー室に着いてまずスズカさんの衣装を見て見ると、緑色を基調にした衣装だった。

ゴールドシチー先輩やユキノビジン先輩、カレンチャン先輩が着ていたように袖は別に分かれていて、丈はかなり短い。後胸元が少し開いているようだ。ゴールドシチー先輩が着ていたものに近いと言えばわかりやすいだろうか。

スズカさんのいつもの勝負服のスカート丈もかなり短いと思うが、これはそれ以上に短い。綺麗な衣装だけど、胸元の露出と言い少しセクシーすぎると思う。

「じゃあスズカさん、合わせちゃいますね。ちよつとじつとしててください」

「ええ、わかったわ。よろしくお願いするわね」

一度合わせるために、ジャージの上からだが着付けを行う。軽く合わせる程度なら服の上からでも大丈夫だ。本来ならもうちよつと薄手の方が綺麗に見えるのだが、軽く合わせるだけであれば問題ないだろう。

袋帯のような大きなリボンの飾りが付いてるし、浴衣というより振袖に近いんだろうか？ 通常の着物とは多少着付け方法が違うが、まあ何とかなる。ここまで大きいものは流石に初めてだが……勝負服の一種だと考えると不思議はない。

奉納舞ともなればこれくらい大きなリボンがついていた方が映えもいいだろうし、何より伝統的な衣装だ。

「はい、出来ました。おかしなところはないですか？」

「ええ、大丈夫よ。それに、思ったより走りやすそうね」

ジャージの上から着付けした影響で少しばかりおかしな事になってしまっているが、スズカさん的には問題ないらしい。

そのうちスズカさんがこの衣装を勝負服としてGIに出ることはあるのだろうか？ ドリームシリーズへの移籍を本格的に考えているそうだし、機会は訪れないかもしれないが、もし機会があれば見てみたいものである。

「テウスちゃんも合わせないとね？ 手伝ってあげるわ」

「そうですね、折角なのでお願いできますか」

スズカさんのものを合わせ終わり、そのまま私の分も着付けすることにした。

私の場合は本番はサラシを巻いたりしないといけないのだが、巻き方は知っているのでスズカさんと同じようにジャージの上から軽く合わせるだけにする。

私の着物は薄い青を基調とした衣装だ。ブライアンさんとほぼ同じのような感じに仕立ててもらった。

独自色を出しても良かったのだが、伝統ということであるし、あまり型から外れたものは好まれないだろう。トレーナーさんは気にしなくて良いと言っていたが、シービー先輩が思いつきり型から外してくると思われたので、私は伝統通りで行くことにした。

噂によるとシービー先輩は緑を基調にして白袖で合わせてくるらしいと聞いたので、この色なら並んでもどちらか一方が悪く目立つということはないだろう。

「流石に着慣れてるわね。当日が楽しみ。もし間に合えば直接見に行くわね」

「はい、ありがとうございます。私も直接見ればよかったですけど……」

流鏝《font:ul40》馬《font》は奉納舞の後に行われる。準備などもあるので、私が生で見るのは流石に難しい。録画をお願いしているとはいえ、それだけは少し残念だ。

その後、二人でお互いの衣装を確認し、細かい気になる点をいくつ

かメモ用紙に書き留めてから、衣装を大切に箱にしまって、スズカさんと一緒にトレセンの衣装係さんのところへ書き留めた要望を持って行った。

現在は秋のGI戦線真つ盛り。衣装係さんは大忙しなのだが、駿大祭用の衣装ということで最優先で対応すると約束してくれたことは感謝しかない。

皆が協力して行う駿大祭。決して恥ずかしい真似は出来ないなど気合を入れなおすのだった。

そして、駿大祭当日。今年の駿大祭は11月の祝日、勤労感謝の日に行われている。

勤労感謝の日の前身はかつて宮中祭祀として執り行われた、収穫に感謝するお祭り、新嘗祭だと言われている。そこからいろいろあつて今の勤労感謝の日になったらしい。

その制定自体元々祭りが行われる日であつたことから、最近はそのあたりで駿大祭を行うことが多い。11月だと第二週から第四週まで毎週GIが行われる関係上土日開催は難しいのもあるだろう。今年には私とスズカさんが秋天に出走する関係もあつて、合同合宿も行えていないが、祭りの開催自体に問題はない。

URAから講師を付けてもらつて舞も全員問題なく行えるようだし、ウマ娘は習い事としての弓術を嗜んでいるものが多いから、流鏝《font:ul40》馬／font》も問題なく行えるウマ娘も多い。

私の場合は、おばあちゃんの道場で剣術と一緒に仕込まれた。剣術において私は全くと言っていいほど才能がなかったが、弓術に関しては上手だと褒められたことがある。

道場のことについては一切妥協しなかったおばあちゃんが褒めてくれたのは純粹に嬉しかったが、私は弓より刀の方が好きだったので当時は複雑な気分だった。

ルドルフ会長とブライアンさんが復活させた伝統的な流鏝《font

t:u140≫馬≫/font≫。岩を越え崖を跳び、厄に見立てたいくつもの的を射抜き祓う。

言葉にするのは簡単だが、これがなかなか難しい。弓自体は元々足を止めて射るものだから、伝統的な流鏑≪font:u140≫馬≫/font≫のように激しい動きを伴うものはあまりない。

おばあちゃんは以前は流鏑≪font:u140≫馬≫/font≫の講師として呼ばれたこともあったくらいの弓取りだったようで、幼い私にも伝統的な流鏑≪font:u140≫馬≫/font≫のやり方を教えてくれていた。

そういった点で私には一日の長があつたのだが、シービー先輩も涼しい顔をしてこなしていて驚いた。正直、私より上手かったと思う。話を聞けばシービー先輩も弓を習っていたことがあるとのこと、それなりに経験があつたようだ。

師と問答して揉めてしまい途中で辞めてしまったと語っていたがずっと続けていたら私なんて足元にも及ばないほどの腕を披露されていただろう。

「そろそろ本番だよ。準備はいいかい？」

流鏑≪font:u140≫馬≫/font≫の舞台となる霊山の前で考え事をしていたらシービー先輩が話しかけてきた。

いつも通りの表情に見えて、強い圧を感じる。目の前のウマ娘が『強い』ウマ娘なんだと、改めて思い知る。

「——ええ、勿論です。いつでも行けます」
その圧を受けて、私も気持ちを切り替える。レースの時のような感覚。いつもより露出があつて少し寒かったのだが、今は少し暑いくらいだ。

少しざわざわとしていた周りの声が、私たち二人がスイッチを切り替えたのを見てか少しずつ静かになっていく。まるで大レースが始まる前のような雰囲気だ。

『——篝火に火が灯されました。これより流鏑≪font:u140≫馬≫/font≫、開始致します！』

集中力を高めていると、進行役のウマ娘からアウンスが入る。いよいよ本番だ。全身全霊を籠めて、いぎ——

『構え。用意——……始めッ!!』

「さあ——行こうか!」

太鼓が鳴らされるとともに、流鏑《font:ul40》馬《font》が始まる。先手を取ったのはシービー先輩だった。

ブライアン先輩の時のように、本能をむき出しにした叫びではない。いつもの天衣無縫とした在り方のままで弓を射る。

それでも、その闘志は伝わってくる。肌が粟立つほどの闘志が、私の魂を奮い立たせてくれる。

負けていられない。飛び回りながら一つ、二つと的を確実に射る。

「墜ちろ『登り龍』!! はあああッ!!」

いつの間にか声を上げながら射っていたようだ。飛んで跳ねて、時には逆さまになりながら的を射る。

レースとは違って目の前のウマ娘とは、決して争っているわけではない。それでもウマ娘の本能が、私にそう叫ばせた。

目の前のウマ娘を厄と共にひれ伏せろと、魂がそう叫んでいる。

一つ、また一つと的を落とし、最後の的を私たち二人の矢が同時に射貫いた。

霊山を登りながら射っていたため、周りに観客の姿はない。なるべく的是は観客から見やすい位置に設置されていたし、所々に篝火があるから目が良いウマ娘なら見えているだろう。ついでに中継用のカメラもあるし、スクリーンでも見ることが出来たはずだ。

結局、私もシービー先輩も一射たりとも外さなかった。勝ち負けではないが、決着はやはりレースの場でということだろう。

息を整えながら、どちらともなく拳をこつんと突き合わせた。

賑やかだった祭りも終わった翌日、授業が終わった後すぐにトレーナー室に向かう。ジャパンカップの出走表が発表されたためだ。

通知の書類はトレーナーさんの下へ届くため、一秒でも早く確認す

るためにトレーナー室へ駆け込む。

既に外国からの招待ウマ娘が入国したという話は聞いたが、出走表を見るまで、そして発走当日まではどうなるかがわからない。

それでも出走表に名前が掲示されれば余程のトラブルがない限り出走することになるだろう。

そしてURRはその威信にかけて、万全な状態で出走できるようにサポートするはずだ。

「おう、来たかテウス。ほれ、お望みのものだ。覚悟はしていたが、まさか本当に出てくるとはな……」

待ち構えていたトレーナーさんから出走表を受け取り、中身に目を通す。一番上に書かれていたウマ娘の名前に武者震いし、口角が吊り上がる。

アメリカ生まれのイギリス育ち、初戦後に捻挫により温暖なドバイで休養し、紆余曲折あってそのままドバイトレセンのウマ娘としてイギリスエプソムダービー、キングジョージ6世&クイーンエリザベスステークス K G VI & Q E S、そして凱旋門賞を勝ち抜いた、欧州最強のウマ娘。

4戦4勝無敗。史上初の無敗欧州三冠ウマ娘。不可能を可能にする、『神に愛されたウマ娘』ラムタラ。その名前が、確かにそこにはあったのだった。

第四十六話 ジャパンカップ

今日はジャパンカップ当日。東京レース場のパドックで自分の出番を待つ。今日の私は大外枠、パドックも一番最後の出番だ。

今日の勝負服はいつもの黒の着物だ。宝塚で着たドレスや駿大祭で着た着物でもいいとは言われたが、一番着慣れているし、同じ東京レース場で行ったダービーでもこの勝負服で出たので、験担ぎの意味でもこの勝負服にすることにした。

そんなことしたくなるくらいには、今日の出走ウマ娘たちは強敵揃いだ。今日の出走ウマ娘は全員で16名。

海外からの招待ウマ娘計9名。今年の欧州三冠ウマ娘ラムタラさんを始め、昨年のドイツ年度代表ウマ娘のランドさん、昨年のジャパンカップで一番人気、ブラジルと北米で活躍しているサンドビットさんなどなど、世界各国で活躍しているウマ娘たちが集っている。

日本から出ているウマ娘たちも負けてはいない。ナリタブライアンさんは秋天に続き出走してきているし、京都大賞典を制したけれど、秋天には出てこなかったヒシアマゾン先輩もジャパンカップに出走してきている。

ヒシアマゾン先輩は秋天に出走したかったらしいのだが、トラブルがあつて出てこれなかったと聞いている。今回はその分気合も乗っているだろう。

秋天に引き続きマチカネタンホイザ先輩もいるし、宝塚で3着だったナターレノツテ先輩、京都大賞典から復帰して、ジャパンカップにも出てきたナイスネイチャ先輩もいる。

後、勿論と言つてはあれなんだけど、リボンマンボ先輩もいる。彼女は私と一番戦っている相手だ。ラムタラさんと同じくらい油断してはいけない相手だろう。

誰か一人だけ手強い、とかいう話ではない。誰も彼もが強い。GIだから当たり前なだけけれど、ジャパンカップは少し格が違う気がする

る。

国際競走というものの意味を改めて思い知った。決して油断できない相手ばかりだ。

ジャパンカップに出ると決めた時から今日まで、トレーナーと一緒に各ウマ娘、全員のレースを見て、それぞれの対策を考えてきたけれど、だからといって私のすること、出来ることに変化はない。最初から最後まで逃げ続けるだけだ。そこにそれぞれのウマ娘がどう動いてくるかを加味した対策は、トレーナーさんが考えてくれた。そういう意味では、このジャパンカップは二人分の力で挑むつもりだ。

秋天のようなペースで走ったら下手すると私でもバテる可能性があるけれど、あれは大逃げのスズカさんに最初から最後まで競り合いを仕掛けた結果なので、今回はそうはならないだろう。今回逃げを主戦法にするウマ娘は私だけみたいだし、単騎逃げですんなりと逃げきれてしまう可能性も十分あるが、油断はできない。いつも通りやるべきことをやろう。

15番のリボンマンボ先輩がパドックから戻ってくるのを見て、軽く頬を叩いて気合を入れなおしてから入れ替わるようにしてパドックへ向かった。

『東京レース場、次のレースは本日のメインレース、国際招待競走G1、ジャパンカップ！今年のジャパンカップは16人での競走となります。本日は好天に恵まれ、バ場状態も絶好の良バ場発表となっております』

何事もなくパドックのお披露目も終わり、本バ場入場を済ませて後はゲート入りを待っただけ。晴天の東京レース場は少し肌寒いくらいの気温だが、走るのに気になる程ではない。というか、ウマ娘は大体寒いには強い娘が多いので、この程度の気温であれば何ともない娘が多いだろう。

晴れ渡った空を眺めていると、見慣れない栗毛のウマ娘がこちらに近付いてきているのに気付いた。

彼女がラムタラさん。同じ栗毛でもスズカさんというよりはグラスさんに近いような栗毛のウマ娘だ。かなり背が高く、スタイルがいい。ゴルシさんと同じくらい身長がある。私は決して背が低い方ではないんだけど、それでも少し見上げる形になってしまった。

さて、何を言われるんだろうか。簡単な英語であればグラスさんに教わったので大丈夫だろうが、会話となると厳しい。それにドバイがあるアラブ首長国連邦は確かアラビア語が公用語だったはず。共通語として英語が通じると聞いた覚えはあるけれど……

「ハーイ、こんにちは、ブラックプロテウス。今日はいいい天気ね、ちよつと乾燥してるけど」

「え、あ、はい。よろしくおねがいます……？　日本の11月ならこのくらいだと思いますよ？　確かドバイは蒸し暑いんですけど。それにしても日本語お上手ですね？」

タイキ先輩よりもずっと流暢な日本語で話しかけられてグラスさんに簡単な挨拶を教えてもらっていたものが頭から完全に吹き飛んだ。この人日本のウマ娘だったっけ？　と思うくらい日本語が上手だ。

「あはは、驚いた？　日本語を勉強していた甲斐があったわね。卒業したら日本に来ようと思って勉強してたんだけど、その反応なら問題なく暮らせそうだよ。ドバイは雨も降らないのに蒸し暑くて困るのよね」

「どうやら思っていたより随分とお茶目なウマ娘だったらしい。こちらが驚いたのを見て楽しそうに笑っている。」

ただ、少し気になることがある。何というかこう、彼女からは強いウマ娘から感じる覇気のようなものを感じないのだ。

勿論、レースが始まるとスイッチが切り替わるようなウマ娘も居る。セイウンスカイ先輩辺りがそのタイプだし、彼女もそのようなタイプのウマ娘なんだろうか。

私は彼女のことを深く知らないし、多少引つかかる点はあるが、それも計算なのかもしれない。

「日本は平和でいいところよね。引退したら来ようと思っていたんだ

けれど、今からでも住みたくなっちゃったくらい。こっちに引越してきたときはよろしくね」

そう言っただけで和やかに去っていく。最初から最後まで、レースのことは口にしなかった。少しモヤモヤしたものを感じながら、もう一度空を眺めて、ふと思いつく。

もしかすると彼女は既に、燃え尽きてしまっているのではないかと。

2戦目でクラシックの頂点に立ち、3戦目で世代の頂点に立ち、4戦目で世界の頂点に立ったウマ娘。そこに至るまでにそれなりの事情はあっただろう。ただ、それでも彼女は頂点に立った。すでに引退のことを口にするくらいには、それ以上の目標を見出せないくらいの頂に、彼女は立っている。

彼女はそんな気持ちで走るようなウマ娘じゃない。そう理性では判断しながらも、私の心の奥の方で、ふつふつと何かかわいてくるのを感じていた。

『世界のウマ娘が栄光を求め、ジャパンカップの府中に集う！ 日本勢は対抗できるのか！』

レース場にファンファーレが鳴る。私の中にわいてくる何かを押し込めながら、自分が入るゲートへ向かった。

日本の東京、そこにある、ファンファーレが鳴り響くレース場で、この私、ラムタラにあてがわれた、4枠7番のゲート。入った後にふと、ここに至るまでの経緯を思い出してしまった。

デビューした後練習中に酷い捻挫をしまして、母の故郷のドバイで暫く療養しているうちに、その時担当していたトレーナーとサブトレーナーが諍いを起こした末に、トレーナーがサブトレーナーに銃で撃たれてしまう、なんて事件が起こった。

その事件の影響で元々いたイギリスのトレセンから、ドバイのトレセンに転校した。

そしてその後突如肺を患ってしまい、昔から少し身体が弱かったせいか、それとも色々起こって精神的に弱っていたせいかな、生死の境を彷徨ったこともある。

幸運にも一命は取り留めたし、捻挫による影響もほぼなかった。そんな私を『神に愛されたウマ娘』だなんて言う人もいたけれど、どんな皮肉なんだと思う。

本当に神に愛されているなら、こんな波乱万丈な生き方はしなくても良かったと思う。クラシック初戦だって本当は出たかったし、怪我也も病気ももうコリゴリだ。

どんな神話でも神に愛されたものにはそれなりの試練があるものだけれど、自分の身に降りかかるのは勘弁してほしい。

それでも、前のトレーナーが夢だと言っていたダービーを制した。その後はアイリッシュダービーに出るつもりだったが、またしても捻挫してしまって回避することになって、KGV I & QESに出ることにして、そして勝った。

その後も、脚の不安は消えなかったが何とか調整を済ませ、凱旋門にも出て、勝った。ブリーダーズカップに出るプランもあったけれど、やっぱり脚の不安があつて、間隔も短かったから回避した。

無敗で欧州3大レースを制したウマ娘は居ない。凄いことだと周りは言ったけれど、実感は湧かなかつた。

『ああ、もう私が出るレースはないんだな』と、そんなことを漠然と思っていたから、このジャパンカップに出るつもりも、本当はなかった。

『——各ウマ娘、ゲートイン完了。スタートしました』

ゲートが開いたのでひとまず飛び出す。今日は少し前めにつけてみようかと思ったものの、先行勢が結構多かったので無理に競り合わずに、少し後ろで様子を見ながらも、余計な考えは止まらない。

このジャパンカップに出てみようと思ったのは、今のトレーナーが招待状を持ってきたから。

『今の日本には君と同じ、無敗の三冠ウマ娘が居る』

そう聞いて、少しだけ興味が湧いて、引退を一時取りやめて日本に

来てみた。

その日本のウマ娘、ブラックプロテウスの戦績を見て真っ先に思い至ったのは、何て頑丈な、そして幸運なウマ娘なんだろう。そんな言葉だった。

きつと彼女は、私とは違って、皮肉でもなんでもなく神に愛されているんだと、そう思えるウマ娘だった。

羨ましいだとか、そんな気持ちは湧かなかったけれど。最後に一度くらい、彼女とレースに出てみてもいいかなと、そんな思いで、私はこのレース場に立って、そして今レースに出ていた。

そんな彼女は遙か前方。まだ16の標識を過ぎたところなのに、大分離れてしまった。大逃げするウマ娘だと聞いてはいたけれど、東京2400では差しで走ったと聞いていたから、少し驚いた。何やら接触のアクシデントがあつたと聞いていたが、結果一着であつたので深く気にしていなかったが、戦法はやはり大逃げなのか。

今までこんなハイペースで逃げるウマ娘なんて戦つたことはない。どこから仕掛けていけばいいか全くわからない相手だが、今まで通りでいいだろう。仕掛けるとしたら、最後の直線あたりか。このレース場の直線は長い。

中団くらいからであれば、十分届く。外から少しずつ順位を上げながら、14の標識、12の標識を過ぎたあたりで5番手辺りに付けて、機を窺いに行こうとするが、今まで通りだと前に出辛いことに気付く。

イギリスやフランスの芝と、日本の芝では全然違う。多分これはスピードタイプの芝だ。私の2400のタイムは大体2分31秒とか32秒だけれど、多分この芝だとそんなタイムだとタイムオーバーになる。

根本的に私の脚にこの芝は合わないと感じたが、出てしまった以上は『It's too late.』日本語で言えば後の祭りというものだ。まあ、少し早めに行けばいいだろう。

10の標識を過ぎたあたりで更に少しずつスピードを上げる。こういうスピードレースはあまりしたことがないからこのペース配分

でいいのかわからないが、前に行くブラックプロテウスの背は遠い。ブラックプロテウスはスタミナ自慢のウマ娘だと聞いているから、スタミナ切れには期待できないだろう。というか、そんなスタミナ自慢なら多分イギリスやフランスの芝の方が得意なんじやなからうかとも思う。あの芝は私含め、スタミナ自慢のウマ娘の方が得意とする芝だと思っから。

『最後の直線に入って先頭は変わらずブラックプロテウス、だが後続も追いつがる！ 外からラムタラ！ 驚異的な末脚！ これが欧州三冠ウマ娘の切れ味だ！ このまま差し切ってしまうのか!?』

そのまま外から仕掛けて、一人、また一人と抜いていき、ブラックプロテウスの背中が見えた。3バ身、2バ身と迫ったところで、ブラックプロテウスがちらりとこちらを見た。

逃げウマ娘はどの程度後ろが迫っているかを確かめるために時折こうして振り向く。そうしているうちに抜き去ってしまうのが、いつものことといえはいつものことだ。

何も変わらない。イギリスでも、フランスでも、日本でも。『恵まれて勝利を手にした』と言われてしまうくらいに。今回も勝ってしまうのだろうか。

そう思って、彼女を抜いたと思った、その瞬間。私は彼女の背中を、見つめていた。

「……No way!?!」

スパートを掛けている筈の私から、彼女の背中が少しずつ離れていく。スタミナは問題ない。脚だっけいつも通りに動いている！ それなのに、逃げウマ娘の彼女を、追い越せない——!!

あまりの出来事に、周りから音や色が消えたような感覚に陥る。仕掛け所も間違えていないはずなのに、どうして届かないのか。今まで自分が築いてきたものが、失われていくような感覚を覚える。

『だが、だが！ それでもこのウマ娘を打ち崩せない！ 鋼鉄の牙城が神の見えざる力を跳ねのけた！ 逃げウマ娘とは思えないこの末脚！ ブラックプロテウスだ！ ラムタラに追い越されるかと思ったその瞬間、まるで二段ブースターかのごとき末脚で逃げ切って見せ

ました、日本が誇るスーパーウマ娘ブラックプロテウス。ついに伝説に並び立ちましまし！
Eclipse first, the rest nowhere.』
しかし、ついにそのエクリプスに並び立つウマ娘が現れました！』
大歓声が巻き起こる。レース場を見渡せば、私の凱旋門の時より、観客が居るような気がする。

いや、もしかしたら、凱旋門の時よりは少ないのかもしれない。私は、周りの事なんて、見えていなかったのだから。わかるわけがない。彼女から少し遅れてゴールして、空を見上げる。

負けて当然だ。だって私は今日、レースをしに来ていなかったのだから。私はただ、ジャパンカップに出ただけだった。

いつからだろうか、このレースで走りたいではなく、このレースに出てみようかと思っていたのは。

分からない。いつから私は走っていないなかったんだろう？

「ラムタラさん」

空を見上げていた私を、優しく、そして厳しい声が呼ぶ。

目の前に居るのは黒い髪に黒い着物。その名の通り、黒で身の回りものをほとんど固めたウマ娘。その耳の白いカバーの薄い桜模様がまた映えて、美しく、強いウマ娘。

ただ、その表情は厳しかった。勝った後なのに、それを喜ぶでもなく、ただ私を睨みつけている。

「日本のレースはどうでしたか？ 海外の芝とは違って走り辛かったですか？ それとも、貴女が本気で走るのには値しないレースでしたか？」

その言葉に、私は言葉を返せなかった。何を返したって、言い訳にしかない。

そんな私の態度に、彼女はさらに一步近寄ってきた。一對の瞳が、私をただじっと見上げている。

「私は貴女と走るのが楽しみでした。貴女とレースで競い合うのが、楽しみで仕方ありませんでした。貴女は、私とレースをしてくれましたか？」

少し悲しそうに私に問いかけ、返事を待たずに踵を返して、彼女は歩いて行ってしまった。

ウイナーズサークルでのパフォーマンスを終えて、表彰やら何やらを貰った後に控室に戻った。

今まで走ってきたレースで一番モヤモヤしたものが抜けない、そんなレースだった。京成杯の時よりもっとモヤモヤしていて、表彰などの際に上手く笑えていたかどうかわからない。

「おめでとうございますっ！ テウスさんっ！ これで後は有font:ui40馬font記念で勝てば秋シニア三冠ですね！」

そんなモヤモヤを吹き飛ばすかのような明るなお祭り娘が、控室の扉をぶち破ってきた。いや、ウマ娘用に設えた控室のドアだから、多分壊れてはいないだろうけど、そんな勢いで飛び込んできたのは確かだ……大丈夫だよね？

「キ、キタちゃん。ありがとう……えっと、他の皆は？」

「すぐに来ますよ！ それにしても凄かったです！ テイオーさんのジヤパンカップと同じくらい凄かったです！」

随分な高評価を頂いた。いつも以上の走りができたとは思ったけれど、彼女が尊敬……いや、崇拜するテイオーさんと同じくらいには凄かったと認めてくれるくらいには上手く走れたら嬉しい。

「おめでとっさんテっちゃん！ ほーらお祝いの鯉だぞ」

次に楽屋に乗り込んできたのはゴルシさんだった。最近ゴルシさんは私のことをテっちゃんと呼び始めた。その前はブラっちゃんだった。色々被るからという理由で最近ではテっちゃん呼びだ。飽きたらきつとまた別の名前で呼ばれるだろう。

「あ、ありがとうございます……後で食堂で捌いてもらいますね」

一先ずゴルシさんが用意してくれた氷がたくさん入ったクーラーボックスに入れておいた。後で私やスペさんやライスさんの胃袋に消えることになるだろう……何だかいま動いたような。まさかまだ

生きてるとかそんなことないよね？ 鯉にしては大きいような気がするし……90cmくらいはあるだろうか？

そうしているうちに、スピカの先輩が皆控室に集まってきた。ちなみにトレーナーさんは居ない。この後ライブ衣装に着替える必要があるから控室に入るわけにはいかないしと先に会場で待っていることにしたらしい。

「それにしても今日のテウスちゃん、ちょっと怖かった。なんか宝塚記念の時のグラスちゃんみたいで」

「ええ……？ すこしモヤモヤしながら走ったのは確かですけど……というかスペさんグラスさんに何したんですか？」

あの穏やかなグラスさんが怒るなんて考えられない。私といるときはいつも優しく、お茶を淹れてくれたり一緒に素振りしたり、駿大祭の時には弓の練習に付き合ってくれたりと凄く優しい先輩なのだけれど……

「あはは……語るのはちょっと恥ずかしいというか情けないというか」

苦笑いで誤魔化されてしまった。まあ、深くは聞かない。どんな穏やかな相手でも、怒らせてしまうことはあるものだ。もし私がグラスさんを怒らせてしまったら素直に謝ろう。

「テウスちゃん、そろそろ着替えないと……脚とかは大丈夫？ トレーナーさんから、もしテウスちゃんがアイシングとかが必要だったらって色々貰ってきたんだけど……」

スズカさんが大きめのバッグからいろいろ取り出そうとしてくれるが、大丈夫だと断ってから着替え始める。正直、今日は秋天の時よりは消耗していない。

彼女が本気でレースに打ち込んでいれば必要だったものだろうけれど……今回は必要なかった。

私が彼女の本気を引き出せなかったのか、それとも別の何かなのかはわからないけれど……

「おうこらテっちゃん、なにこえー顔してんだ。これからライブだろう？ ほら笑顔笑顔。マツクちゃん、お手本見せてやれ！」

「いきなりなんですの……ほら、こんな感じで」

ゴルシさんの無茶ぶりに呆れつつも緊張を解そうとマックイーンさんが微笑んでくれる。周りではテイオーさんとか、車いすに乗ったライスさんとか、その車いすを押しているダイヤちゃんとか、クーラーボックスから飛び出してピチピチ跳ね回っている鯉を何とか捕まえようと悪戦苦闘しているスカーレットさんとウオツカさんを眺めて、モヤモヤしているものが晴れていくのを感じる。

いい仲間たちに恵まれたな。口に出して言うとは恥ずかしいからあまり言わないけれど、感謝してもしきれない。

「何だこの鯉?! いきなり水噴き出して……うおあああつ!!」

「ウオツカアアアア!!? 何なのよコイツ!?!」

「やっべえハイド○ポンプ使いやがった! マックちゃん捕まえるの手伝ってくれ!」

「なんなんですのー!!!?」

「ワケワカンナイヨー!」

どんどん水浸しになっていく控室を横目にさつと着替えて、勝負服を抱えてライスさんの車いすを押しながら控室から飛び出す。

うん、やっぱりとんでもない仲間だ。感謝しているけれど。気を抜いたら次の瞬間何が起るか分からない怖さがある。

危険を察知したのか既に外に出ていたスペさん、スズカさん、キタちゃん、ダイヤちゃんの4人に、ライスさんを託してライブ会場へ向かう。事態の収拾はまあ……何とかなるだろう。最終的にたづなさんが来て何とかしてくれると思う。

でも、あそこ私の控室だし、また反省文書かされることになるのかな。勘弁してくれないかなあ……?」

控室に入った時とはまた違うモヤモヤを抱えながら、ウイニングライブに向かうのだった。

第四十七話 ステイヤーズステークス

ウイニングライブを終えてすぐ、私はトレーナーさんと二人でインタビューを受けていた。

ちなみにウイニングライブの曲は『Special Record!』だった。宝塚記念においても同じ曲で踊るのだが、宝塚記念は諸事情あってウイニングライブが行われなかった為私が踊るのは今回が初めてとなる。

ウイニングライブはその大本のグラウンドライブからしてURAが発祥であり、海外勢も参加するこのジャパンカップでウイニングライブ出来るのかとは思ったけれど、事前にダンスを覚えていたらしく、多少怪しいところは私とヒシアマゾン先輩でフォローしつつ無事に終えられた。

正直ヒシアマゾン先輩が居てくれて助かった。私一人で外国勢三人をフォローなんて出来るはずがない。

『それでは次走のご予定をお伺いしてもよろしいでしょうか？ やはり有《font:ul40》馬《font》記念ですか？』

インタビューの真つ最中だが、この記者さんは初顔だ。ウマ娘のようで被っている帽子が妙に盛り上がっている。私が出会う記者さんは大抵帽子を被っている気がする。被っていない人は被っていない人でキラクターがとても濃い人物が多い。乙名史記者とか。

「いえ、次走はステイヤーズステークスに出走します。勿論有《font:ul40》馬《font》記念にも出走する予定ですが」「ステイヤーズステークスは来週ですが……あまりにも間隔が無さ過ぎるのでは。今年もう既に13戦しておられますよね？」

私の返答に初顔の記者さんが困惑している。よく見る記者さんたちは悟ったような表情をしていた。ついでにトレーナーさんも悟ったような表情をしている。

どうしてそんな顔をされるのかよくわからないが、まあこの記者さんの質問で最後だし我慢してほしい。

「この程度であれば問題ありません」

『そ、そうですねか……ありがとうございます』

ステイヤーズステークスは、数少ない長距離レースだ。これを逃す手はない。他にも万葉ステークスとダイヤモンドステークスにも出走する予定だ。

ちなみにステイヤーズステークスとダイヤモンドステークスはダートGIの時期と丁度被ってしまったっており、何だかんだファル先輩との約束を果たせていない。3月中旬の平日に船橋レース場で行われるダート2400mのダイオライト記念もその週の日曜に阪神大賞典があるから出走予定に入らない辺り、巡りが悪すぎる。

だが、川崎記念に関しては丁度被っていないので川崎記念に出走することを検討してはいる。地方開催のレースに出るのは初めてなので、問題なく出走登録できるか不安ではあるが、トレーナーさんに任せておけば問題ないだろう。

昔の帝王賞は4月開催で2800mとかいう丁度いい距離と時期だったのに、とは思っている。

現状の帝王賞は6月だから宝塚の代わりに出走する選択肢もあるが、6月に関しては別に出走したいレースが存在するため選択肢に入らないのだ。

そのレースにまだ出走できるのかどうかはわからないから口にはしないが、出れるなら出てみたいレースがいくつか存在している。

ダートレースと言えば有《font:ui40》馬《font》記念の代わりに東京大賞典にというのも考えなくはなかったのだが、秋とジャパンカップで勝利した今その選択をする勇気が出なかった。そんな選択をした日には私だけでなくトレーナーさんにまでどのような非難が来るか分かったものではない。

今でさえ私のワガママの連闘による批判がトレーナーさんに来ているようだ。どのような内容かは誰も教えてくれないが相当キツイものも来ているだろう。

私が今まで勝っているからいいものの、一敗でもしようものならどうなってしまうことか、考えるだけで恐ろしい。

どうしても出たいレースや周りが出走を期待するレース以外は自重することを考えないといけない。

色々やって注目度が非常に高くなってしまった以上、何もかも自由に行動することは難しい。

私だけで何もかも差配して決められるというならば自由にしてもいいのだろうけど、今の私は周りの人たちに庇護されている存在だ。そんな状況で、周りを顧みずに行動するということは出来ないし、したくない。それが私の意地……みたいなものだ。

このインタビューだって、殆ど無難なことしか聞かれなかった。メイクデビュー直後はドーピング疑惑などで結構叩かれていたのに、今ではそんな話はめつきり聞こえなくなった。

実力を証明したということもあるだろう。けれど、それ以上に周りの庇護が大きい。

トレセン学園やURA。個人的に仲良くさせていたでいるメジロ家の力なども大きいだろう。特にメジロ家には明日学校が終わった後もメジロ主催のお茶会に招かれているくらいには親しくさせていただいている。

お茶会にはメジロのおばあさまにウチの娘にならないかと言われ、るくらいには仲良くなるくらいの頻度で招かれていたりする。その度に丁重にお断りさせていただいている。

まあ、ウチの家は多少土地を持っている程度で、メジロ家とは比べ物にならないほどの庶民なので本気で根回しされたら抵抗できない。

もしおばあさまが本気で私を引き抜こうとしているなら、既に私はメジロプロテウスになっている。だから恐らく冗談だろう。

ただ、メジロ家が実質的な後ろ盾になってくれていることは感謝している。親密な関係であることは隠し立てする必要もないことだし、親しくすることで生まれる多少のしがらみは仕方のないことだろう。別に嫌ではないわけだし、表だって何か要求されているわけでもない。

「……テウス？ 大丈夫か？」

「え？ あ、はい。大丈夫です。少し考え事してただけですから」

インタビュ어가終わった後歩きながら暫く考え事をしていたら、トレーナーさんに心配されてしまった。

「危ないからちゃんとは前は見てろよ？　じゃあ、俺はここで待つてるから、着替え終わったら呼んでくれ。あ、学園には今から戻るって連絡もしとくからな」

そう言うってトレーナーさんは自販機のあるスペースで電話をし始めた。報連相は大事だし、そういった点では抜かりない人だ。時折やらかすけど。

着替え終わって部屋を出る前にふとスマホを確認してみると、家族からメッセージが来ていた。今年の年末年始もレースの予定を入れてしまったのでここ暫く実家に帰ることができていないのだが、連絡は毎日取り合っている。

特にレース後は両親だけでなく祖父母たちからも沢山メッセージが来る。特に元トレーナーだった方のお爺ちゃんからは、レース後のメッセージが他の家族たちの3倍くらい来る。

大抵はべた褒めだが、時折厳しいことも言われる。というか前に掛かりきってしまったときは結構厳しいに言われた。

昔は主にダートを教えていたという話だったが、芝のレースしか走っていない私にも的確なアドバイスをくれる。最新のトレーニング情報についても仕入れているようで、その時代に合ったトレーニング方法をアドバイスしてくれる。

さらに昔のコネを使ったのかトレーナーさんの連絡先も知っているようで、頻繁に連絡を取り合っているようだ。

どうやら私の扱い方に関してのアドバイスを色々しているようで、最近ではトレーナーさんに上手くコントロールされることも多いが、まあ私も我が儘を聞いてもらっているしお相手だろう。

「あれ？　このメッセージは……」

家族にメッセージを返し終わると、普段見慣れない相手からのメッセージが丁度入ってきた。

メッセージを送信してきた相手は、日本ウマ娘トレーニングセン

ター学園生徒会長にして、日本のレースの歴史において初めて無敗で三冠に輝いた優駿の中の優駿、『皇帝』シンボリルドルフ。そのウマ娘からだった。

翌日、授業が終わった後、生徒会室の前まで来た。生徒会室に来るのは去年の模擬レース事件で謝罪をしに行ったとき以来だろうか。特に避けていたというわけではなく、生徒会活動とかに興味はなかったし、それ以外で立ち寄る用事がなかっただけなのだが。

一先ず扉をノックする。ノック回数のマナーとかあったと思う。正直知らないが、確か3回とか4回とかだった気がする。まあ4回しておけば問題ないだろう。

ルドルフ会長は多分気にしないだろうけど。テイオーさんとか多分ノックせず突撃していきそうだし。

「ああ、開いているよ。どうぞ中に」
「失礼します」

入室を促されたので、一言断ってから中に入る。何だか面接でも受けに来た気分だ。

「そんなに緊張しなくてもいい。別に何か注意するとか、そう言うことで呼び出したわけではないからね。沖野トレーナーは、確か急なインタビューが入ったんだっただけか」

「あ、はい。ご存じでしたか。後でおハナさん……東条トレーナーから話を聞いておくと言っていましたか」

そう、今日は出来ればトレーナーも一緒に来てほしいと言われていたが、急にインタビューが入ったため今は不在だ。別に不在でも問題ない話ではあるようだが、後から話は聞いておくと言われている。

「トレセン学園内の事ならいつ誰がインタビューを受けるくらいは把握しているよ。色々準備もしないといけないからね。とりあえずそこに座ってくれ。今コーヒーを淹れよう。砂糖とミルクはいくつ入れる？」

「そうなんですね。いつもお疲れ様です。砂糖とミルクは……2つずつ

「つください」

「そう言つて彼女はコーヒを淹れてくれる。どうやら全自動コーヒメーカーのようだ。」

「今のコーヒメーカーは高性能でね。豆を挽くところから抽出まで全て自動でやってくれるんだ。カフェ君は少し不満だったようだが……まあ、彼女は自分で焙煎からやっているようだから、物足りないのかもしれないね」

「何度か飲ませてもらったことがありますが、結構おいしかったですね。オリジナルブレンドだと言っていました」

マンハッタンカフェ先輩とは、タキオンさんのところに顔を出したときによく出会うので少し仲良くなった。何度かコーヒもご馳走になったこともあるくらいだ。

タキオン先輩は紅茶派のようで事あるごとにマンハッタンカフェ先輩に絡んでいる。少し鬱陶しそうにしているが、嫌ではなさそうなので止めないことにしているが。

あの二人はなんだかんだ仲が良い。あの二人に加えてジャングルポケット先輩の三人で居ることが多い気がする。

「お待たせしたね。どうぞ」

「あ、ありがとうございます。それで、お話しとは？」

「そうだね。本題に入ろうか。ブラックプロテウス、君を生徒会書記に推薦したい。より高い理想の世界を目指すため、君に協力してほしい。全ての常識を破壊して、その強い魂を持つ君に頼みたいんだ」

ルドルフ会長から言われたことは、まあ大体予想通りの事だった。思ったよりは地位が高かったが。

なので、私の返答は決まっている。

「ルドルフ会長。私は――」

『中山レース場、本日のメインレース。ステイヤーズステークス！』

日本の平地競走において、最長距離の3600mで行われます。本日は絶好の快晴、バ場状態も良バ場となっています。10人のウマ娘た

ちが、この長い長いレースで鎬を削ります』

時は流れて、ステイヤーズステークス当日。今日はとてもいい天気だ。走ったらすぐく気持ちよさそうだし、実際スズカさんはレース前まで走ってきていたようだ。

『ですが、今日のレースを見に来た目的は皆一つだけでしよう。無敗の三冠ウマ娘ブラックプロテウス。ジャパンカップから中五日での出走です』

『まるで野球選手の先発ローテーションのようですが、最早皆さんお馴染みと言ったところでしようか。勿論、今日の一番人気はこの娘です。二番人気とはちよつと信じられないほど離れた、圧倒的な支持を得ています』

中山レース場3、600mは内回りコースを二周。スタンド前から始まるレースだ。スタンドを見回しているとテイオーさんが手招きしてきていたので、何か伝言でもあるのかと少しだけスタンド前に立ち寄る。

「テイオーさん、何かありました？」

「特にレースには関係ない事だけどねー。テウス、カイチョーに生徒会誘われて断ったんだって？ 何で？ ボクは誘われたことないのにさ」

少しお怒りなのか、それともただ単に不思議に思っただけなのか。表情からはよくわからないけれど、激怒してるってわけではなさそうだ。

「私の目標には、生徒会活動はあまりそぐいませんし、私の事を目標にされると少し……いや、かなり問題がありそうですから。トレーニング量とか」

「あー、まあ……でも、目的というかテウスの夢って『全てのウマ娘の憧れ』になることでしょうか？ 生徒会のポジションは丁度いいと思うんだけど」

「テイオーさんならわかると思いますけど。シンボリルドルフに『憧れ』ていた貴女なら」

「！ それって……」

「憧れているだけじゃ、その人を越えることは出来ません。だからこそ憧れであつて、それだけでは目標には成り得ない。その相手を越えたいと思つたときに、憧れは目標になるんです。会長は全てのウマ娘の規範を目指していて、自分を越えたウマ娘が居れば自分のことのように喜べるウマ娘でしょう。でも、私は誰にも、何にも越えられたくないし、負けたくない。私は全てのウマ娘にとっての憧れ、そして障壁でありたいんです」

傲慢で、強欲な夢だと自分でも思う。でも、マルゼンさんも『ウマ娘は強欲な生き物だ』つて言つてたし、少しくらい強欲で居たつていいと思う。

「それこそ私たちにとつての、三女神様のように。その名を深く刻んで、誰にも越えられないような存在になりたい。それが、私の目標です」

「テウス……でも、あの会長だつて、無敗ではいられなかった。ボクだつて、何回も負けたよ。テウスだつて、きつと負ける時が来る。常勝無敗なんて有り得ないつてことは、覚えておいて。そうしないと、負けた時に折れちゃうから」

「ええ、大丈夫です。負けて得られるものがある事も知ってます。模擬レースでは先輩たちによく負けてましたし。一度越えられたなら、もう一度越えるまでです！」

私はずっと勝ち続けてきたわけじゃない。模擬レースではあるけど、何度も負けてきた。ここまで無敗で来れたのは、運によるものだと思う。

誰よりもトレーニングをしてきた自負があるし、能力で負けているとは思わない。

それでも、レースには時の運が絡む。いままではその運に恵まれてきたが、今後ずっと幸運の女神様に愛されたままではいられるとは思つていない。

特にダービーなんかはかなり危なかったし。

「そっか。そうだよ。レース前にこんな話してごめん。じゃ、ウイナースサークルで待つてるから」

「はい、ありがとうございます。じゃあ、行ってきますね」

軽く拳を突き合せた後、ゲート前へ向かう。丁度ファンファーレも鳴りだったので、丁度いいタイミングだ。

たった3600mのレースだ。いつも通り、好きなように逃げ続けるでしょう。

「テイオー？ レース。見ないんですの？」

「ん？ 見るよ。見るけど、絶対に今日のテウスは負けないよ。というか、超長距離レースでテウスに勝てる娘は居ないって。それこそ、怪我する前のマックイーンでも勝てっこないよ。だから、ウイナーズサークルで待っていていようと思って。ウイナーズサークルから見えるし。まあでも皆で行きたいし、ここで見てよっかな」

「……言ってくれますわね。でも、この展開を見れば明らかですわね」
『先頭のブラックプロテウス、1,000mを通過！ 通過タイム……60.0！ 何というペースだ！ 3,600mだぞ大丈夫か！ 後続とは既に5秒以上差がついている！』

テウスが繰り広げるいつもの大逃げに、レース場から歓声とどよめきが始まる。

でも、これがテウスの通常ペースだ。むしろ抑えてるって言えるくらい。菊花賞、3,000mのレースで3分を切れるウマ娘だ。多分、まだまだ本気じゃない。

これくらいのペースなら、テウスならきつと6,000mくらい走れる。この世界の何処にだって、彼女のペースについてけるウマ娘なんて存在しないよ。

というか、ボクだってテウスと超長距離でやりあうのは御免被りた。怪我する前のボクだって勝てる景色が思い浮かばないもん。

ほら、この展開にあのゴルシでさえ真顔になってる。多分自分がやっても追い付けないって思ってるんだろうね。ゴルシの追い込みは凄いいけど、多分追い込むころにはゴールしてるし。

『2,000mを通過して、通過タイム1:59.1！ 後続とは既に

7秒、いえ8秒差がついています。バ身差は……おそらく50バ身は離れているでしょう！　そしてここからさらにスパートを掛ける！

まさに規格外、理解外のスタミナ、タフネスです！』

「まあ、確かにこれは目標にしちやいけないかなあ。というか、出来ないうってこんなもの。スタミナが持ったとしても多分脚が持たないよこれ」

「ま、まあそうですわね……2,000mのレースと同じくらいの速度で3,600は流石にちよつと……」

「ライスも厳しいかな……ブルボンさんでも無理だと思う……」

他の皆も一人を除いて同じ意見らしい。ウマ娘の脚は消耗品だ。ニンゲンがやる駅伝やマラソンだって走ってる途中に骨折しちやつたり、脚が痙攣して動けなくなつちやつたりすることもあるらしい。

ウマ娘のレースは駅伝よりは短いけど、負荷に関しては何倍も高いだろうから、多分あんなペースで飛ばしてたらスタミナより先に脚が限界になる。異常なほどに頑丈なテウスだからこそ出来る、消耗を全く考慮しない逃げ。常識外れにも程がある。

「ボクもあれくらい頑丈なら……いや、うーん。頑丈なのは良い事だけれどあそこまでは流石に要らないかなあ……」

ショージキ、ドン引きすることもあるんだよね。ここ五日間は何かタキオンから貰ったギプスを強化したらしいやつに、マックイーンが春天の時にしたトレーニング用のおつもい蹄鉄つけて、更におっきいタイヤ三本重ねたやつ引いて坂路走ってたし。流石に遅かったけど引けるだけでドン引きだよ。

あの時はテウスはどこに向かうつもりなんだろうって思ったね。ボディビルダーでも目指すのかな？ 『最近脚が太くなってきた』とか言ってたけど、残念でもないし当然だよな？

「そうかしら？　私は欲しいわ。だって、沢山走れそうなもの。とつても気持ちいいと思うわ」

「まあ、スズカはそう言うよね……」

スズカは平常運転だ。多分スズカも3,200くらいまでなら走れる。道中3秒差をつける逃げを打てば勝てるってトレーナーも太鼓

判を押してたくらいだし。

『さあラスト600！ 通過タイム、につ、2:59.8！ 彼女が京都レース場を出した菊花賞レコード！ そのタイムと全く同じタイムで残り600を迎えました！』

「うわあ……これもう圧勝どころのレベルじゃないじゃん……蹂躪だよこれ」

場内は興奮どころか静まり返っている。後続は10秒以上の差がついてるし。バ身差にするなら60バ身つてところかな？ もう笑いしか出ないね。

うん、お世辞でもなんでもなく、既に越えられない壁だと思うよ？ 壁って言うよりつるつるの断崖絶壁だけど。掴んで登ることすら出来ないって。

これと有《font:ul40》馬《font》で戦うマヤノとネイチヤ、大丈夫かなあ……？ 2500ならうーん、ここまで差はつかないと思うけど……

テウスが出遅れして前が塞がればワンチャンある……かな？ マヤノやネイチヤなら多分その隙を逃さないだろう。でも、今年の有《font:ul40》馬《font》出走人数少ないっぽいしなあ……ボクも出ないし。うーん、でも最後に走りたかったな。引退するのちよつと早かったかも？

『そして今ゴール！ 一着ブラックプロテウス、二着は無し！ 勝ち時計、3:35.1！ 勿論世界レコードです！』

そうしてテウスは後続に12秒くらい差をつけてゴールした。時代が時代ならタイムオーバーだけど、そのルールが適応されたとしても世界レコードだし一応記録は残る、だろう。まあ、それどころではないと思うけど……

ドーピング疑惑が出るのも仕方ないよね。これ。対応はともかく、疑惑が出たのはまあ仕方ないんじゃないかなって思う。あの時の対応はボク、今でも許してないけど。

「ふええ……もうむりむりですう……」

ゴールしたのち、タンホイザがフラフラと芝に倒れ込んだ。テウス

のペースにつられて少し前に出てしまったがために、後半バツテバテになっちゃった可哀想なウマ娘の姿が、そこにはあった。合掌。

『世界レコードでエクリプス越え達成！　そうして次は、年末のグランプリ有《font:ul40》馬《font》記念！　これを制せば、秋シニア三冠、そしてシンボリルドルフを越える八冠ウマ娘の誕生です！』

大喝采を贈る観客たちに、テウスが手を振って応えている。今も昔も、ファンサービスを欠かさないウマ娘だ。だからこそ人気がある。オグリやボクほどじゃないけどね！

「そ、それじゃあウイナーズサークルに向かいましょうか。たつくさん祝ってあげないとね！」

一番早く持ち直したダスカがボクたちを引き連れてウイナーズサークルへ向かっていく。スズカの次に仲が良いだけに、持ち直すのが早い。ちなみにスズカは既に向かった。

「勝ちましたよスズカさん！」

「うふふ、おめでとうテウスちゃん。私もうれしいわ」

遅れてウイナーズサークルへ着くと、スズカがテウスに抱きしめられてグルグルと回されていた。スズカは動じることなく受け入れた。

これが慣れか。そう思いながら、暫くぐるぐると回る二人を、ボクたちは眺め続けていたのだった。

第四十八話 年末の大一番

12月最後の日曜日。熱気あふれる中山レース場の地下バ道に、私は立っていた。

ステイヤーズステークスの時にも通った中山の地下バ道。けれど、その時の雰囲気とはまるで違う熱気だ。

年末の大一番。その年のターフを沸かせたスターウマ娘たちが一堂に会するグランプリ、有font:ul40馬font記念。

宝塚記念の時と同じく、ファン投票によって出走ウマ娘が決まる。ファンたちの夢を背に乘せて走る特別なレースだ。

いつも以上に緊張感があつて、何だか楽しくなってくるくらいだ。

「やー、これはどうもブラックプロテウスさんじゃないですかー。今日も調子良さそうですねー」

コースに向かおうとしていると、聞き覚えのある声に呼び止められた。彼女と会うのはジャパンカップの時以来だろうか？

「どうも、ネイチャ先輩。先輩もバツチリそうですね？」

「いやー、アタシなんてととてもとても。ブライアンやマヤノとかもいるしさー、老兵にはツラいつて言うか？ 三冠ウマ娘が二人も出てるのにその二人を差し置いてバツチリだとはとても言えませんわー。もつと油断してくれていいんだぜ〜？」

そう言いつつも、雰囲気的には少し怖い。GIで勝ててはいないがコンスタントに掲示板に入ってくる強豪ウマ娘だ。油断していると最後の最後に勝利を搔っ攫っていくような、そんな怖さが彼女にはある。

「このグランプリレースで油断なんて出来ませんよ。ネイチャ先輩が出てるレースでは特に」

「いやアタシ今日14人中12番人気なんですけど？ ぶつちぎり1番人気のテウスさんに言われるとちよつと怖いっすわー。じゃ、お先行かせてもらおうわ。今日はよろしく〜」

苦笑いしながらネイチャ先輩は先に行ってしまった。飄々としていて掴みどころがないウマ娘だ。ゲートに入ってから皆平等だ。レースでは何が起るかわからない。ネイチャ先輩だけではなく、どの相手も全く油断できない相手ばかりだ。

今日の私は5枠7番だが、一番最後にレース場に出てくれと言われた。何の思惑が働いているかはわからないが、最後を任せられるということは一番期待されているということなんだろうか？ それならば、期待には応えたいと思う。

何人かレース場に出ていくのを見送っていると、私の横によく見慣れたウマ娘が立った。

「こんにちは、ブラックプロテウス。今日こそは、貴女に勝ってみせるわ」

リボンマンボ。私の宿命のライバルで、一番警戒している存在だ。マヤノトップガンや、ナリタブライアンより、私にとっては彼女の方が怖い。

「こんにちは。リボンマンボ先輩。今日も私が勝ちますよ」

「言ってくれるわ……でもいいわ。論より証拠、行動で示すから。後、マンボでいいわよ。先輩もいらさないわ」

「そう、ですか？ それなら、マンボさんと。私の事もテウスって呼んでください。親しい人にはそう呼んでもらってるので」

「私の事を親しいって言うってくれるのね……いつも一方的に突っかかってると思ってたんだけど」

きよんとするマンボさんに少し笑ってしまう。そんな風に思われてたのか。少し接し方が硬すぎただろうか？

「そんなことはありませんよ。貴女が存在に、いつも助けられています。貴女は私にとって、一番のライバルですから。貴女が私と競ってくれたから、今の私があるんだと思ってますし」

出走を回避された時から、彼女は私をずっと気にかけてくれた。彼女がずっと私のライバルで居てくれたから、今の私がある。

「……それはこっちのセリフよ」

「……？ 今何か言いました？」

「ううん、何でもないわ。それはそれとして、貴女、あの時の怪我は大丈夫？」

「そう言っただけ私の髪をかき上げて額を覗き込んでくる。というか、顔が近い!!」

「だ、大丈夫ですから！ もう傷一つありませんから！」

後退って彼女から離れる。実際あの時の傷はもう残っていない。というかどんな大怪我も長くて3日もあれば傷が綺麗さっぱり消えてしまう身体だ。抉れたりしたような重傷でもない限り大丈夫だろう。

もしかすると抉れたり千切れたりしてもトカゲのしっぽみたいに生えてくる可能性があるのだが……流石にそこまでは怖くて試せない。トラックに撥ねられてもほぼ無傷だったあたり、試そうとしても試せない可能性が高いが。

「レース場でイチヤイチャするな。やるなら学園でやれ」

「学園でやるのもどうかと思うよ、ブライアンさん」

私たちのやり取りを後ろで見ていたブライアン先輩とマヤさんが呆れ気味に話しかけてくる。

「イチヤイチャなんてしてません！」

「イチヤイチャなんてしてないわ！」

否定の声が二人揃ってしまい、ちよつと照れてしまう。

「はっはっは、息ピッタリじゃないか。流石宿命のライバルだね！」

でも、アタシ達のことも忘れんじゃないよ！ でも、今日は何も壊すんじゃないよ？」

ヒシアマゾン先輩が背中をバンバンと叩いてくる。彼女は今日の2番人気。ちなみに3番人気はブライアン先輩で、4番人気はマンボさんだ。マヤさんは8番人気だ。

「壊しませんよ！ 私が毎回何か壊してるようなこと言うの止めてもらえませんか!？」

「そうかい？ 外ラチに突っ込んで破壊してるし、こないだはトレーニング用のフィットネスバイク壊してたじゃないか。クリークに怒られてたの見たよ？ その内ギムレットと同じように趣味でラ

チを壊し始めないか心配だよ」

「いやあれは……チエックしてなかった私のせいではありますけども……」

トレーニング中にいきなり座ってる部分の椅子が一番下まで下がってしまったことがあった。どうやらロックしているねじの部分が緩んでいたらしく、トレーニング前にはちゃんと器具を確かめるようにと怒られた事件だ。

怪我がないことを確認した後に本当にゆるーく叱られた程度だけど、何となくクリーク先輩には抗いがたく、されるがままに最終的にはクリーク先輩のお部屋で甘やかされていたくらいだ。

「ま、レースの前にお説教もなんだし、今日はここまでにしておくれね。有《font:u140》馬《font》記念、いい勝負にしようじゃないか」

「はい。今日も私が勝ちます」

「言ってくれるじゃないか。でも、そういうのアタシは好きだよ。今日こそはアタシが勝つー」

獐猛な笑みを見せて、ヒシアマゾン先輩がレース場に出ていく。周りを見れば、既にマヤさんもライアンさんも居なかった。ちよつと出遅れたみたいだ。

今年出るレースはこれが最後。色々な記録も懸かった、とても大事なレース。

緊張もしているけれど、それ以上にワクワクが止まらない。皆が全力で向かってきてくれる、本気のレース。きっといつも以上に、楽しいレースになるだろう――

『中山レース場、第9レース。本日のメインイベント有《font:u140》馬《font》記念。14人のウマ娘たちが鎬を削ります。天候は晴れ。バ場状態も絶好の良バ場となっております。ナリタブライアンとブラックプロテウス。三冠ウマ娘同士、これが3度目の対決。今日もブラックプロテウスが逃げ切るのか、それともナリタブラ

イアンが差し切るのか。今日も目が離せません!』

中山レース場は真冬だというのに、熱気を感じるほど盛り上がりを見せていた。周りのウマ娘たちから、私に向けて痛いほどの視線を感じる。

確かに、マークされている。バ群に飲まれたら完全に囲われるだろう。抜け出すのは容易ではなさそうだが、逃げの私にはあまり関係ない。

出遅れさえしなければ、だが。ゲートはあまり得意ではないので、少し不安が残る。

ゲートに関してはスズカさんに今もまだゲートを教わっている最中だ。スズカさんはゲートがとても上手い。秘訣を聞いても言葉にはできないような感覚みたいで、あまり具体的な返事は貰えなかったが。

『年末の中山で争われる夢のグランプリ有《font:ul40》馬《font》記念! あなたの夢、私の夢は叶うのか!』

ファンファーレが鳴り響いて、それぞれがゲートに向かう。私は今日奇数番だから、先にゲートに入る。周りから掛けられるプレッシャーがさらに大きくなってくる。

その重圧に何だか楽しくなってきたりして、口角が吊り上がるのを感じる。これだけ敵意を向けられて、こう思うのもおかしいのかもしれないけれど、皆が本気で向かってきてくれるのは素直に嬉しい、楽しい。

身体は燃えるくらい熱いのに、すうつと頭が冷えていって周りから音が消えていくような、そんな感覚がする。この感覚を感じた時はいつも気持ちよく走れる。

『大外枠のリボンマンボがゲートに入って、各ウマ娘態勢整いました。グランプリ有《font:ul40》馬《font》記念、スタートしました!』

ゲートがゆっくり開く。少しずつ開くゲートをすり抜けて、一気に飛び出す。今までで一番いいスタート、点数を付けるなら98点くらいだろうか? それくらいいいスタートで駆け抜ける。

『ヒシアマゾンが一番最後からのレースになります。前が少し固まって、いやブラックプロテウスが抜け出している！ 同じ逃げを打ったシンプトンダツシユやマヤノトツプガンを引き離していつも通り単騎行になるのか！ ナリタブライアンも好スタートですがそれ以上にブラックプロテウスが速い！』

後方から息を呑む音、そして驚いているような雰囲気を感じる。多分、マヤさんやシンプトンダツシユ先輩は私から先頭を奪って、そこからスローペースにでもしようと思ったのだろう。彼女たちはスタートに全てを懸けていたようだが、今日は私の方に軍配が上がったようだ。

スローペースの勝負でなら、私と彼女たちは対等だろう。末脚にもそれなりに自信があるが、先行や差しを得意とするウマ娘たちもそれは同じことが言える。

『マヤノトツプガン、シンプトンダツシユが先頭から少し離れて追いかける。大外枠のリボンマンボがそれに続き、ジェニユインは現在6番手あたり、ナリタブライアンがそれに続く！ 最後方からのスタートになったヒシアマゾンは後方から3番手。現在最後方はナイスネイチャ。前のウマ娘から少し離れています、はたしてここから届くのか。さあ最初の正面スタンド前、ホームストレッチであります。観客たちの大きな歓声、大きな拍手が中山レース場、レースを引っ張るのはやはりこのウマ娘、ブラックプロテウスだ！』

何万人もの観客が、私を、私たちを応援してくれる。第1コーナーを回って、少しスタンドから遠ざかっても、その歓声が収まることはない。

沢山の人に応援してもらえるのは、素直に嬉しい。それが力になるし、その声に応えたいと気分も盛り上がる。

『1000mの通過タイムが出ました。何と58.2秒！ 凄まじい、凄まじいハイペースです！ 平均ペースから約3秒は速い破滅的ハイペース！ マヤノトツプガン、シンプトンダツシユも食らい付くが、このペースに果たしてどこまでついていけるのか！』

少しペースが速いだろうか？ そう思ったけれど、そのままペース

を保つことにした。菊花賞の時より少し速いと思うけど、まあ大丈夫だろう。スタミナは間違いなくもつし、脚も問題ない。むしろスローペースに落とすと後ろのウマ娘たちが怖い。このまま私のペースに引きずり込んで、ハイペースで磨り潰す。それが私のとれる唯一つの戦術だ。

『向こう正面に入って、先頭はブラックプロテウス。2バ身ほど離れてマヤノトップガンとそれに並んでシンプトンダツシユ。外からリボンマンボ、じりじりとペースを上げている。同じくアウトコースにナリタブライアン。サクラチトセオーは内から、その外ヒシアマゾン。最後方は5年連続出走のナイスネイチャ、ナイスネイチャは少し厳しいか?』

スタートの時から感じていた圧力が迫ってくる。ジリジリと背中を焦がすような、強い熱を感じる。そろそろ仕掛けてくるだろう。そんな予感がする。

ここまでは私のペース。ここからどうなるかは、まだわからない。でも、そう簡単に先頭を譲り渡すつもりもない!

『3コーナーから4コーナーに各ウマ娘がさしかかります! 先頭はかわらずブラックプロテウス! しかしここでマヤノトップガン、そしてリボンマンボが仕掛けてくる! ヒシアマゾンもスーッと上がって行く! そしてシンプトンダツシユも3番手! 更にジエニユイン! 外目の方からはナリタブライアンも来ている! 影をも恐れぬ怪物がやってきた! そしてその後方ヒシアマゾンであります! しかしまだ先頭はブラックプロテウス!』

私が仕掛けたタイミングで、後方からもスパートを切ってきたような気配を感じる。全員が全員、私を睨みつけて、抜かしてやるぞとその気迫をぶつけてくる。

だけど、私だつて負けられない。負けたくない。私を一番に推してくれた、ファンの人たちのために。私を信じてターフに送り出してくれた、トレーナーさんとスピカの皆の為に。

そして何より、私自身の為に。絶対に負けられない!

『最後の直線! 中山の直線は短い! ブラックプロテウス先頭!

ブラックプロテウス先頭！　しかしマヤノトップガン、そしてリボンマンボも迫ってくる！　ナリタブライアン、シンプトンダッシュ、サクラチトセオー、ジェニユインは何とか食らい付くが、他のウマ娘たちは少し失速したか！　やはりハイペース過ぎました、脚が残っているのは6人だけか！』

色と音を失った、私だけの世界。少しだけ後ろを見れば、鬼気迫る表情をしたウマ娘たちが迫ってくる。

並み居るウマ娘たちが私を抜かして先頭に立とうと、残った力を振り絞って迫ってくる。

『ここで後方のウマ娘たちが失速！　もう脚が残っていない！　最後はこの三人、ブラックプロテウス、リボンマンボ、そしてマヤノトップガンだ！　黒鋼の逃亡者に、変幻自在の天才少女と、執念の追跡者が挑戦状を叩き付ける！』

少しずつ、少しずつ差を詰められる。脚にさらに力を籠める。少し脚に負担が掛かる。というか、多分普通なら壊れてしまっているくらいの負荷を脚に掛けている。それでも壊れないのは私だけの特権だが、まあ、反則ではない。ちよつと卑怯だとは思うが、私が貰った天稟はそれだけだ。

それ以外のスタミナ、パワー、スピードは私が今まで培ってきたもの。人の何倍、何十倍も努力して、積み上げてきたものだ。

それが結晶になったものが、今の私。ブラックプロテウスというウマ娘だ。それだけは、チートがなくなつて、誰にだって負けるつもりはないのだから！

『残り100を通過！　2番手リボンマンボ、それを風除けにするようにマヤノトップガン、残り半バ身、届くか届くか、おつとここでリボンマンボが失速！　マヤノトップガン、それに引つかかる形で少し失速！　追い越して再加速を図りますが、勝負は決した！　1バ身、2バ身引き離されていく！』

後ろから迫っていた気配が、少しずつ離れていく。それでも脚は緩めない。最初から、最後まで。私は全力で駆け抜ける。

それが私に出来る、最善の走り。誰に恥じることもない、私の最高

の走りだ！

『これは文句なし！ 無敗の三冠ウマ娘、ブラックプロテウス、鮮やかに逃げ切りゴールイン！ 天皇賞(秋)、ジャパンカップに続き秋の三冠を完全制覇！ これにて20戦20勝無敗、GI八冠目！ シンボリルドルフを超え、正しく日本の頂点に君臨しました。クラシック級でここまでの戦績を残せるウマ娘は、後にも先にもこのウマ娘だけでしょう！ 新たな伝説が刻まれていくこの時に、今私たちが立ち会える。はたしてこれ以上の幸せがあるでしょうか！』

中山レース場が震える。周りのウマ娘たちの荒い息遣いが聞こえなくなるくらいのもとても大きな声。そして、大きな拍手。手を振り返すと更にその音は大きくなる。

「あー、くそっ！ また届かなかったっ！」

「もー、マンボちゃん。あそこで失速しちやダメでしょー？」

「私を風除けにしたたアンタが言うなアンタが！」

「序盤はマンボちゃんが風除けにしてたくせにー」

私の後方では私のライバルたちが軽口を叩きあっている。

ネイチャ先輩なんかは大の字になってターフに倒れ込んでしまっていたりする。大丈夫だろうか？ 悔しそうに何かを叫んでいるよ。うなので多分大丈夫だと思う。

周りを見渡しても、異常に疲弊しているような娘はいないみたいだ。かなりハイペースにしてしまったから、それだけは少し心配だった。

『勝ち時計が出ました。タイムは2:28.8、かなりのハイペースで進んだ有《font:ul40》馬《font》記念、レコードでの決着となりました！ 今勝者のブラックプロテウスがウイナーズサークルで手を振っています！』

掲示板をちらりと見ると、レコードの四文字が輝いていた。私の出るレースは基本ハイペースになってそのまま逃げるから、レコードになることは多い。レコードを出せたことよりは、勝てたことが嬉しい。

勝利の余韻に浸りつつ、応援してくれた人たちに向けて、時間が許

す限り手を振っていた。

『輝くウマ娘達のステージ、ウイニングライブ！ 今年の有《font:ul40》馬《font》記念のウイニングライブは、『ユメヲカケル！』です。センターを飾るのはこのウマ娘、見事秋シニア三冠、春秋グランプリ制覇を達成した、ブラックプロテウスです！』

ライブの幕が上がり、音楽が流れ始める。テイオーさんが一昨年の有《font:ul40》馬《font》で勝ったときに踊った曲だ。それなりに練習はしてきたので、大丈夫だろう。

テイオーさんのようなダンスの巧さは期待しないでほしいが、精一杯のパフォーマンスをする。いつだって、ファンの人たちに感謝を伝えられるこのステージは、私にとってレースと同じくらい大事なものだ。

『きやああああ!! 私のマンボー!!!』

3着だったマンボさんが観客席に投げキッスをする、最前列に居たマンボさんのトレーナーさんが発狂した。

彼女は全身マンボさんのグッズで固めていて、正直最初見た時は誰かわからなかったほどだ。

マンボさんが茹蛸のように真っ赤になっていくのを横目で見ながら、パフォーマンスを続けるのだった。

掲示板回 Part 5

〇〇年ウマ娘総合スレ part 216

403 : 名無しのウマ娘ファン ID : OCCAGgJqWA
さーてジャパンカップのお時間ですよつと

405 : 名無しのウマ娘ファン ID : /OAnUlIui
今年のジャパンカップはすつごい豪華だなあ

407 : 名無しのウマ娘ファン ID : FIu7ILafd
無敗欧州三冠のラムタラ、ドイツ年度代表ウマ娘のランド、ブラジルのトップウマ娘のサンドピット、フランスダービーウマ娘エルナンド……

408 : 名無しのウマ娘ファン ID : QMAWrtGyR
サンドピットとエルナンドは去年も居たな

409 : 名無しのウマ娘ファン ID : +oOeWFQk0
遠いところからよく来てくれたもんだ

411 : 名無しのウマ娘ファン ID : hhDO4Fh+2
まあ今年は日本の出走ウマ娘もヤバイ奴らばつかだからな

412 : 名無しのウマ娘ファン ID : reqrHS1xb
ヒシアマゾン、マチカネタンホイザ、ナイスネイチャとかもいるし、何より三冠ウマ娘が二人出てるのがヤバイ

413 : 名無しのウマ娘ファン ID : xxYKDTnuk
ブラックプロテウスに至っては無敗三冠ウマ娘だからなあ

4 1 4 : 名無しのウマ娘ファン ID : k z m e X I s F A
菊花↓秋天↓J Cとかいうあたおかローテ

4 1 5 : 名無しのウマ娘ファン ID : L 5 S Z b z 1 2 P
秋天↓J Cはそれほどおかしくないだろ

4 1 6 : 名無しのウマ娘ファン ID : r T A 3 o A p G X
間に駿大祭で流鏝《font:ul40》馬《font》してる
のはおかしいけど

4 1 7 : 名無しのウマ娘ファン ID : t J Q Q T c V z G
まあブラックプロテウスだし

4 1 9 : 名無しのウマ娘ファン ID : c c g L n g T s S
ブラックプロテウスだしな……

4 2 0 : 名無しのウマ娘ファン ID : h H W X 8 q 9 / E
毎週レース走っててももう驚かない

4 2 1 : 名無しのウマ娘ファン ID : Y 9 O d b M W k j
何で走れば走るほど調子上がるんですか？ ウマ娘の足は硝子
じゃなかったんですか？

4 2 2 : 名無しのウマ娘ファン ID : y U i z C / 7 g y
>>4 2 1 知ってるか？ ガラスって鉄より硬いんだぜ

4 2 3 : 名無しのウマ娘ファン ID : k 2 4 4 S u U / T
まあ傷はつきにくいって聞くけどそういうことじゃない

4 2 4 : 名無しのウマ娘ファン ID : y L G O f q x V i
簡単にパリンって割れるって喩えで使われてるからモース硬度の

話はナンセンス

426 : 名無しのウマ娘ファン ID : hCkdXUEES

ガラスだったとしてもブラックプロテウスのは防弾ガラスだし

428 : 名無しのウマ娘ファン ID : PkYWea6+i

おっとそろそろレース始まるな

429 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9hEe2gixV

今日はすっごいいい天気だし良バ場なのがグッドだね

430 : 名無しのウマ娘ファン ID : oI7FrA/h0

海外勢にはきついだろうなあ……

432 : 名無しのウマ娘ファン ID : TYZgIPWyx

日本と海外とでは芝質が違いすぎるもんな

433 : 名無しのウマ娘ファン ID : CCZAMkrUu

和芝と洋芝の違いいまだによくわからんのだがそんなに違うの？

435 : 名無しのウマ娘ファン ID : aYhDgk3pJ

>>433 それくらい自分で調べろ

和芝は表面に茎が広がるからクッション性が低い。植物だから柔らかくはあるんだけど、結構硬いんだ。軽い力でもスピードが出るから、スピード重視のレースになる。ただ雨が降ると結構滑るから走り辛い。

洋芝は竹みみたいに地下茎で広がるから隙間に土が入ってクッション性が高い。ふっかふかなんだ。パワーやスタミナが必要になるし、タイムは和芝に比べて遅くなる傾向にある。

その上含水量も和芝の1.5倍くらいになるから、葉が絡みやすい。雨が降ると土が泥状態になってさらに脚に絡んでくるから、さら

にパワーが必要になってくる。つまりはパワー重視のレースになることが多い。

こんな感じで全く芝質も求められる能力も違うから、海外遠征で結果を残すつてのは難しいんだ。

436：名無しのウマ娘ファン ID：wiOPW2ZHS

>>435 ツンデレ乙

438：名無しのウマ娘ファン ID：CCZAMkrUu

>>435 はえーそんなに違うんだ。ありがとさん

439：名無しのウマ娘ファン ID：cXZUCu3TU

重視してる方向性が違えばそりや欧州で結果は残せんよなあ……

441：名無しのウマ娘ファン ID：fCHp7afWE

エルコンドルパサーってすごかったんだな

443：名無しのウマ娘ファン ID：qhd+Ql4Ol

エルコンドルパサーは時代が悪かった

444：名無しのウマ娘ファン ID：udNONGcyo

べっちょべっちょの不良バ場だったのも痛かったな。もう少しバ場がよかったら勝ってただろう

445：名無しのウマ娘ファン ID：K+gWTEI88

ところでブロワイエってモンジューとしても名前が登録されてるんだがどうということ？

447：名無しのウマ娘ファン ID：qWHap4UHV

「諸般の事情で別名を持つ人って結構いるんだぜ？」

449：名無しのウマ娘ファン ID：j4MeXCk6+

ウマ娘の場合レースで使ってたウマ娘名とは別に通名があったりするしな。ブロワイエも同じようなもんだろ

451：名無しのウマ娘ファン ID：hQWRKjq9

結婚して田中サイレンススズカとかになっただらちよつと笑えるもんな

452：名無しのウマ娘ファン ID：aKaQ2S3MB

まあうん……違和感はあるよね

454：名無しのウマ娘ファン ID：lMVweJcBl

有名なウマ娘とかだとレースの世界から離れると通名で過ごす娘も居ると聞く

456：名無しのウマ娘ファン ID：TUnEkGGP

眉唾な噂だがトキノミノルとかも今は通名で過ごしてるらしい

458：名無しのウマ娘ファン ID：j89HFkrjR

トキノミノルはダービーに勝った後観客が興奮して牧柵のラチに体当たりしてぶっ壊したという逸話があるくらい熱狂的なファンが多かったらしいからなあ

459：名無しのウマ娘ファン ID：nvjq+/xjE

ラチをぶっ壊すのはブラックプロテウスくらいだと思ってたけど観客もおんなじことしてたんですね

460：名無しのウマ娘ファン ID：jeSsoiJIR

ブラックプロテウスが外ラチぶっ壊したのもダービーでしたね

462：名無しのウマ娘ファン ID：ZYIaDnCoK

ダービーの時にはラチを壊さなきゃいけないんか？

463：名無しのウマ娘ファン ID：VvW4hn7+7
色々似てる点が多い二人だなあ。トキノミノルも脚部不安が無
かったらブラックプロテウスと同じくらいの成績を出してたんだろ
うか

465：名無しのウマ娘ファン ID：DNfXWZQB1
レースにたらればはないがトキノミノルやテンポイントはもつと
走る姿を見たかったと思う

467：名無しのウマ娘ファン ID：S8N1a1W19
やっぱり怪我は怖い

469：名無しのウマ娘ファン ID：zNLZCG7Z1
全員無事に走り切ってほしいなあ

471：名無しのウマ娘ファン ID：uTYcolgk4
お、ファンファーレだ

473：名無しのウマ娘ファン ID：ChBy4bGiS
親の声より聴いたファンファーレ

474：名無しのウマ娘ファン ID：y/VUSB9/F
親のファンファーレより聴いたファンファーレ

476：名無しのウマ娘ファン ID：oQ4Jm1Wix
>>474 親のファンファーレってなんだよ

478：名無しのウマ娘ファン ID：wQ84ObTK
なんかブラックプロテウスが耳絞ってる気がするんだが気のせい

?

479 : 名無しのウマ娘ファン ID : 0vS48uYyI
なんだ? プレッシュヤーとかに怯えてるのか?

480 : 名無しのウマ娘ファン ID : sAD2BkXNN
何というか……キレてるみたいな感じ?

482 : 名無しのウマ娘ファン ID : X655XcXNQ
おこ? おこなの? なんで?

484 : 名無しのウマ娘ファン ID : l t I n O v w Y J
連闘によるストレス……ってタマじやないよなあ

486 : 名無しのウマ娘ファン ID : e b z c D k C F O
ゲート嫌いなだけじゃね?

487 : 名無しのウマ娘ファン ID : 4 F N z G o 7 M E
ゲートに入らないくらい暴れるウマ娘も居るしなあ

489 : 名無しのウマ娘ファン ID : n H c f P J 5 K q
あ、始まった

490 : 名無しのウマ娘ファン ID : P W Q e S I e g F
よかったちゃんと出遅れずにスタートしたな

492 : 名無しのウマ娘ファン ID : / P u l a s g h A
走りはいつも通りに見えるけど何だったんだ一体

494 : 名無しのウマ娘ファン ID : T 4 2 B I p O I m
レース前にラムタラちゃんとかなんか話してたからそこで喧嘩でも

したんじやね？

496：名無しのウマ娘ファン ID：rPoA5KZPW
挑発されたとかあるかもな

497：名無しのウマ娘ファン ID：SMRhx2AG
La victoire est moi！

498：名無しのウマ娘ファン ID：i6+TxrGEC
スペちゃんの暴言はやめてもろて

500：名無しのウマ娘ファン ID：v7jgKODCT
あれはエルコンドルパサーの入れ知恵だからエルコンドルパサーが悪い

501：名無しのウマ娘ファン ID：j3Vk9LtVJ
エル、腹を切りなさい

502：名無しのウマ娘ファン ID：x7r3sC/lh
>>501 グラスワンダーちゃんがぶちぎれてエルコンドルパサーに薙刀を突き付けてる画像が一時期流れましたね

503：名無しのウマ娘ファン ID：96lGof8pi
まあうん、フランスのウマ娘にフランス軍行進曲のフレーズをもじった挑発文をぶつけさせたのは明らかにエルコンドルパサーの憂さ晴らしだよな

504：名無しのウマ娘ファン ID：t/rTkvs6
でもスペちゃんあのセリフ気に入ってレース前に時々言ったりするらしいけど

505 : 名無しのウマ娘ファン ID : bXZ3x9QAV

致命的に出遅れて敗退したウインタードリームトロフィー予選の時に言つてたらしい

507 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6o+hMOpIS

>>>505 草

509 : 名無しのウマ娘ファン ID : 8KKA7/dba

おっとラムタラ残り1000で仕掛けた

510 : 名無しのウマ娘ファン ID : oOjKuDN7N

ちよつと仕掛け早くない? 大丈夫?

512 : 名無しのウマ娘ファン ID : 2JlnQhGwe

まあブラックプロテウスが単騎で楽逃げしてるから早めに仕掛けたんじやないかな

513 : 名無しのウマ娘ファン ID : ZNC9NJlYZ

放つておくとそのまま行っちゃうからな

515 : 名無しのウマ娘ファン ID : iBPseOc+

ラムタラやっぱいい脚だな。ブラックプロテウス抜くぞこれ

516 : 名無しのウマ娘ファン ID : N40MTTG I8

やっぱ欧州三冠は強いな……

517 : 名無しのウマ娘ファン ID : 8aFq133+

ふあっ!!?

519 : 名無しのウマ娘ファン ID : FMT+gdIME

1バ身くらい迫つてたと思つたら再加速して引き離された

521 : 名無しのウマ娘ファン ID : n j d 9 U s X K L
何で逃げウマ娘が末脚使ってくるんですか？

522 : 名無しのウマ娘ファン ID : E M 9 i S s K k c
やっぱりこのウマ娘おかしいよ！

523 : 名無しのウマ娘ファン ID : 8 j R O X o U u G
すっごい二の脚だ

525 : 名無しのウマ娘ファン ID : G Z l f / 8 n Y b
二段ブースターとはよく言ったもんだ

526 : 名無しのウマ娘ファン ID : 0 H 7 + a w S P c
勝った勝ったア！

527 : 名無しのウマ娘ファン ID : 5 i / 7 Y d H W F
いやー強い勝ち方だ

528 : 名無しのウマ娘ファン ID : J 6 c 2 p E l P u
これでエクリプスに並んだか……

530 : 名無しのウマ娘ファン ID : G 3 N b 7 + 9 m A
現代でまさかこれほどのレースが見れるとは

532 : 名無しのウマ娘ファン ID : S y i h P l h E L
多分20年後とかに伝説扱いされるやつだよこれ

533 : 名無しのウマ娘ファン ID : B d y D M l 6 V 8
20年後も現役で走ってたりしそう

535 : 名無しのウマ娘ファン ID : H7sWITVgF
いやさすがにそれはないだろ……ないよな？

537 : 名無しのウマ娘ファン ID : 0gmki4EVC
50歳までプロで野球してたラジコンレーサーも居ますし

538 : 名無しのウマ娘ファン ID : 2CvPvmdPx
なんかいつもテウスが勝つと嬉しそうにしてるのに今日は何かこ
う……無表情じゃね？

540 : 名無しのウマ娘ファン ID : A4HNekple
顔が良いウマ娘が無表情だと怖いな

541 : 名無しのウマ娘ファン ID : AUVErWZi
怖すぎて泣きそう

542 : 名無しのウマ娘ファン ID : Drx/kgFL8
ラムタラに何か言ってる？

544 : 名無しのウマ娘ファン ID : h0l+XikIy
なんか険悪だな……

545 : 名無しのウマ娘ファン ID : VhHwSSq9p
なんか言つてすぐに行っちゃったな

546 : 名無しのウマ娘ファン ID : W34973YYI
いつも穏やかな表情が楽しそうにしてるところしか見せないのに
今回は何か怖いな……因縁でもあったのかな

548 : 名無しのウマ娘ファン ID : MelPjuTKl
当人たちにしかわからない何かがあつたんだろうな……

【祝】ブラックプロテウス専用スレ Part100【エクリプス超え】

700：名無しのウマ娘ファン ID：PHWNhmHtp
さーて年末最後のGIレースになりましたね

702：名無しのウマ娘ファン ID：lISNB6nQK
>>700 最後じゃない定期

703：名無しのウマ娘ファン ID：GaVY/wjdm
ホープフルステークス君と東京大賞典君のことも忘れないでいて
もろて

705：名無しのウマ娘ファン ID：sADf3Osg6+
グランプリレースって言う点では最後の大一番だけどさあ

706：絶壁の酒クズ ID：kPXvOM/pC

まあお祭り騒ぎになるよね、有《font：ul40》馬《font》記念。私はうん、出たことないけどさ。特別登録はしたけど未勝利戦一勝だけのウマ娘が出られるわけもなかったよね

708：名無しのウマ娘ファン ID：H8gmb9Wbe
やっぱりウマ娘にとってはグランプリレースって特別なモノなんだな

710：名無しのウマ娘ファン ID：U7VDTqXGI
限られたウマ娘しか立っていないGIの舞台で、しかもファンたちの夢を背負って走るからな、思い入れも人一倍だろ

711：名無しのウマ娘ファン ID：hlEkBRPYo

特に有《font:ul40》馬《font》記念はいろんなド
ラマがあるもんなあ

712:名無しのウマ娘ファン ID:Nsa0Nv4Ag
オグリキャップの引退レースでの感動のラストラン、トウカイテイ
オーの復活劇…:それ以外にも全く注目されてなかったウマ娘が勝
つこともある面白いレースだ

714:名無しのウマ娘ファン ID:SFS37ye0g
今回は波乱起こらないでくれよ

716:名無しのウマ娘ファン ID:mWpzhMvN8
テウスが出遅れさえしなければ問題なく勝てると思うけどなあ

717:名無しのウマ娘ファン ID:m2pmjZt+r
迫れそうなのはマヤノトップガンとヒシアマゾンくらいじゃない
か? ナリタブライアンは復帰後全然結果出てないし

718:名無しのウマ娘ファン ID:9JT8GH9Q
後はリボンマンボか…

719:名無しのウマ娘ファン ID:MSG65hXT1
マイルチャンピオンシップは最終直線から一気に5人ぶち抜いて
勝ちましたからね

720:名無しのウマ娘ファン ID:Mel fhjA8
いやー強かったねマイルCSのリボンマンボ。NHKマイルも
勝ってたし、マイルだと強いね。有《font:ul40》馬《font》
ont》は少し長いかも?。

722:名無しのウマ娘ファン ID:mO/R4uoc

いやでもダービーは好走してたし2500くらいならまだいけるって

724 : 名無しのウマ娘ファン ID : w f r 1 0 Y I H q
ウイニングライブでの担当トレーナーの奇行が話題になりましたね

726 : 名無しのウマ娘ファン ID : T z T L 1 f w A 1
見た目あんな美人さんなのに最後のサビのソロパートで興奮して飛び跳ねながらサイリウム振り回してたからな

727 : 名無しのウマ娘ファン ID : 8 n A 4 W 7 + Y i
厄介ファン過ぎワロタ

728 : 名無しのウマ娘ファン ID : F j s 6 1 6 T S G
流石に警備員に怒られてましたね

729 : 名無しのウマ娘ファン ID : W 2 y o 0 F q 1 e
良い子の皆は真似しちやダメだぞ

731 : 名無しのウマ娘ファン ID : N s V / f U w e r
マナーを守って楽しく観ようね!

733 : 名無しのウマ娘ファン ID : n c l b z e O 8 k
クールビューティーな美人には変人しかいないのか?

735 : 名無しのウマ娘ファン ID : g n s P G k o Z I
あの人と酒クスネキは例外だろ

736 : 絶壁の酒クス ID : k P X v O M / p C
私も流石にライブで飛び跳ねたりしないぞ!

738 : 名無しのウマ娘ファン ID : V Q Q E H g y U O
>>736 でもあなたこないだのJCのウイニングライブのストーリーミング配信中にお酒の瓶を足の小指の上に落として悶えてましたよね？

739 : 名無しのウマ娘ファン ID : K j x 8 T U r O x
どういう奇跡が起こればそうなるんだ

740 : 絶壁の酒クズ ID : k P X v O M / p C
だってJCの時の入場チケット取れなくて荒んでたんだもん……
そりゃラツパ飲みよ

742 : 名無しのウマ娘ファン ID : h b 0 7 b g M o E
焼酎ラツパ飲みはもう酒クズってレベルじゃないんよ

744 : 名無しのウマ娘ファン ID : R w D 3 w l O K z
肝臓ちゃん壊れちゃう

745 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9 / 0 c I l P C R
お医者さんをこれ以上泣かせないでね

747 : 名無しのウマ娘ファン ID : r W w v 2 Q u C d
だれか恋人になってこいつを止めてやる男はおらんのか

749 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6 p 0 j z S L O t
いやーきついつす

750 : 名無しのウマ娘ファン ID : 7 P 5 7 6 9 6 a W
アル中はちよつと

751 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9OHg42gJM
お酒止めたら考える

753 : 絶壁の酒クズ ID : kPXvOM/pC
そのうちテウスちゃんに貰ってもらうからヘーキヘーキ

754 : 名無しのウマ娘ファン ID : c6+5Un2u5
酔っぱらってテウスちゃんに電話するのはもうやめてもらて

755 : 名無しのウマ娘ファン ID : qZTIJXyVf
よくもまあこんな酔っ払いの相手してくれたよなテウス

757 : 名無しのウマ娘ファン ID : Jr9LBPX85
「ストレスたまってるんですか？ 今度一緒にランニングでもしま
しょうね」とか言いつつずっと甘やかしてたな

759 : 名無しのウマ娘ファン ID : nN2b2o8or
一体どっちが年上なんですかねえ……？

760 : 名無しのウマ娘ファン ID : Nf3EGDR7H
忙しいだろうによくもまあ一度病室で一緒になっただけの相手に
優しくできるもんだ

762 : 名無しのウマ娘ファン ID : ghcvDh5qk
まあ酒クズネキ見た目は美人だし……俺らだったら多分相手にさ
れてないんじゃないか？

764 : 名無しのウマ娘ファン ID : HbhNYGYRA
いやでもこないだキタサンブラックと一緒にボランティア活動し
てたぞ。俺も一緒にゴミ拾いしてた

766 : 名無しのウマ娘ファン ID : Fb7nWtdle
やっぱ優しい子なんだねえ

767 : 名無しのウマ娘ファン ID : BhvIN+7gN
俺も現場にいたけどナンパ男はちゃんとあしらってたからチヨロ
いってわけではなさそう

768 : 名無しのウマ娘ファン ID : Bdd5j4Yur
あんな超一流ウマ娘が護衛なしで出歩いていいんだろうか

770 : 名無しのウマ娘ファン ID : NPdnZ+2GN
社会的立場が高いつてわけじゃないからな……プロスポーツ選手
くらいの立場だし護衛はつかんだろ

771 : 名無しのウマ娘ファン ID : c+YtGIJqs
多分走つて逃げた方が安全だし……

773 : 名無しのウマ娘ファン ID : uzlCk/sI2
>>771 それはそう

775 : 名無しのウマ娘ファン ID : 322EbtXJd
相手が同じウマ娘じゃない限り逃げ切れるし、同じウマ娘だったと
しても多分逃げ切れるだろうな

776 : 名無しのウマ娘ファン ID : SR5pukfAG
変装しないと街中歩けなさそうなのはすっごい気の毒

778 : 名無しのウマ娘ファン ID : 6cjztgPZS
有名税つてやつだな

779 : 絶壁の酒クス ID : kPXvOM/pC

私なんてコンビニにタンクトップとショートパンツで酒買いに行っても注目されないぞ

781：名無しのウマ娘ファン ID：eXNc+ZYdb
うーんこの

782：名無しのウマ娘ファン ID：y8rTANLgy
なんだろう、すごいセクシーな恰好だと思うんだけど、酒クズネキがしてると思うと興奮しない

784：名無しのウマ娘ファン ID：Z0WSyedtl
酒クズネキ服のセンスはすごい良いし、見た目も良いし、稼ぎもいいんだけどさ……

785：名無しのウマ娘ファン ID：1YP4R66oD
酒クズなのがすべてを台無しにしている

786：名無しのウマ娘ファン ID：zEODT241C
おまえはいつもそうだ

787：名無しのウマ娘ファン ID：Ufw+z7RBn
誰もお前を愛さない……こともない

789：名無しのウマ娘ファン ID：fscfi+Mg/
まあスレ民には愛されてるから

790：名無しのウマ娘ファン ID：VSFz1TeOK
少し位欠点があったほうが可愛げがあるってもんよ

792：名無しのウマ娘ファン ID：9w1aXb5vq
すこ……し？

794 : 名無しのウマ娘ファン ID : H O I R h o C Z 7
少し、うん、少しだよ

796 : 名無しのウマ娘ファン ID : 8 a P s e J b y 0
酒クズは少しなのか……？

797 : 名無しのウマ娘ファン ID : l c 3 o Z m T P v
私は好きだけでもう夫がいるから

798 : 名無しのウマ娘ファン ID : I r l I 7 v f p P
俺も嫁が居るからな、画面の中に

799 : 名無しのウマ娘ファン ID : o z 5 z H k M m I
三次元の女はクソ

801 : 名無しのウマ娘ファン ID : v E x W Z f L m s
俺が愛せるのは小学生までなんで

803 : 名無しのウマ娘ファン ID : n h K R s Q s + 5
>>801 通報しました

804 : 名無しのウマ娘ファン ID : x G 5 S H a 7 s U
これだからロリコンは

806 : 名無しのウマ娘ファン ID : G 7 j Y W J h a S
はいはいレース始まるから談義はその辺にしましょうね

808 : 名無しのウマ娘ファン ID : X h g F z l c f H
酒クズネキ、今日のお酒は？

810：絶壁の酒クズ ID：kPXvOM/pC

今日は実家から送られてきた梅酒だよ。お母さんが漬けてくれたやつ

811：名無しのウマ娘ファン ID：dSrFv8V9m

そういう酒もいいよね……

813：名無しのウマ娘ファン ID：KQXmQKaXf

自分で漬けた梅酒ほど美味しいものはねえ

815：名無しのウマ娘ファン ID：x4N7JZ/pR

今度俺も自分で漬けてみようか……

816：名無しのウマ娘ファン ID：Xsm2qcjl8

素材も簡単にそろえられるのは魅力的だね。あっさりしたのがいいなら3ヶ月くらいで出来るし

818：名無しのウマ娘ファン ID：iOnJnJIsx

俺は1年くらい漬ける派

820：名無しのウマ娘ファン ID：frBOM/ScB

私はコンビニとかで買っちゃうなあ、漬けるの面倒だし

821：名無しのウマ娘ファン ID：ZZ5dJ6nJr

漬けてる間待てないもんな

822：名無しのウマ娘ファン ID：HeZj0tblp

ファンファール

823：名無しのウマ娘ファン ID：VWivo/QuD

ふあんふあんふあれ

825 : 名無しのウマ娘ファン ID : aOvzZqAQ T
親ファン

826 : 名無しのウマ娘ファン ID : V h D l R K 7 7 k
親ファン

827 : 名無しのウマ娘ファン ID : U K o P N m 9 F p
親ファン

830 : 名無しのウマ娘ファン ID : w 4 i Z 0 S m Z V
親ファンってなんだよ

833 : 名無しのウマ娘ファン ID : 2 S K j S r q C Q
ここまでテンプレ

834 : 名無しのウマ娘ファン ID : 2 U m f j f C m d
中山ファンファーレも今年最後か……

835 : 名無しのウマ娘ファン ID : U s F s f F P l 5
>>834 だからホープフルステークス君のことを忘れないで
もろて

837 : 名無しのウマ娘ファン ID : w m L u y T r W W
でももうすぐ年越しなんだなとは思うよね正直

839 : 名無しのウマ娘ファン ID : e N d h Q 0 / b Z
スタートしました！

840 : 名無しのウマ娘ファン ID : t i Z k p Y V O B
うおっこれライイング？

842 : 名無しのウマ娘ファン ID : L8 / 2Ne2F2
素晴らしいスタートだ

843 : 名無しのウマ娘ファン ID : IQuCGsBoD
他の子も良かったけどポーンと飛び出したな

845 : 名無しのウマ娘ファン ID : BlaeBuZ8V
同じ逃げウマ娘を既に引き離してる……

847 : 名無しのウマ娘ファン ID : 8LVm35twW
サイレンススズカ並みの逃げじゃないと太刀打ちできないのほん
と強い

849 : 名無しのウマ娘ファン ID : /6m46Nt0F
スローペースにされたらわからんけどテウスのペースならもう
勝ったなガハハ

851 : 名無しのウマ娘ファン ID : geLwo4fH5
このハイペースについていけるのはそういないよなあ

852 : 名無しのウマ娘ファン ID : 7RN4VE9aa
他の子はスタミナ持つんだろうか

853 : 名無しのウマ娘ファン ID : V8HLLBCnF
シンプトンダッシュはきつそう

854 : 名無しのウマ娘ファン ID : 9FuZQ6hn9
マヤノトップガンは行けそうな雰囲気があるな

856 : 名無しのウマ娘ファン ID : Oh5QObk48

リボンマンボが二人を風除けにして虎視眈々

858 : 名無しのウマ娘ファン ID : D+S J y a + G E
なんか不気味だな……

859 : 名無しのウマ娘ファン ID : 0 M M K B w u o i
でっかい拍手……

861 : 名無しのウマ娘ファン ID : j 2 c o r A C G A
やっぱグランプリレースは盛り上がりますねえ

863 : 名無しのウマ娘ファン ID : 7 6 N p g v M d u
1000m58秒台？

864 : 名無しのウマ娘ファン ID : e z c g G 6 X h o
はっや

866 : 名無しのウマ娘ファン ID : J x B W Y X r 7 0
平均って60秒とかそこらだったよね

867 : 名無しのウマ娘ファン ID : 8 8 A H t + A Q n
まあテウスだし……

868 : 名無しのウマ娘ファン ID : H s P 8 4 / l e A
ハイペースで磨り潰すのがこの娘ですからね

870 : 名無しのウマ娘ファン ID : y 5 I g + V P P s
可愛い顔してえぐいことしやがるぜ

871 : 名無しのウマ娘ファン ID : b l x g l d o 9 8
だがそれがいい

873 : 名無しのウマ娘ファン ID : Hr8lfXD/U
そこに痺れる憧れるウ!

874 : 絶壁の酒クス ID : kPXvOM/pC
私も逃げで走ればよかったなって思うくらい脳が焼けるよね

876 : 名無しのウマ娘ファン ID : YN3Mh3pGs
酒クスネキ追い込みだったっけ

878 : 名無しのウマ娘ファン ID : LjLzq+iEt
レース映像見せてもらったけど末脚はいいんだけどコース取りが
致命的に下手で大体前が塞がってたね

880 : 名無しのウマ娘ファン ID : eHBdJcmc6
賢さが足りてない

882 : 名無しのウマ娘ファン ID : pslcPo7QY
圧倒的に賢さが足りない

884 : 名無しのウマ娘ファン ID : lv7acizEY
何で投資ができてレースのコース取りができないんだ

885 : 名無しのウマ娘ファン ID : tIEFr8fQ
まあ使う頭の領域は違うだろうし、全力で走りながら頭使うのは難
しいだろ

886 : 名無しのウマ娘ファン ID : E34J/Te8F
おっとレースに戻らないと

888 : 名無しのウマ娘ファン ID : AXLLbDzfzC

最終コーナー辺りでみんな仕掛けてきたあ！

890：名無しのウマ娘ファン ID：RuiFj8DCG

流石に2500だとまだ圧倒的な差じゃないか……追い付かれるかも

892：名無しのウマ娘ファン ID：6uluOmWzk

せめて後200長ければ圧勝できるだろうに

894：名無しのウマ娘ファン ID：dNt/N2Wwq

ブラックプロテウス、リボンマンボ、マヤノトップガンが最後まで残った

896：名無しのウマ娘ファン ID：O38EmeL4e

じりじり差が詰まる……

897：名無しのウマ娘ファン ID：h8qSYazkW

息も詰まる

899：名無しのウマ娘ファン ID：Nts2HoMGi

あああ届いちやうのか？

901：名無しのウマ娘ファン ID：OlknbSlT

後半バ身しかない

903：名無しのウマ娘ファン ID：bOSbHKOSG

あ？

904：名無しのウマ娘ファン ID：r3CkMxHzC

え、失速した？

906 : 名無しのウマ娘ファン ID : c4odL01Zv
まさか故障……

908 : 名無しのウマ娘ファン ID : MCmD0NwWw
おい不吉なこと言うなよ

910 : 名無しのウマ娘ファン ID : 7T+KonvQP
あ、マヤノトップガンが引つ掛かった

911 : 名無しのウマ娘ファン ID : FN72CG8JV
なんか予想外って顔してるな

912 : 名無しのウマ娘ファン ID : rBFdUstSC
追い抜かしたけどもうここからは届かないな

914 : 名無しのウマ娘ファン ID : ASwHEyMNP
やったやったあああああああ！

915 : 名無しのウマ娘ファン ID : sVTMqn8IJ
逃げ切った逃げ切った逃げ切った

916 : 名無しのウマ娘ファン ID : +4Iub95Dv
いよっしやああ!!1!1!

917 : 名無しのウマ娘ファン ID : avIvSIBDH
秋シニア三冠、春秋グランプリ連覇、そして八冠達成！

918 : 名無しのウマ娘ファン ID : paN7oIgvh
いやもうこれ本当にクラシック級のウマ娘かよ！

920 : 名無しのウマ娘ファン ID : IRMQHvFYh

脳焼かれちやう

921：絶壁の酒クズ ID：kPXvOM/pC
勝った勝った！ 梅酒も美味しかった！

923：名無しのウマ娘ファン ID：mdnwaUvHE
もう負けるビジョンが見えないな

924：名無しのウマ娘ファン ID：+sauu3NDp
いやでも今回は結構危なかった

925：名無しのウマ娘ファン ID：X2szp11G2
2500までなら油断できないな……多分距離区分Eなら負けな
いだろうけど

927：名無しのウマ娘ファン ID：Ldc2EyVX+
ステイヤーズステークスはもう蹂躪だったからね……

929：名無しのウマ娘ファン ID：RDOPoaXpT
今から春天が楽しみだなあ

・
・
・

991：名無しのウマ娘ファン ID：Qnv14JQYM
ウイニングライブでまたリボンマンボのトレーナーが奇声あげて
るんだが？

993：絶壁の酒クズ ID：kPXvOM/pC
やっべえ胃が焼けるように痛い

994 : 名無しのウマ娘ファン ID : j5mGUqEHa
>>993 病院行ってもろて……

995 : 名無しのウマ娘ファン ID : 8Chifex/X
だからお酒は控えろと

996 : 名無しのウマ娘ファン ID : jnR7Znhc4
リボンマンボのトレーナーも飲んでたりしないだろうな……

997 : 名無しのウマ娘ファン ID : fPe7nK+bG
流石に素面だろうけどそれはそれで怖い

998 : 名無しのウマ娘ファン ID : OiW/GmZs9
何でこんなになるまで放っておいたんだ

999 : 名無しのウマ娘ファン ID : p93PZmf g2
折角めでたい雰囲気だったのに台無しだよ！

1000 : 名無しのウマ娘ファン ID : JK9HJhbfo
どうしてこうもクールビューティーには変人しかいないんだ！

1001 : 1001 Thread
Over 1000

このスレッドは1000を超えました。
新しいスレッドを立ててください。

第三章 シニア級

第四十九話 シニア級突入

有《font:ul40》馬《font》記念が終われば学校は本格的に冬休み。次走に関しては万葉ステークスか日経新春杯かで悩んだ結果、折角だから両方に出ることにした。

万葉ステークスはオープン特別、日経新春杯はGⅡであり、レースの格としては日経新春杯の方が高い。普通に判断するなら、私の戦績であれば日経新春杯だけに絞るべきだろう。常識的に考えて。

でも、万葉ステークスは3000m。日本の中央で開催される3000m以上のレースは、これを含めて6つ。一生に一度しか出走できない菊花賞を除けばたった5つしか存在しない。

なので、万葉ステークスはどうしても走りたい。もしこれが条件戦などであったのなら諦めざるを得なかったが、そうでないならたとえ大阪杯とかに出られなくなっても絶対に行きたいレースだ。

それに両方とも京都開催のレースだ。距離が大幅に変わるわけでもないし、連闘になるが私にはあまり関係ない。

トレーナーさんに出走希望を伝えたら既に両方エントリーしてあると言っていた。もう長い付き合いだし、私の考えることはお見通しということだろう。

今年は一度実家に帰るか迷い、一応帰省届は出したのだが、帰らないことにした。

年末年始で地元人が多いであろう時期に帰省したら近所がお祭り騒ぎになる可能性が高いので、年末年始に帰るのは逆にハードルが高い。天皇賞（春）が終わったら、少し休みを貰って一度帰る予定だから、そこまで我慢することにした。

それまでは学園に残ってトレーニング漬けの日々を送るつもりだ。今年スピカの皆は殆どが里帰りした。残っているのは私とスズカさんとゴルシさん、それとトレーナーさんだけだ。

ゴルシさんは『ちよつとルルイエで年越ししてくるぜ!』と言って何処かに行ってしまったけど、学園のどこかには居るだろう。多分。

私は正月休みが終わったら万葉ステークスなどのレース予定は勿論、UR A賞、つまり年度代表ウマ娘や各クラスの最優秀ウマ娘の発表があるし、1月末あたりにはその表彰式があつたりするので案外忙しい。今年は去年とは違って、既に私に対して年度代表ウマ娘と最優秀クラシック級ウマ娘の表彰がある事は知らされている。

戦績的に間違いないだろうと菊花賞に勝つたときから言われていたから、既に勝負服の色について等の要望については聞かれたりしてもいる。

トレーナーさんも帰省できない程度には忙しいのだろうと思って一度謝つたら、『この歳で一人で実家に帰るとな、早く嫁さん連れて来いってうるさいんだよ……』と死んだ魚のような目をして笑つていた。

その時は丁度スズカさんがトレーナーさんの隣にいたので『一人で帰るの嫌なんですか? トレーナーさんさえ良ければ私が一緒に行きましようか?』と言つていた。

トレーナーさんは気持ちだけ受け取っておくと言つていたが、どこまで本気だったのだろうか? スズカさんは時々天然だから、何処まで考えてこの発言をしたのかは不明だ。

トレーナーさんは教育者としては真面目な人だ。学生とどうのこうのなることはないだろう。卒業した後のことは当然同士の問題なので私は与り知らないが……

まあ、そんなことはどうでもいいんだ、重要なことじゃない。今の私に重要なことは、殆どのウマ娘が帰省するこの冬休みはトレーニングコースがほぼ使い放題ということだ。

この時期だけは各種設備を使用申請を出さなくても使用して良いことになっている。コースやトレーニングルームに学園に残つたトレーナーが最低一人居て、そのトレーナーに報告さえすれば問題なく使用できる。

勿論担当トレーナーがついている場合はそのトレーナーに付き

添って貰ってトレーニングを見て貰ってもいい。

時折順番待ちは発生するが、まあその辺りはウマ娘同士で話し合うか付き添いのトレーナーさんによる調整で何とかすることになっているし、実際何とかなっている。

トレーナーさんにコースで暫く走っているとメッセージを送ってから、コースへ向かう。

ちなみに、今日は大晦日。そして時刻は午前5時半である。今日の日の出は午前7時くらいなので、まだまだ真っ暗だ。学園内には街灯があるし、ウマ娘は人間より暗視能力に優れているので明かりがなくてもまあ何とかなる。

とりあえずまだ日も出ていないし、正直とても寒い。なので最初は軽く芝を走って身体を温めよう。

芝コースに向かうと、緑色のトレセン学園指定体操服を着たウマ娘が準備運動をしていた。

大晦日の午前五時に私以外にコースに出てくるウマ娘はそうそう居ないと思うのだが、そのウマ娘には見覚えがあった。

「おはようございます、トキノ先輩！」

「うえっ!!? あ、て、テウスちゃん！ おはようございます！」

あの夜に出会ってから、早朝や夜の人が少ない時間帯に稀にエンカウントするようになったウマ娘、トキノ先輩だ。

色々忙しいらしく、どうしてもあまり人がいない時間に走るようになってしまうと云っていた。

私と偶然出会うまでは殆ど一人で走っていたそうで、流石にそれじゃあんまりだから彼女の姿を見かけたら一緒に走ることにしている。

「え、えーつと、テウスちゃん。貴女帰省届出していませんでしたっけ？ 帰らなかつたんですか？ スピカの皆さんは全員帰省したと思っていたんですが……」

「悩んだんですけれど、この時期に帰ると色々大変そうなので。一応学園にはトレーナーさん経由で報告してもらっていますけれど……」

「あ、ああ、そうなんです。後で確認しておきますね」

トキノ先輩は事務員さんたちのお手伝いをする人が多いらしく、申請された内容を把握しているらしい。卒業後はそのまま事務員になると言っていた。

学生の内からそういった仕事をしているのは純粹に尊敬する。私は自分自身の目的のために生徒会役員の席を蹴つ飛ばしたウマ娘だ。お世辞にも優等生なウマ娘ではない。

その事務員さんたちは確か、冬休みに入った際に理事長が自宅勤務を命じていたはずだ。もしかしたらそのあたりの関係で連絡が上手くいっていなかったのかもしれない。

「ところで、よろしければ一緒に走ってもらえませんか？ お邪魔でなければですけど」

「あー……はい。勿論構わないんですけど、今日はちよつと連れが居まして」

「あ、そうなんですね。なら遠慮した方がいいのかな……」

非常に残念だが、いきなり併走相手が増えてしまったのはトキノ先輩の友人に迷惑が掛かってしまうかもしれない。大人しく引き下がったほうがいいだろう。

「いえ、テウスちゃんなら大丈夫でしょう。テウスちゃんの知り合いでもありますし」

「え？ それってどういう……」

「めんごめんご！ 待たせちゃったわねー、って、あれ、テウスちゃん？ おはよっ。随分早起きね？」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえて振り返ると、マルゼンさんが居た。トキノ先輩の併走相手とはマルゼンさんだったのか。

マルゼンさんも高等部だし、知り合いでもおかしくないか。もしかしたらクラスメイトだったのかもしれない。それなら邪魔するのも悪いかな？

「おはようございます、マルゼンさん。ごめんなさい、お邪魔ですよね？」

「ううん、そんなことないわよ。折角だし一緒にどう？ 貴女もそれでいいわよね？」

「はい。今を時めく三冠ウマ娘とご一緒できるのは光栄なことですね」

受け入れてもらえたようなので、軽く併走して身体を温めてから、折角なので模擬レース形式で併走をすることにした。

距離は1600m。コースは東京レース場を模したコースの左回りだ。私には少々短い距離だが、トキノ先輩もマルゼンさんも脚部に不安がある。あまり長い距離を走れない。

それに、レースと言っても私たちは三人ともどちらかと言えば逃げに近い脚質だ。本気でやりあうとかなり消耗してしまうだろう。

本気でやらなければいいと思うだろうが、たぶんマルゼンさんとトキノ先輩が相手だと走ってる途中でスイッチが入ってしまうだろう。超一流のウマ娘を相手にして手加減できると思えない。なので最初から軽めに、という事を打ち合わせてから併走を始める。

「よし、準備出来ました。いつでもどうぞ」

「じゃあ行くわよー！ よーい、ドンー！」

「あ、ちよつとまつ……ああもう！」

大雑把なスタートで始めたせいか、少しトキノ先輩が出遅れた。元々スタートは苦手だと言っていたし、多少不意打ち気味だったのも原因だろう。

それでも、彼女はすぐに立て直してくるだろう。トキノ先輩はスピードの絶対値が違う。これでもし脚部不安がなければ、私以上の戦績を残せていただろう。

気になってトキノというウマ娘について少し調べてみたのだが、地方のウマ娘に該当するウマ娘が居たのだが、彼女は私と同じ黒鹿毛なようなのでトキノ先輩とは違うだろう。

ウマ娘の中には全く同じ名前を持っているウマ娘も存在する。その場合は産まれてくる時代が違うことが殆どだが。

ウマ娘の命名法則についてはあまりよくわかっていない。私の『ブラック』のように毛色にちなんだ名前がつけられることがあるので、何らかの法則で付けられているのだろうというのが定説だが、その辺りは三女神様のみぞ知るといったところだろうか。

そんなトキノ先輩は出遅れてなお、コーナーに差し掛かるころには私とマルゼンさんに並びかけてきた。

全力ではないとはいえ私はトウインクルシリーズ、マルゼンさんはドリームシリーズで最前線にいるウマ娘だ。その私たち二人についてこれるだけでもこのウマ娘がただ者ではないことがわかる。

やっぱりこのウマ娘達は強い。心の奥の方で燃え上がるものを感じるが、それを抑える。今コースで見ているトレーナーさんはブルボンさんやタヤスツヨシ先輩のトレーナーさんだったはずだ。たしかレリックアースさんも担当していたと思う。

優しい人だが、あんまり彼に怒られるようなことはしたくない。スパルタなトレーニングなら望むところだがお説教はご勘弁である。後やっぱり顔が怖いし。

少し抑え気味に走って、三人並んでゴール地点を通り過ぎる。誰かが抜け出るということもない、揃ったゴールだ。

「ふう……もう、スタートするならもつとしっかり合図してくださいよー！」

「めんごめんご！ でも、ちゃんとついてこれてたじゃない？」

「そうですね、流石はトキノ先輩です」

正直今でも現役で通用すると思う。中距離以上だと脚が痛むらしいが、短距離やマイルなら大丈夫だと思うし。今から高松宮記念に登録してもいいところに行けると思う。

高松宮記念は同期だと出走するウマ娘は短距離だとヒシアケボノ先輩、後はチームアケルナーのフラワーパーク先輩だろうか。同期でないならビコーペガサス先輩も出ると聞いた。

そういえば、ブライアンさんも高松宮記念に出るといふ噂を聞いたことがある。私は同週の土曜日に行われる日経賞に出る予定なので、高松宮記念に出ることはないだろう。

何といっても高松宮記念は短距離。走れなくはないが、わざわざ短いレースに出る理由はない。2500でも私にはちよつと短いけれど、1200よりは長い。なので私的には高松宮記念に出るといふことはないと思う。

調子次第では高松宮記念に行ってもいいんじゃないかとトレーナーさんが言っていたので、一応選択肢としては持っておいてある。走った後暫くストレッチをしてから水分を取ろうとコース外に置いた手荷物の方に向かうと、丁度誰かから連絡が入ったようで通知音が鳴った。誰かから通話が掛かってきたようだ。

慌てて電話に出ると、とても聞き覚えのある声が出た。というかスズカさんである。

「テウスちゃんおはよう。少し頼みたいことがあるのだけれど……」

「わかりました！ 今お部屋ですか？ すぐ行きますね！」

「うん、ありがとう。待ってるわね」

荷物を纏めてから、とりあえず先輩二人に挨拶をしてからスズカさんのところへ向かうことにする。

アイサツは大事、古事記にもそう書かれているってゴルシさんが言ってたし、何も言わずに立ち去るのは流石に不義理に過ぎるだろう。

「ごめんなさい先輩。スズカさんに呼ばれたので今日は私は切り上げますね」

「気にしないでください。私たちももう少し走ったら切り上げる予定でしたし」

「そうそう、今日はこの後予定もないし、問題ナツシングよ！ それじゃテウスちゃん。また来年ね♪」

「はい、マルゼンさん、トキノ先輩。今日はありがとうございました。良いお年を」

幸いにも二人とも気分を悪くした様子はなさそうだ。駆け足で寮の方へ帰ろう。それにしても、スズカさんが頼み事とは珍しい。一体どんなことなんだろうか？

スズカさんだし、あまり変な頼み事ではないだろうけど……

「……ところで貴女、テウスちゃんにカミングアウトしたの？」

「いやー、なんか気付いてないみたいですし、この際何処まで気付かないか気になっちゃって」

「……確かにそれは気になるわね」

あの後スズカさんのところに行くとかフクキタル先輩の神社に連れていかれることになった。前日の夜と正月の朝からのお手伝いをするらしい。どうにも巫女さんたちがインフルエンザでダウンしてしまつたようで、人手に困っているようだ。

夜は泊めてくれるそうなので、荷物を持って二人で途中商店街で買い食いをしつつのんびり向かい、夜のお手伝いものんびりで行い、その後スズカさんと同じ部屋でお布団を並べて休んだ。

フクキタル先輩曰く、『うちの神社は人で溢れるほどに参拝客が来ることはない』とか言っていた。それでいいのか神社の娘。

まあ、都内は大きな神社仏閣も多いし、有名どころに行く人が多そうなのは確かではあるのだが。

朝の手伝いは5時からと少し早い時間だったが、私もスズカさんもそれほど朝は弱くないので問題なくお手伝いが出来ている。

時折私とスズカさんが授与所の中で御守や御神籤を渡しているのに驚いた顔をする人が居たが、あまり騒ぎにはならなかった。

どうやら以前にも他のウマ娘がお手伝いをしたことがあるみたいだ。それに一応今はマスクをつけているから、私たちに気付かない人も多い。

神社内でインフルエンザが流行ってしまったことに対する対策で渡されたものだが、それが変装の役割も果たしてしまっているわけだ。

「御神籤一つくれ！」

「あ、はい。どうぞ……って、ゴルシさん。あけましておめでとうございます」

「お？ 何だテっちゃんのスズカじゃねーか。今年はおめーらが手伝ってんのか？ まあいい。今年こそアタシの時代が来る！ イクゾー！ デッデッデデデ！」

初詣に来ていたらしいゴルシさんが丁度授与所に来て御神籤を引きに来た。今年は珍しく振袖を着ている。

ゴルシさんが気合を入れて謎の掛け声とともに勢いよくガラガラと御神籤箱を振る。暫くしてカランと音を立て、一本の棒が台の上に落ちた。結果は――

「大凶ね」

「はい、大凶ですね」

「見りやわかるわ！ チクショー！ 今に見てろよ！」

私とスズカさんの無慈悲な宣告にゴルシさんが泣き真似をしながら走り去っていく。途中石段を一気に飛び降りて周りの注目を集めていた。正月早々ゴルシさんはゴルシさんだった。

「ん？ なんだ、お前ら。こんな所にいたのか。あけましておめでとう」

「あ、トレーナーさん。あけましておめでとうございます」

また見知った顔が来た。トレーナーさんだ。いつもの格好の上にコートを着ただけの適当な格好だ。男一人だとこんなものなんだろうか？

「あけましておめでとうございます、トレーナーさん。御神籤どうですか？」

「じゃあ折角だし……お、大吉か。今年はいいことありそうだ」

トレーナーさんに御神籤を勧めてみると大吉を引き当てていた。結構嬉しそうだ。その後トレーナーさんは健康祈願の御守を何個も買っていった。スピカの全員に渡すつもりらしい。

本当はサプライズで渡すつもりだったようだが、私たち二人にはバレてしまったと苦笑いしていた。ちよつと申し訳ない。

その後も時折来る知り合いに驚かれたりしながらも、特に騒ぎになることもなくお手伝いをこなすのだった。

そうして時が流れて、万葉ステークス当日。フルゲートは18人だが、今年は10人だけのレースになった。

ステイヤーには逃せないレースだと思ったのだが、思ったより人数が少ないし、見知った顔もほぼ居ない。出走表を見て首を傾げていた

のだが、それを見たテイオーさんには『3000mを3分切ってくるウマ娘を相手にしたい娘はそうそう居ないと思うけど?』とか言われてしまった。

まあ、菊花賞の時はかなり調子が良かった。条件はほぼ菊花賞と同じこのレースで同じくらいの走りができるならまあ負けないだろうと言われているし、それが今日の人気にも出て来ているらしい。

今は本バ場入場も済ませて、ゲート入りを待っているところだ。今日の私は1枠1番。一番内側だ。ゲート入りも一番最初になることになる。逃げの私には内側が有利かというところも、そうでもない。

短距離であれば最内が有利なのは確かだが、長距離は最内より真ん中付近の方が成績が良い。

なので枠順はあまり気にしない方がいいだろう。結局は菊花賞と同じ、一番強いウマ娘が勝つだけだ。

『京都レース場、第10レース。万葉ステークス。オープン特別のこの競走ですが、既にレース場は大賑わい。勿論皆の目的は一つ、ブラックプロテウスでしょう。勿論彼女はこれがシニア級初戦です。菊花賞のあの伝説の走りがまた見られるでしょうか!』

ファンファーレが鳴り、ゲートに入る。いつものプレッシャーとはまた違うようなプレッシャーが掛かってくる。

菊花賞の時はあんまり気にしていなかったのだが、期待というのは結構重いものだ。走り出してしまえばもう気にならないが、それまでがとてももどかしい。

『大外、フリルドオレンジがゲートに入りました。万葉ステークス、今スタートしました!』

早くゲートが開かないかな……そう思いながらポーっとしていると、いつの間にかゲートが開いていた。

「……あっ、やばっ!」

『あーっとブラックプロテウス、とんでもない出遅れ! 2秒近く出遅れましたブラックプロテウス! 会場からは悲鳴が上がっています!』

咄嗟にゲートから飛び出すも相当出遅れた。やばいやばい、とりあ

えず前に出ないと！ 最後尾なんて走ったことない！ ダービーの時も最後尾まではいかなかったのに！

『ブラックプロテウス大外に出てぐんぐん上がって行きます。これは完全に掛かっている！ 大丈夫かブラックプロテウス！』

『何処かで冷静になれると良いのですが。彼女が最後方からのスタートになったレースは今までありませんでした。ここまで出遅れてしまつては厳しいかもしれませんが、これは長距離レース。まだ何とかなるかもしれませんね』

とりあえず一番内側だったスタート位置から一気に外に出て大回りで上がって行く。今日が良バ場で本当に良かった。不良バ場ならどうなっていたことか……

『先頭からレースを振り返っていきましょう。先頭は9番フリルドオレンジ、その後すぐにデュオスヴェル。少し離れてアバブリニ、並んでギガントグレンデル。そこから3バ身ほど離れて差しウマ娘勢が固まっています、前からリボンオーバードとマイトリート、そこに大外からグングンとブラックプロテウス、まだ掛かっている様子。その後ろにプライムシーズンとアレキヤット、最後方にフリルドグレイプといった具合です。おっとブラックプロテウスまだ上がって行く。差しウマ娘勢をかわしきつてギガントグレンデルに並んだ！』

まだ先頭までは離れている、もつともつと上がって行かないとダメだ。

横を見るとギガントグレンデル先輩が『ウソだろこいつ』みたいな顔をしていた。だが今はそんなことはいい。とりあえずもつと前に行かないと。

ここから先頭まではそれほど離れていない。このまま一気に行ってしまおう。

『何とビックリそのまま先頭まで駆け抜けていきましたブラックプロテウス！ ホームストレッチ、1000m通過時点で先頭に躍り出た！ 通過タイムこそ61.5と万葉ステークスとしては平均ペースですが彼女は2秒出遅れています！ だがまだ掛かたまま！ 普通のウマ娘ならこれは逆噴射パターンだが果たしてどうなる!?!』

『周りのウマ娘は冷静にペースを維持していますね。流石に彼女のペースに付き合っではいけないことがわかつているようです』

1回目のホームストレッチの真ん中あたりでやっと先頭に出ることができた。でもあまりリードがない。もうちよつと前に出ないと。もつと逃げない！

『ブラックプロテウスまだ掛かっているか。少しペースは落ちましたがどんどん上がって行きます。第1コーナーを回って第2コーナーに入って行きます』

『丁度レースの半分くらいが経過しましたね。順番としてはブラックプロテウスが先頭に出た以外は動きがありません。レースが動くとしたら坂を越えたあたりでしょう。皆冷静にレース運びをしています』

向こう正面の直線に入った。少し後ろを見る。まだ近い。ジリジリと他のウマ娘たちが迫ってくる。

こちらを見てニヤリと不敵に笑っているウマ娘も居る。これは行けるとでも思っているのだろうか。

随分甘く見られたものだ。少しペースを落とそうかと思っただがもつともつと行こう。影すら踏ませないくらいにもつと前に。

『おおつとブラックプロテウス。少しペースを落としかと思いましたがここで更に前に出ていきます。まだまだ掛かっている。どうせならこのまま最後まで行ってほしいものです』

『流石の彼女でも最初から最後まで掛かったままということは……いえ、前例が一回ありますが、あれは1600mです。まあすでにその1600m地点は通り過ぎて坂に入っています』

観客席の方からどよめきが聞こえてくる気がするけどとりあえずはいい。もつともつと前に行こう。こうやって上つていくと淀の坂は結構きつい。でも下りの方が急なんだよね、淀の坂。もし左回りになったら今以上にハードなコースになるのだろうか？

下る前にもう一度後ろを見る。大分離れた。でもここからはスパートだ。ペースを落とすわけにはいかない。追い付かれてしまつては意味がない。

流石に少し疲れてきたけれど、坂を上り終えたらもう800mくらいしかない。これくらいならまだ、行けると思う。

『ブラックプロテウス坂の下りで何とスパートを掛けてきた！ 何処にそんなスタミナがあるのかブラックプロテウス！ まさに無尽のスタミナです！』

『後方のウマ娘もそれぞれ釣られてペースを上げていきます。現在二番手はデュオスヴェルだが、流石に坂で減速しましたね。三番手フリルドオレンジもここまでのようです。虎視眈々と狙いをつけていたギガントグレンデルが上がってきました。マイトリート、プライムシーズンも仕掛けているがはたして届くのか。もしブラックプロテウスが垂れてくるなら届くと思いますが……』

坂を下りきってそのままのスピードで第3、第4コーナーを回っていく。コーナーリングに関しては今更もう何も言うことはない。

少し疲れてはいるが、まだ走れる。最後の直線は確か400mくらいだったはずだ。それくらいなら多分逃げ切れる。

『最終コーナーを回って最初に駆け抜けてきたのはブラックプロテウス！ ギガントグレンデルが食らい付いていくが、差が縮まらない！ 速い速い、最早独走状態！ これはセーフティリード！』

『まさか3000mで最初から最後まで掛かってスタミナが切れないとは、素直に脱帽です。これが菊花賞ウマ娘、世界で最も3000mを速く駆け抜けることができるウマ娘ということでしょう』

残り200の標識を過ぎる。まだ脚は動く。もう後ろは見ない。これで追いつかれるのならば、それまでだし。

今の私にこれ以上のスピードを今出すことは出来ないし、少し脚が鈍ってきた。だからもう後ろは気にしない。気にしたところでどうしようもない。

『先頭は変わらずブラックプロテウス！ 約2秒出遅れたこのレース、だがこのウマ娘にはその出遅れもハンデキャップにしかならない！ 流石に少し垂れてきましたがもうゴールは目の前！ そして今大差でゴールイン！ 圧倒的！ 圧倒的！ 圧倒的な実力差を見せつけレースを制した！』

ゴール板を駆け抜ける。流石にこれ以上走るスタミナはあまり残っていない。すぐに減速して、立ち止まる。

掲示板に書かれているタイムを確認する。3:02.8。私のベストタイムには全然及ばない。2秒くらい出遅れたし、掛かって最後の方は結局少し垂れた。もしこれが菊花賞であつたなら、私はマヤさんに負けていただろう。

慢心していたわけではないが、少し集中力を欠いていたことは事実だ。観客の皆は今私に拍手を送ってくれているけれど、流石に恥ずかしいレースだった。

今更になって恥ずかしくなってきた。早々に退散しよう。ファンサービスもそこそこに、すぐに地下バ道に引っ込んでいくのだった。

「おかえり、ブラックプロテウス」

地下バ道に入つてすぐ、トレーナーさんが仁王立ちで待っていた。満面の笑顔だ。

「た、ただいま戻りました。それじゃ、ライブ衣装に着替えなといけないんで……」

その脇をすり抜けて通り抜けようとする私の肩をがっしりとトレーナーさんが掴む。変わらずに満面の笑みを浮かべている。

「その前に、テウス。お前、帰ったらゲート練習やり直しな。ゴルシと一緒に」

「何故え!？」

「言わなくてもわかるだろーが！ あんなに出遅れやがって！ 勝つたからいいものの、負けてたら笑いもんじゃないぞ！ この調子だと高松宮記念は見送りだな……」

そんな無慈悲な宣告が、私を待っていたのだった。

第五十話 イツプス

今日は2月の第4週の土曜日。東京レース場で行われるGⅢ、ダイヤモンドステークスの日だ。今日は俺の担当ウマ娘、ブラックプロテウスがこのレースに出走している。

今日はチームの皆でその応援に東京レース場まで来ているところだ。皆心配そうに、そのスタートを見守っている。

ダイヤモンドステークスは東京レース場で行われる3400mのレースだ。バックストレッチの中間から始まって、コースを一周半する。上り下りが多いコースで、何よりもスタミナが問われるレースだ。

2700mを超える超長距離レースは、テウスの独壇場だ。今まで彼女は、超長距離レースでは最終的に大差、他のウマ娘を全く相手にしないほどの強さを見せていた。

『あつと今日も出遅れましたブラックプロテウス！ 今日集団の中ごろからのレースになっています！ 完全に包囲されています！ これは苦しいか!』

——彼女が、本調子であったなら、今日のレースもそうなただらう。

彼女の『出遅れ癖』が始まったのは、今年の初め、万葉ステークスからだった。

そのレースでテウスは勝った。3000mのレースで出遅れた後、最初の1000mを過ぎるまでに大外から先頭まで一気に駆け抜け、その後もずっと掛かったまま残り2000mも走り抜いて大差勝ちを収めて見せた。

二回目は日経新春杯。多少マシンにはなったが出遅れて、先行のウマ娘たちの真ん中でレースを進める形になった。

完全に囲まれた形になったが、京都レース場外回りの最終コーナーを過ぎたところ、丁度内ラチがなくなるところで内に入り抜け出して先頭を奪い、そのまま加速し5バ身差をつけて勝ってみせた。

まるでスーパークリークの菊花賞の時のようだ、と周りには言われ

たが、複雑な気分だった。

三回目は川崎記念。この時の出遅れは最小で済んだ。2番手につけたホクトベガの真後ろをぴったりマークして、向こう正面で先頭に立った彼女を外から捲って、最終直線で再加速してきたホクトベガに競り合いを掛けられるも競り勝ち、1バ身と1/2差で勝利した。

そして四回目がこのレースだ。

一回や二回であれば、油断や慢心によるものだと言えるだろう。三回なら、まだそう言うこともあると言えるかもしれない。

だがこれで四回目、しかも連続して四回だ。何かしら故障が発生しているわけでもなく、ゲート練習ではたとえ隣でゴルシがバイオリンを弾き鳴らそうが出遅れずにスタート出来ていた。

それが、本番になる度に出遅れるようになってしまった。おそらくは、精神的な要因によるものだろう。

中央・地方全国指定交流競走G1、川崎記念ではあまり出遅れなかったあたり、押さえるところはきちんとして押さええている。

だが出遅れて先行や差しの位置になろうと、その戦法でも問題なく熟せている。おそらく、『ブラックプロテウス』というウマ娘本来が持つ脚質が先行・差しだからだ。強いて言うならばそれに加えて逃げもこなせる自在先行型、と言うべき脚質だろうか。

彼女が逃げを選んでいるのは、彼女自身の性格によるものだ。それが彼女の持つ高いスピード、それを維持しても走り切れるスタミナ、坂を苦にしないパワー、最後の最後で粘り強く競り合う根性。そして何よりもウマ娘の限界を超えた出力を出したとしても揺るがない耐久性。それが合わさって高い逃げ適性を出している。

勿論、コース取りだって悪くない。日経新春杯では冷静に抜け出していたし、変に掛かりさえしなければ問題ない水準だと言えるだろう。

それだけのものが揃っていれば、結果も伴う。それが無敗の三冠、そして秋シニア三冠という結果で表れている。そんな自慢の担当ウマ娘だ。

その担当ウマ娘が、今こうして苦しんでいる。レース中は表に出さ

ないが、終わってトレセン学園に帰った直後に何度も何度もゲート練習を繰り返している姿は、見ていて少し辛いほどだ。

『一周目のホームストレッチ、ブラックプロテウス、坂で外から抜け出した！ 坂で止まったと見えるくらい急減速したと思ったところを急加速、完全に囲われていましたが包囲を翻弄、抜け出して一気に先頭に踊り出ました！』

ホームストレッチの坂で、テウスが仕掛けた。押上、押圧、斜行したのであれば走行妨害を取られるだろう。だが、左右に動かずに減速した場合については取られない。垂れウマに引つかかっても走行妨害にはならないのと同じ理屈だ。

かなりダーティープレイではあるが、現状であればセーフだろう。もしかしたら今後ルール改正されるかもしれないが、現行のレースの規則に『レース中、急に減速してはならない』という規則は存在しないからだ。

まあ、全力で走つてるところにいきなりここまでの減速ができるウマ娘は居なかった、と言うことでもある。通常スピードに乗ったところで急に減速すると良くて転倒、最悪故障するからだ。

実際、後ろの娘たちはすわ転倒か、すわ故障かと全員が避けようとして体勢を少し崩していた程の急減速だった。ぶつからなかったのが奇跡とも言える。

ハンドルを切らずにブレーキとアクセルだけで包囲に穴をこじ開けて見せたテウスは妨害にならない範囲で外に出て加速、外から3人ほどぶち抜いて先頭に躍り出た。

抜け出してしまえば、そこからもうテウスのペースだった。今まで何度か戦ったウマ娘もこのダイヤモンドステークスには出走しているが、それでも実力差が開きすぎている。

外を走っているというのに内を走っていた逃げウマ娘のポライトサルートをコーナーで楽々抜かして先頭に立ち、その後もぐんぐんと引き離していく。

今回は掛かっているわけではない。ただ普通に走っているだけで、

それだけの差が開いていく。

後ろを走るウマ娘たちの焦燥と絶望が入り混じったような表情が、彼女たちの実力の開きをはつきりと表している。

「やあやあ、チームスピカのトレーナーくん。久しぶりだねえ」

バックストレッチに入り、後続とは既に10バ身以上離れたところを見て一息ついていると後ろから声を掛けられた。

振り返るとそこには栗毛のふわふわボブの髪、右耳に銀と水色のイヤリングを付けたウマ娘。本当に時折チームスピカの部室に現れてはテウスやスズカのデータを取って行くウマ娘、アグネスタキオンの姿があった。

「誰かと思えば、アグネスタキオンか。お前さんも来てたのか？」

「ちょうど実験も一段落して暇だったからねえ。スカーレット君に良ければ来てくれとも言われていたし」

そう言って嬉しそうに近寄ってくるスカーレットに微笑みを浮かべている。かなり気分屋なところがあるウマ娘だが、何故だかスカーレットにはとても甘い。それこそ彼女が飲む紅茶くらい激甘な対応だ。

「アグネスタキオンから見て、テウスの出遅れ癖はどう思う？」

彼女から見て今のテウスがどう映るのか。少し気になって聞いてみた。

「故障とかはなかったんだろう？ なら答えは一つだ。所謂『イップス』と呼ばれているものに近い症状だろうね。原因はおそらく万葉ステークスの出遅れからだろう。良いスタートを切らなければと思えば思う程上手く出来なくなる。本番でしかそれが出ないというのなら、観客が居ることによるプレッシャーによるものが大きいのだろう。そうだね、例えるならメジロドーベル君の症状と似たものといえればわかりやすいかな？」

既に原因に気付いていたのか、それとも今それを考えたのかはわからないが彼女からはすぐに返答が返ってきた。

イップス。スポーツ選手などに表れる症状の1つで、突然自分の思うような動きができなくなる症状だ。

場合によってはそれで引退に追い込まれることもあるくらい、スポーツ選手にとつては厄介な病になる。

「やっぱりそう言うことか……治療法は？」

「まずイップスを治そうという考えを改めた方がいい。イップスは『治す』のではなく、『克服』するものだ。自分を受け入れて、もう一度自信を取り戻す必要がある。それとあまりムキになってスタートの練習を繰り返すのは逆効果になる可能性が高い。練習方法を見直したり、環境をガラツと変えてみるのも良いかもしれないね。そういう点では川崎記念は悪くなかった。実際彼女は川崎記念では最小の出遅れで済んでいたんだろう？」

思ったより具体的な返答が返ってきた。こういった知識に関して、アグネスタキオンはトレーナー顔負けの知識を持っている。

「そうか……心の病つてのは厄介だな」

「おやトレーナー君。最近ではイップスは心の病ではなく脳の構造変化、同じ動作を過剰に繰り返すことによつて発症し得るという研究結果が出ているんだよ。実際、イップスを発症したアスリートはヒト、ウマ娘問わず特徴的な脳活動が見られるというレポートが上がっている。私は精神科医ではないから心の病なら協力できないが、肉体的なものであるならある程度私も協力できるだろう。次の出走予定は3月の金鯉賞だったかな？ 完治とまではいかななくても可能な限り手は尽くそうじゃないか」

「タキオンさんが診てくれるなら安心ですね！」

アグネスタキオンが協力をしてくれると言っていると、スカーレットが喜びの声を上げた。俺としても心強いが、後で何を求められるのか心配なところがある。

「それで、返礼はどうすればいい？」

「なあに、それほど無理難題な事は言わないさ。ほんの三つだけだ。まず一つは彼女、ブラックプロテウスについてのデータを君公認で詳しく取らせてほしい。彼女は受け入れてくれていたし、今までもたまたに取ってはいしたが、詳細データに関しては流石に君の許可なしで取るわけにはいかないからねえ。出来れば他の娘のデータも欲しいが、そ

れは都度相談ということだ」

まあそれは妥当な要求だろう。データがなくては流石のアグネスタキオンとはいえども対処のしようがない。頷くことで次を促す。

「二つ目は、彼女の治療によって得たデータに関して他の研究への利用許可だ。勿論プロテウス君の個人情報を守るが、得たデータによっては私の研究が進歩する可能性が大いにあるからね」

「俺は構わないが、それに関してはテウスが許可したらだな。テウスに関してのデータだ、テウスが許可しない限りは受け入れられない。まあアイツなら大丈夫だろうが」

テウスはそのところはあまり頓着しないタイプだ。自分のデータが役に立つなら、とか言って軽く許可しそうではある。

「そうだね、その点はプロテウス君を交えてもう一度話すでしょうか。最後の三つ目なんだが、私を君のチームに入れてくれ」

「それは……俺として願ってもないことだが。どういう風の吹き回しだ？」

「いやあ、模擬レースや授業をすっぱかしていたら生徒会長にお叱りを受けてしまってねえ。近日中に担当トレーナーを見つけるか何処かのチームに入らないと退学だと言われてしまったから、丁度いい所属先を探していたんだよ。君のチームなら好き放題やらせてもらえそうだし」

そう言いながらゴルシを見ている。隠れ蓑にしようということか？ どういう魂胆かはわからないが、答えは一つである。

「そのくらいでいいなら迷う必要はない。よろしく頼む、アグネスタキオン」

ゴルシとアグネスタキオンが合わさると何が起こるかわからないが、そんなことは些事だ。始末書なんて慣れている。

それに、よつぽどなことはしないだろう。何せ俺のチームには彼女を慕うスカレットが在籍している。

「タキオンさんがスピカに来てくれるんですか!? やったあ!」

「スカレット君には以前から誘われていたからねえ。いい機会だしお誘いに乗ることにしたよ」

そう言つて優しい眼差しでスカレットを眺めている。本当にスカレットには甘い娘だ。スカレットが困るような事態には何が起こつてもしないだろうという確信がある。

『ブラックプロテウス、大差で今ゴールイン！ 勝ち時計は3：28.5、レコード勝ちだ！ 24戦24勝無敗！ 連勝記録を更新し、次の舞台は金鯨賞。かつてサイレンスズカが見せた逃亡劇がもう一度、金鯨賞で見られるのか、今から楽しみです！』

そういう話しているうちにテウスが後続を15バ身くらい引き離して勝っていた。タイムは3：28.5だった。

余裕をもつて3000mを3分切つて走れる彼女にとつては少し遅いタイム。だがそれでも、後続は全くついていけない。本調子であれば後5秒は早いタイムでゴールしていた可能性すらある。

その証拠に、ゴールした後だというのにテウスの表情は少し厳しいものがあつた。自分の走りに不満があつたのか、耳を絞っているし、いつもの笑顔がない。

だが、観客から大きな拍手を送られるとすぐに表情が柔らかくなり、嬉しそうに手を振っている。

出遅れてなおこの結果だ。観客からすれば圧倒的なパフォーマンスだと思われているだろう。その証拠に、レース場は大盛り上がりを見せている。

まさに熱狂的、という言葉がピッタリなくらいで、歓声でレース場が揺れているように感じるくらいだ。ウマ娘には少し辛い音量だろう。ゴルシは平然としているし、キタサンブラックも大きな音には慣れているのかケロツとしているが、他のメンツは自分の耳を手で塞いでいるくらいだ。

何故かアグネスタキオンだけは自分の耳を塞がずにスカレットの耳を塞いでいるが、甘やかしすぎではなからうか？

「おっと、そろそろテウスのところに行かないとな。少し行ってくる。先にステージに行つてくれ」

スピカの面子に一言かけてから、地下バ道へ向かう。彼女自身は満

第五十一話 押し寄せるイベントの波

ダイヤモンドステークスが終わった一週間後の土曜日、いつもの練習を終えた後の夜にトレーナーさんに寮の前まで呼び出されていた。

なお、呼び出した当の本人はまだ来ていない。まあ、私が言われた時間より早く来ているせいなのだが。

やっぱり出遅れの件だろうか。スピカに電撃入部したタキオンさんに色々診て貰ったりして改善しようとはしたが、あまり成果は得られなかった。

ダイヤちゃんに協力してもらってVRウマレーターで、まだテスト段階の『メガドリムサポーター』というソフトを使ってレースを再現して、サポーターAIの補助の下色々なものを測定したが、特に異常は見当たらなかったらしく精神的な問題の可能性が高いとか、一度出遅れたことが変な癖になってしまっているかもしれないとか言われたが、自分ではよくわからない。

強いて言うならスタート時にかなり力が入っているようだとは言われたので、一先ずはフォームなどを確認しながら様子を見ようということにはなっていたのだが……

「おう、テウス。待たせたな、はいこれ」

「あ、トレーナーさん……って、何ですかこれ？」

そういつていきなり封筒を渡してくる。一体何だろう？

「秋シニア三冠の明細だ。渡すの忘れてたからな。既に振り込まれるから知ってるだろうけど」

「ああ……なるほど、忙しかったですもんね。それ以外にも何か入ってるみたいですけど……カラオケの優待券？」

中身を見て見ると明細の他に紙みたいのが入っている。優待券だ。多分学園の近くにあるカラオケのだったと思う。なんでここで優待券？

「おハナさんから貰った。明日はそれで遊んで来い。明日は基礎練習以外禁止にするから」

「ええ!? いきなりそんなこと言われても……」

「入部から今まで、入院したとき以外丸一日休みてなかったら？ 金鯨賞までは時間ももあるし、せっかくだから誰かと遊んで来い。クラスメイトとか」

言われてみればそうかもしれない。日用品を買うために放課後の練習を休みにしてもらったりはしたことがあるが、丸一日休みということにはなかったはずだ。たまには休みを入れてみるのもいいかもしれない。

「トレーニングじゃなくて一日中好きなところを走ってきたって良いし、カラオケじゃなくてもゲーセンとかに行っただって良い。明日一日は好きに過ごしてみろ」

「わかりました、ありがとうございます。そうすることにします」

トレーナーさんに一言お礼を言い、部屋に戻る。すっかり一人で占拠してしまってる部屋だが、来年度に新入生が入ってきたらその娘と相部屋になるかもとクリークさんが言っていた。誰が来るのか楽しみだ、沢山可愛がつてあげよう。

だけど、誰か来るといふなら流石に日本刀は片付けないと危ないかもしれない。少し対策しておこう。とりあえずは紐か何かで簡単には抜けないようにしないと。

いきなり降って湧いたような休みだ。クラスメイトと遊ぶのもいいんだけど、予定が合うかは微妙だ。

私のクラスメイトは去年メイクデビューしたか、今年メイクデビューを控えているかのどちらかが殆どになっている。

去年メイクデビューした娘は今年クラシックに挑むことになる。つまり3月にはそのクラシックのトライアルレースが控えている。当然暇なんてほとんどないだろう。

今年メイクデビューする娘だつて今は大事な時期だ。息抜きは必要だろうが、多分向こう数週間の予定は詰まっているだろう。

そう考えると前日にいきなり誘っても厳しいかもしれない。しかも今は夜22時くらいだ。寝ている娘が殆どだろう。

そうすると学園外の友達の方が予定が合うのかもしれないが、入学

前まで私に友達はほとんどいなかったもので掛ける相手が思い浮かばない。

暫く考えていると、スマホが鳴った。誰からだろうと画面を見て見ると、クラスメイトでもトレーナーさんでも、家族でもない名前がそこにあった。

「はい、ブラックプロテウスです、こんばんは、お姉さん」

「グッドイブニング、テウスちゃん！ 今お暇かしら〜？」

病院で一度一緒になったウマ娘のお姉さんだ。以前トレセン学園に通っていたらしく、そういった点では先輩になる。

今日もそうだがお姉さんと電話するとき、彼女は大体酔っぱらっている。三度のご飯よりお酒が好きらしく、今思い返せば前にもお医者さんに怒られているところを見た記憶があるくらいだ。

そんな大のお酒好きの彼女だが、お話はとても面白い。彼女が通っていたころのトレセン学園についてのお話とかも聞いたことがある。彼女自身は何とか一勝はしたそうだが、仲が良かった娘は入着すら出来なかったと聞かされた。

何だかその娘の事を話しているときはプロポーションが良すぎるとか少し愚痴っぽいことも聞かされたが、今でも時々飲みに行くくらいには仲が良いらしい。

「あ、そうだお姉さん。明日お暇ですか？ 良ければ一緒に遊びに行きませんか？」

「え？ いいの？ 私はオツケーだけど……あ、友達も呼んでいい？」

私がテウスちゃんと知り合いだって言っても信じてくれないんだよー」

「そのお友達が大丈夫なら私は全然構いませんよ？」

クラスメイトが都合が合わないなら学園外の友人と遊べばいいのではと思いきり折角だし遊びに誘ってみるとすぐにOKが貰えた。相手は成人しているウマ娘だし、トレーナーさんに一言言っておけば特に問題もないだろう。

学園の寮の前でお昼前に待ち合わせて、お昼ご飯を食べてから何処かに遊びに行こうと約束を取り付けて、電話を終わる。

思いがけない予定が入った。楽しみだ。トレーナーさんにメッセージを送るとすぐに許可が貰えた。というか学園の外に友人がいたのかと驚かれた。

失礼なことだ。確かに里帰りもしないし買い出し以外ではほぼ外出せずにとコースを駆けまわっていたりジムで汗を流していたりしているけども。

あれ？ そう思えば私、結構つまらないウマ娘なのでは？ 個人でインタビューを受けた時にプライベートなことを何回か聞かれたことがあるけれど微妙な顔をするばかりでその記者さんの会社からは同じ質問がされなくなっただけ、もしかしてそれが原因？

この話題について考えるのはよそう。考えれば考えるほど悲しくなりそう。明日着ていく洋服でも考えた方が生産的だ。

そんなことを考えつつ布団に丸まっていると、いつの間にか眠りについてた。

いつも通りの時間に目覚めた私はいつも通りトレーニングをしようとして着替え始めたところで今日は基礎練習以外を禁止されていることを思い出した。

ストレッチとか軽い筋トレくらいならしてもいいだろうけど、いつものようにコースに出たと思ったら怒られそう。

それに、お昼前には人に会う約束をしているのに今から思いっきり運動して汗をかくのも憚られる。軽い柔軟程度にしておこう。

小さいころからおじいちゃんに柔軟運動だけは欠かすなど言われていたので、私は結構身体が柔らかい。具体的には胸が床にべったりつくくらいに開脚前屈が出来る。何でも身体が柔らかいと怪我をしにくくなるんだそう。後肩こりもしにくいかどうか……

その辺りの事はよくわからないが、身体が柔らかいに越したことはないだろう。ライスさんとかガッチガチでびっくりしたほど。あれだけ身体が固くてよく長い間走っていられたと思う。

ただ、その身体の固さがもたらした結果が宝塚記念での悲劇だった

のかもしれない。最近ライスさんは自分で歩けるようになったから、リハビリと柔軟を手伝っている。

リハビリより柔軟の方がきつそうにしているけれど、心を鬼にしてライスさんがもう無理というところから二段階くらいまで柔軟させている。トレーナーさんも止めないし問題はないだろう。

今日は私の代わりにテイオーさんがリハビリを見てくれる約束になっているので、それはもうスパルタなりハビリになるだろう。テイオーさん自身怪我で苦しんだウマ娘だが、その度に地獄のリハビリを何度も乗り越えている。他のウマ娘に比べて限界の見極めに優れている。なので私以上に追い込んでくれることだろう。

そんなことを考えながら柔軟をしているとスマホのアラームが鳴った。朝食の時間のアラームだ。外出用に前日に用意しておいた服に着替えてから部屋を出て食堂へ向かう。

生活習慣をきちんとするために今年に入ってから管理をし始めた。いつもはどんなに遅く寝ても日付が変わる前、遅く起きても5時くらいに目が覚めていたけれど、それだと今後支障が出てくる可能性があるため、少しずつ生活習慣を見直している。

ステイヤーにとつての最高の栄誉。それは日本のウマ娘なら春の天皇賞だろう。勿論それにも出る。

だけれど、世界のステイヤーにとつての最高の栄誉はイギリス、アスコットゴールドカップ。同じくイギリス、グッドウッドカップ。そしてフランス、パリロンシャンレース場のカドラン賞の三つだろう。

イギリスで行われる二つにGⅡのドンカスターカップを加えた三つは英国長距離三冠と言われ、200年以上もの歴史を持つ非常に重要で価値の高いレースだ。この4つのレースに、私は出たい。いくつか前哨戦なども走って向こうの芝に慣らしておきたいところでもあるし、天皇賞が終わってから暫く海外遠征を予定している。

ただ、イギリスとは8時間、フランスとは7時間ほどの時差がある。分かりやすく言うと、例えば凱旋門賞が行われる時間は日本の時間では大体23時になる位の時差だ。

完全に真夜中だ。一応そのままの生活習慣でも起きていられる時

間だが、そのままの生活習慣を続けてしまうと色々支障が起きてしまう。スクーリングどころか練習すらままならないことになってしまいうからだ。流石に時差ボケでレースになりませんでしたでは恥ずかしくない。

言語の壁については通訳さんを雇うつもりでいるからあまり問題にはならないと思う。コースに出た後は通訳さんには頼れないが、コース上ではそんなに会話することもないだろう。挨拶位は覚えるが、それ以上に関しては通訳さんを頼るつもりだ。

通訳のアテは既につけてあるというかトレーナーさんが探してくれていたので問題ない。スズカさんが一時期頼んでいた人らしい。英語はこれで大丈夫だろう。フランス語に関してはその時また考えればいい。

問題があるとすれば、凱旋門賞に出てほしいという事をファンレターなどで言われていることだろう。凱旋門賞とカドラン賞は同じ週に行われる。つまりどちらか一方にしか出走できない。

日本のウマ娘にとって、悲願とも言われる凱旋門賞。世界一に相応しいウマ娘だけが挑戦できる、世界最高峰の舞台だ。当然、関心も非常に高いと言える。

今まで欧州で鍛えられたウマ娘しか勝ちあがったことがない、世界の頂。今トレセン学園では、その頂に挑戦するというプロジェクトが立ち上がっている。本当は来年か再来年に挑戦する予定だったそのプロジェクトだが、今年私が海外挑戦をする予定だと何処からか聞きつけたのかそのプロジェクトの責任者、佐岳メイさんから声を掛けられた。

その時は凱旋門賞ではなくカドラン賞に挑むつもりだと報告した。その場はそれで終わったが、それから佐岳さんとは連絡を取り合っている。彼女は欧州レース分析を専門とするURRの学園強化部門に所属している方で、今後大変お世話になりそうな方だから、交流は結構密にしている。

理事長位小さいので勘違いしてしまいそうだが、結構な年上みたいだ。世の中には不思議なことが一杯ある。一体理事長と言い佐岳さ

んという何歳なんだろうか……

そういえば理事長は理事長で何やら新しいレースとかチームレースがどうか言っていた。私としては昔あったという日本最長距離ステークスのようなレースだと滾るものがあるのだが……後チームレースだとスピカは短距離とダートを走れるウマ娘が私くらいしかいないから少し困る事になりそうだ。スズカさんが芝の短距離なら何とか、位のレベルだろうか？

「……うわっ!？」

そんなことを考えながら歩いていると誰かにぶつかってしまった。バランスを崩しそうになるが何とかこらえる。

「テウスちゃん？ 前を見て歩かないと危ないですよ？」

「あ、クリークさん。おはようございます」

寮長の代理を務めているスーパークリークさんだった今日は割烹着を着ている。何か作っていたのだろうか？

「今日の寮の朝ご飯は私が作ったんですよ。こちらで食べていきますか？」

「そうですね、そうします。いつもありがとうございます」

「いいんですよ、私が好きでやっていることですから♪」

クリークさんが栗東寮を取り仕切るようになってから彼女の手が空いているとき寮の全員分の朝食や夕食を作るようになった。寮長にはその寮を管理する一切の権限が与えられている為そういったことができるらしい。寮で食べない娘も居るから作る量は少なくて済むらしいが、大変そうなので見かけたら手伝うことにしている。

グラスさんに美浦寮はどうなのか聞いてみたら時折ヒシアマゾンさんがお弁当を作ったりしているらしいのでまあ良くあることなんだろう。今思えばフジキセキさんも相当面倒見が良いウマ娘だし。

クリークさんによって栗東寮のウマ娘の生活習慣は改善されたと言っている。特にタキオンさんは一日三食きっちり食べさせられて強制的に健康にさせられていたし、ファインモーション殿下にはラーメンは一日一食までの制限令が課されていた。

何故かクリークさんに言われると誰も逆らえない。私はよく餌付

けされているくらいだ。

「そういえば、今日テウスちゃんはおめかしさんですね。おでかけですか?」

いつもは食堂に来るときはジャージか制服か、動きやすいスポーツウエアのどれかなのだが、今日の服装は違う。

お出かけするということとでちよつとだけおめかしした。無難にスウェットにデニムを合わせているだけだが。外に出るときはこれにコートを羽織っていくつもりだ。

動きにくいからデニムは普段は着ないけれど、一応私も女の子なのでいくつかは持っている。

まあ、全部スカーレットさんが薦めてくれたものなんだけど。多分スカーレットさんが居なければ私のクローゼットの中身は制服と体操服とスポーツウエアで埋め尽くされていただろう。

「はい。もう少ししたら学園OGの方とお出かけするんです。外出許可をいただけますか?」

「いいですよ。門限までには帰ってきてくださいね」

一応休日だし門限までには帰ってくる予定なので厳密に言えば外出許可は要らないのだが、外に出るときは一応連絡するようにしている。

何かトラブルがあった時の為にそういった連絡はしておいた方がいい。最近は車に撥ねられたりはしていないが、油断している時ほど変なトラブルを拾ってくるので気を引き締めている。これ以上トレーナーさんに心労をかけて彼を消化器内科に通わせることにはならない。

「ところで、お出かけはお昼からなので、何かお手伝いできることがあればお手伝いしますよ?」

「あらあら、ならお言葉に甘えさせてもらいますね。お洗濯ものを干して貰えますか?」

「わかりました、任せてください」

少し時間が空いたのでお手伝いを請け負うことにして、待ち合わせまでの時間をつぶすことにしたのだった。

洗濯したのち、お掃除やら何やらを手伝っていたら待ち合わせの30分前くらいになっていた。少し早いのだが、そろそろ寮の外に出ておくことにする。

待ち合わせ場所は寮の前だ。タクシーで迎えに来てくれるらしい。車を出したかったらしいが、昨日深酒をしていたらしく断念したようだ。賢明な判断だと思う。

お手伝いのご褒美にとクリークさんに貰った手編みのニット帽とサンングラスを装着して待つことにする。2月の下旬というとても寒い時期だったので、ニット帽はともありがたい。耳が少し寒いですが、トレーナーさんに貰った耳カバーをつけておけばそれも大分マシになる。

サンングラスは単純に変装したほうがいいからと渡された。私は外見的には普通の黒鹿毛ウマ娘で、あまり特徴がない髪色だし変装はサンングラスだけでも問題なさそうだ。

「あれ？　そこにいらっしやるのはブラックプロテウスさんですか？　こんにちは！」

「あ、乙名史さん。こんにちは」

問題ないと思ったが、丁度通りがかかったいつも通りのスーツを着た乙名史さんに速攻でバレた。乙名史さんが相手では相手が悪いが。

「というか今日は日曜日なのだが、スーツを着ているということは仕事だったのだろうか？　記者さんって結構ブラックな仕事なのかな？」

「この格好ですか？　それが今日取材の予定だったのですが、先方の都合で延期になってしまいました。会社に連絡したら今日は休日出勤でしたし今日はそのまま直帰でいいとのことだったので帰宅途中なんです」

「ああ、そうだったんですね。お疲れ様です」

「まだお昼前だが帰れるのか。今日休日出勤だったらいいが、思った

よりホワイトなのかもしれない。いや、休日出勤自体がブラックなのかな？ よくわからなくなってきたので考えないことにしよう。

「ところでこんなところでどうされたんですか？ 私服のようですが今日はトレーニングはお休みで？」

「はい。トレーナーさんに気分転換してこいと言われたので、知り合いと少しお出かけする予定です。何処に行くかはまだ決めてないんですけど。とりあえずご飯食べてから決めようって」

「なるほど、しっかりと休息を取ることも重要なこと、と。素晴らしいです」

うんうんと頷いている。今日はもう休みになったからかいつもよりはテンションが低い。仕事中の乙名史さんのテンションはそれはもうヤバい。インタビューが進むにつれ青天井でテンションが上がって行くので慣れるまでは大変だった。

仕事の時の方がテンションが高いのはどうなんだろう。所謂ワーカーズ・ハイの一種なんだろうか？ まさに天職というべきものなんだろうなとは思うけど……

「おや、お迎えが来たようですね」

話し込んでいると私たちの前に一台のタクシーが停まった。どうやら二人ほどウマ娘が乗っているようだ。

揃って降りてきたが、ちよつと対照的な雰囲気の2人だ。一人は多分160cmないくらいで、柔らかい雰囲気グラマラスなふわふわ鹿毛のウマ娘。もう一人は170cmくらいはありそうで、目つきが鋭く、かなりすらつとした、それこそモデルかと思間違うくらいのスタイルの鹿毛のウマ娘だ。

一人は見覚えがある。背の高いウマ娘の方が以前病室で出会ったお姉さんだ。だとするともう一人のウマ娘が彼女の言っていた知り合いだろうか。当然、見覚えはない。

「はい、お待たせテウスちゃん！ って、あれ、えっちゃん？ 大学以来ね、久しぶり！ 今日はどうしたのよ？」

「あ、リーチェ。お久しぶり。偶然ブラックプロテウスさんと出会ってね、ちよつとお話ししてたの」

お姉さんが話しかけてきたと思つたら、乙名史さんと気安く話し始めた。乙名史記者の方もいつもの丁寧な口調から大分砕けた話し方になっている。本当に友人同士だったようだ。世の中は狭いものである。

ちなみにリーチエとはお姉さんの名前だ。確かインペラトリーチエという名前だったと思う。私はお姉さんと呼んでいるし、お姉さんもそれでいいと言っているのであまり呼んだことはないけど、一応覚えてはいる。

「あ、そうだ。テウスちゃんに私の連れ紹介しないとね。トレセン学園時代からの友達で、ライトハローって娘なんだけど」

「ライトハローです。ブラックプロテウスさんのご活躍はかねがね伺っております。お会いできて光栄です」

お姉さんが知り合いのウマ娘を紹介してくれた。大人らしくかなり丁寧な挨拶をされた。かなりやり手の人物な気がする。ふわふわな雰囲気な騙されてはいけなさそうだ。

「はじめまして、ブラックプロテウスです。その、年上の人にあまり畏まられると緊張しちゃうので、出来れば気安く接していただけると」
「わかりました、今後はそうしますね。よろしくお願いします。それにしても、リーチエが本当にブラックプロテウスさんと知り合いだったなんて……」

「だからずっとそう言ってたじゃないのよ。信じなかったのは貴女だよ?」

お姉さんがドヤ顔している。まあ、知り合いは知り合いだけど……
「出会った場所は病院ですけどね。それ以前にも院長先生に怒られるところは見た覚えがありますけど」

「リーチエは成人してからずっとこうなんだもんなあ……」
「お酒は私の命より大事なものだから止められないよ」

お姉さんにとっては欠かせないものなんだろう。おじいちゃんも毎日とても苦い青汁みたいな物を好んで飲んでいたし、テイオーさんもほぼ毎日ちみーを飲んでるみたいだし、それと一緒に考えればまあ……

「今日はこの三人でお出かけのつもりだったけど、えっちゃん、よかつたら一緒に来ない？ テウスちゃんもよかつたらだけど」

「私はこの後予定もないし構わないけど……」

「私もいいですよ？」

お姉さんの提案で乙名史さんも含めた4人でお出かけすることにした。3人も大人がいればトレーナーさんも安心だろうし、滅多なこととは起こらないだろう。

安心してタクシーに乗り込み、とりあえず昼食を済ませるためにファミレスに向かうのだった。

大人3人も居れば滅多なことは起こらないと思っていた時期が、私にもありました。

「あははは！ 調子出てきたわ！ デュエットするわよ、ハロー！」

「はぁ、うたいまくす！」

目の前で酔っぱらい、絡み合う二人のウマ娘を見て、どうしてこうなったと思いつ返す。

最初はもう平和なものだった。ファミレスで軽く昼食を済ませた後、4人でウィンドウショッピングを楽しんでいた。

3人は流石に大人で、あんまりファッションに興味がない私に色々お洋服を勧めてくれたりコスメを選んでくれたりとても楽しい時間を過ごせたと思う。

その後カラオケに入ったのもまあ、普通の流れだろう。お姉さんもライトハローさんも乙名史さんもカラオケは好きだって言ってたし、折角優待券もあるのでということでの流れになるのは普通の事だと思う。

ただ、普段なら夜からのアルコールフリードリンクがキャンペーンか何かで15時スタートになっていたのが問題だった。

当然私は飲まないけれど、大人3人は別だ。乙名史さんは『私が飲むと收拾がつかなくなるので遠慮しておきます』とか言っていたけれど、その原因がよくわかった。

ライトハローさんは3杯くらいでもう呂律が回っていなかったし、お姉さんはかなりお酒には強いようだが圧倒的な酒量の前ではそれも無意味だった。

それがこの目の前の惨状である。いや、でもマシな方だとは思う。私に飲ませようとは一切しないし、万一にも私の方にアルコール入りの飲料が混ざらないようにしてくれているあたり、ちゃんと分別はある。

「あなたの何処がライトなんよー！ 中身も外見もヘビーでしょー！ 少し分けるこらあー！」

「名前とそれは関係ないですよおー、変なところ触らないでくださいっ！ あなただつてインペラトリーイタリア語で女帝チエなんて名前負けしてるじゃないですかあ〜」

ただ、酔っ払い同士の絡みはもう酷い。お姉さんがライトハローさんの後ろに回り込んだかと思えば胸を鷲掴みしてるのが今の現状だ。ちよつと目のやり場に困る。

「貴女69とか言ってますけどそれ現役時ですよね〜？ 引退してから身長伸びてるんですし今測れば多少は増えてると思うんですけどお〜」

「69が少し増えたところで90超えてるアンタやテウスちゃんに比べれば誤差よ誤差〜。えっちゃんも大きい方だし肩身せまいわ〜」

「全然気にしてない娘が何言ってるんだか……」
「あはは……」

全方位に絡みに行くお姉さんに烏龍茶をちびちび飲んでる乙名史さんがツツコミを入れている。私も苦笑いしかできない。

私のプロフィールに関しては身長は常に公開しているがスリーサイズに関しては一度だけ、それもジュニア級の時にとある雑誌で公開されてしまったことがあるが、まあその時よりちよつとだけサイズが上がっている。さつきお洋服を選んでもらっているときに測って貰ったからこの3人にはバレているだろう。身長は伸びてないんだけど。

体格が大きくなるのはレースにおいてはメリットとデメリットが

あるから何とも言えないが、もう少し身長は欲しい。お姉さんは引退してから伸びたらいいし、まだワンチャンあるかもしれない。今度誰かに相談してみよう。

「飲み物もらってきますねえ〜」

「お願いねハローちゃん。あ、テウスちゃん、そういえば最近走り方変えたの〜？ 最近はあんまり逃げてないみたいだけど」

ライトハローさんがグラスを2つ持ってルームの外に出ていく。酔ってはいるが足元はしっかりしているので多分大丈夫だろう。

それよりも、絡む相手がいなくなってお姉さんの矛先がこちらに向いてしまった。物理的に絡んでくるわけではないんだけど、ちよつと難しい話題だ。

「実はスタートが上手くいかなくなっちゃって。色々調べて貰って、スタートの時に力が入っちゃってしまっているとは言われたんですが、自分ではよくわからなくて」

でも、彼女は以前中央で走っていた先輩だ。もしかすると今の私の不調に対して何か助言を貰えるかもしれない。

「あー、なんかアドバイスできればよかったですけど、私スタート苦手だし、出遅れなかったときの方が少ないくらいだったんだよ。そんな私としてはもつと気楽に走ればいいんじゃないかなって思うけどね。えつちゃんからはなにかない？」

「私も一時期陸上をやっていましたが、ウマ娘のスタートと人間の陸上のスタートは少し違うので……やはりスタート時にどれだけリラクセスできるかによるのではないのでしょうか。言うは易くして、行方は難しことですが」

「ありがとうございます。そんな簡単には解決しませんよね。色々考えてみることにします」

貰ったアドバイスを考えつつにんじんジュースを飲む。にんじんのおいしさが脳に染み渡るなあ……

「ただいま〜。あれ、何のお話ですか〜？ 次歌う曲ですか〜？」

「そういえばまだ入れてなかったよ。そうだね次は……トレセン音頭でいい？」

「アレも入ってるんですかこー」

よく秋のファン感謝祭、別名聖蹄祭で踊られる音頭だ。ハイテンポな曲で本当に息が苦しくなる。本当に酸素を持ってこいと言いたくなるくらいだ。

「じゃあ4人でやろ。いきますよー」

ライトハローさんがニコニコしながら機械に打ち込み。曲が始まる。今更参加しないとは言えないのでみんなでマイクを持って立ち上がって歌う体勢に入る。

「あーつかれたー。もうむりー」

「やっぱり歌って踊るのは楽しいですねー。私はずっと着外だったからライブの経験はありませんが、ライブは好きなんです。そういえば今度ライブの企画を考えてるんですよ。まだ本当に企画を始めたばかりのところなんですけど」

「へえ、ライトハローさんもイベントを考えているんですか。私たちメディアの方もレースのイベントを考えているので、ご一緒出来ればいいかもしれませんね。少し詳しくお話を伺っても?」

お姉さんが机に突っ伏して休み始めたかと思うと、ライトハローさんは乙名史さんと何かお仕事の話始めた。今のうちに飲み物でも取ってこよう。

カラオケルームを出てドリンクバーのところへ向かう。何となくコーヒーが飲みたくなったのでホットコーヒーにする。砂糖とミルクは……2つずつくらいでいいか。ブラックでも飲めなくはないがちよつと糖分が欲しい気分だ。

ついでにお姉さん用にお茶を持って行ってあげよう。冷たいお茶を飲めば少しは落ち着くだろうし。

「よーし、お姉さんふつかーっ! というわけでテウスちゃん!

戻ってきてそうそうだけどデュエットするわよー!」

「えっ、私ですか? 最近の曲はあんまり知らなくて……」

「頑張ってテウスちゃん!」

「実際お金を払っても見れない貴重な体験ですよ、オフレコなのが

残念なくらいです」

戻ってきて早々にお姉さんに肩を組まれてマイクを持たされる。両手に持っていた飲み物は乙名史さんが持つてくれた。ちなみにライトハローさんはタンバリンを持って応援してくれている。

「せっかくだからウイニングライブのメドレーやろうよ!」

「じゃあ私が入れていっちゃいますねえ!」

そんな感じに、酔っ払いウマ娘二人に振り回されながら、余暇の間は過ぎていくのだった。

ちなみに酔っ払いウマ娘二人は最終的にぐでんぐでんになるまで飲んでしまったので、乙名史さんが両肩で支えて帰って行った。見た目によらずパワフルな人だった。

そして時は過ぎて、金鯉賞当日。結局出遅れの問題は解決しなかった。不安は残るが、大阪杯の前哨戦として、そしてスズカさんも走ったレースだということ而走ることにした。

今はパドックでお披露目しているところだ。観客の人たちは沢山いる。これだけの人数が見ていてくれると考えると、恥ずかしい走りは出来ないと思ってしまう。

今日は8枠15番の大外枠だったので、お披露目は一番最後だった。少し小雨が降っているパドックから帰ってくると、出入口のあたりで一人の葦毛ウマ娘と出会った。

「久しぶり、テウス。どう最近?」

「こんにちは、マンボさん。最近はまだ……ぼちぼちですかね?」

私のライバル、リボンマンボさんだ。主戦場をマイルにした彼女だが、安田記念までは少し時間がある。多分大阪杯に出る計画だったのだろう。前哨戦のこのレースにも出て来ている。ちなみに今日彼女は1枠2番だ。

「ま、少し調子悪いのはレース見てればわかるけどね。出遅れても勝っちゃうのは反則だと思うけど。それに阪神大賞典じゃなくて金鯉賞に出てくるとは思わなかったわ」

「マンボさんこそ中山記念じゃなくてこつちに出てきたんですね。マイルに移ったとばかり思っていたんですけど……あ、阪神大賞典も出ますよ?」

「もともと私はミドルディスタンスの方が得意だしね。ステイヤーの貴女が金鯱賞走ってるのとあんまり変わらないわよ。それに阪神大賞典走るのはもうわかりきってるわ」

肩をすくめられた。言われてみれば確かにそうかもしれない。来週の阪神大賞典も走るつもりだが、正直人のことを言える立場じゃない。

「あはは……まあ、大丈夫です。応援してくれる皆さんに恥じないよ
うな走りはしますよ」

「……貴女、ちよつといい?」

話しているとマンボさんが近寄ってくる。というか壁際に追い詰
められて壁ドンされた。

「え、えーつと……?」

「貴女、いつからそんなつまらない事考えて走るようになったわけ?」

マンボさんに言われた言葉がよくわからない。ファンの人に感謝
して走っているのは最初のころから変わっていないと思うのだが
……

「別に貴女が夢を持ったことは良い事だと思うわ。目的があつてその
為に走ることも否定はしない。でも貴女は誰かに恥ずかしくないよ
うな走りをするとか、そんな事はどうでもよかつたでしょ? 楽しく
走りたい。ただそれだけを考えて走つてたでしょ、貴女は。その時の
貴女は強かつたし格好良かつたわ。他の誰よりもね」

マンボさんに言われて考えこむ。そういえば、今年に入ってから楽
しく走ろうとあまり思っていなかったかもしれない。走りたくて
走ったのは確かだが、楽しさより責任感の方が大きかつた気がする。
「余計なこと考えて勝てると思ってるなら、今日その考えに風穴開け
てあげるわ。覚悟しておきなさい」

彼女の眼に、青い炎が宿っているように見えた。初めて今日、私は
対戦相手が怖いと感じたかもしれない。

彼女はそのまま私に背を向けて、ゆっくりと去っていく。私はそれをただ黙って見つめていた。

第五十二話 金鯨賞

『小雨が降る中、中京芝2000左回り金鯨賞、今スタートしました！
大外ブラックプロテウス、少し出遅れたか？』

『最近あまりスタートが上手く行っていないように見えますね。それでも問題無くレース運びができる器用さがあるので、あまり心配はないでしょう』

レースが始まった。私は内枠、彼女は外枠。逃げの彼女にとって外枠は不利。けれど、囲まれにくいということは彼女にとってはとても有利に働く。

『ブラボーアールとエクセレンシーがいいスタート、少し広がりながら前に出ます。ブラックプロテウス、無理に前には出ずに3番目の位置をキープしている。その後ろにぴったりとリボンマンボ。その後ろはウマ娘が入り乱れ混戦状態。今日は第1、第2コーナーの内側が禿げ上がるほど荒れています、全体的に広がった印象ですね』

『後方のウマ娘たちもじりじり広がって、ブラックプロテウスを中心に広がっているような態勢です。まだ外は空いています、コース取りを間違えるとすぐに囲まれてしまいそうですね』

彼女のいるレースは、良くも悪くも彼女を中心にして展開される。スタートが上手く行けば先頭で全体をハイペースに引きずり込み、上手く行かなくても彼女を前に出さないための位置取りを強制させられる。

それでいて急な加減速だけで簡単に振り切ってしまうのだから、彼女の走りは反則だ。スタミナで磨り潰すのも、パワーで振り切るのもどっちもどっちだが、前者になると彼女に勝てるウマ娘は存在しないだろう。

だから当然、皆彼女を囲って彼女に自分のレースをさせようとする。長距離のレースであればいざれ隙が出来てしまうが、2000mくらいであれば囲い切れる可能性は十分にある。

けれど、多分今日も上手く行かないだろう。どんな方法を使うかは

想像が出来ないが、どんな無茶をしたって驚かない。10mくらいならワープできそうだし。

なので、私は気にせずに彼女の後ろをびったりマークし続ける。私はそんな器用なウマ娘じゃないから、彼女を揺さぶるなんて出来やしない。

『先頭のウマ娘が第1コーナーに差し掛かります。今日の中京は小雨が降ってはいませんが良バ場発表。しかし第1、第2コーナーのあたりは芝が剥げるほどに荒れに荒れています。ですが、内側ブラボーアーは気にせず内を突き進み、エクセレンシーは壁を作るようにその隣を走っています』

『内側を明け渡してしまえばこれ幸いとブラックプロテウスが抜け出してくるでしょうからね。どれだけ荒れていようと走らざるを得ないというところでしよう。5番手あたりにはいたルンバステップがブラックプロテウスの外側に出て大回りするのを封じていますが、はたして彼女自身のスタミナは大丈夫でしょうか？』

まだ序盤だが、包囲網が完成されつつある。けれど、多分最後までは持たない。皆余計な気を遣って、無理している感じがある。

それに引き換え、彼女はいつも通りだ。スタート前は少し緊張していたみたいだけれど、走り出すとそんな素振りは一切見せない。多分だけど、走ってるうちに楽しくなってきたこと気にならなくなっているのだろう。

『ウマ娘たちが第2コーナーを回って向こう正面、残り1000mの標識を通過。通過タイムは58.7！スローペースになりやすい中京芝2000にしてはかなりのハイペースで進んでいます。先頭は相変わらずブラボーアーとエクセレンシーが横並び。だが、少しペースが落ちてきたか。ブラックプロテウス、その後ろで虎視眈々と前を狙っている。その外ルンバステップが4番手まで上がってきた。2番人気リボンマンボはブラックプロテウスの後ろをびったりとマーク。その後ろクラースナヤ。少し離れてサラサーテオペラ。逃げも出来ませんが今日は差しの位置で先頭を窺っています』

かなりペースが早い。彼女が居るレースではよくあることだが、ハ

ナを切っていないにもかかわらずかなりのハイペースだ。

周りの娘たちはかなりきつそうな感じがする。彼女は……多分、いつも通り。

彼女と沢山走ってきて、いくつかわかってくることがある。

まず彼女は、何よりも走ることが好きなウマ娘だ。好きが高じてここまでの強さを出せるのは、それだけ彼女が努力しているから。

そして、その努力を支えるのは、彼女の尋常ではない程の耐久性だ。耐久性が高いから、誰よりも強度の高いトレーニングが出来る。

耐久性が高いから、同じくらいのスタミナを持つウマ娘よりも長く走れる。

耐久性が高いから、どれだけ身体に負担が掛かろうが問題無く走り続けられる。

私もスピードには少し自信があるが、全力が出せる距離には制限がある。当然だ。生き物は常にフルパワーを出せるように作られていない。

身体が出来上がっていないから、脚に不安があるから、身体が全力に耐えられないから。様々な理由で出せる力が制限されるのは普通の事だ。

だが、彼女にはそれがない。だから、彼女は強いのだ。羨ましくないとさえ言えば嘘になるが、決して口には出せない。身体が負担に耐えられると言っても、全力を出せば疲れるし、身体に負担を掛ければ痛みが走るものだ。

普通のウマ娘では壊れてしまうくらいの出力を出したとしても、彼女は耐えられてしまう。全力で強く踏みこめば、反動でどこかしらは痛むはず。日本の硬い芝なら尚の事。私だって、全力を出せば結構な反動が来る。

正直、尊敬する。私は有《font:ul40》馬《font》記念の時、脚が痛んで脚を緩めてしまったから。痛みに耐えて最後まで全力を振り絞れる根性を彼女は備えている。だから、彼女は強いのだ。

『向こう正面を回って各ウマ娘が第3コーナーに差し掛かります。な

だらかな下り坂を進みながらスパイラルカーブへ突っ込んでいく！
最前方逃げ二人は明らかに苦しそうだ！ おっと、ここでルンバス
テップも失速！ 抑えに行ったルンバステップ、スタミナが持たな
かったか！ これ幸いと外からブラックプロテウスが差しに行った
！ あつという間に先頭に並びスリーワイドで第4コーナーへ！
だが真後ろにはぴったりリボンマンボがくつついている！』

スパイラルカーブ、入口は緩く、出口はキツイカーブ。基本的にバ
ラけやすいコーナーだ。そんなコーナーで周りを抑えようとすれば、
当然普段よりスタミナを使う。何だかんだでハイペースになつてい
た為か、私の前に居た彼女以外のウマ娘はあきららかにスタミナが尽き
ている。後は根性がどこまで続くか、と言ったところだろうけれど、
スタミナが残っていないウマ娘が楽に勝てるような甘いレースじゃ
ない。

最終直線は距離412.5m、高低差3.5m。中央の芝レースレ
イアウトの中で4番目に長く、3番目に高低差が大きい。高低差2m
くらいのキツイ坂を上り切っても緩い坂が240mくらい続く。坂
を上ってもスタミナが残ることもあるが、それでもキツイものはキツ
イ。中山や阪神よりはマシだけど。

でも、仕掛けるなら——此処しかない。急坂を上りながら加速。正
直どの程度身体に負担がかかるかわからない。トレーナーからは残
り240の緩い坂からと言われていたが、多分そこからじゃ間に合わ
ない。

『さあ、最後の直線に入り満を持して先頭に立つのはブラックプロテ
ウス！ だがそのすぐ後ろ、リボンマンボがここで外から差しに行く
！ 他のウマ娘は追ってこない！ 最後はこの二人の一騎討ちだ！』
残り、400と少し。私たちウマ娘にとっては、たった30秒にも
満たないくらいの距離。

それでも、私も彼女も、この30秒に全てを注ぎ込む。だって、私
たちはウマ娘だから。

強い相手が隣を走っていて、加減なんて——出来るわけがない！

『二人のウマ娘が横に並んで坂を上る！ 速い、速い！ 二人とも前

半のハイペースが嘘のような凄まじい末脚だ！ 信じられない、何処にそんな余力が残っていたのか！ まるで短距離戦のようなスピードで駆け抜けていきます！』

脚が重い、身体が軋む、息なんてとうに切れてる。私は頑丈なウマ娘ではないから、1600くらいハイペースで進んだ後に全力のスパートは、正直とてもつらい。

でも、それでも、譲れない。今日だけは、絶対に。

『熾烈なデッドヒート！ 坂を駆け上りながらここからもまだ伸びる！ 急坂を登り切れば残りの勾配は緩やかになります。そこからが意地の見せ所だ！』

さらに脚に力を込める。周りの景色が変わっていく。これは彼女の世界。音も光もなく、ただ走る感覚だけを味わう、静かな彼女のためだけの世界。

そんな世界を走る彼女の隣を、私は飛んでいく。誰よりも高く、誰よりも速く飛ぶことが出来る、白い蠟細工の翼。ダービーの時から私に許された、私だけの翼。

この翼ならまだ、スピードは上がる。有《font:ul40》馬《font》の時で分かったけれど、最高速度は私やマヤノトップガンの方が速い。それを維持できる時間は圧倒的に負けているけれど、瞬間的になら彼女を超えられる。

それが1秒にも満たない時間なのか、十数秒持つのかは正直わからない。

マヤノトップガンは300m位なら持つと思うと言っていたし、トレーナーも同じ意見だった。

そこから100m位の延長。どうなるかは正直わからない。中山よりは楽な最終直線だから、持つ算段の方が高いと思うが、後は今までやってきたことを信じるしかない。

『坂を上りきって今残り200の標識を通過します！ 未だ横並び！ 王者の矜持か、追跡者の執念か。冬の中京に灼熱の争いが未だ続く！』

残り200。私が少し前に出た。ほんの少しだ。彼女は私と競り

合って、更に速度を一段上げてくる。

トレーナーに言われていた。『彼女と競り合ってはいけない』と。『競り合えば競り合う程彼女は強くなる』からだ。

けれど、競り合わずに彼女に勝つなんてそれこそ不可能だ。オグリキャップやタマモクロス位の脚があれば可能かもしれないが、逆にいえばそれくらいのウマ娘でないと彼女と戦うなら競り合いに勝つしかない。

残り150。今度は彼女が前に出た。引き離されないように、脚に力を込める。限界を訴える身体を、闘争……いや、闘走本能で無理矢理動かして、この直線を、彼女よりも早く駆け抜けるために、残った力を振り絞っていく。

『残り100！ 未だ勝負は続く、続いている！ どちらも一步も譲らない！ はたしてどちらが勝つのか——！』

そうして、残り100を過ぎたあたり。その時は訪れた。訪れて、しまった。

聞きたくなかった音が左脚から聞こえて、燃えるように熱くなった。今まで掻いたことの無いような汗が身体中から噴き出した。

脚全体が熱くて何処を壊したのかわからないが、どこかしらがイカれている。すぐに転倒するような壊れ方ではないようだからまだ走れているが、このまま全力で走るのは危険だ。

蠟細工の翼では、空高く飛び続けることは出来なかったということか。太陽を目指して飛んだイカロスが、その翼を溶かして地に墜ちたように。言いつけを破った傲慢で無謀な愚者は、どこまでも落ちていくだけ。

私のレースは、ここで終わった——

——ここで終わった？ 本当に？

だって、私はまだ走れているじゃないか。この脚はまだ、繋がっているじゃないか。彼女はまだ、私の隣で走っているじゃないか。

何よりも、ゴールを目の前にして——諦められるわけが、ないじゃないか!!

『ッ、一瞬失速したかと思われたりボンマンボ、此処で凄まじい加速！だが走り方がおかしい！ 何処か痛めてしまったか!? だが、走りはさらに鋭くなった！ 残り50、最後の最後、燃えるようなデッドヒートが続いている!』

たとえここで全てを燃やし尽くしても、私は、私は——!!

「ここで、勝つんだあああ!!」

私の翼が、燃えていく。後は燃え尽きていくだけ。けれど、まだ、前に進める。

ただ墜ちていっただけのイカロスとは、私は違う。翼で羽搏けなくても、脚で大地を駆けることが出来る、だって、まだこの脚は繋がっているのだから。

最後まで、前に進んでいくことだけは、今の私にだって許されているのだから——!!

『大接戦でゴール！ ここからではどちらが勝ったのか全く分かりませんでした！ 結果は写真判定に——』

並んだまま、ゴールを通り過ぎた。途端に、左脚の感覚がなくなつて、ぐらりと身体が左に倒れていく。ラストスパートの、速度を保つたまま。

意識が遠退いていく。もう、受け身だつてとれない。結果がどうなったのか、それだけは確かめたかったが、目を開ける力だつて残っていない。

私が最後に感じた感覚は、地面に墜ちた時の衝撃と、何か暖かいものの感触だけだった。

第五十三話 金鯨賞を終えて

『残り100！ 未だ勝負は続く、続いている！ どちらも一步も譲らない！ はたしてどちらが勝つのか——！』

残り100を過ぎたあたり、静かな私だけの世界に、隣から聞きたくなかった音が鳴り響いた。

宝塚記念の時にも聞こえた、竹が割れた時のような高くて軽いあの音。でも、私たちウマ娘にとっては何よりも重い、破滅を伝える音だ。隣を走るマンボさんの速度が、一瞬落ちたのを感じた。彼女から感じていた熱が、炎が消えていくのを感じた。

マンボさんの白い翼が、燃えて、溶けて、砕けていく。色を失った私の世界に、その白が散っていく。

けれど、決して脚は緩めない。マンボさんなら、きつと——
『ッ、一瞬失速したかと思われたりボンマンボ、此処で凄まじい加速！
だが走り方がおかしい！ 何処か痛めてしまったか!? だが、走りはさらに鋭くなった！ 残り50、最後の最後、燃えるようなデッドヒートが続いている！』

その瞬間、景色が蒼い炎に包まれた。消えかけた炎が、一瞬強く燃え上がるように。

彼女の瞳に宿っていた炎が、辺り全体に燃え広がるように。ゴールまでの道に、炎の道が出来ていく。

今まで以上の速度を出して、壊れたはずの脚で駆けてくる。その走りに、私は一瞬心を奪われてしまった。

『大接戦でゴール！ ここからではどちらが勝ったのか全く分かりませんでした！ 結果は写真判定に持ち込まれました、ああっ!?!』

ゴール板を通り過ぎたそのすぐ後、私の横を走っていたマンボさんの身体がぐらりとこちら側に倒れてくる。

「——ッ!!」

無意識だった。心を奪われた為にマンボさんの姿を注視していた

からか、彼女の身体が傾いてくると咄嗟に彼女の身体を支えようとして、けれど無茶な体勢だったのか、それともラストスパートのトップスピードだったからか、支えきれずに一緒にターフに倒れていく。

何とかマンボさんを抱き寄せることは出来たが、左肩から思いつきりターフに叩き付けられ、バウンドして空中で身体が一回転する。

マンボさんの身体にダメージを与えてはいけないとそれだけを考えて、自分の身体がなるべく下になるようにしながら数回バウンドした後、ターフの上を少し滑っていく。転がるとマンボさんの身体に負担がかかってしまうかもしれないので、意図的に背中で滑った。アスファルトの上だったら背中がズタボロになっていたかもしれない。今日は体操服だから露出した手足にちよつと擦り傷が出来るかもしれないが、まあ許容範囲だろう。

『倒れたりボンマンボにブラックプロテウスが巻き込まれるような形になってしまった！ これは心配です、無事でしょうか？』

『巻き込まれるというより、ブラックプロテウスが咄嗟に庇ったような感じに見えましたね。ですが危険な倒れ方なことに変わりありません。おっと、ラチにぶつかって止まりましたね』

ラチにぶつかり、支柱を一本へし折ってようやく止まった。ちよつと身体が痛い。山で滑落した時よりはマシだけど、ここ最近では阪神レース場での事故の時の次くらいに痛かったかもしれない。

けど多分、私じゃなかったらかなり危険な転倒の仕方だった。間違いない肩を脱臼か、骨折するような転倒の仕方だ。

でも、マンボさんは頭から行っていたし、庇わなかったら私は間違いない後悔しただろうから、まあ良しとしよう。

「マンボさん！ 大丈夫ですか、マンボさん！」

ターフに寝転がったまま、私の上で私に抱きしめられているマンボさんに声を掛ける。揺すりはしない。何処を怪我してるかわからないから、なるべく揺らさない方がいいだろう。多分足の骨折だとは思うのだが……

何度か声を掛けても、マンボさんから声が返ってくることはない。息はしているが、意識を失っているようだ。何かしらの処置をした方

が良いのだろうか、下手に動かせない。

とりあえずそのままの体勢で、救急隊の到着を待とう。一先ず命は無事だということ知らせるために軽く手を振っておく。

『ブラックプロテウスが手を振っています、とりあえずは無事のようなのですが、何処かしら痛めていないか心配です。おっと、今写真判定の結果が出ました。一着、リボンマンボ！ 二着ハナ差でブラックプロテウス、その差何とわずか3センチ！ 一念、鋼鉄をも通ず！ 追跡者の執念がほんの僅か王者を上回った！ 鋼鉄の牙城に遂に傷をつけるものが現れました！』

『そうですね……故障しながらも決して脚を緩めなかったその執念、その根性。故障後に走ったことは曲がりなりにもレースに携わる者としては喜ぶことは出来ませんが、それだけ勝ちたかったということでしょう。その想いが結果に表れたということですね』

結果がアナウンスされる。負けてしまったか。でも、今はそれどころじゃない。今は一秒でも早く、マンボさんに手当てをしてもらわなければ。

「マンボー!! 大丈夫、マンボ?!」

救急隊を待っていると、観客席の方からスーツの女性が飛び出してきた。というか、軽く観客席の柵と外ラチを飛び越えて来たようだ。ウマ娘じゃない、ヒトの女性だ。凄い身体能力……というか、あれはマンボさんのトレーナーさんでは？

うちのトレーナーさんも後を追っているようだが、あつという間に引き離して私たちの下に辿り着いた。あまり息が切れていない。このヒト実はウマ娘なのでは？ つい頭と腰のあたりを見てしまうが、間違いなくヒトのようだ。

「マンボ!! マンボの状態は?」

「息はしてますけど、それ以外は私にはわかりません。なるべく衝撃が掛からないようにはしましたけれど、それもどれだけ彼女の助けになったかはわかりません」

「ううん、ありがとう。貴女のおかげで大分軽減されたと思うわ。つて、貴女は大丈夫なの? 随分激しい転び方してたけど……一度マン

ボを降ろした方がいい？」

そう言つて私の上からマンボさんを退かそうとする。余り動かさない方がいいと思うのだが……

「今マンボさんを動かさない方がいいと思うので、救急隊が来るまでこのままの方が良いと思います。私は擦り傷程度ですから。救急隊の方たちももうすぐそこまで来ていますし」

「あれで擦り傷程度つて、嘘でしょ……？ まあ、そこまで言うならお願いするわね。ちよつとだけ救急隊の方たちと話してくるわ」

マンボさんのトレーナーさんが苦笑いしながら離れていき、到着した救急隊の方たちと話しに行く。そうしているうちにストレッチャーが二台こちらに運ばれてきた。一台はマンボさん用だと思いが、もう一台は……？

「お待たせしました。リボンマンボさん、ブラックプロテウスさん。搬送するのでストレッチャーに乗せますね」

「あ、いえ。私は軽傷なのでストレッチャーは大丈夫「ダメです」アツハイ」

ストレッチャーを断ろうとしたら真顔で完全に封殺されてしまった。大人しくストレッチャーに乗せられたあたりでようやくトレーナーさんが辿り着いた。彼の足が遅いわけではなく、マンボさんのトレーナーさんが速すぎるだけなのだが。

「テウス、無事か？ 空中で一回転してたが……」

「ちよつと擦りむいたくらいですよ？」

「嘘だろ……まあ、それでも病院には行つてもらうぞ？」

流石にもう抵抗はしない。あまり抵抗すると後でたづなさんにお説教されてしまう。ウイニングライブ、どうするんだらう。一着と二着が揃つて病院送りでは流石に見送りだらうか……

そんな他愛ないことを考えながら、病院へドナドナされていくのだった。

金鯨賞が終わつた翌日の放課後、私は少しだけ憂鬱な気分だった。

天気も私の憂鬱さがうつったかのように崩れて小雨が降っている。

何故かと言えば、今私はトレーナーさんとインタビューを受けている最中だからだ。

まあ、これは仕方ない。後で映像を見たが物凄い転び方をしていて。多分私以外だったら酷いことになっていただろう。

各方面の方々に心配をかけてしまったし、このインタビューは甘んじて受け入れた。

「月刊トウインクルの乙名史です。まずは先のレースでの転倒の影響、つまりケガなどしていないかについてお聞かせください」

簡単な挨拶と無事であることを報告をした後質問タイムに入り、質問のトツプバッターは最前列の真正面に居た乙名史さんだった。

彼女自身私が無事なことは知っている筈だ。何せ私と彼女は既にLANEでやりとりしており、病院で貰った検査結果を撮った映像も持っているし。

カラオケ行ったときにライトハローさんやお姉さんとも既に交換していて、グループチャットで結構頻繁にやり取りしたりしてるし。彼女たちに心配を掛けていただろうから、両親の次に報告した。

トレーナーさんはどうなのかって？ あの人には病院に居て私の隣で検査結果を聞いていたから、お医者さんを除いて一番最初に検査結果を知った人だと思う。

「はい。私に関しては多少の擦り傷程度でほぼ無傷でした。病院に着いた頃には既に痛みもなかったくらいですね」

用意されていたマイクを持って質問に答える。今インタビューを受けてる講堂は中くらいの広さで、多分マイクがなくても声は届きそうだが、たづなさんが用意してくれたので使わせてもらうことにした。

余りの良好具合にお医者さんが変な顔をしながら検査を3回やり直したほど良好な結果だった。というかほぼ治り掛けていたくらいだ。

怪我をするたびに治癒力が上がって行くような気がする。実験する気にはなれないけど、その内トレーナーさんか両親には打ち明けよ

うかな、位には考え始めている。

何か言われても三女神様のご加護ということにしておけばいいだろう。ウマ娘の身体は不思議で一杯だし、今までの経験上多分それでどうにかなると思う。

「そうですか、それは何よりです。その……リボンマンボさんについては何か御存じでしょうか」

「私の口からは何とも。詳しい内容はおそらく後日トレセン学園から何かしらのプレスリリースがあると思いますので、それをお待ちいただければと思います」

マンボさんかというと、足の骨が折れていたらしい。ヒビ程度だったというから、すぐの転倒には至らなかったようだ。あまり詳しく症状は聞けなかったが、少し時間は掛かれど問題無く復帰出来るらしい。

一応私が知っているのはこれくらい。詳しい内容はほとんど知らないから明言は避けておくことにした。後でトレセン学園が何らかの発表をするだろう。私が病院に運び込まれるたび、どんなに軽傷だろうと毎回発表があるくらいだし。

「わかりました、ありがとうございます。次の質問ですが――」

こんな感じで、インタビュ―自体は結構すんなり進んでいた。まあ、今回集まってもらった目的は主に怪我の状況についての報告だし、語るべきことは多くない。

精密検査の内容については理事長に渡してあるし、その内掲載されるだろう。

普通そんな掲載しないもののだが、何故か私のデータは毎回開示されている。身体機能とかが主な内容だ。

一般的なウマ娘より心肺機能が結構強いらしいが、正直そこら辺のデータの見方は全く分からないので、まあ別に体重とかが公開されないならいいかなと思っっている。

「トラヴァースポーツの草水です。今回の金鯨賞の敗因は何だと思えますか？」

そんな平和な質問タイムが終わりを告げたのは、今日初めて見た記

者さんが質問を投げかけてきたときだった。

隣に居るトレーナーさんが眉を顰めている。予想出来ていた質問だとは思うが、ストレートに聞いてくる記者さんが居るとはあまり思わなかった。

トレーナーさんが割って入ろうとしてくれるが、袖を引いて止める。私への質問だ。私が答えるべきだろう。

「敗因ですか。敗者に敗因を聞くより勝者に勝因を聞くべきだと思いますが……まあ、いいです。敗因があるとすると、私、ブラックプロテウスよりもリボンマンボの方が強かった。強いものが勝つのではなく、勝ったものが強い、それに尽きると思います」

「最近調子悪かったですよね？ 疲れもあったのでは？」

「私は金鯱賞の時、確かに少し不調だったと思います。ですがそれは疲れとかそういうものではなく、私が余計な事を考えて走っていたからです。体調自体は万全でしたよ」

単刀直入に答えているのだが、彼の望んでいる答えではないのか少しムツとした表情で質問を続けてくる。私、彼に何かしただろうか？

こんな不機嫌そうに質問される覚えはないのだが……

「ですが実際貴女が持っているレコードタイムとはかけ離れた勝ち時計でした。貴女の2000mのタイムなら余裕で勝てた相手では？」

「余裕で勝てるレースなんてありませんよ。たとえばどんなレースでも、それがウマ娘同士が争うレースなら」

これ以上質問をされても答えは同じなので、彼の返答を待たずに言葉が続ける。

「私は確かに無敗で三冠を得て、秋の三冠も獲りました。でも、それはきちんとトレーニングを積んだうえで、運を掴めたから。スピード、スタミナ、パワー、根性、賢さ、そして、運。前の5つで勝つていても後ろの1つを掴めないと勝ちあがれない。それどころか走ることにすらできないかもしれない。それがウマ娘のレースです。実際、シンボリルドルフは3回、かのセクレタリアトだって5回負けてます。それがレースの世界です」

「負けたことを正当化するつもりはありませんが、勝ち負けするからこそレースです。まあ、今までの私のレースがそうじゃなかったからこそ、『ブラックプロテウスの出るレースは退屈だ』だなんて言われたのかもしれないが。トラヴァーススポーツさんもそのような記事昨年出されていましたよね？ メジロマックイーンさんの時も同じような記事を出されていましたが」

あまり自分に関しての記事は見ないようにしているが、多少の情報はそれも入ってくる。特に攻撃的なものは耳に入ってきて来やすいものだ。

トラヴァーススポーツさんは私に対して結構キツイ記事を書く。有名どころだと月刊ターフさんあたりもキツイ記事を書いてくるが、月刊ターフさんは私のトレーニングやレース間隔が厳しすぎるというトレーナーさんに対して攻撃的なタイプで、トラヴァーススポーツさんは私に対して攻撃的なタイプだ。

「いや、それは言葉の綾であって……」

「金鯉賞はどうでしたか？ 楽しかったですよ？ 最終的にとても喜べるような状況ではなかったけれど、レース自体は盛り上がったでしょう。それは、私も彼女も全力を尽くしたから。そうでしょう？」

私も彼女の故障さえなければ、とても、とても楽しいレースでした」
本心だ。結果がどうであろうと、あのレースはとても楽しかった。やっぱり私はこうやって走って、楽しめればそれでいい。根っここのところは何も変わってないと思いついた。

「私は決して無敵のウマ娘なんかじゃないんです。貴方方はそのあたり勘違いされていらつしやるのでは？ およそ2年前のメイクデビュー、私は6番人気でした。この中で一人でも、レース前に私に声を掛けてくれた方は、この場にいらつしやいましたか？」

講堂の中を見渡す。当然誰も手を上げたりはしない。乙名史さんは多分私の名前くらいは知ってたと思うが、特例で行われた4月のメイクデビュー、普通にG1シーズンだ。多分その時期であれば他のウマ娘の情報で手一杯だっただろう。私のトレーニング映像は当時公開されていなかったし。

「私は所詮、その程度のウマ娘でした。勝ったら勝ったらで、ドープイングの疑惑をかけられてしまうような、そんな何処にでもいるただ一人の、走ることが大好きなだけのウマ娘です。それが、色々な人と走っていくうちに、色々なものを貰って、強くなっていったのが私です。そんな私に、負けて得るものは在れど、失うようなものなんて何もありません」

「そ、それは……負けてよかったと？」

彼がぼそりと呟いた言葉に、頭に血が上っていくのを感じる。

どうしてそうなるのか。誰がそんなことを言ったのか。負けて良かったと思つて走るウマ娘なんていない。居るわけがない。

それはレースを走るウマ娘にとって最大の侮辱だと思う。中央だろうが地方だろうが何処だろうが関係なく、それは最大のタブーだ。公式だろうが非公式だろうが、それをしてしまえば二度と走ることは許されないくらいに。

握りしめていたマイクがメキツと音を立てて真つ二つになった。とてもじゃないが冷静ではいられない。

「おかしなことを——!!」

怒りに任せて言葉をぶつけようとしたとき、講堂の扉が大きな音を立てて開いた。全員の視線がそちらに集中する。

「あんたら、主役を差し置いて何してるわけ？ 聞く相手が違うでしょ？」

開いた扉の向こうには、松葉杖をついたマンボさんが居た、左脚を覆うギプスが少し痛々しいが、彼女の表情はいたって普通、どころか少し機嫌が良さそうだ。

「よいしょつと……ふう、テウス。ちよつと肩かしてね」

「え、あ、はい。どうぞ」

ゆつくりとこちらに歩いてくると私の隣に立つ。会場の隅に居たたづなさんが慌ててパイプ椅子を用意している。用意している間肩を貸す。私よりマンボさんの方がちよつとだけ大きい。ちよつと悔しい。私の身長は入学時から1mmたりとも伸びていないのだ。決して低くはないと思うけれど、もう少し背が欲しい。

「あ、ありがとうございます、たづなさん。はい、というわけで金鯨賞の話なら私抜きでするのは筋違いよね？ 質問があるならどうぞ」

マンボさんはたづなさんが持つてきてくれたパイプ椅子に腰かけて質問に答える体勢になった。私からマイクを取ろうとして少し驚いた顔をした後、トレーナーさんからマイクを貰っていた。

「それでは、私から。月刊トウインクルの乙名史です。まずは金鯨賞でのご勝利おめでとうございます。お怪我の状況や、今後の予定などについてお聞かせください」

「中足骨と脛骨の骨折、だったかしら？ ごめんなさい、レントゲン写真を見せてもらったからどこが折れてるのはわかるんだけど、詳しい病名が長ったらしくて覚えられなかったわ。今指で指してもギプスで隠れてわかんないだろうし、詳しい資料は後で出すと思う。多分数か月すれば問題無く走れるようになるわ。調整含め今年のマイルCSくらいまでには間に合わせたいわね」

気持ちにはわかる。乙名史さんも苦笑いだ。病名って本当に長ったらしくて覚えられない。ただの風邪でも扁桃炎とか咽喉炎とか細かく分かれているらしいし。

「そうですね、わかりました。結構激しい転び方をされていた割には怪我の程度は軽い方だと思います。お大事になさってください」

「ありがとうございます。あの時テウスが庇ってくれてなかったら多分もっとひどいことになっていたと思うわ。ありがとう、テウス」

「あ、いえ。特に庇ったつもりはなかったんですけど」

「え？」

ぽかんとした顔でマンボさんが私を見ている。記者さんたちもちよつと不思議そうな顔をしている。

「あの時は目の前で倒れ込んできてたので、つい受け止めようとしてしまつて。特に何も考えてなかったんですよ」

「何それ労災案件？ まあいいわ、助けられたのは事実だもの。じゃ、次の人」

くすくす笑いながら質問に答えている。やっぱり少しご機嫌のよ
うだ。

その後何人かの質問を捌き、最後に「金鯨賞を終えたご感想をお聞かせください」との質問が飛んできたとき、マンボさんはそれはもう嬉しそうな顔をしていた。

「そりやもう最高の気分よ。メイクデビューからずっと追いかけてきた背中に届いたんだから」

「結果として故障をしてしまったわけですが……」

ちなみに質問者は月刊ターフさんの記者だ。トラヴァーススポーツさんの記者は黙り込んでしまっている。

「それが何？ 此処にいる私の最大のライバルに勝つために、私が持ちうる全てを賭けた。だから勝てた。ここぞという時だから、私はオールインしたのよ。貴方たちにはわからないかもしれないけどね？」

少し耳を絞って、マンボさんは続ける。

「そうじゃなきゃ、誰かさんが『負けてよかった』なんて発言をしたとき諫めたはずよ。貴方たちは自分が書いた記事に、今後すべての人生を賭けることが出来るかしら。懸命に『懸ける』じゃなくて、外れたら何も戻ってこない、文字通りのオールインが貴方たちに来るの？」

それが出来る人はごく一握りだろう。ここには私たちトレセン関係者を除けば、瞳をキラッキラさせて今にも叫び出しそうな乙名史さんくらいしか居ないと思う。

「出来ない奴が無責任にあのレースを穢すな。負けてもいいと思って走るウマ娘なんてこの世に居るものか。もしそんな記事が書きたいって言うなら、人生全てを賭けて。そうしたら私は何も言わない。その覚悟を尊重するわ」

それにしても、聞かれていたのか。何処から聞いていたかはわからないけれど、ウマ娘の聴力的に全部聞こえてもおかしくない。此処は防音性能はそれほど高くない。勿論、講堂なのだから決して低くない。ウマ娘にとっては高くないということだ。

「以上、会見終わり！ さっき言ったように、覚悟があるならどんな記事でも書くと良いわ。それがあなたたちの仕事だもの。テウス、帰る

から手伝って」

「えっ、あ、はい。わかりました。皆さん今日はありがとうございます」

一礼した後マンボさんを支えつつ講堂を出ていく。トレーナーさんはまだ残っているので多分軽く締められるだろう。

外はまだ雨は降っていた。多分今日は降り止まないだろう。一応傘を持ってきてあるので二人で相合傘しながら寮の方向に歩く。

「マンボー!!? 何処に行ったのー!!?」

講堂を出てしばらくすると遠くから焦ったような声が聞こえてくる。マンボさんのトレーナーさんの声だ。

「……マンボさん、ここまでどうやって来たんですか?」

「トレーナーが理事長室行ってる間に様子だけ見ようと思って抜け出してきちゃった」

てへっとあざとく笑っているけど結構大問題だと思う。大怪我した担当が目を離れたすきに姿を消していたらトラウマものなのでは?

助けに来てくれたことは嬉しいけれど、流石にやりすぎだ。というか、この娘こんな破天荒な娘だったのだろうか? もうちょっと真面目な娘だった気がするのだが……

「一緒に謝りますからマンボさんのトレーナーさんのところに戻りましょうね?」

「はい。うちのトレーナーはちょっと過保護だから困るわよね」

困ると言いながら耳は嬉しそうにピコピコしているし、尻尾も揺れていたのだった。

第五十四話 夜の密会？

会見が終わった日の夜。日付が変わるまで後1時間と言ったあたり。様々な書類を作成し終え、俺は伸びをした。

テウスの次走、阪神大賞典に向けてのトレーニングメニュー。4月からチームカペラに移る予定のサトノダイヤモンドに関する引き継ぎ書類等だ。

元々サトノダイヤモンドは俺の教育方針とはあまり合っていないタイプのウマ娘だ。

今まで彼女が所属していたのは、ブラックプロテウスという距離適性かなり似通ったウマ娘がトウインクルシリーズ現役で居たことが大きい。

だがそれも、脚質や性格の違いからやはり彼女には合っていない。というかテウスに合わせるや殆どのウマ娘はぶっ壊れる。何とかついていけているキタサンブラックがおかしいだけだ。

チームカペラはサトノ家のウマ娘が集まって出来たチームだ。彼女にとってもカペラの方がやりやすいところはあるだろう。

これからは手強いライバルになるとはいえ、少しでも関わった以上、チームカペラのトレーナーとは連携を密にして行くつもりだ。彼女たちが望むならトレーニングを一緒にしたって問題ない。

チーム同士は切磋琢磨していく仲だ。時に競い、時に協力して強くなる。俺はそれでいいと思っっているし、ライバルだからと全ての関係を断るトレーナーはそう多くないだろう。

「さて、そろそろ帰るか……っと、その前にちよつと落ち着いてから行くか」

帰る前にアグネスタキオンから分けてもらった紅茶を飲もうと思いき、湯を沸かす。電気ケトルはとても便利だ。茶こし付きのケトルで淹れればティーポットすら要らない。

万年金欠の俺にはちよつとお高い買い物だったがこの買い物は正解だった。紅茶はマックイーンやテイオーもよく飲むし、決して有つ

て困るものではないしな。

湯が沸くのを待っていると、部屋の扉が軽くノックされた。たづなさんあたりが釘を刺しに来たのかもしれない。彼女は遅くまで残業しているトレーナーを見つけると強制的に帰らせたりお説教したりしている。俺も今まで何十回か忠告されたことがある。

「やべ……あ、開いてるから入っていいですよ」

「失礼します」

扉を静かに開けて入ってきたのは、俺が予想していなかった人物だった。

「お？ 何だ、お前か……びっくりした。何か用か、塩飽トレーナー」
「こんばんは、沖野先輩。今日はうちのマンボがご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

そこに居たのはリボンマンボのトレーナー、塩飽琴しあきことだった。彼女は女性としては長身の170cm。痩せすぎに見える位華奢な体型。ウマ娘と見紛うほどの美人だ。

実際身体能力もかなり高い。何度かコイツ実はウマ娘なのでは？
と思ったことがあるが、トレーニング用のプールではち合わせた時の水着姿を見た限り、間違いなく人間だ。

「いや、こつちこそ助かった。あそこでリボンマンボが乱入してなかったら流血沙汰になるところだった。俺がぶん殴ってたからな」

「私はその場に居たらあらゆる手段を使って物理的にも社会的にも抹殺していたでしょうからその気持ちはわかります」

今まで浮かべていた申し訳なさそうな表情がすっと消えて無表情になる。怖い。

入った当初は良くも悪くも普通の新人トレーナーだったはずなんだが……時折こういうトレーナーはいる。一番最初の担当に入れ込み過ぎて何処か狂っていくのだ。そういうトレーナー程有能だったりするのが手に負えない。

「それで？ こんな時間に何の用だ？ 夜食にラーメンでも食いに行くか？ 流石に密会しに来たってわけじゃないだろうけど」

冗談を交えてみるが、反応は冷静なものだ。やっぱり女性の扱いは

よくわからんなあ、セクハラだと思われていなければいいのだが……
「あ、いえ。この時間に食べると太っちゃうので、また今度お昼にでも
ご一緒させてください。あまり他人に聞かせられないお願いをしに
来たという点では、密会というのは正しいのかもしれないが」

「他人に聞かせられないお願いだあ？ あ、ちよつと待て。今丁度紅
茶入れてたから、それを飲みながら話そうぜ」

一杯だけじゃ物足りなくなることが多いのでいつも二杯分沸かし
ていたのが功を奏した。休憩用のソファーに案内し、二人分の紅茶を
淹れて持つていく。

塩飽トレーナーのは……テウスのでいいか。あいつ、どちらかとい
うと緑茶派だからティーカップあんまり使わないし。

「ほれ。アグネスタキオンが持つてきた茶葉だからそれなりに美味い
と思うぞ。淹れ方が本格的なのじゃないのは勘弁してくれ。砂糖は
その容器にいっぱい入ってるから好きなだけ使っればいいぞ」

「あ、いえ、大丈夫です。私はインスタントのとかしか飲まないの
……では遠慮なく」

そういつて容器から角砂糖を2つ程取り出して紅茶に入れる。普
通はそうだよなあ。タキオンは大量に砂糖を入れるから感覚が狂う。
マックイーンも時々大量に入れているけどそれは見ないことにして
やった。

「それで？ 頼み事って？ 俺に協力できることならどーんと言っ
てこい。これでも経験はそれなりに豊富だからな」

「あ、はい……それでは」

そういつて席を立ったかと思うとソファーの横に移動し、両膝をつ
いて正座したのち、手の平を地面についてそのまま額も地につけた。
見事な土下座である。

「つて、感心してる場合じゃないな。土下座される謂れはないから頭
を上げてほしいんだが……」

「いえ、今からする頼み事は他のトレーナーに軽々しく頼んでいい事
ではないので……」

つまり担当ウマ娘に関する事か？ とりあえずどんな頼み事かわ

からないのではどうしようもないので、続きを促す。

「どうか、どうか私に骨折したウマ娘のリハビリ方法についてご指南ください！ データをすべて開示してほしいとは言いません。マンボが、リボンマンボがまた無理なく走れるようになるためにご協力をお願いしたいのです！」

ああ、そういうことか。こういうリハビリについては確かに、一つの財産だ。トレーナーによっては開示しなかったり、情報を小出しにしたりするだろう。

「ああ、いいぞ。少しと言わず全部持っていけ。PCにスズカとテイオー、ライスシャワーのリハビリについて纏めたデータが入ってる。USBにコピーしてやるから、少し待っていてくれ」

「難しいお願いなのはわかっていきます！ 私に出来ることなら何でもしますから……え？」

こっちの言ったことが理解できなかったのか、顔を上げて呆けた顔をしている。美人はどんな顔をしていても絵になるな。

こんな事口にした日には担当のウマ娘たちにプロレス技を掛けられることになるだろうから決して口にはしないが。

「いや、だからOKだって。わからないことがあるならいつでも聞きに来て良いし、なんならリハビリにも協力してやるし、ライスシャワーと一緒にリハビリしたって良い。まあ、ライスシャワーはもう回復していて今は怪我前の水準に戻してる段階だから、そう上手くはいかないかもだが」

「いいん、ですか……？」

「勿論。というかお前が頼んできたことだろうが。とりあえず立ってソファアに座ってくれ。こんな光景他の奴らに見られたら明日から学園に来れなくなる。紅茶も冷めるしな」

とりあえずソファアに座らせる。万一理事長に見られたりしたら首が飛びかねない。たづなさんだった場合はどうだろう、朝までお説教で済むだろうか？

「その……本当に良いんですか？ リボンマンボはブラックプロテウスライバルです。敵に塩を送ることになりますよ？」

「こつちが先に塩を送られてるからな。塩留めの太刀を送らないと面目が立たない。それに、俺はトレセン学園のトレーナーだ。担当だろうが担当じゃなからうが、ウマ娘が十全に走れるための協力は惜しまない。実際ライスシャワーも面倒見てるしな」

ライスシャワーの担当トレーナー、彼女は今休職中だ。理由に関してはメンタルヘルス、つまり、精神的な問題での休職だ。

菊花賞後のライスシャワーへの非難はトレーナーにも及んだ。トレーナーとしてファンレターを全て確認していた彼女は、ライスシャワーに対しての罵詈雑言とも言えるほどの手紙を全て読んでいた。

それもあって、彼女は有《font:ul40》馬《font》記念の前あたりから部屋の外に出れなくなってしまった。

数か月してよくなってきたところに、春の天皇賞。そこでもまた非難され、その頃には彼女のSNSも特定され、良くなるどころか悪化した。

そこから勝てなくなつてまた非難され、二度目の春天の勝利で風当たりはよくなつて……と、快方と悪化を繰り返して今に至っている。

トレセン学園の休職期間は一応一年半までだが、その辺りは理事長裁量で簡単に調整が利く。彼女は辞職を申し出たようだが、理事長が直々に向いて慰留したようだ。

その間は見れる範囲で周りがライスシャワーを見るようにしていたが、目の届かないところもあつた。その点で、宝塚記念は痛恨の極みだった。

この内容は、ウマ娘側には公開されていない。家庭の事情で已むを得ず休職しているということにしている。

ライスシャワーは薄々感づいているようだが……仕方ない。あの娘は人の心の機微に聡い娘だ。そのことでもきつと心を痛めていただろう。それが、あの時の宝塚でどうしてもゴールしたかった理由なのかもしれない。

「それに、リボンマンボには戻ってきてもらわないと俺たちが困る。勝ち逃げなんて許さないぜ？ それに、テウスからも頼まれてたしな。力になつてあげてほしいって」

「ブラックプロテウスがそんなことを……ありがとうございます。彼女……優しい娘ですね」

「走ることに関しては一切退かないけど、それ以外は穏やかな奴だよ。まあ、走ることが関わりと周りが見えなくなるんだが……」

「どれだけメンタルトレーニングをさせても治らないから、もうあれは不治の病だ。一度テウスのご両親とテレビ通話で話をしたことがあるが、走り疲れて外で眠っていたことすらあったらしい。しかも隣の県の山頂でだ。良く見つかったものである。」

「テウスは山の方に行くことが多いから見つけるのは簡単だと言っていたが。山は周りに人がいないか確認しなくてもいいから楽だとかなんとか。相変わらずよくわからない思考回路をしていると思う。」

「まあ、そういうことだ。ほれ、コピーし終わったから持っていけ。いつでも聞きに来て良いが、一応後でリボンマンボの症状だけ聞かせてくれ。ヒビ程度で済んだと聞いていたが……」

「あ、はい。左の脛と第三中足骨、及び踵骨疲労骨折ですね。全部ヒビ程度だったみたいですけど……正直、最低でもどこかは粉碎骨折していると思っていました。思ったより、とても軽かったです」

「俺もヒビ程度で済んだのは不思議に思ったがな……三女神様のご加護、いや、お前のトレーニングが良かったんだろうな。大分歪にトレーニングをしていたみたいだが、それでも故障のリスクは最低限。新人とは思えない鍛え方だと思ったよ」

「……どんなトレーニングをしていたか、わかるんですか？ 内緒のトレーニングだったんですが」

「トモを見れば大体わかる。詳細まではわからなかったが大分最高速に偏ってたな。触ればもつとわかるんだが」

「……先輩ってやっぱり変態ですよね」

「酷い言われようだ。俺以外も数人出来るやつはいるんだがな。」

「……ウマ娘の脚って、硝子の脚だっというじゃないですか。あれ、私は違うと思うんですよ」

「そういつて、彼女は懐から手帳を、正確には手帳に刺さっていた一」

本の鉛筆を取り出した。

「ウマ娘の脚は、鉛筆だと思っんです。ウマ娘それぞれ、長さも太さも、濃さも色も違う。私たちトレーナーは、必要に応じて鉛筆を削って、必要な長さの線を書けるようにする」

「……まあ、そういう見方もできる……のか？」

珍しい見方だと思う。あまり聞かない見方だが……

「ウマ娘は鉛筆で、トレーナーは鉛筆削り。でも、先輩方がストップパー付きの電動鉛筆削りなら、私は精々カッターナイフです。粗く削ることしかできない」

彼女はテーブルの上の筆記用具入れに入れてあった安物のカッターナイフを手にとった。

「でも、カッターナイフにはカッターナイフにしかできない削り方があります。こんな風に……長く、鋭く、削ることが出来る」

そういつて鉛筆をカッターナイフで削り始めた。まるでデッサンで使う時のように、芯を長く出し、先端は針のように鋭くなるまで。

「当然、こうすればウマ娘の寿命は短くなるし、途中で折れてしまう可能性も大きくなる。それでも……こうすれば、格上相手だろうと立ち向かうことが出来る。私はトレーナーとしては失格かもしれない。でも、リボンマンボのパートナーとして、彼女の目的を果たすためには必要なことだった」

「思い切ったな。聞く奴が聞けば大変なことになるぞ」

故障覚悟で追い込む、というのは相当な覚悟が必要だ。本当に故障してしまえば、かなりの非難が予想される。

「覚悟の上です。既に理事長には辞表を出しました。慰留の後に目の前で破り捨てられましたが、この件で処罰があるなら甘んじて受けます」

完全に覚悟が決まっている。こうなった時のトレーナーという人は種はウマ娘でも動かせない。動かせるのは担当ウマ娘だけだ。

「そうか、わかった。なら俺から言うことは何もない。一応明日リボンマンボをここに連れて来てもらえるか？ リハビリメニューについて話し合おう」

「わかりました。重ね重ねになりますが、本当にありがとうございます。ありがとうございました」

「おう、まあ困ったときはお互い様だ。気にすんな。あ、そうだ。さつきウマ娘を鉛筆に例えていたが、テウスはどんな鉛筆だ？ 10H位か？」

帰ろうとしていた塩飽トレーナーを呼び止め、ふと気になったことを聞いてみた。

俺に問われた塩飽トレーナーは、少し考えてから口を開いた。

「完全に私見になっちゃいますけど、絶対に擦り減らないメタルペンシルですかね？ それでいて普通の鉛筆より色が濃くて太い線が書ける。擦り減らないから、それこそ無限に走らせ続けることが出来る、そんな夢の鉛筆。トレーナーだったら一度は担当してみたいと思うんじゃないでしょうか」

「それだと俺たちトレーナーは削れないと思うんだが……」

「普通のトレーナーならそうですね。でも、沖野先輩は彼女を鋭く出まわっています。担当していたのが私なら先に私が折れてしまっていたでしょうね。間違いなく、クラシック三冠は菊花賞しか取らせてあげられなかったでしょう。宝塚や秋三冠は言わずもがなです」

「……菊花賞は取れるんだな？」

思ったより自信家なんだろうか？ 最も強いウマ娘が勝てる菊花賞は取れると断言するあたり、凄いと思うのだが……

「彼女のスペックで超長距離レースを落とすことはまず有り得ません。トレーナー養成学校の一年生でも彼女に菊花賞は取らせられるでしょう。それだけ、彼女のスタミナは前代未聞ですよ。何なんですか、3000m3分切りって。ウマ娘の限界を超えていますよ」

最後の方はもう愚痴になっている。しかもあのレース、テウスはいつものスパートを切っていない。位置取り争いもない、ただの一人旅。誰もテウスに競り合いを仕掛けるどころか影を踏むことも、全力を出させることすらできなかった。

はたして一緒に走っていたウマ娘は、どう感じていたのだろうか……？

「おっと、呼び止めて悪かったな。んじや、また明日。おやすみ」
「はい、ありがとうございます。紅茶も美味しかったです。では、また明日」

彼女はぺこりと一礼して、トレーナー室を出ていった。やっぱり礼儀正しい淑女然とした人物だ。

「さて、俺も帰るか……」

紅茶を飲みほしてから荷物を纏めはじめた。今日はいろいろなことがあつて疲れた。帰ったら風呂入ってさつさと寝よう。そう思っていたら、懐から着信音が鳴った。

「こんな時間に誰だよ……ん？ この電話番号は……」

画面を見ればあまり見慣れない番号が表示されている。知っている番号ではあるのだが……

『こんばんは。栗東寮の寮長代理スーパークリークです。夜分遅くにすみません、テウスちゃんはそこに居ますか？』

相手は栗東寮寮長代理、スーパークリークだ。フジキセキは次の安田記念に向けて最終調整を行っているそうで、フジキセキが万全に走れるようになるまでは臨時で務めるらしい。

なし崩し的にそのまま寮長ポジションに収まりそうだな……なんか似合うし。

「スーパークリークか、居ないけど……もしかしてまだ帰ってないのか？」

『そうなんですよ。今まで一度もこんなことはなかったんですけど』

確か会見が終わった後ちよつと走つてくると言つて別れたはず。ということとは……

「多分まだ走ってるわ、あいつ。コースに居るだろうから連れ戻してくる。悪いが受け入れの準備を頼む」

『は、いい、タオルを用意して待っていますね』

電話が切れた。今まで一度もなかっただけにちよつと驚いた。走つて時間を忘れるのはスズカ位だと思つていたが……まあ、今まで

なかったのがおかしいか。スズカと同じタイプだしな、テウスは。トレーナー室を出ると、まだ雨が降っていた。随分小降りにはなっているが、こんな中をまだ走っているのか？

練習用コースを覗きに行く。まだライトは点いていたから、彼女はすぐ見つかった。いつもよく走っている芝のコース。彼女はそこを走っていた。

ずっと同じコース取りで走っていたのか、ある一定の位置に走って芝が剥げた跡がベルトのように残っていた。多分、別れてから今までずっと走っていたのだろう。

「ブラックプロテウス！」

コース外から叫ぶ。ビクツとテウスが反応し、こちらを見た後腕時計を見て顔を青褪めさせている。どうやら全く時間を気にしていなかったようだ。慌ててこちらに駆け寄ってきた。

「えっ、あ、と、トレーナーさん……ごめんなさい！ 考え事してたら時間を忘れてしまっ……」

かなり動揺している。今まで門限を破ったことがなかった娘だ。それも仕方ないだろう。

「珍しいな、テウスが門限破りとは。それにそんなびしょびしょになっ……レインコートはどうした？」

「暑くなって途中で脱いじやいました。あはは……」

シューズは泥だらけ、体操服はかなり雨を吸っているのか水か滴り落ちている。

「まあ、とりあえず帰りながら話そうか。寮の方でスーパークリークがタオルを用意してくれてるみたいだから、大きな泥だけ落として細かいのは向こうで拭いてもらおう」

「はい、ごめんなさい……」

泥や芝を拭ってやって、脱ぎ捨てたレインコートを回収してからコースを後にする。傘は俺が持ってきたビニール傘しかないので、一緒に入って行く。

「改めて……どうしたんだ、テウス。今まで一度も門限破りなんてしたことなかったのに」

「さつきも言いましたけど、考え事をしていて。昨日のこととか、今日の事とか。スズカさんが『考え事を纏めたいときは走ればいいわ』って言っていたので、纏まるまで走っていいようかなって」

「それで、今まで走ってたってわけか。考え事は纏まったのか？」

テウスが少し考えている。まだ纏まりきってはいないようだが、大体の答えは出ているようだ。

「私、インタビューでも言いましたけど、金鯨賞はとっても楽しかったんです。全力を尽くして、走り切ったレース。1000点満点のレースではなかったけど……秋天や有《font:ul40》馬《font》記念と同じくらい。ううん、それ以上に楽しかった」

彼女の顔は晴れやかだ。思い悩むウマ娘の顔だとは到底思えない。「ただ……私が負けたことで、トレーナーさん。貴方が非難されてしまうんじゃないか。ファンの人たちが失望してしまうんじゃないかと思っ、それだけが不安だったんです」

「そんなことは……」

あるわけがない。あつたとしても、俺への非難は甘んじて受け入れるつもりだった。

「トレーナーさんなら、そう言ってくれるってわかっていました。でも、どうしても心の中では整理がつかなかった。失望されたくない、そんな気持ちが多分、私を縛っていたんだと思います」

彼女の言葉を聞いていて、一つ気付いた。

「過去形、なんだな？ 今はそう思わないと？」

「はい。あの会見を経て、そして考えを纏めていて、思っただんです。どんな風に言われたって、ファンの人たちからどう思われたって、私は走ることが好きなんです。たとえ私のファンが一人も居なくなっても、私は走ることには止められない。だから、トレーナーさんには悪いんですけど、もう気にしないことにしたんです」

吹っ切れたような顔をしている。今まで彼女に申し掛かっていた重荷が、全て解かれたように、今まで入っていた余計な力が抜けていったような、そんな感覚がする。

「俺のことは気にすんなって。大体、スペのメイクデビューから散々

な言われよ。うだぞ俺は。
La victoire est moi! だって大分叩か
れたからな? 俺が」

メイクデビューのウイニングライブに関してはともかく、あの発言
に関しては完全に濡れ衣なんだが、エルコンドルパサーへのお仕置き
はグラスワンダーがやっていたのもう水に流した。

「ふふっ、じゃあこれからもたくさん迷惑かけちゃいますね?」

こちらを見て、優しく微笑んできた。入った当初はまだまだ子供
だったが、最近は結構大人びて見える事が多い。身長は一ミリも伸び
てないが、内面は確実に成長している。

「あ、メッセージ来てる……わあ、クリークさんからこんなに……あ
れ、お姉さんからも来てる。ちよつとだけ確認して良いですか?」

「まあ、手短にな。スーパークリークには後で謝っておくように。か
なり心配してたからな」

「はい……あ、ふふっ……」

画面を確認したテウスが、優しく笑っている。お姉さんとは確か、
テウスの友人で学園OGのウマ娘だったはずだ。

「どうした? 励ましのメッセージか?」

「まあ、そうですね。これ、お姉さんがURLを送ってくれたんです」
そう言つてテウスが見せた画面には、何処かのサイトが映ってい
た。そこには金鯉賞の感想や、一部で生放送されていた今日のインタ
ビューの内容に関する感想が纏められたものが表示されていた。い
わゆるまとめサイト、というやつだろうか?

否定的な意見も確かにあれど、肯定的な意見が圧倒的に多い。それ
だけ、彼女達には根強い人気がある。

テウスが一度や二度敗北したくらいでは、ファンが離れない程度に
は、テウスは人気があるということだ。

「うん、これでもう、何も悩むことはなくなりました」

「そっか、良い友人を持ったな」

「はい」

やっぱり、三冠という称号はそれなりにプレッシャーを感じていた

のだろう。負けて、一皮剥けた。そんな印象を強く感じる。今後も、テウスは強くなるだろう。

トレーナーとして、楽しみで仕方ない。担当ウマ娘をどれだけ活躍させられるか。それを想像して楽しくなってしまうのはトレーナーの性というやつだろう。

「あ、もう着いちゃいましたね。うわ、寮の前でクリークさんが待ってる……」

しばらく歩いて寮に着く。少し前から雨は止んだので、相合傘状態は既に解消されている。

「ほれ、早く行って謝って来い。んで、ちゃんと風呂に入って身体を温めてから休むように！」

「はい、わかりました！ トレーナーさんも、ゆっくり休んでくださいね！」

笑顔でこちらに手を振るスーパークリークの下にテウスを送り出し、二人で寮に入るのを見てから帰路につく。

流石にもう眠気が限界だ。紅茶のカフェインで少しは耐えられると思ったが、家に着いたらすぐに寝てしまいそうだ。

まあ、朝シャワー浴びれば問題ないだろ……そんなことを思いつつ、この眠気では自転車も自動車も運転は難しいと思いついて帰宅したのだった。

そうして翌朝。俺は見事に風邪を引いてダウンした。